

TS剣闘士は異世界で何を見るか。

サイリウム（夕宙リウム）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界行こうぜ！ お前剣闘士な！ おまけでTSしてやる！

目が覚めたらTSしていて、しかも奴隷になっていた。剣闘士として戦うことを運命づけられた”ジナ”は、『ビクトリア』という名前で闘技場に立つ。彼女は、この命が軽い異世界で、どう生き、何を見るのか。

小説家になろう様、カクヨム様、ノベルアップ+様でも投稿してお願いします。

目次

1	初めまして	1
2	ちよつとだけ裏側を	12
3	うちの子はかわいい	22
4	丹念に鍛錬	31
5	アルの頭の中	41
6	目標を定めよう	52
7	お前も私のものにならないか？	64
8	取引のお時間	75
9	見てもらおう	87
10	アルの才能	97
11	約束と、覚悟	106
12	装備のお話し	115
13	第一試合	126
14	帰還と対策	135
15	観戦と、二戦目	143
16	第三回戦の始め	154
17	勝利と、次と	163
18	アル吸い	173
19	素の顔	184
20	毒の彼女	193
21	最後のひとり	204
22	真似しないでね？	213
23	一つの終わり	225

24：二度目の

25：次の世界へ

幕間

26：はじめてのお使い〈前編〉

27：はじめてのお使い〈後編〉

帰郷編

28：準備しに行きましょう

29：散財デー

30：出発

31：魔法について

32：ラクラクですって奥様

33：風と、情報と。

34：もう一つの、”はじまり”

35：なつてはいけないもの

36：やると決めたら、やる。

37：初公演

38：引きちぎっちゃった

39：よゝい！

40：蹂躪！

41：終幕

42：あとしまつ

43：トマト

44：ドツキリは好き？

45：少しずつ積み上げて

486

472

459

448

436

425

416

403

392

380

369

360

345

330

320

310

299

290

276

268

253

237

幕間

46 : 怒った? | 494
47 : 怒ってないよ! | 507

日常編

48 : 決闘開始の宣言をしろ! | 521
49 : 開始イ!!! | 532
50 : そりゃ焦る | 543
51 : 娯楽は大事 | 556
52 : ツンデレ・デレデレ | 567
53 : わたしはできるよ | 578
54 : 移動しますよ | 591
55 : お授業ですわ | 599
56 : フードファイトは辛いよ | 609
57 : ええ、こわ……。 | 620
58 : ただいま準備中 | 632
59 : 尊み爆発警報 | 644
60 : 厄介事は出来る奴に頼むに限る | 655
61 : 考えるの大事 | 666
62 : 悩んじゃった | 677
63 : みんな最初は引つかかるよね | 687
64 : わたしとワタシ | 696
65 : その後教会に緊急搬送されました | 705
66 : お真面目に | 715
67 : それでは、始まります。 | 725
68 : 収束する事実 | 741
69 : 踊りましょうぜ? | 759

70 : カーテンコール

771

幕間

71 : そうだ、海にいこう。

785

72 : うらばなし

799

73 : 愛の力

812

74 : サメ、ウマイ

823

75 : どんな味？

835

迷宮編

76 : おひさ！

844

77 : おやつとお洋服

853

78 : 世界観ブレイカー

865

79 : 先に言っておく

878

80 : 言い方が悪い！

890

剣闘士編

1：初めまして

皆さん初めまして、今日は如何お過ごしでしょうか。

そちらの季節が解らないのでかしまった挨拶ができないのは心苦しい限りですが、こちらの天気は正に快晴。気温も過ごしやすい程度に温かく、お弁当でも片手にピクニックに行きたいほどです。まあ私はこれから仕事なのですが。

ちよつと視線をずらして頂いて、こちらの方を見て頂ければわかると思うのですが、すごい観客でしょう？ 歴史の教科書に出てきたコロッセオが完璧な姿で目の前に広がっていて、そこにはたくさんのお客たちが押し寄せている。彼らの熱狂具合も……、前世で見た巨人VS阪神の試合が行われた時の阪神ファンぐらいの熱量です。怖いくらいに無茶苦茶叫んでいます。

まあそれも仕方ないですよ、皆さんお金賭けてるんですもの。ちよつとした遊び程度の金額から今日負けたら無一文という賭け事に命かけている金額まで。まだ試合は始まっていないのですが、少し離れて冷静な目で眺めてみれば少し滑稽に思えるほどの熱狂具合。

そんな観客の視線と声援を集めながら行われるのは楽しい楽しい殺し合い、剣と剣がぶつかり合って命のやり取りをする試合です。

現代では少々どころか大問題な試合、実行しようものなら警察の皆さんがフル装備で駆けつけてくるようなものですが、この世界においてこういった試合は国家が娯楽として推しすすめているもの。おそらくですが非番の憲兵さんたちも見に来ていることでしょう。いわゆるパンとサーカス、皆様の世界に比べれば娯楽が格段に少ないのです。

ま、この世界において命の価値なんか総じて低いのですから、誰が死のうとあんまり気にならないって雰囲気があるのは確かです。しかもここで戦う人間たちは大体が奴隷。剣闘士なんてかつこいい名

前が与えられますが、単なる奴隷なので彼らのオーナー以外はその命に何の価値もありません。勝ったらうれしいけど、負けたら一人数が減った程度。

毎日毎日剣を振るって殺し合い。たまにコンビを組んで相手のコンビを殺す。たまに捕まえてきた猛獣や魔物と戦って死ぬ。もしくは腕自慢の冒険者とかがやって来て殺し殺され。そんな試合が闘技場では行われています。ほぼ毎日結構な数の試合を行っているのですぐに奴隷の数が0になってしまいうようなものですがやっぱりあるところにはあるんでしょうね。剣闘士が足りなくなつたという話は全く聞きません。

人さらいや奴隷狩りによって連れてこられた人とか、借金で首が回らなくなつた人とか、犯罪者になつて連れてこられた人とか。毎日数は減りますが、その分増えてくるわけです。ほら、もうすぐ始まる試合の出場者の一人もそんな感じみたいですよ？ 元冒険者で市民を殺した犯罪者が剣闘士として出場ですって。

ちなみに一応勝ち続けたら応援してくれる人も増えますし、推しに貢ぐ感じでお金とかご飯とかも恵んでくれたりすることもあるんですよ。試合に勝つた場合剣闘士にも賞金が出るのですが、約八割が主人のものになります。ですがさっき言ったプレゼントはそのまま届くので如何に自身の人気を高めて貢いでもらうか、つてのが肝心なんです。ですね。

そんな感じで少しずつお金を貯めれば晴れて奴隷解放。自分を買って直して自由になれるって寸法。

でもまあお金ってどんな場所でも必要でして。稼ぎ始めたら始めて主人からの最低限の支援が切られて自分でやりくりしないといけないなくなつたり、試合で勝ち残るためにいい装備を手に入れないといけなくなつたり、体を維持するために食事にお金を掛けたり、自身の財産を他の剣闘士に盗まれないように対策したり。

これが面白いように貯まらない。

入ったら入った分だけ抜けていくんですよ、まあ最近はどうやく希望を持てるかな、つてぐらいにはなつて来たんですけど。

それに女だったりするとまあくだ面倒な話が付いてくるんですよ。剣闘士ってやっぱり体力とか頑丈さとか力とか必要になってくるわけで、女がいない訳ではないんですけどどうしても男社会みたいなのところあるんです。んで、そういう男女の関係性とかウチの主人は自己責任というか、奴隷から生まれた子供は最初から奴隷なので『強い子増えるからどんどんやれ』って感じなんですよ。

性的に襲い掛かってくる奴の息子を蹴り飛ばしたりとか、しつこい奴を試合で切り殺したりとか。……うん、ほんとに色々あった。いやまあその過程で私自身の人気も上がって来て、この小さい世界から脱却も見えてきたわけなので……。最近絡まれることも少なくなってきましたし、絡んできた奴は大体天に召されちゃったので気にしないでおくことにしましょう。

んじやま、そろそろ切り替えましょうか。

「……よし。」

聞こえる歓声がより大きくなって、目の前の鉄の格子が上げられていく。

はい、まあもう解ると思うんですけど。

私。

転生したらTSした上に気が付いたら奴隷で剣闘士でした。

うくん、クソ。

無駄にテンション上げないとやってられねエ！



朝起きたと思ったたら体中に違和感があって、よくよく自分の体と周りを確認すると性別が変わっている上に、見たこともないようなぼろ布着せられて鉄の手錠に繋がれながら他の奴隷たちと一緒に馬車でドナドナされている、その時の私の気持ちを200字で説明しろ。

そんな目覚め最悪な異世界転生大学入試問題。入学する意思以前に試験すら受ける気がなかったのに、無理やり連れてこられた私の回答は『ハア？ 意味わからないんですけど!?!』だった。

うーん、部分点すらもらえない。

まあ実際は周りみんな死んだ目してたし、騒げるような雰囲気でもなかったから口にはしていないけど、そう思ったのは確か。できれば叫んで地面を転がりながら胸に秘められた感情を爆発させたかったんだけど、馬車の中には奴隷船のようにこれでもかと「お仲間」が乗せられていて、少し視線をずらして荷台の外に目を向けてみれば前の方に何台か同じような馬車。そして周りには武装した奴らがいた。

しかも運がいいことに（その人にとつては最悪なんだけど）ちょうど前の馬車から騒いでいる奴隷が引きずり降ろされて、武装した奴に切り殺されていた。まあその時点で声を発するっていう選択肢は消えたよね。

声も出せず、身動きしようにもスペースがない。できることは今の状況を頑張って把握してこの身に起きたことを理解するぐらい。ああ、あと素数を数えるって言うのもあるよね。んでちよつと考えた結果わかったこと。

○体を確認したがやっぱり女、TSしてる

○前世の記憶はあるけどこの体の記憶はない

○おかげさまで名前も解らん、全部解らん

○でも言語は解るみたい、外の武器持ちの言葉解るし

○両手鉄製の腕輪で拘束されてるし、なんか首輪もされてる

○同じ馬車に乗ってる人も全員同じ、どう考えても奴隷

○悲しいけどこれ、現実なのよね

○114514は素数じゃない

だった。

いやさ、よくある異世界転生ものってトラックにひき殺されて神様に転生させてもらう、って感じだよな？ それとももう時代遅れ？

私の記憶自室で寝たところで途切れてるんですけど！ 神様なんか会ってないんですけど！ チートとかもらってないんですけど！

っと、色々心の中で叫んでみたけれど全然気は晴れないし、そもそもなんだか虚しいだけ。現実は物語のようによく行かない、ってことなんでしよう。……まあ今の段階で私の中に眠る秘密の力とかはまだ目覚めてない感じで、どっかのタイミングで覚醒するんじゃないのかなあという淡い期待を持っていたのは否定しない。

だって朝起きて女の子になってたら……ねえ？ 他にも色々期待しちゃうじゃん？

あ、ちなみにそう言ったR18方面の欲望だけど基本前世のまま。つまり女の子が好き、って感じでそこは変化していない。でも自分の性別が女である、ってことはなんか理解しちやつてるからよくある『男と女、どっちがどっちなんだ……！』みたいな苦悩はしそうになり。まあややこしくないってことはいいかもね。

そんな感じで色々考えて、眠くなったら寝て。

体を全く動かせてないことと、食事が与えられなかったことを除けば最高に虚無な生活を何日か続けた後。

私たち奴隷は都市へとたどり着いた。

「……………ここが、町か。」

馬車の帆の隙間から見る町、案の定異世界ヨーロッパみたいな街並みだった。どうやらこの国の首都みたいで、結構栄えている場所みた

い。奴隷商人と門番が話しているの聞いた感じ、どうやらこの馬車は大陸中央の田舎、どっかの山村あたりから南下してこの場所まで来たみたいだ。

記憶がないせいで解らんけど多分その田舎出身だろうなあ、私。人さらいにあつたショックで前世の記憶が出てきた感じなんですかねえ？

門番と別れた後はそのままドナドナされ、到着したのはおそらく奴隷商人の館。鎖に繋がれながら連れてこられた館は結構大きかったことを覚えている。しかも木製じゃなくて多分コンクリート製。……あ、古代ローマとかのコンクリートね？ 現代的じゃない奴。あれ石じゃないだろうし、詳しくないけど合つてると思う。外から見ただけだけど『稼いでるなあ』って感じだった。

そつから先は結構怒涛の展開。

なんかよくわからん人に馬車から降ろされたと思つたらひよこのオスメス判別のように仕分けされて庭みたいなところに整列させられる。こつから何が起きるのかなあと思えば私たちを攫つてきた奴隷商人がへこへこしながらあからさまに金持ちつて人と屋敷から出てきたのよ。

んでちよつと私たちのところを見たと思つたら

『じゃあこつからここまでの奴隷を買おう。』

すぐに売買契約が成立。並べられた人たちの分け方を見るにおそらく丈夫そうか否か、つて分け方だったんだろうね。私のご主人様になつた人はそんな人たちを全部買った。何か魔法的な契約が為されたみたいで、それまで繋がれていた鉄の首輪を外された後、微かに発光する魔術の首輪が奴隷たちに刻まれ、同じように私にも刻まれた。

痛みとかそういうのはなかったし、初めての魔法を目の前で目撃した訳だからちよつと気分も上がるかなあ？ と思つたけどやっぱりそういうことはなかった。何が悲しくて奴隷落ちしたことを喜ばないといけないのよ。

それで奴隷の証が刻まれた後は、また馬車に詰め込まれてドナドナされて、たどり着いたのが歴史の教科書に出てきそうな闘技場……、の横に建てられている剣闘士たちの宿舍。正確にはちよつとマシな牢屋？　そこでようやく。

「あ。私って剣闘士になるんですね。」

ということを理解できたのでした。



まあその後体洗われたり、飯食わされたり、いきなり闘技場に放りだされたり。

色々ありましたが今日も真面目に剣闘士しているわけですよ。

いや、最初は「私義務教育受けてたんで計算できますよ計算！

お役に立てますよ！」って思ってたアピールしてやろうかと思ってたんだけど全然活用する機会ないじゃん。剣振り回して人殺すことしかしてないよ私？　最初ビビり散らしてたけど殺さなければ自分が殺されちゃうからもう普通に順応しちゃったよ私。人間は慣れる生き物だ、つて言ってたけど限度があると思うよ私。これも異世界ってやつですかねえ？

ま、そんなわけで。

「おう嬢ちゃん、今からみつともなく命乞いするなら苦しまずに綺麗に殺してやるぜえ？」

「あ、りよ。そういうタイプね。」

今日も元気に人殺しですよ。

まあでも？ 今日のは心が痛まない相手でよかったよ。犯罪者相手だし、気兼ねなくやれるってもんだ。

「これでも結構生き残ってる方でね？ さ、お客さん楽しませないといけないしさつきと始めましょうや。」

「ケヒヒ！ ならそうさせてもらう、ゼツ！」

名も知らぬ彼の上段からの一撃を剣で受け流し、姿勢を崩す。まあ明らかに一撃で決めようとしたからね、それぐらいできるさ。隙だらけだし首を狙えばすぐに殺せそうなもんだけど、それはしない。奴の姿勢が整うまで待つてあげて、口角を上げることで挑発してあげる。そこから始まるのは楽しい楽しい剣舞のお時間。

最初のころは余裕がなかったせいで出来なかったけど、精神的余裕に私自身の技術もついて来たおかげで出来るようになった。自身の安全のためなら速攻で殺した方がいいんだけど、それじゃあ試合を見に来た人を楽しませることはできない。

私の生命線、お財布にとつて大事なのはファンからの貢ぎ物だ。女が長期間生き残っている、つてだけで客寄せパンダ的なことは出来ている。後は物珍しさにやって来た観客たちを私に夢中にさせて、貢がせるだけ。

「ダラアアツ！」

目の前のカモくんの攻撃は一撃一撃が重く、スタミナもあるだろう。だけど技術に関しては私の方が上だ。詳しくは知らないが冒険者という者は魔物、ファンタジー的な生物や獣を狩って生計を立てているらしい。元冒険者にして犯罪者、現在剣闘士なこいつの攻撃はそんな化け物たちを確実に殺せるような剣の使い方をしている。一撃で葬り去るか、反撃をさせぬ連撃で命を刈り取る、確かな経験の下で成り立っている剣術。

性格や人殺しなことを考えなければ……、よい剣を使うのだろう。男が繰り出す連撃を回避し、剣で受け流していく。そして、連撃の隙間。スタミナ切れによって生まれた綻びに、数打ちの剣をゆつくりと滑り込ませる。

切るのは敢えて、首の薄皮一枚。持てる限りの殺気を添えて。

「ツー」

死を、錯覚したのか大きく後ろに飛ぶことで私から距離を取る彼。肩を上下させ息を切らせている。その顔色は明らかに悪い。

「……なんで、当たらねえ。」

「ふふ、なんでだろうね。」

彼は善き剣士だ、だが圧倒的に対人戦闘の経験がない。同程度、もしくは上位の人間との戦闘経験が圧倒的にない。そうでなければこんな簡単に受け流すことも、見え見えのフェイントに引っかかることもないはずだ。私だってこんなに余裕をもって試合ができることもなかっただろう。

「さあ、そろそろフィナーレとしようか。」

観客に魅せつけるように、積み重ねてきた剣闘士としての私が芝居のように終幕を告げる。

イメージするのは最強の私、……ではなく女性だけで構成された劇団。その男役のような私。そっちの方がご婦人方からも、紳士の皆さまからも受けがいいのだ。試合が終わった後にガラじゃないと身震いしてしまうけれど金には代えられないのだよ。

勝負を決めようとした私に反応したのか、最低限のスタミナを回復させたのか。目の前の彼が私に向かって襲い掛かってくる。その体がオレンジ色の光に包まれ、明らかにその速度と力が上昇する。

スキルだ。

やはりこの世界も異世界、ということと魔法やスキルのようなファンタジーというべきかゲームと言うべきか。そんな要素が存在している。その身に纏う色からおそらく筋力増加と俊敏増加だろうか。この一撃にかける、ということだろう。

確かにここぞという時にそういった必殺技みたいなものを使うことは理にかなっている。……私に全く通用しないことを除けば、だけど。

「君が使うなら……、私も使ってもいいよね？」

私がこの剣闘士の世界で生き残れたのは、このスキルのおかげだ。転生した直後は使い方が解らなくてできなかったけど、初めて試合に出された時。生命の危機を感じたせいかな自然とできるようになっていた。コレのおかげで私はまだ生き残っているし、ご飯が食べられている。スキル様様だ。

つと、そろそろ使わないと。

〈加速〉

頭の中で何かのスイッチを入れた瞬間、世界の速度がガクンと落ちる。私の目の前で剣を振り上げている彼の速度も遅く、観客たちの歓声は掻き消える。とても静かで、私だけの世界だ。

このスキルの効力はその名の通り、自身を加速させる。いわば自分だけ倍速が掛かるって感じだ。

これがね、結構強いよ。

目の前の彼が振り下ろす剣を避けながら自身の武器をその首へと添える。

例えばの話なんだけど、私がバッターで、相手に150 km/hの剛

速球を投げるピッチャーがいるとするでしょ？ それで今の私が体への負担なしで使える限界の五倍速を自身に付与してみればその剛速球は30 km/hのストリートになるわけだ。バッティングセンターの一番下のレベルで大体70くらいだよ？ その半分の速度になると考えれば……、なんでもできそうでしょ？

そんなことを考えながら自身の刃を押し込む。

速さは、力だ。

柔らかい肉に、ちよつと固い骨を断ち切れれば。私の剣はすべてを断ち切つて帰ってくる。

後は血が掛からないようにちよつと離れて、スキルを解除。

後ろで対戦相手の子が倒れる音を聞きながら、物語に出てくる騎士様のように血を払い、納刀すれば……。

闘技場を埋め尽くす大歓声。私の今日のお仕事は終了、つてわけだ。

2：ちよつとだけ裏側を

「お疲れ様ですビクトリア様！」

「あゝ、つと。……そうだね。ありがとう。」

なんでわぎわぎ芸名の方で呼ぶんだ、って言葉が口から出てきそうになったが、なんとか押し込めて外向きの剣闘士としての声色で礼を言う。危ない危ない、まだ仕事申中だった。ちよつと視線をずらしてみれば、私が勝った瞬間に勢い余って控室へと続く通路まで降りてきちゃったご婦人たちがいる。さっきの試合見てくれたら解ると思うんだけど、私すごく外弁慶なのよ。まあ演じてるんだけど。ファン兼金蔓のみんなの夢を壊さないためにも役を演じる必要があるのだ。

試合中は私たちが戦ってる場所と観客席との距離が離れていることと、歓声で自分の声が掻き消えるので動きだけ演じていけば大丈夫なんだけど、ここまでファンの人が降りてきちゃってるのなら声色も変えていかないといけない。大変。

ちなみに今私にタオルを渡してくれた子の名前は『アル』、身の回りの世話をしてくれる奴隷だ。私のじゃなくて私のご主人様のね？

今は確か10くらいだったと思うけど、体が大きくなったら剣闘士になる運命が待ち構えている子、成長するまでは私の雑用とかをして過ごすことが主人から命じられている。ま、早い話私専属のお手伝いさん、つてわけだ。この子も普段はもうちよつと柔らかい感じなんだけど、お客がたくさんいるせいで口調や動きが演劇っぽくなってる。

うむうむ、私が教えた通りに演技できててえらい！ まさに騎士様に忠誠を誓う従者って感じ。……あゝ、うん。解ってるよ？ 私もそれにふさわしい役を演じなきゃってことは。はあ、疲れる。

「ビクトリア様〜！」

「今日も素晴らしかったです！」

「こつち向いて〜！」

黄色い声援をくれるファンのご婦人方に手を振り、そのあまりにも強いパワーに押し出されている紳士方のファンにウインクを送る。正直もう身の毛がよだつような行為なんだけど、お金のためにはやるしかないですよ。ゲへへ、私お金様のためなら何でもやりますぜ。だからどんなに精神が削られようと涼しい顔でファンサービス！

「応援ありがとう！ 小鳥ちゃんたち！ 今日の試合は楽しめたかい？ よかつたら次も観に来てくれ！」

軽い投げキッスをプレゼントし、役者がするような気取った礼をする。その瞬間上がるご婦人方の歓声。いや何が小鳥ちゃんだよ、頭おかしいんか？ はあ、もうね？ すごいちんどい。でもお金ちゃんのためにはやめられないの。ほら今日も一番のお客様である元老院議員の奥様が来てるでしょ？ あの人すごい貢いでくれるし剣闘士の身分じゃ一生食べられない果物とか送ってくれるからさ。絶対に手は抜けないのよ、もし私に飽きたり、他に推しが出来ちゃったりしたらもう大変。でも鼻肩しちゃうと他の人とのもめ事に繋がっちゃうし、私に『お金で動く』ってイメージが付きかねない。

というわけで応援してくるみんなのことが大好き！ 声援に全力で応えるお姉さま、ってイメージを維持しながら全力で公平に愛を振りまいていく。う〜ん！ ビクトリア様はみんな（お金）のために頑張りますよ〜！

「ビクトリア様、そろそろ次の試合が始まりますので。」

「おっと、そうだったねアル。とても名残惜しいけど、失礼するよ！ 他の人に迷惑かけちゃだめだからね。君たちとまた会える日を楽しみにしている！」

背筋を張り、優雅に。だけど足早に。もちろん手を振り笑顔を忘れ

ず。

追いかけようとするファンが職員に押さえつけられるのを横目にその場から離れる、たまに警備を抜け出して控室前まで押しかけてくる方もいるから最後まで気が抜けない。たとえ次の試合に出るために歩いていた剣闘士とすれ違った時、すごい哀れなものを見るような目を向けられたとしても気にしない。同じ宿舎で生活してるこいつからすれば今の私はほんと笑いや。確かに宿舎でいるときの私と全然違うけど、もうこういうキャラ付けで通っちゃったからやめるにやめれんのよ！

何とか控室までたどり着き、部屋の中に入る。中に誰もいないことを確認した後、アルがしっかりと鍵を閉めたことを確認。

「……もう大丈夫かな？」

「はい、お疲れ様です。ジナさん。」

「ああああああああ、つかれたもおおおおおおん!!!」

そのまま備品の椅子に体を投げ捨てる。

「いつ見てもそうですけど仮面の被り方ヤバイですよね。」

「言わないで……、それに次、君だよ？」

「………そうでした。」

ようやくお仕事の時間は終わり、試合のおかげで高揚していた気分は無理矢理上げていたせいも急降下。精神に多大なダメージを与え『ビクトリア』という役のせいもありもう疲労困憊だ。叫び声ぐらい上げないとやってられない。

「ほ、ほら。あの元老院の奥様に頂いた果実持ってきてますし、早く食べて撤収しましょう？ 交代まで時間あまりないですし。」

「はああああああああ……、そうだね……………」

控室、つて言っても今日一日ずっと使えるわけじゃない。まだまだ後ろに試合は控えてるし、この部屋を使う予定の奴らはたくさんいる。トラブルにならないためにも早めの撤収が基本なんだけど、もう疲れました私、休憩！

彼女から渡された果物、ブドウを口に放り込む。歯を立てると同時に口内へと流れ込む甘い果汁。ああ、マジで甘いものがなきややつてられん。房からもう一つの実をとり口の中へ投げ込んだ後、アルにも少し分けてあげる。

「ま、でも今日もちゃんと生き残りましたし。ヨシとしますか……、アルちゃんも順調に仮面被れるようになってきたし？ ほらお食べ。」
「いいんですか！ 頂きますー！」

剣闘士つてのはよく死ぬ職業だ。だからこそ生き残ってる奴は注目されるし、人気も集まる。単に強さだけで大量のファンを獲得する奴もいれば、私みたいに役作りして成りあがる色物もいる。そこら辺は結構人によって違うけど、共通して言えることは生き残っている時間が長い剣闘士ほど金を生み出すってこと。

つまり奴隷の主人たちは如何に剣闘士として長生きさせるか、つてのが腕の見せ所になってくる。

死なないような試合のメイクや、日々の生活の保障。私の場合だ

と、最初は大広間で雑魚寝とかだったけど、人気を得た今では個室も貰えてる。この控室だって最初のころは大部屋にこれでもか！と詰め込まれてただけけど、今じゃ家具付きのお部屋を予約してもらえ
る好待遇だ。

「ううううん！ やっぱりおいしいですよね！ ジナさん！」
「だねえ。」

ま、そんな風に金を生み出す剣闘士には試合に出る以外にもお仕事がある。それが後進の育成ってやつだ。ぽんぽこ毎日死んでいく剣闘士の中に、後々大成するような奴がいたら大損害。だからこそある程度一人歩きできるような奴は才能が有りそうなのやつを見つけて指導するという業務がある。たしか名前は舎弟制度だったかな？ まあつまり簡単に言うとな弟子を取れ、ってやつだ。

ただ教えるだけだと師匠側に旨味がないので、教わる側は指導のお礼として雑用になるって感じ。さつきみたいな控室までの誘導とか、日々の生活のお世話とかそういうの。ファンの方々からもらった品の整理とかもね。

んで、今果物で頬を緩ませているのが私の弟子。『アル』ちゃんだ。ウチのご主人が「顔がいい」ってことで買った奴隷だけあって結構綺麗な顔をしている。私がこの子に教えてるのはもちろん剣闘士としての生き残り方だけど、メインは『役作り』。どうやって自分を売り込むか、って内容だ。

さつき私『次は君だよ？』って言ったでしょ？

どうしても剣闘士って殺し合いのお仕事だからさ。どんなに用意してても死ぬときや死ぬし、運よく生き残れたとしてもいつ体が動かなくなるかわからない。ほぼ毎日殺し合いする仕事だし、剣闘士としての寿命はどうしても短くなってしまふ。

目の前のこの子に求められているのは『次の私』。

ご婦人でも野郎でもいいから観客から黄色い声援を受けて金を巻き上げる客寄せパンダのルールが敷かれてるってわけ？ 私はそれ

のうまい付き合い方、どうやればパンダとして振舞えるかを教えてる。

「ま、無駄になるかも。いや無駄になって欲しいんだけどね?」

「? 何がですか?」

「いくや? なんでも? さ、そろそろ次のやつ来ちやいそうだし帰りの支度しますよ。」

「あ、はい! わかりました!」

でも流石に10ぐらいの前世で小学生ぐらいの子に殺し合いの世界に入ってほしいと思うほど私の精神は死んでないんだよね。

聞いた話だと外も外で戦える力はあるらしいから、剣とかそういう指導をするのはいいんだけどさ。

やっぱり、もおうつと金稼いで目の前のこの子ぐらいは解放してあげないとねえ。



「ジナ、この中から選びなさい。」

「はい、ご主人。……何人ぐらい取った方がいいのでしょうか?」

彼女と出会ったのは大体……、私が今のやり方。ビクトリアという大層な名前を使って演技するようになってからのことだ。わざわざ髪を青に染めて、肌の手入れをちゃんとするようになったころ。その時にはもう自分の戦い方やスキルの習熟がある程度確立してて、ビクトリア” って言うキャラクターの方針も固まってこれから名を上げていくぞ、って時。

一応剣闘士として一人前になった、ということでご主人様からお祝いとして「ビクトリア」にふさわしい防具と武器を頂いた。白がメインのまさに姫騎士、って感じの装備。そういったものに詳しくないから解らないけど、明らかにそれまで私が使っていた数打ちの装備とは比べ物にならないぐらいの高級品だった。

そんなピカピカの装備を身に着けて連れてこられたのがあの奴隷商館。運が良いのか悪いのかは知らないけど、自分が買われた商館と一緒に。子供がちょうど多く入ったからそこにしたらしいが……。まあ私を買ったのは今の主人の先代だ。知らなくても無理はないだろう。

「一人からでいこう、様子を見て増やすかもしれないがね。」
「……了解です。」

かなり質のいい装備、まるで鑑賞用の様な高級品を渡された時から怪しく思っていたが……。案の定厄介事だった。一人前のお祝い＆これからの厄介事の前報酬＆それを着てもっと大きく稼ぎなさいってことみたい。まあそんなことだろうと思っただけどさ……。

傍から見れば優しそうな顔をして恰幅のいい商人とそれに付き添う綺麗な女騎士、って感じだろうがその中身は金にしか興味のない守銭奴な剣闘士のオーナーに、顔は引き締めてるけど内心駄々っ子のように喚き散らしたいと考えている私だ。この装備返すんでナシってことには……。あ、はい。ならないですよね。

「商人殿。」

「傷つけなけりゃ触ってもらっても構いませんで。全員公用語も大丈夫でさあ。」

「感謝を。」

どうあがいても逃げ切れそうにないので、諦めて自身の弟子となる子の吟味を始める。

ご主人サマが私に子供を弟子として任せるってことは、私にはそいつを一人前になるまで育てる責任が発生する。しかもその過程でその子にケガさせるのはダメ、もちろん死なせるのも。剣闘士としての価値を損ねないまま大人にする必要が出てくる。ウチの人がどんな方針かは知らないけどよその剣闘士から聞いた話じゃ、もしその子の価値を損ねてしまった場合。その損額は師匠である私が払わないといけないらしい。

ま〜じでやってられない。

基本弟子を取るときに判断する要素としては、年齢や性別。体つきとか柔軟性。あとは体を作るのに必要な食事はどれだけ食べられるのか、後は単純な筋力とか判断力とか反射神経とか？ あとは動体視力とかも調べる必要があるだろう。

その上私には「ビクトリア」っていうキャラクターがいる。普段の私と、剣闘士としての私。そういうのをちゃんと判別できて、秘密を守るぐらいの真面目さと危機管理能力も。いやむしろさつき上げた要素よりもこつちの方が重要かもしれない。

(面倒なことになった。)

全部で20人くらい、一列に並べられた子供たちを眺めながらとりあえずその前を歩いていく。

マジでどうしましょうかねえ？ 真面目さとかそういう危機管理能力とかこの場じゃ解らない要素だし……。というかそもそも私が人にものを教えてもいいのか、っていう問題もある。剣だって我流だし、スタイルは私しか使っているのを見たことがない『加速』頼り、その上前世の記憶を元に作り上げた役を演じる売り方をしている。誰かに教えられるようなものじゃない。

……まあとりあえず、ちよつとばかし試してみますか。

〈加速〉 三倍速

「今」の私ができる負担のない速度で子供たちの前を歩いてみる。とりあえずは動体視力のチェックだ。

一番早く反応した子を……、おん？

……この子、見えてる？

三倍速つてのは数字にすればそこまでだが、実際目の前に現れれば結構な速度だ。だって時速40kmで走ってた車が120kmになるんだぜ？それが目の前で急に現れるんだ。普通はすぐに反応なんかできない。車よりは速くないけど、私だって一端の剣闘士。速度重視の戦い方をするおかげで踏み込みの速度には自身がある。

しかもこの子たちはこれからの自分の人生が掛かっているわけだからずつと真剣に私のことを見てた、緊張してたわけだ。普通なら目で追いかけるなんてできないし、加速している私自体スキルなしじゃ目で追えるかわからない。……それを、この女の子は反応している。

あたりじゃん。

スキルを解き、彼女の目の前に立つ。

「君、名前は何という。」

「あ、アルです！」

緊張からか、武装した者が目の前にいるせいか。声を震わせて自身の名前を言う。……うん、いい顔だ。表情が、じゃなくてこの子の顔自体が整っている。人気商売に顔の良さってのは一番重要だ、不細工な奴と綺麗な奴、貢ぐならどっちがいいと聞かれて大半のやつが後者

と答える。

「いい眼をしている。」

「あ、ありがとうございますゆー！」

アルの頬に手を当て、顎へと指を回す。
顔を持ち上げ、私と彼女の距離を縮める。
そつと耳に、優しく語り掛けるように。

「やる気は、あるかい？」

「にやんでもしましゅー！」

よし、かわいい。

「ご主人、この子にしよう。」

これが、私とアルがあつた時の話だ。

3…うちの子はかわいい

「あの時のこと私忘れてませんからねッ！」

そう言いながらぷりぷり怒るアルを眺めながら朝の修練を進める。いやあ、アルちゃんは可愛いですね。おくちまん丸に膨らませてぶんすか怒ってるのを見るとドロドロになった私の心が浄化されていくようで……、ほらあつちの方でのぞき見してる野郎どもを見てみなさいよ。胸の前で手を組んでお目目の中にお星さま浮かべながらキュンキュンしてるでしょ？ ガチムチの野郎どもが。すつごく教育に悪い。

「もう忘れてもいいかとお師匠様は思うんだけどなあ？」

「あんなの忘れられるわけないです！」

彼女がこんなに怒っている理由は初めて会ったときのこと。役を体に慣らすというか、この子が可愛かったせいでちよつといじめたくなつちやつてね？ アルちゃんをご主人が買ってから今生活している宿舎に帰ってくるまでずっと耳元で甘ったるい言葉をつぶやいていたのよ。こんな風にお膝にのせてさ。ずくつと茹でだこみたいな顔してたからあんまりにも面白くて止め時忘れちゃってさあ……。ご主人も「面白い、もつと。」って目線で訴えてたし。

「私、ずっとあの時そういう意味で食べられるって思ってたんですからねッ！」

「あはく、おませさんだなあ。」

「うもうー！」

そんな感じで怒りながら彼女が振り回す木剣を軽くいなしていく。話だけ聞いてれば楽しい楽しいガールズトークって感じだけど

さつきからずくと話しながらアルちゃんの剣を見ている。何かの技術に基づいた教えつてのは私にできないから実戦形式での指導だ。

「本番だったらここで終わってるよ、っと。」

感情を乗せた上段からの振り下ろしを剣の腹で滑らせて受け流す、力を込め過ぎたせいで姿勢が崩れている。まあ決めに来た攻撃を回避されるのって結構きついからねえ。奇しくもこの前の試合と一緒になってる。

「決めに行くのはいいけど受け流された時、避けられた時のことも考えて動きなさあ〜い。」

さつきまでののを攻撃の訓練とするならば、次は受け流しの訓練だ。かな〜り弱めに打ち込みを開始する。

「ッ！」

「見えてるんだから受け止めるんじゃないやなくて受け流しを意識。流しそうめんのよう受け流す〜。」

私が『加速』のスキルを持つように、彼女には『目の良さ』という力を持っている。かなり手加減してるけど同じくらいの年齢の子じゃ把握できないような速度で打ち込んでもアルならそれを知覚する。だけどまだそこから行動に移す、つてのは難しいみたい。

何とか剣の振られる線に自分の武器を滑り込ませるのが精一杯。受け流しができるまではまだ時間がかかりそうだ。

「流しッ、そうめん、つてッ！ 何です、かッ！」

「小麦の麺を水で流して食べる奴、おいしいけどこのあたりじゃ食べられないだろうね。っと、話してる暇あるのかなあ？」

実戦で初めて相対して死んでしまうよりは、早いとこ知ってしまつて対抗策を考えておく方が何倍もいい。昔の私みたいに血反吐吐きながら無理やり戦つてスタイルを確立するよりはそっちの方がかなりマシで確実だ。あとやっぱり明らかに西洋の文化圏に似通つてるこの地域じゃそうめんはないのね。かなり残念。

「細くて白い麺なのよ、それを氷水で冷やして。大豆を発酵させたしよっぱい液体に付けて食べるのよ。あつゝい夏の代名詞とも呼べる食べ物だよねえ。……あ、やば。和食食べたくなつてきた。しにそ。」

ちよつとバテてきたアルちゃんへの打ち込みを少し弱めながら、そんなことを考える。いやこの町つて言うか帝都ね？ 都の中に港があるおかげで結構新鮮な魚介類が食べられるのよ。それに近くに食料供給用のおっきな農場や牧場もある。新人とか負けっぱなしのやつとかはパンとよくわからん野菜の汁ぐらいしか食えないんだけど、今の私みたいに成功すれば食卓に魚が出てくる。

それでね、そういうの食べてるとき。どうしても醤油とか味噌とか欲しくなるのよ。

奴隷から解放されたら真つ先に大豆買い込んで試行錯誤しながら世界中を探し回る覚悟ができるくらいには。

いやほんとにね？ そりゃ駆け出しのころのマジでコレ何入つてんの？ というかこれただ温めた泥じゃないの？ ってぐらいクソ不味いスープに固すぎてスープでふやかしながらじゃないと食べられないようなパンを食べてた頃に比べれば格段にいい食生活してるのよ。

差し入れだけど果物あるし、新鮮な野菜も食べられるし、魚は出るし。自分で金出さないといけないけど肉や卵も食べようと思つたら食べられる。それにパンだって前の世界のフワフワ白パンとかを知っている身からすればまだ固いけど普通に食べられるのよ。アルちゃんにもたくさん食べさせてあげられるし！

でもやつぱりね、故郷の味が恋しいっす。

というわけでそろそろアルちゃん限界っぽいし、剣の腹でかるく面一本。訓練おしまい！

「あいた！」

「ハイおしまい〜。」

ま、アルちゃん自体結構センスあるからこのまま頑張ろつか。ちやんと少しずつ成長してるし安心しな。まだ10くらいだから体を作ることを重視して、そんなにキツイ練習してないでしょ？ かなぐり手は抜いてるけどその年で私と試合が成り立ってるだけで十分さ。あそこでこつちのこと覗いているいい年した野郎どもよりはよっぽどね。

「ということアル。息整えたら剣しまつて朝の用意頼むよ。魚は多めに貰ってきなさい。」

「は、はい！ わかり、ました！」

息を整えながらなんとか返事をする彼女に軽く笑いかけ、訓練を終える。……でもまあ彼女との打ち合いだけじゃ私の準備運動ぐらいにしかならないし、これからもどんどん稼いでいくには今の肉体の向上を目指していかないといけない。奴隷の身じゃなくて金にも余裕があつたら教会とかで定期的にステータスを見てもらえるんだけどねえ。

数値化されればもつと効率的にトレーニングできるんだけど、ま。今できることをしましょうか。

「おい！ そので覗いてる野郎ども！ 相手してやるからさっさとこつちに来な！」

軽く20人くらい、ま。実力的にはこの前戦った犯罪者くんより下だし。スキルなしで全員気絶させるまでは……、三分ぐらい？ 時計どころか砂時計もないからそこら辺は感覚で。

は〜い、ただで実戦経験積めるんだから大人しく私に倒されようねえ？



「だからあの人たち山になってたんですね……。」「しよゆこと。」

朝飯の用意ができた、ってことで呼びに来てくれたアルちゃんが残っていたのは死屍累々の野郎たちでできた山。そしてその周り、というか修練所の外周をぐるぐる走り回っていた私だった。

「いやわざわざ中央に集めてその周り走ってましたから、てつきりあの人たちを生贄にして何かヤバい物でも呼び出すのかと。」

「……君の頭の中の私ってどうなってるの？」

「クソ強くて優しいけどイカレてる師匠です。」

いやだって三分ぐらい持つかなあ？ と思ったら2分もいかないうらいで全員つぶれちゃったからもう暇で暇でしょうがなかったのよ。だから普通にランニングしてたわけ、邪魔な奴らは中央に集めてね？ まあ一応アレでも少しぐらいは戦える程度の実力者なはずなんだけど、如何せん私が強すぎた。

「嫌味ですか？」

「口、悪くくてゴ・メ・ン！」

実際あれぐらいの実力だと私レベルとかそれ以上の相手との乱戦を組まれることがある。1対100とかそういうのね？ まあオーナーたちって高い実力と人気を持つ剣闘士の浪費を避ける傾向にあるから……、基本100の方が負ける。対戦相手の性格にもよるけど、真つ二つにされちゃったり、上半身と下半身が振じられたり、だるまさんになっちゃったりする子が続出するのよ。そんな中で少しでも生存率を上げる、致命的な一撃を重傷レベルまで下げて次につなげるってのは伸び悩んでる剣闘士にとつて結構必要なスキルなのよ。死んじやったら全部終わりなわけだしさ。だからその経験を積めて彼らも感謝してるはずだよ、多分。

「……私も覚えた方がいい奴ですか？」

「うにや、いらん。アルちゃんは『浪費を避ける側』つまり1の方を目指してやってるんだから、ダメージを少なくするよりもダメージを無にする、受け流したり回避したりする方を覚えた方がいい。」

アルちゃんは多分だけどそっち側じゃない、私と同じ速さに重きを置いた方が大成するはずだ。

私たち、とくに人間族の女の剣闘士にとって一番重要なことは体や顔を綺麗なまま保つこと。傷になる攻撃を全て避けて、美しく魅せるような戦い方で勝つ必要がある。そうじゃなきゃ商品価値がどんどん下がっちゃって待ってるのは破滅、ご主人様にポイされるか次代の剣闘士を産むためのエロ同人ルートだ。

もちろん男の剣闘士みたいに単純な身体能力だけで魅せるから傷なんか気にしない女の剣闘士、って人もいる。人間族じゃ珍しいけど獣人族とかドワーフとかがよく当てはまるよね。でもそのタイプよりも売れるのは私たちがみたいに『見た目』で売る剣闘士だ。できるだけ多くの注目を得て、できるだけ美しい魅力的な勝ち方をして、できるだけ観客たちの財布からお金を奪い取っていく。

「まあその分求められる技量も、体や肌を維持する努力も必要だから結構めんどいんだよね。……もしアルちゃんがアイツみたいにならムチになりたいのなら練習メニュー変えてあげるけど。」

そう言つて、顔を近づけながらひそひそ声で指さすのはウチのオーナーが持つ稼ぎ頭の一人。

さつき言つてた身体能力で押し切るタイプの剣闘士だ。人間族の男で、2 m以上ある筋骨隆々のマツチョ。体中にこれまで戦い抜いて来た証である傷跡がたくさん残つてる奴だ。オーナーが同じなので試合で当たったことはないが、宿舎で何度か手合わせしたことはある。典型的なパワータイプで攻撃をその体で受け止めながら、それを上回る攻撃で殺しに来る戦法を使う。……勝てるかつて？ まあ速度限界まで上げていつもの様な魅せるスタイルを放棄すれば勝てるね。さすがに“ビクトリア”しながらの余裕はないと思う。

そんな彼の下に彼の弟子たちがせっせと食事を運んでいる、アルちゃんより少し年上の子たちが三人がかりで給仕してるけどそれでも彼の食事スピードには追い付かない。アルちゃんもあれぐらい食べて普段の訓練の5倍くらいの量をこなせばああいうのになれるけど……。

「なりたい？」

「結構です。」

「だよね〜！」

「聞こえているぞ、ビクトリア。」

あら、さすがにバレてるか。

「これは失礼しました、タクパル殿？」

「何故貴様がそれで人気が出たのか俺には解らん。」

ジナ、という本名。まあ剣闘士になった時に適当に考えた名前だけど、〝ジナ〟じゃなくてわざわざ役としての〝ビクトリア〟で呼ばれたから切り替え抑揚をつけて返してあげる。まあいつものおふぎけど、こいつは誰でも本名じゃなくて剣闘士として登録している名前と呼ぶ。

なんか一回やらかしかけたのが理由らしいけど……、まあ見た目ゴツいけど弄つても激昂するタイプじゃないから私好きよ？ 年上だからつて威張ったりすることもないし、女だからつて見下すのもしないしね。

「隠れて人の悪口を言う、あまり褒められたものではないと思うが？」
「確かに、それに関しては謝るよ。今度からタクちゃんの目の前で言うね♡」

「……相変わらず性格が悪い。」

まあそれまで殺し合いどころか大げがだつて珍しい安全な世界で生きてたのに、いきなり殺し合いの世界に放り込まればねえ？ ひねくれちゃうのも仕方ないと思うんですよ。自分で言うことじゃないんですけども。

「というわけでアルちゃんは体の成長を阻害しない程度に運動して、しっかり食べて、しっかり寝ながらぬくぬく成長しましょうね？」
「うむ、食事に睡眠。適度な鍛錬。この世界で生き残るのには必要なことだ。」

「……え？ そういう話でしたっけ？」

そういう話だぞ？ というわけでタンパク質摂るために煮魚でしょ？ もらい物の柑橘類でしょ？ 後はちゃんとパンも食べましょね？ アルちゃん若いんだから食べた分だけ成長に繋がるし。

ほら食べる食べる〜！

「あ、そういえばタクちゃん。この後空いてる？ よかったらちよつと相手してくれない？」

「構わんが……、いいのか？」

「大丈夫大丈夫、午後はフリーだし明日は外でお仕事だから。」
「ならばよい。」

4：丹念に鍛錬

アルちゃんに朝ごはんを詰め込む、っていう楽しい作業を終えた後。私たちは訓練場の方まで来ていた。あ、朝食食べるところとは違う場所ね？ さっきいた場所は私たちが住んでる宿舎の隣にある簡易練習場で、今来てるのはもつと本格的な場所。

簡易練習場の方はウチのオーナーが所有している場所で、こっちの訓練場は剣闘士の興行を取り仕切ってる運営が所有している。単なるトレーニングとか、朝みたいなアルちゃんとのいつもの訓練ならいつもの場所でもいいんだけど、タクパルとの模擬戦となるとちよつと場所が狭すぎるんだよね。

それに簡易練習場は立地的に宿舎の隣にあるからさ、最悪私が吹っ飛ばされた時に建物を壊しちゃうかも、っていう問題も出てくる。人数分使用料を払わなきゃ使えない訓練場だけど、宿舎ぶつ壊した場合の損害と比べれば断然こっちの方がいい。

とまあそんなわけでやって来た訓練場、白砂で舗装された大きなグラウンドにはすでかなりの人数がやって来ていた。外周を走っている奴、トレーニング器具を借りて自身の筋肉を傷めている奴、誰かと模擬戦をしている奴と色々だ。そんな剣闘士たちに全員に当てはまるのが、皆ある程度の実力者、ってところ。まあ例外はいるけどね？

「かなり広い場所なんですね……。」

「ん？ アルは初めてか？」

「まあ連れてきてないからね。」

ある程度の実力者しかいない、それはつまりここにはある程度稼げる奴しか来れない、っていうことだ。結構私たちにとってはこの利用料は高いのよ。私だって今日みたいな模擬戦ぐらいでしか使わない場所だし、アルちゃんには使わせてもあんま意味がないので連れて

こなかった。トレーニング器具があるって言ってもそんな前世のマシンがあるわけじゃないしさ……。

まあオーナーがウチの主人みたいに大量の奴隷を所有してない人だったりすると、剣闘士用の宿舎も練習場も持ってない。ってことがある。道端で剣振るわせても邪魔なだけだから、そういう時にもここが使われたりするのよ。これがさつき言ってた例外ね？ ……うん、たまに『なんでお前剣闘士してんの？』って奴いるのよ。数日後に来なくなるけどさ。

「二回入場に100ツケロ、まあ普段使いはしないよね。」

ツケロ、つてのはこの帝国の硬貨単位。剣闘士が食べてるパンとかクソ不味い野菜汁の一食が大体合わせて5〜8ツケロって考えるとかなりの値段だ。私やタクパルぐらいになると毎日嫌だけど普通に何とかなる値段なんだけど駆け出しには無理だよねえ……。昔の私みたいに何か目的がなければ、普通は来ない場所だ。

「んで、タクちゃん。ルールの方は模擬戦の奴でいいよね？」

「それで構わん。」

他の人がいないある程度の場所を確保した後、彼にそう問いかける。

そう返すタクパル。まあ次の相手が番付的に上で、速度重視な戦いかたをする相手ということは知っていた。だからこそわざわざ彼に声を掛けたのよ、断らないだろうし〜ってことで。今日はウチのボーイたちが歯ごたえなさ過ぎたせいで消化不良だし、自身のスキルの限界突破訓練が行き詰っていることもあって声を掛けさせてもらったわけ。

っと、言い忘れるところだった。

「アルちゃんとそこの男子〜！ 眼え見開いてちゃんと見ときなさい

なく！ あ、あとなんか襲ってきた奴がいたら囲んで殴り殺していいからね〜！」

後進の育成、つてことでちゃんと注意しておく。タクパルの方を見るけど何か付け足すことはないみたいだ。私たちの模擬戦から何か得ることと、自分の体は自分で守ること。できなければ仲間と守り合うこと。大事なことだよねえ。

ん？ 何が危ないかって？

そりやあ闇討ちしてくる奴だよ。私もタクパルも結構な数を殺してここまで来ている。もちろん殺しナシの興行もあるが、殺し殺されの世界がこの世界の基本だ。そうして駆け上がってきたらまあ……、恨みを買うわけで。この訓練場は剣闘士以外も入場することができ。つまり殺された剣闘士の友人や弟子以外にも、剣闘士の元親族だったり、金のなる木だった剣闘士を殺されたオーナーだったり、が恨みを晴らすために闇討ちしに来ることがあったりする。

まあ一応剣闘士同士の私闘はご法度だし、殺しちやつた場合はその剣闘士のオーナーから結構な賠償金を求められたりするもんだけど、ヤルやつはヤルのだ。

それに私らぐらいの実力になると、時たま冒険者グループとの興行が組まれることもある。剣闘士に仲間を殺された冒険者が、そいつを闇討ちした後自死した。つてのは結構よくある話らしい、そんなんするぐらいなら出場するな、つて話なんだけどまあターンがクソ大きいんだらうねえ。

「つと、準備体操はそんなもんかな？ タクちゃん始めていい〜？」

「ああ、構わん。」

「来いッ！」

瞬間、私の足元が爆発する。

そも、この世界の人間の体つてのは前世のものと全く違う存在だ。

明らかに人間が出せそうもない出力を平気で出してくる。まあ普通に魔力や魔法がある世界だ、体のつくりからして別物なのだろう。そうじゃなきゃスキルも使わずにこんな速度は出せない。

今自分が出せる純粋な速度で、彼へと襲い掛かる。

その首を狙った横薙ぎは、思った通り難なく受け止められ小気味いい音があたりに響く。

「やあ〜ぱり止められるよね。じゃあ速度上げてくよ。」

〈加速〉

等速から、二倍に、三倍にと徐々に速度を上げていく。このタクパルという剣闘士の眼はいい方ではあるが、アルちゃんには大分劣る。おそらく完全に目で追えていたのは三倍くらいまでだろう。そこから先は目の動きが剣の先を含めた全体じゃなくて、私の体の動きを見に行ってる。

もちろんタクちゃんも反撃しているが、私がいるスローモーションの世界ではどんなに重く鋭い一撃でも十分に対処可能だ。それこそ音速とか光速レベルの攻撃になるとくると対処できないけど、人間が出せる速度じゃ私に追いつくのは無理ってわけ。

にしても弟子を持てるぐらいまで大成している剣闘士なだけあって、やっぱり蓄積された対人の経験値が段違いだ。速度にものを言わせた奴がどこに剣を置いて来るか。どこにこちらが剣を置けば防げるのか。経験によってそれを判断してるのだろう。それに速さにものを言わせて戦う奴ほどその剣の重さは軽い。この大男なら受け止めてもそれほど負担にはならない。

普段使っている五倍速まで上げたあと、十数度打ち合った後に一旦スキルを解く。

「とまあ今のが私の速度、目慣らしにはなった？」

「……ああ。しかしやはり速いな、これが最高ではないのだろうか？」

「まあね、でもこれ以上は負担になっちゃうから最後ね?」

二人とも、少し汗が出てきたぐらい。激しめの準備運動、って感じかな?

ちらつと弟子ちゃんたちの様子を見てみればみんな真剣な顔してこつちを見てる。うん、こつちの方はもう気にしなくてよさそうだな。周りを見ても彼らに近づこうとしたり様子をうかがっている奴はいない。

「それで、ご注文は? 対戦相手のトレースはさすがにできないけど私ら速度厨がどういうやり方を好むのか、ってぐらいは見せてあげられるよ?」

「よし、ならそれを頼む。時間は……。」

「こつちのスタミナ管理もあるから任せてもらってもいい? ああ心配しないで30分ぐらいなら連続でいけるから。……あああと、これ終わったら休憩挟んで全速力、って感じでもいい?」

彼から返ってきたのは強い頷き。

ならよし。じゃあ再戦、っと。

さつきと同じように思いつき踏み込み、それと同時にスキルを発動させる。ただし今度は緩急、そしてブラフも付けて。この場には私が“ビクトリア”として振舞わないといけないような相手はいない。だからこそ自分の出せるすべてを彼に魅せてあげる。普段は剣一本だけで戦うようにしているのだが、そこに足技も付け足していく。

剣で魅せるのではなく、ただ荒々しく。敵を殺すための戦い方だ。まあさすがにマジで殺しはしないんですけども。



大体、一時間弱ぐらいだろうか。

本気での打ち合いはほぼ私の全勝で進んでいる。大体……、219対17くらい？ あ、一本。つまり致命傷レベルの一撃を与えた数ね。寸止めしてるから実際には当ててないんだけど。まあこれでも剣闘士の中じゃ素の速度で上から数えた方が速い方ですし？ その上スキルも使ってるから最大五倍速ですし？ 逆に17も持つてか
れてるのがヤバいくらいですよ。

まあさすがに小休憩挟みながらもこれ以上は限界みたいで、スタミナ切れでタクパルちゃんの精彩も欠いて来た。中盤の眼が慣れてきたころ、連続で取られた時みたいな正確性とパワーはなくなっている。だからここ数分は私の独壇場になってるんだけどまだタクちゃんの闘志は消えそうにない。健全な肉体には健全な精神が宿る、つて言うけど強靱な精神も宿るみたい。ま、これ以上は二人とも辛いしそろそろ終わりといたしましょう。

「これで、220!」

股の下を通り抜けて背後から首元へ剣を運ぶ。タクちゃんの図体
がかなり大きい上体幹がしっかりしてるから太腿を支点にして鉄棒
みたいなこともできる。ほら空中で一回転。

「うん、キリがいいしスタミナ切れてきたでしょ？ そろそろ休憩し
ません？」

「はあ、はあ、はあ。……そう、しよう。」

剣を地面に突き刺し、肩を上下させながら息を整える彼。うんう
ん、いい練習になったみたいで何より。……んまあ私も口はへらへら
してるけど体中汗まみれで実は限界寸前。さすがに休み挟んだとし
ても、一時間近く動き続けるのはキツイっすよ。しかも私の場合『加
速』使ってるから実際動いてる時間はもつと長いし、スキル使用に伴
う体力消費もある。カツコつけてこんなこと言ってるけど足が

ちよつと震えてるのは秘密。そしてそれを解つても触れてこないタクちゃんは紳士。

いや、にしてもタクちゃんすごいな。こっちはビクトリアじゃなくてジナとして戦つてたんだよ？ 魅せ方も気にしない単に相手を殺すための戦い方。右から攻撃しようとする姿を敢えて速度を落とすとして相手の眼に焼き付けた後で、反対側から攻撃するとかさ。連撃の途中で加速したり減速したりして感覚を狂わせたりさ。彼の大きい体を利用して曲芸師みたいに飛び回ったりしてたのに20本近く持つてかれた。ブラフと私の癖を読んで、的確に剣を振るう。やくつぱこれまで生き残つてるだけあるねえ。私もすごく勉強になった。

「……何をどう考えたら人の剣の上に乗るとか思いつくのだ。」

「だってタクちゃんの剣遅かったから。」

「嫌味か？」

「そうだよ？」

だってさつき陰でこそ悪口言つたから怒つてたんでしょ？

だから目の前で悪口言つて上げたの。え、何？ そもそも人の悪口を言うな？ いや、そりゃ無理な話ですぜ旦那。そういうの善き人間の心、みたいなのは全部ここ来たときに消滅しましたとも。なあ、くが楽しくて人殺しを仕事にしなきゃいけないんですかい？ あはー！ ふぎけなきややつてられませんか！ 真人間のタクちゃんがどれだけ希少種なのかお判り？ 弟子三人も持つてて誰も逃げ出さずに従つてて、しかも慕われてるって相当レアだよあんた。

つと、そんなお話してたらちようどお弟子ちゃんたちが走つてきた。アルちゃんも一緒ね。

「師匠！ 大丈夫ですか！」

「ああ、大丈夫だ。単に疲れただけだ。」

「どつちも寸止めで終わらせてたしね。」

若干ふらついているタクちゃんにタオルとか水筒を渡してあげる弟子ちゃんたち、みんな彼のことを慕っているのか心配そうに彼のことを見ながら世話をしている。まあ訓練だつてことを理解してくれてるおかげで私にヤバい視線を向けてくる子はいない。それは本当にありがたい。

昔タクちゃんみたいに人が出来ている剣闘士と試合で当たった時、
“ビクトリア”としてまるでワルモノを倒すように殺しちゃったことがあつてさ……、いやあの時はほんと堪えたよ。闇討ち二件に、弟子との試合メイキングが一件。先に闇討ちがあつたおかげでか、最後一人だけ残つたあの子の憎悪に染まった目は当分忘れられそうになり。まあみんな私が殺したんですけど。

「はい、ジナさん。水です。……やつぱ足限界でしたか。」
「サンクス、やつぱ解る？」

にやにやしなから足を触ろうとするアルの手を軽く叩きながら水を受け取る。この子め、私に似て悪い子になっちゃつて。そういえばあつちの弟子ちゃんたちは飛んできた、つて言うぐらい走つてたのにアルちゃん普通に歩いて来たな？　もしかして師匠が心配じゃなかつたとか!?　ヨヨヨ、私すごく悲しい。

「いやどんな顔で言ってるんですかそれ、全部は解りませんでしたけど……、普通に勝つてたじゃないですか。」
「まあそれもそうか。」

演技で鍛えた無駄にうまい泣きまねを止め、彼女が渡してくれるタオルで汗を拭く。つまり私が勝つて信じてたから、つてこと!?!　いや〜！　愛されてるな私！　「違いますか？」あ、そうなの。しょんぼり……。

ま、嫌われてないのならそれでいいや。ヨソはヨソ、ウチはウチだ。意見はズバズバはつきり言ってくれた方がありがたいし、自分の意思

表示がちゃんどできるなら私は特に何かいうことはありませんで。たくさん食べてたくさん運動して強くなりましょうね？ ……と、言うわけで。

「あ、そうだタクちゃん。休憩の間ちよつとそつちのお弟子ちゃん借りてもいい？ アルの練習に付き合っただけで欲しいんだけど。」

「えッ。」

「大丈夫…、そうだな。こちらは構わないのだが、アルはそうでもないみたいだな。」

今日は見学で終わりだなあ、みたいな顔をして油断していたせいかものすごい顔になったアルちゃんを無視して話を進める。あつちの弟子ちゃんたちも別に大丈夫、って感じだし師匠であるタクちゃんのOKもでた。

「きよ、拒否権は!?!」

「あると思う?」

「ね、年齢差とか体格差的に絶対無理ですって！ 勝負になりませんよ!」

大丈夫大丈夫、寸止めルールだし。できそうになかったら私が剣を差しこんで止めてあげるし。

というか同じ相手ばかりとやってたら変な癖残るんだよ？ それが原因で死ぬのやでしょ？ ほらちようどよくパワータイプの勉強してるこの子たちがいるんだし。胸借りるつもりで頑張りなさいって。ほら今なら死なずにただで経験させてもらえるんだぜ？ まあもちろん逃げてもいいけど、そんな時は私が後ろから全力で追いかけるけどな!

「……………うう！ やってやりますよコンチクショー!」

その後、無茶苦茶鍛錬した。

5：アルの頭の中

私の名前はアル。

人間族が多く住む平地に築かれた帝国、その首都である帝都に住む奴隷の一人。でも、奴隷とは思えないほどの暮らし、いや生まれの村で暮らしていたころよりもずっといい暮らしをさせてもらっている。毎日お腹いっぱいになるまで食べさせてもらって、戦い方も、読み書きも教えてもらって、そして剣闘士として生き残ってお金を稼ぐ方法も教えてもらっている。……普通の奴隷は、こんな暮らしはできない。

同じ宿舎の中で暮らす剣闘士、もう試合に出ている人たちを見ればどれだけ私が恵まれているか、運が良かったのかを理解できてしまう。私と同じ年齢でこれだけ食べさせてもらっているのは片手で数えるほどしか知らないし、それ以外の剣闘士の人たちは私よりもずっと貧しい暮らしをしている。まあ村で暮らしていた時の私よりは豪華だけど……。

師匠が遠出、お得意様への訪問に連れて行ってもらった時も。お館に到着するまでの道で見た奴隷の人の顔色はすごく悪くて、ろくに食べてなさそうな人がいた。すっごいお金持ちで有名なお得意様にいる奴隷でも、私みたいに食べさせてもらっている人はいなかった。

「んぐッ！」

元々、自分は何もない村。帝国の西にある穀倉地帯の村で生まれた。昔はその地方の名前とか、自分がなんで奴隷になったのかがよくわかっていなかったが、師匠から色々学ぶうちにその理由が見えてきた。

私が生まれた地方では私が奴隷として売られる数年前からずっと雨が少なく、また気温が低い年が続いていたらしい。師匠によると寒かったり雨が少なかったりすると麦の成長が遅くなったり、そもそも

ダメになるみたいで……。まあ生きていくのができないくらい追い込まれていたようだ。

税を納めるのに苦勞するぐらいだから日々の暮らしを維持するのも大変。子供の何も解らない私からすれば私を含めた家族みんなずっとお腹を空かせている、ぐらいいしかわからなかったけど両親がもうどうしようもない状態に陥っていたのは理解していた。

「むり、むりれふー」

周りは平地で食べ物を探しに行けるような森はなかったし、魔物を狩って肉を得ようにも戦える人間はいない。食べ物を買おうにもこのところずっと不作続きでお財布はどこも空っぽ。銅貨一枚残っていない。このまま何もしなければ家族全員が飢えて死ぬ、収穫期を迎えても手元に残ったのはほんの少しの食べ物だけ。これじゃ誰も冬を越せない。……そんな中、両親が選んだのは、子供を売る。ということだった。

実際、私の家だけではなく私の村のほぼすべての家族が子供を売っていたみたいだし、師匠から聞いた話だと私が奴隷になった時期は奴隷商人たちが非常に忙しかった。つまり奴隷として売られた子が大量にいたらしい。なにもおかしいことではなかった。

何か仕事を任せるのには幼く、大きくなるまで時間がかかる年齢。そして長女ではない。そんな理由から奴隷として売り飛ばされた私。その決定は正しいものだった、多分同じ立場に置かれたら私も同じことをするだろうし、そもそも今こんないい暮らしをさせてもらっているのに親を恨むのは間違っていると思う。

「し、ししよおー」

確か2000ツケ口ぐらいだったけど、両親に手渡されたそれと引き換えに私は売られた。ほとんど何も食べてないせいでガリガリだったけど、それでも顔は整ってたということだから値上げしてもらっ

てそれらしい。師匠からすれば一回の試合をこなすだけですぐに貢がれるような値段だけど、私たちからすれば大金で。これで冬は越せる、って値段だった。

その後は同じように売られた同じ村の子供たちと近くにある大きな町まで運ばれて、久しぶりに食べ物にありつけたと思っただらみんな教会まで連れていかれて、それぞれの能力とかを司教さまに見てもらった。その時の私は文字が読めなくて解らなかったけど、なんでも見込みがあつたみたい。そこで村のみんなとはお別れで、大人の奴隷何人かと一緒に帝都まで運ばれた。

あとはまあ到着して数日で師匠に見つけられて、ご主人様を買われて。師匠の保護下に。

村にいたころには考えられないほどの暮らしをさせてもらってるし、村で暮らしていたら一生覚えなかったであろう読み書きや簡単な計算まで教えてもらった。それに多分私のことを妬んだ人に何度か襲われた時も師匠がとんでもない速度で助けてくれたし。本当に貰い過ぎなくらい師匠からは頂いている。

だから毎日、少しでも返せるようになって色々頑張ってはいるんですけど……。

「くひい！ くひはいってまふから！」

「ほらお代わりだぞ〜？」

こう、まだ食べ物が口の中に入ってるのにスプーン突っ込まれるのはなんか違うと思うんです！ 漏れる！ 色々と漏れちゃいますから！

「アルちゃん胃がちっちゃいからもの突っ込んで大きくしなきゃ、ハンガーノックとか悲惨だよ？ たくさん動いたのならたくさん食べないと。」

「じぶんれ！ じぶんれたべまふから！」

この目の前にいるたまに意味の解らないことや変なことするけど、それ以上にお世話になってる師匠。彼女が差し出してくる匙を何とか避けようとするが失敗、お口の中に要らぬ増援がやってくる。というかこんなところで目で追えない速度を發揮しないでください！ 試合の時とか外回りの時とかのクソカッコいい師匠はどこ行っただんですか！ 返して！

それにこれでも食べられるようになったんですからね！ 来たばっかりのころは小さなお椀いっぱいでお腹いっぱいだったんですよ私！ それが大皿一枚ぐらいは食べれるようになったんですよ！ だから押し込まないで！

いや確かに食べないと強くなれないことは解ってるんです。師匠は師匠で私にちよつかいかけながら煮魚が入った大きなお椀とか、生野菜のサラダとか、具沢山のスープとか無茶苦茶食べてますし、隣でお弟子さんたちと食卓を囲んでいるタクパルさんは師匠の三倍くらいは食べてる。動いた分だけ食べないといけないのも、体を強くするために食べないといけないのも口酸っぱく言われたので理解はしてるし、その実例が近くににいるから解るんですけど！ 私にもペースつてもんがあるんですよ！

「っん！ というかいつも思うんですけど師匠も師匠でどこにそんな量入ってるんですか。」

「ん〜？」

これ以上やらせるかと、以前からの疑問を投げかければ目の前には誰もいない。いつの間にも移動していたのか厨房の方から師匠の声が、振り返ってみればお願いしてないのに私のお代わりと自分のお代わりを両手に彼女がゆっくりと歩いてきている。しかも両手はもちろん腕の上にも器用にお皿を乗せて大量に運搬中、私の目の前に広げた手の平の倍くらい大きい木の大皿が置かれ、そして師匠のところには残りの料理。全部が全部大盛りで、明らかに女の人が食べる量じゃない。

これだけだったらまだ『異様なほど食べる女性』で収まるかもしれないがこの人はお代わり二回目である。

確かにタクパルさんとかと比べれば小さいですけど、それでも人間の女性としては結構な高身長である師匠。だから食べる量が多い、つてのは解るけどそれでもその量はいろいろとおかしい。というかなんでそんなに食べてるのに、その引き締まった綺麗なお腹はそのままなんですか？ どこに消えてるんですか！

「まあ私はカロリー使うからねえ、食べないとやってられないのよ。こつちには高カロリーで体積小さめな食品とかないし。」

まあくた、よくわからない言葉使ってますよ師匠……。かりー、つてなんすか。

「あゝ。私速いでしょ？ だからその分お腹減るの。しよゆこと。おわかり？」

なるほど、おわかりです。おかわりはいららないです。

師匠はこのあたり、少なくとも帝国の生まれではないみたいで。時たまというか、結構意味の解らない言葉を使う。文字も違う所みたいで、私に読み書きを教えてくれる時も全く読めない何か呪いの印みたいな文字を書いている時がある。かんじ、というらしいがどこからどう見ても悪い呪い師が使う文字だった。

何でも気が付いたら帝国まで連れてこられていて、剣闘士になったみたい。『人狩りに捕まっちゃったんだろうねえ。』と言っていたけどそれって思いっきり犯罪に巻き込まれてる奴じゃないですか。あの頃は私もダメダメだったなあ、みたいに笑いながら話すことじゃないと思うんですけど。

「あ。あとどこに入ってる、だっけ？」

そう、それです。……あ！ 胸とかおしりはナシですからね！ もうこっちは比較されるのも弄られるのも嫌なんですからね！ ツルペタでも直線でもないんですよ私は！ お母さんにちよつと膨らみあったし、大きくなったら私でももうちよつと何とかなるはずです！ ……と叫びそうになっただけど、どうやら違うようで。師匠は自身のお腹の方を指さす。そして。

ボンツ

という音が聞こえてきそうなほどに、急にそれが膨らんだ。

「……は？」

「いやあんまりお腹出てるのと見た目悪いし、たまに『臨月？』と言われるからさ。こうやって……、嘔ッ！」

膨らんでいたそれが、圧縮される。元通りの、スッキリすべすべなお腹。さわりたい。

「こうやってへこませてるの。」

「……………師匠って人間ですか？」

いや確かに私世間知らずですよ？ 生まれの村とこの宿舎ぐらいのことしかわかんないですし、村には戦えるような人なんかいませんでしたし。ここに来てから初めて自分以外の種族とか魔法とかに出会いましたよ？ 読み書きだって師匠に教えてもらってからできるようになりましたよ？ これまでの情報源って人から聞いた話ぐらいしかないですよ？

でもそんな何も知らない私でもそれは人間技じゃないって解ります！ 明らかにおかしいですよそれ！ ほら横にいたタクパルさんも、そのお弟子さんたちも目を丸くしてますよ！ 絶対おかしいですって！

「そう？ 腹筋鍛えれば誰でもできると思うけどなあ？ とうかアルちゃんにも教えるつもりだったし。」
「はあ!? 何教えるつもりだったんですかあ！ 私師匠みたいな化け物になるの嫌です！」

ちなみに、師匠に奴隷から解放してもらってから数年後。やってみたら普通に出来ちゃって、『こちら側へようこそ。』って肩を掴まれながら無茶苦茶良い笑顔で師匠から煽られました。なんかすごくくやし。



まあそんないつもの朝ごはんが終わった後。

普段は師匠の興行に付いて行くか、もしくは訓練って感じ。師匠みたいな上の方の剣闘士はそのオーナーから大事にされるみたいで、他の剣闘士と比べて毎日試合を組まれるってわけではない。三日に一度、もしくは二日に一度の間隔で試合が組まれて、休みの日は師匠のフアンの人のためにいろんなところに行ったりする。

なんか師匠が提案したらしいんだけど、厚紙に師匠の名前が書いてあるものを売ったりとか、握手する権利を売ったりとか、師匠と一緒に食事とかできる権利をご主人様が売ってるらしくて、基本私はそれに付いて行くことになる。

普段の様子を知っている身からすれば『ええ、お金払って貢ぐ価値ありますか?』というところがある師匠だけど、外行きの顔をしている師匠こと『ビクトリア様』はマジですごい。神様の教えは同性同士の恋愛はあんまりよくない、って言っていたけど、師匠なら教えを破っちゃっても仕方ないと思ってしまうぐらいに魅力的だ。

実際すごくたくさんの人が破りまくってるし。

なんでも『おっぱいがあるイケメン』という者を実践しているらしく、一つ一つの動作が洗練されているというか、物語の中から出てきたのかと錯覚してしまうほど。普段のちよつとアレな師匠や、実際はこの役をすることを嫌がっている師匠を知っているから何とか耐えられているけど、知らなかつたら私もキヤーキヤー言いながら師匠に詰めよるご婦人方みたいになってたのかなあ、と思つて見たり。

「アルちゃん、忘れ物は？」

「えつと……、大丈夫です！」

今日はそんな外回りが無い日、私の剣を見てもらつたりとか師匠が自分の訓練に当てる日だったんだけど、いつもとは違うことがあつた。タクパルさんという師匠と同じくらい稼いでいる剣闘士の人と一緒に訓練することになったのだ。

何度か宿舎や食堂で話したことがあるし、闘技場の控室から帰るときに顔を合わせたこともある。宿舎にいる人たちが毎日変わるのでここで師匠以外の人を覚えるのは途中からやめていたんだけど、その中で顔と名前を自然と覚えてしまったのがこの人だった。体が大きいせいでちよつと怖いけど、少し話してみればとつても優しい人。

師匠によると山みたいに大きな体を存分に使う戦い方をするみたいで、力自慢の相手にはそれを上回る力で押しつぶし、速き自慢の相手にはその首根つこを掴んで握りつぶし、技自慢の奴は技を使われる前に踏みつぶす、なんてことをしているみたい。……うん、やつぱり強い剣闘士の人ってバケモノだ。

「まあそんなパワータイプなんだけど、別に力だけじゃなくて技術もあるし速度に対応できる眼も持つてる。鬼に金棒……、こっちじゃゴブリンに鉄と女だっけ？ オーナーが同じだから試合では当たらないけど、まあ相手したくないタイプだよな。」

「力だけでは生き残れないからな。」

「でもまあ私の方が速いし強いけど。」

私の行ったことのない訓練場に向かいながら、わざわざ本人の目の前でそれを言う師匠。いや確かに師匠が速度に無茶苦茶思い入れがあるのは知ってますし、私の短い人生の中で師匠よりも速い存在見たことないですけど、絶対目の前で言うことじゃないですよね！

そんな風に師匠がいつものように話し、タクパルさんがたまに反応したり無視したりしながら私たちはようやく訓練場までたどり着いた。いつも師匠やタクパルさんが戦っている闘技場の隣にある建物で、今まで私が入ったことのない場所。闘技場の剣闘士たちが戦っている場所だけを切り取って何倍も広くして、壁で囲ったみたい建物。

あと入場料は100ツケロ。とても高い。一月使うだけで私が売られた値段よりも高くなる。

「まあ作つたはいいけど資金回収ができなかった、とかでその分高くなってるとだろねえ。維持費とかもかかるだろうし。もしかしたら建て替えの資金でも集めてるのかも。出す奴は出すだろうし。」

「正直こんな時でなければ来ないな、ここは。」
「そうだよねえ。」

剣闘士以外も入ることはできるけど、わざわざここに来るのは剣闘士ぐらい。たまに宿舎に入り込んできちやうファンや、他の剣闘士から自分の戦い方とか新たな戦術とかを隠したり、今日みたいに周りの被害を気にせず模擬戦する人が使うみたいだ。そんな施設についての豆知識とか、ここを使用する人たちのことをお二人から聞きながら、他の利用者の人たちから十分離れた場所に移動した後。

模擬戦が、始まった。

タクパルさんにとっては速度で戦う剣闘士との経験を積むために、

師匠としてはより負荷のかかる鍛錬をするために。両者の剣が交わる。その結果は、横で一緒に見ているお弟子さんたちからすれば驚きだったんだろうけど私からすれば予想通りだった。

何度か師匠が取られることもあったけど、終始その速度に翻弄されるタクパルさん。師匠から飛び切り眼がいいと言われた私でも全部を目で追いきれない速度で繰り広げられる試合。傍から見れば多分一本の線になって見えるような師匠の動きは、常人じゃとらえきれないほど速い。横にいるお弟子さんたちには何がどうなっているかほとんど解つてないだろうけど、タクパルさんが押されていることは理解できていくはずだ。

傍で見ているから解る。色々と師匠は規格外だ。

あの目で追えないような速度に入らずとも、大半の剣闘士に勝てるような実力を誇っている。そうでなきやわざわぎ“ビクトリア”様という役を演じながら剣闘士なんかできない。他の剣闘士の人たちがしているような命がけの戦いじゃなくて、魅せるような戦い。剣に触れるようになってからそんなに時間は経ってないけど、師匠の中にとっても高い技術が眠っていることは解る。

それこそ最初から相手がどう動くのか解っている動き、どこにどう剣を置けばより美しく魅せることができるか。どう動けばより人の注目を得ることができているのか。どう振舞えば“ビクトリア”としてあり続けられるのか。毎日宿舎の顔ぶれが変わり、それまで勝ち続けていた人でも急に消えるこの厳しい世界で、一人だけ違う世界を生きている。

そんな師匠が役に縛られず、本気で戦った場合どうなるのか。

弱いはずがない。

木剣と木剣がぶつかっているはずなのにひどく鈍いというべきか、何か潰れているんじゃないかと思うほどの音が重なり合うように連続して響き続ける。そして鳴っていたはずの音がワンテンポ遅れる、もしくは聞こえなくなったということとはタクパルさんが一本取られ

たということ。そしてまた、音が鳴り始める。

何処をどう動いているか、少し離れた場所から見ればわかるんだけど実際に目の前でそれをやられればどうなるのか。『ビクトリア』として振舞っているときは絶対にならないような足技や、人の体の一部を踏み台にするような動き。振るわれた剣の力を利用しての攻撃。普段の師匠が使わない、殺すための。生き残るための戦い方。

その美しさではなく、強さに見惚れてしまう。

気が付けば師匠たちの試合は終わっていて、タクパルさんに向かっていくお弟子さんたちが視界に入ることですそれをようやく理解した。私も行かなくちやと歩を進めるが、近づけば近づくほどにその体が大きくなっていく。汗で着ていた服がその体に張り付き、高まった体温がゆっくりと蒸気を空に返していく。その顔はまだずっと相手のことを見つめていて、のぞき込めば吸い込まれてしまいそうなほどその瞳は澄んでいた。

うん、ちよつと師匠とは思えないほどかっこよくてちよつとムカついた。

だからいつもの仕返しをしてやろうと思ひ、すぐく小刻みに震えている足を触ってやろうと思えば普通に怒られちゃった。疲れてるだろうし、今やれば師匠の聞いたことのないような声が聴けると思ったのに……、残念。あ、それとその綺麗なお腹に頬ずりしてもいいですか？ いいですよね？

……え？ 私の訓練？

その後めちやめちや訓練させられた。ちんどい……。でも頑張ったご褒美にお腹触らせてもらえたので私は満足です。ぶい。

6・目標を定めよう

たまに、自身が夢を見ていることを理解している状態に陥ることがある。

今この手にスマホやパソコンと言った文明の利器があればその症状の名前やら原因やらを簡単に調べることができただけで、私の夢はそこまで優しくないらしい。剣闘士になつてすぐのころは幸せな夢、覚めてほしくない夢として、よく「昔」の世界のことを思い出していただけで、最近はずっとこの世界の夢だ。

しかも、最悪な過去を思い出すものばかり。

よく『夢を見るのは頭の中を整理するため』とかいうけどこんなものすぐに捨てちゃってもいいのに。

ほらキミも見てみてよ、感じてみてよ。

人の胸に刃を突き刺すって感覚をさ。

初めて人を殺したのは剣闘士になつてほんの数日。私のご主人さま、今のご主人の父親に買われてから数日後の話だ。

今のご主人はより儲かる可能性があるのなら私たち奴隷の意見も聞いてくれるし、儲けた分だけ私たちに還元してくれるタイプの人だ。食事とか宿舎の改築とか、私の場合だったら試合の間隔を開けたりとかそういうの。つまり剣闘士を商品兼ビジネスパートナーとして見てくれる。性格もそこまで悪くないし、商才はもちろん政治感覚もある。剣闘士のオーナーとしてはかなりアタリの部類だ。

けど、先代のご主人は剣闘士を商品としてではなく、他の観客たちと同じように娯楽として見ていた。

つまり、趣味だ。いくらこつちが死のうともオモチヤが壊れたのと一緒に。多数の剣闘士を抱えることが出来て、しかも闘技場の興行自体

に口出しができるほど権力と金を持つ商家の人だ、使い捨ての奴隷なんかいくらでも買えただろうし、むしろ彼の財産からすればあまりお金を使わないよい趣味だったのかもしれない。だって何千何億とする美術品を買うよりも、数万程度で済む奴隷の方が格段に安いのだから。

私も、私の同期達も彼の趣味のために、使い捨てられるためにそんな値段で買われた。

知ってる？　ウチのオーナーが所有している奴隷の中で、剣闘士として生き残ってる年数の長さは私が二番目ってこと。一番はタクパルで、私が二番。まあつまり私の同期や先輩はほぼ全部前のご主人に使い捨てられたってことだ。……もちろん、後輩も。

そんな先代は他の剣闘士と同じように、すぐに私を試合に出した。これでも見た目で売ってる剣闘士だ、彼の思惑は『女が相手の剣闘士に叩きのめされ、組み伏せられるのを見ながら酒でも楽しもうか。』ってことぐらい簡単に分かった。実際そういう試合があった時に奴が酒を楽しそうに呷っていたのを覚えている。奴隷商人から買われた後、感染症対策のために体をまとめて洗われて、最低限の飯を食わされて、他の奴隷とまとめて寝床の冷たい地面に転がされる。数日そんな生活が続いたと思ったら、初めて剣を持たされて試合だ。本当にいい趣味をしている。

この体になる前は日本という平和な国でずっと過ごしていた、武術の心得があるわけでもなく、命の危険に陥ったこともない。身近な危険と言えば道路を走り回っている自動車程度で、それもルールを守って注意して生活していればそうそう轢かれることなんてない。自身がかつちに来た理由が解らない以上、もしかしたら運悪く轢かれてこつちに転生したのかもしれないが、とにかく殺し合いなんて初めてだった。もちろん、剣を握ったのもそれが初めて。

『そこの剣を取って早く出る、せいぜい長生きするんだな。』

言葉は解るが、意味が解らない。

反論も許されず、その職員に剣を握らされ放り出されたのは、今とは違う裏の闘技場。単純な力や剣の技で殺し合うのがいつもの闘技場であるならば、裏の世界にあるソレはなんでもありな場所。武器の指定はされず、毒やクスリに対戦相手の買収。殺した相手を喰らう者もいれば、犯す者もいた。規模は表に比べればとても小さなものだったけど、刺激を欲する出資者たちが金を持っていったこともあり、動いていた額はとても大きかった。その分私たちに降りかかるものも、大きかった。

ただ強い奴が勝者で、ルール。奴隷だって人だ、表なら最低限同じ生物として扱ってもらえるが、あそこにはそんなものなかった。表なら試合中の男女の情事などご法度だが、裏なら何でもあり。私がどうなるうが、助けてくれるものはない。金という大きな力に守られたアイツは私たちを見下ろせる場所で酒を呷り、その所有物でしかない私は何も逆らうことができない。死んでくれた先代にとってはとても楽しい遊び場だっただろう。

表で数多くの市民の娯楽である剣闘士たち、勝者には栄光が与えられ敗者には死が与えられる。だが、そんなもんじゃ満足できない奴、もしくは表じゃ生きられなくなった奴が裏へと流れていく。光が大きいほどに、影も大きくなる。……このことは、アルに教える気はない。

『ひィッー』

自分が挙げたはずの悲鳴なのに、それが自分の口から洩れたことに気が付かなかった。それほどまでに気が動転していた。

対戦相手が待つ広場へと投げ出され、真っ先に目が付いたのは放置された死体たち。戦いの邪魔になるからと端に避けられたソレには、等しく死が与えられていた。私と同じように連れてこられた同期の男、違う種族の両手両足のない死体、爬虫類のような化け物の頭、苦悶の表情を浮かべたまま焼けただれているもの。そして、しらく汚れた体のパーツが欠落している女たち。

私の、末路の一つだ。

恐怖で体が震える、だが時間は止まってくれない。欲望に染まった相手の唸り声でようやく相手へと向き直れば、未だ私の記憶を蝕み続ける死人の一人。全身が傷だらけで、口からは緑色の液体が漏れ出ている。目は完全に正気ではなく、その体もひどく歪。性別は男で、種族もおそらく同じ人間だったのだろう。だが、どうしようもないほどに、名も知らぬそいつは人間ではなかった。知恵ある者ではなかった。

あの時、私は『加速』という力に気づくことができた。故にあの獣が想定していない速度で動くことができ、修正される前にその腕を切り落とすことができた。がむしゃらに振るった剣は奴の体を切り落とすことができた。

獣故に、もしくは傷つけられるとは思っていなかったが故に絶叫を上げる奴の首をはねることができた。首を落とされてもなお動き続ける奴の胸に、剣を突き刺すことができた。今の速度と比べれば格段に遅い“二倍速”でも、殺すことができた。あの肉が裂けていき命が絶たれていくような感覚を得ることができた。腕で感じることもできた。

……だが、あの時失敗していれば？

『加速』が発動できなければ？ 速度に対応されていれば？ 奴が獣でなく人だったら？ 痛みに耐え私の首を落としていれば？ あの肉が裂ける感覚を、この身に受けていれば？ 私はどうなっていた？

人の命を絶つ、表でも裏でも自分が生き残る限りずっとこの手に残り続ける感覚。すでにもう何人殺したか覚えていない。殺した奴の名前も、顔も、徐々に忘れていく。だが、この手に残る命を絶つ感覚は1つずつ積み上がり、忘れることを許してくれない。加速が使えずそのまま切り殺したときの感覚も、皆が遅くなった世界で落とした首

の感覚も、ずっと残っている。

裏でただ死の恐怖に怯えながらがむしやらに剣と能力を使い続けた時、表の試合にも出るようになりようやく剣の振るい方を理解するようになった時、ビクトリアとして初めて闘技場に立った時、アルという弟子を取るようになった時、彼女が私の生き残る理由の一つになった時、そして今日。死ぬべきではなかった人を殺した時。

首を落とした感覚、胸を貫いた感覚、腕を切り落とした感覚、数打ちの安い刃物で肉を断ち切る感覚、上質な剣で命を薙ぐ感覚。

その全てを、1つずつ。全て、ゆっくりと思い出しながら。

意識がようやくよく覚醒する。

「……………まだ深夜か。」

最悪な夢からようやく抜け出せたと思えば、まだ日は昇っておらず真つ黒な世界が広がっていた。夜目はそこまで利かないが、どこに何があるかぐらいは解る。隣にある彼女の寢床から、いつの間にか私の場所に忍び込んでいたアルを起こさないように移動。近くに置いて

あつたろうそくに火をつける。

真つ暗な世界に、ようやく光が灯る。

「……うえ、おなあか……、うえへへ。」

「ふふ、いい夢見れてるみたいだね。」

アルのよくわからない寝言を聞きながら、顔にかかった髪をよけタオルを掛け直してあげる。

最初はどうなるかと思っただけこの子は本当にいい子だ、自分の置かれていた状況をちゃんと理解して、そこから毎日何かを得ようと頑張っている。ただ生き残るために殺し続けてきた私には眩しいほどに。だが、その眩しさを失いたくはない。それこそ外の世界に出るときは一緒に付いてきて欲しいと思うぐらいには。……母親、にはなれないだろうけど姉代わりならできる。そう思って接してきた。師と弟子、という関係性ではあるけど堅苦しいのが苦手な私にはこれくらいがちょうどいい。

「まあ、なんで私の腹に興味津々になったかはわからんけど。」

生まれながらの性か？ とどうでもいいことを考えながら彼女から離れる。明かり片手に向かうのは外の練習場。いつもアルと使っている場所だ。もちろん訓練用の剣を片手に。

まだ夜は明けそうにないけど、もう一度寝れば変な時間に起きてしまいそうだ。最低限の睡眠は取れたし、後は剣でも振って朝日が昇るのを待つことにする。幸い明日は試合ではなく、外回り。ビクトリアとしてお得意様への訪問があるだけだ。少しぐらい夜更かししても問題ないだろう。

「……今日の対戦相手のせいかねえ。」

型、というほど大層なものではないが体に染みついた動きを繰り返

しながら思考をまとめていく。

タクパルと全力の訓練をした後から数日後、今日の対戦相手はひどく真つ当な人間だった。犯罪者として奴隷に落された者ではなく、また裏にいるような身の毛もよだつ様な獣でもない。どこにでもいるような善人で、運悪く奴隷になってしまったような人間だった。そして奴隷になったとしてもそのまっすぐな心を失わなかった稀有な人間だった。対戦相手として私に礼を尽くし、ともに健闘を祈りながらどちらが死のうと恨まないとまで言いに来る男。名乗る前にその口を閉じさせたから名は知らない。……知っていれば重みが増えていただろうからそれでいい。

私の対戦相手になるぐらいだから身体能力も技量も高く纏まっていて、年単位で生き残ってるような相手。それを彼のオーナーに評価され妻でも貰っていたのだろう。観客席の方には彼のことを父と呼ぶ幼子と、母親がいた。奴隷から生まれた子は、最初から奴隷だ。生まれながらに誰かの所有物であるはずなのに、熱心に彼に向かって声援を送る彼らには家族という関係性が確かに存在していた。

試合形式は殺しありで装備は支給の数打ち、彼からの挑戦という形だった。実際は彼のオーナーが試合を組んだのだろうが。

「殺しナシの形式だったらまだ良かったんだけどね。」

私がここにいる時点で、結果はいわなくても解るだろう。

……剣闘士にはよく、『勝者には栄光を、敗者には死を。』という言葉が使われる。これはまあその通りなのだが、実際は供給側の思惑が強いんじゃないか、と勝手に思っている。だって毎日のように新しい剣闘士が大量にやって来て、大量に消費されていくんだぜ？ そりゃあ大きな商いでしょうよ。

殺さなければ剣闘士の需要は減っていく、殺せば需要は増える。しかも娯楽に飢えている市民からすれば殺した方が盛り上がりが良い。市民と供給側の思惑が完全に一致すればもう、殺るしかないよね、ってことだ。

「人の家族を壊して、生き残る。まったくいいご身分ですよねえ？」

あの家族はどうなるのだろうか、気にしても仕方ないことだが、母親は他の男に宛がわれるのだろうか？ あの子供も剣闘士になるのだろうか。……あの子が大きくなった時に、私はまだ剣闘士を続けているのだろうか。

「復讐は……、しに来るだろうなあ。……私が死んでれば、アルちゃんにか。……いやな世界だよほんと。」

実際、とてもいい試合が作れるだろう。『自身の父親を殺された復讐を果たすため、若き剣闘士が雄たけびをあげる。』とかだろうか？ 私が生きていれば復讐のために、私が死んでいればアルちゃん相手に試合を組めば大きな収益を見込めるだろう。良くも悪くもこの世界の住民はそういった娯楽に飢えている。

生き残るために、殺す。できるだけ殺して来た人たちのことを考えないように、すぐに忘れられるようにしてきたが、この手に残る血の匂いは消えそうにない。どれだけ洗っても、一生付きまとう死の香り。

「私に降りかかるのはいいけど……、あの子が迷惑を被るのは違う。」

すでに彼女は、私にとって無くてはならない存在になっている。一人だけだったらどこかで壊れていたかもしれない、狂っていたかもしれない。積み重なったものに押しつぶされていったかもしれない。……でも、あの子がいるおかげで私は前を向ける。血で汚れ、くすんだ世界に色を与えてくれる。帰ってくる理由になる。

「さっさと金稼いで、二人分の身分。買わなきゃね。」

剣闘士、という狭い世界を飛び出し。火の粉が降りかからない場所まで逃げる。それにこの国の市民となれば、単なる奴隷である剣闘士は手が出せなくなる。やけを起こして襲ってくるかもしれないが、その時はこの国の法が私たちを守ってくれる。

折角異世界に来たのならば未知を求めて冒険してみたい気持ちはある。何故この体を得た時にはすでに捕まっていたのか、元々の体の持ち主がいてそこに自身が入り込んだのか、そんな疑問を解消したい欲もある。だがそれがメインではなくなった。あの子が本格的に剣闘士の世界に入り込む前にここから抜け出す。それが一番の目的だ。

その後彼女が元住んでいた村に戻りたいのならそれでいいし、私と共に世界を歩いてくれるならそれでいい。……まあそこら辺は全部うまくいった後に考えることにしよう。

「ふふ、この帝都だつて行ったことのない場所ばかりだからね。一緒に回れば楽しいのかな？」

この奴隷の身分から脱却するには、まず今のオーナーから自身の身分を買い取る必要がある。単なる奴隷なら買われた時の値段に少し上乗せされる程度で済むけど、私みたいな強い剣闘士は別。生み出す金額が金額なだけに、時価になる。

私の値段は、2億ツケロ。アルの値段は1000万ツケロ。多少上下するだろうがオーナーに聞けばこの値段が返ってくるだろう。

合わせて、2・1億。

そしてそこから自身の市民権とかを買わないといけない。自分を買い直しただけじゃ、まだ安心はできない。奴隷から抜け出したとしても単なる人として扱われるだけで、まだ法の保護を受けれる市民じゃない。悪く言えば蛮族、よく言えば旅行者。そんな扱いだ。二度と奴隷落ちしないように市民権を購入する必要がある。普通なら伝手を作るのにかなり苦勞するんだけど、ビクトリアとしての活動のお

かげでそこら辺は何とかなる。結構上役の人とのコネクションがあるからね。

本来なら認められる前に賄賂とか色々用意しないとイケなくなるらしく、何倍もお金がかかるらしいんだけど私の場合は別。自身が帝国の市民として保護する値のある人間だということを一定の金額を納めることで示すだけでいい。一人50万ツケロ。私の値段と比べれば安価だけどこれでも結構な額だ。

まあ後は奴隷解放後の生活のこととか考えてある程度余裕をもって生活できるぐらいを考えれば……。

めで、2・2億ツケロ。

まあかなり盛ってるけど、これだけあれば外に出ても問題なく生活できるはずだ。

ちなみに私レベルが一回試合して賞金が大体100万ツケロ、その八割がオーナー取り分なので手元に残るのは20万。大体1100回ぐらい試合したら稼げる計算だ。んで試合が二日か三日間隔で行われることを考えると……、約3300日。10年弱かかる計算になる。

「それ以外に収入源あるけど、ねっ！」

ずっと続けていた剣の型、体が温まって来たので大技を入れていく。

さっきのは収入を試合だけで考えた普通の剣闘士の場合だ。もちろん私はそれに当てはまらない。オーナーに持ってかれる心配のないファンからの貢ぎ物に、オーナーと契約して始めたこの世界では私が初めてやったグッズの販売。そういう副収入のおかげでそんなに長くの時間は必要としない。オーナーに儲かるからと頼み込んで色々やったかいたがあった、ってもんだ。

「それに、これまで貯めてきた金もある。」

食事とか美容でかなりの額をつぎ込んでいるが、それでも全体から見れば些細なもの。賭け事にお金を使うこともないし、何か娯楽を得るためにお金を使うこともない。というかファンの人からもらったもので十分すぎてお金使わなくて済んだ。ま、貢がれたものはそのまま保管しているのもあるから、それを換金する手間もあるけど……、今の貯金額は、大体1.5億。

結構貯め込んでるでしょ？ 私。額が額だからアルちゃんにも秘密にしている。

「……あと、もう少し。」

何かもう一押しあれば目標まで届く。もちろんこのままコツコツ貯めるのもありだ。……でも、いつか人は飽きる。『ビクトリア』という剣闘士は人気商売だ。熱がある内はいいけど、何か些細なことで全て崩れる可能性もある。今はまだ大丈夫だけど、壊れるときは必ず来る。もしこのまま運よく続いたとしても老いは、平等。体の衰えがいつ来るか解らないし、花はいずれ枯れる。時間は私の敵だ。

だからこそ、急がないといけない。

「やっぱり、大きな大会に出て優勝するのが一番いい。」

狙うのは、『剣神祭』。ここ帝都で行われる祭りのひとつで、剣闘士の最強を決めるお祭り。名高い実力者たちが参加して、命を懸けて最上の名誉を目指す。決勝戦ではこの国の皇帝も公式に見に来るかなり大掛かりなお祭りだ。出る賞金もそれだけ多く、そしてその分リスクが大きい。

これまではそのリスクを嫌って出場しないようにオーナーにお願いしてただけど……。

「せつかく見えてきたんだ。」

この、クソツタレな世界から出るために。

「……よし、目標も決まったし、そろそろ日も昇る。部屋に帰るとしますかね。」

剣神祭に向けて準備、と行きたいところだけどまだ始まるまで三か月以上ある。それまでは普段通りの生活を進めていくことにしましょうか。これまでの積み重ねを放棄しても良いことなんかないからね。

「まあそれでもビクトリアをやるのはしんどいですけど！ ……はあ、今日元老院の奥様のところですよ？ ……なんかミスったら首飛ばしなあ……、今から気が重い。」

7：お前も私のものにならないか？

「し、師匠、その……。だいじょーぶ……。でしたか？」

「え、何が？」

馬車、それも私が奴隷商人にドナドナされたぼろの荷馬車なんかとは全然違う高級の馬車。そんなお貴族様とかが乗りそうな車内だけでぼけえ、としてると急にアルちゃんがそんなこと言い出した。

「いやだって師匠今日すごく早く起きてたじゃないですか。私が勝手に入っちゃったから……。」

「ああ、それ。別件だから気にしなくていいよ。むしろウエルカム。」

ウエルカム、の意味が通じずに首をかしげるこの子の頭を撫でてやる。昨日私が悪夢のせいで起きたのを、自分が寝台に紛れ込んだせいで起きたのだと思ったようだ。それぐらい気にしなくていいのになえ？ ……あ、もしかしてこの表情。迷惑かけたことだけじゃなくて、寝ぼけて布団に入り込んで恥ずかしいってのも入ってるな！ くあわいい！

「にしても、アルちゃんもお宅訪問は慣れてきたかな？」

「……正直まだ別世界過ぎてついていけないです。」

そう、今日は『ビクトリア』としてファンのお宅訪問デーとなっている。この名前で活動し始めたときにオーナーに提案した商品の一つに、『私を一日自由に連れまわせる権利』ってのがある。オーナーが超富豪層メインに売り出しているだけあってとても高額、それに私のスケジュールの都合もあってそもそもその枠が少ないってこともあり無茶苦茶競争率が高い商品らしい。

まあそんな一押し商品を今回お買い上げなさったのが私の一番の

上客、元老院議員の奥様ことヘンリエッタ様だ。高齢な方なんだけど、とてもパワフルで『一日自由権チケツト』をめぐって他の奥様方と殴り合いをして勝利の雄たけびをあげたかと思えば、領地経営とかもバリバリにやってるクレバーさも併せ持つパーフェクトお婆ちゃんだ。

「元老院、って私一生関わりないと思ってたんですけど……。」
「人生何があるか解らないよねえ。」

元老院議員、まあ簡単に言うと貴族の中でもかなりの高位で。その上無茶苦茶お金を持っている人のことだ。アルちゃんみたいな農民の子なんて一生会わない身分の人たちだし、私も会うことになるなんて全然想定してなかった。だってオーナーに提案した時も『一般の人でも何とか手を出せる値段ね？ ファンとの交流を増やしてより深く応援してもらえようにしたい。』って言ったんだよ？ お金持ち相手にするつもりじゃなかったのよ？

なのに気が付いたらそれが多くの人間を顎で使うことができ、とんでもなく広大な土地を持つている人たちの相手をするごとに。毎日金貨風呂ができる人たちだけ？ 奴隷なんかのためにわざわざ宿舎までこんな高級な馬車回してくれるんだぜ？ 議員というか家としてのメンツもあるんだろうけど、わざわざ家紋付の馬車に完全防備の護衛付きで。しかも車内はふわふわのクッション付きと来たものだ。

「他の方もそんな感じですし……、師匠がすごいのは解るんですけど奴隷にこんな良くしてもらえるのはなんでなのでしょう？ なんかもう感覚が可笑しくなりそうです。」

「大丈夫、私はもうぶっ壊れてるから。」
「駄目じゃないですか！」

そうなのよ。最初は私も動揺してたんだけど、最近は大iktリアを

やってる時の面の皮が厚くなつたせいか、何食わぬ顔で『丁寧なお迎えに感謝を、〇〇様のところまでよろしく願います。』みたいなことと言えるように成っちゃってんのよ。慣れって怖いね！

「まあ理由なだけどき、オーナーが色々手を回したみたいだよ？」

どこにでもグループがある様に、私のファンのメインを担っているご婦人方にもいくつかのグループがある。その超富裕層、今日お伺いするヘンリエッタ様みたいなお金もあるし権力もあるような奥様が集まる茶会なんかで、オーナーは売り込みをしたらしい。そのグループの中で頂点にいるヘンリエッタ様に、『ウチのビクトリアの一日貸出つてのを始めたんですけど……、どうです？』と。

ヘンリエッタ様もまあものは試しに。とやってみることにしたそうだ。そしたらやって来たのはもちろん私ってわけ。

前世の記憶のおかげでこの国のスタンダードなものではないけど異国情緒溢れる礼儀作法を押さえていて、この国とは別系統だけど奴隷にしては高すぎる教養を持っている。私も全力で頭働かせながら頑張るし、そも私を家に呼べるぐらいの人たちはそれまで政治や陰謀みたいな権力者の世界にいたせいかな普通に話がうまい。結果的に無茶苦茶話が弾むってわけだ（もちろん無理なときもある）。代わりに私の胃が死ぬんだけど（無理なときはもつと死ぬ）。

「沈黙がね、辛いだよ。ほんと。」

「なるほど……。」

ま、この世界の人間って基本学ぶ機会を一度も得ずに生涯を全うするって人が多いみたいだね。こっちに来てから無理やり詰め込んだ知識もあるけど、そういった学びを得る機会があるほど稼いでる富裕層とちゃんと会話が成立する奴隷って珍しいみたいなんだ。そこに顔がよくて？ 紳士的で？ 無茶苦茶強い “ビクトリア” 様を？

一日自由にできるってなると？ みんな買うよね、って話。私も私で

リピートしてもらえようように全力で演じてるしね？

しかも奥様方の情報拡散力はどの世界でも凄まじいらしく、すでにブームは過ぎちゃったけど一時期奥様方の間では私を家で呼ぶことが一種のステータスみたいになっていたらしい。上から数えた方が早いあの有名な奥様がやったってことで親交を深める話題にもなつたみたいだし、私を呼べるくらいの財力がある、っていう証明にもなるみたいで。今はそこまで人気じゃないけど、『チケット』は基本売り切れ状態。ほんとありがたいことです。

……まあこんなことになってるから私の価値が上がって値段が2億になってるし、まだ剣闘士になってないのに私の弟子だって理由でアルちゃんが1000万になってるんだけど。稼ぎたいから始めたのに逆に目標金額が上がるとか本末転倒かな？

だけどこれぐらいしないと一生奴隷のままだったし……、お商売って難しいね。

「でもうれしいことに？ これに関しては競争相手がいないからねえ、独占状態。」

まず私が女つてことで女性相手ならば男女の纏れ、みたいなことは気にしなくていい。昔なんか剣闘士と貴族の女性の身分違いの恋つてのがあつたらしく、そこらへん結構厳しいみたいなんだけど同性なら大丈夫らしい。え？ 男の場合だと私が襲われないのかつて？ そうなる前にそいつを切り刻むから大丈夫。

あと剣闘士としての強さを保ちながら私みたいな義務教育を受けた奴隷つても全くない。普通学あつたら剣闘士にしないで商売の手伝いとかさせるからね、逆もまた然り。そうなるとなんで私が剣闘士やつてるのかつて話になるけど……、まあそれは置いておこう。考えると悲しくなる。

ちなみに他のオーナーが同じことをやろうとしたらしいんだけど、そいつの奴隷がお貴族様に無礼をはたらいたとしてオーナーともど

も処刑された、つてのはちよつと前よく聞いた話だ。一時期処刑ブームか！ つてぐらいやってたもん。

「……………え、ちよつと待つてください処刑!? 今処刑つて言いまして!?!」

「そうだぞ、もちろん私がなんかミスったら死ぬぞ。みんななかよく、くびちよんぱだぞ。」

アルちゃんも。どうでもいいけどオーナーも。

「あはー！ おなかいたい☆ ビクトリアちゃんぽんぽんいたい☆」

ま、ヘンリエッタ様に関してはそういう心配はないだろうけどね。

あの人は私のことを人間として見てくれてるから。



「今日はお招き頂き誠にありがとうございます、ヘンリエッタ様。」

「あら？ 私、そういう堅苦しいあなたは求めてないのだけど。」

「平にご容赦を、ここには他の方もいらつしやいますので。」

帝都の貴族街、そこでも一際大きいお屋敷。ここが今日の仕事場だ。実際の試合みたいに命のやり取りをするわけじゃないけど、それ以上に精神が擦り減っていく。ただでさえ“ビクトリア”やってるときは一挙手一投足に全力を掛けないといけないのに、相手はとてつもない権力者だ。いつもの倍以上に胃の壁が削られていく気がする。

「確かにそうね、人払いを。」

彼女がそう言いながら手を叩くと、その場から使用人たちや護衛が離れていく。最初は『せめて護衛は』などとひと悶着あったが、この方が『じゃあ一度屋敷にいる兵を全員連れてきなさい？ どうせ彼女には敵わないわよ。』ということがあり、お屋敷にいる兵全員VS私という模擬戦があったのだが……、まあ普通に全員叩き潰してしまっただ。

結果『ほら、この子が本気になれば私なんかすぐよ？ 護衛なんかいるだけ無駄だわ。下がりなさい給料泥棒たち。』てなことになっちゃったんだよね。

おかげさまで人払いはずスムーズになったけど一部護衛の方々からはすつごく敵視されてる☆ おなか痛い！

「これで誰もいないわよ？」

「……ありがとう、ヘンリ。」

「ふふ、やっぱり闘技場のスターにそう呼ばれるのは気分がいいわね。剣を振るう普段のあなたとは違った姿が見られるのも、とても。」

そう私に笑いかけるのは生まれながらの権力者、クライズ元老院議員夫人のヘンリエッタ様。平民どころか奴隷の私たちじゃ一生顔を見ることすらできないようないと高きお方。お孫さんがいるほどのお婆ちゃんんだけど、普通に剣は振るうし旦那さんを差し置いて領地経営すらしているスーパーお婆ちゃんだ。あと私のファンの一人。

「そう言ってもらえると剣闘士冥利に尽きるよ。……それで、今日は君にどう尽くせばいいのかな、ヘンリ。」

「あら！ せっかちさんね。」

普通、奴隷がこんな喋り方してたら普通に首を刎ねられる。行ききの馬車の中でちよつとアルちゃんを脅しちやっただけか、私の従者役と

して来ている彼女が端っこでちよつと震えてる。大丈夫大丈夫、こうしてほしいって言われたからそうしてるだけで普段はしないって。それにこれぐらいで怒る人だったら私何回死ねばいいのか……。

「楽しい時間ほど短く感じる、一日なんかあつという間さ。そう考えればせつかちになつても仕方ないとは思わない？」

「相変わらずお上手ねえ。」

彼女の眼が、ティーポットの方へと移る。淹れてくれということだろう。

魔法やらスキルやら魔物やらと、元の世界じゃありえないもの溢れるこの世界だが茶の淹れ方は似ている。茶葉も、水も。基本的な道具は既知のものだ。それに前世は結構お茶とかに凝つてた時期があつたからね、お任せあれって感じ。

姿勢や見え方を気にしながらその場まで移動し、茶を淹れる。元の世界とかじや電気ケトルが欲しいところだけど、こつちじゃその代わりに魔道具がある。やっぱりお湯がすぐ手に入るのはありがたいよねえ……。まあこの魔道具ケトル一つで小さな家が建つらしいから丁寧に扱わないとだけど。

「これはしつかりと蒸した方がおいしいかな？」

「そうね。じゃあその間に……、ビクトリア様？ 私のものにならない？」

「なりませんよ。」

間髪入れずに拒否の言葉を口にする。ちなみにだけど紅茶の蒸し時間は2,3分。どう考えても奴隷の引き抜きが成立する時間じゃない。明らかにこのお婆様、断られる前提で話していらっしやる。

「え〜！」

「え〜！ じゃないよヘンリ。何度も言ってるだろう？ 私は私で自

身を買戻す。確かにありがたい申し出だけど受けられないって。何回このやり取りを続けるつもりだい？」

「ほらお芝居でもあるでしょう？ 『何度も言葉を重ねれば、きっと思いは伝わる！』って！」

「断られる前提で話したらただの否定が積み重なるだけでは？」

子供のように文句を言う彼女を半ば雑に扱いながら、使用人があらかじめ用意してくれていたのであろう茶菓子をセッティングしていく。もう解ると思うがこのお婆様、かなり愉快な方なのだ。

「あんなに情熱的に求め合ったのに！」

「私にとってフアンのみんなは平等だよ？」

「あんなに優しく手解きしてくれたのに！」

「剣ね？ 艶めかしく言っても無駄だよ？」

「普通に仕事の悩みとか相談してるのに！」

「……それに関してはもう無理だね。記憶消す道具とかない？」

情熱的に求め合ったのは多分お婆様の妄想が入ってるし、私は基本フアンのみんなには平等に接するように心がけてる。まあお貴族様相手には許可貰わない限りこんな話し方しないからそういう区別はするけどね？

あと剣は教えてくれって言われた時はまあサービスとして体を寄せるぐらいのことはしたけど内容は普通だったし。仕事のことに関しては……、うん。話されたら私聞く以外の選択肢ないのよ。こ、口外しないから許してくれませんかね？

「駄目かあゝ。」

「駄目だねえ。」

「私は推しが近くにいて幸せだし、あなたは奴隷じゃなくなって幸せ。それにほら、私の孫もあなたに夢中でしょ？ 護衛とかについてくれれば私も安心して死ぬるんだけど。」

「おっと、そんな悲しいことは言わないでくれると助かるかな。」

若干うなだれながらそんなことを言う彼女。いやまあ確かにそう
なんだけど、誰かに仕えるってのはねえ？ この人はかなりマシどこ
ろかすごくいい人なのは解るんだけど、結局何も変わらないのよ。こ
の人に買われるってのも、剣闘士で居続けるってのも。

「ま、あなたが望まないことをするのよね。……さ、ビクトリア様！
私にお紅茶を頂けますかしら？」
「喜んで。」

茶こしを通しながら彼女のカップに紅茶を注ぐ、そして次に私のも
のを。あとは毒見役として先に私が口をつければお召し上がりくだ
さい、ってわけだ。お味はいかがですか、マダム？ おいしい？ そ
れはよかった。

「あ、そうそう。あの伯爵覚えてる？ あの死んだみたいよ。」

「ああ……、わざわざ最前線に送られたって言う。」

「とつても無残に死んだらしいわ、ほんといい気味ね！ 勝手にあな
たを買おうとするんだもの！ 神様だってお許しにならないわ！」

伯爵、もう名前も忘れたんだけど無理やり私のことを買おうとした
貴族の一人。元々は男のファンの一人だったんだけど、まあ色々あつ
てね？ 勘違いしたのか元々そういう性格だったのかはわからない
けど、自分の権力と財力を使ってウチのオーナーに圧力をかけた。つ
まり、私を自分のものにしてしようとしていたのだ。……言わなくても解
ると思うけど私の体も狙ってたんだらうね。

うくん、ビクトリア様って罪な女！ こちとら中身男入ってるけど
良いんですかね？ 寝台の上で首切り落としますよ？ 手刀で。

まあそういうことになる前に、この目の前にいらっしやるお方が異
変を察知して、色々と動いてくださったんですよ。

オーナーから聞いた話になるんだけど、ことが始まってからは色々すごかったらしくてね？ 私のファンの奥様方とかヘンリエツタ様と仲良くなりたいたい奥様方とかが一致団結して女の情報網で探りまくったらしいのよ。そしたら出るわ出るわ犯罪の証拠。

まあ明らかに、というか大半が伯爵が関与していないものだったみたいなんだけどね。好機と見た他の貴族たちが犯罪の証拠とか、処分したいものを全部その伯爵のところに不法投棄したんじゃないか、ってオーナーが言ってた。……うん、まあ簡単に言えばその伯爵がヘンリ様に嵌められたんだよね。イヤコワ。

『私たちから推しを取るなこのハゲエエエ!!!』って叫んだところはもうほんとにすごかったらしい。

「……それを理由に私を引き込もうとするのはやめてよ、ヘンリ。」

「もちろん、私だって嫌われるのはイヤなもの。……あ、でも！ 身分を買えた時は私が主催する舞台に出てくれないかしら!? あなた主演の舞台……、ふふふ！ 趣味が実益を兼ねるってのはいつでもいいものね！」

「ははは……、仰せのままに、マダム。」

深く、礼を返す。

実際、私が今ここにいるのは彼女のおかげだ。富裕層、特に貴族の方々からすれば私は『珍しいタイプのピエロ』でしかない。奴隷という最下層の身分もあって、どこまで行っても“人間”として見ていない。それは私がファンと呼ぶ人でも同じ。試合とかじゃ興奮して歓声を上げてくれるけど、根っこじゃこっちのことを個人として認識してない、って感じかな。

それを、目の前にいるこの人は私のことを“人間”として評価して、それに見合ったもので私を雇おうとしている。『私のものにならない?』ってのは私の身分を買って、市民にしてあげる、ってことだ。代償として一生この家に仕える、ってのが条件だけだ。

……正直まだ私の主人が前のオーナーだったり、私自身の貯蓄がな

ければすぐに飛びついていた話だ。しかも普通は一度断ればそれまでだけど、この人は何度も誘ってくれている。ほんとにね、頭が上がるらない。

だからまあ基本この人のお願いはなんでも聞くんだけど……。

「ところでビクトリア様？　話は変わるんだけど……、私のものにならない？」

「だからなりません。」

流石にちよつと勧誘が多くないですかね？

8：取引のお時間

「ああそうだアル。」

「ふあい？」

ヘンリエツタ様のところから帰ってきた後、宿舎で夕食を摂っているときにアルに話しかける。

ちょうどタイミングが悪かったみたいで、口の中に色々突っ込んでる時に話しかけちゃったみたいだ。まあ今日は一日中隅っこの方で立ってたり、ヘンリエツタ様に言われて私の膝の上に座ったり、飲んだことのない高い紅茶とかも飲んで大変だったからねえ。帰りの馬車で『頂いた茶菓子絶対高くておいしいはずだったのに緊張のせいで味どころかどんなの食べたかすら覚えてない！』って嘆いてたもん。

「ビクトリア」を演じてる師匠からすれば、『もっかい基礎から見直してきなさい！』って感じだったけど、あれはアレで可愛かったから花丸満点だ。今日は疲れただろうしたくさん食べて寝るんやど……、つと、本題忘れるところだった。

「飲み込んでから話すね。」

「あ、ふあい。……飲み込みました。」

「明日、オーナーのところに行ってくるからアルちゃんはお休みね。どうする？ 私について来るか、タクちゃんところに交じって練習させてもらうか。」

オーナーには普段の業務連絡と来月の試合、その対戦相手についての相談。あと一番大事な剣神祭への出場のことを話そうと思ってる。もちろんその後の話も。なのでアルちゃんには難しい話ばかりになるだろうし、彼女が付いてきても時間の無駄なところある。なのでそこら辺は自由にさせたいのよね。

できるならばまるっきりのフリータイムにしてあげたいんだけど、

色々と暴れまわった私の関係者である彼女は、たとえ宿舎にいたとしても安全ではない。私が守れる場所にいるか、他の安全な場所に預けるか、だ。

「……ビクトリアよ、その話全く聞いてないのだが?」

「まあ今言ったからね、タクちゃんも明日試合ないしどうせ暇でしょ。んで、どうするアルちゃん?」

「……………その、タクパルさんには申し訳ないんですが。そちらの練習に参加させて頂いてもいいですか?」

お? お? アルちゃんがちゃんと言ってる!? おお! お師匠様、アルちゃんの成長の瞬間に立ち会えましたよ! ちよつと『私じゃなくてタクちゃんを選ぶのね! この泥棒筋肉ダルマ!』って気持ちはあるけど、ちゃんとお願ひできたのはえらいねえ! ご褒美に晩御飯のお代わりあげちゃう……、え? いらない?

「構わん。一人増えたところで訓練に支障は出ん。だが、そのの礼儀を知らぬ師匠の様な速度を活かした戦い方は教えられんが……、それでもいいか?」

「は、はい! この前思いつきり負けちゃったので、少しでも糧にできたらと……。よろしくお願ひします!」

「…………あれ? 私今デイスられた?」

ま、たまには違う角度から剣を学ぶってのもいいでしょう。タクちゃんになら任せられるしね。もしよくわからん復讐者とか、闇討ちマンとか、タダの変態とかがやって来てもその有り余るマッスルで粉砕してくれるでしょ。

「ビクトリア、それで…………」

「私もそっちのお弟子ちゃんたちの訓練を一日見てあげるつてのと、食糧庫の方で保管してもらってる私名義の果物類を今日明日解放つ

てのは？ 悪くないと思うけど。」
「話を遮るな、まあそれで構わんが。」

はい、交渉成立く。

やっぱ人間たまに柑橘系の酸っぱいのとか欲しくなるよね。この前ちようど収穫期だったみたいで結構な数を貢いでもらったんだよね。私とアルちゃんだけじゃ消費が追いつかなさそうだし、交渉のカードとして使えるときに使つときましよう。腐つて捨てちやうつてのが一番ダメだしね。

それに、彼もどちらかと言えば狙われる側だ。私みたいに多くの人の眼を集めるタイプではないからその数は少ないけど、何かと襲撃された経験はあるだろう。単なる修行を見てあげる、つてだけの取引なら私が彼の弟子に剣を教えるだけで等価交換になるんだけど、今回は護衛の意味も兼ねてるからね。その分お礼もアップつてわけ。

ま、普通ならこんな弱み見せたら色々吹っ掛けるのが“普通”なのに、果物だけで引き受けてくれる彼つてほんと善人だよね。

「じゃ、お願いねタクちゃん！」

はてさて、上手くいくといいんですけど。



とまあそんな善人にアルちゃんを預けてやって来たのはウチのオーナーのところだ。

事前に今日お邪魔する、つて連絡はしてたので顔パスで彼の屋敷の中に入っていく。ヘンリエッタ様の屋敷に比べればちつぽけだけど、仕事場を兼ねた彼の家は周りの家と比べれば大きい方。まあ、儲けるのよね。

そんな彼はまあ悪人、つてほどじゃないんだけど……、良くも悪くもお金で物事を判断してる。守銭奴、つてやつだ。ビジネスパートナーとしては良いんだけど友達にも上司にもいてほしくないタイプ？ まあ『剣闘士のオーナー』で考えれば格段にマシな人ではあるんだけどさ。

「ハイ、ご主人。元気して……、はなさそうだね。」

「ん……、ビクトリアか。今作業中だ、そこで待て。」

神経質そうな顔をしていて、何かの取引でも控えてるのかずつと書類とにらめっこしている。こいつが私の現オーナーだ。彼の執務室には結構な書類の山が出来上がって、彼の使用人だか奴隷だか単なる部下だかはわからないが結構な人数が出入りしている。大変そ。

まあただ待つてる、つても暇だし勝手に書類の山の一部を手に取り内容を見てみる。……ふむふむ、なるほど？ 海運関係の書類ね。お得意様相手に大量の武器や食糧を運ぶつて内容だ。結構大きな案件らしくパラパラとめくつただけで、とんでもない金額の取引になっているのが解る。船やっているとその分メンテ代とか人件費とか事故にあつた時の費用とかデカいだろうけど、その分実入りが良いんですねえ。

「……勝手に見るな。それで？ 何の用だ。」

「定期連絡とちよつとした、お・ね・が・い？」
「聞こう。」

最初に定期報告、まあ私が昨日やったみたいなお宅訪問で手に入れた情報とかをご主人と共有したり、新しい商品のアイデアとかを話したりする奴だ。あ、あとアルちゃんの修行の成果的なものね？

『自由権』での報告だけど特に目新しいのはナシ、しいて言うならヘンリエッタ様から例の伯爵が死んだつて聞いたくらいかな？」

「北部の最前線に送られたあの方だろうか？　こちらでも把握している。」

「ならいいや、じゃあ次。」

彼から私の商品、サイン色紙とかそういうのね？　その売れ行きを聞きながらどの商品が続けてどの商品を下げなのか、そのすり合わせをしていく。彼も彼で調べてるみたいだけど、どれがファンの心に刺さるのか、とかは私の方が詳しい。こつちじゃこんな商売私が始めるまで、ブームになるぐらい大規模なものはないから、私のアドバンテージが光るわけよ。

あと、こんな新製品の提案とかも。

「指輪にお前の名を彫る？　確かに技術的にはまあ可能だろうが……。」

「そ、最初はコインとか考えたけど絶対勘違いされて捕まるでしょ？　独自貨幣の密造で。なんで指輪とかに私の名前入れて売ったりしたらいけるんじゃないかなあ？　って。細かい装飾とかを更新しながら売れば結構いけそうじゃない？　あと購入者の名前も一緒に彫るとかさ？　……あ。やるなら設計に私噛ませてよ？」

「……『ビクトリア監修の指輪』、か。後日試作品を送らせる、詳細を詰めて置け。」

「りよー。」

お次は私のこととかアルちゃんの育成状況の報告、ついでに来月の試合を誰と組むかってのも詰めていく。普通は先代みたいにオーナーが勝手に決めるし、私やタクパル以外の試合だったらこの人が勝手に決めちゃうんだけどね。

「この前の挑戦試合だけど、気分悪くなるからああいうの数減らしてくれない？　『ビクトリア』のイメージ的にも犯罪者とか魔物相手の方が演じやすいんだけど。」

「無理だな、可能性の低い賭けだとしても道があるのなら突き進む者はどこにでもいる。名前が売れている者を倒せばその者が持つていた名声をそのまま引き継げるとなれば減るわけがあるまい。」

「……私殺せば逆に批判食らいそうだけどねえ？」

「それが解らんオーナーも多いのだろう。……まあ要求は理解した。」

後は軽くアルちゃんのことを。彼女は普段通りとてもかわいくて、ちよつと意地悪した時の反応とかとても頬が歪んでしまうくらい愛らしくて……、え？　そういうのじゃない？　実力？　なんだそつち？　もう、オーナーったら紛らわしいんだから！

彼女の今の力量だけど『同世代ならまだ勝てる。』ってレベルかな。剣も私のじゃなくて、自分にあつたものを探そうとしてるみたいだし。このままぬくぬく成長を促してあげられればちゃんと花開くと思うよ。

演技の方だけど、まあ何かに追い込まれない限りは大丈夫そうかな？　こつちも年齢を考えればとても頑張ってる。まだ私の後を任せられるってほどではないけど、私の訪問についてくるとかして場数とお貴族様とかの対応を覚えていけばまあいけるんじゃない？　正直な話、もし彼女が私を継ぐとしても同じようなキャラクターならウケないと思うのよ。だから彼女だけの仮面を見つけないといけない訳だから……、そこら辺考えるともうちよい、かもね。

「了解だ。指導方法はお前に任せている、何か必要な物があれば相談しろ。」

「はいよ。」

さて、いつもの定期連絡で話しておくべきことは全部やった。

こつちからが本題だ。

気合入れますよー！

「それで？　お願いとはなんだ。」

「私の買取の話。」

以前、私の値段は2億ほどって話をしたと思う。そしてそれが時価って言うことを。

時価ってのは厄介で、その時と場合によっていくらでも変動する。もし私がどっかの試合で腕でも持っていればガクンと落ちるだろうし、剣神祭とかで優勝すればまたドカンと上がるだろう。まあ言うてしまえばこの『時価』ってのは、やろうと思えばその奴隷のオーナーが自由に変えることができるのだ。

この奴隷は私にとって非常に有益で、思い出に残る存在のため評価額をあげる、とかね？

自身が保有する奴隷を販売する時、その値段をつけるのは所有者であるオーナーだ。もちろん基本の評価額、つてのはあるだろうがそこに付けたそうと思えばいくらでも付け足せる。

普通の取引でそれをやれば嫌われること間違いなしんだけどね。奴隷が自身を買い戻す場合つてのは、その契約が完了するまで身分の差は変わらない。つまり奴隷側がいくら声をあげようともオーナーはそれを無視して値段を跳ね上げることが可能つてことだ。自身の所有物がなんか喚いてんな、でおわり。

ほんとはオーナーの目の前にドン、つとお金おいて『じゃ、そういうことで。』みたいな感じにかっこよく決めたかったんだけど……、人生そう上手くはいかない。というわけで持てる手は全部使っちゃおうの時間だ。

「詳しい話の前にコレ、読んで？」

奴隷とその主人という身分の差のせいで発言権がもらえない？

ならもつと権力を持っている人の助けを借りましょう。『虎の威を借りる狐』作戦だ。

「これは……。」

「ヘンリエッタ様からご主人宛てのお手紙♡、私とアルちゃん。そして私が関わってる事業のすべてを3億ツケロで購入する、ってもの。」

私が関わってる事業のすべてってのは文字通り。さっき言ってたサインとかのグッズを販売する権利とか、握手会とか自由権のチケツトとか、ヘンリ様がやろうと言ってた舞台とかの商品だけではなく、彼がその商品を売るために開拓した販売ルートや仕入れ先などを指している。3億ツケロでそれ全部ヘンリエッタにちょうだい？　っ
てお手紙だ。

「……あの方の入れ込み方は相当と思っていたがここまでとは。」

「どう？　受け入れる？」

「はッ、選択肢などないだろうに。」

実際、選択肢なんかはない。目の前のオーナーは確かに大商人だ。この帝都だけでなく多くの場所でその経済を担っているし、政治にも多少口出しできるくらいには影響力もある。だが、その影響力を得るために一番多く付き合っているのがヘンリエッタ様がいる『クライズ元老院議員』家を頂点とした派閥だ。その奥様である彼女の影響力は非常に大きい。一言声をあげれば彼が築いたものは一瞬にして消え去る。最悪尊き者への反逆罪とかで国外追放とかもあり得るかもしれない。

彼女は人が出来ているのでまあそんなことはありえないが、他の貴族は普通にそんなことをする。彼女の目の届かないところで暴走した他の貴族がオーナーに権力で殴りかかる、ってのもあるかもしれない。

つまり、このお手紙はお願いではなく命令に限りなく近いもの。

例えそれが3億ツケ口ぽちじや釣り合わないものだとしても、売らなくてはいけない。仕入れや販売のルートにどれだけつぎ込んでいたとしても、これから私がより多くの金を生み出すとしても、その後継であるアルも同等以上の金を生み出すとしても、売る以外の選択肢は彼に残されていない。断れば全て失うのだから。

「ま、そんなお困りのご主人様に、愛しい愛しいあなたの奴隷ちゃんから助け船を出してあげちゃいます。」

懐から出すのは、もう一枚の紙。

「契約書、ちゃんと隅々まで読むのよ?」

内容はこうだ。私とアルちゃんの値段を2億ツケ口と1000万ツケ口で固定し、この購入者を私。ジナだけにすること。その代わりとして私がその後市民になったとしてもオーナーはこれまで通り“ビクトリア”の商品を発売することができる。また私が“ビクトリア”として何らかの事業を起こすときは必ずオーナーがそれに参加することができる。

ま、簡単に言うと『時価やめてくれたら今後もグッズとか好き勝手出していいよ! あと剣闘士やめても“ビクトリア”は続けるからその商品とか事業に関わってもいいよ!』って内容だ。ちなみに契約の立会人としてヘンリエッタ様の名前と彼女の家の印が記されている。つまりこの契約は彼女が保護しているものだから、簡単には破ることはできない、って寸法だ。

「……なるほど、あえて受け入れられないような要件を突き出した後に、本当に飲ませたい要求を差し出す。よくある手口だ。それで? あの方には何を求められた?」

「そんなに大きいものは要求されてないよ? 『三部作を大劇場で上演してやるわア!』って息巻いてたぐらい。」

まあ実はそれ以外にも色々あるんだけど……、そこら辺はもうこの人には関係ないから言わない。昨日アルちゃんが固まってる時に、このことを彼女に言ったらすごいスピードで用意してくれたからね。これまでの恩もあるし、彼女のものにはならないけど私に返せるものなら返さなきゃ。

「そうか……。はああああ、全く。父がお前を剣闘士などにしてしまった理由が解らん。おい、今からでも商人になる気はないか？ もちろん解放後でもいい。お前なら大成できるだろうよ。」

大きなため息をつきながらその契約書にサインして私に投げ出すオーナー。はい、これで道が開けた。私の勝ち！ 何で負けたか明日までに考えて10万字以上のレポートを提出してください！ あとヘンリエツタ様ありがとう！ あなたのおかげ！ もう足向けて寝れない！ ヘンリ愛してるよ〜！（愛してはない。）

「ご勘弁、仕返しされそうな上司の下じゃ働きたくないんでね。」

「まあそう言うだろうと思っただが……。それで？ 2億1000万ツケロはどう用意するつもりだ。」

「貯蓄はあるけど残りは剣神祭で。」

「……正気か？」

ま、そういう反応になるよね。明確なリスクを嫌ってこれまでずっと参加してこなかったお祭りだもの。というかオーナーもオーナーで『参加させる意義がない。』ってずっと言ってたし、私もその賛同者だった。けどまあ……。アレに勝てたらちよいどいい感じにお金が用意できるんですよ。それに勝てば、その後のグッズとかの売れ行きが絶対良くなる。オーナーにとっても悪い話じゃない。

「確かにリスクはあるけど、勝てる見込みはあると思うよ。」

「……………私は反対だが、それでも出るのか？」
「もちろん。」

少し時間をくれ、と言い眼を閉じ思考を回すご主人。契約は成立したが私が金を用意するまでは奴隷と主人の関係だ、最終的な決定権は彼にある。もちろんヘンリエッタ様の影をちらつかせれば押し通すこともできるだろうが、奴隷解放後もこの人とはビジネスパートナーとして付き合っていく予定だ。あんまり遺恨の残るようなことはしたくない。

「わかった、許可する。賞金もそうだが優勝した場合のリターンは非常に大きい。…………お前がいけるといふのなら、いくことにしよう。」

「ほんと！ いや、悪いねえ！」

「だが！ 剣神祭に出るとなればこちらも用意しなければならぬこともある、それに少しでもお前が死ぬリスクを減らすべきだ。」

…………え！ も、もしかしてオーナーってそこまで私のことを!? 死んじやったら悲しくて毎日枕を濡らしちゃうってコト!? ご、ごめんなさいオーナー。私心に決めた人がいるの！ だからあなたの気持ちには…………、応えられないわ！ ところで私、心に決めた人って誰です？

「故に、今後剣神祭までの試合は数を減らす。自己の鍛錬を行え。」

「え、無視？ ビクトリア様とつても悲しい…………。」

「私は剣について全くわからないのでな、違う方向から支援することにしよう。」

私の渾身のボケを完全に無視しながら何かしらの書類を机から取り出すオーナー、そこにサラサラっと文字を書いた後に封をして私に投げ渡してくる。コレは？

「教会への紹介状と援助についての書類だ。おつかいっいでに、自身の能力について改めて教えてもらってくるといい。」

9：見てもらおう

「久しぶりに町の中を歩きましたが、やはりビクトリア様の人気は……、色々とすごいです。はい。」

「ふふ、ありがたい限りだよ。……ん？ ああサインかい？ もちろんいいとも。子猫ちゃん、君の名前を覚えてもらっても？」

今日も「ビクトリア」様は絶好調。勇気を出して話しかけて来てくれた女の子が差し出してくれた色紙にサインと彼女の名前を書いてあげる。いつも応援ありがとね、君。ん？ 握手？ もちろん。

仮面を被るのは結構疲れるものだけど、町中を歩く場合はヘンリエッタ様の所みたいにお貴族様のことを考えなくてもいいから楽な方だ。なにせ転がっている命の危険が背後からやってきそうな闇討ちクンぐらいしかいらないからね。そんな悪漢程度何しようが攻撃される前に制圧できる。それに街中での即興ショーってことで新たなフアンの獲得も望めるからね？ むしろウエルカムだ。

「わ、わたし！ 一生この手洗いません！」

「それはちよつとダメじゃないかな？ ……次会ったときもちやんと握手してあげるから、約束ね？」

耳元でそつとささやいてあげる。あとはにこやかな笑みを浮かべて軽く手を振り、目的地へと向かうだけ。まあマジレスするといくら魔法があるとは言え感染症対策ってのはやっておいて損はないんだよね。絶対私が知らない異世界特有の病気とかあるし、体が資本な私たちは気にしすぎるくらいがちよつどいいのかもしれない。

つと、話を戻そう。

普段宿舎から出ることがない私たちがお外を歩いているのは、昨日ご主人から受けたおつかいのお仕事を終わらせるためだ。正確には教会で私たちの能力を確かめてもらうついでに、その調査へのお礼も兼

ねた寄進をご主人の代わりに私が行う、って感じになる。

「……にしても、教会か。アル、君の生まれの地には有ったかい？」
「はい、どこの村にでもあるような小さい建物でしたが。……ということとは？」

外行きモード、私がビクトリアを演じているようにアルちゃんも普段とは違う話し方をしている。宿舎とは違って何処に誰の耳があるか解らないからね。アルちゃんには悪いけど、これも演技の練習ってことで。

にしても教会かあ……、実は私行ったことないんだよね。

裏の闘技場とかで活動してた時期はマジで生き残るのに必死だったからそんな暇なかったし、表に出てからも試合やら鍛錬やらビクトリアやらで休む時間はあつたけどわざわざ教会に遊びに行こう！ってことにはならなかった。まあ出身が前世日本で無宗教者だからねえ……、休日には神に祈りをささげに行くって思考にはならない。

「ああ、私が住んでいた所にはなかったよ。剣闘士になってからも行く機会はなかった。だからこれが初めてになるのかな？ ……つと、ここか。」

比較的大きい建物だったので少し離れた場所からも見えていたが、ようやく到着した。やっぱり帝都にある教会ってことで周りにある建造物よりも大きめ。正面から見たおかげでようやくはつきり分かったけど、この世界の教会にも十字架の様なものが建物にくっついてるみたいだ。十字架の両端の部分が上に向けてU字になっている。ギリシャ文字のプサイってやつが一番近いかな？

「おお……！」

「アルの生まれの教会もこんな所だったかい？」

「全然ちがいつ……、いえ。もつと寂れた雰囲気でした。……帝都の

教会はすごい、と聞いていたのですがここまでとは。」

なるほど、アルちゃん的にはすごい教会、って感じなのね。……ん？ 私？ いやまあ建造物を見て『凝ってるなあ』とか『お金掛けてるなあ』ぐらいは解るよ？ でもその意匠に込められた宗教的な意味は全然分らないんだよね。この世界で生活してて気が付いたことなんだけど、どうにも帝国出身の人たちって大体同じ教えを信じてるっぽいよ。つまりみんなが幼少期から教えられた神の教え、みんなが知ってて当たり前の常識を私は知らない、ってわけ。

まあ何を警戒してるのかというと……、異端扱いされて火炙りとか磔にされることだね。

いやだってさ、考えてもみなよ。前世の世界でも宗教って色々あるじゃんか。過去を遡れば異端者をブチ殺したり、異教徒を殺しに行ったりとか色々やってたじゃん。自分たちが信じる神以外は悪魔、悪魔崇拝者は綺麗にお掃除して神様に褒めて貰おうぜ！ とかしてたじゃん。

もしこの世界でも同じノリが通用するんだったらさ、なんかミスした瞬間に『こいつ神の教え知らんやん！ もしかして悪魔か!? 燃やせ！』とならない訳がない。というかもつとひどいことになりそう。だって剣闘士が毎日殺し合いをしているのを娯楽にして楽しんでる世界だぜここ！ もし、もし私がそういう風に勘違いされちゃったらさ！ これまで仲良くしてた人とかにもさ！

『師匠って悪魔崇拝者だったんですね、失望しました。早く死んでください。』

『タクちゃんだと？ 気安く呼ぶなこの異端者め。』

『ビクトリア様。いえ、貴様は神の敵だったのね。死んでくださる？』
『ご主人くんはお金をたくさん稼げるほうの味方だっぴ！』

ってことになっちゃうわけでしょ！ そんなの絶対いやじゃんか！
折角奴隷から脱却できる目途が付いたってのにここでおしまい

とか！ それもみんなに汚らわしいものを見るような目でこんな言葉吐かれるんでしょ！ マジで嫌！ ……ところで最後の奴、誰？

「ここで立ち止まっても他の人の邪魔になる、入らせてもらおうか。」

「はい、ビクトリア様！」

まあ実際のところこれまでの私の振る舞いで宗教的な問題が発生してなかったり、剣闘士の知り合いで『休日は教会でお祈りをささげたいんですけど休日がないです！ ぴえん！』って言ってる奴はいなかったのでもまあ教義的には結構緩いんじゃないかなあ？ と期待はしている。

だけど今日お邪魔するのは教会、神の家だ。外じゃ大丈夫なことでも、教会の中ではダメな事だったり、教会で必ず行わなければならぬ動作みたいなのがあっても可笑しくない。ほら日本で言う神社の道の中央は神様の通る道だから端を歩きなさい、みたいなね？ そう言ったトラップが隠されているかもしれないのを考えると…、この世界の常識に欠ける私が何かとんでもない失敗をしてしまう可能性は大いにある。警戒するのに越したことはない。

「……迷える子羊に優しくしなければいいのだけど。」



教会内に入ると、空気が変わったような雰囲気を感じる。

貴族の館でしか見たことのないような手の凝った装飾が華やか過ぎないように所々施されており、出入り口から少し歩けば多くの長椅子が並ぶ構造になっている。そしてその先。この建物一帯を見渡す

ように鎮座しているのが女神像だ。

大理石で作られたその像は、神を全く信仰していない私でもソレを表現するのに「神秘的」という言葉を使ってしまうそうになる。

「ほわあ……。」

ほら、隣にいるうちの子がほわほわしてる。これが素晴らしい建造物、つてのはあつてみたいね。

私の価値観とか判断基準つてどうしても前世に引つ張られてるし、この世界でも剣闘士としてしか生活してないから解らないことが多い。そんな時にアルちゃんみたいなのこの世界で生まれて生活してきた子がいてくれるとかなり助かるのだ、本人に言ったら『私小さな村の出身ですし、知らないことの方が多いです！』とか言われるだろうが、それでもまつさらな私よりも知っていることは多いと思う。

ちなみに今はこの大広間にある長椅子の端つこの方に座つて教会内を眺めているところだ。お邪魔した時にちょうど近くにいたシスターが私のことを知っていたみたいで、要件を伝えたら『ここでお待ちください。』つて言つて奥の方に消えていったので待機中つてわけ。私たち以外にも椅子に座つて祈りをささげている人とかもいるし、まあ今のところ大丈夫なはず。

「……………」

シスターが消えていった教会の奥の方を見てもまだだれか来そうな雰囲気はないし、隣にいるおのぼりさんもお祈りをささげ始めてしまった。教会内で話し声とかは聞こえないから、多分ここは純粹にお祈りをささげる場所なのだろう。……私もなんか祈つとくか？

正直この世界の神に対しては『何の事前通告もなく、勝手によくわからん世界に連れてきただろお前！』しかも奴隷スタートとかかなに!? ふぎけるな!!』という気持ち強い。いや関係ない可能性もあるだろうし、『加速』というスキルもあるので感謝しているところもある

のだが、スタート時が色々と酷すぎたので神への好感度はマイナスなんだよね。ビクトリアちゃんを攻略したいのならもつとプレゼントちょうだい！

まあそんなわけで祈りじゃなくしてお呪いみたいになりそうなんだけど……、とりあえず軽く目を瞑ってアルちゃんがしているように両指を交差させる祈りのポーズを真似てみる。

(神の声は……、聞こえないか。まあそうだよね。)

純粋なこの世界の者ではない、ってことであつちから話しかけて来てくれるかと思つたがまあそんな都合のいいことは起きないようだ。手を解き目を開けるとさつきシスターが向かつていった方から複数の足音が聞こえてくる。出てきたのは……、うん。あたまつるピカで長いお髭を蓄えたおじいちゃんだ。

「お待ちせして申し訳ない、帝都大聖堂へよくおいでくださいました。では、こちらへ。」

おじいちゃんに連れられてアルと一緒に教会の内部まで足を運ぶ、外から見た通り大きい建物みたいであの大広間以外にも応接室とか色々あるみたいだ。こういう普段入っちゃいけないさそうなところに入るのってなんか緊張するよね。……まあ私の緊張には違うのも入ってますけど。

「お二人はこちらは初めてですか？」

「ええ。」

「はい。」

「そうでしたか、神の家は誰も拒みませんのでいつでもおいでください。……おっと、そういうえば自己紹介がまだでしたな。」

こちらに向きなおるおじいちゃん、名前はレトウスさんというらしい。階級は司教で、この大聖堂でお金のやりくりを任されている人みたい。とりあえず物腰が柔らかそうな人で良かったかな？

「闘技場などは行ったことがないのですが、私でもビクトリア殿のお名前は聞いたことがあります。さぞかしお強いのでしょうか、今日は能力の鑑定ということでしたが……、そちらの方も？」

「ええ、彼女も。アルもよろしくお願いします。」

「かしこまりました。……こちらですね、お入りを。」

通されたのは小さめの部屋。大きめの机に、それを挟むように三人ぐらいが座れそうな椅子があるお部屋。あとは調度品が置かれている程度？ まあどこにでもありそうな応接室だ。能力の鑑定って言ってたから何か道具でも使うのかと勝手に考えていたけど、違うのかな？

レトウス司教に促されるままその椅子に座り、対面に彼が腰かける。

「ではまず簡単な説明をさせていただきます。」

能力の鑑定ってのはなんでも長年教会で修業した人が使える技能らしく、この目の前のおじいちゃんも使えるものらしい。魔力を消費して使う魔法とかと違い、私が使う『加速』みたいなスキルのような立ち位置のようだ。

それでまあ鑑定、と言ってるけどよくゲームとかであるステータスみたいなのが見れるわけではないみたいでね？ その人が持っている

る素質とかスキルとかが解る程度らしい。このおじいちゃんの場合だと『治癒魔法』『算術』『聖術』、みたいな感じ。なんでも、よくお貴族様とかが子供の将来の指針を固めるために調べに来るんだって。

「と、言いましても才がない方面で成功を収める方もたくさんいらっしゃいます。神から与えられた才ではありますが、それを活用するの、しないのもその者の自由であると神はおっしゃっています。」

「なるほど……。」

「また後天的に増える場合があります。私が信仰の道を歩み始めたときは『算術』のみでしたが、ここで学びを深めることで『治癒魔法』が、神に奉仕することで『聖術』が大きく示されるようになりました。ですのでも度々も言いますが、参考程度にとどめておくのがよいでしょう。」

なるほどねえ。つまりゲーム的に考えると攻撃力とか防御力みたいなステータス欄は見れないけど、それまで習得した技術とかのスキル欄みたいなのとか、成長補正が掛かってるスキルとかが見れるってわけだねえ。うくん、便利。

ちなみに『治癒魔法』みたいな魔法系は教会以外でも学ぶことはできるけど。神の奇跡に近い『聖術』ってやつが使えるようになるには教会で頑張っご奉仕してね♡ ってことらしい。……治癒魔法って私でも使えるかな？ 出来たら戦略の幅増えまくるんだけど。

「では実際にやってみましょう、ビクトリア殿。右手をこちらに。」

言われた通りに手を差し出すと彼がその手を自身の手の平の上に。手の甲を上を晒すようにする。そして何か呪文、聖句だろうか？ そのようなものを唱えれば、急に私の手が青く光り出した。

そして浮かび上がるのは青い魔法陣の様なもの。いくつもの円が重なり合って宙に浮くように表示される。

……やばい、いまちよつとすごく感動してる。なんか初めて異世界

ファンタジーに触れちゃってる。だってこれまで血みどろの剣しか握ってなかったのになんか手から魔法陣みたいなの出てるんだよ！
いやすごくない!? 確かに私の体どうなってんの、って気持ちはあるけどそれ以上に心の中の厨二病君が暴れ始めてる！

「おお、やはりとても良い才を持たれているようですね。では今から読み上げますので……、アル殿。字は書けますかな？ よろしければこちらに書き留めて頂きたい。」

「あ、はい！ させて頂きますー！」

紙と筆記具を手渡される彼女、というかこのおじいちゃんアルの書くスピードに合わせてゆっくり読み上げてるあたりやっぱいい人だな？ オーナーの知り合いで教会の会計を任されてるって聞いたときは『もしやあの守銭奴の同族？』って思ったけどただの好々爺じゃん。心配して損した。

んで、書いてもらったのがこちら。

『加速』

『剣術』

『体術』

『演技』

『偶像』

『丈夫』

私が見つ才の大きい順に並べたのがこれらしい。……うん、なんとなくか想定通り。この魔法陣みたいに浮かび上がる輪つかの大きさが才の大きさを表しているみたい。やっぱずっと使い続けてた『加速』ちゃんが一番大きいのね。

「初めて見る才ですが、この『加速』というものが非常に大きく表されています。大事になさるとよいかと。」

「ええ、大事にします。……ちなみなのですが、私に魔法などの才はあるのでしょうか？」

「……この小さい円たちが見えるでしょうか。」

うん、見えるね。一番大きいおそろく『加速』の円と比べれば豆粒みたいなのが複数。というか一番小さいんじゃない？ ってくらいの円。……もしかして。いや待て、このおじいちゃん才能なくても頑張れば行けるって言ってたよね！ 大丈夫だよね！ そんな悲しいことは言わないよね！

「申し上げにくいのですが、この小さい円が魔法などの才を表しています。修練によって習得こそ可能でしょうが……。」

「やめておいた方がいい、と。」

「老婆心ながら……、とても厳しく割に合わぬ道、とだけ。」

……バイバイ、私の異世界魔法生活。

い、いや逆に考えるのよ私。実る確率が薄い物事に時間を浪費するってことがなくなっただ。今まで通り自分の強みを伸ばしていく、その後押しをしてもらえたのだと思えば……、いや！ やっぱり私も魔法使いたいのに！

ねえ神様！ 奴隷スタートにしたの許してあげるから魔法ちようだい！

10：アルの才能

「無理、無理かあ……。」

師匠がすつごく小さな声でそうつぶやく。……そんなに魔法使いたかったのかな？ でもまあ気持ちはすごくわかる。私ももつと小さいころ、村にいたころは使えたらいいなあって思ってた。だつてすごくかっこいいし、いろんなことがラクチンになる。井戸からの水汲みとか、火起こしとか、もつと大きな魔法が使えれば魔物を退治したり、動物を狩ったり。

でも、現実はその甘くはない。

魔法つてのは力の象徴だ、だつて魔力は使うけど遠いところから弓よりも強い攻撃で相手を一方的に叩くことができるんだよ？ 師匠みたいに認識を超えた速度で動ける人は別として、大体の人間はそれでやられちゃう。この国の貴族とかがそれを見逃すわけもなく……。だいぶ後、ヘンリエッタ様に聞いたことなんだけど、この帝国ができたときに魔法を使える人を徹底的に囲い込んだらしい。

国の保護下において、貴族や騎士に任命する。後はお給料とかで適切な評価をしてあげれば魔法使いが離れていくことはない。あとは結婚とかそういうのをずっと繰り返していけば……。魔法は権力の象徴。貴族の特権になっていく。実際私も村にいたころは『魔法はお貴族様のもの』って聞いてたし、農民の出の人間が使えらるわけがない、って思ってた。

まあ一応抜け道みたいなのがあって、教会とかに入って修行を積みば『治癒魔法』とか学べるみたいだし、時たま平民が魔法の才に目覚めることもあるみたい。でもやっぱりそんなのは特殊な例であつて、私たち庶民にとって魔法は全く馴染みのないものだった。

「ま、まあビクトリア殿。そこまで気落ちなされるな。ほら、私もここまで大きい才はそうそう見たことがありません。詳しくはありません

んが剣闘士として長く戦い続けていらっしやるとのこと、ここまで積み上げてきた努力がしつかりと形になってるのは素晴らしいことではありませんか。」

「……すみません、柄でもないことを。」

「いえいえ、お気になさらないでください。それに、ここで見聞きしたものは全て他言無用となっっていますから。ご安心を。」

わ、師匠が司教様に慰められてる。無茶苦茶珍し。

「他言無用、ですか？」

「ええ、才の鑑定は貴族の方々もご利用になるので自然と。ここでの出来事に関しては誰にも話さず神の許に召されるまでしまっておく、そう神に誓うのが習わしなのです。」

「なるほど、そうなのですね。」

これも後にヘンリエツタ様に聞いた話だけど、魔法の才に秀でた者たちで固められたお貴族様でもたまに魔力が少なかったり、才能が全くない人が生まれることもあるらしい。そこを弱みにされてネチネチと攻撃されるのを防ぐために、そう言う取り決めが為されるようになったんだって。

「では、次にアル殿の才を調べさせていただきます。ビクトリア殿、書き留めて頂きますかな？」

「もちろん。」

「ではアル殿、お手を。」

「あ、はい！ よろしくお願いしますー！」

言われた通りに腕を差し出す、思えばこの時は無茶苦茶緊張したなあ。だって自身の才能を調べてもらうってとってもすごいことだよ？ そういう『聖術』がある、ってことは村にいた司祭様に聞いたことがあったけど、大都市にいるような長年神のために働いて来たよ

うな人でなきや使えないすごい技って言われてたんだ。そして、それをお願いできるのはお貴族様くらいのお金持ちぐらい。私には一生縁のない話だと思ってた。

本当に、奴隷になってから。いや師匠と出会ってからいろんなことが変わった。

師匠の手に現れた大きな円と、それを見た司教様の反応。その後だから自分は師匠よりもっと小さいんだろうな、とか。もし全然才がなかったらどうしよう、とか。いろんなことを思いながら目の前の彼が聖句を唱え終わるのを待っていた。そして、青い光が私の手を包み、円が浮き上がる。

「これは……。失礼、先に才の方を述べさせていただきます。」

現れたのは、三つの大きな円。師匠の『加速』というものよりは小さいけど、それでも思っていたよりはとても大きい。想定外のことに目を大きくしていると、急に目の前の青い円が消える。どうやら私がびっくりしている間に鑑定が終わっていたようだ。……あ、そうだ師匠！　どんなのがあるか書いてくれたんですね！　私にも見せて……。

多分、あんな師匠の顔を見たのは後にも先にもアレが初めてだっただろう。

そこには苦虫を噛み潰したような、だけど同時にもっとおいしい甘いものを食べたような。無茶苦茶複雑な感情が心の中で渦巻いているのが一目でわかるような顔をした彼女がいた。師匠は何も言わず、書き留めた紙を渡してくれる。

『眼力』

『魔法』

『剣術』

「……………え、魔法！」

「はい、しつかりとその才が浮かび上がっていました。失礼ですがアル殿の出身は……………」

「あ、はい！ 西部の小さな村の出身れふ！」

私に魔法の才がある。昔村の友達と遊んだ魔法使いごっこ、それが現実のものになる。お貴族様しか使えないようなすごい能力が、私にも使えるかもしれない。そう考えたら隣でなんか真っ白になってる師匠のことも視界に入らなくなつて、気分がとても上がってしまう。そのせいで思いつきり舌をかんじやつたけど、司教様が優しく窘めるように落ち着かせてくれた。

「ゆつくりでいいですからね。それでご家族に貴族や騎士の方はいらつしやいましたか？」

「い、いえ。両親は農民でしたし、お貴族様とか騎士様なんか……………」
「となると…………。いやはや、珍しいものを見させて頂きました。感謝を。ですがそうなるとこれまで魔法に触れずあの大きさでしたから…………、その道の修練を積みば大成なさることでしょう。先ほど見たところ、火や水の魔法に対しての適性が高そうでした。そちら方面で学びを深めていくのもよいかもしれません。」

そう言いながら私の才について説明をしてくれる。

私が見つかる才能は『眼力』、『魔法』、『剣術』の順に大きかったらしい。『眼力』は視力とか師匠の言う動体視力とか表してるみたいで、それが一番大きな円を描いていたみたい。それに隣接するように浮かんでいたのが『剣術』で、少し離れていたところに浮かんでいたのが『魔法』で剣の方は成長した痕跡があつたらしく『才を大きくなされたのは非常に素晴らしいことです、このまま頑張ってみるのも良いかもしれませんね。』って褒めてくれた。

「師匠！ 見て！ 見てください！ 魔法！ 魔法って書いてます

！」

司教様のおかげで一時は収まった興奮だったけど、紙に書かれた文字を眺めていればすぐにそれは戻って来てしまった。嬉しさのあまり師匠に報告しようとそつちの方を向けば……、そこに居たのは明らかに口からなんかヤバいのが出てる真っ白になった師匠だった。

「ヨ、よかつた、ネ……。」

「ししよお!？」



真っ白になって気絶した師匠に、治癒魔法をかけてくれた司教様に二人でお礼を言いながら話を戻す。

「にしても魔法かあ……、ウチのオーナーに聞けば学び方とか解るか
な？」

「確かにあの方の人脈なら教本などを手に入れることは可能でしょうが、やはり独学では難しいこともあるかと。私は攻撃系の魔法を修めておりませんので詳しいことは解らないのですが、初めてその力を使用した時に魔力を暴発させてしまうということがあるそうです。ですので可能であればその道に詳しい方に教えを受けるのが適切かと。」

教えてもらう、か。師匠には無理だし、かといって教えてくれそうな剣闘士の人なんていない。というか魔法使えてて奴隷になつてるような人っていないんじゃないかな？ 冒険者とかには引く手あま

ただらうし。となると……。

「……ヘンリエツタ様かなあ？　また借りが増えちやいそう。アル？　わるいけど当分その才能はしまっておいてもらうことになりそうだけどいい？」

「あ、はい！　大丈夫です！」

確かに魔法の才能が私にあったことはすぐくうれしかったけど、今の身分は剣闘士で、多分これから私が死ぬまでずっとそう。師匠が当分、つて言ってくれたつてことはいつか何かの形でまたお世話になるのかもしれない。今が十分すぎるほど恵まれてるんだ、これ以上望んだら罰が当たっちゃいそう。それに、師匠に教えてもらってる剣だつてまだまだ。両方一緒に極められるほど私は器用じゃないし、今は剣に集中しろつてことだよ。

「……あれ？　ちよつと待つて、師匠？　今完全に”ビクトリア”じゃなくて、”ジナ”だつたような……？」

「ん？　ああそれ？　いやもう演技する気力が失せたというか、『演技』とか『偶像』とか見られちゃったからもういいかなつて……。」
「ええ……。」

「ほつほ、ご安心ください。私も神の怒りに触れるのは怖いのですが、この部屋で起きたことは誰にも言いませんとも。」

確かに司教様すごいよさそうな人だから大丈夫だとは思うけど……、それでいいんですか師匠？　演技の誇りとかそういうの……、ずっと人前で”ビクトリア”で居続けたのに完全に崩れちゃつてる。いやまあ私、全然師匠みたいに演技とか出来てないですから意見できるレベルじゃないですけど……。

「それにこの部屋には防音の魔石が設置されているので誰かに聞かれるということもありません。」

「だって、アル。」

「師匠がいいならいいんですけど……。」

姿勢を崩し、普段通りの師匠へ。いっつも思うけどこの落差というか、変わりようというべきか。姿かたちは同じはずなのに、別人のように思えてしまう。師匠がどれだけビクトリアという仮面を被ることがうまいのかを理解させられる。師匠には私が『次のビクトリア』に成れるよう剣以外にも演技とかを教えてもらってるけど……、ほんとなれるのかな。

「大丈夫だって、ほら司教のレトちゃんも言ってたでしょ？ 『才能がない道でも成功できる』って。」

「そうですね、それに今回はビクトリア殿に書いていただきませんでした。先ほどの三つの次に大きかったものが『演技』の才でした。ゆっくりと成長してるのかと思います。……ちなみにそのレトちゃんとは私ですか？。」

「そうだよ、可愛くない？ という師匠の言葉をいつも通り聞き流す。……そっか、うん。これからもがんばろ。あといくらレトウス司教様が優しくてもやめておいた方がいいと思います。」

「あ、そうだ。レトちゃんに聞いたかったんだけどさ、私ってこのあたりの出身じゃなくてね？ 住んでたところをここみたいな教会とかなかったせいで神の教えとかさう言うの全くわかんないのよ。悪いんだけど教えてくれない？ 職業柄色んな人に会うからさ、せめて早いところやっちゃいけないことだけでも覚えとかなきや、って。」

「なるほど、そうでしたか。できれば神の教えをそのまま理解してほしいところではありますが……、そうですね。特にやってはいけないことは……、ありません。」

「あれ？ そうなの？」

私が決意を固めたところで、師匠が司教様に質問をしている。そういえば師匠の故郷ってどこなんだろう、教会がないような場所ってあるのかなあ？ 知らない言葉とか色々使ってるしかなり遠くの場所ってことは解るんだけど、師匠があんまり答えたくなさそうにしてるし、ちゃんと聞いたことないや。

「ええ、確かに私たちの様な教えに殉ずる者、まあ聖職者ですな。こちらは教会に入ったその瞬間から様々な戒律があります。しかしながらそれを他の方々に強制することを神は望んでおられません。『そこら辺は自由でいいよ、でも君らは別ね。ちゃんと模範になりなさい。』と神の好物である甘い菓子を食べながら我らに伝えた、と聖書には書かれております。」

「……ええ。」

師匠はびつくりしてるけど、私たちにとっては当たり前のことだ。司教様みたいな聖職者の人とは違い、一般の私たちは毎日お祈りに行く、みたいな教えに熱心な人はあんまりいない。でもちゃんと女神さまのことは信仰しているから奴隷になる前は週に一回は必ず感謝のお祈りしてたよ？ 毎年行われる神様の生誕祭は家族みんなで奮発してお供え物をしてたし。

「おそらくですがビクトリア殿は我ら聖職者の過ちを伝え聞いてしまい、誤解してしまっただようですな。まあよっぽどのことがない限り我らが神が信者の方々に何かをなさる、ということはありませんのでご安心を。」

「……ということは、聖職者の方々って？」

「ええ、お恥ずかしい話ですがかなり神の怒りを受けております。」

お師匠様やヘンリエッタ様から聞いた話なんだけど、教会ってのはやっぱりすごくお金が集まる場所みたいなの。だからそのお金の魔力に魅入られて、もつと稼ぐために悪いことをしようとする聖職者の

人もいるみたい。

それに昔、私の両親に聞いた話なんだけど。私が生まれる前に故郷の村で司祭をしていた人が作物を不正に多く教会に納めさせようとして神罰が下ったこともあったみたい。その時は悪いことをした司祭様の頭上、空から金色の炎が降って来て女神さまの怒りの声と一緒に燃やし尽くされちゃったんだって。

「我らが神が奉仕する者に求めていらつしやるのは絶対なる善なのですが、やはり人は間違ってしまうことがあります。故に数回程度であればお許しくださるのですが……、まあ勘違いしてしまう者もおりまして。」

「……神罰が下る、と?」

「はい。神の炎に焼かれる者や地面に生き埋めにされる者、雷に打たれた者やそのまま空高く投げられ地面に叩きつけられる者など……。先日裏社会の者に資金の横流しをしていた者は内側から破裂し木つ端微塵になったりと。全くお恥ずかしい限りです。」

「ヒエツ。」

創造神であり、絶対神。確かに怖いところもあるけどその分私たちに恵みを下さる存在。それが私たちの女神さまだ。

その後、そのまま帰ることになったんだけど何故か師匠がすごく熱心にお祈りをささげていた。なんでだろう?

「いやちよつと怖くなったから、ごめんなさいぐらいはちゃんとやっておこうかと……。あ、あとアル。帰ったらちよつと話があるんだけどいい?」

あ、はい。大丈夫ですけど……、何の話ですか?

『剣神祭』の話。」

11：約束と、覚悟

さて、『剣神祭』に挑むにあたってやることごとく残っている。オーナーへの確認も終わっているし、自身に眠る才についても調べた。これから何をするのも、どう自身の力を伸ばしていくのかも、定まっている。

残るのは、この愛しい弟子である彼女への説明のため。

「アル、大事な話をするからこっちにおいで。」

「？ はい。」

この子には、まだ説明をしていなかった。普通なら一番最初にするべき存在なのに、……どうしてだろうね。やっぱり、自分が死ぬ可能性があるってのを彼女に説明することが嫌だったからだろうか。この世界に来て初めての私の弟子で、家族であり友と呼べる彼女。この子が私のことをどう思っているのかはわからないけど。やはり、”これから”のことを考え話すとなると、躊躇してしまう。あはは、なにしろ前世でも自分がこれから死ぬかもしれない、なんて話したことないからね。自分の強みを活かせなきゃここまで弱くなるんだ、私。ずっと隠してはいられない、話すなら、準備するなら、早い方がいい。

呼ばれて寄ってきた彼女の両脇を抱え、自身の膝に座らせる。ちょうど、私の顎がアルの頭に当たるくらい。……今はまだ小さいけれど、彼女は成長期の真ただ中。いつの日かこんなこともできなくなるんだろうな、そんなことを考えながら、言葉を紡ぐ。

「アルは……、剣神祭って知ってるよね。」

「はい、剣闘士が参加できる一番大きいお祭りです。」

彼女の体温、生きてる印を感じながら、同じ方向を向く。二人とも、

顔を覗くことはできない。私に、死への恐怖はある。彼女と出会うま
ではずっとそれで生き残ってきた。だけど、今は自分が死ぬことより
も彼女を置いて行く方が辛く感じる。

「出ることにした、私。」

『剣神祭』、剣闘士だけが出場できるお祭り。この国の頂点である皇帝
が主催し、どの剣闘士が一番強いのかを決める。帝都全体で盛り上げ
るこのお祭りの経済効果はひどく大きい。それこそ闘技場は毎試合
満席で、試合に賭けられる総額は天井知らず。普段は剣闘士の試合な
ど見ない者や、他の都市からやってくる者もいる。生み出す金がとん
でもないものになることは簡単に解るだろう。

そんな祭りを、私やオーナーがずっとこれに出ることを下策として
いた理由はたった一つ。この祭りに出場して生き残る剣闘士はたっ
た一人、ということ。皇帝も観に来るのだから下手な剣闘士を出すこ
とはできない、それこそそれぞれのオーナーが持つ最上の剣闘士を出
してくる。その剣闘士をそこまで育てるのにかかった時間、資金、物、
毎日とんでもない量の剣闘士が消えていくことを考えればそのコス
トがどれだけ大きなものであるかは考えずともわかるだろう。

それが、一瞬にして消える。

トーナメントで行われるこの試合は、全てどちらかが死ぬまで行わ
れる。生きるか、死ぬか。それが繰り返され、残るのはたった一人の
剣闘士だけ。3度の飯より金が好きそうなあのオーナーのことだ、彼
から見ればこの祭りなど金をドブに捨てる行為でしかないだろう。
私も、死ぬのはイヤだった。”ビクトリア”という偶像が巨万の富を
生み出していることもある。出るのは、はつきり言って愚策だ。

私はそう、アルに教えた。

「え、でも……。」

「考えが変わったわけじゃない。でも、出ることにしたの。」

私は、一刻も早くこの世界から抜け出すために。この世界で生きる人間たちが蓄積した”この世界”の知識を、私は知らない。いつ、どこで、その猛威が降りかかってくるかわからない。そして、いつ私の体の衰えが始まるか解らない。いつ、ビクトリアという偶像が砕け散るか解らない。ここには前世慣れ親しんだものがない、私はいつだって異物であり続ける。私の”知識”の大半は、役に立たない。

一歩前のことを予測して、対応を取ることにはできる。でも、そこまでしかできない、もっと先は見通せない。

故に、動かないといけない。まだ私が全てを跳ねのける自信がある内に。

「死なないよ、私は。」

死なない、死ねない、死ねるわけがない。

けど、この言葉は何故か、すごく薄っぺらく感じてしまう。心のどこかで、私がそれを否定してしまっているからだろうか。

出場してくる相手達は、誰もがイレギュラー。二分の一の確率で死ぬこの世界を生き残ってきた化け物たちだ。私も、その一人ではある。だが、多くのオーナーが剣神祭に自身の切り札を出場させるために、化け物同士の試合を組むことは極端に少ない。剣神祭の優勝者という称号を得る機会を、大金をわざわざ目先のはした金のために捨てるものなどいないからだ。

つまり、私は化け物との対戦経験がほとんどないと言っている。私のような『スキル』で戦う奴、単純な身体能力で押し切る奴、卓越した技量ですべてを支配する奴。誰がどんな戦い方をするのか全く分からない。……もちろん、そんな化け物たちが試合に出てくることもある。それを見れば情報を集めることもできるだろう。

だが、それは表面的なものだ。

私がそうであるように、化け物たちの対戦相手は一つ格の落ちた者を充てられることが多い。持ち主であるオーナーがその剣闘士を失うことを避けるためだ。そうなる私と私が得ることができる情報は、格

段に少なくなる。私が本来の戦い方ではなく、”ビクトリア”という魅せるための戦い方をするように、手に入れた情報は必ずしも正しいとは言えない。

「……なんで、ですか。」

「この世界から出るため、かな。」

幾ら『加速』があろうとも、ビクトリアを捨て本来の戦い方を使うと、私が勝利を掴み続けることができるかは、はつきり言つて解らない。勝ち切る自信はある、でもそれを証明する方法がない。ただ、今以外はありえないと、思っている。

奴隷である限り、私たちに最終的な決定権はない。いつアルが来てほしくない剣闘士の世界、こちら側に来てしまうのか。私は意見を言うことはできるだろうが、阻止することはできない。……それに、今のオーナーが急に死ぬこともある。そうなれば私たちの所有権は彼の商会の誰かか、後継者に継がれるだろう。次のオーナーが、私にとって都合のよい存在かどうかは解らない。

私は、多分。考えなくてもいい恐怖に怯えている。どうしようもなく、怖い。アルが、死ぬことが。早く、早くこの世界から出ないと、出ないといけない。早くただの”物”から、”人間”にならないといけない。私の中で少しずつ溜まっていたこの想いが、爆発しそうになっている。

これが弾けた時、自分が何を選んでしまうかが全くわからない。ただ、最悪の手段を選んでしまうことだけは解る。

「お、オーナー！ オーナーはなんてー！」

「もう、許可はもらってる。」

私たちの主人、彼には剣のことが解らない。彼が解るのは、この世界を巡る金はどう動き、どうすればより多くの額が自身の周りを回る様になるかということだけ。彼の中で私は、おそらくだけど、大きな

存在になつていゝと思う。

自分からアイデアを出し、それに合わせた演技を行い、結果を出す。出し続ける。この世界には存在しなかつたものを生み出し、新たな市場を生み出した。そして何よりも、その根幹となる剣闘士の試合で、私は勝ち続けた。不敗だった。死ななかつた。……故に、彼の中で私に対する『負けない信頼』が、出来ていたのだと思う。

もう一度言うが、『剣神祭』が巻き起こす経済効果つてのは非常に莫大だ。勝てば巨額の金と名声、負ければ死。彼の頭の中で、私を失うというリスクが、私の不敗によって薄れてしまったのだろう。故に、天秤がこちら側へと傾いた。そして、彼が決めたことは、彼しか覆せない。

「……師匠。」

「大丈夫。」

負ければ、全てを失う。だが、勝てば文字通りすべてを得ることが出来る。

”人間”という身分も、名誉も、金も。そして、それからの未来も。奴隷である限り、どこまでいっても私たちは”物”でしかない。だから、だからこそ、早く。

私が勝てば自分たちを買うことができる、私が勝てば人間になることができる、私が勝てばさらなる人気と名誉を得ることができる、私が勝てばそこから新たな資金を得ることができる。二人でどんなことだって、できるだろう。

「大丈夫だよ、アル。それに、私が死んでも……」

私が死ねば、これまで私が貯め込んできた金は全てオーナーのものになる。それでアルが自分を買い直すことはできない。……だから、彼女。ヘンリエッタ様にすでに頼んでいる、昔から、ずっと。もし、何か私にあつたときは、彼女をお願いします、と。

彼女であれば、悪いようにはならないだろう。そう思い、頼んでい
る。アルが、私の中でかけがえのない人になってから。
そう、言葉を紡ごうとした。

「言わないでください！」

口が、塞がれる。

「そんなの！ 聞きたくないです！」

……ああ、そうだよね。

私だって、聞きたくない。

それに、あなたがなく顔も、見たくない。

「や、約束してください！ 絶対！ 生き残るって！」

「……ああ、もちろん。約束する。」

剣闘士は、傲慢であれ。

決して負けることを考えるな、生き残ることを、目の前の敵を殺す
ことを、考え続けろ。

「約束するよ、アル。」

「……悪いことした、かな。」

溜まっていたものが決壊してしまったのか、ひとしきり彼女は泣いた後、寝てしまった。

私もそろそろ寝た方がいいのだけれど、何故か目が冴えてしまっている。

何もせず、ただ時間が過ぎることを待つ。そうすれば自然と眠くなるだろうが、何もしていない時間がひどく嫌で。あの時のように剣を振るっている。『加速』を発動させ、ゆつくりと時間が過ぎるこの世界で。ただ、振り続ける。

「違う道も、あったのかもしれない。」

剣神祭に出場せず、このまま一人の剣闘士として金を稼ぎ続け、資金が貯まるまで待つルート。ヘンリエッタ様の下でもう一つの人生を歩むルート。考えれば考えるほど選択肢は多く生まれ、消えていく。その中には一番取るべきではないルート、私の道を遮る者すべてを切り殺していくという道もあった。

……事実、不可能ではない。どこかで必ず頓挫するだろうが、そうすれば一時の平穏を手に入れることができた。故に、魅力的に見えてしまう。それほどまでに、飢えてしまっている。”人間”という身分に。

「だけど……。」

私が狂った時に、獣に堕ちてしまった時に取ってしまう道は、必ず失敗する。自分がいつ通用しなくなるか、自分がいつ売れなくなるか、それは誰にも解らない。そして、私には何か失敗した時に助けられる存在が、いない。私が奴隷である限り、人間ではなく”物”。しきりにヘンリエッタ様が私に話を持ち掛けてくれる理由は、彼女の趣味のところも大きいと思うが、そういうものもある。

でも、私からすれば彼女の物になっても、結局”奴隷”という身分

は変わらない。私を買うのにかかった資金が、私の首を絞めつけている。これは、今と一緒。それに彼女が死んだとき、もう私を助けてくれる人はいなくなる。彼女は高齢だ、いついなくなるか解らない。頼り切ることは、難しい。

人と人との関係性は、相手が”人間”である前提で成り立っている。奴隷じゃ、そもいかない。だから、だからこそ。

「もう、言葉にしなくてもいいよね。」

剣神祭で、勝ち抜く。

化け物同士の殺し合いだ、どうなるかはわからないが……。残念だけど私は約束を破る女じゃない。

「できる手は、打てる手は、全部やろう。」

タクパルの手も、オーナーの手も、ヘンリエッタ様の手も。もちろんアルの手も、全部使つてすべてを真つ向から叩き潰す。子供でも解る簡単な方法だ。

”ビクトリア”として戦い抜くのは難しいだろう。”彼女”の能力は魅せるためにある。それじゃあ化け物の相手は難しい。だからこそ、今の私を、裏の世界で殺し続けた私を、そこから出てビクトリアを経験した私を、生きる理由ができた私を、見せつけてやろう。

「幸い、私が進んでいた方向性は間違つてなかった。これからは、高めるだけ。」

私が愛用する『加速』は、自身とこの世界の速度を切り離す。倍速というのはそういうものだ。だが、これは速くなるだけで体の強化とかはしてくれない。『加速』に際限はない、だが私の体に限界はある。倍率をあげれば上げるほど体は軋み、脳は警鐘を鳴らし続ける。そういう能力だ。

すぐには高めることはできない、そう思いずっと鍛錬し続けたか
があつた。……そろそろ、目の前の壁を超えられるはず。

「新しい手札を用意する必要はないし、今から始めても形になるか
からない。なら、これまで通り今の実力を上げ続けるのみ。」

そうすれば、絶対に勝てる。

これまでずっとそれで勝ち続けてきた。だから、ね。

あとは……。

「装備、かな？」

12：装備のお話し

「にしても急だねえ、ご主人サ・マ？」

「お前なら言わずとも要件ぐらい解るだろう。」

私たちの才をウチのオーナーに伝えてから数日後。今私の中に存在する限界の壁を打ち破るための修練中、急に宿舍までやって来たオーナーに連れられて私たちは町へと繰り出していた。もちろん、アルちゃんも一緒。目の前のコイツと私は結構付き合いが長い、だから私が特訓しているところ急に現れて連れていく理由は大体検討が付くんだけど……、アルちゃんはそうではないみたい。

さつきからずつと頭にハテナを浮かべている。

……うん、あれからちよつと何日か顔に曇りが見えてたけど何かしら自分の中で纏めることができたみたい。今日はまだ、マシだ。

「どうだろ、ビクトリアちゃんわかんないなあ？ それにアルちゃんへの配慮もしなきゃダメじゃないの？ このイジワル。」

「……装備の新調だ。」

もうしゃべるのがエネルギーの邪魔だ、という雰囲気を出している彼が馬車の中でそう発する。こいつは時間の浪費とか結構気にするタイプだ、だから移動もわざわざ馬車にしたんだろうけど……、私と相席するっていうことを忘れてたな？

「装備……、ですか？」

「そ。剣神祭は普段の数打ちとかじゃないのよ。」

剣闘士の試合は基本、数打ちの剣一本のみ。あつたとしても運営側が定めた簡易な防具だけが許可され興行が行われる。一応剣闘士はその者の力と技術を競い合うって名目で行われてるからね。でも私

みたいなスター選手が出るときは両者のオーナーが合意した時に限って自由な装備を身に着けることができる。そっちの方が華やかだからって理由、見る方も特別感が出ていいみたいなのよ。

んで、問題の『剣神祭』。こいつは大々的に行われるお祭りだし、皇帝が主催してる格式高い試合だ。まあそんな名誉ある試合にみすぼらしい数打ちなんか持つてきても面白くも何ともない、つてことで『剣神祭』では装備の制限が撤廃されている。つまりなんでもアリつてこと。……あ、一応武器は剣つてことだけは決まってるんだけどね。

「各オーナーが自分の財力を証明するために、自分の剣闘士を優勝させるためにまあみんなすごい装備用意してくるらしいんだよねえ。」

「へえ、そうなんですな。」

「んでオーナー、やるからには多分オーダーメイドなんだろうけど誰がやってくれるの？ 今の装備作ったあのおっちゃん？」

今の装備、女騎士が着るような軽装の白甲冑。ビクトリアとしての活動が軌道に乗り始めたころにオーナーからももらった奴だ、たまに塗装のし直しかで鍛冶師のおっちゃんのところとかに持って行ったりするんだけど……、そこかな？ あの人結構腕良いらしいし。

そんなことを考えているとオーナーが懐から一通の手紙を取り出し、投げ渡してくる。すでにオーナーが読んだのか封は切られてるけど……、これヘンリエッタ様の押印じゃん。目線で読めと言ってくるオーナーの言う通り、中身を確認してみる。ん？ アルちゃんも見る？ じゃあ一緒に読もうか。

『ビクトリア様お元気？ あなたの愛しのヘンリよ！ 剣神祭に出るってことだからこっちで最上の鍛冶師に連絡を入れたいわ！ 普段は気難しい人だけど大丈夫！ ウチの家に貸しがあるから断れないの！ とてもいい考えでしょう？ ……あ、それとお代の方は貴方のファンクラブのみんなでお出し合っって補っておくから心配しなく

ていいわよ！ P. S. 話は変わるけど私のものにならない？』

「……………ええ？」

「……………わあ。」

「相変わらず行動の早い方だ。…………と、着いたようだな。私は別件があるから二人でいけ、迎えに馬車を送っておくからそれで帰る様に。」

オーナーがそう言うのと御者さんがタイミングよく馬車のドアを開ける、まあ降りるしかないので降りますけど…………、もっとおしゃべりとか楽しまないのオーナー？ え、時間の無駄？ いやいや、今を時めく大スタービクトリアちゃんとお話してできるのが無駄って…………、あ！ ドア閉めた！ オイこらまだお話は終わってないぞ！ 逃げるな！ 逃げるな卑怯者オ！

「…………と、時間は有限だし行こうか、アル。」

「相変わらず切り替え早いですねビクトリア様。」

オーナーが乗った馬車を見送りながら、あたりを見渡す。町並みはいつもと同じ感じだけど、歩いている人が違う。人間族よりもドワーフ、炭人族の割合の方が多い、鍛冶屋とかが集まる一帯のようで家々の煙突から煙が絶えず上がっている。目的地である店の名前を探しながら、二人で鍛冶街を歩いていく。

「この辺りはドワーフの方が多いんですね、あとなんだか皆さん元気がないような。」

「…………確か今帝国はドワーフの国家と戦争してたね、それが原因かな？」

ここにいるドワーフたちが戦争によって連れてこられた者なのか、それとも元々ここで過ごしていた者なのかはわからない。だがまあ

自分の種族の国が今住んでる国と戦争してるってなるとまあ複雑だろう。まあそれ以外にも理由があるのかもしれないけど、今の私には関係のない話だ。そういえば紹介された鍛冶師はドワーフなんだろうか？ 人間族もちらほら見かけるがやっぱり優秀な鍛冶師ってドワーフのイメージあるし。ちよつと楽しみ。

「……メネエチカ。ここだね。」

掲げられた看板の名を確かめ、掛けられている……、これなんだろう。ビーズカーテンでいいのかな？ なんかビーズが一杯吊るされててお婆ちゃんの家とかにありそうなやつ。まあとにかくそれを手で避けて中へと入る。

「いらっしやい〜。」

向かえてくれたのはこの辺りでは珍しい、というか初めて見る懐かしい髪色。黒い頭髪を首あたりで整えた人間族の女の子だ。店番の子だろうか。

「すまない、ヘンリエッタ様の紹介で来たビクトリアという者だ。この店主の方に取り次いでいただけるだろうか。」

「おん？ ウチが店主やで。」

「……キミが？」

いやどう考えても店主には見えないんだけど……、顔だちも背丈もアルちゃんと同じくらいなんだけど。

「んあ？ お前もしかしてウチのことチビって思った？ 思ったよな？ 思ってるよなー！」

わ、急にドス効かして来た。こわ。というか珍しい訛というか若干

関西弁？ この世界の言語は日本語じゃないから多分私が関西弁に似てるって判断してるだけなんだろうけど……、それにしてもなんで？



「おう、わりいな姉ちゃん。ウチ身長のこととか言われるのごつつ嫌やねん。」

「いや。私も配慮できず、すまない。」

「じゃあ手打ちってことで。あ、そうやそこのおチビ、貰いもんやけど菓子あるで。食うか？」

「い、いえ。お構いなくです。」

さつきまで鬼の形相で怒鳴ってた店主を何とか宥めたあと、店の奥から出してもらった椅子に座りようやくこの女性と対面する。彼女にとつて禁句のようだが、その身長と幼い顔立ちのせいで結構汚い言葉で怒鳴られても『ああ、これはこれで。』という感じでそこまで怖くはなかった。というかほんとにあなた成人してるの？ あ、してる？
そう……。

「ヘンリの姐さんからは聞いてとるで、最初はどんな坊々が来るかと身構えとつたけど……。見た感じ結構な剣士やな。」

「……解るの？」

「もちや！ これでもベテランやからな！ それぐらい解る解る！
姉ちゃんスピードタイプやろ？ それもチマチマ叩くタイプじゃなくって一撃一撃が重い奴や、やっぱ鍛え方がちやうなあ。うんうん、こんな奴相手ならこっちも張り切って仕事できるってもんや！」

店のカウンターを挟んで会話していたのだが、急にそこに飛び乗り

体を触ってくる彼女。まあそれぐらいならアルちゃんがびつくりするぐらいで済むのだが、目の前のこの人は普通に私の戦い方を言い当てるてきている。

「……試合をご覧になったので?」

「試合? 姉ちゃんなんか出ててんの? ウチら属州の方の出身でな、最近海越えてこつち来たからようわからんねん。……もしかして結構有名だったりする?」

「え、ええ。まあ。」

「マジ? え、どうしようどうしょ! こういうのってやっぱなんか書いてもらった方がええよな? なんかよさそうな紙ってどこ置いたつけ!」

口元を手で隠しながらグイッと顔を近づけてくる彼女、私らしかないのに内緒話をする必要のないと思うんだけど……。というかそれで驚いてしまったせいかな、完全に話のペース持たされた! あそこの人ずっと喋ってる! 止まらないんだけど!

あ、なんかダメだわ、ちよつと初めてのタイプ過ぎてビクトリアがブレてる。それにこの人ファンじゃないし急に”子猫ちゃん”呼びとかできない。おい! がんばれ私の『演技』の才! お貴族様が急に鞭持ってきて『私を叩いてくださいまし!』って言われた時も何とかなったでしょ! ほら頑張れ! 頑張れビクトリア!

「ほら、ウチらの住んでる場所ってけつたいなとこでな? 『女はテツ打つな』とか『鍛冶場は男の』とか『誰からそれを盗んだ』とか、めつちやうるさいんよ。んでどうしようか迷ってた時にヘンリの姐さんにおうてな? 一念発起して家族と海渡つて来たんよ。それでな、それでな……」

「失礼! ……申し訳ない、まだあなたの名前を聞いてなくてね。教えて頂けるかい?」

「おつ! せやつたせやつた、いやわるいね! んじゃ改めまして

……、ウチの名前はドロ！ この店の店長やつてる鍛冶師や。よろしゅうな！」

ようやくマシンガントークを収めることができ、大阪のおばちゃんとは化していた彼女を鎮静化させることに成功する。一応名前はさつき名乗ったけどまたペースを握られたら一生話が終わらない、もう一度”ビクトリア”と名乗り、隣にいるアルもそれに続く。

「ビクトリアに、アルやな！ おつしや覚えた！ ……んで、ウチは何作ったらええの？ 剣か？ 槍か？ 甲冑か？ 姐さんからは来た奴の作ってほしい奴全部やってー、って言われてるんやけど。」

「全部、か……。では全身の装備と、剣をお願いします。」

「あいよ！ かしこまー！」

元気よく返事をしてくれる彼女の鍛冶師の実力がどうなのかはわからない、だがさつき私のことを一切知らずに筋肉を触るだけで戦い方を看破したこと、そして店に並べられた数打ちのはずの剣の質がかなりいいこと。そして何よりもヘンリエツタ様が勧めてくれたという事実が彼女の力量を証明してくれる。

「それじゃあ細かい採寸とかしながらどういう方向性で行くか聞いていくから答えてな、あと嬢ちゃんも暇やろうしそこにある菓子でも食ってまっとき。あ！ 全部食べてもええからな！」

まあそんな感じで採寸してもらってからちようど一週間後、もう装備が完成したと連絡があったのでまたオーナーに連れて来てもらったんだけど……、いや一週間って色々おかしいからね？ 私の今の装備の塗装直しでも三日ぐらいかかってんのよ？ どんだけ早いのさ！

「まあそりゃウチが優秀やからな！ あと帝都ってだけあって滅茶苦茶材料手に入りやすいわ！ 変な差別とかで鉄売ってくれへんとかもなかったし……。まあでも？ それでもやつぱウチの腕が理由やな！」

「さ、さいですか。」

「せや！ はやい！ すごい！ まずい！ の三拍子やで！ ちなみにまずいは値段な、今回の姉ちゃんはある関係ないけど。」

「……ちなみにどれくらい？」

そう言うところそり明細を見せてくれる。……ああ、確かに。これは不味いね。あ、アルちゃんはあんま見ない方がいいかも。すごいことなってるから。装備の手入れとかアルちゃんいつもやってくれるでしょ？ これ見たらちよつと手が震えちゃうと思うから……。

ちなみにだけどアルちゃん三人分くらい。店主が言うには『姉ちゃんいい剣士っぽいし初回大サービスで安くしといたで！ 材料費とか燃料費だけや！』とのことなので実際の値段はもつと高くなるだろう。……いや色々大丈夫か？

「大丈夫ちゃう？ たしか……『剣神祭』やつけ？ それに向けて結構市場が動いてるのか、仕入れの時無茶苦茶高い奴とかあったで。姉ちゃんは重装にしたら旨味きえてまうから買わなかった奴もあるけど……、まあどこも姉ちゃんみたいにガチガチで装備作ってんのやろな。」

いや装備の質が高くて周りから怒られるかもしれない大丈夫？
じゃなくてあなたのお店の経営が大丈夫？　つてことなんだけど……、まあいいか。とにかく相手側も大勝負に向けて準備を進めてるってことだね。気を引き締めないと。

「ま、世間話はほどほどに、一つずつ説明していいか！」

最初に彼女が持ってきたのが二振りの剣、日本刀みたいに木製の台の上に置かれている。

「普通のロングソードと、レイピアやね。聞いた感じ剣であればなんでもアリで本数の制限もないみたいやから……、用途に分けて二本打つといたで。」

「ロングソードの方はミスリルを芯にして、玉鋼えっちゅうめちやい鉄で打つといた。重さはあるけど研ぎもちゃんとやつてるから叩き切るゝ、だけじゃなくて流し切るゝ、とかも姉ちゃんの技量ならいけると思うで。」

「レイピアの方は玉鋼オンリーや、ちょっとやさつとじゃ折れへんと思うけど刺突目的で作つとるからやるにしても受け流す程度にしといてな。」

渡されたソレを、軽く振ってみる。刀身も柄も飾り気のない剣だけど、機能美つてもものを感じられる。グリップも手の形をよく調べられたおかげかひどく落ち着く、そこに収まるのが初めから決められていたみたいに。重さも、普段のよりは少し重いがこれぐらいの方が格段にいい。レイピアの方はあんまり触ったことがなかったけど……。うん、いけそう。

「鞘の方は両方値崩れしとったワイバーン系の素材で作つとる。骨の形整えて薬品で固めて翼膜でコーティングしとるからこつちも防御には使えると思うで。一応ヘンリの姐さんから注文されたように白

ベースでやつとるから見た目もええと思うで。んじや次〜。」

なんかさつきからミスリルとか玉鋼とかワイバーンとかやつぱこフアンタジー世界なんだなあ、という言葉がずっと聞こえてくるが騒ごうにもそこまで騒げない。装備つてのは自分の身を預ける大事な相棒だ。だからこそ注意深く見る癖がついている。

上がる気分を理性が押さえつけ鞆の硬さを確認したあと彼女に付いて行く。あと実際にやってみなきゃわからないけどあの鞆タクパルの一撃くらいなら受け止められると思う。かなり硬かった。

「全身装備〜、やね〜！」

店の奥に連れてこられ、埃避けのためか掛けられていた布が彼女の掛け声とともに剥がされる。これは……、すごいな。私が頭部の防具を付けるのが視界も遮られるし苦手ってことで作ってもらってないけど、お貴族様の部屋に飾ってても可笑しくないものだ。

「軽銀を骨格にして装甲はミスリル、んでちよっち魔化。さすがに全部ミスリルにしたら重くなりすぎるからやめたけど『軽量化』と『速度向上』の効果も付与してるから見た目よりは軽いはずや。……あ、一月も持たんから定期的に持ってきてな?」

軽装の私たちが好むような急所だけを守る部分鎧ではなく、全身を包む真っ白な鎧。だけど私の体形を崩さないように鎧が肥大化することも、丸みを帯びることもない。すこし触って装甲の厚さを見てみるが申し分ない、十分以上に防具としての役割を果たしている。一言で表すなら……、超スタイリッシュな西洋甲冑、だろうか。

「体術も結構使えそうやったからな! 腕と足の部分の装甲は厚くしてるで! まあやつぱ軽量化と防御力の両立がめっちゃむずかったけど納得のいくもんが作れたわ! ……あ、あとこれな!」

渡されたのは、鎧と同じ真っ白な布。だけど丁寧に一本一本金のラインが織り込まれていて、その上かなり頑丈だ。

「こう、腰に巻いてな？ 足元とか隠したり防御に使える〜と思って用意しといた。投げつけて時間稼ぎ〜、とかもいけるやろな！ 竜の髭とミスリルとウチの地元の頑丈で有名やった繊維使って薬品処理もしてるからそんな簡単には破けへん優れモノや！」

飾られている鎧にパレオのようにその布を巻きつける彼女、頑丈と言っていたがごわごわした感じはしない。むしろ触り心地は絹に近いだろうか。そこまで動きを阻害することはないだろう。……使える。

ひとしきり説明が終わった後、実際に全てを装備してみる。鎧をアールに手伝ってもらいながら身に収め、鞆を吊るし剣を納める。そして布を腰に巻き付ければ、完成だ。……製作者が女性というおかげなのか、単にこの店主の腕がいいのかはわからない。後者だろうが至る所に裝飾が施されている。見た目と、実用性。完全に両立させている。軽く動き、そして『加速』も使用してみるが……、全く違和感が無い。むしろ鎧に施された魔化のおかげか生身の時よりも速度が出ている気がする。長続きはしないようだが、剣神祭前にもう一度メンテナンスしてもらえばいい話だ。

「気に入ってもらえたようだなによりや！ やっぱ使う奴に気に入られてこそその装備やからな！」

「……ああ、本当に。ドロ、ありがとう。」

「いいってことよ！ ま、ウチの装備で勝ってくれたらそれだけで宣伝になるからな！ 頼んだで！」

13：第一試合

さて、あれから結構な時間が過ぎて。

今日が剣神祭当日だ。

ちようど今は控室の方で待たされてるんだけどこつからでも外の観客たちの歓声が聞こえる、やっぱ無茶苦茶大きいお祭りなんだなあと改めて思っただけ。今はどうせ皇帝かなんかのお偉いさんの話かなんかでみんな湧き上がってる感じだろうね、んでその前座が終われば私たちの時間、殺し合いの時間だ。いつも通り賭けとか発生してるんだらうけど一体どれだけの額が動いているのか、まあこの祭りのためだけにわざわざ遠方からはるばるやって来た人もいるらしい。思いつきり経済が回されてるんだらうね。人が殺し合う祭りで熱狂するなんて……、相変わらずすごい世界だよ。

装備を受け取ってから数週間後、大体今から一月前ぐらいに出場者とその組み分けが発表された。今回は頑なに出ることを拒否していた私が出るってイレギュラーもあったんだけど、それ以外にも色々あったみたいで参加人数が倍に増えている。本来は16人のトーナメントなんだけど数合わせとかが色々あった結果倍の32人のトーナメントとなった。つまり五回勝ち抜けば私は晴れて奴隷から卒業ってわけ。

……この数合わせの参加者増量なんだけど、オーナーとかが調べてくれた結果全く嬉しくないことに”化け物”とカウントされる奴の方が多い。つまりどう足掻いても私の負担は増えるってこと。

まあ一日で全部の試合をやるわけじゃない、最後の方は連日になるけど一回目と二回目が終わった後は丸一日のお休みがある。だから疲労とかの問題は大丈夫ではあるんだけどね。ちよつとでも数は増えるってことはあんまり気分の良いことじゃない。

どうあがいても私を含めた”化け物”に”化け物未満”は致命的な相性の差がない限り勝つことはできない、しかも私は運が悪いことに初戦から”化け物”相手だ。最初はちよつと楽できるかな？ と

思ったらこれだよ。つまり何か番狂わせが起きない限り、五回連続でお化けを相手にしないといけないってことだ。……覚悟してたけどねえ？

「……よし、愚痴は終わり。」

いつものように纏まらない思考を全て捨て、脳の中の意識を切り替える。ここからはもう、ビクトリアである必要はない。ただ生き残ることだけ、ただ目の前の敵を殺すことだけ。それを考えて前に進む。如何に効率的に敵の体力を削るか、如何に自身のダメージを減らすか。私がこの世界での”生き方”を叩きつけられたあの裏の世界の感覚を、全身に行き渡らせていく。昔の感覚が、死の恐怖が、少しずつ浮かび上がってくる。……だけど、私はもうあの時とは違う。

「アル。」

「……待ってます。」

膝を突き、彼女を強く抱きしめる。

「約束は破らないよ、絶対にね。」

人々の都合の良い偶像である”ビクトリア”ではなく、人を物として扱わぬ世界で形成された”ワタシ”でもない。

帰りを待つ人がいる、ただの人間だ。

ずっとこうしていたいけど。もう、時間だ。不安がないわけではない、けどもう手の届くところに希望がある。強く笑い、立ち上がる。

「行ってきます。」

ゆっくりと、暗い道を歩く。視線の先には鉄格子から光が漏れていて、歩を進めるごとに歓声が大きくなる。ここまでの音は聞いたこと

がないくらい、建物自体が強く揺れている。その振動のせい、緊張のせい、自身とそれ以外の境界が少し薄れていく。一体化するような感覚。

「？まれるな、”私”であれ。」

鉄格子が、ゆつくりと上へあがっていく。

時間だ。



基本、私は対戦相手の名前は聞かないようにしている。

一度それを聞いてしまったら私が背負い続けるものに名前がついてしまうから。最初はまだ両手で数えられたはずのそれはもう正確な数を教えてくれない、ただ一人の人間が背負うのには不可能に近い数だ。忘れてしまえば楽なのだろうけど、そこまで私は適応できていない。……慣れてしまえば、私じゃないような気がしたから。

だから、今私の目の前に立つこの男の名前も知らない。

けど、その強さは解る。

全身に纏われたその鎧は青白く光る特徴からミスリルだということ、解る、それも明らかに分厚い。こいつ自体の肉体の大きさもあるだろうが防御に重きを置いたその甲冑がまるで城のように内部の肉体を守っている。作り手がいいのか剣を差し込めるような隙間もかなり少ない。私みたいに頭部を付けない、ってタイプでもないみたいだし。

この世界じゃ珍しくない2m超えの恵体に、鍛え上げられた肉体。それを保護するミスリルの城壁。そして扱う武器は……、大剣。こつちもミスリル。タクちゃんの完全上位互換に用意できた最強の武装を持たせた剣闘士。私が言えたことじゃないけど金掛かってるね。

『さあさあ皆様お待ちかねえ！ いよいよ剣神祭が始まります！』

ちやんとどつちに賭けるかは決めた？ 億万長者になる準備は？
一文無しになる準備は？ 全部終わってますよねえ！ 初戦から熱
すぎてぶっ倒れないようにお気をつけください！』

『さあ第一試合！ 先に現れたのは超重厚！ 超重量！ 有り余るパ
ワーにミスリルの全身鎧の鉄壁！ まさに騎士って奴の完成形がこ
こにある！ それもそのはず！ こいつは元々騎士様で……』

普段はこんな口上はそこまで時間は取らないのだが、お祭りってこ
とでわざわざ魔道具を使って闘技場全体に声が響いている。こいつ
のプロフィール情報は大体オーナーから聞いている。元々戦場を駆け
巡って敵を葬り続けた大層な騎士様。でも戦場でバカなお貴族様の
上官、その命令を無視して多くの兵士を救った。でも命令違反は命令
違反、活躍しすぎて恨みもあつたのか汚名を色々と着せられて一気に
名誉を失う。

あとは貴族の怒りを買って爵位剥奪、政治が上手くなかったってこ
とで色々借金とか面倒なものが重なって剣闘士に堕ちた人、らしい。
この世界ではよく聞く話だ。

『続いて現れたのはこれまで頑なに出場を拒否し続けた魅惑の大華！
女騎士ビクトリアだア！ これまで出てなかったから腰抜けとか
！ 女だから弱いって思った奴！ もう賭けは締め切ってるぜ！
残念だったな！ こいつはそんな軟な剣闘士じゃ……。』

最初はまだ丁寧語を維持していた実況がノリに乗って来たのか言
葉が荒くなってきたている、いつもの私ならここでパフォーマンスなん
かしたんだろうけど、今日の私はビクトリアじゃない。役者として何
か言い訳するとすれば『普段とは違う本気の私を見てほしい』、個人と
して何か言うなら『そこまで余裕ない』だ。

『さあ俺の長ったらしい口上もこれで終わりだ！ 剣神祭の始まりの
音を我らが皇帝陛下に上げて頂きましょう！』

貴賓席から一人の男が、顔を出す。
彼が手をあげると同時に、喇叭の音が鳴り響く。
さあ、殺し合いの始まりだ。

〈加速〉三倍速

開始音と同時に踏み込み脳内のスイッチを入れる。地面がめり込むほど強く踏み込み、受け止められる前提で抜刀からの振り上げ。選択するのはロングソード。日本刀のように神速の抜刀術、つてのは私にはできないが疑似的にそれを再現することはできる。

思い出すのは、鍛冶師の彼女の言葉。この剣を打ってくれたドロの教え。

『ミスリルってやつはな、鉄よりも大分重い代わりに魔化はやりやすいし鉄よりも硬いのは有名やな。でも、鉄が完全に劣ってるわけじゃないねん、ちよつと精錬の方法を変えてやれば粘りが出てな。使い手によつてはミスリルとかも両断できるねん。』

あいにくこれまで鉄以外の鉱石は使う機会がなく知らなかつたけど、彼女が言うならそうなのだろう。使い手の差、つてのがゴイツと生じるかはわからないけど……。可能なら、断ち切る。成功すれば鎧ごとその肉を断ち切りもう一本のレイピアを引き抜き刺し殺して終わり。無理なら無理で次の手につなげていくだけだ。

そうして振るわれる私の剣。先に攻撃手段を奪ってしまおうと奴

の利き手を狙ったものだったが……、加速した私の視界に、現れるのは彼の刃。

やっぱり三倍速程度じゃ対応される、か。

「ッ。速い、な！」

私が加速しているせいで面白いぐらいゆっくりな奴の声が聞こえる、だがその剣の速さはかなりのもの。人の身長と同じくらいの大剣、しかもミスリル製なのに軽々とそれを振り回している。正直驚異的な身体能力だ、なんか私みたいにスキルでも使ってるのかそれとも全身ミスリルのおかげで大量の魔化を施しているのか。

確実に私を殺そうとしてくる刃を半ば過剰なほど動き避けていく。まだこいつの技量は読み切れてないけど、力技で無理やり斬撃の軌道を変えて来ても可笑しくない。その分威力は落ちるだろうが、風圧だけで喰らったらヤバいことが解る。剣で受け流す、って方法もあるけどどこまで単純な身体能力に差があるのならいくら曲がりにくいって言われたこれだつて歪む。

（一撃一撃が重い、速度も並じゃ対応不可。……今の速度に、目が慣れてきた、かな？）

三倍速の世界じゃ結構避けるのに苦勞する連撃、こつちから剣を振ることもあるが今の速度じゃ断ち切る前にこつちが両断されそうだ。軽い牽制程度に収め剣と剣が打ち合う音が連続的に響いていく。打ち合いながら剣の様子を確認するが、こつちの方は刃こぼれなし。代わりにあつちの方は少し欠け始めている。

こつちが角度に気を付けて振っていたおかげか、あつちが気にしていないか。まあ後者だろう。技量は私には劣るけど化け物として必要なものは兼ね備えている、彼が剣に求めているのは切れ味ではなく叩き切る為の道具。剣がなければ棍棒でもいい、って感じの戦い方だ。身体能力で押し切ることができたからのやり方だろう。実際、私

が今の速度が最高なら厄介なことになっていた。

(数度打ち合えば無理して合わせてくる可能性もある、それにこつちの体の限界もある。……やるなら、一瞬。)

幾ら超人的な体を持っていたとしても、人間である限りどこかで歪は生じる。ほんの少し、ほんの一瞬でいい。それを引き出すことができれば、後はこつちのものだ。あまり時間を掛けて相手が戦術を変えてきたり、奥の手を使ってくるのは避けたい。さつさと終わらせよう。

剣を、投げ捨てる。

奴がその大剣を振り下ろした瞬間に自身の剣をその頭部へと投げつける。速度、角度共に問題ない。ちょうどそのヘルムの隙間、目を貫くように。人は誰だつて頭への攻撃は警戒してしまうものだ。それがいくら強固な兜に守られていても、必ず隙間は存在する。金属を頭の形に合わせた球体にするのつてやっぱり難しいし、そのぞき穴がなきやどこも見えない。

訓練すれば甲冑で受ける、つてことはできるようになるかもしれないけど……、なら最初から回避しないといけない攻撃をすればいい、つてことだよね。

彼の視界に、剣が出現する。

戦場を駆け抜けた彼が私と同じことをする奴と出会わなかったとは思わない。多分今と同じ三倍速で動き続けていれば、その経験からすぐに対応してきただろう。いくら一時的に視界を奪われようが、私たち”化け物”にとつて五感の一つでしかない。他の感覚器と経験があれば簡単に対応できる。

だから、ギアをあげる。

三倍速から、”七倍速”へ。

元々私の素の速さってのは剣闘士の中で上から数えた方が早いってレベルだ、ある程度訓練された兵でも素の速度で制圧することができる。それを、さらに速くする。当然その分代償を払うことになるが……、これで決着がつくから安いものだ。

その速度に入った瞬間、脳は悲鳴を上げ少しでも体を動かすと全身が軋んでいく。故に、長時間の使用は避ける。使うのは、一瞬だけ。強く踏み込み、空へと飛び掛かる。全力で投げたはずの私の剣は、何段も遅くなり、彼の動きも更に遅くなっている。私がちようど空へと飛びあがると、彼が剣を避けるために首を動かし始めたのが同時。そっちは避けられるだろうけど……、こっちはどうか。

優秀な奴ほど、視覚情報を確保し続ける。いくら他の感覚器が使えたって人間の構造上、視力に勝る情報入手方法はない。だから、敵からは絶対に目を離さない。

奴のヘルムの奥の瞳は、こちらを。

レイピアをすでに抜いた私の姿を捉えている。

〈加速〉速度低下、五倍速

慣れ親しんだ速度で、狙うは中身。

この世界の人間なら摩訶不思議な方法で刃を筋肉で防御しても可笑しくはないが……、眼と脳はさすがに無理だろう。切っ先を合わせ、腕を押し込めば、入る。後は同じことを念入りに三度ほど繰り返し返せば、おわり。

「やっぱり、相性が良かった。」

曲芸師のように、彼の頭に足を掛けさらなる飛翔と共に彼を蹴り飛ばす。さすがに死んでいるとは思うが一応の確認だ。

空中で剣を振るうことで血を払い、着地する。振り返ってみれば彼はまだ倒れている途中、動きそうにない。ん、私の勝ちだね。

安心して『加速』を切れば、どさつという巨体が倒れ伏す音。あとは一拍遅れて頭が割れそうになるくらいの大歓声ってわけだ。……一応、まだこの仮面は使うつもりだし……、”ビクトリア”としてお辞儀ぐらいしておきましょうか。

とりあえず一勝……、だね。

14：帰還と対策

「ししよおー！」

簡単な礼で観客への挨拶を済ませた後、待っていたのは私に向かつて飛びついてくるアルちゃんだった。あはは、もう、私今鎧着てるんだから飛びついたら危ないでしょう？ それに今回はそんなに苦戦しなかったしき、いつもの試合と一緒にだよ？ ほら大丈夫大丈夫、ちよつと疲れただけさ。それに泣くのは奴隷から解放された時の嬉し泣き用にとっておかなくちゃ。

「す、すみません。でも……。」

「うん、ありがとね。それと……、ただいま。」

「っ！ おかえりなさい！」

これで、一回目。私は、自分の耳で、必ず彼女の声をあと四回聞く。……ま、一戦一戦が大事な試合だ、毎回喜んで罰は当たらんよね。彼女の腰に手を回し、軽く持ち上げる。七倍速を使ったせいで体に影響は出ているけど、倒れてしまうほどのダメージは受けていない。今からもう一戦してもなんとかなるぐらいだ。しっかりと体を休めれば……、大丈夫なはず。

正直この体がどこまで『加速』に対応できるのか、ってのは未知数だ。明らかに前世の人間よりも頑丈なおかげで五倍速までは完全に対応できてるけど、それ以上が結構しんどい。実際の速度は違うし、仮説みたいなもんだけど人間の走る速度を大体時速8キロとするならば七倍すれば56キロ、高速に乗った車と同じような速度を出すことが出来る。

車とかは鉄の塊だけど、こっちは生身の肉体だ。実際の人間の瞬間的な速度は時速8キロなんか優に超えるし、私の体にどれだけの負荷

がかかっているのかは正直解らない。解るのは『七倍よりも先は死の領域』つてことだけ。スキルとしての『加速』の限界はまだ先にあるみたいだけどそれに到達する前に私の体が壊れてしまう。……使う必要がなければいいのだけれど。

「……さ、次の試合に向けた清掃もある。さっさと戻るとしようか、アル？」

「はいー。」

抱き上げていた彼女を下におろし、控室までの道を歩く。普段の興行なら誰かとすれ違うこともありそうだが、今日は大事なお祭りだ。死体の処理とか清掃とか、あと賭けの準備とか？ まあ色々あるみたいで試合と試合の間に時間がある様子。……つと、珍しいこともあるもんだね。

「わざわざごつちまで降りてきたの？ オーナー。」

「早い決着だったな、ビクトリア。」

そこには、私たちのオーナーが来ていた。彼は滅多にどころか、全くここには来ない。奴隷用の道があるだけで彼にとつてここに訪れる価値のある者なんて存在しないからだ。オーナーが変わった後の私の初めての試合も、ビクトリアとしての試合も、いつだってこの人は闘技場に足を運ばなかった。……まあ結果が解っているようなもの見に来るはずもないか。ん？ ということは……、心配してくれただってこと？

「ど、どうしよアル！ オーナーがデレ期に入った！ 非常にまずいよコレは！ これまでお金にしか興味なかった奴が女に興味持ち始めたんだよ！ こ、これは何か酷い病気に違いないー！」

「えッ！ オーナーご病気なんですか!?!」

「違うが？ ……はあ、まあいい。これを。」

そう言うのと彼の後ろで控えててくれた名も知らぬ奴隷ちゃんが大きめの外套と二つの分厚い冊子、あと何かしらのチケットを渡してくれる。チケットは……、おお。私の次の試合、第二試合の奴。わざわざ指定席の見やすい奴じゃない。なにこれ見て来いってこと？

「そうだ、トーナメント方式のおかげで丸一日の休養期間があるだろう？ お前の次の対戦相手ぐらい見ておけ、こちらでは限界がある。」
「ああ、なるほど。この見るからに怪しい人が着そうな外套着て見ておけって奴ね。」

幾らオーナーがお金持ちでいろんな伝手を持つてたとしても情報収集には限界がある、貴族と繋がってる商人とかはその最たるものだ。それに得られた情報がブラフである可能性も十分存在している。そんなものに踊らされるぐらいなら実際に戦う奴が肉眼で見た方が使える情報が手に入るだろう、って配慮ね。

「その紙束は先日渡した資料の追加になる、そろそろ次が始まるだろう。早く行くといい。」

「あいよ、りよーかい。……あ、あと次の」
「二回戦の第二試合のチケットか？ すでに手配している。次はこの者に運ばせるから彼女から受け取れ。」

そう言うともう用は終わりだという雰囲気をつんぷんさせながら帰っていく彼、お付きの彼女はいい人みたいでなんかペコペコしながらそれに付いて行った。私もアルもオーナーがそういう性格だと知ってるからいらぬのにね？

「まあいいや。……じゃ、情報収集と行きますか。」



「だあー！　こうなるんだったら姫騎士に賭けときやよかつたべー！」
「ははは！　そうやって見た目で判断するからおめえはいつまでたつても田舎もんなんだよ！　帝都で長い俺の忠告はちゃんと聞いとけてー！」

「くっそお、今日はお前のおごりだからな！」

多くの観客たちに紛れて、私たち二人は普段とは違う視点から闘技場を見下ろしている。この目線の先で広がる空間で普段私は戦っているし、アルも闘技場の地下へと続く道から鉄格子越しで見えている。そのせいか同じものを見ているのに全く別のものに見えてきてしまう。

「……これが市民の目線、ってやつだよ。愛弟子。」

「……はい。」

フードを深く被ってはいるがのぞき込めば正体はバレるし声を知る者なら気が付くだろう、だからまあ一応呼び方もいつもと変えている。気が付くやつはいるだろうけど今はそんなことを気にするよりも試合に集中した方がお得だ。……にしても、オーナーが一般席でしかチケットを用意できなかったって今年は相当な盛り上がり方なんですかね？

『さあさあお待ちせいたしましたあ！　第二試合がいよいよ始まろうとじていますー！』

「……師匠、次の試合はどんな方が？」

鳴り響く実況の声を聞き流しながらアルに説明を施していく。

片方はおじいちゃん剣士。いわゆる生きる伝説、ってやつだ。剣闘

士なんて一年でも続けてたらもうとてもヤバい、って感じのお仕事なんだけどこの人は30年近く戦い続けている。年は50手前と前世の感覚からしたら『老けたおじさん?』って感じなんだけどこっちの世界じゃもう十分なおじいちゃんだ。老化のせいでパワーもスタミナもスピードもないんだけど、これまで蓄積した経験と技術がある。

詳細は解らないんだけど何かしらの特異なスキルを持っているみたいで強い警戒が必要。もし私が戦うとすれば何かされる前に確実に一刀で殺し切る、って感じかな? さすがに対応されないとは思うけどここまで生きてきた化け物に警戒しない方が可笑しい。オーナーが新たに手に入れた情報によると、なんでもそろそろ限界を感じてたらしく最後に一華咲かせてやろう、ってことでお祭りに参加してみたい。

「30年……、とんでもないですね。」

「この人のオーナーが子供の時から剣闘士やってるみたいで意見が通りやすい場所だったみたいね。」

ま、この世界にはクソみたいな人間もいるけど良い人間もたくさんいる。そこは元の世界と一緒にやってことだ。そんな人の良い若いオーナーのところから活躍し続けている剣闘士が頭下げてきたらねえ? 応えるしかないってことだろう。

うるさい実況に合わせゆつくりと出てくるのは壮年の男性、髪は全て白髪で身に着けている装備も最低限のものだ。自身の最大の武器である技術と経験を十全に扱うために普段通りに近い装備で挑む、ってことだろうか。

「それで次が……。」

片方が珍しければもう片方も珍しくなるみたいで、反対側からゆつくりと出てくる剣闘士は魔法を扱うことができる。

「……え。」

「こうなるともう仕組んでる可能性が高いよねえ……、まあ一番上の権力者さんが主催してるし奴隷如き好きにできるんでしょうけど。」

アルの診断の時にも言ったが、魔法は貴族の象徴で決して剣闘士なんか扱っていい技術ではない。……だが、私の隣に魔法を扱える農民の出の子がいるように、何事にも例外は存在する。彼のオーナーは貴族で、彼の母親は奴隷だそうだ。あとはまあ……、言葉にしなくても解るだろう。彼の父親は、最初からいないことになっている”。まあ奴隷は人じゃないからね、そこら辺はとても自由だ。

優秀な母体を用意してあとは魔法を扱える自身の血があれば簡単に手に入る最強の剣闘士、ってわけだろう。実際教育に金はかかるだろうがお貴族様となればその問題は無視できる。貴族同士のパワーバランスとか、国家と貴族の関係とか色々あるみたいだからねえ……。私の感性は拒否反応を起こしてるんだけど、こっちの人間にはまあ放置してもいいレベルの問題みたい。

「あ、あと名義上は彼の懇意にしてる商人がオーナーみたい。」

「……それ私たちが知ってもいい奴なんですか？」

「比較的ダメな方だけどとあるスジじゃ有名なんだって。他に試そうっていう人がいるレベルに。」

ま、どつちみち戦うことになればどうせ殺す運命だ。彼がどんな運命の下で生まれてきたのかは知らないし、どんな気持ちでそこにいるのかも知らない。もちろん知りたいとは思わない。私がもし貴族とかの高い地位であったのなら何か考えたのかもしれないけどね？
はつきり言って他人事だ。

「ちなみにですが師匠はどつちが勝つと思います？」

「魔法の方。」

ま、個人の才能もあるだろうけど今回の勝因は資金力の差かなあ？魔法使いくんの方は”親”の血がよかった上にその資金力を十全に活かせる立場にある。まあ奴隷なのは変わらないけど彼の”ご主人様”の道楽が終わるまでは湯水のように金をつぎ込むことができただ、オーナーが調べたところによると結構な金額が彼の魔法習得のために使われていて、その上装備だって整えている。

軽装タイプらしくそこまでゴテゴテしてないが、どれも全部最上級の魔化が施されているみたい。さすがにコレは……、おじいちゃんの運がなかった、って感じかな？

「と、なると師匠にとっては如何に攻略するかっていう問題になるわけですね。」

「しよゆこと。」

まあなんだ？ 剣神祭は試合数の問題で時間を掛けて行われる。今日の初日で8試合、明日の8試合で一回戦を終わらせて残り16人に。三日目に8試合を終わらせて残り8人。四日目に4試合をしてベスト4、そして五日目に決勝戦に進める2人を決めて六日目が最終日って予定だ。

つまり私が彼と対戦するのは明後日になる。

「でもまあ……、彼も当たりかなあ？」

『それではッ！ 試合開始ッー!!!』

様々な属性を使いながら、おじいちゃんを追い詰めていく彼の様子を見ながら私はそんなことを考えていた。上に行けば行くほど”化

け物”としての濃度が高まっていく。目の前のことに向かつて準備をするのもいいけど先を見据えた方がいいかもねえ。

そんなことを考えながら彼が使える魔法の種類を一つ一つ確認していく、そのすべてを一回戦で曝け出してくれるわけではないだろうが使えるものを知っているっただけで十分対策になる。まあこれでも？ アルちゃんに何か教えるためって名目で魔法の教本手に入れましたから？ 休憩時間とかかなり読み込みましたから？ アルちゃんがちよつと引くレベルで暗記しちゃいましたから？ 魔法対策はバツチリってわけだ。

「体術解禁かなあ……。。」

15：観戦と、二戦目

『エクスペリアーム武装解除』！』

おく。そんな呪文あるのか……ん？ これ色々と大丈夫か？

無詠唱で火炎を飛ばす中で、何か光の様な魔法を飛ばす彼。その光は確実におじいちゃんへとあたり、彼の手に持っていた武器を後方へと吹き飛ばす。まあ存在しても可笑しくない魔法ではあるが、色々心配になる。……というかミスターポッター！ 決闘の前にお辞儀をしないとはどういうことだ！ あの狸爺は何をしていた！ マグルはともかく貴殿は純粹たる魔法族のはず！ お辞儀をするのだポッター！

危うく私から死の呪文が出ようとしたとき（出るわけがない）おじいちゃんが行動を起こす。

まあ30年という長い月日を戦い続けた人だ、魔法ぐらい経験があるのだろう。武器を飛ばされても全く動じず、対戦相手である彼が放つ火炎や雷撃を最低限の動きで回避しながら距離を詰めていく。武器がなくてもカラテがあるではないかというその面持ちは非常に共感できる。剣闘士って剣飛ばされてからみたいなどこあるもんね。……え？ 剣使ってないから剣闘士じゃないって？ んなもん知らん。

「あの魔法使いの人もすごいですけど、おじいちゃんヤバイですね……。」

「だねえ。」

流石にここまで距離を詰められるのはマズいと感じたのか、魔法使いくんも使う術を変えてくるようだ。確か魔法使いつてのは杖とかの補助具がないと威力が下がるってもんらしいけど……、剣に杖とか

仕込んでるのかね？ 剣を振るいながら魔法使ってるっぽいしそうなんだろうけど。

魔法使いにとって距離を詰められることは死を意味する。武装を剣に固定されているこの祭りじや近接戦が基本だし、魔法使いくんは例外かなあ？ と勝手に思ってたけど……、彼もまた他の魔法使いと同じみたい。確かに剣を学んでるっぽいけどまだ”化け物”に求められるレベルの足元にも及んでいない。

「というか師匠、師匠はいつ魔法使いと戦ったんですか？ ……貴族の辻斬りとかしてないですよ？」

「私は君にどう思われてんの？ 普通に冒険者チームとの試合を組まれた時とかだよ？」

流石にネタだよな？ まあ裏で試合に出てきた貴族殺したこともあるけど……、表に出てからは貴族の庶子とかみたいな訳ありの冒険者魔法使いと何回かやり合ったことがある。みんなつてわけじやないけど大体近づかれる想定してないからね、インファイト位置まで近づくことができればこっちの勝ちってわけだ。

……まあそんな戦いを舐めてるような奴らと比べると、ちよつとはマシな剣術を修めているらしい魔法使いくん。使用する魔法を攻撃力特化の火から、速度特化の雷に変更。自身に魔法でバフも掛けて近接戦の構えだ。これでようやく足元レベルかな？

「や、おじいちゃんはとうするっ？」

魔法使いとの戦闘の鉄則は近づくと、これは事実だが問題は近づけば近づくほど被弾する可能性が上がるってことだ。私みたいに速度上昇系のスキルとかを使って相手が発動するよりも早く近づけるのならいいんだけど、大半の奴が距離を詰める過程で殺される。

直線で進めば火で焼き殺され、回避行動をとってもそれよりも速い雷で感電死。他にもいろいろあるが範囲系の魔法で何もできずに死

ぬってのはよくあることだ。だからこそ魔法使ってやつはどこでも重宝されるらしんだけど……。

「おい、アレ……。当たってないか？　なんで無傷なんだ？　というかすり抜けてないか？」

「なんかそう言うスキルだべ？　知つとる、ちっこいの？」

「し、しらないでれふ！」

そのの彼らが言う様に、魔法使いくんの魔法が全く効いていない。無効化されている、というよりも……。通り抜けている。ちよつとは威力の減衰が起きてるみたいだけど……。どう見ても直撃しているはずなのに、後方に魔法が流れている。

「無効化できるなら最初から避ける必要はない、となると時間制限付き。ここから見ても彼の姿がブレている、なんてことはないから幻術の可能性もなし。となると攻撃の透過、といったところかな？　納得いけたかな、御兩人。」

「おお！　なるほどー！」

「解説ありがとうございますだべ。」

最初は簡単に魔法にやられて死ぬ、と思っていたけどそう言う防御系のスキルがあるなら話は別だ。アレが切り札で間違いないだろう。クールタイムとか気になるけどそんなのいくらでも偽装できる、変に時間を数えるとかはせずに存在だけ脳に止めておこう。

「あ、もう。」

「あそこまで来られたのならもう詰みだね。」

アルの口から漏れ出た声、おそらく今戦ってる魔法使いくんも同じようなことを思っているだろう。

彼らの距離はもう剣の届く距離、片や未だ剣を持ち魔法が使える剣

士に、片や武器は吹き飛ばされ残るのは自身の拳一つな老剣士。まことに残念だよポッター、君の冒険はここでおしまいだ。ジュツにかまけてカラテを鍛えないからそうなる。古事記にも書いてあつただろう？ 『オジギとカラテは大事。』って。

おじいちゃんの拳が彼の顔に突き刺さる。ご老体、と言えどこまで生き残っているあたりそこらにいる剣闘士よりは筋力が高いのだろう。一瞬にして浮く彼の体。踵が地面から離れたせいで筋肉が弛緩するが……、それを見逃すような相手じゃない。すぐさま彼の持っていた剣を手で叩き落とすとそこから始まるのは猛烈なラッシュ。オラオラですか？ YES！ YES！ YES！ YES！

「オオオオオオオオ!!」

ここからでもおじいちゃんの雄たけびが聞こえる。

私から見ても蓄積された経験や技術のレベルの高さはほれぼれしてしまうほど。拳一つで人を圧倒するには自身の体の使い方以外にも、どこに攻撃すれば最適なダメージを与えられるかって言う知識も要求される。それができるってことはあのおじいちゃんが30年間絶えず学び続けてきたってことに他ならない。

まあそもそもパワーもスピードも全然ないから、私にとって全く脅威ではない。でも、今おじいちゃんの目の前にいる彼は違う。完全に気圧されてる、こうなったらもう駄目な奴だ。

「……愛弟子、帰るよ。」

「え？ あ、はいー」

こつから先は、もう見る必要はない。むしろアルには見せたくない。魔法使いくんの負け方、そして闘技場全体の熱気。もう結末は見えている。この世界の子供なら慣れているかもしれないが、私が子供に、アルに見せたくない。

「アル、耳を塞いで私の横に。」

彼女にそう指示をし、去り際におじいちゃんが彼を完全にノックアウトするのを見る。ワンテンポ遅れて上がる大歓声。魔法使いに何でもない剣闘士、それも老人が勝ったんだ。そうなるのも必定。そして、この後に待っているのも。

アルが自分の手で塞いでいる耳の上に、私の手をかぶせてさらに音を遮断する。

『殺せ！』

始まった。

『殺せ！』

小さかった声が、会場全体に波及する。

『殺せ！ 殺せ！ 殺せ！』

勝者を称えるものだったはずの歓声は、観客は、一瞬にして豹変する。よくある、光景だ。

前評判で勝つと思っていた奴が負けたときほど、どう考えても勝つと思っていた奴が負けたときほど、みつともなく不甲斐ない姿をさらしたときほど、起きてしまう。完全に勝敗が付いているが、両方とも

生きている。それは許されることではない。あそこから生きて帰れるのは、一人だけ。

今回はおじいちゃんが拳で勝負を決めてしまった。だからこそ観客はより刺激的なものを、処刑を望んでいる。

私が対戦相手たちを一思いに殺すのも、これが理由の一つだ。

「文化が本当に、まるつきり違うんだよね。」



「とまあそんなことがあったんだけど、さッ！　うちの子に悪影響出そうだしやめてくんない？」

「それは、すまなかつた、ね！」

時間は進み、二日後、二回戦へ。

それまで特に何もなかつたし、ちよつといつもよりも時間を大切にしながらアルと過ごして、普段のようにこの闘技場に立っている。確かに目の前にいる対戦相手である彼は厄介な剣闘士ではあるが、“化け物”に勘定するにはいささか年が行き過ぎている。その技術は賞賛すべきものだけど、明らかに体が付いて行っていない。

だからこそ私は、この人と会話をしている。本人から希望されたつてこともあるけど、『加速』を使わずとも出し抜けると確信しているからだ。……そして何より、この人から殺気というものが全く感じられない。闘気もほとんどなし、技術というよりも今はまだ本気で戦うつもりのない感じ。

その表れというべきか、私たちが今している剣の応酬は如何に激しい戦闘のように見せかけるかという剣舞に近いものに成っている。

「それで、話したい事って何なのよ？ 別にそれぐらいはいいけど、八百長とかは受け付けられないからね。」

「はッ！ 八百長なんかする意味すらないだろうに。俺がここで死んで、お前さんが次に進む。そういうシナリオだろう？」

「……おじいちゃんはそれでいいの？」

私たちの声は、誰にも届かない。この場で何を話そうとも歓声にかき消され、人々は見せかけの試合に熱中する。目ざとい者なら私たちが本気を出していないってことぐらい解るだろうが……、どこまで行っても剣闘士ってのは娯楽だ。ここから帰ることができるのが一人だけな以上、何を話そうが何を企もうが面白ければそれでいい。

「もちろんだ嬢ちゃん、そもそもあんたと俺じゃあ力の差があり過ぎる。あの坊相手じゃまだ何とかなったが、お前さんもこの次に上がってくるであろう相手も俺じゃア相手にならねえ。だってそうだろう？」

おまえさんなら俺が認識するよりも早く勝負を決められる。」

「……まあ、ねえ？」

「ま、先のないおいぼれに付き合ってくれたことは感謝してるよ。」

実際、おじいちゃんの言う通りだ。三倍速度程度ならこの人の反射神経的に対応してきても可笑しくないだろうけど、五倍速じゃもう無理だ。一回戦で戦ったあの鎧野郎なら五倍速も行けたかもだけど、この人の衰えた体じゃもう無理。打ち合ってる剣からそれが解つてしまふ、この人が体に残った技術で何とかやりくりしてるだけで、そもそもその体がもう気力についていけない。

「……にしてもまあ、お前さんは覚えてないだろうが裏にいたあの嬢ちゃんがここまでするとはねえ。」

「おい、その話誰かにしたか。」

思わず、声に殺気が乗ってしまう。同時に剣撃も強くなり過ぎたよ

うで大きく彼のものを弾き飛ばしてしまった。その手から離れることはなかったが、後ろに大きく飛ぶことで距離が開かれる。

「してねえしてねえ、だからそうカッコしなさんな。」

「……悪いね、ここから出た後もこの仮面は使い続ける予定なんだ。」

「わかってる、つての。このまま神さんのところまで持っていくからよ。安心しときな。」

裏にいた時の私はその世界に適応してしまっていた、だからまあ……、ちよつとね。ビクトリアのイメージとは違うことを色々してたのよ、そうでもしないと生き残れない場所ではあったんだけど。だからこそ表に出るようになってからは、この前アルと行った訓練場とかに入り浸って表の常識を体に刷り込んだわけなんだけど……。あの時のことを知ってるとはねえ？

「剣も握ったことのないような女が戦場から帰ってきたような顔して戦ってたのはよく覚えてるよ、俺アはそんな時ただの付き添いで、試合には出てなかったがね。表でもこんなにくソ喰らえなのに、裏つてのはどこまで酷いんだと。……それが今じゃこんな別嬪さんだ。」

「ふ、褒めても何も無いよ。」

「こうして剣を交えながらッ！ 話せてるだけで俺の最期にはもったいないくらいだ！」

なるほどねえ……。まあ最後の相手は誰にでもあるけどさ。殺しにくくなるのはちよつとねえ？ まあどつちみちやる以外ないからやるけどさ。

「それで？ 単に死にに来たってわけ？」

「なあに、そんだけじゃあ面白くねえだろ？ こちとら剣闘士だ、ここに出た限り何をしようが観客を楽しませる。求められたのなら応えねえとなあ？」

「……」パンとサーカス”、ねえ。」

明らかに彼の言葉には自嘲が入っている、三十年間生き続けたってことは、私が背負っている屍よりも多くの者を彼は背負い続けている。気が遠くなるほど、ずっと。それが役目と言えど、狂わずに彼がここまで来れたってのはどれだけ奇跡的なことなのか。……本当に。言葉にならないよ。

国家は国民に様々なものを提供しなければならない、過去の世界のローマでは”パンとサーカス”という言葉があった。強大な軍事力を持つローマにおいて市民が求めるのは日々の糧と、その日々を楽しむための娯楽のみ。私たちが住む帝国も同じだ。食事は帝都が面する広大な海が支え、娯楽はこんな風に私たちが殺し合うことで支える。

「……さあ、話はもう終わりだ嬢ちゃん。ただ殺される、つても悪くないがせつかくだ。俺が積み上げてきたものでも見てから上に上がらな。」

「はいよ、じゃあ……。胸を借りさせてもらいますね。」

剣舞の時間はおしまい。

こっからは、殺し合いだ。

彼の体から、闘気が溢れてくる。目には見えないものだけど、感覚で解る。それまでのお遊びみたいなものじゃなく、彼が今出し切れるすべてをここで魅せてくれるはずだ。……さすがにここで瞬殺してしまうほど私は人間を止めていない。

〈加速〉 三倍速

速くなってしまった世界で、彼と対峙する。

かなりギリギリだがこのおじいちゃんも私の速さに対応できるように、振るう剣の先に自身の剣をスライドさせる。触れた彼の得物からは力は感じられない、だけどその技術は確かなもので、流れるように私の剣をスライドさせていく。受け流しの技術。……こんな場所で出会ってなきやアルに教えを受けさせてあげられないかと懇願していたかもしれないね。

だが、今は試合中だ。

真っ向から受け止める力がないのなら、受け流す。私もよくやるし相手がそれくらいしてくるのは解ってた。すぐに切り替え連撃を叩き込んでいく。上下左右、二連撃ずつの合計八連撃。相手が私に見せようとしてくるのなら、こっちもこっちで返す必要がある。三倍速だから集撃性は薄いけど対応がしにくい攻撃だ。

「……へえ。」

おじいちゃんはそれを、あの魔法使いの時に見せたスキルで防御する。剣では受けきれないと悟ったのだろう。

にしてもこの感覚……、まるで何か水のようなものを切ったような感じ。その肉体を切っているはずなのに、剣が通り抜けていく。名前を付けるとすれば……、『液状化』か？ 体を一時的に液体に近い状態にすることで攻撃の無効化などができるといいう防御系スキル。なるほどね、クールタイムやデメリットはあるだろうけど剣闘士を普通にするのならこれほど良い防御スキルはないだろう。

「ツブね！ どんな速さしてんだ！」

「そりゃ私それで生き残ってるからね！」

そこから何度も打ち合っていくうちに、どんどん彼の動きが鈍くなっていく。スキルの発動も連続は難しいらしく、剣を振り抜く瞬間に『液状化』が切れてしまったりと少しずつ彼の体に傷が増えていく。

私は一度も攻撃を受けていない、いや攻撃自体されていない。彼が

攻撃に転じられないように動いているからであり、彼もそれを望んでいる。この人が人生を捧げたのは守りの剣であって、そこに攻めは最低限しか存在していない。隙が生じた際に、差し込むためだけのもの。それ以外の戦い方もできるのだろうが、私に見せてくれているのはそれだけだ。

「そろそろだよ。」

「……ああ、悔いはない。」

彼の体は、もうその役目を終わろうとしている。

一思いに。

〈加速〉 五倍速

一閃。

これで、二回戦突破だ。

……ああ、また背負うものが大きくなっちゃった。

16：第三回戦の始め

「けひゃひゃひゃひゃ！ 血イ！ 血イみせろオ！」

第三回戦、第一試合。おじいちゃんの想いを受けとった翌日、私は気狂いの相手をしていた。

しかも、運の悪いことに。狂ったまま、化け物”になっちゃった奴だ。



「はは、一人での行動となるとやっぱりちよつと寂しいかな？」

おじいちゃんとの試合が終わった後、私は一人で観客席に座って試合を見ていた。ここは奴隷なんか来ることができない市民の場所、そういうアウェー感を感じているのもあって一人でこの場にいることがひどく辛いように思える。アルが傍にいてくれれば「師匠としての私」、「大人としての私」が前にでて彼女に年長者としての背中を見せてあげられたらだろうけど、今はただの”私”だ。

昔と何も変わらない、肉体的な死と、精神的な死に強く怯えている私。

……まあ、その話は置いておくことにしよう。

彼との試合が終わった後。二回戦以降は試合数の関係上連日戦い続けることになるため直帰して休息を取りたいところだったが、おじいちゃんのおかげで私は体力の余裕があった。一晩眠れば完全に回復できるくらいなのね？

だから一回戦の時と同じように次戦う相手の情報収集がてら、観戦

に行こうとしたんだけど……。出場する選手がちよつと”アレ”でね。魔法使いくんとおじいちゃんの試合の時に私が耳を塞いだせいで何が起きたのかを何となく理解してしまったアルを、若干精神的な不調を抱えている彼女を連れていくのはダメだと判断した。

というわけでチケツトと外套を持ってきてくれたオーナー付き奴隷ちゃんにうちの子を宿舎のタクパルのところまで送ってもらうことをお願いした後は、私一人で観戦ってわけだ。何かいつもアルと一緒に過ごしてるし、久しぶりの単独行動って奴。色々思うところはあるけれど、今日はちゃんと観戦して情報収集に努めることにいたしましょうか。

「……でもまあ、結果はねえ？」

はつきり言って、今回の試合の結果は見えている。いや前回の結果予想思いつきり外した私が言うことではないかもしれないが、もうこの試合は見えているのだ。同じことを多くの者が考えているようで、さつきちらりと見たオツズは片方が1・2ととんでもないことになっている。あ、これ払い戻し金額の倍率ね？　つまり賭けてもあんまり利益でねえなあってこと。

そんな大注目目の剣闘士の二つ名は”血雨”、私がアルに見せるべきではないと判断した戦い方をする奴だ。

コイツの戦い方は……。まあなんとというか悪い意味で”派手”。男の剣闘士で、二刀流。人の身長ぐらいの刃渡りがある長い剣を振り回しながら戦うこいつは試合が終わった後に、闘技場を血まみれにする。試合中も血飛沫が豪快に飛び散る、まあ派手だし結構人気のある剣闘士みたいね。

これはオーナーのくれた調査書に書いてあったんだけど、どうやらこの血吹雪は切断した時に出る、って感じのものじゃなくて。肉がはじけ飛んで霧散するって感じらしい。彼の嗜好が人を痛めつける事らしく試合中端から順に血へと変えていって、最後は一つの肉片すら残さず液体へと変えるんだって。すつごくスプラッタ、だから”血雨

” っ て 言 う ん で す ね え 。

「正直私も見たくないんだけど……、調べなきゃなあ。」

戦い方的にも、実績的にもオーナーが結構警戒していた相手らしく、色々調べたらしいんだけど相手のオーナーも結構やり手らしく情報が全く集まらなかったらしい。手に入ったのは直近の試合でのデータだけで、それ以外は大概ブラフをつかまされたってことが報告書には書かれている。

つまり奴がおそらく『スキル』を使っているだろう『肉を血になるまで弾き飛ばすことができる高威力の攻撃』の正体を見抜く必要がある。

最適は全て避け続けるってことなんだけど……、時たま回避不能の攻撃をしてくる奴もいるのだ。たしか……、『必中』とかいうスキルだっけ。回避されそうな攻撃の軌道を無理やり変えて当ててくるスキル。何かに当たったことが判定になってるみたいだから剣とかで防御できれば大丈夫ではあるんだけど、そんな高威力まともに受けたら剣どころか私の体も危ない。

そう言うのに対策するためにもちゃんと観察しませんと。

「……お、出てきた。」

明らかに濁って光のない眼、口は半開きで何か薬でもやってるのかわかせる風貌。……裏でよく見た狂った連中と全く同じ匂いがある。ああ、覚悟してたけど最悪。眼にも入れたくない。

おじいちゃんやタクパルといった珍しい善の心を持ったまま大成した剣闘士が存在するように、その対極も存在している。この最悪な世界で心が壊れ行くところまで行ってしまった剣闘士だ。正直、こいつが元々そんな性格だったのか。それとも剣闘士として戦い続けた結果そうなったのかはわからない。……だが、今狂ったように楽しそうな笑みを浮かべているコイツが、殺しを楽しんでいるのは確

か。裏じゃ珍しくない、というか観客がしていた目と一緒。

普通、仕事を楽しんでいると言えば素晴らしいことのように聞こえるだろうが、私たち剣闘士の仕事は殺し合いだ。この世界じゃまだあり得ることなのかもしれないが、違う世界で生まれその常識を持つ私にとってはクソ以外の何物でもない。

「それに。ある意味、私の一つ。」

表が最悪なら、裏が地獄。あつちでは完全に精神が壊れてしまった奴を何度も見てきた。もちろん順応する奴もいたが、大半は壊れて消えていく。壊れて使い物にならなくなった奴隷なんかゴミ以下だ。男なら知りたくもない生物の餌、女なら使えるところだけ使って後は処分。そんな世界だった。……いつ自分が壊れてしまうのか、それともこの地獄に慣れてしまうのか。そんな恐怖に怯えていたことを思い出してしまう。

『加速』は、強力なスキルだ。単純なスピードだけが上がるのではなく、自分の感じる時間の速度が変化する。自身だけ世界から切り離して、倍速を掛けているようなものだ。速く振るわれた剣はその分破壊力が増し、敵を簡単に切り殺すことができる。

あいつは、私があのまま先代のオーナーに飼われ続けて。アルとも出会わずに裏に居続けた結果慣れてしまった可能性の一つなのだろう。……まああそこまで私はひどくならないと信じたいが。

「……まあいい。考えないようにしよう、どうせ奴の重みは変わらない。」

殺すのに、葛藤しないで済む相手だ。そこには命の尊さ以上のものは存在していない。

『試合開始イ！』

「おっと、仕事仕事。」

実況の声で意識が切り替わる、誰も得しない自分語りなんかやめて観察のお時間と行きましょう。

長く細く薄い長剣、二刀流ってことはまあ自傷防止で片刃だろうか。赤く塗られた塗装のせいでは何の金属かはわからないけどそれを大きく振り回しながら”血雨”が攻撃を開始する。

うん、相変わらず顔は狂ったような表情だけど技術はちゃんあるみたいだ。軽量化されてるとは言え人の身長ぐらいある剣を両手で振り回すってのは相当な筋力がある。振りの速度も結構出てるし見かけ倒れの剣闘士ではないみたいだ。足さばきも……、うん。一般的な剣闘士よりはだいぶ上。スキルなしの単純な戦闘能力で見ても”化け物”の要求値は軽くこえていると見た。

「普通に強いな。」

長い剣はその分攻撃範囲が広がる。避けるにしても、受け流すにしても、受け止めるにしても普通の剣とは大違いだ。しかも二本。相手の名も知らぬ剣闘士も少しはやるみたいだけど、血雨が作った剣の檻から抜け出せていない。最初は回避できてたけど途中から剣で受け止め始めた。抜け出せないというプレッシャーからか、どんどん対戦相手の顔色が悪くなってくる。

「うーん、もうちよつと頑張ってくれない……、あ。」

結構な時間が経って、どんどん対戦相手くんの顔色が悪くなっていくんだけど未だ血雨のスキルが何かは解らない。装備とかの魔化の効果とかもありうるから、ってことで色々考えながら見てただけだね。やっぱり観客席からだど距離があるから解るものも解んない。なので何か変化起きないかなあ、と思っただらすごくいい一撃貰っちゃった。

当たった手首から下がそのままはじけ飛ぶ。抉り取る、とかじゃな

くてほんとに爆発したみたいな感じだ。……攻撃したところを爆破する能力か？ 解らん。……まあ試合の方はそこから崩れて後は楽しい楽しい残虐解体ショーの始まりだ。私？ もちろん途中で帰ったよ？ あんなもの見たくないし。本当にアルちゃん連れてこなくてよかったよね。



「けひゃひゃひゃひゃひゃ！」

「うる、さいッ！」

マジでうるさかったので隙を見てその顔面を思いっきり蹴飛ばす。そのまま地面に足跡を付けながら吹き飛ばされる彼、だけど顔を後ろに仰け反らせただけですぐにケロリとその憎たらしい顔を見せつけてくる。倍速掛けて本気で蹴ったはずなのに……、こいつ防御系のスキルも収めてんのか？

「狂ってる強者ほど面倒ってよく聞くけどなんで私に当たるかなあ？
ッ！」

「女の血イ！ 浴びせろ！ 浴びせろオ！」

ああ、ほんとに狂ってる。狂ってるくせに強いからさらに腹が立つ。こいつが二本の長剣を用いて作り上げる檻。五倍速ならまだ隙を見て抜け出すことはできるけど、少しでも速度を落とせば喰らってしまう。明らかに昨日試合で見せたソレとは精度も速度も違う。しかも試合開始前に『強い女の血は久しぶりだよなあ！ その顔がどこまでキレイに歪むのか……、楽しみイ！』とか言ってくるし。

あゝッ！ 早く殺して終わらせたいのに普通に強いせいで無理

じゃねえかクソ！

前世見たスパイ映画の赤いレーザーを素早く通り抜けていく演者たちのように、こいつが振るう剣を避けていく。こっちもこっちで攻撃に転じたいところだけど、総合的な技術で言ったらあっちの方が上みたいで、五倍速の世界に入ってるつてのに向に攻め入る隙が無い。ロングソードで叩き切ろうにもその動作に入る前にあっちの剣が飛んでくるし、レイピアで突きをしようにもそのなっがい剣で防がれる。

コイツの着ている鎧、軽装タイプのだけど明らかに昨日の物とは違う。おそらく施されている魔化も違うものになっているのだろう。私対策ってことで『速度上昇』とか『眼力上昇』とかが付いているのかもしれない。こういう対策されるつてことは理解してたけど実際やられると面倒なことこの上ない。

もう！ 私のスピードに対応するためにそっちも速度をあげちゃったら……、単純な力押ししかできないじゃないの！

簡単な例になるけど……、時速40キロで走る車と、時速200キロで走る車。ぶつかったらどっちが痛い？

武装をロングソードではなくレイピアに換装、ロングソードだと振り下ろすなどの攻撃がメインになって相手に当たるまでの時間が長くなり、対応されてしまう。だからこそ直線で突き刺す。防御されてもいい、いやむしろ剣で防げ。何の材質か解らんがとりあえずこれで突きまくって剣ごと破壊する。

「……そう、『必中』。」

「ツ！ マズー！」

剣の軌道が、人体では不可能な速度で書き換えられる。下に向かって振り下ろされたはずの剣は、最初から私に向かって振られていたかのように変化し、この身を切り裂こうと迫ってくる。

レイピアで受けるのは、不可。受け流すにもレイピアの角度があつてない。攻撃に転じようとしたせいで間に合わない。回避も無理。

鎧で受けるのも……、昨日のアレを見せられると不安しかない。一撃でも食らえばアウトの可能性もある。ならば、

〈加速〉 七倍速

ギアをさらに上げて対応する。ロングソードを今から引き抜いて迎え撃つには剣が重すぎる、間に合わない。あと残っているのは……。

体を無理やり振りながらレイピアの鞘を引き抜き、その剣へと当てる。七倍速のせいかわからない、それともあの鍛冶師の子が強く作ってくれたおかげか、鞘は奴の剣を弾き飛ばし無理やり距離を作ること成功する。

その隙を逃さぬように後ろへと飛び去り、『加速』を解除する。

「……………はあ、……………はあ。」

体が重い、脳も弾けそうになるほど痛い。やっぱりまだ七倍速に私の体は対応できてない。……………だけど、六倍速じゃ鞘での防御は間に合わなかった。アレが最善手ではあったけど……………、功を焦り過ぎた。気を付けないと。傷は付いたがまだ使える鞘を元の場所に戻しながら、息を整える。

「ようやく、当たったねえ？　これで一回めくえ。」
「……………気持ち悪い。」

加速を解除したおかげで奴の声がようやくやく等速で聞こえるようになる。聞き取りやすくなつたが、何も嬉しくはない。とりあえず、

方針の転換だ。武器の破壊を五倍速で狙いに行くんじゃない、一戦目と同じように七倍速で勝負を決めに行くことにしよう。こいつも”化け物”の一人ではあるがスタミナが無尽蔵ってわけではないはずだ。集中力が切れた瞬間を狙って『加速』を起動し、決める。

「つぎはく、四倍。あひや、あひやひや！ あひやひやひやひや！」

17：勝利と、次と

「つぎはく、四倍。あひや、あひやひや！ あひやひやひやひや！」

……四倍？

コイツ今四倍って言ったか？

「あひや？ 気づいた？ 気づいたよねえ？ だあいせえいかい!? あひやひや！ ……当たれば当たるほど破壊力が上がっていく。そおくんなにキレイな顔の下にはどんな血が流れているのか……、たあのしみ。」

思わず、身震いしてしまう。恐怖とか言うよりも単純に気持ち悪い。

なんと言えばいいのだろうか、性別とか云々言う前にもう同じ生物としてこいつを受け入れることができない。お前ほんとに人間か？ 人間に似てるだけの魔物とかだったりしない？ 早く死んでほしいんですけど。

まあ言葉だけで死ぬならいくらでも耳元でささやいてやるが、実際にそんなことができるはずがない。もう一度『加速』、五倍速を用いて思考速度を速めていく。わざわざあっちが情報を開示してくれたんだ、ストレスやプレッシャーを与えてこっちのミスを誘発するつもりだろうが……、私に曝け出したことを後悔させてやる。

さっきこの気狂いは『当たれば当たるほど強くなる』と言っていた。そして『次は四倍』ということも。まあまともに考えれば今は『二倍』、そこから考えるのは……、攻撃が当たった分だけ攻撃力が倍されていくスキルだろう。名前は……、『倍撃』とかだろうか？

これの上限がどれほどなのかはわからないが、今は際限なしと考えるておいた方がいいだろう。……道理で剣で切ったところが爆散するわけだ。私の『加速』でこのタイプのバフが半ばチートなのは身に染

みている。二倍は、四倍に。四倍は八倍に。どんどん回数を重ねるごとにその攻撃力は天文学的な数字になっていく。

「受け流し、すらもカウントされそうだよね……。」

多分私、もしくは私が持っているものへのヒット数で倍率が上がっていくんだろう。レイピアの鞘でこいつが『当たった』と判断しているのなら、こつから先は回避オンリーで行かなきゃならない。奴のクソ長い剣に当たれば当たるほどこつちが不利になっていく。……そういうえば昨日の試合では、この気狂いの対戦相手だった奴が試合の後半になるほど顔色が悪くなっていた。ようやく合点がいったよ。

(となると、どう回避していくかって話だけど……。難しいな。)

相手は狂っているが、戦いにおいてはひどくまともだ。自分の強みも解っているし、こつちの弱みも理解している。そしてどうやって私の弱みを突きながら、自身の強みを押し付けたいのかも理解しているのだろう。なんだ？ これ戦いの果てに気がおかしくなった奴じゃなくて、元々そう言う性癖だったタイプだなコイツ。性癖とか『みんな違ってみんなダメ』って言うけどこいつのダメレベルは論外だぞ？

普通じゃ使えないような長さの剣を二本扱うことで敵に当てる可能性を最大まで上げ、そして『必中』持ちだから当てようと思えば際限なくできる。たしかクールタイムがあったと思うから、常時『必中』を発動し続けることはできないだろうが……。その間隔が解らん。まだ使えないのかもしれないし、すでに発動可能状態になっているのかもしれない。

『必中』自体は何かに当たった瞬間にその役目を終える、別に私の体に当たるまで狙い続けてくるような化け物スキルではない。故に鞘とか剣とか、そこそ道端に落ちてる石とかに当てられれば無効化は可能。……だけど『倍撃』はそうはいかない、おそらくただでさつき上

げたすべてでカウントが進行する。

五倍速でなら通常の攻撃は避け続けることができる、だが『必中』を使われると普通に危うい。避けたと思っただけの斬撃がUターンしてこっちに戻ってくるのだ。さすがに七倍速を使用しないと対処はできないだろうし、その速度でも回避が間に合わない可能性も十分ある。

「あひや！ あひやひやひやひや！！」

おっと、ちよつと考えに浸り過ぎていたせいであつちから攻撃してきた。

とりあえず奴の”檻”に入らないギリギリのラインで様子を見ることにしよう。この気狂いは自分のテリトリー、剣で作る檻の中でこそ実力を十全に発揮するタイプだろう。距離を大きめに取りながら突破策を探る。

大体、2mほど。槍の間合いを保持しながら敵の振るう剣を避けていく。さつき鞘で受けた感じコイツ自身の攻撃力つてのはそこまで大したことはなかった。だが、おそらく今の攻撃力はその倍。まだ受け流すことはできるだろうが、その次はどうなるか解らん。体感的に8倍くらいまでならギリギリ受け流すことは可能だろうが、多分そのタイミングで剣がぶっ壊れる。

かといってこのまま踏み込まないのはダメ。こっちの剣が届く間合いまで近づかないと試合は終わらない、でも近づいたら相手のテリトリー。

「とッー！」

「血ィ血ィ血ィ血ィ！」

……っし、このままだどうにもならんし、動くことにしましょうか！

「よい、しよっとー！」

五倍速をそのままに一步大きく下がった後に思いつきり地面に向かって自身の剣を叩きつける。

闘技場の地面は固い土の上に砂がまぶしてある。血とかの処理を簡略化したり、滑り止めになるからね？ それを、目暗ましに使うわけだ。ステージの管理してる職員たちは文句言われるだろうが……、どうせこの気狂いが勝てば面倒な血の処理をさせられてたんだ。私が綺麗に殺してあげるから許してね。

巻き上がった砂でこの身を隠す、私もこの砂埃のなか相手を見通すスキルなんか持ってないから見えないけど。こいつが何をするかぐらひは解る。その趣味嗜好は狂っていても……、”戦闘”ならまともなんだろう？

何処から来るか解らない。狂っていればそんな巻き上がる砂埃の中に入り込んできてもおかしくないだろうが、まともなら入らない。むしろ後退し防御を固める。目の前のコイツも、そうした。視界は未だ遮られているが足音は突っ込んでくるようなものではなく、後ろに下がるような控えめな音。

(一回戦で見せちゃったから解るだろうけど……、それもコミー！)

鎧野郎にやったように、ロングソードを相手に向かってぶん投げる。少し遅れて、私の剣が弾かれる音。一回戦ではここで私は上空へと飛び上がり、対戦相手の眼にレイピアを突き刺した。この気狂いならそれを知っているだろう。理解しているだろう。実際、相手の気を逸らしてから人間の一番の死角である上からの攻撃は剣神祭以外の試合でも何回か使った。

だからこそ、上を警戒するはずだ。

あはは、鎧の取り外し簡単にしてもらって正解だった！ 店主愛してるよー！

「そこオー！」

砂埃が晴れ始めたころ、あの気狂いの視界の中には。上空に飛び上がり相手を攻撃しようとする私の影が見えただろう。そこに向かって、彼の長剣が突き出される。先ほど私が投げた長剣を弾いたことで現在の攻撃力は四倍。”化け物”級の筋力が四倍になって突き出される突き。鎧すら簡単に貫きその肉体を破壊する攻撃。

だが、彼の手に残った感触は金属の物のみ。肉の感触は、一切ない。

「残念、でしたア！」

下から聞こえるのは、私の声。そう！ 鎧の上半身部分だけ脱いでレイピアを持った私！

鍛冶屋の店長が頑張ってくれたおかげで私の鎧の着脱は結構簡単！ どうせ喰らったら壊れてただろうし、そも私がここで死ねば何の意味がない！ ちよつともつたいなさとか、次の試合のこととか考えちゃうけど今これをせずに負けるぐらいならやった方がいい！

姿勢を低く、地面を滑るように相手に近づきレイピアで刺し殺す。どうせそれじゃ殺せないだろうからそつからは体術での肉弾戦だ、とにかくダメージ与えて短期決戦に持ち込む。あとできれば武器を落として敵の攻撃力も下げる！

狙うは、その手。

「……『必中』。」

まあそう来るよねツ！

相手の右手に握られた長剣の先には貫かれた私の鎧、となると左手の方はフリーになる。さっきの鎧にした突きに『必中』を使わず、残してたってことはやっぱコイツ戦闘ではまともだ！ ありがとう！ こつちも想定がしやすい！

彼の左手の剣がこつちに向かって飛んでくるのは想定済みだ、だか

らこそこつちも二刀流の用意ができた。まあ正確には鞘なんだけど！

「ツうー！」

ロングソードの鞘とレイピアの鞘、両方の鞘を左手で持ち相手の攻撃を受け止める。『倍撃』の効果によって八倍になったそれは瞬時に鞘を弾き飛ばすが、それで『必中』の効果は終わりほんの一瞬動きが止まる。そこを見落とすほど私は甘くない。

元々用意していたレイピアを、その左手に向かって突き刺す。

「ギリイッー！」

化け物の様な声が奴の口から洩れ、左手からその長剣が落ちる。

〈加速〉 七倍速

その瞬間、私の中のギアをもう一段上げ。その剣が地面に落ちる前に取る。

この加速した世界の中で動き続けることは辛いけど、ここでやらなきゃ負ける。『倍撃』のカウント的に次は16倍だ、やられる前にやらないといけない。

だけど、この剣の刃の向き方的にこつから首を狙うのはちよつとムズイ。となると……、右手か。

奴の剣を下から上に切り上げ、剣をもつ右手を根元から断ち切る。

(これ以上はちよつと、無理！ 速度低下、五倍に！)

全身から聞こえる悲鳴に耐えかね、速度を下げた世界のままレイピアで突きさした方の左手も狙う。

「おッ、らァー！」

成功。こつちの疲弊具合も結構ヤバイが、とりあえず相手の戦闘能力を奪うのに成功した。……マジでキツイ、これ早く終わらせないとまずい。七倍速使い過ぎた。いや七倍の世界で動き過ぎた。考えすぎた。

「血イ、血い……。これは、おれえの？」

「永遠に、自分のでも見とけッ！」



「ふえええ!! 疲れたもおくん！ もうアルちゃんのお腹の匂い嗅いで今日は寝るッ！」

「ちよー！ 師匠！」

予想外のことには驚いて慌てるアルちゃんを楽しみながら帰り道、闘技場の地下道を歩く。気狂い？ ああ自分の血の色を楽しむ前に首を刎ねたよ、これで世界から邪悪が一人減った。……だけど代償とし

てこの疲労は普通に明日に響くな。それに装備も結構やられちゃった。

上の鎧は胸のところ綺麗に抉り取られてるし、投げつけたロングソードもへこんじゃってる。これをしなけりゃ勝てなかっただろうし、負けはしなかったかもしれないが七倍速を使い過ぎて明日の試合に出れないレベルになっていただろう。棄権とかできるシステムならよかったんだけどこのお祭り片道切符だからねえ……。ま、今は生き残れたことをよしとしようか。

「とうるかアル、君私のお腹でハスハスしてたのに私が逆にそれをしちゃだめってのはひどくない？　うう、師匠ちゃん悲しい。」
「そ、そうですけど……！」

そうやってふざけながら歩いていると、向こう側から走ってくる音。誰だろうと思ってみればウチのオーナーに、司教のレトウスさん。あと鍛冶屋のドロちゃんだ。おお、全員集合感があるね？　どしたんみんな？　正直もう演技する余裕ないので、まだ本性表してないドロちゃんとは別れてきて欲しかったんだけど。

え？　ヘンリエツタ様？　この前聞いたけど剣神祭の期間中は皇帝サマの近くでなんかずっと仕事みたいで、『応援いけなくてごめんなさい！　あなたの勝利をずっと祈ってるわ！　ところで私の（以下略）みたいなことを言ってたから来れないと思う。

「すでにこちらから説明しておいた。他言無用の契約もレトウス殿を立会人に結んでいるから安心しろ。」

「さようで……。」

私の消耗具合を見て不憫に思ってくれたのか、レトウスさんことレトちゃんが私に回復魔法を施してくれる。淡い緑の光が少しずつ私の体を包んでいき、ちよつとずつではあるがさつきまで感じていた全身の痛みが和らいでいく。たすかるう……。

「ごめんねレトちゃん。」

「いえいえ、お気になさらず。」

「それでオーナー、わざわざ来てくれるなんてもしかして心配してくれた？ うう、ビクトリアちゃん愛されてるうー！」

「……まだ軽口が叩けるくらいの元気は残っているようだな。」

まあこれがないや私じゃないし、死ぬまでこういうのは続けるから覚悟しておいてよね！ つと謎のツンデレムーブをかましているとおナーがドロちゃんの方を向く。あく、うん。ごめんね作ってくれたもんぶつ壊しちゃって。あと剣さつきまで杖にしてたし……、もしかしてそういうの怒っちゃうタイプの鍛冶師だった？ だったらマジでゴメン。

「や、ちゃうちゃう。それは気にせんでええで。装備つてのは使う奴が自由に使つてええもんや、そりや雑にやられたら思うところあるけどちゃんと手入れしてもらってるみたいやしな。……でもまあ、派手にやられたもんやなあ。」

どうやら初日から何かあったときに備えて回復が使えるこつちの事情が分かるレトちゃんと、装備とか担当のドロちゃんを招集してみた。第一第二回戦は何もなかったからそのまま帰ったらしいけど、今日は私がヤバそうだったから飛んできてくれたみたい。

「んでドロちゃん、思いっきり穴空いてるんだけど……。どうにかなりそう？ 明日までに。」

体の方はレトちゃんが回復してくれてるし、明日までには間に合うと思う。けど明らかに無理難題を吹っ掛けられたようなドロちゃんの顔を見るに装備の方は間に合わなさそう。

「上半身の方やけど、さすがに思いつきり穴あいとるし、明日の朝にっ
てのは無理やな……。あ、でも剣の方は大丈夫やで。一月前ぐらい
に、ロングソードもレイピアの方もヘンリの姐さんから何かあったと
きのように量産しとけえ、つて言われて予備作つといたから後で宿舎
やったか？ そつちに持つてくわ。」

「マジ？」

「マジや！ 安心しときい！ 鎧の方も決勝戦には間に合わせるから
な！」

「……やっぱあんた仕事はやない？」

それに実際に試合みせてもろたおかげでより姉ちゃんに”ふいつ
と”した鎧にしてやるわ！ あと魔化の方も最初から見直して詰め
直すでえ！ あ、全身鎧着ないと効果発動せんからちゃんと全部返し
てや？ ということで、ドロちゃんが言うには一回全部預ける必要が
あるらしい。一応その代わりとして彼女のお店にある一番いい装備
を代わりの剣と一緒に持つてきてくれるらしい。え、でもそのお代の
方は……、あ。オーナーが出してくれるのね。ありがとさん。

「ふう〜、それ聞いて安心したよ。……あ、オーナー。さすがに今日
観戦して情報収集は無理そうだからお願いしていい？」

「構わん、すでに手を回している。」

「お仕事が早いことぞ。」

……いや本当に助かる。多分これ他のオーナーだったらこんな手
厚くしてもらえなかった可能性あるし、そもこの人たちと出会えな
かった可能性もあるわけだから……。とにかく万物に感謝。

「……じゃあ、アルちゃん。一緒に帰りましょうか。」

「はいー。」

残り、二戦。勝たなきや。

18：アル吸い

「スウ〜スウ〜、はあく〜スウ〜。うん、なんか満たされる。」
「／／／／／／／／／／ツ!!!」

寝台の上に座り、開いた股の間にアルちゃんを座らせ両手で優しく抱きしめる。するとちようどいいところ、にアルちゃんの頭があるわけで……。やっぱ顔を沈めるのにはちようどいいんですよ！　なんかアルちゃんから声にならないような声が漏れてるし、ちらつと見たお耳が真っかつかだし。うむ、とてもかわいい。かわいさだけで人間国宝級だ。

「ああ、一生こうしていたい。」

宿舎の自室、観客たちに見つかからないように闘技場から逃げてきた私たちは無事いつもの場所で休息を取っていた。普段はアルちゃんと私だけなんだけど……。今日は珍しくお客さんが来ている。人のよさそうなおじいちゃん司教様ことレトウスさん、私が勝手にレトちゃんって呼んでいる人だ。自身の許容速度を大幅に超えた『加速』によって、全身打撲みみたいな状態になっていた私を回復させるために来てもらっている。

「あ、あの！　師匠！　や、やめてくださると……！」

「あく〜！　わたしあの気狂いと戦って精神的にも疲れちゃったなあ！

誰かに癒してほしいんだけどなあ！」

「にゆう……。」

実際、もう自分ここから出たくないぐらいには肉体的にも精神的にも疲弊している。肉体の方はレトちゃんの『回復魔法』によって何とかなるだろうが、精神面はマジで如何にもならない。明日も明後日も

試合だし、どうせ今日の氣狂いに勝るとも劣らない奴らばかりなんだろう。そんな相手達と戦う時に精神にダメージが残ってたら勝てるものも勝てない。故に回復が必要なのだよ愛弟子。

「で、でも司教様の前でやることじゃないと思います！」

「そう？　大丈夫だよねレトちゃん。」

「ほほ！　お氣になさらず。」

だつてさ？　残念ながらアルちゃんに味方はいないのだよ……！

それにそんなに強く抱きしめてないから抜け出そうと思えばいつでも抜け出せるでしょ？　もうぐ！　アルちゃんつてば恥ずかしがり屋さん！　ああ、ほんとに。お肌とか何もしなくてもすすべだし、ふにふにしてるし……。こんな子を剣闘士になんかささせるわけにはいかないんだよなあ……。

「にしても、すごいお部屋ですな。」

「そう？」

「ええ、剣闘士の方々に関しては、我々教会があまり手を出せる事ではありませんでしたので……。噂ではもつと質素なお部屋かと。」

「ああそういう。」

確かに私のお部屋かなり豪華だもんねえ？　フアンの子たちからもらった装飾品やら調度品やらが整理できずに箱に入ったまま山になつてるところあるし、何故か大理石の私の像とかあるし。寝台も私とアルの分で二つ、しかもめっちゃ高級品。そもその部屋の大きさも一般的なご家庭の部屋より大分大きいもんねえ。二人で暮らしている、と言つても上層の市民並みにいい暮らしはさせてもらっている。

「私が上にいるから、だね。普通の奴隷はもつと酷いよ。大部屋の雑魚寝とかが普通、私も最初は襲われないように剣持ちながら寝てたも

ん。あとこの部屋で自分で買ったものとかほとんどないからね？
基本ファンのみんなからの頂き物。」

「……なるほど、そうでしたか。ご自身の石像がいくつかありましたので、てつきり自分が大好きな方かと。」

「あはー！ ないない！ いやむしろ送り付けてくるこの熱意がすごいって言うか、正直置く場所ないから困るって言うか……。」

元の世界のさ、ダビデ像とかサモトラケのニケみたいな彫刻あるでしょ？ あんなのが定期的に送られてくるのよ。とんでもない量の恋文と一緒に。彫刻家の人みたいでさ、まあすごく芸術家気質なんだろうね。お手紙の内容もとてもポエミーだった。最初は『わあ、すごいのが来た』って感じだったんだけど最近はもう置き場がなくて上着掛けとか、アクセサリー掛けみたいな立ち位置になって来てる。サイズがサイズだから色々困るし売るにも売れないからさ……。

そんなことを思いながら貰った像たちを眺めていると、レトちゃんの手を介して送られていた回復魔法の光が掻き消える。

「こんなものですか。ビクトリア殿、体の調子はいかがでしょう？」
「……うん、大丈夫そう。」

軽く両手を握ってみるが、特に異常なところはなさそうだ。体の節々で感じていた痛みももうない。

「治療の方はこれで以上となります、ご理解なさっているとは思いますが十分な食事と睡眠を忘れずに。」

「りよーかい、わざわざありがとね。」

長時間抱きしめ続けていたせいかわでだこになったアルちゃんを無理やり立たせて私も寝台から降り立つ。レトちゃんは司教だし普段のお仕事もあるだろう、それにこの人の性格的に理由を付けてすぐ帰りそうだ。お見送りぐらいちゃんやらなきや女が廢る、って奴

よ。

「宿舎の出入り口まで送るよ。ほらアル？　いくよ？」

おん？　どうしたアルちゃん？　師匠に匂い嗅がれ過ぎて恥ずかしい？　お嫁にいけない？　ちゃんと毎日洗ってるから大丈夫でしよう？　いい匂いだったからそんな恥ずかしがらない。ドーンとしときなさいドーンと。あと多分私がお婿さんぶん殴っちゃうから、一生お嫁に行かなくていいからね？　ずっとウチの子でいて。……ありや腰抜けちゃった？　ならレトちゃん送ってくるからちよつと待っててね。

「……可愛らしいことすな。」

「でしょ？　……あ、あげないからね？　『アルちゃんが欲しければ私を倒してからにしろ！』ってやつ。」

まあほんとにその時、アルちゃんが”この人と結婚する”とか言いながら誰か連れてきたら……。強さはもちろん身分とか経済力とか色々見るだろうなあ、ずっと傍にいてほしい気持ちはあるけど幸せになつて欲しいのは確かだし。私よりも”そつち”の方がいいのなら……。やば。ちよつと泣きそうになってきた。とりあえず私に勝てるぐらいの強さがなきゃ許してあげないんだからね！

そんな私の様子を見てなんと云えばいいのか困り、苦笑を浮かべる司教と共に宿舎の道を歩く。ちよつと視線をずらせば、同じオーナーを持つウチの後輩たちの姿が見える。剣神祭の時期ってこともあり、出場する剣闘士以外は暇な時期だ。ウチの宿舎にいる奴らも思い思いの時間を過ごしている。休みを謳歌する者もいれば鍛錬につき込む者も、性別種族問わずみんなが好きなことをしている。もうちよつと奥を覗けばタクパルが弟子以外の子たちの指導とかもやってるみたいだ。あいつ変に真面目だからねえ……。どっかで潰れなきゃいいけど。

「来た時にも思いましたが……、ここは明るいんですね。」
「……まあね。オーナーがオーナーだし、雰囲気いいでしょ。」

前にも言ったが、ウチのオーナーは守銭奴だ。剣闘士の価値を完全に金に変換して物事を考えてる奴、だから無理は基本させないしこつちの要望は結構通りやすい。長期間金を稼ぎ続けることができるように管理し、育成していくって感じた。まあ管理って言ってもそんな大したことはしてないんだけど。

簡単に言えば、頑張って結果が出たらその分生活環境とか食事とかのグレード上げてあげるよ、ってやつだ。金の卵を産む鶏である私やタクパルみたいな存在が生まれやすい土壌を維持してる感じね。普通のとこじやどんだけ試合に勝とうが評価なんかしてくれないし、最悪意味の分からない使い方をして殺されるとかザラ。

一応法で試合勝利時の賞金の取り分とか決まってるんだけど、『奴隷の財産は主人のもの』なので他のとこじや実質0、というオーナーもいる。一応最初は配分してくれるんだけど、宿舎内の施設利用料とかをクソ高くしたり、毎日の食事の代金として搾り取ったりとか。宿舎って言うって言う判定にしかない。マジで人権クソ喰らえ！
って感じだし、実際先代オーナーの時はそうだった。

今のオーナーは一応人間扱い、とまでは行かないけど生物としては見てくれるからねえ。私レベルなスター選手相手には普通に会話してくれるし、入ったばかりのペーパーでも”物”扱いはほとんどしてない。オーナーからしてみれば『やる気や意欲の力って思ったより大きいツピ！ だからそれを削ぐのは全く経済的じゃないツピ！あとビクトリアとかタクパルの成功例があるから間違ってるツピ！』とか言うんだろうなあ……。

「あ、あと根本的に”剣闘士に興味がない”ってのもあるかも。娯楽

としてじゃなくて商業として見てるからそこらへんしつかりしてるよね。品質管理つてやつさ。」

「……………どこもそうだとよいのですが。」

まあ興味がないせいでマジで戦いのこととか全く解らないらしいし、興行で市民たちが何に熱狂してるのか解らんって言ってた。試合とか全く見ないで結果だけ聞いておくような人だしねえ？ だからこそ剣神祭で闘技場に来ていたことはほんとに驚いたわけなんだけど。

実際、彼が剣闘士とかへの理解が深ければこのお祭りへの参加をもっと強く反対したのかもしれない。あの時は結構あつさり話が通ったけど、もつとこじれることも覚悟してたからねえ。彼が背中を押してくれたのも、私の試合の結果だけ見ていたからで、これまでの実績である『不敗』という記録への信頼だろうし。……………ま、ここら辺は終わった話だ。優勝してアルちゃんがお酒飲めるようになったころに笑い話にしてやろう。オーナーがずっと『ツッピ！』っていう語尾だったってこと。

……………やば、想像したらめっちゃ楽しそうじゃんか。生き残る理由がもう一つ増えたな！ そんな時はもう奴隷じゃないしあいつに私を拘束する権利なんかねえ！ 好き放題弄つてやろ！

「……………お？ あれは……………」

そんなことを考えながら緩む頬を押さえていると、宿舎の出入り口の方から走ってくる人影が見える。

「ビ、ビクトリア様！」

「あ、オーナーのお付きの。」

「第二試合！ 結果出ました！」



「こう、みゆみゆーんってなつて、ビジュって投げたらアバー！ って感じで！ あとゴゴゴゴ！ ってなった後にズシャー！ って感じで爆発したんですけど、そこをみよみよん！ と避けてぎざぎざ、ってしたら勝ってたんです！ 私剣闘士さんの試合初めて見たんですけど、とつてもすごかったです！」

「……………ごめん、もっかいお願いしていい？」

オーナーお付きの奴隷、私たちみたいに剣闘士として働くのではなくオーナーの本業のお手伝いや雑用を担当する奴隷。まあ部署違いの同僚って感じ？ その子がオーナーの代わりに情報収集してくれたみたいんだけど……、おいオーナー！ 明らかに人選ミスだろお前！ なんて不思議ちゃん雇ってたんの！ お前そういう趣味やったんかッ！

「あ、はい！ 最初からですね！」

オーナーの隠れたご趣味を推察しながらもう一度彼女の説明を聞く。……が、案の定全く解らない。一生懸命ジェスチャーなんかを踏まえて頑張ってくれているのは解るけど全然わからん。なんやお前、なんであの守銭奴のご主人に買ってもらえたんや？ あの人意味の伝わらない説明とか解説歯ぎしりしながら聞くタイプやで？ クソ嫌いな人やで？

……いやマジでなんで？

「……って感じですよ！」

「あ、うん。どうもありがとう。なんか。こう……、紙の資料とかある？」

「あ、はい！ はこちらですよ！」

ドロちゃんときつき会話したせいかな、それとも意味不明過ぎて脳がバグったのかはわからないがとりあえず紙の資料を要求してみればすぐに出てきた。この前オーナーから渡された資料の最新版だ。

えく、と。今日の試合は……、あ。この子？ この子勝ったの？
頑張つて書いた？ ……前のも？

……ああ、なるほど。口頭説明だけ壊滅的なタイプか。了解。ちなみに計算は……、できる？ そりゃすごい。奴隷商館で頑張つて覚えたの？ そおく、うんうん。これからも頑張つてねえ。

話を聞いているうちに理解したが、この子天然だが仕事はできるタイプみたいだ。まあそうでなきゃオーナー買わないよね。文字の読み書きも計算も、前にも言ったがこの世界じゃそれだけで食べていけるスキルだ。そもそも何かを”学ぶ”ってことが全然馴染みのない行動だからね。いざ奴隷商館とかで学ぶつてなつても全くできずに挫折してしまうとかもよくある話みたい。

「うん、了解。わざわざありがとう。……それで？ 次何かオーナーから言われてたりするの？」

「はい！ ドロ様がこちらに来た時ビクトリア様のお部屋までご案内するようにとー！」

「あ、そう？ じゃあお願いね。」

一言二言話して、ついでにレトちゃんのお見送りも代わってもらい自室に戻る。

ちよつとドロちゃんが来るまで資料を吟味させてもらおうとしよう。多分あの子に聞いても時間の無駄になっちゃうだろうし、これを読み込む方が有意義だ。多分オーナーも簡単な受け答えだけさせて、あとは資料作成とかやらせてるんだろうね、あの子が作ったらしいコレ、見やすいし。

「アル、こつちおいで。」

「あ、はいー!」

ほらこつち座り? もう他人いないから恥ずかしくないでしょ?
ほれほれ。

「……、ちよつとだけですからね!」

もちろん、ほら一緒に読みましょうか。

さて、次の対戦相手の剣闘士は……。うん、やっぱり珍しい女の剣闘士だね。

ウチの宿舎にも何人かいるのは知ってるけど、”化け物”に上がってくるまで残れているのは単純にすごい。私が言ったらダメな話かもしれないけど、一芸特化じゃこの世界生き残れないからねえ。人間族の女ってどうしても男に筋力とか体格で負けるからさ、生き残るには何かしらの特技がないとダメなのよ。だから女の剣闘士ってのは一芸を極めた奴が多い。

「ただそれじゃあ”化け物”、剣神祭でここまで残れるほどの実力にはなれない。今日の私の試合見てたら解るだろうけど、一芸特化タイプって何か対策取られると終わるのよね。今日は上手く行ったから生き残ったけど、もし私が剣技とかそう言うのを修めてなかったらすぐ死んでいただろう。一の矢、二の矢が必要ってわけだ。」

「まあつまり、次の相手は……。何かしらの一芸を極めながら、他にも侮れない武器を持っている。ってことだ。」

「んで、その一芸が何なのかというと……。」

スキル『裂穴』、空間に裂けたような穴を生成することができるスキル。なおその穴はスキル使用者視界内のどこにでも生成することができ、穴同士は繋がっている。早い話、空間系の転移スキルだ。二つの穴を作ってそこをつなげる感じ。」

『「現在最高12、6セットの穴の同時生成を確認しており、投げナイフとレイピアを利用した戦闘を行っている。穴のサイズは同時に生成した穴の数と関係があるようで、使用者が通り抜けることができる穴は1つずつでしか生成できないと考えられる。』、ね。」

『「え、それって人の体の中に穴を作れば終わりなんじゃ……。』」
『「物体や生物の内部には生成できない可能性が高い」、だって。」

アルの言うとおりそれをされるともう勝ち目がなくなっちゃうわけだが、その心配は一応しなくていいみたい。過去の試合の情報とかも調べてくれたみたいだけど、そういう勝ち方をしている試合はなかったそうだ。……。だけど、相手の体ギリギリに穴を生成して瞬殺とかはあったみたい。」

「……どうせ私対策はしてくるだろうし、最初からギア上げてやるしかないか。」

「対策、ですか？」

そう言えばアルには話してなかったか。今日の相手なんか私の速さに若干対応しているような動きしてたでしょ？ 多分というか絶対私対策に自身の動体視力とか速度とかのバフが掛かる装備してたのよ。一回戦ならまだしももう次準決勝だからね、さすがに相手が用意してないっていうことは考えられないよなあ、つて。

「まあそれでも私の方が速いのは変わりないんだけど、こっちの攻撃に反応してくるぐらいはするだろうね。」

今日のあの気狂いでも、私の五倍の速度と同じスピードで動いていたわけではない。装備によるバフもそこまで大きくはないのだろう。でも、あいつは自身の技術と能力で私を確実に殺しに来ていた。圧倒的な速度の差が、まだ何とかできる速度になったってことだろう。

「それに投げナイフか……、最悪毒とかも使ってきてそうだな。苦手だけど盾でも使うか？」

19：素の顔

「……やっぱ視界とか重心とか結構変わるな。」

使えないこともないけど、いざとなったら投擲武器としてきつさと捨てるが吉か。

木製に金属の縁、そこにワイバーンの素材を張り付けることで強化した盾を扱いながらそんなことを考える。あの後店の商品を全部荷台に乗せて運んできたドロちゃんに色々用意してもらった品の一つだ。本人からすれば『1つ1つ丁寧には作ってるけど量産品だからあんまり期待しすぎないで』と言われたが、私の知る闘技場にやって来た冒険者がこのレベルの品を持っていたことは少ない。十分実戦に耐える品だ。

円盾にしては少し小さめなそれをフリスビーのように投げるフォームを確認した後、左手の甲にそれを固定する。手で握るタイプは私無理だからね、ちゃんと固定できるのがいい。

「どう、アル？」

「……なんでしたっけ？ ヤミオチ……、でしたか？ それみたいです。」

「あはー！ そりゃいいー！」

今の私は全身黒装備、ドロちゃんが持ってきてくれた革装備で全身を包んでいる。なんでも帝都近郊でワイバーンが大量発生したらしく、その素材が思いつきり値崩れしたそう。その皮を薬品で処理しさらに固くした後、防具として形を整えたのがこれだ。金属の鎧とかは体を包む、みたいな形だけど革装備は体に密着するタイプが多い。これも例に漏れず体のラインがしっかりと出ている。そのせいで闇堕ちビクトリアに見えたらしい。

ちなみに魔化は『毒耐性』、大半の毒の進行を遅らせてくれる効果

だ。やっぱり親和性の高いミスリルとかじゃないと複数の効果を付けるのは難しいんだって。ドロちゃんからは『軽量化』とか『速度向上』とか『耐久力向上』を勧められたけどこっちを選んだ。……今日の相手が私だったら毒とか普通に使うからね。ルール上、毒が使用禁止とかは記されてないし普通に使ってくるはずだ。

「……毒とか、本当に使ってくるでしょうか。」

「掠っただけで私の足を止められるかもしれない、そりやあやるでしようね。」

心配そうにするアルの頭を撫でてあげながら、『でも当たらなければどうということはない、でしょ?』と返してあげる。そうそう、そのために盾持ってきたんだし。ほら後ろに目を付けて注意深く確認すれば全部避けれるさ!

……ま、実際のところそれが不可能な可能性を考えてるから耐性つけてもらったんだけどね?

革装備自体軽めだから『軽量化』はそこまで必要じゃないし、『速度向上』や『耐久力向上』でそもそも速度や、私が耐えられる倍率をあげても0距離でナイフでも投げられた場合避けることは難しいだろう。

それに『速度』を上げたとしても体の耐久度は変わらないからあんまり意味がないし、『耐久力』も魔化を施してもらったとしても倍率が弱すぎて今とあんまり変わらないことが解っている。どこまで行っても”補助”でしかないし、意味がない強化をするぐらいならまだちよつとだけ意味のある『速度向上』をしてもらってる、ってだけだし。

「ドロちゃんができる他の魔化を前に試させてもらったけど全部イマイチだったしね、結局あの鎧は『軽量化』と『速度向上』のままってわけだ。……と、今使えない装備のことを考えてる場合じゃないね。」

今日の相手もまた強敵、でもあと二回勝てば晴れてこんなクソみたいな世界からおさらば。

その二回を超えるのがとんでもなく難しそうなんだけど……、もう折り返し地点は過ぎてるんだ。”傲慢”に行きましよう。

「さ、アル？ 私が勝つところをちゃんと見ときなさいな。」

「……………はいッー！」



地下道を抜け、上げられた鉄格子をくぐればすでに観客たちが歓声を上げている。準決勝ということもあり、熱気が段違いだ。今でさえ耳がイかれそうなレベルなのに、これが決勝になったらどうなるのだろうか。あんまりうるさいのというか、私の感性からすれば狂っているとも呼べるようなこの熱気に包まれるのは好ましいことではない。

そう、考えていると向こう側からも人影が。今日の対戦相手だ。

「……………へえ。」

女性的な丸みを帯びているが、私と同じくらいの背の高さ。180くらいだろうか。妖艶とも呼べるその肉体を包むのは紫のドレス、胸元を強調しながらも足の部分の布が大きく作られており、足元を隠しながら暗器を隠すのには最適な服装。手入れされた赤紫の長い髪も相まってまるで物語から出てきた悪役のお姫様みたいだ。

そんな一見キツそうな彼女が……、豹変する。

まるで、初めて憧れの人に会った村娘みたいに。

「貴方が、ビクトリア様ですか!？」
「ええ、レディ。」

初対面のイメージである冷たそうな雰囲気とはかけ離れており、その表情は非常に生娘のように喜びの感情が全面に出ている。心の奥底から私に出会えたことを喜び、はしゃいでいるファンと同じように。

ああ……、うそくさ。

もし私が単純な男だったら、その反応と容姿でころっと騙されていたかもしれない。が、私の女の部分が目の前のコイツに警鐘を鳴らしている。目の前にいるこのぼわぼわしている風に見せかけている女は、体の中にドス黒いものを抱えているってこと。殺意や悪意、そんなマイナスなものをこれでもかと凝縮し、口当たりの良い表情ですべてを上手く包み隠している。

「わあ！ わあ！ すごい！ 本物だ！」

喜びの感情を発露させて生娘のようにその場をびよんぴよんと飛び跳ねる彼女。ああ、胸が揺れているね。確かにそれは女の武器だし、使えるものを使うって姿勢には共感できるがもう少し絞ったらどうだ？ もうその大きさは贅肉の域だろ。……あ、もしかしてお前私アルちゃんのこと溺愛してるってことから同性愛者と思ってる？

脳内で私はTS勢だ！ 男と女の間にいる最強の性別だぞオラァ！ という自分でもちよつとよくわからない自慢をしながら、『微笑ましいものを見るような目で彼女を見つめる。』……というか、何の争いもない場所で生まれ育った村娘とかが纏ってそんな雰囲気

を醸し出していらっしやるが、思いつきり場違いだからな。

「今日は、いつもとは違う衣装なんですね！」

「ええ、先日の試合で壊れてしまったので。……貴方の様な方とお会いできるとは知らず、申し訳ない。」

そっちがその気なら乗ってやろうと思ひ、ビクトリアとしてそう返す。いつも通りの、誰にでも愛を降り注がせる彼女として。

まあ本心は、演技で飯食つてる奴に演技でだましに来ようとか千年早いわ、つて思ってるけどな！ にこやかな顔を浮かべてるけど、細められたその奥の眼が全く笑ってないのはバレバレだからなお前？

私が上手く引つかかってくれたことを本気で喜んでるだろ？ 『今日も簡単に終わりそう』、『ラクチンでいいわね』、『同性愛者って噂本当だったんだ』つて顔に書いてるが？

まあ確かに男を好きになるとか正直気持ち悪いし、傍から見れば同性愛者なのは間違つてないかもだけどなあ！ アルちゃんを！ 未成年をそんな目で見ちゃいけません！ 今は“ビクトリア”として対応してあげるけど、後でしっかりとお返ししてやる！

「それは……、残念です。少し、お恥ずかしいのですが私も貴方様のファンでして……、いつかお会いしたいとずっと思っていたんです！」

「おっと、そうだったのか。ごめんね子猫ちゃん。」

「まあー！」

いつもよりオーバーに、愛を振りまいてやる。普段は心労でぶっ倒れそうになるが、こんなことに使えるのならいくらだつてやってやろう。明らかにこいつは私のことに気が付いていない。私は、“ビクトリア”では、ないのに。面白いねえ？

「いつもビクトリア様のご活躍を見て本当に励まされていたのです！」

貴方様が颯爽と敵を切り倒していく姿が、その速度が！ もう、本当にかっこよくて……。」

「ふふ、ありがとうね。」

まったく、”本当に”面白い。第一回戦ならまだしも、準決勝でそんな生娘みたいなムーブをかますとは……。それともずつとそのムーブを続けていたのかな？ 確かに死人に口なしだし、そもそも”化け物”同士の試合は剣神祭ぐらいだからバレル可能性もあんまりないのか。一度通用してしまえばそれでいい。

私みたいに自分のキャラクターを前面に出して触れ合う、つてのをしなければバレル可能性も少なくなるだろうし。案外ありなのかもね、相手の懐に入り込むムーブつてのは。相手が私じゃなきゃ勝つたのかも。そんなことを考えながら”ファン”との会話を2・3続ける、事前調査は十分なようで”会話内容”だけは何もおかしいところがない。

永遠に続けてあげてもいいけれど……、そろそろ飽きてきた。心の底からこの時間が楽しかった、という表情で彼女に語りかけてあげる。

「……おっと、そろそろ観客たちが待ちきれなさそうだ。キミとの会話は楽しかったが……、残念だよ。」

「私もです。……あ、あの！ 最期に握手してもらってもいいですか！」

そうやって、彼女の手が差し出される。わざわざ手首までドレスの袖で隠してまあ……、明らかに何かしますよ、って感じじゃないの。

「ああ、もちろん……。」

〈加速〉 五倍速

幾ら装備で強化していようが、人の体は緩急への対応にそこまで強くはない。

私が抜き、突き刺したレイピアが地面に突き刺さる。

彼女の手首に装備されていた機器と、彼女の血。

その腕ごと使い物にできなくしてやろうと思っていたが……、失敗したようだ。

何もない空間に出現した裂けた黒い穴からは私のレイピアが飛び出ている、そこには赤い血と緑色の液体が流れていた。

「少々、お痛が過ぎるんじゃない。レディ？」

「ッ！」

背後に大きな亀裂を生じさせ、後方に跳ぶことで大きく距離を取る彼女。彼女の袖からは何か器具類の様なものと、大きな針が零れ落ちてくる。正確な機構は解らないが、おそらく手を握った瞬間に針が飛び出し、毒を注射するような装置だったのだろう。この異世界ファンタジーの世界にまあ……、とんでもない器具を持ち込んだものだ。

「い、いつからかしら？」

「おっと、それが素？　いいねえ、その顔。好きだよ私は。」

さつきまでのぼわぼわした感じの雰囲気が一瞬にして消え去り、剃刀の様な鋭い雰囲気を発する彼女。

「最初から、まあ私を騙そうなんて100年早いつてもんだ。」

「チッ！　お前さんも同類って、わけか。」

さつきまで上手く隠してた殺気を全身から噴き出す彼女、やゝつぱりどす黒いの隠してたか。こんな濃密な殺意滅多に見れないよ。かわいいねえ、よしよししてあげたい。これまで通り手の平の上で転がしていると思ってた相手にその鼻をへし折られて、実は自分が踊らされてたって気持ちはどうですかあ？

「同類？　一緒にしないで欲しいなあ……。残念だけど私、”ビクトリア”みたいなお貴族様のところでご奉仕してるっていう剣闘士、私以外に聞いたことがないんだよなあ？　どうせ君も、例の不敬処刑騒ぎで手を引いた口でしょ？　そんな臆病者と一緒にしてほしくないんだけど。」

「ハッ！　あんな奴らに媚びへつらうぐらいなら死んだ方がマシだよ！」

レイピアを強く振るうことで付着した血と毒を飛ばす。二つの液体が両方ついてたつてことは、毒を注射する器具を破壊した後、彼女の肉体を突き刺したつてことになる。つまり彼女が毒を受けていてもおかしくない。普通こんな時に使う毒つて少量でもかなり大きな異変を起こすようなものだと思っていたが……。何も無いってことはコイツも毒に対しての耐性があるってことか？　まあ毒使いが自分の毒にやられるとか滑稽以外の何物でもないし、耐性ぐらい自力で身に着けてるのかもだけど。

「あつそ、まあいいや。んで？　もしかしてさっきのでおしまい？　だったらもう時間の無駄だからさっさとその首を差し出してくれると嬉しいんだけど。」

「なわけないだろうが！　さっきので死に損なったこと、後悔させてやる！」

足を大きく開き、その肌を露出させる。その太腿に巻かれていたのは大量のナイフホルダー、おそらくただけどその1つ1つに大量の毒が塗られているのだろう。それに彼女が着ているドレスは裾が広い構造になっている、そっちの裏側にも何かしらの武器が装備されていると考えた方がよさそうだ。

さあ〜って、どう倒しましょうかね。

「私の『裂穴』の真価、とくと目に刻みなッ！」

20：毒の彼女

「私の『裂穴』の真価、とくと目に刻みなッ！」

彼女がそう言った瞬間、私の周囲に穴が生成される。

さっきのおしゃべりも、握手のネタも、レイピアでの刺突も。まあ簡単なお遊びの様なものだ。でも、あの刺突が避けられなかった時点で目の前にいる彼女の単純な身体能力は大方把握できる。どれだけ自身の偽装に自信を持っていようと、いつだって失敗した時の対処は脳の中にあるはずだ。その結果としてあの速度で後方に後退だから、まあ身体能力の底は見えたって感じかな？

ま、この世界の戦闘は肉体だけでは決まらないからこの情報はそこまで意味がないんだけど。

前世の理から外れたすべての異常、それが私に襲い掛かってくるわけだ。殺し合いはどれだけ数を重ねようとも好きにはなれないけれど、こういった異能に触れるときはどうも心の中の男の子が良く反応する。私が使えないらしい魔法がその最たる例だ。……っと、そろそろ攻撃が飛んできそう。「加速」使ってると思っても早いからこういう考える時間ができるのはいいよねえ。

「☒↓」

太腿のホルダーから放たれたナイフたちは、最初一直線に私に向かって飛来する。だが、その途中すべてを喰らう様に『裂穴』が出現し、飛翔物を全て飲み込んでしまう。開いた穴と穴を繋げる、簡単に説明出来てしまうがその能力のポテンシャルは非常に高いと言っていいだろう。穴の出現位置が何もない空間、という縛りはあれど距離で生成してしまえばどんな奴だって一殺。

ほら、こんな風に。

私の視界から消えたナイフたちが次にこの世界に姿を現すのは、私

の体表。ワイバーンの皮鎧に守られた部位ではなく、その継ぎ目。刃を通すことができれば確実にダメージを与えられる部位。

「つとー！」

それを、避ける。

片足を軸とする。そして体のバネと柔らかさを駆使し、人間ができるギリギリの可動域まで身体を曲げすべてを回避する。

私は「加速」だけの人間じゃない、単純な技術も鍛えなければ生き残れなかったから。前の世界じゃ『そうはならんやろ』という回避も『なつとるやろがい』が出来てしまう。

「さすがに連続は無理だから、ね。」

同時に行うのは”射線”の管理、いくら好きな位置にナイフを出現させることができたとしても、その攻撃はどうしても直線になる。だからまだ避けられるし、こつちも上手く妨害ができるわけだ。直線でしか動けないのならば、避けられることも考えて『裂穴』を生成する位置も直線にしておけばいい。だけど私が軌道を変えれば？ 相手に余計な処理を押し付けることができるってもんだ。

「それ、にッー！」

幾ら装備で私の”五倍速”が知覚できるようになっても、彼女自身の”速度”がいくら向上したとしても、あくまでも”補助”に過ぎない。いきなり五倍速の世界にこんにちは！ ってことはできない訳だ。……つまり、どうあがいても私の”待ち時間”が生まれる。

どれだけ訓練しようとも人間の速度には限界がある。投げナイフなんて本当にそうだ。つまり、私の速度に合わせて追加のナイフを補充するのは無理なこと。

ホルダーから取り出し、眼で照準を合わせ、投げつける。これだけ

でも三工程。しかもそこに12ぐらいの穴の管理も入ってくるんだ。初撃はまあいいだろうが、私が妨害をし続ける限り檻の形成に必要なナイフの数は徐々に減っていく。今のところは私の方が有利、って感じかな？ 彼女はまだ札をたくさん残してそうだけど。

さて、改めて状況の整理と行こう。お互いの勝利条件の確認って奴だ。

私の勝利への道筋は彼女の『裂穴』を無力化し、自身の刃を彼女の肉体に突き刺すこと。『裂穴』ちゃんの勝利条件はナイフを私に当てて毒状態にさせること。

いくら装備で『毒耐性』を付けてもらっても無効化するわけじゃないからね、一発でも毒を喰らえば徐々に私の体を蝕んでいくだろう。喰らったとしても勝てばオーナーが用意してるであろう解毒薬とか神官のレトちゃんがいるから何とかなるだろうけど、体内に毒が入ってしまったえばその分私の体は弱っていく。身体能力が落ちて速度が終われればジ・エンドってわけだ。

「というわけで、早めに決めましょう、かねッ！」

盾でナイフを弾き、大きく踏み込む。タイミングは彼女の手から新しいナイフたちが離れた瞬間。

投擲での『裂穴』の手順は三つ、まず所定位置に向かって投げたナイフを穴に吸い込ませる。次に攻撃する相手の近くに穴を生成、そして回収の穴。こっから先は二回目と三回目の攻撃と回収を繰り返す、ナイフの勢いがなくなれば地面に放棄という形だ。

それを、初手で潰す。

大体どの地点で穴を作るのかはさっきまでの攻防で把握した。そこに体を滑り込ませ、回転。彼女が放った6本のナイフを全て盾で地面に叩きつける。そして、攻撃へと、転ずる。

刺突。

私が突き刺したそれは、確実に彼女の脳天へと吸い込まれて行き……、止める。

案の定というべきか、伸ばされた刃の先に出現したのは彼女の『裂穴』であり、その脳天を貫こうとしていた刃は、私の眼のほんの少し手前で止まっていた。

「おっと危ない。」

「ちッ！ もっと深く差し込んでも良かったんじゃないの？」

さつきからずつと五倍速で動いているのに反応できてる、ってことは振りの早いレイピアでも直接攻撃は無理ってわけか。明日も試合なわけだし、体に負担のかかる七倍速は最後まで取っておきたい。回復魔法だって万能じゃないらしいし、自傷に繋がる手段はいったん封印だ。

となると、相手の能力の限界を見極めていく必要がある。昨日の『倍撃』みたいに一撃も喰らってはいけない状況ではあるけど、保険がある上目の前の彼女の身体能力はあの気狂いよりも下と考えていいだろう。アイツよりも上だったら最初のレイピア回避してただろうし。

ということで彼女が発した言葉が終わる前に、瞬時にレイピアから手を放し、原始的な攻撃方法である”拳”を選択する。狙いはレイピアが吸い込まれた彼女の脳天付近に生成された『裂穴』。さつきの踏み込みからの刺突はある程度予測できただろうけど、これは無理なはず！

「ッ！」

レイピアを離したことで動揺したのか、彼女はすぐにホルダーからナイフを取り出し迎撃しようとするが、私の方が速い。私の拳は確実にその穴の縁、穴の内部ではなく外側を捉える。

直撃した瞬間、感じたのは軽い抵抗。想像していたような固いものではなく、まるで暖簾をなぐったような感触。そして起きるのは『裂穴』の崩壊。レイピアが差し込まれていた穴と、繋がっていた穴の両方が消え、私のレイピアが何事もなく返ってくる。

……うん、まだ確証はないけど。当たりだ。

検証は出来たし、もうこれ以上彼女の傍にいる必要もない。速攻を決めたいところだけど、レイピアじゃまた同じことをされる。かといって今からロングソードを抜くのは時間が掛かり過ぎる、だったら違う攻撃手段を選べばいい。”ビクトリア”なら選ばない手段だが、彼女にダメージを与える方が優先される。

もう片方の腕で腰に差しているロングソードの方に手をやり、視線誘導。彼女の眼がそっちに行った瞬間に、腰に下げた剣を鞘ごと地面に突き刺し、支柱代わりに。不安定な体勢から両足を上げ彼女の胴体に蹴りを放つ。

「オッグー！」

吹き飛ばされ、轟音と共に闘技場の壁に叩きつけられる彼女。石材の壁が大きく凹み、その少し上で見ていた観客が悲鳴を上げる。

「つとー！ やっぱ柔らかいね。魔化とか毒に全振りで防御はなあなあで済ませてる感じっ？」

「……ッ。思ったより足癖が悪いのね、ビクトリア様は。」

口から血を吐きながらそんな軽口を言う彼女。ドレスの下に一応簡易の鎧を着ていたらしいが、私の蹴りによって肉体にめり込んでい

る。だけど、彼女の受け答えはちゃんとしてるし、まだそんな軽口を吐けるぐらいの体力はあるらしい。……でも、十分な痛手だ、もう一度彼女の至近距離まで近づければ私の勝ち。そしてその傷じやさつきみたいな投擲は無理だろうし、近接も難しいだろう。

「ま、どこで生まれたかも解らない人間だからね。お行儀のよさなにかわかりませんわ。」

まだ彼女のブラフって可能性もあるけど、さっきのパンチで理解できた。『裂穴』自体に何か特殊な力があるわけではない。殴った感触は非常に柔く、穴の消滅時に内部の物が切断されるという特徴もない。刺突メインのレイピアだと穴による防御が成立するからちよつと難しいけど、ロングソードで穴を破壊しながらの攻撃ならまだいけそう。

「で？ 内臓でもヤった？ 確実にお腹をぶち抜いてあげたし……、次で終わりかな？」

「……ふふ、それはそっちも同じ。そうは思わない？」

息を整えながら、彼女は私の顔を指さす。

「その綺麗な顔、薄皮一枚だけだけど……。壊してやったわ。頭にも近い、どれだけ持つかしら、ね？」

そう言われ、ようやく異変を感じ、顔を触る。いつもの白い手甲ではなく黒い革の防具のためわかりにくいだが、確かにそこに付着していたのは赤い血。深くはない、だが確実に喰らっている。『毒を喰らった』その事実を理解したせいかな、すでに体に回り始めたのか全身に軽い痺れを感じ始める。まあ後者だろうが……、やられたね。

「……………よくやるよ。」

少し後ろに視線をずらしてみれば、私を傷つけたのであろうナイフが転がっている。私が蹴り飛ばそうとした瞬間に上手く投げたのだろう。ほんと、手癖の悪い子猫ちゃんだこと。……おっと、ファンじゃないのを忘れてた。

私に毒の知識はない、多分魔物由来の毒だからタンパク質系のだろうとは思うけど、そもそも前の世界の常識はこの世界じゃ意味がない。解毒することはできるだろうが、今の私に残された正確な時間なんか解るわけがない。今着ている装備の『毒耐性』の効果がどこまで続いて、どこまで私を守ってくれるのかもわからない。

可能な限り素早く、彼女を殺す。

「さて、私も本気出さないと負けそうだし……」

私が踏み込もうとした瞬間、彼女がドレスの中に隠していたナイフのすべてを地面に放り投げる。

「投げるのは無理そうだから、全力で嫌がらせを。……踊ってくれるかい、ビクトリア様？」

瞬間、彼女の足元と、私の頭上に生成される『裂穴』。……ああなるほど。

投擲の代わりに、重力を使用する。穴を上下においておけば無限に加速し続ける機構の完成ってわけだ。それに投げる時に使った動作が減るおかげで『裂穴』のコストも全て攻撃に割ける。確かにコレは”踊らない”と回避できそうにない。

「ええ、もちろんッ！」

さっきの檻よりも何倍も濃厚なソレを避けていく。

体の痺れのせいもあり、単に避けることが難しくなっている。盾で

弾くのではなく受ける、鎧で止める。時たま十分に加速されたナイフが飛んでくればそれをロングソードで真つ向から叩き割る。

……ちよつと無理しても進むべきだね。

さつきと同じようにロングソードの鞘をもう一度支点として使い、無理矢理ロングソードで『裂穴』を吹き飛ばす。

そして、空いた両足で。

距離を詰める。

こんなことを言ったら物理の先生に怒られそうなものだが、『加速』時の踏み込みはその時の倍率どころじゃない。速度が上がれば力も上がる、力が上がれば速度も上がる。つまり加速の無限ループ。実際にはちやんと限界があるが、その限界は肉体の終わり。普段は耐えられるギリギリのレベルだが、動けば動くほど毒が回る。そのせいで全身の倦怠感と麻痺がひどいことになっている。だけど、無視する。

「」

ただ前進のためにそれを使い、一気に距離を詰める。

「ッ！」

彼女も、限界を超えたのだろう。私の出せる全力で近づいたのに、その眼はしつかりと私のことを捉えていた。彼女も重傷なのに、私が振り下ろそうとする剣の軌道上に『裂穴』を形成し始めている。剣だつて言ってみれば縦の直線の攻撃だ。十分な長さの亀裂を用意すれば防げる。故に彼女の装備は防御に重きを置いてなかったのだろう。敵のすべての攻撃が相手への攻撃になるから。

だから。

敢えてその中に踏み込む。

内部に入っていたレイピアは何もなくそのままはじき出された。なら、いけるはず。そう信じ大きく踏み込む。だが、そもそも穴のサイズが足りなかったのか、すぐにそれは霧散する。晴れた穴の向こう側には無理やり腕に固定したのだろう、彼女の手握られたナイフが突き出されていた。

もう、毒は喰らってる。致命傷でなければそれでいい。

突き出されたソレを体で受け止め、そのお返しとばかりに振り上げた剣を下ろす。

手ごたえがあつたことだけは、覚えている。



「……あ。」

「師匠！」

気が付いた時は、見慣れた天井で。本気で泣きかけていたアルが飛びついてきた。

少し周りを見渡せば、心配そうに私のことを見てくれるタクパルやドロ、あとなんか気持ち悪いぐらいに強い視線を向けてくるオーナー。あと両手から緑色の光を出して私を治療してくれていたレトウスさんだった。

「……………は、宿舎か。」

若干まだ痺れが残る体を無理やり動かしながら、状況を把握する。どうやら勝ったのはいいけれどぶっ倒れてしまったようだ。

自分の体を見てみれば目立った外傷はないけど、汗でびっしり。結構気持ち悪いぐらいに、こういうのを峠を越えた後の状態っていうのかね？ この身で体験するとかもう二度としたくないけれど。

後で聞いた話だけはこの時の私は毒が異様に早く回り過ぎていて、かなり危険な状況だったらしい。もう少し遅れていればそのまま命を落としていたか、目覚めないまま次の試合の時間を迎えてしまうところだったようだ。

まあ普通に最後ぶっ刺された奴がけっこういいところに入ってたみたいで、それもあつたみたいなんだけど、それはおいておこう。

毒が異様に早く回った原因は私の『加速』のせい。『加速』はこの世界から私の時間を切り離しているようなスキルだ。つまり私が五倍速である世界に10秒入れば、元の世界では2秒が立っているという計算。つまり毒が私の体を蝕むのも五倍速だったみたい。……正直あそこで無理に七倍速使わなくて本当に良かったと思っている。

結構ギリギリ、って感じだったらしいし。七倍速だったら私もここにはいないもんね……。

ちなみにだけど剣神祭で出場者が何らかの理由で動けなかったり、寝たきりになってしまった場合はそいつの処刑が始まるんだよね。執行人は対戦相手って感じで。……うん、公開処刑。いやほんと目覚めてよかったよ。

「オーナー。」

「なんだ。」

「席取ってる？」

そう言うтусぐに次の試合、私が明日戦う相手を決める試合のチケットを投げ渡してくれる。ふふ、仕事が早い。変な顔で私のこと

見てたのは許してやろう。んでレトちゃん？ どれぐらいで回復終わりそう？ あ、もちろん止められても行くからね。ここでおねんねするのでもいいけどそれが理由で明日死ぬのなんか嫌だもん。

ドロちゃんは……、おおいグッジョブ。装備全部出来てるのね。そりゃよかった、これで何も心配はいらない。タクちゃんは……、特にいうことないな。扱いひどくないかって？ いつも通りでしょうに。

「アル、行こうか。」

残り、一戦。

ここまで来たんだ、勝たなきゃね。

……貴方のために。

21：最後のひとり

アルちゃんと一緒に深く外套を被り、闘技場の中を歩く。

準決勝まで進むと試合数も少なくなつたせいも、試合と試合の間にあるクールタイムが大きくなるみたいで。私が気絶しちやつても十分に間に合うような感じ。ちようどさつきまでいて帰る人と新しく入ってくる人たちが作る波の中に入れたらしい。ちようど今は、カモの親子みたいに前の人たちの後ろを付いて行きながら指定の席を指してるところだ。

「……師匠、肩かしましょうか？」

「ううん、大丈夫。歩けるよ。」

大丈夫、と言つたのだがそれでも彼女は心配みたいで。いつもは私が手を引くのに、今日は彼女が先導してくれる。なんかもう介護されるような年になつたみたい。もう毒は全部吐き出せたみたいだし、今の私の状態は単に疲れてるだけだ。そこまで心配してもらわなくていいのにねえ？ というかアルちゃんと私の身長差じゃ肩かしてもらつても、差があり過ぎてコメディみたいになつちやいそうじゃない？

「あ、愛弟子。行き過ぎてるよ。」

「……………あー！」

「ほら、一回下まで降り切つてUターンするよ。」

頑張つて私を先導してくれたけど、まだちよつと緊張の方が勝つてみたい。チケットに書かれた番号と今いる場所を見比べ、行き過ぎたことに気が付きアタフタする彼女。かくわい。……まだ私が面倒見てあげなきゃねえ。

大ききだけで言ったら前世見た野球場とそう変わらない、一回降りてまた登って列に入り込むってのは結構な労働ではあるけど、こんなのでヘタるような鍛え方はしてないからね。体は重いけどチャチャッと戻って目的地まで辿りついた。最後までアルちゃんは頑張って先導してくれたけど、ちよつとだけ早足になってたのは秘密。フードで顔は見えないけどお耳とか真つ赤じゃない？

「つと、座れた座れた。……にしても準決勝となるとすごいことになつてるねえ。」

私たち剣闘士が戦う下はいつも通り、何も無いまっさらな場所が用意されているけど観客席の盛り上がりは試合が始まってないのに絶好調だ。前の世界の歓声ならさつき私が下で殺し合いしてたんですよ、つて言ったら絶対信じてもらえないレベルの熱狂具合。野蛮、とは言わないけどなんというかこのすれ違つてる感覚はずっと私の中で残り続けるんだろう。

そんなことを考えながら、自身の両手を見る。

何もない、綺麗な手。剣を握っているからこそその跡みたいなのは残っているが、手入れには気を付けているおかげか何か外傷があるわけではない。さつき掛けてもらっていた治癒魔法の効果もあるだろうけど、戦いをする人間の手ではない。

瞬きをし、もう一度見る。

真つ赤。

手自体は綺麗なのに、不気味なほど血で汚れている。どれだけ洗つても、どれだけ手入れしようとも、消えない死の香り。積み上がつていく骸たち。私の糧になつていった弱者たち。それを築き上げてしまった手がここにある。

自身が死に近づいたせいか、それともさつきまで戦っていた彼女のせいか。より鮮明に見えてしまう。

骸たちは何もしてこない、死体だからだ。だけど、それを見る私にはずっと罪悪感に近いものを覚えている。最初から最後まで生き残ることを考えて、自分がどう思われようと気にせず、使えるものはすべて使う。最後に突き刺されたあのナイフも、生き残るために、私を殺すために戦い続けた証。おそらく私と同じように生き残るために、この地獄から抜け出すためにこの祭りに参加したのだろう。希望を描き、それを実現するために。

ああ、そういえば。私が最後の刃を振り下ろした時、あの子笑ってたっけ……。

「……ファンなら、名前聞いても良かったかな。」

死んだモノに言葉を話す権利などない、そいつを殺した私はそもそも聞く権利すらない。いづれ顔も声も薄れていくだろうけど……、できる限り覚えておくことにしよう。それに、いつか私が死んだときにあつちから話しかけに来るのだろうか。

「ま、だくいぶ先の話にしてやるけどね。つと、そろそろか。」

「みたいですね。……わたし、しっかり見ます！」

私の代わりに全部看破してやる、と気合を入れる彼女の頭を外套越しに撫でてやる。こんな血塗られた手で無垢な彼女を触ってもいいのか、みたいに女々しいことを考えていた時もあったけど、もう気にしないことにした。考えすぎれば心が壊れるし、彼女は私に触れられることを望んでくれている。

血塗られた手も、もう一度瞼を閉じれば何もない手に戻っている。見た目だけかもしれないけど、それでいい。

さて、気持ちを切り替えて試合を見るとしましょう。情報つてのはどれだけあっても困らないからね、おしりの穴の数まで全部調べ尽くしてやるとうたしましょう。……え？ おしりの穴は一人一つだつて？ まあそうだけどここ異世界だし300個ぐらいある奴がいて

もおかしくないかなって。

「考えてたら気持ち悪くなってきたな、真面目にしよ。」

明日の私の試合相手になりそうな人はお二人。両方とも男だけど、片方はなんと種族が違う。

この世界はファンタジーらしく結構色々な種族がいる、前見たドワーフがいい例だ。今いる帝国は人間の国家だから人間族が大多数なんだけど、他の種族がない訳じゃない。普通に市民として生活してる奴とか、冒険者してる奴、奴隷になってる奴と様々。

んで今日出てくるのは、なんと獣人族の奴隷。

「私、初めてみました。」

「珍しいよねえ……、奴隷狩りで来たのかな？」

奴隷だからもちろん行つたことはないんだけど、帝国を出た北東部には草原地帯が広がってるみたいで大体そこに獣人族がいるみたいだ。人間の体に獣の特徴である耳とか尻尾とかが付いたような種族。部族によって何の獣がモチーフになってるかとか色々違うみたいなんだけど、今日試合に出てくるのはオオカミの獣人族らしい。

「基本的なスペックも、その上限も人間よりも上。準決勝まで上がって来たなら技術も備えてる感じだろうねえ。」

男の獣人族で、しかも肉食系のオオカミ。普通に戦闘向きな奴隷。腰と背中にとくさんの武器を背負っているのに、まるで何も持っていないかのように軽快に歩いている。戦闘型の獣人族が持つ、何の訓練も施さずに熟練の剣闘士を殺せるポテンシャルを最大まで引き出し、身体能力だけでは生き残れない化け物たちを相手にして、ここまで生き残って来たという実績。強敵って奴だ。

オーナーが集めた資料によると何か目立ったスキルとかは持って

いないらしいが、その感覚器。お鼻が結構厄介らしい。

「噂では相手の考えすら匂いで読み取るらしいよ?」

「……なんか嘘っぽいですね。」

「だねー。」

実際読めるのかどうかは解らないが、鼻が優れているのは確かだろう。相手するなら最初に香辛料とか匂いのキツイものを顔にぶちまけるってのが定石かなあ? 対策はしてるだろうけど。

「んで、次は……。」

もう一人の剣闘士は普通の人間族。

けどまあ……、これを普通って言うのにはちょっと勇気というか常識の改変が必要になりそうだ。

身長3m、体重不明。筋骨隆々という言葉を通り越してもうなんか違う生命体としか言いようがない体。鎧も装備も身に付けず、彼が持つのは腰布と剣一本だけ。しかもその剣もかなりおかしい。剣と言うにはどう考えても太く、明らかに研ぎの工程、刃を付ける工程が為されていない剣。まあクソでけえ鉄の棍棒を装備してる大男だ。

「こっから見ても相当大きいのに、実際目の前に立たれるとなると……。」

厳しいものになりそうだ。



本人たちは厳かに、観客たちは狂気に飲まれながら試合は始まる。

試合前に話すのって実は結構少数だからねえ、私はおしゃべり大好きだし喋ってたら気を紛らわせるからよくするけど、変に気を惑わされたくないってのが基本みたい。ま、今から殺し合う相手と楽しくお話ししようって方が頭おかしいから正論なのよね。

バケモノの中でも”異形”とも呼べる彼と、故郷から離れた地で剣を振るう彼の試合は人間族の優勢で進んでいる。

単純なスペック差を強みにする奴は基本、自身を上回るスペックを持つ奴に対処することができない。そりゃ二の矢三の矢と、どつかのお手々だいききな会社員くんみたいに違う能力を持っていたり、そこから逆転する手段を持っていたりするんだけど……。今回は”異形”の方が上手だったようだ。

ある意味、私と同じ。

どんな小賢しい技も、手段も、真っ向から力で叩き潰す。すべてを上回る”速さ”か”力”があれば問題はない。

オオカミ君が異形の攻撃を掻い潜りながらその胴体に向かって横振り放つが、その剣はすでに異形の手の中に収まっていた。決して異形の動きは速くない、だがソレを自覚し次の手を予想する頭脳はあるようで。あらかじめ解っていたかのようにその刀身を素手でつかみ、砕く。

「えっ……。」

アルの口から驚きが漏れる。実際、私も驚いた。普通剣を握りしめれば皮膚は裂かれ、肉に到達し、血が出る。それが生物としてのルールだ、肉は金属には勝てない。……だが、あの異形はどう見ても血など流してはいない。まともな装備すら身に着けていない。腰に巻いている布は私たち奴隷が身に着けるような襤褸だし、魔化など掛かっているようにはとても思えない。

「スキル、って思いたいところだけど……。」

体の根本的な作りが違う獣人族を圧倒する身体能力、山そのものと思えるようなその巨体、意味が解らないほど隆起した筋肉。正直スキルとか関係なしに、ただ単純にその肉体が世界の理を超えている。金属よりも自分の体の方が堅い。そう思えてしまう。パワー・イズ・パワー。パワーが全てを解決する。……おいおい、私が次コレを相手するの？

どうやらオオカミ君も事前に武器破壊されることは知ってたみたいで、背中に背負う鉄塊の中から素早く次を用意し、攻撃を開始する。彼が背負う武器もミスリルが使われていることからそのすべてが数打ちじゃない、つてのが解る。ウチのオーナーが調べたところによると剣神祭が始まってから一部の工房で剣の大量生産が始められたり、買い占めが起きたりしてたらしい。オオカミ君のオーナーを始め、あの異形の相手した子たちのオーナーが頑張って装備をかき集めた結果だろう。

「……幸いウチはドロが大量に打ってくれたみたいだから大丈夫だろうけど。」

そんなことを考えながらオオカミ君が翻弄されるのを眺める。まるで花粉症のティッシュのように剣が振るわれ、破壊され、新しいもので切りかかっている。薬を飲んでも全く効かなかったときの消費速度だ。……そういえばこの世界に来てから花粉症になってないな。又へへへ！ スギ花粉メ！ 異世界までは追ってこれないだろう！

「(また師匠小声で変なこと言ってる)……師匠、あの獣人族の人の攻撃。絶対当たってると思うんです。」

「当たってる?」

「はい、なんとというかちよつと離れててよくわからないんですけど……。少しだけ赤いのが見えたような?」

当たっている、アルが言うこれは多分単純に剣が異形の体に当たっ

ているという意味ではなく、ダメージが通っているという意味で言っているのだろう。実際あのオオカミ君のスピードは結構速いので、異形が対応できずに何度か胴体に攻撃を喰らっている。だか血が噴き出るとかそう言う目に見えるダメージがある感じではない。全部筋肉で防御してるのかと思っただけ……。

〈加速〉 五倍速

自身の速度を切り離し、眼を凝らして異形の肉体を見つめる。

ちようど、スローモーションでその胴体を切りつけられる異形。……確かに、一瞬だがその肉体の表面に赤い線が入っているように見える。が、剣を振り抜く前にその線は消えてなくなってしまう。元からそこに何もなかったように。

『加速』を解く。

「……………再生能力持ちかあ。」

なんでこう、このお祭りには化け物しかいないので？

もしかしてあれか？ 超回復みたいに肉体の疲労とかも”再生”するタイプかお前？ 鍛えたら鍛えた分だけ強くなって再生するタイプかお前？ 『再生』じゃなくて『超回復』か？ 『強化再生』か？ そんな名前のスキルあるか知らんけど、明らかにダメでしょ。トレーニングしたらすぐに体に反映された結果、今、文字通り化け物になってるんでしょお前。

ええ……。

「どうしよ……。」

私が思い悩んでいるうちに、勝負はついていた。持ってきたすべての武器を握りつぶされた後。その拳だけで勝負を仕掛けたオオカミ

君、異形も異形でそれに応えたのかはわからないが、クソ重い武器を投げ捨て拳同士での勝負へ。

頑張って殴るオオカミ君だったが全く効かず、まるでお人形を掲げるように持ち上げられた後。ギユ、つとして殺された。詳細は話さないでおく。

22：真似しないでね？

剣神祭、決勝戦。ここで勝てば晴れて奴隷という身分からの脱却。真の意味で名声と富を手に入れ、この世界で唯一家族と呼べる人と晴れて外の世界を見に行くことができる。

けど、負ければすべて終わり。私がこれまで殺して来た相手たちと同じ、何も言わぬ骸になるだけ。

「……。」

今日の目覚めは非常に良かった。悪夢に苛まれることもなく、自身の意識がなくなっただと思えば、次の瞬間には心地よい朝日が私のことを起こしてくれた。住み慣れた宿舎の一室で、守るべき人が隣にいる。冷たかった夜が明け、徐々に熱が戻ってくる感覚。

体の調子は悪くない、大けがした後の連続の『治療魔法』は体に強い負担を掛けると聞いていたけれどまだ私の体は耐えれたようだ。何か目に見えない、自身でも把握できない不調があるのかもしれないけど……。精神的には花丸、戦い続けてきた私の剣闘士としての脳は”万全”であることを伝えている。

普段のように彼女を起こし、試合への用意を任せ軽く体を動かす。準備が整えば食堂へ足を運び、いつも通りの食事を体内へと送る。消化が早く、エネルギーを摂取できる食べ物。この世界独特の食材もあるにはあるが、私の世界の常識もある程度通じる。この世界での経験と、元の世界での知識。それを口に収め、闘技場へ。

人目を避けるためにオーナーが用意した馬車に揺られ、宿舎から関係者専用の裏口まで直行。普段は徒歩できた他の剣闘士たちが何人も見かけることがあるけど、今日は私たちだけ。手続きのために立つてる守衛とか、騒ぎを起こそうとする剣闘士とかで毎日うるさいはずなんだけど、とつても静か。観客たちが集まってくるものもう少し後だしね。

「今日は静かでいいねえ。」

「……………はい。」

そのまま、荷物を下ろして控室まで。鎧を運ぶためにいつものように台車を借りて、そこに馬車から荷物を移す。彼女がやりたがった時からずっと同じように、アルが台車を押し、私が後ろから付いて行く。何回も通った道だ、どこに何があるかなんて全部解ってる。

そのまま少し歩いて、控室に付いたら鎧と武器を下ろしていく。

今日は普段よりも荷物が多い。武器が破壊されることも考えないといけなかったから、鍛冶師のドロが用意してくれていた予備を全部持ってきた。ロングソード・レイピア、ともに十本ずつ。そしてそれを背負えるように用意された剣帯。レイピアはともかくロングソードの重量は結構ある、私は片手で使ってるけど両手武器だしね？ 速さを重視する私からすれば多ければ多いほど強みが消えてしまうわけだ。

……………もちろん、重量武器を使うってことも考えてはいた。それこそ剣闘士を始めた時からね？ 重さってのは私の速さと同様に単純な力で、あればあるほど強い。簡単な物理の話になっちゃうけど、重い物が普通よりも速く動いた方が、軽いものを速く動かすよりも発生させるエネルギー量が多くなるでしょ？ 重さと速さを掛ければ、生まれるエネルギー量が算出できる。

だけど、エネルギーを生み出すってことはその大きなエネルギーに耐えられるだけの肉体がいるってことになる。自分の体の重さだけでひいひい言いながら剣を振るってるのに、クソデカイ鉄球とかを振り回せるか、って言えばまあ無理な話ってわけだ。色々試した結果、標準的なロングソードが一番私に合ってる、一番威力が出る。それだけのこと。

「師匠。」

「……………ああ、うん。そうだね。」

最後の点検を、始める。

武器も防具も自分の命を預けるものだ。昨日手渡されたものだけど、誰にでもミスはある。直前の点検が原因で負ければ目も当てられない。刀身を一本一本確かめ、装甲のゆがみがないかを確かめる。

体に染みついた動きを終わらせれば一つ一つ。アルから手渡されたそれを、身に着けていく。

ミスリルで出来た純白の鎧を身に纏い、剣帯に愛剣を納める。そしてその上から真っ白な足を隠す腰布を巻き、最後に追加武装として予備の剣たちを背に収める。

「アル。」

「はい。」

「この試合が終わったら……、何したい？」

師として、この子の親代わりとして。最悪ではなく、最高を。悪いことを想定して動き続けていけば、確かにひどく傷つくことも、悲しむこともないだろう。あらかじめ考えて、用意して、耐える準備をしていれば、私たちは心を守ることができる。

でも、それじゃどんどん弱っていつて、最後には壊れてしまう。

だったら、夢を語ろう。この先、何がしたいのか。楽しく、笑顔が絶えぬ素晴らしい未来を。そっちの方が、私は前に進める。

「私はねえ……、まずアルが生まれ育ったところに行きたいかな？　どんなところか全く知らないし、親御さんにもご挨拶行かなきゃ。」

「……じ、じゃあ絶対。絶対案内しますね！　なにもないところですけど……、それでもいい場所ですから！」

「ふふ、そりゃあいい。」

後は、何をしようか。ヘンリエッタ様に頼まれてる演劇のお仕事もあるし、ビクトリアとしての活動もあるだろう。後はアルにちゃんと

魔法のことを学ばせてあげたいし、この剣闘士の世界以外のすべてを見てみたい。冒険、つてほどではなくても旅とかするのも楽しそうだよね。帝国の中で色々行って見るのもいいだろうし、他の国。他の種族の国とかも楽しそうだ。

……ああ、本当に。

「アル。」

その場でしゃがみ、彼女と視線を合わせる。

剣闘士よ、傲慢であれ。

自身の勝利を信じ、ただ剣を振るえ。

いってきます。



鉄格子が徐々に上がっていき、それと同時に歩を進め始める。ほぼ同時に私たちは闘技場へと入り、お互いの姿をしっかりと捉え

られる位置で、止まる。

「あはー！ やっぱ近くで見るとクソデカイねえ！ そんなに大きかったら嫌でも目に入りそうなんだけど……、普段何してんの？」

「……。」

「ねえねえ、趣味は？ 経歴は？ ずーっとそんなしかめっ面してたら幸せが逃げちゃうよ？ ほらスマイルスマイル〜！」

「……。」

だんまり、か。

うーん、やっぱ私も緊張してるせいとお口の調子が悪ちゃんですねえ。言葉選びのセンスがない上に、不必要なぐらい口が回る。

私だって180近くある、人間族としてはかなりの上澄み。なのにこの異形相手じゃ見上げないと、その顔をしっかりと収めることができな。今はまだ距離があるから少し首の角度を変えるだけでいいけど、剣の届く距離になるとよりその大きさを理解させられてしまうだろう。体格の差ってのはマジでどうしようもない。私がそれこそアルみたいな背丈だったら逆にこいつを翻弄することができたかもしれないが、この程度の差じゃ不利でしかない。

なくんで同じ種族なのに倍近い身長差が出来ちやつてるんですかねえ？

『皆さまー！ いよいよ、いよいよでございますー！』

実況の声が響き、そろそろ試合開始の宣言が為されようとしている。

それまで私の声が全く聞こえてないかのように振舞っていた彼が、それを聞きようやく動き出す。ゆっくり、ゆっくりと。その手に握られている黒鉄の柱を、私に。

「スウウウ、……ハアアア。」

心を落ち着けるために、普段よりも大きく。深呼吸。彼に応えるようにゆっくりと鞘からロングソードを抜く。

やることはいつもと変わらない。『加速』して、殺す。いくら再生されようが、力が強かろうが、その体が硬かろうが、私ができることは変えようがない。いつも通りやって、いつも通り殺す。単純な能力差で速度ぐらいいしか勝てない相手には、それが一番いい。使えるものはなんでも使って、戦いながら弱点を見つけて、そこに自分の強みを叩きつける。

『試合開始イイイイイイイイイイ!!!』

〈加速〉五倍速

試合開始の号令と同時に自身の世界を切り離す。強く、強く踏み込み狙うのはその首。

初撃で取れるとは思っていない。だが、手を抜くわけでもない。

瞬時に奴の足元まで移動し、振り下ろされる柱に足を掛け空へ。体を捻り、回転の力を加えながらその首へと刃を突き立てる。

(硬い。)

五倍速に入っていて、ミスリルの剣で切りつけているというのにその感触は明らかに人間の物じゃない。これまで切ってきたどんなものよりも硬い。刃を通すことはできるが、骨どころかその筋を切ることにすら怪しい。しかもこいつの体、剣を吐き出そうとしている。

剣の性能で引き切ることはこの速度では不可能と判断、攻撃の方針

を切り替える。

剣を押し返そうとしてくる首を諦め、その首元に手を掛け顔に向かって膝を叩き込む。膝蹴りをする前提で作られたそれで鼻を潰す。……が、効果なし。体の軸が全くブレてない。諦めずに次に移行しようとするが、背後に殺気を感じすぐに退避を始める。その背中を転がり落ちるように移動し、両足で背中を蹴ることで距離を稼ぐ。まるで巨石を蹴ったかのような感触、全く軸がブレて……。

「ッ！」

振るわれた柱を、剣で受け止める。だが、地面に足が付いていないせいで全く踏ん張れず、そのまま吹き飛ばされる。

「つと、つと！・ 危なア！」

剣から手を離し、バク転の要領で衝撃を殺しながら着地する。私が後ろに逃げることを予測して、その剣と言うより柱と言った方が正しそうな黒い塊を後ろに向かって振り回す。姿勢のせいで明らかに力が入ってなかったのに、その衝撃はマジでやばく逆に足が地面についてなくてよかったと思えるほど。踏ん張ってしまったらモロにその衝撃を体で受けてしまい、腕を折られていた。空中で受け流しと、脱力ができたおかげでどうにかなった。

「……でもまあ、速度で勝ってることには変わりないね。」

初撃も、さっきの攻撃も。はつきり見えていたし、十分回避できる。さつきはちよつと欲張つちやつたせいで貰いかけたけど、攻撃後すぐに離脱すれば確実に翻弄できると思う。あっちが手を抜いてなければ、だけど。

こちらに向きなおりゆつくりと構え直す彼を見ながら、地面に落ちたロングソードを手に取り鞘に納める。

とりあえず回転の力を乗せた切断がダメなことが解った、となると次試すのは刺突だ。体重を乗せて、貫く。急所狙いだ。可能であれば体内にレイピアの破片とか残してやりたかったんだけど……、切った時のあの感じから多分異物は外に排出する感じだよな。

「もしくは、スタミナ切れを待つか……。」

私の『加速』だって何の代償もなく使用しているわけじゃない。払うものがいくら小さくとも、いずれ限界は出てくる。奴の正確なスキル名は解らないけど、仮に『再生』とするならば絶対にその能力を行使した時にエネルギーを消費しているはず。破壊された場所を修復してるんだ、代償として払うエネルギーが何かは解らないけど、攻撃を続ければいつか限界は来る。

その限界がいつ来るのか、そもそも限界が存在するのかどうかって言う一番重要な要素は不明なままだけど……。殺すつもりで攻撃して、殺せたらそれで万々歳。殺せなくても相手にコストを支払わせたってことで上々。そういうポジティブに考えていきましよう。

「じゃあ……。」

レイピアを抜き、姿勢を低く。

「レイピアはお好き？ 私はそこまで好きじゃ、ないッ！」

スピードタイプと刺突は確かに相性いいけど……、私はパワータイプも合わせた複合タイプだからね。

出来るだけ直線にならないことを意識しながら、異形の周りをずつと動き続ける。

彼の攻撃は直撃すれば普通に即死級の威力、だから目を慣れさせないように、予測させないように神経をすり減らしながら倍率を下げたりしながら突き刺していく。だいぶ前にタクパルとやった模擬戦なんかとはレベルが違う、スタミナ的な問題は全然大丈夫なだけけど精神への負担がひどく大きい。

「ッー」

ほんの数センチ、目の前を彼の武器が通過する。こっちは倍速を掛けているのにその風圧だけで体の軸がブレてしまいそうだ。掠っただけでもその部位が持つてかれそう。お返しとばかりに彼の太腿に向かってレイピアを突き刺すが……、刺さりはするけどすぐに弾き返されてしまう。

分厚い筋肉の鎧に包まれ、血管を傷つけることができたとしてもすでに勢いは削がれている。腕を引いてレイピアを回収する手順をこっちで行わなくていい、っていう利点はあるけど……。それはつまり相手の完全回復ってことになる。当たることが許されない攻撃を全部避けて、最後に刺し返した攻撃がなかったことにされる。地面に寝転んで駄々をこねたい気分だ。

しかも……。

「ふんッー」

これ、彼の鼻息。クソデカイでしょ？

この音で掻き消えちゃったけど、ちょうど私の目の前ではレイピアが根っこから折れちゃってる。金属がはじけた音が鼻息で消えるんだよ？ やっぱコイツおかしい。まあそんなこと呑気に考えている暇もないので、急いで握りを奴の顔に向かって投げ捨て、その場から離脱する。案の定次の瞬間、私がいた場所には彼の拳が突き刺さっていた。

彼の持つ『再生』の力は常時発動型だ、なので突き刺さった刀身は何もしなくても吐き出されるんだけど、それじゃあ私は永遠にチクチクし続けることになる。だからこそ無理やり筋肉でレイピアを固定して、力を籠める。するとあら不思議。ぽつきりとレイピアが折れちゃうわけだ。すでに10本中7本も折られちゃった。

折られるのを警戒して軽く刺すつてのもありなんだろうけど、それじゃあいつまでたつてもこいつを殺せない。深く差し込みたいけど、差し込み過ぎると折られる可能性が出てくる。ロングソードよりは重要度低いけど、これ以上やられると後々の展開に響きそうだ。というわけでおしまい！

もう一歩後ろに下がり、レイピアではなくロングソードを抜く。

「さあ、じゃあもうちよつとギア上げちゃおっかな……。んで？

何かしやべる気になった？」

「……。」

「あ、っそー！」

相変わらずだんまり、だんまり太郎さんだ。そんなコミュニケーションを拒否するような悪い子には……。おしおきをしてやらねばならない。

私の軽口が加速するのは、別に殺す相手のことを覚えたり思い出に残したいわけじゃない。むしろ重荷になるから覚えたくないのが本音。だけどなんか喋ってないと緊張とかストレスとかでおかしく

なつちやいそうだし、そもそも喋ってないのは”私”じゃない。だからまあ……、乗ってくれないのは結構悲しいのよね。というわけで八つ当たり。

『加速』で五倍速の世界に入った後、そのまま彼に向かって直進する。ブラフなしのただの直線移動、それを迎え受けるように奴の武器がゆっくりと上げられ……、振り下ろされる。もちろん、当たらない。ロングソードで空中での回転切りじゃ威力が弱くて刎ねることはできなかった、レイピアで速度と体重を乗せた刺突でも貫くことは不可能。でも、何本も消費したおかげで、その感覚はつかめた。

「☒」

ほんの数センチ先、地面に叩きつけられる柱を横目に。七倍速を起動する。狙いは、足。

太腿や首に比べれば足の筋肉量は少ない。レイピアではなく、ロングソードで。踏み込み、体重を乗せ、倍速を上げる。骨の継ぎ目さえ狙えれば……、貫けないはずがない。

「ツグ。」

初めて、異形から小さい苦悶の声。私の手にはしつかりとロングソードがその足を貫き、地面に深く刺さった感触が残っている。すぐに破壊されるだろうが、足を固定することで生まれる数秒の隙は金よりも重い。

……、あ。そうだ。金と言えばさ。

私の身長180くらいやろ？ んでこいつの身長300超えてるやろ？ ……ちよどいいところなさ。あると思わない？

いや、解るよ？ これまで積み上げてきたイメージとかさ。ばつち

いとかさ。そもそも男として過ごした記憶を持っておきながらそれを
するのか、とかさ？ 明らかに人道に反する行為だつてことは十分
理解しているわけよ。

でもねえ？ 明らかに目の前に急所があつてさ……、語感最悪だけ
ど手に届くというか。ちようど目の前にあるのよね。

というわけでビクトリアちゃん。”ヤリます”。

はい右手をご拝借！ ミスリル装甲で肉弾戦ができるようにめつ
ちやごつごつしてる腕甲を付けてます！ 姿勢はちようど正拳突き
ができる体勢！ ありがたいことに彼の大事な場所はちゃんと腰布
で隠されてて！ 汚れる心配もまあ無し！ 倍速は？ もちろん七
倍速！

あ、一応先に謝つとく。ごめんちゃい？

「チエストオオオオオオオオオオ！！！！」

瞬間、彼の体がくの字に曲がった。
おお、いたそ。

23：一つの終わり

瞬間、彼の体がくの字に曲がった。

うん、すごく痛そう。今の私にはついてないけど、昔は付いてたからね……。気持ちがよくわかる。マジでなんか、こう……。蹲るしかないような痛みが最大出力で継続的に来るよね。しかもこの音、何か水分が含まれていた肉がはじけ飛んだ音を聞くに文字通りふきとばしちやったから……。もつかい謝っとくわ、ごめんね？

まあそんなどうでもいい謝罪は置いておいて、お仕事に戻りましょう。

彼の体はブーメランのように曲がり、ちょうど頭部が良い感じのところにも下がってきている。そして今の私の倍速は七倍速。さつきよりも速度も破壊力も上がっている状態。代わりに体へのダメージが大きいくんだけど……。目の前のコイツに確実にダメージを与えるにはこの倍速がちょうどいい。

空中での回転切りも、レイピアでの刺突も駄目なら……。地面に足をつけて全力の振り下ろしをすればいい。条件はそろっている。

異形の足に突き刺した剣とは違うもの、背負っていた新しい長剣を抜き。振り上げる。

狙うは、その脳天。

(叩っ切るッ！)

私の刃は確実にその頭を捉え、刃が突き刺さる。

人間の構造的に、頭部には筋肉が少ない。彼の全身を覆うその鉄よりも固い肉ではなく、骨が内部を守っている。だから、割れる。骨もまあ固いが、今の速度なら可能。

両手に嫌な感触が響き、その頭蓋が割れたことを教えてくれる。そのまま振り下ろす瞬間、確実に殺すために内部で刀身を回し、組織を

破壊。後は一思いに、そのまま振り抜く。

地面に突き刺さるのは少しだけ赤く汚れた私の長剣。

目の前にあるのは、ちょうど脳天から縦に割られた異形の姿。

……うん、殺せた。首の根元から上は半分は切れているし、内部で剣を回したおかげで脳も破壊できている。かの時の吸血鬼が銀の騎士を操る人に向かって言うていたことを参考にしておいた。私たちが扱う『スキル』ってのがどこから発生して効果を及ぼしているのか解らないけど、人間は頭がなきゃ生きていけない。

首を刎ねたら死ぬ、この原理がこれまで通用している以上。脳を破壊すればこいつも死ぬはずだ。

何があってもいいように、この加速した世界で奴を観察するが、動きはなし。

確信を持った後、『加速』を解除する。

瞬時に私の時間と世界の時間が合わさっていき、観客たちの声がようやく鮮明になって聞こえてくる。

正直。七倍速を使ったせいで体が悲鳴を上げてるからちゃんとき取ることはできないんだけど、まあ非難というかそんな感じの声だろう。だってまあ、明らかな急所を破壊した訳だし。というか私も同性だったら『もうちよつとこう、手心というか……』ってな感じで口を濁しただろう。殺し合いの席はなんでもありなことには確かだけど、物としか扱われない剣闘士の間にも暗黙の了解みたいなのはある。

うくん、まあそこまで炎上することはないだろうけど終わったら帝都から雲隠れした方が得策かな？ ある程度収まったら戻ってくる感じで。

そんなことを考えながら、目の前に膝を突いたまま沈黙している異形を見る。

振り下ろすときに結構全力でやってしまったせいか、体に掛かった負荷が多く首を上げるのが億劫になっている。そのせいでちようど奴の体が目の前にあるわけだ。頭を真つ二つにしても倒れない、体幹というか筋肉が大きすぎて自立するとかほんとにねえ……。こんな最期になってしまったのは、かなり不名誉というか可哀そう。

最後の相手だろうし、名前ぐらいはちゃんと彼の口からきいた方が良かったかもしれない。そう思いながら彼の骸に腰布を掛けようと動き始める。彼のご子息を粉碎した奴が何をやっているのかと思われるだろうが、せめて遺体ぐらいは隠してやる。勝ち負けは重要だし、まともにやって勝てたかどうか怪しい相手ではあるが、元男としてこの終わり方は申し訳なきが勝つ。その詫びとして顔を覆うぐらいはしてやろうと、自身の腰の方に視線をずらす。

その、視界の端で。

奴の指が、動いていた。

右足が掴まれる。

「アガ」

砕かれた。

『加速』を起動し、残った左足で思いっきりその腕を蹴りつける。片方が使い物にならなくなったせいで威力は弱かったのだろうが、それでも拘束は緩んだ。腰に提げている鞘を地面に突き刺し、もう一度左足で地面を蹴り後方へ。

まずい。

後方に右足を庇う様にしながら、左足で地面を滑る。ちゃんと右足はあるが、全く感覚はない。私の瞳が捉えるのは、力なく横たわる私の右足。もう、使い物にはならない。

そして、自然とその眼は奴の方に。

そこには、明らかに人間のするものではない不可解な動き。まるで脳を無理やり弄られた生物の様な動きをしながら、立ち上がろうとする奴の姿が。それに、私が叩き切ったはずの脳が、肉の糸を引きながら元の形に戻ろうとしている。二つに裂け掻き混ぜたそれを修復しようとしている。

……最悪だ。



加速した世界の中で激痛に耐えながら現状を確認する。

私の右足。ちょうど膝のあたりを中心に握られたソレは、明らかに砕けている。試合続行どころか、歩くのが不可能なレベルで。後のことを考えることのできる立場であればすぐに棄権していただろうし、前世であれば救急車一択の大げが。けどそんなことはできないし、ここにいる以上私にある選択肢は戦い続けることだけ。

どれだけ動かそうとしても反応がないし、返ってくるのは身を蝕むほどの激痛だけ。幸い、と言っているのかどうかは解らないが最低限度の原型だけはとどめている。もう少し脱出が遅ければ多分太腿から下はなくなっていただろう。

(そう考えれば、まだ運が良い。)

そう思うことにする。

生物は頭部を破壊されれば死ぬ。そんな当たり前の常識を信じてしまった私が馬鹿だった。ここはどこまで行っても私の常識が通用しない。頭部を破壊しようが、脳をぐちゃぐちゃにしようが、頭を真っ二つにしようが生きている奴はいる。

……とりあえず、少しでも戦える状態にもっていかないと。

思考時間と準備の時間を整えるために私は今五倍速の世界に入っ

ている。一つ踏み込めば届きそうな先にはまだ”異形”がいて、頭部の再生を少しずつだが進めている。頭の再生は難しいのか、それとも私が五倍速に入っているのが理由かはわからないが、完全に回復されるまでにまだ時間はありそう。

腰に纏っていた布を取り外し、動かなくなつた右足の下に潜り込ませる。そして添え木代わりとして背負っていた剣の鞘を二本取り、足を挟む。かなり痛むが、生き残つた時に足が変な形になってしまうのは嫌だ。これ以上変な形にならぬよう鞘で押しとどめ、上から布できつめに縛る。……うん、使い物にはならないけど固定は出来た。

ほんとはきつく縛り過ぎたらダメなんだろうけど、異世界だし確か治癒魔法には粉碎骨折でも元通りにできる力があつたはず。それを信じて今は戦つて、生き残ることだけを考えないと。

背からもう一本鞘を取り外し、杖のようにしながらなんとか立ち上がる。

(奴は……。)

”異形”の姿はまだ、さつきとあまり変わっていない。やはり頭部の破壊は奴に取つても大きなダメージだったようで、再生には時間が掛かるみたいだ。だけど半分に割れた裂けめの中で少しずつピンク色の脳みそみたいなのがうごめいたり、少しずつくっつくこうとする様子を見せられるのはちよつとどころか、かなりグロテスクだから早く治つてくれた方が良かったかもしれない。

……たぶんだけどさつき私の足を握りつぶそうとしたのは体に染みついた防衛本能とかそういう類なんじゃないだろうか。体に命令を送る脳は私が破壊したし、今彼の体が気色悪い動きをしていることから絶賛今も破壊されている。となるとなんで動けたのか、って理由を探すとすれば脊髄反応とかそんなのだろう。あんまり医学には詳しくないし、そも前世の人類とこの世界の人類が同一の存在か解らないから詳細は解らない。

「とりあえず、やってみるしかないか。」

放っておけば完全に回復される。

片足は動かないが、逆に言えばもう片方は動く。七倍速を使ったせいで、全身に歪が出て来てるが今すぐ暴発するようなものではない、今この時だけ我慢すれば何とかなる。片足をそのままバネにして全体重をそこに掛ける、負荷が倍以上になるからもう七倍速での移動は不可能。五倍速でやる。

左足を後ろに回し、右足は添えるだけ。

杖代わりの鞘を強く地面に押し付け、地面を弾く。

(やッ、ぱっか！)

案の定、飛んできた私を叩き落とすように奴の体が動き始める。

けどそこには理性は感じられない、子供が飛んできた羽虫を叩き落とすかのような動き。確かに体に染み込んだ技術の跡は見えるが、そこにさつきまで肌で感じていた人の意思はないように思える。これならッ！

もう一度左足を地面につけ、方向を転換。さらに鞘を地面に全力で突き刺し、その反動で空中へと飛び上がる。鞘があつた場所に奴の手が振り下ろされ、台座代わりにした鞘が叩き潰される。だが、その地面に突き刺さった腕を足場にし、さらに空へ。

目的地は、切り開いた奴の頭。

「ッ！」

繋がりは始めていた脳の組織を切断し、そのまま裂け目の根元に剣を突き刺し、彼の後方へと飛び去る。

「ッう、いったいけどいける！」

着地に失敗し砕けた右足を地面に、転がってしまうが目標は達成できた。

いける、いける。まだ私は生き残れる。

さっきの反応的に今の奴には複雑な攻撃がまだできない、ブラフもできない。脳をこのまま破壊し続ければ相手の行動を封じ続けることができる。そしてあの状態なら十分片足で、五倍速で対応できる。このまま片足と、鞘でやり続けたら残った左足も壊れる可能性が出てくるけど、戦鬪の継続は可能だ。諦めなくてもいい。

……勝ち筋を、探さないよ。

幸い奴の再生は振り出しに戻すことができた。五倍速をかけている間でなら考えを十分形にできる。

今私にできるのはロングソードとレイピアを使った斬撃・刺突と、片足と両手を使った打撃のみ。それも全部空中での攻撃に限る。右足はマジで使い物にならない以上、移動に左足と鞘。つまり片手を使う必要がある。そうなるとしつかりとした踏み込みからの攻撃とか不可能だし、空中よりも逆に地上の方が攻撃の質が下がってしまうかもしれない。だから、空中のみ。

それで、肝心の”異形”は……。完全に受け身になっている。私が攻撃しない限りはあつちはずっと回復に専念し続けるだろうし、こっちが攻撃すれば迎撃してくるだろう。普通なら失血死とか狙うんだけど……。頭から垂れる血が止まる速度が異様に速い。かなり深く切ったはずなのに頭から垂れる血は想定よりも少ないことからすでに再生によつて止血とかがされてるのだろう。

たぶん私が『再生』って言ってるだけで、本当はまた違うスキルな気がしてきたが、どっちみち奴に失血死をさせることは不可能だ。と、なると……。体をそのまま全部吹き飛ばすとかか？

存在そのものを消し飛ばせば、こっちの勝ちだ。それは幼子でも解る理屈だろうけど、残念なことに私にそんな力はない。ダイナマイトとか魔法とか使えれば可能かもしれないが、私のお手手にあるのは剣だけ。普段はとても頼りになるはずなのに、あいつを目の前にすると

不足感が否めない。と、なると……、体の一部分。頭部をそっくりそのまま吹き飛ばすぐらいしか方法はなさそうだ。

頭を縦に半分こした時、あいつの体は確実に動きを止めた。その後動き出したので、何が理由かはわからないが、とにかく頭部を破壊することで動きを止めることができる。仮死状態、とでも言おうか何かしらの損傷を与えればその状態にすることが出来そうだ。

私が欲しいのは、奴の死ではあるけど。実際は審判、いや正確には主催者である皇帝からの死亡判定だ。例えそいつが時間を掛ければ復活するとしても、試合の結果が決まってしまうえばその時間を掛けることは許されない。つまり体に脳がくっついていてる状態である縦の切断ではなく、脳そのものを吹き飛ばしてしまえばいけるのではないだろうか。

ただ切り離すだけだと吹き飛んだ頭部を拾いに行つて、頭にくっつけて回復とかもされそうだ。完膚なきまでに吹き飛ばして、頭部全体の回復が終わるまで動けない状態にする。その間に審判から私の勝利を宣言してもらえれば、こつちの勝ちだ。

問題は、どうやって吹き飛ばすかだけど……。

「覚悟、決めようか。」

背負っていたすべての剣を下ろし、両手にロングソードを取る。そして、それを鞘ごと地面に突き刺す。

吹き飛ばすのならば、刃はいらない。必要なのは表面積だけ。いつでも抜けるように外していた固定具を嵌め、抜けないかを確認する。

「よし……、やろう。」

柄を手に取り、そのまま左足に力を集中させ……、爆発させる。

五倍速の世界のまま、異形に向かって真っすぐ、進む。

振り下ろされてくる柱の様な手を避けながら、同じように、空へ。

正直、これをしたら自分がどうなるかはわからない。七倍速でも体が悲鳴を上げているのに、さらにその先に踏み込めばどうなるのか。想像できないし、したくもない。でも、選択肢は残されていない。片足を持っていかれた以上、時間は私の敵だ。時が進むほどこの体は使えなくなる。そして私が疲弊して動きが鈍くなるほど被弾する可能性は増え、攻撃が薄くなればなるほど奴は回復する。すでに今の私に、試合開始時点の彼と戦う力は残っていない。だからこそ、彼が弱みをさらけ出しているところに、全てを賭ける。

……以前、言ったことだけだ。

私の『加速』の限界は、体の限界よりも先に行っている。スキルの成長に体の頑丈さが間に合っていない。私の『加速』の上限は、七じゃない。今からやるのは、体の限界じゃなくて、スキルの限界。体は壊れるだろうけど……、勝てなきゃ私に残ってるのはただの死だけ。あの子の下に帰るために、ちゃんとただいまって言うために。出来る事なら、なんでもやってみよう。

速さは、力だ。

空中に飛び上がり、奴の裂けた頭部の間に、両腕の剣を差し込む。繋がりは始めていた肉片が飛び散り、これ以上の破壊を止めさせるために叩きつけた奴の手がゆっくりと戻ってくる。

覚悟はもうできている。

一瞬剣を手放し、両腕をクロスさせ、2本の剣を逆手に持つ。

私の、勝ちだ。

これで、やっと……。

24：二度目の

眼が、覚める。

ここは……、ッ！

すぐに自身の体の状態を確認する、周りの確認もするのも大事だけど、先に自分に何が出来て、何ができないかを把握しないと対策を練るのも難しい。それに最悪な状態にあったとき、テンパって自分の体が動かないのに無理やり動かしてしまう、そう言うのも避けられない。長年の経験というか、裏の世界にいた時に如何にして襲われても対処できるかを考えていたら、自然と身についてしまった習慣だ。

両手、異常なし。両足も、異常なし。

体のどこかが痛いとかそう言うものもないし、思考に変なノイズが入るとかもない。普段通りの、私。服装も剣神祭に出るためにあつらえてもらった鎧一式と、普段通りに剣も提げている。

……ん？

疑問は残るがまあ万全の状態だ。それを確認した後、ようやく外部の情報を得るために思考を割く。

「……市役所？」

いつの間にか座らされていた黒の長椅子がたくさん置いてあって、視線の先には窓口がたくさんある。ご丁寧に窓口の上には番号が

振ってあるし、置かれている機材とか明らかに前世の物だ。発券機とか久しぶりに見たよ。あと窓口の隣にある、番号を表示する奴。懐かしい。

これだけ見るといきなり前世の世界に帰って来たのかと思ってしまっただけけど……、明らかに違うだろうといえる存在が見えてしまう。それもたたくさん。

窓口に座っている職員の方々、それにその奥でお仕事をしているであろう人たち。全員がまあ、なんとというか……。天使みたいな恰好をしている。服装は明らかに前世の事務職員の方々、みたいな感じなんだけど頭に浮かんでいる輪っかというか、背中に生えてる翼というか、もう明らかに天使じゃんか、という特徴をたたくさんお持ちでいらっしやる。あと単純に纏っている雰囲気のアレだ、なんか神聖っぽい。

……破壊されたはずの右足が元に戻ってて、さっきまでいたはずの世界ではありえないような現状。

「あはは………、そっか。」

うん、そう言うことだよね。

深く息を吐きながら、空を見上げる。真っ白な空間。職員の天使たちが使っているデスクや、窓口以外は全部白。あからさまに天国とかそういう奴なのだろう。そこに私がいるってことは……、ダメだったということだ。

加速の倍率に耐えられずに死んでしまったのか、それともあの異形が頭部破壊だけじゃ死ななかつたのか、自分の死因という奴を考えろ。どっちにしろ私がここにいる時点で、あの試合で負けたってコトだろう。勝てなかつたことに対する悔しさがないわけではないが、自分が死んでしまったということに対してまだ実感が持てない。そっちの気持ちの方が強い。……ああ、でも。あの世界に来たときは何の

説明もなく奴隷なわけだったし、それを考えれば今回はちゃんと考える時間をくれている、ということだろうか。そうなのであれば感謝しておこう。

自分が死んだとわかった時。もし考える力が残っていればもつと泣き叫んでしまおうと思っていたが……、常に覚悟していたせいかな嫌なほどに冷静になってしまっている。

「アルには……、謝るのも無理か。」

あの世界で初めて家族と呼べるような存在である彼女にも、もう声をかけることはできない。一人残してしまうことに対しての謝罪とか、最後の言葉とか、教えたかったこととか、私のことは忘れて自由に生きて欲しいとか、いろいろ言いたいことはあるけど……。死人に口なし、だ。私がこの市役所みたいところに送ってきた奴らと同じように、順番が来てしまったとでも言おうか。

……ただ、まあ。私が死んだときのこと、一番の出資者だったヘンリエッタ様とか、タクパルに任せてある。一応オーナーにも。私が死んだときはヘンリエッタ様の下でアルの奴隷解放の手続きと、市民権の獲得。それと私が残した財産の相続。タクパルには私が教えられなかったこの世界で生き残る術をできるだけ教えて欲しいと頼んでいる。変に心が落ち着いてしまっているのは、後のことを任せてしまっているからだろうか、それともすでに私には人の心がなくなってしまうのか。

「タクちゃんとの契約はどっちかが死んだときに、お互いの弟子の面倒を見る。だったけど……、私の方が先かあ。」

別に、泣き叫ぶことが良いわけじゃない。だけどころ、自分が死んだことをすぐに理解してしまって、後を任せているが故に彼女の今後は悪いようにはならないことを確信してしまっているということに。やきもきしてしまう。彼女の心のことをちゃんと考えてあげられてな

いし、私が教えてあげたかったこともたくさんある。……もう、無理なのか。

「……アル。」

もう名前を呼んでも、彼女の声は聞こえてこない。

「31番でお待ちのお客様。」

窓口の方から声が響き、思考が遮られる。それと同時にあたりを見渡すが……、私以外に死人はいないみたいだ。声のした方の窓口を見れば、女の天使がコクコクと頷きながらこちらを見ている。どうやら31番ってのは私の事みたいだ。感傷に浸る時間はそこまでくれないのね。……まあ見るからにあっちもお役所仕事だろうし。仕事場で泣き叫んだり、感慨に耽つたりするのも失礼か。

色々と溢れ出そうな気持ちに無理やり蓋をし、呼ばれた窓口の方へと足を進める。これは自分の問題だし、できなかつたのは私が弱かつたというほかにない。もう彼女に見せることはないけど、ずっとアルにとって恥ずかしくない師として、大人として、背中を見せてきた。

死んだからと言ってそれが覆るわけじゃない。他人に迷惑かけることが解つてて、抑えないのは私がするべきことじゃない。

「そちらの席の方にお座りください。」

「……はい。」

言われた通りに、前世の世界でよく見た丸椅子に腰かける。対面にいる彼女は、服装こそどこかの市役所にいそうなものだが、その無駄に艶の良い金の髪や、その上に浮かぶ輪つか。少し小ぶりの翼を見れば明らかに人類とは違う存在に見える。

「えっと、まずは生を全うされたことと、無事神の許に召されたことをお祝い申し上げます。人生の方、お疲れ様でした。」

「はい、どうも。」

「お気づきかと思うのですが、ここは天国みたいなものでして。次の生へのご案内だとか、天国への居住のご案内や新規死後就職などのご案内をさせて頂いております。」

彼女が指さした方には、前世の市役所とかでよく見るポスターだったり、届け出の出し方について書かれた紙が貼られている。

……うん、ここほんとにお役所な感じなんだね。

「では早速ご案内の方させて頂きたいのですが、お名前の方お聞きしても大丈夫でしょうか？」

「……あ。あの、すみません。私親から名付けられた名前とか解らないんですけど……、そう言った時はどうすればいいでしょうか？」

「でしたら普段お使いになっっているお名前の方を教えてください。あ、複数ある場合は全部お願いしますね。そこから検索して、次の生命などのご案内の方させて頂きますので。」

全部……、となると。

「ジナと、ビクトリア。……それと■■■■。」

「あ、転生者の方だったんですね。それはまたお疲れさまでした。どうでした、こちらの世界は？」

目の前の天使は手元にあるタブレットを操作しながらそんな雑談を始める。聞きたいことは色々あるけど……、お役所仕事な彼女に聞いても知りたいことが返ってくる可能性は少ないだろう。手続きが終わった後に私が死んだ後のこととか、残してしまった彼女のことを聞いてみることにする。この空間に留まることができる時間が長ければ、それを聞いてみることにしよう。

「まあ、色々ありましたけど……。楽しかったです。」

「それはそれは。私たちとしてもありがたい限りです。」

……うん。

最初は色々悲惨だったけど、楽しいことも嬉しいことも。なかったとは言わない。大切な人にであうこともできたし、その子に残すこともできた。自身の死はずっと覚悟してきたけど……。最初いた地獄みたいな裏の闘技場でもなく、オーナーに使いつぶされるわけでもなく、大事な人が出来て、少しだけだけ彼女に私という存在がいたことを知ってもらっている。いずれ忘れられてしまうかもだけど……。それでもいいや。

やり残したことはたくさんあるけど、これまでやって来たことに悔いはない。

「……………あれ？　ないな。」

「……………？」

「すみません、ちょっとお待ちくださいね！」

私がこれまでの生を振り返りながらしみじみしていると、目の前の

職員さんがとても慌てです。というかないって？　もしかして転生とかそう言うのこつちの世界ではない感じ？　いやでもさつき転生者だったんですね、とか言ってたし……。

そんなことを考えていると、こちらに一礼した後ふわふわと飛びながらさつきまで操作していたデバイスをもつて後ろの方に飛び去って行ってしまふ。その先には明らかに上役みたいな顔をした天使。そのデバイスと私の顔を見比べた後血の気がどんどん消えていく。あ、この感じ前世で見たことあるわ。プロジェクト終盤に全部をひっくり返してしまうような致命的なミスが発覚した時の雰囲気とすごく似てる。

もしかしてアレか？　私転生時に何も説明なかったのが今になって判明したとかそういうの？

上役天使の動揺はそこで働いていた天使ちゃんたち全員に広がり、一気にパニック状態に陥る。なんというか私が来たせいでこうなってるわけだからすぐく居心地悪いんだけど……、何か私がやらかしたわけではないよね？　大丈夫だよね？

結構不安になってきたと同じ時、何やら覚悟を決めたららしい天使の上役さんがこちらに飛んできて私にこう言った。

「すみません！　ちよつとついてきていただけますか！」

……あの、やっぱりなんか私やらかしましたかね？



「うにや？ 手違い？ めずらしいねえ……、んでどうするのこの子？」

何段か高さが上乘せされた台に設置された豪華な椅子に彼女は座り、背後には何故か菓子類が山のように積み上げられている。

金の髪に、一房だけ水色のラインが入ったその頭部からは暖かな光の様なものが漏れ出しており、見た目と反して明らかに人間ではない。

目の前にいるのは、明らかに見たことのある人物。というか教会に置いてあった女神像と瓜二つの人物、というかもう神。思いつきり頭をへこへこ下げながら謝罪する天使たちの声を興味なさそうに聞きながら、前世でよく見るようなクリームたっぷりのケーキを口に運んでいる。

「我々が頂いている裁量では解決できない案件です……。」

「あく？ そうだっけ？ そこらへんわすれちった。……まあいいや、下がっていいよ。あ、あこの子のお茶も持ってきて〜。……あ、やっぱお前じゃなくてあの子。」

そう言いながら、天使たちを下がらせる彼女。彼女の能力か、天使の能力かは解らないが彼女が手を軽く振った瞬間天使たちの姿が掻き消える。そして先ほどまで口に運んでいた菓子を全て口に放り込み、飲み込んだ後。

その眼は、こちらに向けられる。

「……。」

「……。」

目が合ったまま、沈黙が続く。……ど、どうすれば？　これなんか私から話した方がいい奴か？　いや待てさっきの天使はともかくあの世界の神ぞ、目の前にいるの神ぞ！　相對した感覺的に天使はまあまだいけるか？　って感じだけどコレは無理だぞ！　格が違い過ぎる！　劍闘士としての私が『逃げる事すらできないからどうにか媚び売って生き残れ』って泣き叫んでる！　なんか背後からよくわからん光出てるし！　教会にあつた像と顔一緒だし！　後何よりもその雰囲気明らかに人間とは違う！　目の前にいるのはマジで手を振るうだけでこっちの存在を消滅させられる！

「……ふくん。ねえ、お前。名前は？　好きな名乗り。」

「ジ、ジナ、です。」

「自分でつけたの？」

「は、はい。」

そんなことを聞きながら、値踏みをするようにこちらのことを観察し続ける彼女。その一挙手一投足が私の心に格の違いを叩き込んでくる、生物を超えた存在としての格の違い。明らかに圧倒されている。どうしようもなく勝てない相手、逆らえない相手なのに、劍闘士としての性か、その一つ一つの動きを目で追ってしまう。

「……うん、気に入った。ジナだっけ？　それともビクトリアと呼んだ方がいい？　もしくは前世の名か。……まあ短いからジナにしよう。お前が置かれてる状況については理解してる？」

「……すみません、ほとんど解ってないです。」

「正直でよし。普段ならその頭に直接叩き込むけど……、たまには不便も楽しもう。それ、お座り！」

彼女がそう言いながら手に持っていた菓子用のフォークを振ると、

私の傍に椅子が出現する。明らかに犬にいう感じのノリだったが、とりあえず言われた通りに腰を下ろすと、彼女がもう一度軽く手を振る。その瞬間目の前の空間が裂け、机とその上に置かれた菓子。いつの間にか高台から降りてきた彼女が、対面に座っている。教会で受けた説明では彼女は創造神であり絶対神。……たぶん私のことなんか全部お見通しなのだろう。

「この菓子はお前がいた世界からの貢ぎ物、別に一人でも食えるんだけど食い過ぎるとあの天使たちがうるさいのよ。ダイエットしろとか？ 神としてふさわしいフォルムをとか？ もう、うるさくて敵わないって感じ。だから好きだけ食べ食べ、四六時中送られてくるからお代わりはし放題だぞ。」

「ど、どうも……。」

明らかに『食べる』という雰囲気醸し出してたため、急いでそれを口に運ぶ。茶色い薄く柔らかいパン生地の中に、黄色いクリームが込められている菓子。シュークリームに似ているが、サイズがホールケーキほどあるし、違うものなのだろう。置かれたフォークで恐る恐る口の中に運ぶ。……あ、普通においしい。というかシュークリームをイメージしてたから柔らかいと思ってたんだけど、結構硬めのクリームなんだね。食べたことなかったけど好きになりそう。

「前世住んでいた日本だったか？ あそこほど食文化が進んでるわけではないが菓子文化はこっちも負けてない。いや経過時間を考えれば進み過ぎてる？ こっちはまだ中世入ったばかりみたいなものだし。全能たる偉大な私としては？ 正直砂糖だけでもいいんだけど、あいつら無駄に手が凝ったものを送ってくるからなあ、舌は肥えたが腹が出てくるから困る。」

「そうなんです……。」

対面した神に急に雑談を振られた時の私の感情を答えよ。正解は

なんて返したらいいか解らん。

「まあ喰いながら聞いとけ。えっと、それで何だったっけ……。ああ、そうだ。キミの状況だったな。」

そんなことを言いながら菓子を食べ進める神、一人で全部食べられるというのは間違いないようだ。いつの間にか机いっぱいになべられた菓子を次々に口の中に放り込んでいく。頬が綻んでいるのを見るに、話通り甘いものが好きな神様なのだろう。というかそんなに勢いよく食べるからふと

強烈な殺気。

あ、すみません。考えるのやめます。

「よろしい。……ま、簡単に言えばキミの転生するとき踏むべき工程を全部スルーして転生しちゃった、って感じ。ウチの天使たちが考察したんだけどね？ 本来は異世界で問題なく生活できるように簡単な説明会と研修を受けてもらった後に、『新生活応援パック』っての渡してるのよ。けどキミはそう言うの全部なしで送っちゃったんだって。書類確認したら研修会とかそう言うの全部受けてない、ってことになってるのに死人となってこっち来てるから大問題ってわけ。」

「は、はあ……。」

説明を進めながら彼女がホログラムみたいなのを出現させる、そこには大体三時間ぐらいで作ったのであろうチラシが映っていた。『新生活応援パック』と書いてあるし、その告知用のチラシだったりするのだろう。……なんというか天使と聞いて超位存在かと思っていたけど明らかにやっつてることが人間と同じだ。

「まあ天使って私の仕事手伝わせるために死んだ人間を採用してるだけなんだよね。」

「あ、そういう……。」

「だからミスもする。というかミスとかなかったら面白くないでしょう？ 私だって意図的に抑えてるし。全能とか普通につまらん。」

「というかさつきから思ってたんだけどやっぱり思考読める感じですか？」

「そだよ？ 私、創造神だし。できないことなどない！ めんどいからやらないだけ。まあ話戻すけど、そんな時にスキルとか特別な武器とか上げるんだけど、それなしで転生させちゃって。そんな君が本来生き残れたであろう場面で死んで、こっちに来ちゃったわけだから思いつきこっちの不始末なわけ。でも勝手に生き返らせるとかそういう権限は与えてなかったから私のところに話持ってきた、って感じ。お判り？」

「お判りです。」

「で？ どうする？ 色々選択肢あるけど。」

「そう言いながら彼女はまた手を軽く振る。そうすると自身の目の前にさつきとは違う映像が浮かび上がってきた。」

「まずはこのままこっちで生活するルート、一応ここ天国だけどキリスト教的な楽園じゃなくて、私の仕事を手伝う場所なんよ。天罰のシステムが正常に動いてるか確認したり、人に与える試練の調節したり、善と悪のバランス調節したりと……。まあ色々？ 君の言う市役所みたいところで仕事する感じね？ O L って感じ。」

「つぎは大体他の奴と一緒に、輪廻の輪の中に戻る感じのルート。うちも日本みたいに輪廻転生を採用しててね？ 普通に次の生命へのご案内、とかやってる。」

「最後！ 死んだと思っていたユーを生き返らせるついでに、本来プレゼントするはずだったスキルとかを上げて……、あ。これね。OK OK。」

「……え、まだ何も言っていないんですけど。」

「そう？ もう思考読むまでもなく最後がいい、って顔してたけど？」

いやまあ生き返れるなら絶対そっちの方がいいな、って感じですけども。最後まで説明してくださいっても……。あ、時間の無駄？ さいですか。あ、あと因みになんで私がこの世界に来たとかは、元の世界とかでなんで死んだとかは……。あ、教えてくださらない。了解です。いや確かにおっしゃる通り普通にあの子の世界に帰れるのなら帰るつもりでしたし、元の世界のことも知らなくても生きていきますけど……。あ、しつこいのは嫌い。失礼いたしました。

「うむー。じゃあ生き返るタイミングだけど……。お？ ちょうど今いい感じに治療とか受けてる感じか。じゃあこのぐちゃぐちゃになつた体をいい感じに弄りましてえ！ スペース開けてえ！ うし、お直し完了。後はここに居る君をぶち込めば完了！」

「……早いっすね。」

「神ですから！ ……あ、ちなみに君の体がどうなつてたか聞く？ 見た目はまあまだ原型保ってたけど、腕とか粉碎骨折を超えた粉塵骨折になつてた。後一番ひどいのが脳みそで、負荷がすごすぎて水風船みたいになつてたよ。」

「ヒエッ」

え、『加速』の二十倍ってそこまで負荷高かつたんですか？ ……もう使わんとこ。」

「というか今の剣神祭ってかなり野蛮な感じになってるんだねえ……、昔は剣舞だっけ？ それするだけだったのに今じゃ普通に殺し合いしとるし。何千年も放置してたらそうなるのかねえ？ ……まあどうでもいいや。んでジナち？ ユーはどんなスキルが欲しい？ ……ほんとは転生するときに渡すはずだった奴だけど……、詫びも込めておまけしちゃうよー！」

「え、じゃあ……。」

何が欲しいか、と言われればやっぱり……。アレですよね。

「魔法で。」

「やつぱり？ いいよね魔法……。ほい、つと！ うん、いい感じにおススメ適正付けといたよ。なあ〜にあなたにちゃん、つと！ ベストな適性をこの神様が付けてあげたのだから安心したまえ！ 帰ったら誰だっけ、この婆ちゃん……。ああヘンリエッタね。この人にでも頼んで勉強しな。あと教会で見た才能の輪つかあつたでしょ？ それも最新版に変更しといたから見て置くように。」

彼女がさつと手を振ると、私を水色の光が包み込む。その瞬間に体の中で何か新しいモノが生まれた様な感覚を得る。おそらく、いや絶対これに魔力。魔力だ！ 魔法の元！ 魔法、魔法、魔法！ 使える、使える！

生き返って彼女にもう一度会えることと、魔法が使えるようになったことのダブルパンチでテンションが上がってきた。

……。本当に、もう一度彼女と会えるんだ。ただいまって言えるんだ。……。ツシ！

「うんうん。喜んでるようで何より。……。あ、そうだ。ここで見たこととかの記憶とかは消さないけどあんまり口外しないようにね？ やらかしたら普通に聖女ルートか背教者ルートで、教会の奥に押

し込められるか悪魔の子として処刑されるだろうから気を付けてね？ あの世界私の一神教の子しかいないから元の世界の神様のお話しとかもしないこと。地球の方にも迷惑かけることになるから……。」

「あ、ハイ。」

「まあ別に私の手伝いしたいのなら聖女ルートでもいいけど……、お。来た来た。」

こつちこつちく、と神が手を振る方を見てみると天使とはまた違う存在。というか人間がこちらに向かって歩いてきていた。高齢の女性で、修道服に身を包んだ彼女は茶が乗せられた台を手にとって来ている。

「この子、今代の聖女ちゃんね。……ちよつとというかかなり年行ってるけど。なんかあつたらこの子のところに行けば多分何とかしてくれると思うよ、死んでなければ。」

「第198代目の聖女を務めさせていただけます、ユアと申します。ビクトリア様ですよね？ お噂はかねがね。」

「あ、これはご丁寧に。」

丁寧にお礼をしてくれる聖女様に返礼する。というか聖女様でも野蛮な剣闘士のお話知ってるのね？ ビクトリアちゃんびっくり。……といふかなんでいるの？

「ほら、私そろそろ天に召されそうな感じでしょう？ 聖女って生を全うしたらそのまま天使として神に仕えるのが決まっているのよ。だからこうやってたまにお邪魔して、お仕事の手伝いをしているの。たしか……、インターンでしたっけ？」

「あつてるぞ。」

……つまり死んでからも働かされるってこと？ 悲しいね。とい

うか死んだ後の就職を考えてインターンってこと？ 終活じゃなくて就活？

「効率的でしょ？ 私がサボるために定期的に人員を増やす！……つと、まあこんな感じかな？ それでは聞きたい事はあるかな？ ナ君！ まあ聞かれても答えないけどな！ 自分で解ける謎は自分で解くべし！ 君の体のこととか、ね！」

「あ、はい。なら大丈夫です。頑張ります。」

「よし！ ……じゃ、今後も私の世界を楽しんで。」

25：次の世界へ

「……行きましたね。」

「そうだねえ。」

青い髪の彼女を神が送り出した後、ゆっくりと彼女のために茶を容器の中にそそぐ。自身の世界で学び、身に着けた技術。目の前の彼女からすれば見戯にも等しいものだろうが、それでも全身全霊をもってそれに臨む。この立場になってから何度も繰り返した行為だが、一切手は抜けない。

このお方は、神だ。

私たちに豊かさを与えてくださる神であり、苦難を与える神でもある。あの世界で起こるすべてのことが神の御意思であり、神が望んでおられることに他ならない。先ほどの青髪の彼女が過去に住んでいた世界では『神は乗り越えられる試練しかお与えにならない』という考えもあるようだが、私たちからすればそんなわけがない。神は乗り越えることのできない苦難を数多く用意なされている。決して民にとって優しいだけの神ではない。

「ふんふん。」

よく蒸らし、適温のそれを差し出す。

このお方は、自分で仰っている通り気分屋だ。自分の気に入らないことは認めないし、気に入っているものほど厚遇する。ただ厚遇と言っても私たちにとって得なことばかり起きるのではなく、それに見合った苦難も用意なされる。さらにそのさじ加減も我らの神である彼女の気分で決まる。その者の幸せと苦難に満ちた世界を眺め、楽しむのがこのお方だ。”お気に入り”以外の民に対しては義務さえ果たすのならば最低限の豊かさをお許しになるため優しい神ではある

のだが、私のように気に入られた者はとても濃い人生を送ることになる。

乗り越えるのも、諦めるのも、私たち次第。

「あの方は貴方様のお眼鏡にかなったのですか？」

「ん〜？」

人間に置き換えれば神にとって私たちは羽虫の様なもの。小さく、醜く、矮小なものが作り上げたものを面白そうに眺めながら、私が淹れた茶を口に運ぶ我が神。その頬は強くつり上がっていた。

「まあねえ？ 久しぶりに面白いのを見つけたって感じかな。……もしかしたら初めてじゃない？ 一瞬でも私を殺せるかどうか見極めようとした子は。ほんとにやる気はなかったみたいだけど、もし私が彼女に害を為そうとしたらせめて一矢報いるために観察する。ウチの子にはない思考だよねえ。」

ひどく面白そうに笑う彼女。……私たちの世界の神はこのお方のみ。あの転生者である別世界から来た彼女のところでは多数の神が存在し多くの権能を分割しているらしいが、この世界では集約されている。それはつまりこのお方はすべてを司っているということ。善意も、悪意も。神聖さも、邪悪さも。全知全能の名は伊達ではない。普段は自身の力を抑え日々を楽しんでいらっしやるが、解放すれば私たちが住む世界など一瞬で無かったことになる。そんなお方に、彼女は立ち向かおうとした。

私たちが信者の方々に向かって教えを説く際は、常にその神聖さを前面に出す。そして神の意に背くことや、悪いことをし続ければ先ほどまで神がお見せになっていた面とは違う要素が私たちに降りかかる、と。故にあの世界の者は常に神を信じ、その御威光に賜ろうとする。普通なら逆らうことすら考える者などいないのに、一瞬でも神殺しを考えると……、違う世界で生を受けたからこそ持つ思考なのだ

ろう。

我々からすれば異物というべき人物を何故あの世界に呼び寄せたのか……。先ほど我が神は天使の手違いと仰っていたが、それを何年も放置なさるような方ではない。自分の箱庭であるあの世界を荒らされることをひどく嫌っていらしたはず。つまり、最初から全てこのお方の掌の上。

「それに、強い力を持つ者に対して継るのではなく、もうすでにあの子は死を受け入れていた。そういう精神性はとっても好み。……なあ今代？ 私が好きなものは何かな？」

「甘いモノ、興味深いモノ、そしてバランスでございます。」
「だね。」

この方にとって私たちが住む世界などおもちゃ箱の中にあるちよつとだけお気に入り玩具以外の何物でもない。神がいらないと思えばすぐに破棄され、面白いと思っていただければ存在し続ける。それは神の下で働く天使も同じこと、あの世界で住む多くの者は知らないが、私たちは我々の祖先が神と交わした契約によって生きること許されている。

この方の娯楽となり続けるのが、私たちの仕事。

人も、魔物も、あの世界に生きるすべての存在がこのお方の子であり、神が持つ世界に住まわせて頂いている駒の一つ。私たち教会が善意を、魔物や悪魔と言った化け物たちが悪意を司る。魔の者たちが世に混沌をもたらし、私たちが静寂をもたらす。どちらが多くなりすぎてもいけない。どちらかに傾けば、調和は崩れ神の好む世界ではなくなる。

故に、我々は……。

「……ねえ今代、さつきからずつと思つてたんだけどさ。私を読者から叩かれそうな感じに仕立て上げるのやめてくれる？ 絶対さ、『あ、やっぱコイツ神なんですわねえ。価値観が人間と根本的に違う奴。』とか言われるのヤなんだけど。せつかくここまでいい感じに好感度稼いでるんだよ？ このまま『わあ、とつてもいい神様。しゅき♡』のままで行こうよそこは！」

「おっと、失礼いたしました。私、こういう神のお姿が大好きな口でして……。」

「自分の性癖を信仰する神に押し付けるとか……、オマエ頭おかしいんか？」

「まあ！ お褒め頂き感謝の極みでございます！ この老骨にお言葉が染み渡っていきますわ！ それに、私が生きることをお許しになられたのは貴方様ですし、聖女に任命してくださいったのも貴方様なわけですから……、こういうのがお好きなんでしょう？」

「ウン、大好きさ☆」

我らが神は、非日常を望む。

故に魅入られてしまった彼女の人生はこれから大変なものになるだろうが……

「頑張ってくださいね。」

「うくん、どんなイベントなら楽しんでくれるかなあ……。あ、そうだ今代。あの子絶対面白いことしてくれると思うからさ、録画したい。」

……いや、ほんとうに。頑張ってくださいね、私の時も結構アレでしたし。

あと我が神？ 私録画のやり方解らないので任せないで頂けますでしょうか。お婆ちゃんに全く知らない文明の利器を任せるのは悪手だと思うのですが……。



朧げだけど、意識が戻ってくる。

天国みたいなどころから、帰ってきたのは闘技場の通路。光の加減的に剣闘士用の通路、その舞台へと続くすぐのところだろうか。どうやら大きめの木の板に寝かされ、この場で処置を開始してもらったみたいだ。まだ目が慣れきっていないせいか、明暗ぐらいしか解らんけど普通に背中が痛い。固めの木の上で寝かせたな……。

元々死んだ体に叩き込むというこらしいし、多分魂みたいな奴がまだ馴染んでいないのだろう。触覚は戻ってきているが視覚と聴覚が帰ってくるにはもう少し時間が掛かりそうだ。でも、何となくだが。私の隣でおそらくアルがずっと神に祈ってるような声、その反対にレトウスさんが回復魔法で何とかしようとしてくれているような気がする。それにそれ以外の気配も感じる、私が知る人たちがここに

いるのだろうか。

(……)

感覚が戻ってくるまで、少し待つ。

おそらく体自体は治っているのだろうが、私がソレに慣れるまで時間が掛かりそうなのが感覚的に解る。腕などを動かすこと自体はできるのだろうが、それをしてしまうと魂が完全に馴染む前に固定されて全部消えてしまうような気がする。ほら昔のゲームとかでセーブ中にカセットを抜いたらデータ吹き飛ばす奴。そんな感じ。

「……ッ！」

「……、……あ……、……。」

アルちゃんの悲鳴のような声と、レトウスさんの落ち着かせるような声。そこに後悔というか、自分にはもうどうしようもないというか、そんな感情が乗せられているように聞こえる。まあ腕の中身が全部ドロドロになってたら、もう魔法でもどうにもならないってことなんだろう。もしくは彼の持つ魔法ではどうにもならないとか。明らかに元に戻せない傷だよねえ……、脳もなんかえらいことになってたみたいだし。魔法と現代医療の差とかは根本的に違うものだから比べるようなものじゃないだろうけど、前世の医療技術でも無理そうだしね。それを元通りにしちやうつてのはさすが神って奴だろうか。

……正直あの人というか、神？ 信じていいのかよくわからないのよ。基本的に神と人間って絶対に価値観とかそう言うの違うはずなのよ。個体としてできることが違い過ぎるし、相手は全能っぽい神だ。甘いモノ好きだったり、しんどいのかめんどいなのかは忘れたが意図的に力をセーブしているところを見るにちよつと人間臭い神だなあ……、と思ったけどそれが演技だとか、ブラフだとかって言う可能性は捨てきれない。まるつきり全部信じられるような性格だったらよかつたんだろうけどね、こんなクソみたいな世界で生き残つ

ちやつたわけだし、そも前世の記憶にあるギリシヤの神々の知識が明らかに邪魔してくる。

いや一神教なところとか色々違うけどさ、前世の古代ローマって下半神で著名なゼウス様の最盛期なわけよ。古代的な考え方をもって血祭りだいすき！ NTR最高！とかやってる人なわけで……。この世界も人間が古代よりの価値観だったり、街並みとか完全にローマだしさあ……。『楽しかったよ、ビクトリアちゃんのお友達ごっこ！』とか『最後に殺すといったな、アレは嘘だ。』とか『やめな……さい！』でトマトにされそうで怖いんだよね……。

ま、どうあがいても勝てる相手じゃないし。恩恵を与えてくれるならありがたくいただいで、余計なことは考えないのが一番賢いんだろうけどね。

「……頭の……、おそろく……、ですか。」

「……師匠。」

ようやくだけど、私の耳が言葉を拾い始める。

声色で判別するのではなく、確実に単語が。彼女の私を呼ぶ声が、聞こえた。

うん、そうだね。今は余計なことを考えてる場合じゃなかった。

ゆつくりとだけど、口を動かす。

「……………あ……………」

「師匠ッ！」

視界も、音も、元に戻ってきた。私の眼には思わず私に触れようとして、手を止める彼女の姿が見える。いまの私の腕は元通りなのだろうが、闘技場で倒れて、ここへ連れてこられるまではほぼ死んでいた

様なものだ。……つまり、彼女は私の手がどうなっていたのかを見ている。人は水が入った革の袋みたいなのを言われたりするだろうけど、実際にそうなった奴の手なんか触りたくないだろう。その理由が、なんであれ。

「……ア……、ル。」

「……ッ！ はい、はいッ！ ここに！」

……うん、腕は普通に動かせそうだ。

ゆつくりと動かしながら、その顔に触れる。ふふ、そんなに泣くんじゃないよ。私がこれから死ぬみたいじゃないか。まあ実際は死んでたわけなんだけど。……言葉を重ねても、最期の言葉みたいになっちゃうか。なら、行動で示さないよ。

私は泣いている顔より、笑っている顔の方が好きだしね。

「師匠、し……むぎゅ。」

何か言おうとしたその口を。頬を、親指と人差し指で摘まむ。

「あひるぐち。」

「ひ、ひひよう!?!」

少しまだ早いかもしれないが、無理矢理体を起こし彼女の腰に手を回す。あとは遠心力をいかして回り、立ち上がりながらお姫様抱っこ。ああ、すぐくびつくりしてる。ほら、お師匠様はこんなに元気ですよ。ちよつと無理してるけどこれぐらい平気平気。

「ほらほら、ずっと曇り空だったら気分も晴れないでしょう？ 笑顔はマストじゃなかったっけ？」

「し、師匠。腕はッ！」

「治った！」

液化化してたらいくら軽いあなたでも持ち上げられないでしょ？
神サマに治してもらったとはいえないし……、何かよくわからんけど治った、ってことで。正直かの赤髪の子海賊みたく『安いもんだ。』しても良かったけど、これから色々あるだろうしね。両方の腕を使つて、キミが一人で歩けるようになるまで手助けするよ。

「……あ、そうそう。忘れるところだった。」

「ただいま、アル。」

「ッ！ おかえりなさいッ！」



それからの話をしよう。

まあつまらない話もあるからダイジェスト気味に、って感じで行かせてもらう。そこまで大きな山場があったわけでもないし、あまり人に見せたくない個人的なシーンもあつたからね。もうプライベートなんかクソ喰らえだった奴隷じゃなくて、立派な市民だし。そこら辺の配慮をしてもらってもバチは当たらないはずだ。……ま、次からは全部曝け出すからさ。我慢してね？

試合が終わった後は、簡単なパフォーマンスをやった。

内容はちよつとアレだけど、実態はこの国の最高権力者である皇帝陛下が主催して、わざわざ観に来ている試合だ。まだ動かしにくい体を無理やり仕事させながら軽い剣舞をやって、それが終わったら跪い

て皇帝陛下からのお言葉を賜り、閉会の宣言。その後は晴れてこの気が狂った人殺し大会はおしまい。ついでに私の剣闘士としての試合もこれでおしまい、つてわけだ。

その後はそそくさと控室に戻って撤退の準備。観客たちというか私の熱心なファンが一斉に駆け込んでくるのは解ってたから急いで荷造りをしていく。アルだけじゃなくドロちゃんとかレトちゃんも動員して、鎧とか剣とかそういうのを箱詰めしてフード被って裏口から馬車で撤退。さすがに復活した後だったし、精神的な疲労も残ってたから演技する余裕はない。ファンの子たちには悪いけどサービスはナシだ。

馬車の中では基本的にドロちゃんやレトちゃんへの感謝の言葉とか、世間話とかをしていた。大体今後どうするかとか、時間が出来たら遊びに来てね？とかそう言うの。社交辞令とかに近い感じだったけど、この縁はとても大事なものだし、色々落ち着いたら遊びに行かせてもらうことにする。

宿舎に着いた後は馬車の中で彼らと別れ、二人で中に入る。待っていたのは同じ主人を持つ奴隷仲間からの歓声だった。

まあ私が帰って来たということとはそういうことだからね。声が上がる理由は解ってたけど。声をあげてくれるぐらいの関係性を築けていたってのは単純に驚いた。私やったのってお前らが死なないように準備運動代わりに叩き潰してたぐらいだよ？ そんなにいい先輩じゃなかったのに……、一抜けしちゃうわけだし、なんか罪悪感みたいなのを感じちゃったよね。

そんな感じで祝いの言葉を貰い、タクパルとかからも簡単な言葉を貰った後は疲れてる、つてことですのですぐに部屋に入らせてもらった。一言そう伝えたらタクちゃんや他の奴らを纏めて離してくれた感じ。やっぱコイツいい奴だよ。そんな彼に礼を言いたかったんだけど、実は結構参ってたのも確か。肉体的にはそんなにだったけど、あの日は色々あり過ぎて精神がね……。

それはまあ、彼女も同じだったわけで。

誰の眼もなくなった時、アルはすぐ私に引っついて来た。

今生きて彼女の傍にいることは出来てるけど、一度死んでしまったこと、彼女を不安にさせてしまったことは確か。そのまま彼女に抱き着いて、寝台の上に連行。私はまだここにいる、貴女の傍にいる、そう伝えるように抱きしめながら彼女に謝罪の言葉を伝えた。……許してもらった後は、まあ色々。今後の話とかそういうのをしたよね。全く生産性がない会話だったけど、とても楽しかったことは覚えている。

その後は普通に晩御飯だったんだけど、先に言っておくがはしやぎ過ぎた。

私が剣神祭に勝って帰って来ただけで大騒ぎな上に、いつの間にか私が奴隷から抜け出すってのも広まってたからもう大騒ぎ。多分オーナーの下で働いてるあのポワポワ奴隷ちゃんの口から洩れたんだろうけど、大変なお祭り騒ぎをしようとしていた。私も私でそういうのは大好きだからさ、食材とか酒を買わせるために若い子たちに結構な額握らせて市場に走らせたりもしたのよ。

あとは私名義で保管してもらってた食品とかも全部開放したし、食堂のおばちゃんたちに袖の下渡して色々作ってもらったりと無茶苦茶やった。優勝したおかげでグッズとかそういうのが飛ぶように売れるのは目に見えてたからね。自分とアルを買い直す金は残してたけどそれ以外はもう使い切ってやろうってレベルで散財した。(ちなみにだけどここで騒いだ時に使った金額はオーナーが経費で落としてくれた。そ、そんなことしても加速20倍の斬撃しか出ないからねッ！)

流石に未成年に酒を飲ますまでは行かなかったけど、まあ前世含めて飲んだことのない高い酒もあったし、見たことないような食材を使った料理とか、奴隷じゃ一生かかっても食えないようなものまであってねえ……。まあ飲み過ぎた。

「かっこよかった師匠どこ……? (こっこ)?」

雰囲気呑まれて酔ったのか、ジュースと間違えて酒を飲んでし

まったのか解らないが、ぐでぐでになりながらも酒を呷っていた私を見て失望し、元の師匠を探して塩の瓶の中を覗き込むアルがいたらしいけど……、飲み過ぎて全部忘れた。無念。

あと聞いた話によるとレトちゃんとかドロとかオーナーまでも参加してたって聞いたんだけどほんと？ マジで覚えてないんだけど……。なんか絶対へんなこと言ってる気がする。

とまあそんなことがあつて次の日、普通にオーナーのところにお邪魔してアルと私の奴隷契約を破棄してきた。文面だけ見れば結構大事のように思えるが、実際は簡単な手続きだけ。前々から契約の話はしてたからねえ。クツソ重い硬貨の山をウチの金庫から引き出して、オーナーが用意した馬車と護衛にそれを突っ込んで商会の方まで移動。

剣神祭で手に入れた賞金、その私の取り分と持ってきた分でちょうど満額2・1億ツケ口。両耳揃えて支払っておしまい！

魔法で縛られていた契約がなくなり、二人の首にうつすらと光っていた赤いリングが霧散すれば無事私たちは人間という立場を手に入れたことになる。さすがの私も首元からあの忌々しい証が消えたわけだし、ちよつと気分が上がっちゃったよね。

その後はオーナーが用意してくれたらしい市民の服、前世のローマでよくあつた肩にかける上着みたいな奴ね？ それに着替えてヘンリエッタ様が用意して、オーナーに渡してくれていたらしい書類。市民権を獲得するのに必要なソレをもってお役所に出発。

ほんとは滅茶苦茶たらいまわしにされたり、袖の下を滅茶苦茶要求されるみたいなんだけどヘンリ様の御威光のおかげで全部ナツシング。お役所仕事とは思えないほどの速度で手続きが進んで、無事市民としての権利を獲得。その場で今年を含めた10年分の人頭税を払ってGet Wild退勤した。(爆破してはない。)

まあそれからは色々あつて……。

オーナーのお耳にこちよこちよして『剣神祭後に恩赦として解放したってことにしてグッズとか売れば売り上げ以上に商会の名も上が

るんじやね?』って告げ口したり、サインとか私の姿絵を描いた物品が速攻で品切れして嬉しい悲鳴を上げてる担当者の人の悲鳴を聞いたり、試合後初めての握手会開こうとしたら倍率がヤバくなって日程を増やしたり、まあ大変だった。

お仕事の裏でヘンリエツタ様にちゃんとお礼しに行ったり、帝都で住むのに必要な家を探したり、頼まれてた劇の脚本を作ったりとか……、いろんなことをしていた。もちろん腕が鈍らないように訓練とか、アルちゃんの指導も忘れてない。

「ほらほら、腰が入ってないよ!」

「うぐうツ! ……な、なんでまだ私。剣握ってるんですか?」

「いざつていう時に戦える力がないとどうなるか解らないでしょ、ほら休憩してないで打ち込んで!」

木刀で打ち込んでくる彼女の攻撃を軽くさばいていく。

剣闘士としての未来を彼女から無くしてあげることがはできたけど、まだまだこの世界は危険なことばかり。前世の日本みたいに滅茶苦茶安全で治安維持のために警察が頑張ってくれてる様な社会じゃないからねえ……、ここは。闘技場で戦ったことあるから解るけど、普通に人間の身体能力を優に超える魔物とかいるし、魔物以外にも人間の悪意つてのがいつ降りかかってくるか解らない世界だ。

教会の人たちは善であることを定められているけど、そのしわ寄せなのかそれ以外。特に貴族とかがえらいことになってるのは周知の事実。ヘンリエツタ様っていう大きな後ろ盾はあるけど、どこにでもそんなの関係なしに襲ってくるおバカはいるからね。

だから十分に自衛できる能力つてのは大事だよねえ、ってこと。

この子は魔法の才があるわけだし、ヘンリエツタ様をお願いして先生を付けてもらう予定だから、いずれその能力を伸ばしていくことになる。でもそれが近接能力を鍛えない理由にはならない。古来より遠距離キヤラは近づかれると弱いのだ。それを知りながら対策しないのは愚かの極みなのだ。

「だからアルちゃんを厳しく指導する必要があつたんですねえ。」

「ちよわッ！」

「お、今の避けるか。成長してるねえ……、じゃあお代わり入りまあす！」

「む、むりれふ！」

こんな感じで私たちは日々を過ごしている。まあずつとお家で訓練してるわけでもないし。アルちゃんの地元に行ったり、冒険者になったり、貴族の厄介事に首を突っ込んだりと、色んな事があつただけど……。

それは次の話にしておこう。

じゃ、その時まで。

幕間

26：はじめてのお使い 〈前編〉

「えく？　ほんとに大丈夫なの？」

「はい！　もう道覚えましたから！」

「ほんとかなあ？」

不安そうな顔を作るまでもない、心の中で浮き上がってきた感情をそのまま表に出しながらアルの顔を覗き込む。うん、可愛い。なめ回す……、のはさすがに嫌われるだろうし、頬をモチモチするぐらいに止めておこう。

奴隷の身分から市民になった後、私たちはヘンリエツタ様が管理する建物の一つを借りてそこに住んでいる。『解放後に急に放り出されても困るだろうし、宿なんか取っても噂が巡り回って私を始めとした熱心なファンが急行。明らかに営業妨害で宿から追い出されるのは目に見えてるでしょう？』と彼女に言われ、仕方なくお借りしているって感じた。

ま、ずっと居座るわけじゃないし一時的に借りてるだけだけどね？　ちようどいい感じの家が見つかったらそこに引っ越ししようって考えてたし、実際に……というかヘンリ。キミも直行するとか言ってなかった？　言ってない？　ほんとかなあ？　私、貴方のことは好きだけど正直な方がもっと好きかもしれないなあ？

……うん、思い出しただけで口から何か変なものが出てきそう。即興とは言えよくできた昔の私。とにかく、これまでのお礼を込めた小鳥ちゃんへのちよつと過剰なファンサービスは置いておくとして。

「道は？」

「覚えました!」

「お守りは?」

「全部持ってます!」

「武器は?」

「手入れ済みです!」

一つ一つ、彼女の持ち物を確認する。奴隷だった頃に着ていた従者服よりも少し大人しめのソレに身を包んだアル。奴隷になったころの布切れ一枚と比べると天と地の差。どこからどう見ても、古代ローマ市民で良家のお嬢様って感じ。腰に提げられた剣がちよつと調和を乱してる感じもするが、年齢の割には鍛えられている体と合わせるとベストマッチ。うん、かわいいこちゃん。

「でもなあ? 師匠不安だなあ?」

「大丈夫です、って!」

元気いっばいに返事を返してくれる彼女。今から頑張ろうとしてくれているのは、アレだ。”はじめてのお使い”。

奴隷解放の時の代金や、いま彼女が着ている服や持っている物。その全てが私が剣闘士時代に稼いだ金や、解放後に販売されたグッズの収益によって買い揃えたものだ。つまり全部私のお財布から出ている。アルからすればそれがかなり申し訳ないと思っっているらしい。

まあ気持ちは解らないでもない。自分も同じ立場だったら普通に申し訳なく思うだろうし、額が額だ。アルの値段だけでも1000万ツケ口、慎ましく暮らせば一生を何回か過ごせるぐらいの額だっけ?

最近入っていく額と出ていく額がアレなもんで若干そこら辺の感覚がはつきりとしないが、アルからすれば『わ、私何人分ですか? 私何人いれば返せる? あわわわわわ。』って感じらしい。

ぜんぜん気にしなくてもいいのにねえ? 正直いてくれるだけでいいのに。

「2000だったはずだから5000倍……、5000人のアル……。」

「師匠？」

「おっと、ごめんごめん。」

アルだったら何人いても嬉しいなあ、と思ったけど5000はちよつと多すぎる。最初は幸せだろうけど、絶対私が途中で見分けがつかなくなつて愛想尽かれて捨てられちゃう、よよよ……。とまあ、そんな変なことを考えていると本人に『どうかしましたか?』という感じに、顔を覗き込まれる。悪い悪い、本題に戻ろう。

ま、つまりちよつとでもお手伝いして恩を返そうとしてくれるわけ。彼女は今日の晩御飯の食材を買いに行こうとしてくれてるつてわけだ。

「うん、いいよ！」

「ほんとですか！」

「うんうん、ジナちゃん嘘つかない。じゃ、気を付けて行ってくるんだよ。」

「はいッ！」

うむ。元気いっぱいなお返事でよろしい。お財布は私の持つていき、買ってきて欲しいのは特にないから食べたいものを買っておいで。わかった？ ならよし！ お母さん、愛娘のためにおいしいご飯の用意しておくからね……！

もう一度持ち物を確認させ、いってらっしゃい、いってきます。元気よく出発した彼女を見送る。

「ま、息抜きも必要だし。あんまり思いつめるのも良くないしね。」

息抜きならぬガス抜き、つて奴だ。

……え？ いろんな奴に恨まれてるし、剣神祭で勝った後だから殺

した奴隷たちのオーナーから恨みやらなんやら買ってる上に、珍しく奴隷から解放された剣闘士だから滅茶苦茶目立っているのにアルちゃんを一人で行かしていいのかって？　いくら私が鍛えているとしても鍛えられた大人相手じゃ勝ちを拾えるか怪しいし、それも一対一でしか成り立たないの解ってるのに行かせるのかって？

「そんなわけないじゃんか。……」ジナは嘘つかないよ？」

傍に掛けてあつた白く長い布を、ターバンの要領で顔に巻き付け目元だけを外気に晒す。

「でも”ビクトリア”はどうかかな？」

大事な大事な”従者”だ。

誰にも触れさせないでしように。



どうも。最近奴隷から市民にランクアップした、アルです。

まあ元々農民と言いますか、奴隷ではなかったのですが色々あつて奴隷に落ち、師匠に拾い上げてもらったわけなのですが、今は市民です。しかも流行の最先端で、なんでも手に入ると言われている帝国最大の都市、帝都の市民です。とてもイケイケです。

「……………むう。」

そうやって無理やり気分をあげてみますが、やっぱり上手く行きません。自分の力ではなく師匠が稼いだお金で市民となり、しかも私は師匠に何も返せてないのでとても申し訳ない。そんな私が市民になってしまってもいいのだろうか、常に考えてしまいます。むしろ私の身柄を師匠が買ったことになるので『ご主人様』と呼んだ方がいいのかと色々考えてしまうのですが、とりあえず今は何か返せるようになるまで研鑽を積むことにしています。

一度師匠にそのところ相談したんですけどね？ 一度ふざけて『ご主人様♡』とか言ったら、無茶苦茶真面目な顔で『マジでそう言うのやめて、悲しいから。』と言われちゃいましたので、奴隷の私は永遠に廃業。市民で師匠の弟子である私ですつと行こうと思っっています。師匠は私に家族であることを求めてくれてるみたいですし、お母さん……、とはちよつと違うからお姉ちゃん。そんな感じで付き合っています、感じです、まあいつも通りですね！

むりやり話を戻しますが市民、そう帝国の市民です。

地元の村じゃ、『ふええ、帝都なんてハイカラさんが一杯で恐れ多いだべえ……』という感じだったのに、今や私がソレになっちゃってるわけです。師匠の謎語録だとシチーガールと言うらしいですが、正直ハイカラもシチーガールも全く意味が解りません。まあでも、響きはなんか好きなんですよね、これ。……鏡の前で『シチーガール！』とか言いながらポーズ決めてたのは秘密にしてくださいね、特に師匠には絶対に見られたくない。恥ずか死しちゃう。

とにかく、もう奴隷ではないのでどこに行っても怒られることはないですし、どんなお店に入ってもお客さんとして見てくれます！ 普通は貴族街の方とかなに行けば入る前に叩きだされちゃうのですが、ヘンリエツタ様に頂いた食客としての立場を証明するメダルを首からかけておけば、どこでもフリーです！ なんだか自分がちよつぴり偉くなったみたいでウキウキしちゃいますよね！

ま。何度も言いますが、全部師匠が積み上げた物のおこぼれですし、ヘンリエツタ様のご厚意ですから変なこととはできないんですけど。そもそも私が身に着けている服も、護身用に持たされている剣

も、師匠が剣闘士として稼いだお金で買っていたものです。私の物だと胸を張って言えるのは自分の体含めて何一つありません。師匠は『気にされる方が傷つくんだけど、それよりも今日の鍛錬まだ終わって無くない?』といってくれるのですが……

「ふん！」

頬を思いつきり叩き、気合を入れ直します。

いくら気にしても私にできるのは、日々のお使いとか、お掃除ぐらい。一つ一つ積み上げて、いつか師匠にお返しできるような大人に向けて頑張るしかありません。あと師匠、今日の鍛錬はお休みにしますね?

と、言うわけで今日も元気に晩御飯の食材を買いに来たわけなんです……。

「どこですか、ここ?」

思いつきり、迷いました。

いや確かにいつも通りの道じゃなくて違う道通っちゃいましたよ? 考え事しながら歩いてたら行き過ぎて、引き返せばよかったのに『あ、こっちからなら繋がってそうだし、近道できるんじゃない?』と、思っただけ全然知らない道通っちゃいましたよ!? でも思いつきり迷うとは思わないじゃないですかあ!!!

て、帝都自体滅茶苦茶広いですし、迷わないように簡易な地図とか持たせてもらってるのですが……。地図に描かれてない道ですよここ! というかまずここ何処! 現在位置が解らないと地図の意味ねえじゃねえですか!

「さすがにこれを使うのはちょっと気が引けますし……。」

懐から取り出すのは綺麗な装飾が為された綺麗な緑色の石。ちよ

うど私の手の平に収まるサイズのお守りです。

帯剣はしていますし師匠にしごかれてはいますが、まだ私は子供で勝てる相手の方が少ない。だからこそ持たせてもらっているお守り。これを強く握りしめたり、私からこのお守りが離れすぎたりすると即座に師匠のところへ連絡が行く魔道具です。ちなみに足首のところには持ち主の方角を示し続ける魔道具の発信機を付けています。つまりまあ何かあったら師匠が飛んできてくれるわけですが……。

「さすがに道に迷って呼ぶのは……、なんかちよつと恥ずかしいと言いますか。」

シチーガールです！　つてウキウキしてたら道に迷いましたッ！　とか正直に言えるわけじゃないですか！　それに一緒に来ようとしてくれた師匠に『もう帝都のこと大体わかつちやっただので一人で大丈夫です！』つて言っ出てきちゃいましたし。そもそもこの魔道具繰り返し使えるとはいえ、数万ツケ口は下らない高級品……、ちよつと使うのに躊躇しちやう値段です。

「と、とりあえず大通りに出れば何とかなるはず……。」

さつきまで通った道を思い出すが、多分だけど大通りに戻れそうな道はなかった。つまり私に残された選択肢は前進あるのみ。晩御飯の時間もありますし、太陽があそこら辺まで下がってしまったら師匠のヘルプを呼ぶ。そう決めた私は前に向かって足を進めます。

その様な形でてくてく前へと歩いて行っただけですが……。もしかしたら引き返した方が正解だったかもしれない。

お天道様はまだしつかりとお空に浮かんでいるのですが、明らかに建物が纏う雰囲気と言いますが、町の顔が明らかに暗いものに成って来てしまいました。しかも道を聞こうにもさつきから一人もすれ違う人がいません。私以外、誰もいないんです。帝都って色んな種族の人がたくさんいて、私がいいた村なんかと比べることも出来ないほどに

人間がいるはずなのに。誰とも会わない。

(と、とりあえずその角を曲がって誰もいなければ引き返そう
……。)

そう思いながら、若干警戒しながら足を進め、のぞき込むと。

「びゃ」

奴が。

死んだはずの、大男。

師匠が”異形”と呼ぶ奴が、そこにいた。

27：はじめのお使い 〈後編〉

「ぴゃ」

その声が聞こえるほんの数手前。彼女の頭上、建物の屋根の上からひそかにアルのことを見守っていた私は、すでに奴の姿を視界に収めていた。一瞬、自身の眼を疑うが明らかに幻覚ではない。私の肌が、魂が、警鐘を鳴らしている。私が死んだ原因を作った人間であり、私が殺したはずの人間。

考えねばならないことはたくさんあるのだろうが、そのすべてを消去する。そんなどうでもいいことを考えるよりも大事なことが、大事な人が、危機に瀕している。そう判断した私は、脳内のギアを振り切り、世界を置き去りにする。

〈加速〉七倍速

体へのダメージなんかアルの身に比べれば細事。気にする必要などない。

全身のバネを一つの標的に向け、解放。空中で回転し、両足を奴の体に。アルと異形の間割り込むように、奴の顔に向かってドロップキックを叩き込む。飛び出した直後、こちらのことを視認していたのか両腕をクロスされることで防がれてしまうが……、問題は新しい。新しくできた足場を思いつき蹴り飛ばし、アルの方へ。

「しっ！」

驚いた彼女の口が声を発する前に行動する。空中で顔に巻いていた布を取り外し、アルの体を包み込みながら後方へ。ごめんだけどコ

イツ相手に優しく状況説明とかそういうのをできるほど余裕はなさそうなんだ、ごめんね。目線で彼女にそう訴えながら、左手でアルの体を支える。この速度でケガをしないように優しく包み込みながら、残った両足と右腕で地面を滑りながら勢いを殺す。

敷き詰められた石畳を破壊しながら、距離を取る。視線の先は、さっきの衝撃で一步だけ片足を後ろに下げた異形。

言葉など必要なワケがない。なぜ生きているのかという謎すらわからなくてもいい。私の大事なものに手を出すのなら……。

何度でも殺すだけだ。

アルを地面におろし、自身の背で隠しながら腰に提げていた愛用の剣を抜く。

「そこでじつとしてなさい。」

「……はいッ！」

ここに奴がいる以上、前回は刺し違える事すらできなかつたが……、あの時から私は前に進むことを止めたつもりはない。すでにこの身は剣闘士ではないが、”傲慢”であり続けるためには誰にも崩せぬ力がある。大事な人を、今の身分を、全てを失う気などさらさらない。

幸い、今回は逃走という手も取れる状況。……だが、逃走など眼中にない。

不安の芽は、ここで摘み取る。

そう、決心し。踏み込もうとしたとき……

「ま、待ってくれ！」

異形の、初めて聞く声。

……お前ってそんな可愛らしい声してるのね。



「…………と、まあ、はい。そんな感じでした…………。」
「……………あ、話を整理するからそこから動くな、というかむしろ下
がれ。」

言われた通りに数歩下がる彼に、アルを私の背に隠す私。

OK、今聞いた話を整理しよう。

えっとつまり？

私が奴の頭を文字通り、死にながら消し飛ばすのには成功した訳だけどまだ死んでなくて？ 頭だけではなく首の根つこのあたりまで吹き飛ばしたせいで単に気絶みたいな状態になって？ でも死んだと判断されたので私が勝利した感じになって？ 死体だと判断されたその体は死体処分所に連れていかれた。

うん、ここまではまだいい。なんで頭部をえぐる様に霧散させた奴が生き残っているのかとかは、置いておくとして。

その後死体処分所で焼却処分されたわけなんだけど、この異形くんスキルである『再生』ニキが頑張ったおかげで全身ファイヤマンになりながら無事焼却所から脱出。しかも奴隷の証でもある魔法の首輪も、私が頭を吹き飛ばしたときにいい感じに破損してたらしく……。本来なら彼の元オーナーのところに戻るような命令がされたみたいなんだけど、壊れてるから命令どころか縛るものすらない。つまり私とは違う方法で、晴れて自由の身になったわけだ。

だけどそこからが問題。大きな体を何とか隠しながら人目が少なく、自身の正体がバレたとしても行方を晦ませそうな帝都の奥に身を隠すまでは良かったんだけど、さすがに”異形”でも長時間何も食べずに生存は不可能。故に生き残るために、何かしらの食料を手に入れる、もしくは日雇いの仕事で資金を得るために表の方に顔を出したところ……、ちょうどアルと鉢合わせた感じみたい。

「あの時は”契約”で発言どころか思考も縛られてたのでしっかりと覚えていないのですが……、御迷惑をおかけしました。」

「ほんとになっ？」

自ら両ひざを地面につけ、両手を頭の後ろに回した彼はそう答える。

「……まあいいや、正直お前の話をそのまま鵜呑みにするほど私はお人好しじゃない。だけど、そっちが私たちに手を出さないって神に誓えるのならとりあえず剣は納めてあげる。それでどう？」

「もちろん、誓います。」

彼に伝えた通り、私にはこいつの話す言葉の真偽を確かめる方法がない。縦割りにして死ななかつたぐらいだから頭部を消失させたとしても、殺せるとは思ってなかつた。だから判定勝ちを目指してあの時剣を振るつたわけだけど……。まあまともに考えれば首の根元にあるはずの特徴的な赤い魔法の円、奴隷首輪もない上にコイツが私を騙して得することはないように思える。

目の前にいる異形は、あの時見せた剣士としての顔も、暴走した獣のような顔もしてない。凶体は確かにクソデカいが、纏う雰囲気はどこにでもいそうな男のそれと同じだ。

……演技で食っている身からしても、違和感はない。だけど自分の感覚、役者としての感覚に全幅の信頼を寄せているわけでもない。私がこの世界で培った”剣闘士”としての感覚が『目の前の男は私を殺しうる』と叫んでいる以上無視できるわけがない。だが変に刺激して無駄な戦闘を引き起こす気もない。……戦う気がないのなら、剣を納めるぐらいはしてやろう。

「……OK。」

その言葉と同時に長剣が鞘に納まる小気味いい金属音があたりに響く。

英語の了承の言葉など彼には伝わらないだろうが、剣を納め肩をすくめることでこちらにもう戦う意思がないことは伝わるだろう。こちらを気遣いながらゆっくりと立ち上がった彼を見る限り、意味は伝わったようだ。

「変な動きしたら色々切り落とすからね？」

「……好きにしてもらって構わない、です。」

「……………一瞬顔歪んだってことは、”アレ”は覚えてるのね。」

若干青い顔をしながら頷く異形。うん、金的なこと。臃げにしか覚えてないって言ってたけどそれはしつかり覚えてるのね。ま、吹き飛ばした頭が元に戻ってるってことはアレも元に戻っているのだろう。もちろん”色々”にはそれも入っているし、元々男だったとしても切り落とすときは切り落とす。ま、どうせ元通りになるってことはエンドレス『もう一回遊べるドン!』ってわけでしょ？ なら延々にしてあげても……、冗談だって。

「まあいいや、それで？ お前さん名前……、は言わなくていいや。私名前覚えるの苦手だし、多分言われても覚えられん。それで確か食い物がないとかそういうのだったっけ？」

そう言いながら自身の懐を探る。帝都は比較的治安の良い街らしいが、私の比較対象の町が前世の日本ぐらいしかないので、私からすればこの帝都の治安は結構クソ。起きてる事件を列挙するのはめんどいのでまあ割愛するが、大体どんな犯罪でも起きていて、もちろんスリなんかも結構起きています。一応衛兵とかも頑張ってはいるみたいなんだけどね、帝都にいる人が多すぎて撲滅は難しいみたいだ。

ま、そんなわけで私も持ち歩いているお金は最低限度にしている。こいつの凶体を考えてもう少し欲しいところだろうが……、ないよりはましだろう。懐から財布として使っている袋を取り出し、そのまま異形に向かって投げ渡す。

「ほれ。」

「これは……………」

「金だよ、金。やるから好きに使いな。」

彼がそつと袋を開けるとこの国の硬貨である銅のコインが外気に晒される。一枚一ツケ口の最少硬貨だ。

「それと、表に出るなら少しぐらい顔隠していきな。いくら距離があつたとはいえ顔を覚えてる奴は覚えてる。背丈はまだ誤魔化せ……、まあかなりアウトだがまだ何とかなるだろう。でも顔がバレれば一発で衛兵とか呼ばれて奴隷に戻されるぞ？」

奴隷契約で思考を縛られるつてことは、こいつの身の上は知るだけで私たちに危険が降りかかる厄ネタだ。よつぽど言うことを聞かない奴隷に施される術らしいが、これまでのコイツとの会話においてソレに当てはまるような性格は見受けられなかった。むしろ指示されたことは全力でやるようなタイプだろう。話し方の節々から人の好きさ、みたいなものが感じられる。

つまり、こいつは何らかの理由で自身で考え動く”奴隷”ではなく、本当に文字通りモノとしての”奴隷”として扱う必要があつた、つてことだ。……うん、明らかに関わり過ぎることは私だけじゃなく、後ろにいるこの子にも悪影響を与えてしまうだろう。銅貨十数枚程度じゃ手切れ金としては少なすぎるが、目の前のコイツは私に対して恩を感じているように見える。

……キミには悪いけど。

「ありがとう、この恩は絶対に忘れ……」

「いや、忘れてくれると助かる。見ての通り、ようやく奴隷の身分から家族で脱却したばかりでね。厄介事はご勘弁、恩を感じてくれるのならば……、”今日は誰とも会わなかった”つてことにしてくれない？」

よくある異世界モノとかであれば、視界に入った者すべてを救ったりするのだろうが私にはそんなことできない。自身の精神が捻くれてる、つてのもあるし、私の手がそこまで大きくないのもある。ある

程度の奴には負けない自信はあるが、国家権力相手にやり合えるほど強くない。剣闘士の時に貯めた資金も解放や、今後の生活のために残しているおかげで自由に使える金額は全然だ。

ま、長々と話したが私が自信をもって守れるといえるのは一人くらい。もうその枠は埋まつてるから、私はキミを見捨てるってわけだ。悪いね。

「じゃ、そういうことで。帰るよ。」リリイ?」

「あ、はい!」

頭の中に浮かんだ適当な名前でアルのことを呼び、彼女の体を奴に晒さないようにしながら来た道を引き返す。言うことは伝えたし、彼も自身が厄介なことを抱えていることは理解しているだろう。”今日は何もなかった”、ちよつとアルが道を間違えたってだけだ。

何か言いたそうな顔で私のことを見上げるアルを視線で止め、歩き続ける。まだ彼に私たちの声が聞こえてしまうかもだからね、必要以上情報に渡すのは剣闘士だった時と同じように控えるべきだ。アルの名前は私のように大々的に出していたわけではないし、偽名だったとしてもバレる可能性は低い。

「……うん、これぐらい離ればもういいかな? それで、何かな”リリイ”ちゃん?」

「アルです。……その、ごめんなさい!」

そう言いながら、頭を下げる彼女。

「ん? 何のこと? 道に迷ったことは気にしてないよ、というか私でも普通に迷いそうだしアルちゃん悪くない悪くない。」

「でも……。」

アルの息抜きに、と思ってお使いをお願いしたけど……。逆にスト

レスになっちゃったかなあ。

「よし！　じゃあ気分転換に外食でもする？　道は通ってきたところ引き返せば帰れるだろうし、おいしそうな所見つけたら飛び込んじゃおうよ。」

「え、でも。お金は……。」

「あ、そっか。さつきスられちゃったんだった。じゃあ……、取りに帰らないとね！」

アルを抱え、空に向かって飛び立つ。まだ日は高いけど、屋根の上なら変な噂にはならないだろう。あんまり強く踏み込み過ぎると足場である他人の屋根をぶつ壊しちゃうから気を付けないといけないけど、絶叫アトラクションとしては最適なはずだ。

「家まで人力ジェットコースターで帰るよ！　お客様？　シートベルトをしつかりと締め、ベルトがない場合は腕の方を全力でつかんでくださいー！」

「えッ！　えッ！」

「さ、いくよー！」

踏み込みの瞬間だけ加速の世界に入り、空を飛ぶ間は彼女と同じ時間を過ごすために元の時間へと戻る。何も考えずに帝都の空を駆け巡って、適当な時間が経ったら人ごみに紛れて家に帰ろう。つけられる様な気はしないけど、念のためだ。その後は優雅な夕食と行きましょう。

「あわわわわわわわわわわ!!!」

「ほらほら！　こんなのは楽しんでもの勝ちだよ！　次は急カーブとトルネードでえーすッ！」

「ひゃああああああああ!!!」

その後思いつきり楽しんだ後、外食しに行ったわけだが……。なんか滅茶苦茶アルが憔悴してたことを記しておく。ま、とりあえず変なことを考えずには済んだみたいだし、ガス抜きは成功ってとこかな？

「というわけでまた変に思い悩んでたら一緒にジェットコースターしようね？」

「心臓に悪いのでやめてください……。振り落とされるとかの心配はしてないですけど、急加速がちよつと……。」

「え、けち。」

……あ、そうだ。結局お使いは有耶無耶になっちゃったけど、今度もつかい行く？

「こ、今度は一緒に行ってもらえますか？」

勿論。



その、後のこと。

「悪いね、ヘンリ。」

夜、深夜に差し替わろうとする時間に私は彼女の屋敷を訪ねて来た。もちろんこんな時間だ、正規のルートではなく彼女が空けておいたベランダからの侵入となってしまうが……。ま、大丈夫だろう。

「ええ、いらつしやい。……夜這いにしては少し時間が遅すぎるのではなくて?」

「悪いね、ウチの子が寝るのが少し遅くなつて遅れちゃつた。」

例の異形と会つた後、人間ジェットコースターをした後に財布を取りに行つたついでにお手紙を出しておいた。あて先は勿論、目の前にいる権力者様。魔道具の優しい光に照らされた部屋の中に彼女は招き入れてくれる。夜這い、と彼女はふざけて言っているが残念ながらただの不法侵入者だ。他の人に見つかったらまあしよつ引かれるわけだからスリルあるよねえ。

「調べておいたわ、」彼」のこと。結論から言うと裏はナシ、ほんとうに運よく抜け出せたつて感じみたいねえ。……この子も、かなり大変な人生みたいよ。」

そう言いながら、彼女は紙束を私に渡してくれる。

お願いしていたのは、彼。今日会つた異形のことについての情報だつた。

「比較的最近属州になつた国家の元王子様、本来なら処刑で済むのだけど持っている『スキル』が強力すぎるせいで簡単には死なない。かといって生かしたままだとおバカな人たちが祭り上げて新たな火種が浮かんてしまう。ほんと、可哀そうな子よね……。彼のお父様がまだまともな方ならよかつたのだろうけど。」

属州、この帝国がある大陸と海を挟んだ場所にあるそこは元々一つの王国があったらしい。その王はかなり好戦的な人間だったらしく、力量差を考えずに帝国に喧嘩を売り、無事敗北。まあ確かに勝算はあったらしいが、すでに間者が多数入り込んでいたその国には勝ち目など最初からなかった。宣戦布告と同時に、あつという間に攻め滅ぼされてしまったらしい。

「典型的な自分を持ち上げてくれる臣下しか手元に置かない愚物。……ウチもそうならないようにしたいわねえ。」

滅多に見せない統治者としての顔を表に出すヘンリエツタ。普段は少々パワフルで、趣味に全力な彼女であるがこれでも帝国元老院議員の妻であり、一つの派閥の頭である。正直そっちの彼女には関わりたくないの口をはさむ気はないが、少し新鮮に思えてしまう。

「ま、それで扱いに困った当時の総督は属州の運営資金の調達も兼ねてオークションに出したって感じみたいね。一応法では処刑すべきってなってるんだけど帝都から離れてるからねえ……。彼、結構優秀だしうまいこと隠してキツメの奴隷契約を結んだんでしょう。」

「それを買ったのがたまたま帝都のオーナーで、たまたま剣神祭に出場して、たまたま決勝まで残って。……すごい運だね。」

「本当に。私が貴方に出会えたくらいに。」

「うん？ それは必然じゃない？」

「あらー！」

なるほどねえ……。まあ不運な男って感じだね。可哀そうと思える心はまだ残っているが、どこまで行っても彼は他人。必要以上に感情移入することもないし、時間が経てばこの情報も忘れていくだろう。

「それで？ このことを知ったヘンリエツタ様はどうするのか？」

「そうねえ……。衛兵に通報したとしても誰も帰ってこないせいで人

手不足が加速するだろうし、放置しても結構な不安要素。親衛隊に伝手はあるから制圧すること自体は可能だけど、ちよつとややこしいのよねえ……。」

「政治の話かい？」

「ええ、かの滅んだ国よりは真面目にやってるつもりなんだけど、少し利権関係がややこしくてね。早めに改革した方が安心して後に託せ……、あらごめんなさい。少し関係ない話だったわね。」

そう言いながら本業の方の愚痴を止める彼女、普段というかこのお屋敷にお邪魔するときは基本的にこういった愚痴を聞いたりするのが私の仕事だ。そのせいで少し口が緩くなってしまったのだろう、私としては厄介事の処理をお願いしている手前いくらでも聞く用意は出来ていたのだが、本人が気にして止めてくれるというならそれに従うだけだ。

「ま、妥当なところは私のところで保護、つて感じかしらね。名前を変えて、顔を甲冑なんかで隠した上で、適当なお涙頂戴のお話を付け足したらいけるでしょう。最初から『属州で処刑されたことになっている王子』だから気にしすぎる人いないだろうし、もし勘のいいひとがいても私の保護下にいれば変に手を出す人もいないでしょう。」

「ありがとう、ヘンリ。」

「いーえ、気にしないでビクトリア様？ いいお話を聞かせてくれてありがとう。力量は大会で見てるから警備兵としては満点以上。それに使う機会がないとは信じたけれど彼は政治的に良いカードになるわ。心情的にも、政治的にも、またあなたに恩が出来ちゃったわね……。今度は何で返したらいいかしら？」

そう言いながら、やさしさと冷たさを兼ね備えた笑みを浮かべる彼女。奴隷であれど人を人として見ることができるとやさしさと、政治の世界で生き抜いて来た者特有の冷たさ、その二つを持つ彼女の顔はとても魅力的で、頼もしいものだった。私が男だったら惚れてたかも

ね、あはは。

「おっと、もう貰い過ぎだからご勘弁。キミからは十分すぎるほど頂いているからね、役に立てたのならそれで十分さ。」

「あらあら、無欲な人。」

そう言いながら、楽しそうに笑う彼女。本当に、私たちは彼女から貰い過ぎている。束縛されるのはちよつと嫌だけどたいいのお願いは聞いてしまうほどに恩がある。さすがに死んで来い、って言われるのは勘弁だけどね？

「……あ、そうそう。いい話があるのだけど聞いてくださる？」
「どうぞ。」

「実は私の派閥に最近高齢が理由で取りつぶしになりそうな騎士家があるのだけど……、いらない？ まあいつもの『私の物にならないか』って話なんだけど！」

「……おっと、もうこんな時間か。寝不足はお肌の敵だからね。帰らせてもらうことにしよう。……それでは、いい夢を。」

帰郷編

28：準備しに行きましょ

ハア！ 元気？ ビクトリア様ことジナだよ。

最近の調子はどうか？ 何かいいことあった？ 楽しいこと嬉しいこと、嫌なこともあるだろうけど、少しでも世界に彩りが出ると最悪な世界でも楽しめるよね。ま、私は最近そんな最悪な世界から抜け出して来たわけなんだけど。

抜け出して来た、つてのは勿論剣闘士の世界。血で血を洗い、人が死にまくるのが当たり前の世界だ。人間としての権利を欠片も認めてもらえず、物として民の娯楽になるために消費されていく。前世の豊かな生活と比べるとまさに天と地の差、だよ。

知らずの内にこの世界に転生？ してきた私は男としての体を失い、全く知らないこの世界の女性の体を手に入れた。それだけ聞けば一部の界限の方々は喉から手が出るほど羨ましいと感じるだろうが、残念ながら奴隷スタート。しかも私を買った主人は最悪の浪費家。この世界じゃ一般的な奴隷を物として扱うオーナーだった。買われた直後に闘技場、しかもルール無用の裏の方にポイ、だった。

普通ならそこで『ジナちゃんの冒険はそこで終わってしまった！

セーブ？ ねえよそんなもん。』だったんだけど、スキル。この体に宿っていた『加速』という力のおかげで生き残ることができた。自身の速度に倍率を掛けて加速できるスキル、その分体に負荷がかかるっと言うデメリットもあるがコレのおかげで今もここにいる。まあ一度このスキルに殺されたともいえるんだけど……、まあアレは私のせいだしノーカンってことで。

その後はまあ……、色々あった、つて感じ？

私を買った時のオーナーが老衰で死んで、彼の息子がオーナーに。剣闘士の運営方針の転換から私は裏の試合から足を洗って表に。そ

れまでの蓄積のおかげで力量は付いていたから結果が出て、さらに”ビクトリア”という今のキャラクターを演じることで人気が爆発。そこからタクパルと知り合ったり、アルを弟子にしたり、ヘンリエツタ様に出会ったり、まあ色々あった。

詳しく説明しだすと長くなるから割愛するけど、簡単に言うと試合に勝ち続けてお金が貯まったから自分とアルの身分を買って市民になったって感じ。つまり狭くいつ自分が死ぬか解らない剣闘士の世界から、自衛手段と納税。あと法を犯さなければ何をしてもいい外の世界に乗り出したってわけだ。

因みに出てすぐ何をしたかというところ……。

「まあ法の勉強だよね。」

「……よく読めますよねそんな分厚いの。」

「滅茶苦茶しんどいけど命かかってたらねえ？」

この世界の犯罪者への罰の一つとして奴隷行き、つてのがある。わざわざ奴隷から市民になったのにもう一回落とされるのはいやだよね、つてことで。こんなに真面目に机に向かったのって前世のいつぐらいだろう、ということを思いながら読み進めていく。盗み、殺し、貴族や神への不敬。他にもまだあるけど、気を付けておくのはそれぐらいだろうか。

さて、楽しくもない法の話は置いておいて次の話に移って行こう。

今の私の職業だけど、実は「無職」である。……いや一応収入はあるのよ？ 剣闘士を辞めてからも”ビクトリア”としての活動は続けている。私が奴隷身分から市民になったことは公表されてるし、その前提でグッズや握手会みたいなイベントも開催している。古代ローマっぽい世界でこういうことを考える奴、実行に移す奴、結果を

出せる奴は珍しくて私ぐらいしかいない。今のところは、ね？

そんなわけで何故か増えたお貴族のお嬢様方からの熱烈なアタックを躲しながら、生活費を稼いでいる。もちろん剣闘士だった時と同じようにグッズの制作販売やイベントの会場を押さえるのはオーナーに任せてるから、全部が入って来てるわけじゃないけど……、アールと二人で数年のびのび暮らすには十分な額だ。

「でもこのままじゃどつかで詰むから、何かしらの職は得ないとねえ……。」

さつきまで読んでた法の本を机に置き、空を見上げる。剣神祭直後のブーム、私が優勝したことで飛ぶように売れたグッズたちの利益、それで購入した自宅の中で午前の何も無い時間を過ごす。庭ではアールが素振りをしており、私は庭先に出した椅子に座りながらそれ眺める。

剣闘士、という身分を抜け出してもう二度とあの殺し合いの世界に足を踏み入れたくない私は、“ビクトリア”という名をさらに広める方法を失ったことになる。これまで私の主な宣伝方法は試合で勝利することだった。それを失ったわけだから時間の経過はファン数の減少、食いつ持の減少に繋がる。今はまだいいけど、いつかは食べるのにも困る様になるだろう。それまでに“今のビクトリア”以外の手段を見つけるべきだ。

「余裕がある内に、って奴。ひー、ふー、みー……、ぐらい？」

一つ目はまず、今やってるビクトリアの延長って言う策。簡単に言えば『役者』の道。

机の上にある本、さつきまで見ていた法関連の物以外に劇の台本。そしてこの世界の一般的な風習、風土について書かれた本が積み上げられている。そしてその一番上に何度も書き直した跡がある紙の束。これはまだ剣闘士のころにヘンリエッタ様と約束した私が主役であ

る劇の台本、そしてその資料たちだ。

私の半生をそのまま劇とし、そこから私の『役者』としてのキャリアを積み上げていくっていうルート。明らかに私の胃がお亡くなりになりそうなルートではあるが、しっかりとしたパトロンがいる上に貴族階級向けの娯楽であるため実入りは非常にいい。帝都から離れることが難しくなるだろうけど、”ビクトリア”の延長だから失敗しにくいルートだと考えられる。

十分アルを食べさせていける仕事だし、そこら辺は自由だがアルが望むのであれば引継ぎなんかもうまく行きそうな職でもある。……まあそれを成功させるのにはまず台本の作成、存在しない奴隷になる以前の記憶を全部0から作り出さないといけない訳なんだけどねえ。

「マジでここら辺どう書けばいいか解らん……。こっちの常識がない上に、そも台本とか作ったことないのにねえ……」

因みに私の劇をやる、つてのはもう決定事項らしく今度どんな道を歩むにしてもやらなければならぬ仕事だ。

お次、二つ目。『冒険者』という道。

気ままに世界を冒険して、魔物なんかを倒してお金を稼ぐ仕事。今持つてる武力をそのまま使うルートだね。

こっちの良いところは何にもまして自由、つてところ。誰にも縛られないし、止められることもない。私が見たかった異世界という世界を自由に楽しむことができる。まあつまり旅行しながらお仕事するって感じ？ さっきの『役者』としての道が堅実寄りだとすれば、こっちは私の願望寄り。魔物とかの死の危険性はあるし、私の趣味嗜好にアルを突き合わせるのはどうなのか、つていうデメリットはあるけどかなり魅力的に映ってしまう。

私の体が衰えたりすればできなくなる仕事だし、アルが付いて来るにも、付いて来ないにしても彼女の安全をどう確保するかって問題も

ある。傍にいても勝手の知らない場所で守り切れる自信はないし、どこかにおいていくのも不安が残る。どっちにしろアルの修行がひと段落するか、魔法の習得が出来てからじゃないと難しそうだ。

「すぐにはできないし、経済的な不安が常にある。でも懂れるよね、冒険。」

「私もできるならば師匠と一緒に色んなところ行きたいです。……でもそれ以上に足手まといになるのはもつと嫌です。」

「そっかあ。」

最後、三つ目。まあ選ぶことはないだろうが『騎士』という選択。

少し前にヘンリエッタ様が言っていた『騎士爵』が空いたって話、私はそれに誘われている。『必要な武力は十分だし、読み書き計算もビクトリア様できるでしょう？ ならもう貴族として求められる最低水準は軽く超えてるわ！ というわけで私の物にならない!?!』という感じに。

貴族として求められているのはまず武力、外敵から庇護下の民を守るに足る力が必要で、それまでの爵位を継承するときも、新しく作る時も最低限そこを見ているらしい。まあ力と言っても経済的な力だとか、知力的なもので代用可能みたいだしあんまり厳しくはないみたいなんだけどね？（実際今の貴族でその個人が実戦に耐える能力を持っているのは少ないみたい。あ、ヘンリエッタ様はイケイケな方だった。）

武力の方は剣神祭で十二分に示したし、もし所領とかを貰ったとしても『普通に経営のイロハとか教えたなら貴方普通にできるんじゃないの?』とのことで強く勧められてるわけだ。

……条件はいいんだけどね。怖いぐらいに。

「どっかの派閥に所属するのは……、いやもう所属しているようなも

のだけどさ。まだ未遂みたいなもの。完全に取り込まれたらそこからは嫌あくな政治の世界。自分からそこに飛び込みたいとは思わないよねえ。」

それに、彼女が”所領”つて発言したことから察するにすでに誰か住んでいる土地を私に任せようとしている。つまり自分の命と、アルの命。それ以上の物が私の肩に乗っかるってことだ。

「さすがにこれ以上はご勘弁。」

すでに私の両肩には今まで殺して来た奴の骸がこれでもかと思っかけている。最近一人カウントし間違えていたが、それでも一人減っただけ。これ以上他人の人生を終わらせることはしたくないし、そんな奴に自分の人生を任せたい奴などいないだろう。

「ま、どれを選ぶにしても。やることは決まってるんだけどね。……アル！　そこらへんでおしまいにして汗拭いて来な！　出かけるよ！」

「あ、はいッ！」



「何をするにしろ、まずはアルちゃんの親御さんにご挨拶に行かないきゃだしね。その準備からだ。」

「私がありますんですけど……、いいんですか？」

「もちろん！」

家庭訪問に行く先生の気持ちってこんな感じなのかなあ？　と言う師匠の顔を見上げる。私たちは今帝都から離れ、その郊外にある牧場へと向かっている。私の故郷まで帝都から結構な距離があるため、その移動に使うための馬を買いに行くらしいです。

普通の人間なら乗合馬車とか、近場の都市まで行く商人とかに頼んでそれに同行するってのが普通だと思うんですが、師匠はそれを選ぶつもりはないみたい。『一応有名人だし、見ず知らずの人と一緒に行くのは結構危ないからねえ。寝込みとか襲われたくないし。』とのことで、行くなら私たち二人で、という事みたいです。

確かに私はともかく、師匠の顔は帝都の大半の人が知っていますし、知らない人でも師匠の名を聞けば先日の剣神祭の優勝者であることは理解できます。実際今乗っている乗合馬車が集まる駅に向かうまで多くの人が師匠に声を掛けてきましたし、駅に着いてからも大騒ぎでした。そのせいで牧場までの馬車を貸し切りにしないといけなかったですしね……。

「食事にクスリ混ぜたりとか、いろいろあるらしいからねえ……。冒険者を雇って護衛してもらおうっていうのもあるけど外れ引いた時のことや、魔が差しちやったりすることも考えるとやめておいた方が得策だよな。」

冒険者、と言っても上から下まですごい差があります。その者が持つ力量も、価値観も、千差万別です。故郷にいたころ一度だけ、たまやって来た冒険者のチームを見たことがあるのですが、なんとうか犯罪者一步手前って感じでした。もちろんすごくいい方たち、教会の方たちと同じような冒険者の方もいらっしやいますが、自身が不利になったらすぐに逃げだしたり、護衛対象を逆に襲ってしまう冒険者もいるみたいです。

「正面から来てくれれば負けることはないだろうけど、搦手はねえ……。例のアイツみたいに私が如何にもできないスキルを持つてる

奴もいるかもだし。つと、見えてきたね。」

師匠につられ、外を見る。小高い丘を越えた先には広大な草原と、それを囲う柵。帝都のお膝元で、私たちの口に入る畜産物を生産する巨大牧場です。視界の端から端までが牧場の敷地。少し離れたここからでも牛さんとかがのんびりと草を食んでいるのが見えます。故郷にも農業のお手伝いをする牛さんはいましたが、一頭だけでかなりのお婆ちゃんでした。

「すごい、たくさん……。」

つい、口から洩れてしまいます。ここから見えるだけでも色んな柄の牛さんが見えていて……。なんとというかすごく、すごいです。

「お、着いたか。おっちゃん、コレ代金ね。帰りはこっちで調達するから……。口止め料も入ってるからね？」

「へ、へいー！」

「アル、ぼーつとしてないでいくよー！」

「あ、はいー！」

牧場の大きさというか、牛さんの数の多さというか、いろんなものを故郷の物と比べてしまい、圧倒されていたみたい。気が付いたらもう牧場の近くについていた。いつの間にか荷馬車のおじさんに銀貨を投げ渡していた師匠の背中を追って、馬車から飛び降りる。

「アル、どうする？ 私と一緒に馬を見に行くか、それとも見学させてもらうか。」

え、どうしよう。弟子として、絶対一緒に付いて行った方がいいと思うんだけど……。すごく気になる。見学、させてもらえるのかな？ 牛さんとか馬さんとか近くで見せてもらえるのかな！ 故郷にい

た時も奴隷になった後もちゃんと傍で触れ合える機会なんか全然なかったし……！

「貴族向けだけどたまに観光とかそういうのもやってるんだって。まあ色々自己責任らしいから一部の物好きしか来ないらしいけど……。」

そんなことを言いながら、私の顔を覗き込む師匠。ど、どうしよう。ちよつと顔変になってたかな。そわそわが外に出ちゃつてたかな。すぐに抑え込んだけど、まだ顔に残ってるかな。

そんな私の不安をよそに、こちらの表情を一瞥した後。笑顔を浮かべた彼女は優しく頭を撫でてくれる。

「了解、そうしよつか。」

「……っ、はい！」

29：散財デー

「……と、このような形で牛の方を飼育させて頂いています。少々離れていますので今日はご紹介できませんが、豚とか鶏とかもやらせて頂いてるんですよ。」

「なるほどねえ。」

「牛さん……！」

馬車から降りて数分歩いたところにある建物、そこで出会った馬の担当をしている飼育員さんに話を聞きながら柵の外を歩いていく。少しだけアルに餌やり体験をさせてもらったせいとか、柵の内側では丸々と太った牛たちが数頭ついてきている。ほらアル、触りたいのは解るけどあんまり近づき過ぎると手、持ってかれるよ。

「えッ。」

「ははは、この子たちの品種は完全な草食なので鋭い歯は持ってないから大丈夫ですよ。まあ確かに噛まれたら痛いと思いますが、人に馴れている子ばかりなので思いつき噛むことは少ないかと。」

「へえ。」

二人で案内してくれる彼女の話を聞く。帝都では少ない日焼けした女性で、その服装も都市にいる人たちと比べると結構厚着だ。まあいろんな動物を飼っている上に、魔物が結構攻めてくるらしいから自然とそうなるのかな？ 最近少し余裕が出来てきたからか、もしくは劇台本のネタを探しているせいとか、そういったその人が持つ文化的なところに目が行くようになってきた。

「そういえばなんですけど、ビクトリアさんは料理とかなされるんですか？」

「ええ、人並みには。」

「あ、そうなんだ意外……。そ、そのですね！ 最近帝都の方の卵とかの鶏系の商品がすごく高くなってるじゃないですか！」

彼女の言う通り、帝都で卵とかを買おうとすれば一個50ツケロ行くか行かないかぐらい。大体5ツケロぐらいあれば最低限の食事が摂れることを考えればかなり高い商品だといえる。個人的に卵結構好きだし、たんぱく質とかを摂るには最適だからってことで値段には目を瞑って毎日かなりの量を買っていたおかげか、お財布に無視できないダメージを与える食品だったんだけど……。

「実はあのクソゴブリンどもが鶏小屋に火をつけやがりました……。全員血祭りあげたのは良かったんですが、肝心の鶏ちゃんたちが全滅しちゃったんですよ。」

「ええ……。」

「ほら、あちらの方で建築中の建物が見えるでしょう？ アレが完成して軌道に乗れば、値段の方もだんだんと戻ってくると思うのでもう少しお待ちいただければ。」

私が奴隷から解放された時には今の高騰している状態だったせいで、『この世界は元々卵とか高級品なのかなあ？』と思っていたのだがどうやら違ったようだ。……まあでも帝都の近くにこんな大きな牧場があるからこそ、値段を抑えられるだろうし。アルが私のところに来るまで食べたことなかったってことを考えるとやっぱり高級品には変わりないのかも。

「あ、そろそろですね。あちらが厩舎になります。昼過ぎにいらっしやるとお聞きしたので、すでにお売りできる子たちは集まってもらっています。ぜひビクトリアさんにぴったりな子を選んであげてくださいね。」

「解りました、ありがとうございます。アル、一緒に……。」

一緒に見にいこうか、と声を掛けようとして振り返ると柵の中にいる小さい馬、幼駒に目を奪われ柵にしがみついている彼女がいた。……さっきの牛を見てた時も目を光らせていたし、彼女からすれば牧場なんて来ると思っていたいなかった場所だろう。故郷の村には馬なんていないって言ってたし……。

(ふふ、かーわい。)

そもそも、今回私が彼女の故郷である村に行こうとしているのは単純に親御さんに挨拶しに行くだけじゃない。アルの身柄をどうするか、つて言う話にもなってくる。身柄という言い方が誘拐みたいになつてしまいが、実際私が似たようなことをしていることには変わらない。

彼女は奴隷として売られ、私の下で弟子となり、市民になった。彼女を奴隷として買うのではなく、彼女の奴隷解放資金を肩代わりする形で。アルはそのことを強く気にしているようだが、あのお金は私が壊れずにここまで来れた、そのお礼みたいなものだ。彼女という心の支え、帰ってくる理由がなければ私はどこかで壊れていただろうし、未だ闘技場で殺し合いをして、いつかあの骸たちと同じように死んでいただろう。

その恩をお金で解決しようとしたわけではないし、まだ恩を全て返し切れたとは思ってない。彼女が望むのであれば、せめて成人するまでは私の持つモノすべてを彼女に教えようと思っている。……でも、彼女はまだ子供で、本来なら親の庇護下にあるべき存在だ。

彼女の親御さんたちがまだアルを育てようと思っているのなら、私はすぐに手を引く。引かないといけない、月に一度くらい、ほんの少しでも会わせてくれればいい。……まあこの血塗られた手じや許してもらえるか怪しいけどさ。彼女と会えなくなるかもしれないって可能性が、親御さんのところに行かない。筋を通さない理由にはない。

ここまで案内してくれた職員の人を手招きし、小声で話す。

「申し訳ないんだけど、彼女の気が済むまで見せてもらってもいいですか？」

「あ、はい！ 大丈夫です！ 私どもとしても興味を持つてくださるのはありがたいので。あ、よろしければお帰りの際に感想とかお聞かせ願えますか？」

「それぐらいであればもちろん。」

「ありがとうございます！ じゃあ今遊んでる子たちに集まって貰いますね。おい、こっちおいで！」

彼女の声が聞こえたのか、外で遊んでいた幼駒たちが何頭かこちらに走り寄ってくる。それを見たアルが、幼駒とこちらを何度も繰り返し見ながら『こっちに来ている』ことを報告してくれる。……テンションが上がって精神年齢が下がっている。いや元の年齢にふさわしくなってるというべきか。まあとにかくクソカワイイことは確か。口が緩んでしまうよね。

「めし？ あ、お客さん来てるじゃん。さーびすさーびす！」

「おじいちゃんご飯は先週食べたでしょ。」

「我はおやつを所望する。」

「え？」



「え？」

目の前のお馬さんが、人の言葉を喋っている。しかも口をなんか無理やり動かしているというか……、彼らには悪いけど気持ち悪い形に動かしながら、喋っている。

この時の私は目の前で起きた全く理解できないことで頭が一杯一杯だったが、師匠も同じような感じだったらしい。いや確かに非常に高い知能を持つ魔物とかが独自の言語を使っていたり、人間の言葉を喋ることはあるのは知ってたよ？ でもこんな見た目可愛い小さなお馬さんからさ……、人間の50代ぐらいの男性のハスキーボイスが出てくるとは思わないじゃんか……。

「今年の春生まればかりの元気な牡の幼駒ちゃんたちですよ、かなりモフモフしてますから触り心地バツグン！」

「毎日ブラッシングしてもらってるおかげで、ふわふわや！」

「くっ！ ふわふわ度で負けた！ 生き恥！ 馬肉にしてくださいえ！」

「我、ちよつと固め。」

一番おじさんっぽい声の幼駒が触れ触れと寄ってくる、が正直こんな声の奴なんか可愛くない……。とうかなんでお馬さんが喋っているの……!?! なんてその見た目でクソ低い声なの!?! 普通もつと可愛い妖精さんみたいなお声じゃないの!?! てか昔聖書の朗読の時に聞いた『神様と会話する馬』って本当だったってこと!?!

「あの……、なんでこの子喋ってるんです……?？」

「え? ……ああ! ご存じなかったんですね！」

おそらく彼なりのやさしきで『触れ触れ、気持ちいいぞ』と言いな
がら寄ってくる”ふわふわや!”の馬。見た目は確かに愛くるしいの
であるが、声がもうおっさんである。ごめんなさい、気持ち悪いです。
柵から突き出していて、驚愕で停止していた腕に無理やり触らせよ
うとしてくるその馬から逃げる。がしかし即座に標的をもう片方の
手に定め突撃を敢行。しかも木の柵の合間に頭を突っ込んで頭を触
らせようとしてくる。ツ！私はこんな変な生き物の頭なんか触り
たくない！ さっきのモウ、ってなく優しい牛さんの感触を！ 変な
おじさんみたいなウマの赤ちゃんの感触で上書きされたくない！

師匠に教わったフェイントの使い方を活用しながら避けていくが、
相手に諦める様子は見えない。むしろ遊んでもらっていると勘違い
したのか速度が増してきている。さらに一人称が”我”の変なプ
レッシュャーを放つ馬も遊んでもらえると思ったのか近づいて来たツ
！ 二対一！ 圧倒的に私の不利！

どうにかして触らないようにする私と、触らせようとしてくる幼駒
の攻防が始まった裏で、師匠たちの会話は進む。

「お馬さんたちにも結構種類がいますね、ウチが扱っている種は”
聖馬種”ってやつなんです。聖書にある神が初めて名付けた馬の
子孫たちで、普通のお馬さんよりも長生きで強く、速いです。言葉も
普通に解しますのでお世話も結構ラクチンな子たちですね。ただ
他の馬と違って自我が強いせいで食べ物が好き嫌いだとか、普通の馬
房じゃ満足しなかったりとデメリットもあります。」

「そのせいで俺たちお高め、喋らない奴の何倍くらいやつけ？」

「我、答え知る。三倍。赤くはない。」

「ちなみに神が名付けた名前は『オマエガウマ』……、センスないよね、
神様。」

【は
?????】

最後に発言した、さっきまで自分のことを『馬肉にしろ！』と叫び

ながら地面を転がっていた幼駒の隣に、轟音と共に雷が落ちる。その地点が真っ黒になるほど焼け焦げ、対象となつた幼駒が悲鳴を上げて地面を転がる。あと数センチ右にずれて居ればあの子も天に召されていただろう。神のセンスを侮辱したのだ、シカタナイね！

ちなみに信者の間で私たちの神様のネーミングセンスが終わっていることは周知の事実だ。聖書にも『我が神は、これがいい!』と思つて名付けていることが多いのでとりあえず拍手しておきました。』という描写が残っている。つまり奴は触れてはならない領域に足を踏み入れてしまったということ……！

【次はないからな。】

「……まああんな感じで、彼はまだ許されましたけど、たまに粛清される子もいます。でもご安心ください！ 今回ご覧いただく子たちは三歳馬以上の子たちで、ある意味、選別、された子たちですので粛清の心配はございません！」

「あく、うん。そうなのね。……こわ。」

雷が落ちた瞬間に、そちらの方を向いた幼駒たちの隙を突いて柵自体から離れる。ふッ！ そもそも先ほどの攻防は柵を挟んでいたから起きていた事！ こちらから離れてしまえば、飛び越えてこない限り……。ツ！ その構えは！ 跳躍！ 馬は跳躍力もあることを忘れていた！ 私の背丈ほどある柵でもこいつらにとっては少し高い障害物でしかないというのか！ 柵がなければ私を守るモノがなくなってしまう！ く、来るなッ！

「し、師匠！ もう私大丈夫ですッ！」

「そう？ なら待たせるのも悪いし、行くとしますか。ボーイズ、ウチの子と遊んでくれてありがとね。」

急いで師匠の後ろに隠れたおかげか、それとも終わりの挨拶をして

くれたのが功を期したのか、あのすごい声の幼駒たちが去っていった、助かった。……ん？ アレでも私。家で師匠に……。

『お馬さん！ お馬さん買うんですか！』

『うん。移動に使えるだろうし、何するにも使えるだろうしね。帝都で馬車引いてもらったり、冒険するときに乗ったり……まあ色々。ヘンリ様から勧められたのもあるし、買ってでもいいかな、って。』

『な、なら！ 私がお世話します！ 私、動物好きなんです！ やりたいい、やりたいです！』

『そう？ ならお願いしようかな。』

ヤバい！ ヤバいです！ 私お世話するって言っちゃいました！

『さすがに全部任せるのは重労働だし、たまに手伝ってもらおう形かな？ 最悪どつかの厩舎でお世話頼むのもありだろうし。』って師匠言っていましたけど、私あんな声出す生き物触りたくないです！ 口の動きとかすぐく気持ち悪かったし！ 馬のお口で無理やり話そうとするからああなるんです！ 見る側の気持ちも考えてくださいよオ！

「あ、あの！ 飼育員さん！」

「はい、どうされました？」

「お、女の！ 女の子のお馬さんの声はどんな感じですか！」

「ああ、普通な感じですよ。私の様な声です。」

「ツ！ 師匠！」

「お、おう？」

「お願いしますからね!!!」



その後のことは少々長くなったので割愛させていただきます。

アルに念押しされた後、厩舎に入った後は十数頭の中からウチで買うことになる馬を選ぶ作業に入った。まあお仕事をお願いするわけだが、平時はおそらくペットみたいな扱いになるだろう。今後私がどのような道を歩むか解らないため、そう言ったところも気にしながら選ぶことにした。

でもまあ思ったより簡単かというと、スムーズに進んだよね。

アルのご希望に合わせて買うのは牝馬、しかもその馬と直接意思疎通できるわけだから『この子は性格的に合わなそうだな』とか『ああこの子は戦場に出たいタイプなのか』つてのが簡単にわかる。気分は正にバイト先の面接官、って感じかな。結構高い買い物ではあるので慎重には決めただけども。

剣神祭に勝ったおかげで人気も絶頂だし、グッズとかの売れ行きもいつか下がるだろうけど順調ではある。でも湯水のようにお金を使えるほど儲けているってわけではない。いや儲けてはいるけど消費も結構しているというべきかな？ 私やアルの体を保つための食事に、未だこの世界じゃ貴族向けの嗜好品でしかない美容系の製品や化粧品道具、もう戦う必要性はなくなったとはいえ装備の手入れは必要だし、”ビクトリア”としてふさわしい服を纏わないといけない。

しかも最近追加で家も買っちゃったしね……。厄介なファンが来ても困るってことでかなり治安の良い場所の家を買って、一つ一つが万を超えるクソ高い魔道具で防犯。あ、魔道具と言えばアルの身を守る為に色々買ったし、私も暗殺対策に毒とかの耐性を付与する装飾品タイプの魔道具を買ったから……。

うん、その上馬も買ってるからかなりの浪費になってるかも。いや

でも不必要なものではないし……。そも私の根幹にある価値観は前世のままだからこれでも足りないというか、もういつそのことスマホとかPCが欲しいというか。簡単な調べものにも、帳簿付けるのにも、前世の世界じゃまるつきり文明に頼ってたんだなあということ再確認してしまってるんだよね……。

「師匠？」

「おつとごめん、ぼーつとしてた。」

馬上のアルに声を掛けられ、思考が戻ってくる。いくら今乗ってる子が賢くても落馬したらシャレにならないからね。気を付けないと。

『そうそう。私のお母様から聞いたのだけど、実際落馬で亡くなる方多いらしいのよ。』

『気を付けるのに損はないですね。』

「はいはい、気を付けますよ、つと。」

ということを買ったのは二頭の牝馬。ちようど今は二人の背に乗せてもらいながら帝都に向かって帰っている途中だ。乗馬の経験なんか全くなかったんだけど、馬が賢いおかげである程度何とかなってる。前世じゃ乗馬どころか馬と関わる機会すらなかったから彼女たちのすごさの比較とかはできないんだけど……。まあバイクの自動運転？ みたいな感じだ。

ちよつと高飛車なお姉さま、つて感じの話し方をしている子が『ルベス』で、のんびりな感じの話し方をしている方が『コピーア』。話を聞いている感じ、彼女たちが求めるものなら用意できそうだったし、誰を乗せるかとかのこだわりもないみたいだった。仕事もちゃんとしてくれるってことだからおいでませ、つて感じ。まあ性格とかが合わなかったときは違う子を試したり、返品とかもできるってことだからお試し期間なのかな？ ちなみにお値段の方は二人合わせて600万ちよつと。

「はあく、別に使いつぶすつもりはないけどさ。せめて値段に見合うぐらいは働いてよね？」

『ええもちろん、と言いたいたいところだけど仕事があれば返せるものも返せないわ。値段に見合った仕事を用意してくださいな。』
『頑張りますよ〜。』

”コペス”の方にうなだれながら、そんなことをつぶやくと二人からそんな答えが返ってくる。まあそりやそうなんだけどさ……。ちなみに600万つてのはこの子たちが繁殖に入った後のことも加味されての値段だ。奴隷と同じようにこの子たちが子供を産んだ場合、その子供の持ち主は私になる。だから牝馬つてのは高くなるんですねえ。

「ま、そこら辺はアルの帰郷の時に頑張ってもらおうとして……。私も仕事頑張らないとなあ。」

30：出発

「帝都から出て、一日野宿。ララクラを経由して……、二日ぐらい野宿？ そしたら到着な感じ。」

「小旅行か。……魔物避けの香は買ったのか？」

「もちろん、余分に買ってあるよ。」

旅行の簡単な工程を気の許せる友人と雑談する、未だ交通網の整備どころか内燃機関がない世界だと10日以上以上の移動はザラにある。私からすれば”小旅行”、ではないんだけど彼らの感覚からすれば、そんな感じらしい。ま、こんな楽しい雑談を聞けば優雅なお茶の時間でも思い浮かべてしまうだろうが、実際はうるさいほどの剣撃が、金属と金属が衝突し、摩耗する音が絶え間なく鳴り響き続ける。

私からでも、タクパルからしても、こんなお遊戯は準備体操にもならない。型に嵌った何の面白みもない剣、『三倍速』という”遅い”速度で振るえば片手間に雑談なんか余裕ってもんだ。最近ようやく七倍速に体が追いついて来た感じだし、タクパルだつてずっと前に進み続けている。二人とも衰えが来るのは、まだ先だろう。

「つと、まあこんなもんでいい？ タクちゃん。」

「ああ、構わん。」

数百ほど打ち合ったあと、汗ひとつかかずに剣を納める。お互いに鈍っていないかの確認の意味もあったけど……、大丈夫そうだね。

「というわけで”ジナちゃん”のお遊戯会はおしまい！ 私もタクちゃんも全然疲れてないのは見たらわかると思うけど、キミらでもまだ目で追える程度に抑えてるからね？ これがてっぺんだとは思わないように。解ったかね、ニュービーたち？」

フレンドリーなジナちゃんとして、新人たちに教えを説いてあげる。つまりさつきまでのタクパルとの模擬戦は彼らに見せるためにやっていたのだ。

実はちよつと別件というか、私宛の荷物が宿舎の方に届いちやつたつて連絡を受けてね。そのまま置いておいてもらうのも悪いから、つてことで旅に出る前に直接取りに来たのよ。そんなに重い物でもないし、取つて帰ればそのまま出発するつもりで鎧とか装備を付けたままやつて来たんだけど……。ちよつとタクパルに頼まれちやつてね。

『新人が来たから軽く』戦闘』というものを見せてやりたい、変に自信のある者もいてな。確かに持つスキルは強力なのだろうが……。如何せん実力不足だ。』

つてことで急遽予定を変更して模擬戦をやった、つて感じ。まあタクちゃんのには『ジナちゃん市民になつて気が抜けてない？ ちゃんと鍛錬してる？ 何かあつたときに力がないと困るよ？』つて気持ちもあつたんだろうけどね？ ほぼ毎日顔合わせていた知人だし、時間も取らないだろうから受けたつてわけ。当初の目的通り、新人君たちみんなが青い顔してる。そうそう、気を抜いたら普通に死ぬからねえ？ ”傲慢”さは重要だけど、それをさらけ出したいのならタクちゃんに圧勝するぐらいしなきゃ。

「では、各自訓練に励むように。……出口まで送ろう。」
「悪いね。」

彼の号令に従い素振りなどを始める新人君たちを見ながら、二人で出口まで歩く。元々三人の弟子を持つタクパルだったがけど、私が剣闘士の世界から離れた間いつの間にか先生みたいなことをしているみたい。まあ面倒見いいもんね、キミ。

「それで？　ウチの稼ぎ頭さんのお弟子君たちはどうしてるの？」

「少しずつだが独り立ちの準備を進めている。オーナーから新人たちの面倒を頼まれたこともあってな。良い機会だからと一度好きにやらせようかと思ってる。」

「へ〜。」

少し懐かしさを覚えながら宿舎を眺める。闘技場。剣闘士の世界の中心で諸悪の根源みたいな、あの空間には正直二度と行きたくないが、宿舎はまた別だ。人の入れ替わりは激しかったけど、知り合いに友人に、アルとの思い出がここに残っている。ま、悪くない場所だよね。実際少しずつだけど、生活の質が上がってるらしいし。

「ほんとにはオーナー、剣闘士の案件全部閉じたいらしいんだけどね？」

奴隷商人とか剣闘士の組合とかの付き合いもあつてなかなかやめられないんだと。だから比較的強そうなやつを買って、タクちゃんに育てさせて、次の私たちを作るんだってさ。」

「……そうか。」

「実際、好きでしょ？　誰かに教えるの。」

「ふっ、まあな。」

言い方は悪いが、数字で見れば面白いほどの数が減るのが剣闘士だ。関係を持った奴、仲良くしてた奴が消えて、その翌日に自分も消えるなんてよくある話。だから剣闘士が誰かに入れ込む、つてのはあんまりないんだけど……、こいつは別。アルが来るまで最低限の関係すら拒否していた私とは違い、人として向き合い、乗り越え、生きてきた奴だ。

そこまで年は行ってないけど、子供とか若人が好きで、色々教えちゃうタイプなわけ。

「ま、悪いようにはならないと思うよ。私で大分儲けたらしいし？　それ使って何しようとしてるかは知らんけど、あの人は奴隷の死を損

失として考えて、無くそうとする人だ。冗談は通じないけど、お金には敏感。”損してる”って思ってるのなら大丈夫そうじゃない？”
「確かに、そうだな。」

実際、彼は殺しナシの大会を作ろうと考えていることは伝え聞いている。使い捨ての剣闘士ではなく、何度も使い成長し続ける剣闘士を。

私レベルとまでは行かないけど、人気のある選手を多数集めて、競わせる。そして人気が出たらグッズとかの販売で稼ぐ。まあ簡単に言うとなの人、剣闘士をアイドルにしようとしてるんだよね。明らかに私の成功で味を占めてる。……ま、それをやってくれるのならいいんだけどさ。頂点の座は当分渡さないよ？

「軌道に乗るころにはタクちゃんも引退してるだろうし、そんな時のんびり後進の育成でもしたら？　ほら、剣闘士用の戦術学校とか作ってもらってさ、教官やるの。好きそうだし、向いてそう。……つと、もう着いちやった。」

後ろで纏めていた髪を下ろし、意識を切り替える。宿舎の中にいる人は基本契約で縛られている、それに言いふらすような奴もいない。だけど宿舎から出てしまえば、私はビクトリアとして振舞う必要がある。ほんとは市民になった瞬間に捨てようかと思ってたんだけどね？　まだまだ使えそうだし、気を引き締めていかなきゃなんですよ。

「タクパル、時間を取らせて悪かったね。何かあればいつでも呼んでくれ。」

「……ああ、ではな。ビクトリア。」

「あ、いたいた。」

普通に地上を歩くと人の目に留まってフアンの方々が寄ってきそうだったので、あの時と同じように屋根の上を走っていると、ようやくアルたちの姿が見えてくる。お願いしてた準備、ちゃんとしてくれてたみたいだ。……え？ 街の空飛んで怒られないかって？ うん、もちろん一回怒られたよ。

いや普通に衛兵の人に見つかってね、この前衛兵隊の隊長さんがわざわざウチまで来て『危ないですし、歩行者が空を見上げてケガしてしまうかもしれないので……』って感じに『次やったらしよっ引くからね？』ってことを言われた。まあ普通に帝都全体の防衛的にも迷惑だから仕方ないよね。それに自然に崩壊した屋根とかがあった時、『壊したの踏み込み過ぎたビクトリアじゃね？』って判断されるかもだから、やめておいた方が無難ってことを教えに来てくれたのだ。

……でもまあその時にはもう、ね。アルを人力ジェットコースターにしたことが熱心なフアンの皆様、特権階級である貴族のお嬢様方にバレててね？ というかその場にとある子爵令嬢が来ててね。『私にもやって♡（脅迫）（札束ビンタ）』状態だったもんだから……。

残念ながら衛兵隊長さんは平民上がり、この国のパワーバランス的に貴族に反発できるのは同格かそれ以上の権威を持つ者だけ。震えながら『ごめんちやい、ゆるして』って懇願する隊長さんに、『わたくしの恋路を邪魔するなら容赦しませんわ！』な子爵令嬢に、なんとかその場を収めようとする私。いや、大変だった。

「ま、そんな感じで好き勝手飛べるわけだけど……。急いでるときぐらいしか使わないし、許してくれるとありがたいかなあ……。」

また今度詰所とかに差し入れとか送つとかないとねえ。色々世話になつてるわけだし、治安維持組織と仲良くしてて悪いことはない。ま、そんなことは置いておくとして……。空からアルの真後ろに着地する。衝撃と、金属音が鳴り響く。

「ぴゃッ！」

「おまたせ〜。」

鍛冶師のドロのところであつらえてもらった革製の防具に身を包んだアル、ちゃんと武装出来ててえらい！と褒めてあげたいところだけど……。後ろに何か来たらすぐさま剣を抜いて切りかからないとダメでしょう？ エブリデイゴルゴ13じゃないと生き残れないぞ♡

「か、勘弁してくださいよ……。あとゴルゴって誰ですか。」

『私たちからしても心臓に悪いからやめて欲しいわね。』

『ですす〜。』

「ありや、味方無しか。ごめんね、反応が可愛いからつい。」

お姉さん系の話し方をする”ルペス”に否定され、のんびりな”コピア”もそれに賛同。まあ普通人間って上からの攻撃とかマジで無防備だからね、元々警戒してなきや驚くのは当たり前。アル自体びつくり系は苦手みたいだし、お馬さんも基本大きな音は苦手。……。うん、どう考えても私の方が悪いですね、反省いたします。

「……うん、一度ちゃんと荷物纏めると二人に来てもらってよかったね。」

そう言いながら、二人。二頭の馬を見る。両者ともに鞍、そして簡単な馬用の防具をしているが、コピアの方はそれに追加して簡易なテントや食料品、硬貨などと言った荷物を背負ってもらっている。対してルペスは何もなしだ。

これは単純に、運ぶものの重さの関係。ルペスの方には武装した私に乗って、荷物を持っているコピアの方には軽いアルが乗る。そうすると大体同じくらいの重量になるわけだ。……いや、若干私の方が重いかな？ 鎧とか結構な重さだし。

「あ、そうだ師匠。この大きな槍はもっていかなくていいんですか？」
「うん？ ああ、それね。いらんないいらんない。それに私槍とか使えないし。」

うんしようんしよと運んできてくれた大きな白い槍、アルの皮鎧や馬用の防具を注文した時にドロが『やつぱランスチャージこそロマンやろ！』というわけで気が付いたらなんか出来とった！ 姉ちゃんのおかげで最近調子ええからな、持っていき！』とプレゼントされたソレ。私の体ぐらいある馬上槍で、アルだけでなく馬の彼女たちにも人気な品であったのだが……、如何せん私に槍の知識はない。歩兵用の槍ならまだしも騎乗兵用の槍とか扱い方ワカンナイ……、というところでコイツはお留守番だ。

「よし、じゃあアルが準備頑張ってくれてたみたいだし……、行きますか。忘れ物はないかい？」

「はい！ 戸締りもちちゃんとしておきました！」

「うん、ありがと！ じゃ、ルペスにコピア、頼むよ！」

『了解！』

『はい〜！』



「……………やっぱ弱くない？」

そう言いながら剣を振るうのは、とんでもない速度で動き始める私たちの購入者で、新しい主人。

「ここまで弱いとなるとアルの練習相手にしてもよかったかも。」
「えっ！ や、やめてくださいよ……。さすがにまだ実戦は怖いです。」

「そつかく、ならやめとくか。あ、でも。実際どう？ 正直ゴブリンぐらいならアルでも行けると思うけど。」
「そうですか？」

襲われているのに、明らかに動じていない。人間の幼子である彼女も、私たちの主人も。十数頭の魔物たちが一瞬にして肉塊へと変えられていく。そして、心底恐ろしいことに返り血一つ浴びていない。妹のような彼女も、それがおかしいとは全く思っていない。

「にしても。帝都付近だし、ある程度間引かれてるって聞いてたけど……、思ったより出てくるんだね。」

「ここから森が見えますし、あそこに潜んでいたんでしouxか。」
『普通なら十数人の団体が通るのに、今日は運が良いことに二人しかない。』って思っちゃったのかな？ つと終わり！ アルく、全部燃

やすから火種出して。」

「あ、はい！」

”テイト”と呼ばれるとても大きな町から数時間ほど歩いたところ、私たちの購入者である”ビクトリア”や”アル”、私たちが生まれた厩舎のころからずっと仲の良かった”コピア”と雑談しながら目的地に向かって歩いていった時。私たちは魔物からの襲撃を受けた。

距離は離れていたけれど、私だって魔物くらい見たことがある。基本的に人間よりも強くて、こちらの害になることしかない化け物たち。色々な種類がいて、私たちでも勝てるような小さいのもいれば、どうあがいても勝てそうにない大きいのもいる。厩舎にいたころは”ボウケンシャ”と呼ばれていた人間たちがどうにかしてくれ、襲いに来るとしても私たち馬よりも、もっと弱い動物を狙っていた。だけど……。

運が悪いことに、私たちは魔物に狙われてしまった。その時はまだ知識がなく、その大きさを判別していたのだが、どうやら豚の魔物である”オーク”と、小鬼の魔物である”ゴブリン”の混成部隊が襲い掛かって来ていたようだ。オークが6に、ゴブリンが17。訓練された人間、一般的な冒険者が10人は欲しいぐらいの数。

当時の知識のない私でも明らかに理解できた、すぐに逃げなければいけない。

そう思い自身の新しい主人に進言しようとしたのだが……。

「うん、あれぐらいなら大丈夫。アル。いやなら目を瞑るときなきいな？」

「大丈夫です！」

「あ、そう？ なら……、☒ー！」

何の異常事態も起きていない、そんな声色で私の背を叩きながら、

彼女は私から降りる。剣を抜くのか、という私の予想に反し、地面に落ちていた人の拳より一回り小さい石を拾い上げ……、彼女は投擲する。

その瞬間、魔物の頭がはじけ飛んだ。

『え』

コピアと私の声が重なった瞬間、隣にいたはずの主人が、魔物たちの前に出現する。驚きのあまり瞬きをしてしまうが、一瞬視界が暗闇に包まれ開かれた次の光景は、さつきまでこちらに向かつて走っていた魔物たちの死体だった。

”ビクトリア”や”アル”が何も起きなかったかのように雑談をしていると、いつの間にか魔物たちは全て物言わぬ塊と化しており、赤い血の池が出来上がっていた。その傍にるのは、全く汚れていない純白の鎧で身を包んだ私たちの主人。まるで今から買物でも行くのかという雰囲気、魔物たちの死体に火をつけている。

(コピア、これ私の目がおかしくなったわけじゃないよね?)

(たぶん私もおかしくなってるので獣医さんに診てもらった方がいいです。)

(怒らせないようにしとこ……。)

いや強いとは聞いてたけどここのままでとは思わないじゃん……。

「師匠、魔石とかは取らないんですか?」

「解体したら手、汚れちゃうでしょ? 洗うの面倒だし、今は距離稼いだ方がいいしね。」

31：魔法について

「……うん、こんなもんか。アル、できたよ。」

「はい！ 頂きます！」

帝都から数時間馬で移動した後、大分暗くなってきたので見渡しの良いところで野宿することにした。ま、元々中継地点のラクラには一日で到着できないと思ってたから予定通りだ。そのために色々用意してたからね。

森の入口あたりで集めた薪で焚き木を作り、その風下に魔物避けのお香を焚く。あとは新入りの馬ちゃんたちが運んでくれた食材と調理器具で簡易な晩御飯つてわけだ。危険がないわけではないけど、こういうのキャンプみたいで楽しいよね。

「私、外で食事するの初めてです！ 故郷じゃ村の外にすら出たことありませんでしたから！」

「あ、まあ戦う力とかなけりや外に出るのすら危険だしね。何いるか解らんし……。そう考えると魔物避けの香って便利だね。その分高かったけど。」

「……値段言わないでくださいね、味しなくなるので。」

実際、この魔物避けの香つてのは高額商品だ。人には感じにくいけど、魔物には忌避感を覚えるような匂いがするらしいお香。材料が結構強めの魔物から取られるせいとか、お貴族様御用達なせいとか。もしくは両方の理由でお値段は結構している。大体一夜一回分で500ツケロぐらい。普段使いはできないけど、アルの安全を考えれば安い買い物だ。

私一人なら夜通し動き続けることができるからそもそも野宿の必要性がないし、例の“異形”レベルが複数『コンニチワ！』してこない限りはこの身一つで十分。アルももうちょっと成長、もしくは魔法

を学び始めてその技術を身に着けることができれば要らなくなるだろう。……そこら辺は今後に期待ってやつだね。

「あ、そう言えば師匠。さつき何か読んでたみたいですけど、何の本ですか?」

「これかい?」

そう言いながら横にあった一冊の本を取り出す。ルペスやコピアが運べる重量にも限りがある、だから荷物とかは最低限にする必要がある。だから真っ先にこんな本とかは家に置いてくるべきだったんだけど……、この一冊だけは二人に頼んで運んでもらっている奴だ。本自体にはそこまで価値はないんだけど、この中身がね。

「ルーン文字の本。正確に言うとすれば、『刻印魔法』の本かな。」

この世界の魔法には複数の種類がある。

火魔法とか、治癒魔法とかの属性ではなく、詠唱魔法とか刻印魔法とかのジャンルの話だ。音楽に色んな種類、クラシックとかジャズとか色々ある様に、魔法にも複数の方法があるらしい。剣神祭で使ってた奴がいた魔法。アレが詠唱魔法で、この本に書いてある刻印魔法は宙にルーン文字を刻むことで魔法を発動させることができる。

「刻印魔法……、ですか?」

「このあたりじゃもっぱら魔法のことは『詠唱魔法』のことを指してる、だからかなりマイナーな方法らしいんだけど、結構これが面白くてね。」

帝国って言うよりも人間の文化圏なのかな?　そこら辺はよくわからないんだけど、とにかくアルみたいな一般人からすれば『魔法Ⅱ詠唱魔法』っていう認識らしい。まあ貴族が使っているのも基本そうらしいしねえ。アルに覚えてもらおうと思ってるのも詠唱魔法だし。

詠唱魔法の強みは、口にした言葉。もしくは脳内に浮かべた言葉をキーにし、詠唱者の体に眠る魔力を糧として、この世界に魔法という現象を引き起こすことができること。しかもここで使う言葉、言語はこの世界で一般的に使われている言語と互換性がある。つまりアルとお話するときを使う言語で魔法を唱えることができる、つてわけだ。練習すれば無詠唱つてもできるらしいし、時間はかかるが言葉を重ねれば強い魔法も使える。普及するのも領けるよね。

対して刻印魔法だけど、こっちは主流を外れて本当に限られた人。代々受け継いでた人とか、その道の研究者しか覚えてないような魔法だ。宙に刻印、まあルーン文字を描くことで魔法という現象を巻き起こす。体内の魔力のみならず、空気中の魔力も扱えるって利点はあるんだけど……。

「書いてる途中で他の文字と認識されて暴発、字が汚いと不発。詠唱魔法よりもバフを掛けるのは得意だけど、威力を高めるためには複数のルーンを刻む必要があつてすごい手間。そんなことするぐらいなら詠唱した方が早いのねって感じで……。」
「ええ……。」

でもまあね、ほぼ唯一の利点であるバフつてのは私にとってプラスになる。というか私が詠唱魔法の適性というか、詠唱魔法を扱った場合に被るデメリットが大きすぎるんだよね。

まずこの話をする前に私の言語に関する話をしなさいといけないんだけど……、今私が扱うことのできる言語は、前世扱っていた”日本語”とこの世界独自の言語の二種類。だけど私の頭の中に日本語とこの世界の言語が両方存在していて、適宜使い分けてるつてわけではない。私が思考するときを使う言語も、話すときに使う言語も、書くときに使う言語も全部日本語の感覚でやってる。

だが、私が何らかの形で外に発信しようとしたとき、自動的にその言語がこの世界の物に変換されているのだ。自身では日本語を話しているはずなのに、口の動きは全くそうではない。どこか英語の発声

に似た口の動きをしている。

ま、簡単に言えば私が発音する際には便利な翻訳機くんが頑張っている感じに変換してくれているのでしよう。意識すれば日本語の発音も、筆記もできるからこれまでそれを便利に思うことはあっても、不便に思うことはなかった。

(だけどこれ、魔法の詠唱となると変わってくるんだよね。)

私がもし詠唱魔法を唱えたいな、となった時は翻訳機くんにもたお仕事を頼まないといけないんだけど、この時に『火の魔法を唱えたいのでいい感じにお願いします。』と渡しても、そのまま鵜呑みにして『火の魔法を唱えたいのでいい感じにお願いします。』と出てきてしまう。つまり日本語での魔法を唱えるのに必要な言葉を知るか、もしくは発音の方法すらよく解らないこの世界の言語で詠唱する必要があるってこと。

早い話が『魔法を使いたいのなら対象となる言語覚えて来い!』ってわけだ。時間を掛ければ簡単な単語くらいはいけるかもだが、翻訳機くんに頼って生きてきた私にはちよっと難しいのよね。それに……

「ほらアル、私すごく速く動くでしょ?」

「あ、はい。そうですね。」

「実は昔、今よりも大分遅いときに舌噛んでね……。千切れそうになったことがあったのよ。運よく跡が残らないかんじで治ったけど、今の速度で詠唱して、舌でもかんじやったりしたら……。」

想像して、身震いするアル。そうなのだ。『加速』っていうスキルは速くなるだけで、体に何らかの耐性を付与してくれるわけではない。生身のままってわけ。例えばだけど普段の五倍のスピードで動いている時に詠唱して、もし舌をかんじやったりしたら……。簡単に千切れる、というか破裂する。口内が真っ赤に染まって出血多量、完璧な自

滅を決めてしまおうってわけだ。

「そう言うことを考えると、明らかに刻印魔法の方がいいのよね。指に魔力込めて書くだけで効果発揮するらしいし。」

「そうなんですかねえ……。ん？ 確か師匠って魔法の適性なかった気がするんですけど……。」

「あ、なんか増えたよ。」

「増えたア!?!」

「ほら。」

そう言いながら宙にルーン、？（カノ）の文字を描く。炎のルーンで、語源は松明。流し込む魔力は最小で、イメージは優しい小さな光。刻まれたソレは世界に反映され、ルーン自体がイメージ通りの小さな炎となる。

「……………」

びっくりしすぎてポカーンってなってるアル、あららお口が空いちやって。指入れたくなるから閉じなさいな。

「い、いつの間にできるようになったんですか……!」

「今。」

「今ア!?!」

いやマジで今さつき初めてやったんですよ。ほ、ほら？ 出発する前にタクパルんとこに荷物取りに行ったでしょ？ あれこの本取りに行ってたのよ。刻印魔法自体の人数がないせいで、本自体の数が少なくてなかなか手に入らなかったのよ。だからさつき読んだのが初めてで、ルーンを描いたのも初めて。

いや自分でもびっくりしてるんですよよね。なんか普通にできちやったし……。アルが私よりもびっくりして、お口を大きく開けて

いたおかげで傍から見ればミステリアスな美女みたいに見えるだろうけど、内心心臓バクバクよ？」

「わ、私の！ 私のアイデンティティが！ 唯一師匠の穴を埋められるって思ってたところが……！ なくなった！ あくく!!! なんてそう師匠はすぐに完璧超人みたいになっちゃうんですか！ 私がいる意味なくなっちゃうじゃないですか！」

「そんなこと思ってたの？」

「そうですよ！ ちょっと色々頭おかしいところはありますけど、できることばかりですし……。だからこそ師匠のできない魔法の勉強とかを頑張って役に立とうと思ってたのに……。」

「普通にできないことばかりなんだけどなあ？ ……………ん？ 今私のこと頭おかしいって言った？」

実際、自分ができること、得意なことを押し付けてそのまま逃げ切るってことが得意なだけで、できないことの方が多い。ほらほら、だからそう拗ねるのやめようね？ 休んでたルペスやコピアを起こしちゃうからね？ ほっぺ膨らましながら文句たれないの。ブーイングもしない。

「でもま、このルーンってのもそこまで万能じゃないからね？」

この世界……、というかこの本に書かれているルーンは25。どれが使えて、どれが使えないのかはわからないが、とにかくその種類しかない。詠唱魔法なら一つの単語で一つの現象を巻き起こすことができるが、こっちは25しかない。つまり一文字一文字に込められた要素や意味が多すぎるのだ。さつき使った？（カノ）でも、火をおこすこともできるが精神を高揚させる効果も持っている。それに闇を払う火って言う意味も持ってるみたいだから……。ま。とにかくやっこしいのだ。

「文字一つ一つに明確なイメージをもって書かないと失敗するし、間違えて変なイメージを乗せちゃうと暴発する。」

『加速』持ちの私からすれば思考時間も稼げるので、そこまで問題はな
いんだけど……。直接的、瞬発的な攻撃には詠唱魔法の方が優れて
て、発展性にも軍配が上がるのは確か。それに拗ねてるアルもかわい
いけど、笑ってる方が好きだからね。

「……と、ということとは？」

「お考えの通り、魔法はアルさんに任せましたよ？」

「ツ、はい！」

「ウム、良いお返事。じゃ、明日も早いしさっさと寝てしまいなさい
な。」

「はーい！」



『何をしてるのですか？』

「……コピアか。ちよつと練習。」

お話から少し後、片手で焚火の枝を追加していたところ後ろから声
を掛けられる。

「ルーンの練習、形を固めるのがちよつと難しくてね。」

私の目の前に浮かんでいるのは、？（アルジズ）。友のルーンと呼ばれるものだ。宙に浮き、少しだけ輝いていたそれは……。急に輝きを失い、空に溶けていく。

『難しそうな魔法さんですね〜。』

「師匠とかいればいいんだろうけどね、今はこの本が先生さ。」

友のルーン、友情を表すルーンではあるが、同時に防衛の意味を持つルーンでもある。大鹿の様なその角は降りかかる災害から友を守るモノ。自身の中でイメージがまだ固まっていないせい、それとも込める魔力が少ないせい、何度構築しても崩れていってしまう。まあ魔法どころかこの身に宿る魔力の扱いすら初心者だ。

魔法に適性のなかった私が、特に何の苦労もなくルーンを刻めてしまっているということは、確実にあの神のおかげだろう。だがまあ全部思い通りになるような力ではないみたいだ。『適性をあげる』ということだったし、これ以降は自分なりに試行錯誤しながら伸ばすしかないのだろう。

『私は馬ですし、よくわかりませんが〜。応援しますね〜？』

「……ありがとう。それで、どうしたの？」

『良ければ見張りを交代しようかと〜。』

ああ、交代か。今日は寝ずに夜空でも眺めながら時間が過ぎるのを待とうと思ってたんだけど、わざわざ声を掛けてくれたってことか。

「悪いね、でも今日は大丈夫。これでも5日ぐらいなら寝ずに活動できるから。明日も頑張ってもらってから寝ておいて。」

『本当に人間ですかあ？』

失礼な、人よりもクソ速いけどちゃんと人間です。中身はまあ

……、見た目通りじゃないTSデスケド。裏の闘技場で殺し合いしてた時は試合中じゃなくても命の危機が普通にあつたからね。基本的に奴隷は大広間に纏めて放り込まれてたんだけど、そのおかげで普通に殺し合いとか盛り合ってる奴とかいたからねえ……。自分の身を生命的な意味でも、性的な意味でも守るのに必死だったから。

「……にしても、今日の魔物の襲撃。かなり多かつたよね。」

『ごめんなさい、今日が初めての外だったので。比較できないです。……でもまあ、それでも多かつたな、とは思いました。』
「そっか。」

魔物、特に今回襲い掛かってきた奴の大半がオークだったり、ゴブリンだったりという比較的知能のある魔物だったが、基本的にこの世界の魔物は野生動物と同じように思われている。彼らの動きなどを観察し考察した本を先日見たのだが、森や彼らのテリトリーにより強大な魔物がやって来たり、人が開拓を始めたりするとそれから逃げるように生活圏内を移すらしい。

それに伴って日雇いの戦力、冒険者などの需要が高まるらしいのだが……。

「とにかく、明日にはラクララに着くだろうし。冒険者ギルドにでもよって何か情報が出てないか見るとしようか。」

帝都―ラクララ間でのみ起きていることならまだいいけど、その先。特にアルの故郷への道のりで何か問題が起きているのだとすれば、最悪人を雇うってことも考えなきゃならないだろう。物資の補給をした後はすぐに出発しようかと考えていたが、一旦止まって情報を集めるのもいいかもしれない。

「さ、コピアも寝た寝た。なんかあつたら起こすし、今は休んどきなさいな。」

『はい、じゃあおやすみなさい。』

32：ララクラですって奥様

「ぬぐ、ぬぐぐぐぐぐ！」

「どーお？ 調子は。」

大自然の中で一泊した後、私たちは馬の背に乗りながらララクラという都市を目指している。昨日の夜はお香のおかげで魔物はやってこなかったし、都市に近づくにつれ魔物の襲撃自体も減ってきた。『やっぱり都市に近づくと思討されてるのか絶対数が減るのかね？』とそんなことを思いながらアルの方を眺める。

「さつきからずくと唸ってるけど進展はあった？」

朝起きた時も、朝食を摂っている時も、私が魔物たちを処理している時も、アルは正に百面相といった感じでコロコロ表情を変えながらうんうん唸っている。何をしているのかと尋ねてみれば、魔法の練習だという。私と同じように虚空にルーン文字を描いても魔法が発動することはなかった、故に体内にある魔力をどうにかして指先に集中させることで、魔法を使用してやろうと考えているみたいだが……。

「グリリリリリ！」

「無理そうだね……。」

本から得た知識と、自身の感覚的なもの。胸の中央あたりに感じる温かいものを全身に循環させるような形でルーンを描けば成功する、ということとは伝えているのだが……。どうやらまだ難しいようだ。私には”前世の人類”というくくりにはなってしまうが、心臓の形や循環器の簡単な仕組みつてのは義務教育のおかげで頭に入っている。あの神からもらった適性とやらの効能もあるかもしれないが、そこら

辺のイメージはこの世界の人間に比べると掴みやすい。

けど、それを理解できるように誰かに伝えるつてのは話が別。彼女にそれを伝えてもあまり要領を得ていないようだったし、そもそも体内に存在する魔力の様なもの自体を把握することは出来ても、それを動かすことが如何にもできないらしい。

さつきからずつと何とかして循環させる、動かそうと頑張っているみたいだが……。

「ふぬぬぬぬぬ!!」

うん、お察しの通りだ。私個人としては彼女の色んな表情を見れて万々歳なのだが……、そろそろ準備した方がよさそうだね。

「アル、見えてきたよ。」

「え? ……あ! ララクラです! ララクラ!」

薄い赤茶色のレンガによって積み上げられた城壁、多角形の内部に存在する都市が、見えてきた。

「ぎ、アル。外套とヘンリ様からもらった書類を出しておいて。あんまりファンサに時間を取りたくないからね。」

「はい、すぐに!」

コピアの背に纏められている荷物から私の言ったものを取り出そうとする彼女。帝都じゃ大体の人間に顔を知られている私だ。いくら違う都市と言えどもここは帝都から結構近いし、そもそも剣神祭は帝国中からいろんな人間が集まっていたお祭りだ。そこで私のことを知った奴がいてもおかしくない。

今は一応お忍びで来てるからね、ファンとの交流は大事だけど、変に時間を掛けたくないってわけだ。



外套のフードを深く被りながら、順番待ちの列に並ぶ。後ろにいる人や少し前にいる馬車の人が悪態をつきまくっているが、私は正直何とも思わない。まあさすがに順番抜かしをされれば警告とともに剣ぐらいは抜くが、待ちながら並ぶのは慣れたもんだ。日本人です。

変なことを考えながら、顔が露出しないように気を付けながら城壁を眺める。

帝都を守る様に作られた城壁は常に整備されていて、真円に近い塔とそれを直線でつなぐ城壁で形成されていたが、この都市を守る防壁はそうでもないようだ。塔の高さは疎らだし、円を作ろうとしたことは解るのだがどっちかという多角形と言った方が正しいだろう。城壁も上の方は少し塗装が剥けているし、かなり凸凹している。帝都が魔法で作られた時代に合わぬ壁とするならば、ここは時代相応と言うべきだろうか。

このあたりは魔物の総数が少なく、また弱いのもかもしれないが私の本気で蹴れば倒壊しそうな城壁だ。帝都の奴は一目で『堅そう』とわかるが、ラクラクのモノは見えてすぐく不安になってくる。

(まあ一言でいうとそんなにお金なさそうって感じ?)

まあその国の頂点である首都と、その付近にある比較的大き目の街を比べるのが可哀そうということにしておこう。正直異国感というか、異世界感帝都で十分味わったし、前世の生活を恋しくなることはあるが、この生活に慣れてしまった今、私の基準は全て帝都になっている。その帝都よりもレベルの下がった街を観るにしても……、何かこの都市独自の資源や名所があれば話は別だろうが、期待しない方がよさそうだ。

「あ、動きました！ もうすぐですね！」
「そうだね。」

そも、この世界は魔法や神の存在があるとはいえ、魔物という明らかに人類よりも強い化け物がうじゃうじゃいる。もちろん私のように、そのうじゃうじゃいるのを粉みじんにできる人間も存在するが、まあ数が少ないのだろう。つまり普通の民は魔物から身を守る為に街をつくり、壁を築き、生きていかなければならない。帝都のように人や戦力が集まっている都市ならまだ余力があり、その分を娯楽に費やすこともできるだろうが私が蹴れば穴が開きそうな防壁しか持たぬ都市には難しそうだ

ま、そもそも今回の利用目的は物資供給のための中継だ。観光に時間を使うつもりはないし、余計なことは考えないようにしよう。なにかよさそうな名所があれば、帰りに少し寄るぐらいで。

「つと、次か。」

城壁の話から観光資源についての話と、よくわからない風に脱線してしまったがその意味のない妄想のおかげでいい感じに時間を潰せたようだ。町の中に入っていく馬車を見送りながら、この都市の衛兵たちとようやくご対面だ。帝都の衛兵たちがしている装備よりも何段か質の低いものに、まったく整備されていない槍を持った男が声をかけてくる。

「身分証を出しな。あとウチは怪しいモンは全部牢にぶち込んでいいことになってるからよ。痛い目見たくなかったら、さっさと顔を見せたらどうだア？」

おお、柄悪いねえ。30代ぐらいで無精ひげ、軽装鎧の下の服からは清潔感を感じられない、姿勢も悪いし態度も悪い。口から唾も飛び

出してるし、お近づきには成りたくないお方だ。

上司に言われてるから嫌々丁寧におしゃべりしている感じが語尾から痛いほどに伝わってくる。まあ大変な仕事だろうし、面白みのないお仕事なのだろう。その上危険もあるとなれば、悪態つきたくなっちゃうのかね？

「了解した、だが先にこれを。」

彼からギリギリ見えるレベルで、外套の下にある鎧を見せつけながら書類を手渡す。私を知る限りこの世界で最上の紙を丸め、糸で縛ったもの。それを開いてみればあら不思議、この国で頂点に近い元老院議員様からの『この人怪しくないから通してあげてね♡ あとこの人にイジワルしたら我が家への侮辱とみなす。……から気を付けてね♡』という文字。

「……え、えッ。」

「問題なければ、返してくれるかな？」

貴族であつても結構な出費になるミスリルの全身鎧に、貴族の頂点ともいえる元老院からの『お願い』。明らかに顔が強張る門番くん。たった二つの要因ではあるが、片方の書類はヘンリエッタ様の家紋が刻まれている。魔法的なものでその権威を保証しているらしいし、偽造は一族郎党磔刑だそうだ。まあつまり私の身分を”貴族、もしくはそれに類するもの”と勘違いさせてしまう最大の理由であり、ミスリルの鎧がそれを後押しする。

「お、おッ。」

明らかに顔から生気が抜けていく彼、まあこの世界の貴族つてのはマジで”尊き者”だから、一般市民からすれば天災以外の何物でもない。彼らの気を損ねれば確実に消される、運が悪ければ親類縁者全滅

だ。ヘンリエッタ様ならデコピン程度で許しそうなものだが……、彼が『やらかしてしまった』と勘違いしてしまうのはしかたないのかもしれない。

あまり清潔ではないので少し忌避感はあるが……、声が纏う雰囲気を高貴なモノへと変えて。彼の耳元にこう、囁いてやる。

「実は、とても、急いでるんだ。キミは普段通り、何もなかったかのように私たちを通すだけでいい。キミやキミの親族に”悪い”ことは起きないし、私も時間を取られず幸せだ。ああ、何も言わなくていい。怖い思いをさせてしまったね……。」

言葉を紡ぎながら、銀貨。100ツケ口に当たるものを二枚握らせる。通行料の相場より大分高いが……、あまりは好きに使うといい。怖がらせてしまったことへの謝罪も兼ねている。

「ど、どうぞ。お通りください。」

「ありがとうございます。」

唾を飲み込みながらなんとかその言葉を紡ぐ彼。顔色はだいぶ良くなつたが、冷汗はすごいし震えは止まりそうもない。うくん、変に時間取られた上に身バレするよりはいいけど、悪いことしちゃったかな？ まあいいや。

ひらひらと軽く手を振りながら中へと入っていく、城壁を越えるとそこは……、うん。普通の街って感じ。帝都に比べて内陸部に存在するせいか木造の建築物が増えているし、町の中央部に重要機関が集まっているのも想像通り。道が全くまっすぐじゃなかったり、地震が起きれば即崩壊しそうな建物たちがすぐにお迎えしてくれる。

「愛弟子、どうだい？ 懐かしい？」

アルは一度、奴隷としてこの町を訪れている。故郷の村で買われた

後、このララクラという都市で教育を受け帝都にやって来た。故に奴隷という身分であってもこの町を見る機会があっただろうと思ひ、聞いてみる。

「うくん、そこまでですかね。基本商館の方にいたので、町中を見て回ったことはあんまり。」

「そっか……。さて、じゃあここからは別行動だ。」

乗っていたルペスから飛び降り、アルの乗るコピアの方に近づくと、彼女の両脇を抱えた後は、宙ぶらりんのアルをルペスの背に移動させる。

「ちよつと今から冒険者組合の方に情報集めに行ってくるから、アルは物資の補給をお願い。財布はコピアの背にあるから、そっから使う様に。好きな物買っていいけど、あんまり使い過ぎないようにね?」「わかりました! 食料とかを買っておきますね。……あと家族へのお土産とか探してもいいですか?」

「もちろん。ルペスとコピアは悪いけどアルに付いてってもらえる? 護衛と荷物持ち。もし変な奴がいたら好きにしてくれていいから。」

『任せて、不審者は蹴り飛ばすわ。』

『了解です。』

外套の中で口角を上げながら、全員の頭を撫でる。アル一人だけ不安でいっぱいだったんだけど、彼女たち二人がいれば私がその場に到着するまでの時間稼ぎをしてくれるだろう。アルも私を心配させないためか、持たせた防犯の魔道具を取り出して見せてくれる。

「じゃ、お願いね。」



アルと別れた後、一人で冒険者組合のある場所を探す。話によると、こういった地方都市では町の重要機関を中央に置くことで何かあったときの対策としているそうだ。だから町の中央に向かって歩いていけばいずれ見つかるはずなただけど……。

(お、あったあった。)

二本の剣をクロスさせた看板を発見し、そちらの方へと足を進める。向かいには騎士団の詰所に、教会も見える。帝都じゃ結構分散させてたけどここはほんとに全部集めてる感じだね。にしても冒険者組合か……、闘技場で戦った奴は大体三倍速にも付いて来られないような奴ばかりだったし、帝都を歩いててたまに見かける冒険者で『結構やりそう』と感じたのは片手で数えられる程度。

(まあ帝都じゃ力ある奴は基本軍とか貴族の私兵になるからなあ……。)

ここはどんな感じだろうかと思いつながら、組合の中に足を踏み入れる。別に強い奴と戦いたいっていう戦闘狂なわけではないが、単純にこの町が抱える戦力つてのは気になるところだ。視界に入れた人間の力量とか無意識の間に判別とかしちゃうし……、職業病つて奴かも。もう剣闘士じゃないのにおかしいよね。

(というわけでお手並み拝見……、んん?)

馴染みの居酒屋に入る様に、気楽に入室してみたのだが自身に視線が集まる。外套は被ってるし、顔は見えていない。鎧は隠しているけど全部覆いかぶせてるわけではない。となると……、単純に顔を隠し

たよくわからん奴が急に突っ込んで来たから警戒してる感じ？

とりあえず内装は、大きめの丸テーブルと長めのテーブルがいくつああって、そこに冒険者らしき武装した奴が20人弱座ってる感じ。その奥にはカウンター席みたいなのが並んで、その奥には厨房。うん、酒場兼用タイプの組合みたいだね。んで肝心の冒険者組合の受付は……。

「おうおうおう！ えらくお高い鎧なんか着ちまってよう！ ここはお貴族様の遊び場じゃねえぜ！」

(わあ、テンプレ。)

急に大声を上げながら、若干酒の匂いがする武装した男が木製のジョッキ片手に距離を詰めてくる。ある程度鍛えてはいるみたいだが、特筆して強そうな雰囲気は纏っていない。口調や態度は少々”無理やり”なほどに荒っぽいが、装備の手入れは素人が見ても丁寧になされていることが解る。しかも結構身ぎれいにしてるね、キミ。

「お前さんどこの出だア？ ここは俺らみたいな荒くれ者の溜まり場だぜえ!? 間違えたんならさっさと回れ右して帰んな！」

「いや、間違っではないよ。」

ちよつと低め、男性にしたら高めの声でそう答える。

彼以外にも冒険者やそこで働くような人間はこちらのことを認識しているが、声をかけてくる様子はない。絡まれている人間を可哀そうに見る視線ではなく、これから起こることを楽しそうに待つにやけた顔ばかりだ。いいねえ、私こういうの好きだよ。乗れるところまで乗ってあげよう、というわけで名も知らぬ冒険者さん？ ダンスのお相手を願うよ。

「……あん？ その体形、お前さんもしかして……、女か？」

「ああ、そうだと。なんだい？ 女性が入ってはいけなかったのか

い？」

「別にそういうわけじゃねえが……、その面！ 拝ませてもらおうかいッー！」

そう言いながら私の外套を奪おうと踏み込む彼だが……、遅いね。『加速』せずに十分対処できる。

本気で”踊る”気はなかったけど、面白いし、やってやろう。伸ばして来た手をそのまま受け止め、手を合わせた状態で高く掲げる。踏み出した足は、軽くひっかけてこちらに姿勢をずらす。奴隷解放後に社交界用に覚えたこっちの世界のダンスがあるが……、アレはどっちかというと静かな踊りだ。あんまりウケはよくないだろう。もっと激しく動くのがいい。ってなるとこっちで学んだのと前世で見たことあるのを混ぜ混ぜしてアドリブ全開だ。

というわけでお手を拝借。あ、私男性役しか練習してないから振り回すよ。

「はっ。」

うろ覚えのメロディを口ずさみながら、彼を女性役とし、踊り狂う。加速を使わずとも、私の方が力も強いし全身鎧のおかげで私の方が重い。故にいくら彼がもがこうとも、抜け出せるはずがない。

「ちよ、おま、はな、はなせ、離せってー！」

「♪〜」

1, 2, 3。1, 2, 3, ほらほら足がもつれてるよ！ というか身長も私の方が高いね！ なんで私に喧嘩売ったんだろ？ 彼からは演技の香りがしたし、見慣れない奴にはそうする決まりがあるのか

な？ ほら不審者対策とか、初心者の選別とかそういうの。

そんなことを考えながら私を中心に無理やり回転を始める。片手を高く掲げながら、強く握りしめたもう片方の手をそのままに彼の腰に回す。今歌ってるメロディの覚えてる範囲が終わりそうだから無理やりめるよ、ほら回転！

「おわああああアアアア!!」

遠心力で、彼の腰が思いつきり反る。一応折れないように支えてあげているが、さつきまで酒を飲んでいたせいか顔色が非常に悪くなってきた。うくん、この状態で戻されるの嫌だし、放り投げちゃえ。残り数拍というところで、彼を勢いのままに天井へと放り投げる。軽いステップを踏みながらその場から退避し、天井に激突した瞬間に首元で柏手。

「グゲツ！」

彼が背後でよくわからない断末魔（死んでないはず）を上げた瞬間に、回転しながら優雅にお辞儀。

「お目汚し、失礼しました。」



「というわけでルペスにコピー！ 今からお買い物に行きます！」

『はいです。』

『何が』ということだ”なのかわからないけど、了解。』

ルペスの背に乗ったまま、町の外周を回りながら市場を目指します。ルペスが私を運ぶ役で、コピアが荷物持ちです。この前のお使いは失敗しちゃいましたが……、今回は頼れる妹分が二人もいます。これは成功間違いなしでしょう！ たぶん！

『それで？ まず何から買いに行くのかしら。』

「食料品から行くこうと思います。保存食は朝見た時まだ残ってたんですけど、村までの距離を考えると頼りないのでそっちの補充もします。」

ルペスにそう答えながら、頭の中で買うものを思い浮かべていく。確かラクラから出て少し行ったところには川の上流があつたと思うので水の補給は問題なし。となると今日明日ぐらいまでなら持つ生鮮食品あたりと、塩漬けとか砂糖漬けとか干物系を買っておく必要がありそう。あ、あとパンもいるかな。

「8、いや余裕をもつて10日分くらいいるかな？」

『……ねえアル。確か目的地って往復で4日程度よね？ そんなに必要なのかしら。』

「あ、はい。師匠滅茶苦茶食べるので。」

宿舎にいたところからそうだったが、師匠は滅茶苦茶食べる。もう、かなり引くレベルで。いや私も師匠に詰め込まれたせいで同年代と比べるとかなり食べる方だが、師匠は別格だ。大の大人が満腹を感じるレベルの食事5人前を軽く平らげた後でも、けろっとしている。まあ胃の内容物を圧縮できる人間かどうか怪しい人だ、食べる量がおかしくても仕方ないだろう。

まあ未来の私も同じ様になるんだがなッ！

「……なんか今変な声が聞こえたような？」

『ん〜？ どうしたんですか〜？』

『いつものじゃないの？ それよりもアル、そろそろよ。』

「あ、はい。」

二人が移動してくれたおかげで、いつの間にか市場がある通りまで来ていた。さ、お買い物と行きましょう。ルペスの背から飛び降り、持ち物や腰の剣を確認してから皆で歩き始める。声や値札を見る限り、相場は帝都より少し高いくらいだろうか。ちよつと出費が多くなるかも。

「あ、果物の砂糖漬けだ。おじさん、これいくらですか？」

「一つ20ツケロさ、瓶を返してくれたら半額返すぜ？」

「なるほど……、じゃあその三つください。」

しっかりと握った財布から銀貨を一枚取り出し、少し驚いたおじさんから40枚の銅貨と瓶を三つ受け取る。うひひ、砂糖だ。村にいたころはお祭りの時ぐらいしか食べたことなかったけど、今なら買っても全然怒られない。師匠も私も好きだし、長期保存に向いてるから目的にも合ってる。……もし他によさそうなのがなかったら家族用のお土産としてもつかい買いに来ようかな？

「まいど！ お使い頑張ってたな！」

「はいー！」

そんな感じで市場を巡る、さつきみたい露店形式のお店もあれば、家の中にお店があるところも。野菜やパン、後塩漬け肉を買いながらどんどんコピアの背に詰め込んでいく。ちよつとだけ私用のおやつに小さなパンと、ルペスとコピア用にニンジンを買ってしまったが、師匠は多分許してくれるはずだ。

「よし！ とりあえずはこれで大丈夫なはずです！ あとはお土産で

すね！」

『ゴピア、それ大丈夫なの？』

『……ちよつとこれ以上は過積載ですね。潰れます。』

お土産、どうしようか。最初に見た砂糖漬けは絶対喜んでくれるし、外れようがない。けどなんか、こう。もうちよつと意外性を入れたい気もしている。それに砂糖漬けは食べたらなくなってしまう、やっぱり形に残る物がいいよね……。

師匠は色々考えてくれているみたいだけど、私は故郷に残るつもりはない。両親に何を言われようが、私の居場所はもうあそこではない。もちろん家族のみんなには会いたい。パパの顔は見たいし、ママの声は聞きたい。お姉ちゃんには帝都のことを教えてあげたいし、妹や弟たちはどれだけ大きくなったのかを抱っこして確かめたい。……けど、それは一度会えば十分だ。

元々一生帰れない覚悟で村を出たんだ、今更帰りたいなんて虫が良すぎる。師匠にはまだ色々返せてないし、多分だけど私が一番成長できるのはあの人の隣だ。

(剣だって、魔法だって、あの村じゃ学べない。)

となると何がいいだろうか、こういう時に師匠がいれば何かアイデアをくれそうだけど、ここにはいない。あんまり師匠に頼りつきりなのは悪いし、脳内のイメージナリー師匠は『こういうのは自分で考えて選んだ方がいい気がするなあ、タコスツ！』って言うてる。……たこすってなに？

「というわけでちよつと工芸品とかを扱っている場所まで移動しますね。」

『りよ、了解です。ルペス、色々頼みます。』

『はいはい、任されたわ。』

二人を引き連れながら食料品を扱っている店舗が集まる地点から、鍛冶屋などが集まる場所へと移動をする。ほんとは自分で稼いだお金で買うべきなんだろうけど、今の私が個人でお金を稼ぐことは不可能だ。もう少し体が大きくなった後、自分で色々できるようになった後に返すことにしよう。

「ちよつともやもやしますけど……、次いつ会えるかなんてわかりませんから……。」

『(あの人なら望めばすぐに連れて行ってくれそうなものだけだ……。)それで、どんなのがいいのかしら。コピアはアレだし、相談ぐらいなら乗れるわよ。まあセンスには期待しないで欲しいけど。』

『重いです〜。』

「お願いします。」

333：風と、情報と。

「え、えつと……。つまり、冒険者組合に加入してきたわけでも……。」「どこかの反社会組織に加入してて、カチコミにきたわけでもないですよ？ まあ加入してる奴もそう言うでしょうが。」

「ももも！ 申し訳ありません〜！」

若干涙目になりながらペコペコ、カウンターに頭をめり込ませる勢いで謝る彼女を宥めながら、どうしようかと悩む。あ、どうも。みんなのアイドルビクトリアちゃんこと、ジナちゃんです。よつろしく〜！ ……とまあ現実逃避してる場合じゃなかったね。私あんまり他人にへこへこされるの苦手だからさ。

冒険者組合に遊びに来たのは良かったのだけど、顔を隠していたせいかよくわからん野郎に絡まれた私。絡んできた彼が悪意などの嫌な雰囲気纏ってなかったのをいいことに、お芝居の一環として思いつき遊んでしまった私。個人的にはちよつと改善点の多い寸劇だったけど、まあ楽しめたのは確かな私。詫びも込めて地面に突っ伏して頭上にお星さまを浮かべている彼の席に銀貨を投げた私。そして本題の『アルの故郷までの道筋、その安全確認』をするために、冒険者組合の受付嬢さんと会話してたら色々誤解が発覚したのを知る私。

「あああ、あの。今日、実はですね、領主さまのお嬢様がこちらの方に加入登録をなさるってことで、それ用に色々対策してたんです。領主さまがですね？ あんまりご息女を危険な目に遭わせたくないからってことでしてね？ 我々の方で加入させないために色々してたんです。身元がしっかりしてる方を集めて、執事さんと台本を作って、演技の練習もして、いい感じに追い払う準備してたんです。そ、それでもうそろそろいらっしやる時に……」

「私が来ちゃったと。」

「ももも！ 申し訳ありません〜！」

因みにだが、このララクラ一帯を治める貴族の階級は子爵。どの家のどんな派閥に所属しているのか、つてのはさすがに覚えてないけど帝都では会ったことのないお貴族様だったはずだ。そんなお貴族様のご息女と間違えられちゃった、て感じみたい。名前は知ってたけど、顔や背丈がどんなのかは知らなかったが故に起きた悲劇ってやつなのかね？

「気にしてないし、彼にも楽しませてもらったから、さ？ そんなに謝らないでも……。」

「でででで、でもお〜！」

彼女が明らかに狼狽している理由として、まあ私が持つ身分証明書にある。二つあるんだけど、一つ目はまず帝都で発行した普通の市民証。これはまあお金さえあればだれでも発行できるから置いといてもいいんだけど、問題はもう一つの方だ。ヘンリエッタ様が用意してくれた証明書だね。

これまでややこしいから放置してたんだけど、機会もいいので帝国の貴族制度つてのを軽くおさらいしておこう。

まず、この国の貴族階級には大きく分けて五つ存在している。公爵〜男爵ってやつね？ 他にも騎士爵とか一代限りの準男爵とかあるんだけどそこから辺は割愛。ララクラを持つお貴族様は下から二番目ってわけだ。

んで、問題になってるヘンリエッタ様なんだけど。彼女が結構ややこしいのよ。彼女の夫である元老院議員なんだけど、帝国の頂点である皇帝の助言機関で、No. 2の人たち。基本的に公爵とか侯爵ばかりなんだけど、皇帝が認めた人しか参加できない激やば組織。元老

院議員である公爵と、ただの公爵を比べた場合天と地の差がある。『パ、パワーが違い過ぎるウ!』んだって。

んで、私の最大のパトロンことヘンリエッタ様なんだけど……、彼女は”まず”元老院議員である夫を完全に尻の下に敷いている。つまり実質元老院議員だ。んで、さらに皇帝陛下ととつても仲良し……、というか陛下の子供のころから近所のお姉ちゃんポジだったらしい。うん、この時点で頭が上がらないよね。んでさらになんだけど、彼女は個人でも複数爵位を保有している。

そもそも帝国の爵位つてのは、土地と強い結びつきがある。皇帝がまず土地を保有し、それを各貴族に配付していく。その過程において同じ人物が複数の土地を授けられることは多々ある。つまり公爵領と、男爵領を持つ公爵様が存在するってわけ。もちろんヘンリエッタ様も公爵領のみならず、そのほかにも小さいのをいくつか保有しているらしい。子供や孫、部下ができた時に分け与えることができるように。

ま、長々と語ってしまったが……、とても簡単に言おうと。

滅茶苦茶やべえヘンリエッタ様の機嫌を損ねれば、ララクラの子爵でも庇えないどころか、全部もろとも吹き飛ばされるじゃんかあ! ってコトである。『あら、私の推しに迷惑かけちゃったの? 許されるわけないわね、お取り潰し&ALL打ち首♪』ってコトである。絶対しないことは解ってるんだけど、不可能か可能か、って言われると可能どころがね……。なんか自分で言つてて怖くなってきたんだけど。

(なんか虎の威を借りる狐みたいでやなんだけど、かといってヘンリ様の後ろ盾には助かりまくってるからなあ……。)

「……というかさ、その台本の役者さんを潰しちやっただけだ……、大丈夫なの?」

「そそそ! そうでしたあ! ジツメさんは伸びちやってるし……、

どどど、どうしたら!」

「あく。」

ここで梯子外しちゃうのはさすがに気が引けるし、私がやり過ぎちゃったのが原因だからなあ……。しゃーない。いつちよやりますか。

「台本とか指示書とかはあるの?」

「え……。う?」

「これでも演者として食べてる身でね、ちよつとした約束を守ってくれるのなら……。代わるよ?」



あの時、確かに私は……。そう! 光を見たのです。

わたくしが”お姉さま”とお会いしたのはそう、あの冒険者組合でした。

わたくしたち、ララクラを治める子爵家はララクラ領しか持たぬ弱き家です。鉱山のように他領へと輸出でき強みになる資源もなければ、大きな劇場のような他領から人を呼び込める産業もない。特色としてはどこにでもあるような麦と砂糖、そして帝都に比較的近いということだけ。

この帝国建国期は皇帝陛下を守る臣下の一員として、陛下の住まう帝都を守る為の防壁の一つとして機能していたわが家でしたが……。帝国の国土が大きくなるにつれ、その役目は薄れ。単なる弱小貴族家

の一つとして名を連ねております。

ですが、その誇りを忘れたわけではありません。付近の男爵家と強いつながりを維持しながら、いざとなれば陛下のためにその身を投げ出せるように、日々武を高め続けるのみ。それが我らの存在意義であり、生きる理由のほずでした。

しかし……

「ああ、愛しのマリーナ！　なんでそんな悲しいことを言うのかい!？」

我が家は、このポンコツお父様のせいで滅亡の危機を迎えているのです。

貴族に求められるのは、**“純粋な”力**。それが何の力であるかは個々の自由ではありますが、古来より力とは武力のことであり、他家と比べて強固な産業のない我が家にとって『カ||パワー』であることは紛れもない事実。そのため次期当主であるわたくしが武者修行を行うのは神が定めた道に他ならないというのに……。

「そんなのこっちが聞きたいですわ、こおのポンコツがあ！　私を産んだ母上が亡くなり悲しみに暮れるのはまだしも、その後再婚相手も探さない上に養子もとらないとはどういう頭してるんですか!?!　此畜生オ！　貴族として血を絶やさぬ勤めはどうしたんですか!?!　もしかして頭沸いてます？　我が家がお取り潰しになれば、これまで帝国建国時から続いていた家が一つ消えるんですよ？　歴史が亡くなるんですよ？　それに我々を慕ってついてきてくれてる男爵家の皆様や、領民の方々にどの面下げて謝るつもりなんですかああ!?!」

「る、マリーナさんが可愛いから……。」

「このあんぽんたん！　噴ッ!」

全体重を乗せて、拳を振り抜く。が、軽く奴の顔が腫れ、揺らめいたくらい。

この男は、亡き母上に私が非常に似通っているという理由で私と母

を重ね、溺愛している。明らかに親子愛を超えた危うい何かがあると感じてしまうほどに、愛されている。使用人の誰に聞いても必ず否定するが、年月を重ねるごとに目が泳ぐようになってきた。さすがにないと信じたいが、この大バカ者だ。ないとは言い切れないのが怖い。それだけならまだ許せるのだが（とんがり過ぎた性癖をもつ貴族は一定数いるため否定できない）、もし私が死んだらどうするつもりだったのか。その瞬間に後継者がいなくなってしまう。そんなこと幼子でもわかるのに、全く見合いの話すら聞かない。わたくしがわざわざ帝都に行つて、必死こいて探して来た縁談の話も全部蹴りやがった……！

拳句の果てには私がケガをするのを恐れるあまり、魔法の練習どころか武器すら持たせてもらえない。同じ年齢ぐらいの交友がある男爵家の子たちは性別問わず武器を持ち、鍛錬を始めているというのに……！ 蝶よ花よと育てても許されるのは武力以外の力がある家か！ 公爵家とか元老院議員ぐらいの権力がある家だけです！ ウチにそんな余裕はありません！

（せめてわたくしにもう少し権力があれば……ッ！）

この男は『今を生きる貴族』として最低限の能力は持っている。爵位にふさわしい”力”の証明と、領地の管理能力。我が家が受け継ぐ風の魔術の適性はしっかりとあるし、騎乗戦闘もこのあたりでは一番強い。故に爵位を任せられている。……わたしは、どこまで行つてもその子供だ。爵位とはその個人に付与されるものであり、その者が中心となって家を形成する。私はその構成員でしかなく、私個人に権力はない。どこまで行つても父の顔を借りて、物事を進めなければいけない。

「もういいです！ 私は、私の考えをもって！ 動きます！ 私の力を陛下がお認めにならないければ、お父様の代で我が家はおしまいです！ ……絶対にそんなことさせるもんですか。」

女であつても、力を証明できれば継承は認められる。この過保護な親が、剣すらまともに握らせてくれないのなら……、自身で身に着けるのみ。騎士団は我が家に忠誠を誓っている以上父の意向には逆らえない。そのため親しい使用人や爺やに頼み込んで、一人で魔法や剣の鍛錬を続けた。父に見つかれば止められてしまう、ゆえに一人で、ずっと。

でも、それに限界が来てしまった。もう自分一人で出来ることが少なくなつてきて、そして父をごまかすのも限界が近づいている。かといって父や父に報告せざるを得ない立場の者から離れ、ラクラクから出ていけるような力や資金もない。

となるともう、冒険者となり、無理矢理実戦の中で戦い抜く力を鍛えなければならぬ。冒険者になつてしまえば、もうこつちの勝ちだ。その瞬間から皇帝陛下に保護されている組合の、ただの一般組合員のひとりとして活動できるようになる。父の手から完全に離れることはできないが、それでも今よりはもつと簡単に活動することができきる。

そう判断したわたくしは、唯一わたくしの意見に賛同してくれる爺やと共に。冒険者組合へと足を運ぶことにした。

あ、もちろん事前に連絡の方はしましたし、爺やと共にルールや法などの確認も致しました。ちゃんと自身の小遣いで初心者用のものですが、血に恥じない装備も武器も用意いたしましたし、まさに準備万端。ほんとは一人で行くつもりだったんですが、爺やが土下座をして頼み込んできたので仕方なく連れていくことにしました。

そして……。

「へえ……、そんな小さいのに冒険者に成りにきたの？　なんかまあ、空回りしてるねえ。（うわアルと同じくらいじゃんか……。）」

お姉さまと、お会いしたのです。

大きな薄茶色の外套の下に、真っ白に塗装されたミスリルの全身鎧。腰には二本の剣が差されていて、そして何よりもすべてを包み込むような深い青の髪に、のぞき込めば吸い込まれてしまいそうな瞳。お姉さまはカウンターの席の一つに座っていらっしやったのですが、明らかに他の冒険者の方が纏う雰囲気と違うものを持っていました。それがあの方の持つ力量によるものなのか、それとも世の女性が望む理想の女性像。その一つの完成形がこんな田舎の町にいたせいなのかはわかりません。とにかく、話しかけられた瞬間、自分がその対象であることを把握するのに長い時間を要しました。

「……（あ、あれ？ 語気を強くし過ぎた？ やり過ぎちゃった？ ど、どうしよ……。）」

よくよく考えてみればあの方が私の返答を待っていた時点でおかしいですし、後に爺やから種明かしをされた際は父への強い怒りと、爺やがそちら側だったことに対する憤りを感じましたが、それは置いておきましょう。父はともかく爺やは、当時発生していた魔物の大規模移動が理由で止めたみたいです。

とにかくようやく自身に言われた言葉をかみ砕いた時、私の脳はある結論をはじき出しました。『子爵家をいずれ背負う立場の者として、侮られるわけにはいかない。』

流石にあの時の私だつてすぐさま冒険者として活躍できるとは思っていませんでした、しかしながら貴族がもつ力の一つである魔法と、爵位を背負う者としてのプライド、そして若きゆえの過ちもあり、私はその言葉に対して強い反発をしてみました。

「ぼ、冒険者を目指して何が悪いのですか！ これでも少しは戦えま

す！」

「戦える、ねえ？（よかったあ、話してくれた。……さて、手早く優しく行きましょ。アルも待ってるしね。）」

その綺麗な目を細くし、私を吟味するお姉さま。当時の私は、あの方が一瞬だけ漏らした戦意に呑まれそうになりながらも、必死に前を向いていました。後々知った話ですが、お姉さまは剣神祭の優勝者、まあこんな小娘如きが勝てるはずありません。さながらオーガの前で一所懸命に威嚇する兎の様なものでしょう。

しかしお姉さまは笑わず、私にこのような言葉をかけてくださいました。

「ま、現実見せてあげるのも一つの手か。お嬢ちゃん、名前は？」

「……マリーナです。」

「うん、いい名前だ。わざわざ家名を名乗らないってのもいい。……その手、皮鎧の下に着ている服、真新しい靴。見るからにいいところの、お貴族様のご息女が飛び出して来た、って感じが満載だ。」

「ッ！」

確かに、あの時はお姉さまのいう通りだった。自分からすれば市民、もしくは少しお金持ちの子供程度に見られるだろうと思っていたが、私の恰好は貴族の道楽でしかなかった。そのからかうような言葉は、まだ私が子供で、あの父親の保護下から抜け出せていないことを窘められているようで、強く自身に対して情けない感情を抱いたことを覚えてる。

「ま、私みたいに見た目で売るなら30点ぐらいは上げてもいいけどねえ？ ……」嬢！ ちよっとこの子揉んであげるけど、構わないよね？」

「は、はいいいいいい！ 奥にご案内しますううう！」

奥で何故か震えまくっていた受付嬢に案内されて、私たちは冒険者組合の訓練場へと連れてこられた。ただ広い場所に、打ち込むための木の棒や木製の武器が置かれており、周りは丸太の柵で囲まれている開けた場所。

「マリーナちゃん、剣を提げてるってことは使えるのかな？ それともお飾り？」

「っ、使えます！」

「ならよし。ルールは簡単、魔法でもなんでも使っていていいから私に一撃入れてみな。そしたら組合への加入を認めてあげる。」

近くに転がっていた木剣を拾い、軽く振りながらお姉さまは私にそうおっしゃった。まるで教師が、生徒に向かってものを教えるように。初めて会った時にお姉さまが放っていた、私に対するからかいの感情はすでに消え去り、幼子に何か一つでも学びを得てもらおうとする大人の姿がそこにあつた。……当時の私は、全くそれに気が付かなかったのだけど。

「もちろんそれだけじゃない、上から下まで、全部面倒見てあげるよ。ああもちろん、出来たらね。まあどう頑張っても無理だからこそそのハンドだし？ 木剣の相手にも負けちゃうだろうけど。……さあ掛かっておいで！ 最初の三分間は何もしないであげる、好きに攻撃してきな！」

「ッ！ 言われずとも！」

お姉さまの挑発に乗った私は、自身が持てる全力で切り掛かった。爺やに教わった帝国流の剣術で、自身の扱える型を。全て。

だけど……。

「踏み込みが甘い、それじゃ単に棒を振り回してるだけでしょ。」
「強打は脇を締める、力が分散するよー。」

「はいはい、足運びがお粗末。ダンスの練習にもならないんじゃない？　こうやってやるんだよ。」

その全てが、流される。しかも自身が至らない点を口頭で説明されながら、軽く木剣で叩かれてしまう。軽い衝撃だけで強い痛みはなかったが、自身がこれまで努力して身に付けてきたものをバカにされたみたいで、酷く嫌な気持ちになったことを覚えている。……いやまあ確かに、アルと比べればマジでお遊戯だったんですけども。（え、そうですか？　私なんかまだまだだと思っんですけど。）

お黙り遊ばせ！　それはあなたの基準がお姉さまだからですわ！　あと私の初登場シーンなのに未来から出てくんな！　せっかくのお姉さまの最初のレッスンを回顧してたのですよ！　ほら帰った帰った！　……とまあ、気が立った私は、そこから一族が代々受け継いできた風の魔法を使い始めました。それまでの接近戦の距離から、大きく跳びのいて遠距離戦の間合いへ。

風魔法は効果範囲が大きいという利点もありますが、その分味方や自身へも被害が出るというデメリットがあります。今の私なら風の防壁を身に纏ったり、擦り傷程度無視したりすることもできますが、あの時の私はそんな技術どころか、考えすらありませんでした。

『ウインドバズーカ風砲撃』ツー！』

「おお、すごい。……けど。」

私が作り出した風の猛威が、お姉さまに襲い掛かる。だが、結果など最初から見えていた。これまでとは比べ物にならない速度でお姉さまが木剣を振るった瞬間、私が生み出した風のすべてが打ち消される。

「……………え。」

「うん。魔法はいいね、及第点。でもまあ……、夏場にちよつと嬉しい程度？」

「……ッ！ まだア！」

自身の持てる魔力の限り、自身が知る術式の限り、そのすべてをお姉さまに叩き込んだが、木剣の風圧で全てかき消されてしまう。普通なら木剣の寿命が先に来そうなものなのに、一向に折れる気配など見せていない。そのすべてを、鼻歌を歌いながら、”なかったことにしてしまう”。私が、初めて出会った、一生かかっても越えられそうにない壁だった。

「……うん、そろそろ三分経ったかな？ どう、まだやる？」

「ハア、ハア、ハア……ッ。」

「息も絶え絶え、でも目は死んでない。……うん、いいね。」

魔力の使い過ぎで息が乱れ、立っていることすら怪しかった私。お姉さまはそんな私に声を掛けながら、一瞬にして距離を詰める。そして彼女は……、にこやかに笑いながら、私の頭を優しく、撫でてくれた。

「よく頑張ってるね。……でも、ちよつと実戦に出るには早い。もうちよつと鍛え直してからにしな。」

「は、はい……。」

「ならヨシ、じゃあ終わり終わり。じゃあね、マリーナちゃん。」

息を整えながら、冒険者を。いやお姉さまを見送る。ひらひらと手を振る彼女の背中は、強く、私の目に刻まれた。

「……お疲れさまでした、マリーナ様。」

「爺や、あの人のこと、知ってる？」

「……いえ、申し訳ございません。」

「わたし、あの人の。あの人の下で……、学びたい。」



「ふう、疲れた。」

いや、急なイベントだったけど楽しかったね。そこまで時間も取られなかったし、タダで情報も貰えたし。万々歳だ。あそこにいた人たちに顔を晒しちゃったけど、元々あのマリーナちゃんのためにあそこで起きたことは全部口外禁止だったらしいからちようどよかったよね。まあ受付嬢の子含めて、何人かにサインねだられちゃったけれど。

それにそのマリーナちゃん、剣の腕はまあまあだったけど魔術の腕はかなり良かった。戦いの進め方、という面から見たら素人丸出しだったけど、魔法の技術という点から見れば花丸。とてもアルと同年代の子が出していい威力ではなかった。そうだな……、剣神祭は無理だけど一般的な剣闘士相手なら魔法だけで圧倒できるレベル？

うんうん、若人の頑張りが見れてビクトリアちゃん大満足です。それに私も魔術の勉強中だからね、いいものが見れたよ。ルーンにはイメージが重要だから、実際に風魔法が見れたのはいい参考になった。

「……けどまあ、演技料としてもらった情報がねえ。」

外套のフードを深く被り直しながら、軽く肩を回す。木剣を折れないように気を使ったせいかな少し肩がこつちゃった。

「魔物の生息圏の変化による移動、しかもアルの故郷の村の方から。」

正確にはその奥だけど、そこで何か起きたせいで魔物たちがそれまでの生息圏を追われ、移動した魔物が元々その地にいた魔物を追い出して、移動する……。まあその繰り返しで、どんどんと魔物が動き回って何が起きるか解らない状態だそう。まあもともといた魔物がそこまで強くないのが救いかな？

「帝都のあたりで魔物が多かったのは、あのあたりが一つの終着点でもあったから。まあ海近いしねえ。」

とりあえず、用心しながら進むべきなのは変わらない。魔物たちが移動するってことは、まあ何かしらの強者とか変異個体とかが発生したってこと。さすがに負けるとは思わないけど……、アルにも、もうちよつとだけしつかりとした自衛手段を渡してあげた方がいいかもしれない。近距離は剣があるけど、遠距離武器が欲しいところだ。

懐に用意していた魔道具、アルの防犯用として渡していた彼女のいる方角を教えてください。ソレを起動する。……どうやら工芸品を扱う通りにいるようだ。食料の補給はもう終わったのかな？ まあいいや、アルのいる通りの奥の方には鍛冶屋の煙突が見える。アルと合流した後で何かいい武器がないか探してみよう。

「お、いたいた。愛弟子〜！」

「あ、師匠！」

ま、気にしすぎても仕方ないところもある。降りかかってくるものは全て打ち払う。ひとつひとつ楽しみながら行きましようか。買うもの買って、すぐに出発しましよ。

34：もう一つの” はじまり”

『ふう、このあたり丘ばつかですねぇ。』

『そうね、さすがにキツイものがあるわ。』

「……降りよつか？」

ルペスとコピア、馬の二人とそんなことを話しながら丘を登る。と言っても私とアルは二人に乗ったままだから楽なもんだけど。

ラクララを出した後、テクテクと歩き進めた私たちはもうそろそろアルの故郷が見えてくるかなあ？ というところまで来ている。ただちよつと道が整備されていない地域らしく、凸凹とした丘が多く二人にとっては辛い感じらしい。まあそもそも二人とも平原でしか走った経験がなかったみたいだからね……。別にそこまで急いでるわけでもないし、重いなら降りるよ？ 乗せてもらってるから体力は残ってるし。

『ありがたい申し出だけど、仕事はしっかりしないと。だから貴方は景色でも楽しんどきなさいな。』

『それに何度も襲撃を叩き潰してもらってますからねえ。ご主人は勿論ですが、アルちゃんも頑張っていましたし。』

「えへへ……。」

ならいいけど、と二人に返しながら言われた通りに索敵混じりに景色を眺める。見える範囲、聞こえる範囲には魔物は見つからないし、少し気を抜いても大丈夫そうだ。頑張り過ぎて潰れるのは勘弁だけど、やれるって言うてるのにやめさせて信頼関係にひびが入ったりするのも勘弁だ。それにまだ二人とも三歳馬、経験は必要だろうしね。

因みに、魔物の襲撃は相変わらず私が切り殺してるんだけど、アル

もちよつとだけ参加させるようにした。と言つても剣を使った近距離戦を任せているわけではない。

彼女に買つて上げたパチンコ、それによる遠・中距離攻撃を任せている。子供でも使いやすいY型のタイプで、ラクラクで買った小さな鉄球を投射するタイプのものだ。アルに剣は教えているけど、正直実戦に出すには不安が残る。かといってずっと過保護にしても彼女にとっていいことではない。ということでも今後魔法を覚えた時にも役立つように、ということでも買い渡した。

『射線上に私がいても回避できるし、0距離でも握りつぶせるから大丈夫だけど、撃つときはちゃんと”何処を狙っているか”、とか”何で攻撃しようとしているのか”を叫ばなきゃだめだよ？ 誤射は怖いからね。』

『わかりました！ 頑張ります！』

アルはアルで、自身が何の役にも立ててないと悩んでいたのだろう。ちゃんとした役割と、成果が上がる様になってからは彼女の顔に笑顔が浮かぶようになってきた。まあそれが魔物を殺して、つてのが正直不安になるところもあるが、この世界に於いて魔物は基本人類の敵で、問答無用で排除対象だ。そこら辺は気にしなくてもいいと信じたい。

……ま、その笑顔が抱えてる不安を誤魔化そうとしてるのは解ってるんだけどさ。

魔物の数は明らかに帝都の付近よりも多いように感じる、その質は明らかに帝都の方が高かったが、襲撃の頻度が上がっているのは確かだ。ラクラクからここまで付近の村を遠くから眺める限り、大きな被害が出ているようには思えなかったが、数の増加という目に見える変化は私たちに不安を植え付けていく。誰も言葉にはしないけど、あの町を出てからずっと、頭の片隅に残り続けている。

「そういえば師匠？」

「ん〜？」

彼女に声を掛けられたことで、意識を思考から戻していく。目線をコピーアの背にのるアルの方へ。

「ララクラにいた時、冒険者組合で面白いことがあったって言ってましたけど何があったんですか？ 結局それを聞く前に角鹿に襲われちゃったので聞き逃しちゃったんですけど……。」

「ああ、アレね。……まあ端的に言うのと、見ず知らずのおっさんとダンスして、多分貴族のお嬢様に稽古つけてあげた。んでそのお礼として情報貰ったって感じ？」

「??？」

マジで何を言っているのか解らないという顔をしながらこちらを見る彼女。いや嘘は言っていないのよ？ ほんとほんと。……え？ また貴族と関係持ったんですかって？ いやそんな大層なもんじやないよ。明らかに私のこと見て顔を変えた執事のお爺さんはまだしも、肝心のお嬢様は私のこと知らなかったみたいだし。多少丁寧に教えてあげたけど、あれぐらいならお抱えの騎士団ぐらいには叩き込まれてるでしょ。

「あのマリーナって子の風魔法は結構すごかったよ、戦術は赤ちゃんレベルだったけど魔法だけなら十分実戦レベル。アルよりちよつと背が高かったけど同じ年ぐらいだろうし。やっぱ貴族だからそういう魔法への教育はしっかりしてるのかもね。」

「むう……！」

「あ、でも。剣術はアルの方が何枚も上手だったよ。」

「当然です！ 師匠の弟子ですから！」

拗ねたと思っただけすぐに胸を張る彼女、うんうん。やっぱり反応が

可愛いねえ、アルは。しかも、そうやって胸を張った後に早速魔力を練り始めて、魔法の練習を開始しててもっとカワイイ。そうだね、負けたくないもんね。

昔、司教のレトウスさんに見てもらった時に『アルは火と水に対しての適性が高い』と言われた。彼女もそれを覚えているみたいで、私がやって見せた火のルーン、？（カノ）の練習をずっとしている。今のところずっと不発だけど、ちよつとずつ彼女の体から感じる魔力の動きみたいなのが滑らかになっている様な気がする。もうそろそろ、つて奴だろう。

「あ、この丘です！　ここを越えれば平原で、ずっと麦畑が広がってますよー！」

「とういことは……？？」

「はい、私の村です！」

『聞いたわね、コピア。』

『はい、もうひと頑張りです。』

ゆつくりと、二頭が地面を踏みしめながら丘を登っていく。ここに到着するまでに何度か他の村の傍を通ったが、綺麗な麦畑がどこでも広がっていた。まだ収穫には長い時間が掛かりそうな青いモノばかりだったが、ああいった一面麦畑つてのは見えて心が安らぐのを感じる。それに、平原にある村つてことだから丘を越えればすぐにソレも見えるだろう。

淡い期待を胸にしながら、視界が開けるのを待つ。

そして……。

「……………え。」

不安は、現実へと。



こちらに近い部分の麦畑はまだ生きている、けれどもそれ以外。それ以外が全て消えてなくなっている。地面に残るのは黒い墨の様なものと、灰たち。煙はすでになく、植物が焼けた匂いが微かに残るのみ。

そして何よりも、視線の先にある村。はつきりと細部まで視認できたわけではないが、防壁として使用していたであろう丸太が何本も倒れており、内部にも黒い跡が残っている。煙は出ていない、こちらも火が消えてから、数日経っているように、考えられる。

「あ、ああ……………ッ！ コピアさんッ！」

「待ちなさい。」

コピアの腹を叩き、彼女を走らせようとしたアルを止める。

「なんでッー！」

「あそこにいる人たちから、全速力で走ってくる馬を見たらどう思う？ いらぬ緊張を与えて、敵襲として判断される。警戒させないように、ゆっくりと行くべき。気持ちはすぐわかるけど、そんな時こそ落ち着きなさい。」

「……………ッう、はい。」

堪え切れない思いをどうにかして抑えようとしながら、彼女は了承の声を返してくれる。……………そのすべてを理解してあげることができないけれど、気持ちは痛いほどわかる。でも、それを理解していながら、私はあなたを失いたくはない。

彼女には言わなかったが、すでにあの場所が占拠されている可能性もある。もちろんただの火事かもしれないが、最悪は魔物や盗賊あたりで攻撃されて占拠、そいつらの新たな寝床になっている場合だ。それを考えると一人で行かせるわけにはいかないし、足となる馬のスタミナを削るわけにもいかない。

「くよ。」

私とルペスを前に、ゆっくりと進んでいく。言葉にはしなかったけど、アルは理解し、結論を出していたのだろう。後ろから剣の固定具を外す音と、鉄球を取り出す音が聞こえる。普段の彼女であれば私より前に出ることはないだろうが、もし彼女の家族が殺されてしまったら。アルがどんな行動をするのかは誰にもわからない。

……………そして、もしその敵が、アルでも倒せる敵。私が対処しなくてもどうにかなる敵の場合。私はどうすればいいのだろうか。

ぐるぐると嫌な考えが脳内を駆け巡っていくが、何一つ良い考えが浮かぶことなどない。だが、徐々に私たちと村の距離は近づいてい

く。気が付けば、もう目と鼻の先まで、来てしまっていた。

「誰だッ！」

壊れた丸太の防壁の内側から、少し震えた男。それもかなり高齢の
声が聞こえてくる。それ以外にも何人かいるようだが、纏う雰囲気は
明らかに戦い慣れていない人間のソレ。その全身を丸太の壁に隠し
ているためどんな人なのかはわからないが、怯えている者たちがそこ
にいる。なんと返すのが彼らにとって精神的な負担を与えず、穏便に
ことが済むのかを考えてしまう。そのせいで、アルが代わりに声を張
り上げる。

「私です！ アルです！ 帰ってきました！」

彼女の声に、弾かれたように何人かが顔を出す。私の後ろで馬にの
る彼女の顔を見た者たちの緊張がゆっくりと解けていき、安堵の声と
アルのことを話す声が聞こえてくる。そこまで大きくない村だった
のが幸いした、村にいた子供の顔と名前、それを覚えている者がいた
おかげで要らぬ諍いを避けることができたのだろう。弓や急ごしら
えの槍の様なものを手放した数人が、こちらに向かって歩いてくる。
いつの間にか、アルはコピアの背から降りており、彼らの下に駆け
寄っていた。

「アル、お前よう帰って来たなあ……。」

「解放してもらったんです！ 私のことよりも、コレは……！」

「……盗賊じゃよ。5日ほど前に……。」

「ッ！ ママは！ パパは！ みんなは！」

「……………すまぬ。」

息を呑んだ彼女が、耐え切れず村の中に走って行ってしまおう。それを止めようとした彼だったが、アルが止まることはなかった。行き場を無くした腕を、どうにかして降ろしたお爺さんは私の方に向き直り、歩いてくる。

彼女の知る者たちが外敵から生き残った者たちを守ろうとしている、それを考えるには安全なのだろう。……生き残っているとしても、いないにしても。少し、一人の時間があつた方がいいのかもしれない。あの子と、家族の間に、私が入ることはできない。

「騎士様、もうしわけありません。このありさまじゃ、おもてなしは出来そうにないのです。……それと、アルを連れて来てくださつたこと、感謝いたします。」

「構わないよ。少しでも休める場所があれば大丈夫。あと私は騎士じゃなくて、ただの一般人。鎧、ややこしくてごめんね。」

ルペスの背から降りながら、話しかけてきた彼と視線を合わせる。この世界には珍しい高齢の男性だ。命の危険が多いこの世界で、高齢となるまで生き残るということはひどく珍しいこと。それが村の住民ならばなおさらだ。

「……なるほど、ではお客人とさせていただきます。ここまで長かったですでしょう、どうぞ中へ。」

「ありがとうございます。……武器は預けた方がいいかい？」

「いえ、大丈夫ですじゃ。アルを連れてきてくださつた方であれば、皆不安には思わぬはずです。」

さつきまで手作りの槍らしきものを持っていた男たち、いやまだ子供と言つていい年齢の子たちにルペスとコピアを任せ、村の中へと入っていく。外からは防壁によって隠れていたが、明らかに戦いがあつた痕跡が多数残っている。矢が刺さつたような跡がいくつもあり、乾いた血の跡が多く残っている。そして家屋もすべてが燃えてい

るわけではないが、いくつかの家が全焼した跡が残っている。

「盗賊って言っていたけど……、伺っても?」

「……5日ほど前、盗賊らしき集団がこの村を襲いました。100名ほどの集団で、交渉にも応じず村に火をつけ、笑いながら村人たちを切り殺していきました……。戦う力を持たぬ我々ではどうしようもなく、何とか森に逃げるのができたのが20名程度。それ以外は全て……。」

静かに答えていくお爺さんの言葉を聞いていく。残された死体を見るに、男や抵抗する者は全て切り殺され、逃げ遅れた女や子供はおそらく売り飛ばすために連れていかれたとのこと。生き残ったのは先んじて逃がされたものを率いていたこのお爺さんと、まだ若い子供たち。何とか生き残った女性や男性もいるにはいるが、村としての機能を保つことは難しいそうだ。

「彼女の……、アルの母と、下の双子は運よく逃げ切ることができました。しかし……。」

「そう……。」

「領主様に現状をご報告するために若いものを走らせましたが、未だ帰って来ないことを考えると……。見捨てられたか、すでに亡くなられたのか。」

35：なつてはいけないもの

強い不安に押しつぶされそうになりながら、それから逃げるように村の中を走る。この道も、この通りも、全てがあの中の時のままなのに。少し目を閉じれば、全部浮かび上がってくるのに。眼前に広がる景色は、何も変わらない。

血の跡、戦いの痕、師匠が戦っていたあの闘技場で見たものよりも。しんどくて、眼を背けたくて、元に戻って欲しくて。すごくよくしてもらったお婆さんの家は跡形もなく燃えていて、一緒に遊んだ友達があった家の壁は赤黒く染まってしまっている。死んだ人たちはどこにもいないけど、そこで誰かが死んだことは解ってしまう。

平和な、平和な場所のはずだった。ここには、みんながいて、私がいて、家族がいて。小さい村だからこそ、全員が顔見知りで、知り合いで、この小さな世界を生きていくための大きな家族の一員だった。それが、何故こんなことに。

血の跡を、死の跡を見るたびに、心が悲鳴を上げ、罅が入っていく。私は、奴隷として売られた。でもそれは家族を守る為で、生きるためで、自分の意思で出ていった。そこに、恨みなんてあるわけがない。そして、師匠と出会って、大切な時間を、楽しい時間を過ごさせてもらった。……私が師匠と日々を楽しんでいる時に、家族はどんな目に遭っていた？

色々な考えが頭の中を駆け巡り、少しずつ罅は大きくなつていく。不安が不安を呼び、自身の両親が、家族が。その最悪をずっと考えてしまう。地面を踏みしめる足は重い、けど確認しないといけない。藁にも縋る思いで、みんなが生き残っているというありもしない希望を支えにして、私の家の前まで、走る。

走ってしまう。

そして……。

「……………あ」

ない。

なにも、なにも。のこってない。

あるのは、真っ黒に焼けた地面と、焼け残った何か。

「ああ、ああ……………」

全身から、力が抜けていく。けど、それに抗う気力は私に残っていない。その場に倒れ込んでしまう。頼りにしていた支えも、やっと固まってきた心も、未来への思いも、全部が全部根元から崩れていく。私の土台が、生まれて、育ってきた場所が、何一つ。家族すらも、何も残っていない。

さつきまで、私の中には何かがあったはずなのに、誰かのおかげで、何かがあったはずなのに。何も、何も残っていない。ただの、空っぽな入れ物。そこに、何かが、注がれていく。湧き上がって来てしまう。強い、強い、真っ黒な、消えようもない感情が。普段なら感じるはずの恐怖も、何もない。ただ、何かあった場所を埋め尽くすように、塗り替えていくように。生まれて、満たして、溢れて……………。

「……………アル？」

「……………え。」

それが、止まる。

その声ができる方に、顔を向ける。だって、忘れるわけがない。私はその声をずっと聴いて、過ごして来た。育ってきた、忘れるはずがない。

「マ、……マ。」

私の視界に収まるのは、死んでしまったと思っていた母親と、その両腕に抱えられた双子。一番下の弟と、妹だ。自身の何かを塗り替えようとしていた感情が、鳴りを潜め。もつと奥底から違う感情たちが溢れ出てくる。安堵か、喜びか、この想いを言葉にすることはできなかったが、とにかく安心したことを、覚えていいる。

「パパが……。」

「ええ。私と、この子たちを逃がすために……。」

母に抱き着き、抱えていた不安を吐き出すように泣いた後。彼女に連れられて私は父が眠る場所まで歩いた。

墓、と言つてもただ、土が盛り上がっているだけ。それがたった一つ。

生き残った人間も先に逃がされた子供や、女性が中心。まともな男手なんて残っていない。そんな状況で、死んでしまった人たちの葬儀を執り行うにはどう考えても人が足りなすぎる。故に、その遺体を火で燃やし、埋葬する。燃やすための燃料だって貴重だし、そもそも自分たちの村を焼かれたばかりだ。火を見る事すら嫌なはずだ。……だけど、放置すれば病を呼び寄せ、最悪不死者。アンデッドとして帰ってきてしまう。そんなの、誰も望んでいない。

だから、こんな質素な。知らなければ墓だと解らないようなものでも、仕方がない。仕方がないんだ。……でも、頭では理解できても感情がそれを否定する。なんで、なんでこんなことに。

「アルねえね?」

「……ああ、うん。ごめんね。」

一番下の妹に、声を掛けられてようやく意識がこつちに返ってくる。ここにいるのは、母と、一番下の双子だけ。父は皆を逃がすために犠牲となり、上の姉と、下の妹は行方不明。遺体が見つからなかった、ということは連れていかれてしまったのだろう。……女が連れていかれて、どうなるかなんて言葉にしないでもわかる。

「レラ、ピノ。お母さん、アルお姉ちゃんとお話するから、お爺ちゃんのところに行つて来てもらえる? それでママが『少しでもアルと話す時間を貰えますか?』つて言つてたことを伝えて欲しいの。さっきのところにいると思うから、お願いできる?」

「うん!」 「わかった!」

母がそう伝え、すぐに行動を始める二人。静かな子だったレラは私を知るよりも元気に振舞っていて、ワガママな子だったピノは嫌なほどに聞き訳が良くなってしまっている。その変化が、二人にとって大きすぎる環境の変化が理由じゃないことを、信じたいと思つてしまふ。

「……アル。せつかく、帰つて来てくれたのに、こんな状況でごめんなさい。」

「ううん、大丈夫。ママと、二人に会えただけで十分。」

何か、こみ上げるものを必死に抑えながら、母は私に語つてくれた。師匠が冒険者組合で聞いてきてくれた魔物の移動、それはこの村で

も把握自体はしていたらしい。麦畑の外にある森の中の動物が異様に少なかったり、出会う魔物が何かから逃げるような仕草をしていて。異常を確認した狩人の人たちが森の様子を調べに行った。私が売られた時よりは、村の財政も安定してたみたいで、常駐の冒険者を雇うことが出来ていたが故の調査。

結果は、誰も帰って来なかった。

そのため、森で何かが起きていると判断した村長は、ララクラの冒険者組合とこの村の領主である男爵様に便りを送った。どちらかが私たちの声に応えてくれれば、何とかなる。これまでの経験ではそうだったから、今回も、そうしてしまった。

便りを出したその翌日に、奴らは現れた。便りを持った村人の死体と一緒に。

そこからはもう、想像したくない内容だった。火矢を投じた盗賊たちは村の人たちを狩りのように追い立てながら、殺して回ったらしい。村を守る冒険者も数には勝てず、すぐに死に。父を始めとした男たちが時間を稼ごうとしたが、戦う術なんて持たない人たちだ。結果がどうなったなんか語られずとも解ってしまう。母を始めとして何人かを逃がすことはできたが、盗賊たちが村の防壁の外にある麦畑すら焼いてしまったため、その火に吞まれてしまった人や、逃げ遅れてしまった人がたくさんいたそうだ。私の、姉と、妹もそうらしい。

逃げ延びることができた人たちは、真っ暗な森の中で息を潜めながら夜を明かし。その次の日に村の様子を見に行った。……残っていたのは、何も無い。焼けた家屋と、何も残っていない煤けた家。そして昨日まで生きていたはずの身内たち。

「だからアル、貴方に会えて本当に良かった。もう、二度と会えないと思っていたから。」

私は奴隷となり、父は死に、長女と三女はもう帰って来ない。失ったことを嘆く時間すらない。一人で、あの双子を育てないといけない。そんな時に、奴隷となった私が帰ってきた。そんな中で、母親と

して振舞い、私に心配をかけないように振舞うママに。私はなんて声を掛ければいいか、解らなかつた。

そんな時、下の子たちの声が聞こえてくる。

「騎士さまだろ!!!」

「あ、あはは。だから一般人って言ってるんだけどなあ?」



「騎士さま?」

「騎士さまだ! 助けにきてくれた!」

「ほほ、二人とも。ご迷惑をおかけするんじゃないですぞ。」

いや、うん。

大人のお姉様、お兄様相手のお仕事ばかりだからさ。子供相手にキヤツキヤされるのは新鮮で嬉しいんだけど、ビクトリア様は騎士様じゃないんだよね。ただの一般人なんですよ私。確かに騎士とどうか、帝国の親衛隊が身に着けてるような全身ミスリル鎧だけど、剣闘士上がりの一般人なんです。でも、まん丸な目をキラキラさせながらこうも慕ってくれると強く否定しにくいと言いますか……。

というかお爺さんも私のこと『騎士爵持ちだけど、それを明かしたら私どもに迷惑が掛かるとお考えになられて、身分を隠していらつしやる。』みたいな感じに思ってるでしょ! 話し方の態度とか全然変わらないじゃん! 見た目はそうかもしれないけど、マジで違うんだって!

いや確かに” 貴族の私兵” っていう意味の方の騎士だったら、実質ヘンリエツタ様の私兵みたいなどがあるから否定できないけど、この小さい子たちはともかくおじいちゃんの方は貴族のひとりとして見てるでしょあなた！ 騎士とか貴族位を偽装したら即極刑だから勘弁してくださいな……。

「この子たちは……。アルに少し似ているけど、妹と弟？」

「はい、そうですじゃ。」

「そっか。なら……。しよつと！」

遊びたい盛りだろうし、両腕で抱えて肩に乗せてあげる。正確な年齢は解らないが、幼稚園児程度だろう。……。アルの妹と弟なら、ちよつとぐらいは、ね？ キヤツキヤと喜んでくれる二人の背を落とさぬように支えながら、二人が走ってきた方向をたどる。

「たかーい！」

「ピカピカしてる！ すごい！」

「アルが磨いてくれたんだよ。」

妹ちゃんと弟ちゃんをあやしなながら、二人の気が現実に帰らぬように姉の話を出す。故郷に帰るってことで近くの川で水浴びとか鎧の手入れとかしておいてよかったよ……。野宿してたらどうしても汚れは溜まるからね。匂うなんて言われればもう、心が死んでしまう。いくら元男と言えどもそこら辺はね、気にしますとも。

興奮のせいかな話が四方八方に飛ぶ会話に付き合いながら歩いていると、ようやくアルの姿が見えてきた。少し開けた場所で、何かを焼いた跡と少しだけ膨らんだ地面が見える。アルの隣にいた彼女似の女性、おそらく母親だろう。彼女が祈るような動作をしていることから、アレが墓か……。

「レラー！ ピノ！」

アルと何か会話しているみたいだったし、邪魔になるなら引き返そうと思ったが、アルの母親と目が合う。その瞬間思いつき顔色が悪くなり、おそろくこの子たちの名前を叫び、こちらに向かって走ってくる。……ああ、まあ武装してる相手の近くに自分の子がいれば気分はよくないよね。盗賊らしき奴らの襲撃があつた後なわけだし。

駆け寄ってくるお母さんを刺激しないように、ゆつくりと二人を下ろす。さつきまでは楽しそうにしていた双子だったが、母親の慌てて、何かを恐れるような声のせいか、そんな空気は一瞬にして消えてしまった。

駆け寄ってきたお母さんは二人を思いっきり抱きしめた後。……地面に頭を擦り付けるほど下げ、私に向かってこう叫んだ。

「我が子が、我が子が申し訳ございませんッ！　どうか、どうかご容赦をッ！」

「……………へ？　いやいやいや、そんな謝ることなんか。」

「ですが騎士様にご迷惑を……、どうかッ！　私はどうしていただいても構いません、ですが我が子だけは…………。」

……鎧脱いできた方が良かったかも。

「こ、これ！　レイン！　騎士様が困っていらっしやる！」

「ですが…………。」

「そ、そうそう。私全然気にしてないよ？　むしろ遊んでくれてあげがどうね、レラちゃんピノくん。だから、ね？　早く頭を上げて…………。」

お爺ちゃんの援護に合わせるように。地面に膝を突き、できる限り優しい声を出しながら不安にさせぬように声をかける。こちらを窺う様に、震えながらゆつくりと顔を上げる彼女。そんなお母さんに笑

いかけながら、『大丈夫』、『怒っていない』ことを伝え続ける。ほら子供たちにこんなの見せるのもアレだしさ。早く立ちましょう？

……うん、正直この世界の貴族制というか。身分制度を甘く見過ぎてたかも。私は職業柄相手が誰であろうとも”ビクトリア”を貫かなきゃならないし、この世界で生まれ育ったわけでもないから貴族に対する恐怖などの強い感情はかなり少ない。

(失敗したなあ……。かといって身分証はヘンリエッタ様の奴と紐付きだし。出したら出したでもっとヤバいことになるからなあ。)

貴族は、上位者であり、守護者であり、恐怖の対象である。魔法というわかりやすい力で民を治め、その力を使い外敵から民を守る。その力の行く先が民に向かったとしても、民は貴族の守護下でしか生きられない。だって外には魔物という死がそこにいるから。最初は一種の社会契約、食や経済を支えるが故に力ある者に守ってもらい、力ある者は食べていくために民を守るというものだったが、時間を経るごとに貴族という形へと変化していく。

レインと呼ばれたアルの母からすれば、自分の子がそんな特権階級の肩に尻を乗せているわけだ。まあキレる貴族はいるだろうし、その矛先が村全体に及んだとしてもおかしくはないだろう。統治者に対して無礼な行いをしたものが、どういう末路をたどるのかは歴史が証明している。

まあそんな現実逃避をしながらレインさんを宥めっていると、ようやく心が落ち着いてきたようだ。

「も、もうしわけ。申し訳ございません……。」

「大丈夫大丈夫、ほら。私気にしてないから。スマイルスマイル。ほらアル？ 貴方もちよっと手伝ってよ。」

「す、すみません。ちよっと、驚いてしまって。」

お母さんに肩を貸し、ゆつくりと立たせながらアルにも助けを求め
る。若干声が堅いような気もしたが……。まあ、自身の家族がすでに
天に召されていた上に、自分の母親がガチ泣きしながら懇願してて、
その対象が私だったりすれば困惑しても仕方ないか。私だってどう
したらいいか解んなかったし。……よくよく考えたらアルに助けを
求めるのは大人として駄目だな。自分で何とかするべきだった。

(いいですよこれぐらい……。それに、みんないなくなつたわけじゃ
ありません。二度と会えなくなる前に会うことが出来て……。連れて
来てくれた師匠には感謝していますから。……。でも、色々と面倒なの
で村にいる間は騎士として振舞ってください！)

(ええ……。騎士じゃないって言っちゃったんだけど。)

(その鎧に肌の質感とか見れば誰も信じませんよ。というか騎士どこ
ろじゃなくてもっと上に見られてもおかしくないです。……。という
か騎士じゃないって言って、ほんとのこと言えばもっとややこしくな
るでしょうが！ 元老院ですよ元老院！ 心労でママもお爺ちゃん
も召されます！ 居心地悪いのは解りますけど、勘違いしてるだけな
んで我慢してください！)

(……。まあ、うん。そうだね。否定できない。)

(そもそも師匠は、自身の立場が一般市民から見てもヤバいのを自覚し
てくださいいな！ ヘンリエッタ様のみならず無茶苦茶多くの貴族様
たちが師匠のファンなんですよ！ ちよつと”お願い”したら村の
一つや二つ消し飛ばしてもおかしくないような人たちが後ろにいる
んですよ！ ヤバいんです！ ほんとに！ ……とにかく、村にいる
間は”従者”として接しますからね！)

彼女の母に聞こえないように、小声でそんなことを話す。

明らかに、アルの声や表情がどこか無理矢理で。心に抱えたものを
隠すように、あえて気分を上げて話す様にしている。父は殺され、姉
と妹が連れていかれたのはあのお爺ちゃんから聞いた。それに、故郷
が焼かれ知り合いも多く殺されてしまったとなると、彼女の心に圧し

掛かる物は想像がつかない。

……彼女の言う通り、『身分を隠した騎士』として振舞うか、それとも何も考えずに、その隠してしまったものを吐き出させるために抱きしめるか。抱きしめるにしてもそれは私ではなく、彼女の母親の役割なのではないか。

考えが、ぐるぐると回っていく。

そして、私の中で一つの答えが出た時に。

全てをぶち壊す知らせが届いてしまう。

「奴らだ！ 奴らが戻って来たッ！」

アルの目が、据わる。

怒りや、恨みという感情は簡単に人を狂わす。それが、力を持つ人間。力を持ち始めた人間なら、なおさらだ。……私は、その命が散ることを防ぐことができる。だが……、心までは、解らない。

36：やると決めたら、やる。

「奴らだ！ 奴らが戻って来たッ！」

息を切らしながら叫ぶ彼は、どこからどう見ても子供で。本来なら元気に野を走り回っているような年齢、そんな子が、”奴ら”。彼の顔色やその言い方から考えるに、盗賊が戻って来てしまったのだろう。理由は何にせよ、それは明らかに死の宣告だった。

ここまで来る間にお爺さんから聞いたが、生き残ったのは女子供に老人のみ。まともに戦えるような人間は彼らを逃がすために皆死に、同じ墓の中へ。その上手元にはまともな物資は残っておらず、先ほど見た何かの廃材で作ったであろう槍のことを考えれば、とても戦いに使えそうなものではない。せいぜい子供のお遊びに使えればいいレベル。戦うために必要な人手も、武器もない。

そんな状況だが、ここから逃げ出すという手はもう取れない。前回は逃げる時間を稼いでくれる大人たちがいたが、もう皆死んでしまった。残された手段は少しでも生き残る時間を延ばす逃走か、0に等しい可能性を信じて戦いに身を投じるかのみ。……そう、私がいなければ。

視線が、集まるのを感じる。

まともな戦力として考えられるのは、たまたまアルを連れて帰ってきた騎士の私だけ。実際に騎士かどうかなんて残された彼らには関係がない。鎧を着て、武器を持ち、馬に乗ってやって来た存在。彼らにとっての希望であり、唯一の望み。彼らにとっての特権階級とは、その力を以て民を守るモノ。騎士なんかその最たるものだ。タイムリグよく現れた私が敵を華麗に殲滅する姿でも思い浮かべているのだろう。

……正直、それぐらい別にいい。見られるのは慣れてるし、人殺しなど今更私にとっては些事だ。この背に積み重なった骸の数が”少し”増えるだけ。しかも相手は盗賊。剣闘士みたいに逃げるのが許されず死ぬしかない様な相手ではなく、悪事を働き自身の私腹を肥やすために人を殺した者たちだ。彼らの境遇がどんなものであれ、悪人は悪人。圧し掛かる骸の重さはあまり変わらないだろう。

けれど。

こちらをじつと見つめるアルに、目を向ける。

彼女の家族には及ばないが、長い時を一緒に過ごして来た。言葉にされずとも彼女が何を訴えているのか簡単にわかる。

『私も、戦わせてほしい。』

……私は、どうすればいいのだろうか。

親を殺され、姉妹を連れていかれた。盗賊に連れていかれた女の行く先など子供でも分かる。そんな状況に置かれながら、感情を収め私の指示を仰ぐ彼女。その冷静さというか、自制心を褒めればいいのか。それともその感情を吐き出させるために、爆発してしまう前に、背中を押せばいいのか。

盗賊程度私からすれば何でもない。いくら強かろうと、盗賊は盗賊。アルに傷一つ付けずに実戦訓練をさせてあげるくらいわけない。もちろん一人ですべてを消し飛ばすなど簡単に出来てしまう。けれど、できるかできないかが問題ではない。アルの心の問題であり、彼女に私と同じように骸を背負わせるかということだ。

「……とりあえず、相手を見よう。伝令くん？ 案内頼めるかな？」

「は、はいー」

伝えに来てくれた子にそう告げ、ゆっくりと立ち上がる。アルはずっと、私のことを見続けている。その腰に提げられた剣の、柄をしっかりと握りながら。彼女の覚悟は、すでに固まってしまっている。

「アル、ついて来なさい。」

「かしこまりました。」

その胸の中にある感情を隠すためか、それとも先ほどまで泣いていた母を気遣う気持ちが強いのか、いつもの彼女ではなく、“従者”の彼女としての言葉が返ってくる。

……この世界に於いて人殺しなど、どこにでも転がっている話題だ。確かに一生武器を握らずに過ごす者もいるだろう、だけど前世と比べればどこにでも死の危険が転がっていて、治安なんか天と地の差がある。すぐ隣にいる人間が自身の財産を狙って襲い掛かってくるかもしれない。町の中はまだ治安維持のための兵士がいるが、外に出ればまえば魔物のように盗賊が襲い掛かってくることは珍しくない。

だから、前世と比べるととても身近で、誰にでも経験出来てしまう。この世界で生まれ育った彼女も、そうなのだろう。そも私が剣闘士として戦っていた時、私の殺した相手のことは、彼女も見えていた。最初。私の下へ来てすぐのころは、“死”という概念への恐怖や、血への本能的な恐怖のせいだ。呼吸を荒くし、涙を流していた彼女だったが、今では何も無いように、受け止めてしまっている。

アルのことだ。その根っこ、精神の強さは十二分にある。殺した時の感触は覚えてしまうだろうが、乗り越えること自体は出来てしまうだろう。そして、私よりも背負う骸たちの重さは、だいぶ軽く感じてしまうだろう。完全な憶測だが、私が持つ価値観と、アルたちこの世界の者たちが持つ価値観の違いはひどく大きい。

やっぱり、彼女からその機会を、『復讐』の機会を奪ってしまうことは、私の我儘なのだろうか。失ったものは帰って来ない、だからこそ

残された人が前に進むための糧がいる。彼女が”人を殺す”という方法で、骸を背負う方法で次に進めるのならば。私は……。

「ビクトリア様。……いえ、師匠。」

先導する伝令の子に付いて行く途中、私の顔から何を考えているのか解ってしまったのだろう。アルが、話しかけてくる。

「戦わせて、ください。」

「……それは、何のために？ 貴方の心の中にある、恨みや怒りを解消するため？」

恨みや怒りを剣に乗せて戦う人はいる。何人も見てきた。剣闘士だったころ、私に親しい人が殺されたのが理由で、私を殺しに来た人がいた。たくさん、ね。その人たちの顔は、忘れたくても忘れられない。みんながみんな、感情に支配された顔。アルの顔を見れば、彼女が違うことはすぐにわかる。

「……少しは、いえ。強く、その気持ちはあります。けど、それ以上にここにいる人を、守れなかった人を、守りたい。そう、思います。」
「そっか。」

なら、これ以上は……。彼女を戦わせない方法を探すのは、理由を付けて止めようとするのは。私の我儘で、エゴになってしまう。すでにもう、彼女の心は決まってしまうている。ならば、せめて……。この背負うモノが軽くなる様に。

「アル。」

「はい。」

「まだ貴方は未熟、実戦で剣を握らせてもいいレベルには達してない。だから……。後方からの援助だけなら、許す。」

初めて人を切り殺したときの感覚は、一生残る。数え切れない人を殺して来た私でも、一番最初の肉を断つ感触は、人を殺したという感触は、忘れたくても忘れられない。アレは、一生知らなくてもいい。知るべきではない。人を切り殺す感触と、遠距離から攻撃して殺す。そんなの比べたら格段に遠距離の方がいい。

アルの気持ちと、私の気持ち。私の方が強く出てしまっているが、これ以上は譲りたくない。アルには、『あなたを人殺しにはしたくない』と伝えている。だからこそ剣闘士の世界から連れ出したのだ。私の気持ちは、彼女に伝わっている、はずだ。

そして、もし。この選択で今後アルが被害を受けてしまうのなら、人を殺したことがないせいで彼女が不幸になるならば。この時に経験しなかったせいで、未来のどこかで彼女に危機が訪れるのなら。……これを選ばせた私が、そのすべてを引き受けよう。

「わかり、ました。」

「……ごめんね。」



それまでの思考をすべて捨て、脳を戦闘時のものに移していく。戦いにおいてそれ以外のことを持ち込むのは必ず隙に繋がる、相手が何であろうと、蹂躪できる相手だろうと油断はしない。久しぶりにはなるが……、剣闘士として、戦わせてもらおう。

「ひー、ふー、みー……。結構な数がいるけど、聞いてたよりは少ない

ね。」

燃え残った外壁、丸太を地面に突き刺したものに身を隠しながら、外の様子を窺う。未だ盗賊はこちらに到着していないが、着いた瞬間に略奪。いや残党狩りへと移行するだろう。

（肝心の数は、30弱。それはいいんだけど、意外なのは……。思ったより装備が整ってる。）

野盗が持っというような簡単な防具。誰かから奪ったものをそのまま使い古している、という様子ではなく。比較的新しく、革装備であるが上半身全てを覆う装備をしている者が多い。見る限り革のランクは最低限度のものだが、それでも上半身全てを守ろうとすると結構な資金が必要になる。

（畑を含めて村を焼き、人手を確保するのではなく殺して楽しむ。よほど余裕のある組織か、後ろに何かいるか。）

「あいつら、あいつらですじゃ。顔は解りませんが、先日この村を襲った者たちと同じです！」
「そう……。」

村を守る為か、頼りない槍を持ったお爺さんが私にそう伝えてくれる。……まあ背後に何がしよう関係はない。この国の法では『盗賊に人権はない』とされている。ま、都市外に限るが。自分の目の届かないところにいる奴の権利なんか貴族ぐらいじゃないと守るにはコストが掛かり過ぎるし、盗賊なんか少ない方が国にとってもいい。

だから私がここで奴らを”処理”しても何の問題もない。その後ろ盾が皇帝レベルでない限り、私のバックの方が強い。そして皇帝ならばこんな事する必要はない。村を滅ぼしたければ、皇帝の一声ですべてが決まるからだ。

「アル、弾は使い過ぎないように。それと私のことは気にせず、好きなようにやりなさい。」

「あれで全部じゃないからですね、解りました。」

「それと……、弓持ちもいるけど。気にしなくていいよ。」

矢筒を持った盗賊も何人か見えるが……、正直矢よりも私の方が速い。撃たせる前に消してもいいし、途中でつかんで投げ返してあげてもいい。アルに剣を握らせないと決めた以上、遠距離攻撃は全てカットすることにしよう。他の村人もいることだし。

「さて……。」

アルへの指示を終わらせた後。集まって来ていた村人たちの方へ向き直る。おそらくだけど、ここに生き残った全員が集まっている。女子供に老人、逃げようにも逃げられず、かといって生まれ育った村も捨てれずに残った人たちだ。他の村や町に移動しようとしてもたどり着くことができるかも怪しい。だからもう残るしかない、逃げ惑いながら死ぬぐらいなら、ひとかけらの希望に掛けて戦うしかない。不安と死の恐怖に染まった目をしているが、皆がそれでも生きることを諦めていない。

「お爺ちゃん、ここにいたので全員かな？」

「はい、そうですじゃ。……如何様にも申しつけください。これでも昔は兵士として男爵様の軍団にお供していた身です。息子たちの、孫たちの無念。ここで晴らしてやります。」

「そう、なら……。ここで見てなさい。」

アルを後方に下げているのに、村人たちを戦わせるわけがない。と
いうか私一人でどうにかなるのに、戦わせる理由がない。お爺ちゃん
を含めた何人かは死ぬ覚悟決めてるっばいけど、それはもう捨てちゃ

いなさいな。必要なのは生きる覚悟だけ。

「その覚悟は素晴らしいと思うけど、貴方たちが逃げる時間を稼いだ人たちは。誰も死んでほしいなんて思っていないでしょう？ なら生き残ることだけ考えなさい。それに……、はつきり言うど、足手まとい。だからゆっくりここで、劇を鑑賞するつもりで眺めてなさいな。」

外壁から身を乗り出し、盗賊たちの視界に身をさらす。

「さあ、試合開始といこうか。」

さて、どう戦おうか。観客はアルの故郷の村人さんたち。やるからには派手で、一生忘れられない演劇にしよう。子供もいるし、あんなりトラウマにならないように血飛沫少なめで、ルーンを使って煌びやかに、踊る様に魅せるとしよう。あと私のストレス発散。

「やあ、盗賊のみんな。ご機嫌如何かな？ 一応聞いておくが……、何の用かね。」

私が出てきたことで一斉に足を止めた奴らに向かってそう問いかける。もちろん、一步一步ゆっくりと距離を詰めながら。外套は羽

織っているが、ミスリルの鎧は完全に露出させているし、フードも降ろしている。明らかに私が村人でも冒険者でもなく、村人たちと同じように騎士にでも見えているのだろう。

ま、村人しかいないと思っていたところに急に騎士が出てきたら誰でもびっくりするよねえ。おそらくこの集団のリーダーなのだろう。周りよりも比較的良い装備を身に着けたつるぴかりんの男が声を張り上げる。

「はん！ そんなの決まってるだろうが！ 後ろにいる奴らを捕まえて売りさばくのよ、老人どもは金に成んねえから捨てるしかねえが子供は売れるからよう。いい小遣い稼ぎよ。」

「へえ……、それで？ 本音は？」

「へッ！ 騎士様は頭がよろしいようで。……ウチの頭が誰一人残すなっご命令でね。足が付く前に全部焼き払えってさ！ まあそれにしても俺ア運が良いねえ……。」

そう言いながら、懐から何かを取りだすハゲ。何？ 育毛剤？

「お貴族様なら見たことあるだろう？ 魔封じの魔道具。かなり高い上国が買い上げるせいで市場に流れない貴重もんだが……、お前らみたいな魔法に頼り切った奴を殺すにはちようどいい品だ。ああ、思い出すと笑えて来るねえ！ その村の領主の、あいつが魔法を使えず慌てているところ。」

楽しそうに笑いながら、魔道具のスイッチらしきものを入れる彼。その瞬間、魔道具の機構の一つであろう真っ赤な目が光り始め、私の体内で流れていたはずの魔力が止まる。あらら、これは困った。ルーンは空気中に流れる魔力を使ってもできるけど、まだ私はそこまで習熟してないし……。見た目がいいから使おうと思ってたのに。

「……へえ。」

「俺は運が良いからよ、あの時たまたま領主サマの息子を捕まえたのさ。あゝ、あの顔は忘れられそうにないぜ、助けるわけがないのに分から武器を捨てて、俺らに袋叩きにされて。目の前で息子を殺してやった時はもう、笑いが止まらなかつたぜ！ 反抗しようにも何にもできなあゝい！」

なるほど。魔封じね。確か周囲の人間が魔法使えなくなる奴。クソ強い魔物の目玉かなんかを使って、その危険性から国が独占してた奴だっけ？ ……まあそれを使うのは別にいいんだけど、なんでお前みたいな盗賊如きが持つてんの？

「つまり、その哀れな男爵様と同じように私も殺すつもり、つてわけ？」

「おうおう！ 解ってんじゃねえか。だが俺らもそこまで悪くねえ、どうだ？ そのお綺麗な体で俺たちの相手をしてくれるつて言うなら……、殺さないでやるぜ？」

そんなことを言いながら下種な笑みを浮かべるハゲちゃびん。周りにいる盗賊たちも同様に笑っているし、救えない廃棄物のようだ。まあ確かに魔力を封じられれば貴族は基本何もできなくなる。身体強化とかも魔力でやってる人多いみたいだからね。単純な力量で勝負しようとしても、”圧倒的な実力差”がない限りは数の暴力で押しされて終わりだ。

うゝん、でも。せつかく派手にやろうとしたのに、ルーンを潰されるのは痛いなあ。それにその魔道具、明らかにいるであろう彼らの後ろを調べるためにもヘンリエツタ様に届けた方がいいだろうし。初撃はいつも通りやるか。

(では、”お手を拝借。)

〈加速〉十倍速。

「あ、ごめん。違うこと考えて聞き逃したんだけどさ？　なんて？」

私の手に握られているのは、先ほどまで魔道具が握られていた彼の腕。根元から、バツサリだ。ちよつと体が痛むけど、必要経費必要経費。いや、やつぱまだ七倍が限度かなあ。成長してはいるんだけどね？

「は？　　ツグウウウウ!!!」

ワテンポ遅れて、彼の右腕から血が噴き出しそれと同時に苦悶の声上がる。うんうん、文字通り腕を借りちやっただコレくつつくかな？　まあくつつかなくてもいいんだけど。情報吐かせる用に何人か残すけど、それも含めて最終的に殺すんだから。

「つと、忘れないうちに。」

彼から奪い取った魔道具の電源を切り、後方にいる村人たちの方へと投げ渡す。……電源じゃないな。まあいや、スイッチってことで。とりあえずさっきまで感じていた体内の魔力の違和感は消えたとし、これで自由にルーンが使えるんじゃない？　？（イサ）……、うん。使えるね。よしよし、これでいいショーが出来そうだ。

「テ、テメエら！ 距離だ！ 距離を詰めろ！ 数で押せえ！」
「うんうん、元気なのはいいことだね。じゃ、ちよつとは楽しませて、
よ！」

37：初公演

〈加速〉五倍速

劍神祭までの常用速度、五倍速の世界に入り込む。私以外のすべてがゆっくりと動くようになり、こちらに向かってくる盗賊ちゃんたちがふざけているのかと思うほどにスローモーションに。普段の試合であればこのまま切り殺したり、速度を落として見えるようにしながら戦うんだけど、今日はちよつと違うことをやってみよう。

というわけで、さつき使った？（イサ）、氷のルーンで生成した氷柱を盗賊に向かって射出してみる。

（地味に初実戦使用……、あれ？）

手の平の少し上に生成されていた氷柱に魔力を込め、敵と接触時に起爆するように打ち出してみたのだが……。こっちもゆっくりだ。なるほどなるほど、私の魔法と言えども速度は変わらない。相変わらず私の『加速』くんは、私にしか効果を及ぼしてくれないようだ。

（うんうん、となると剣に纏わせる感じの方が映えるな。……あ、〈加速〉解除。）

ルーン魔術の威力を確かめるために、加速を解く。世界の鈍化が収まった瞬間、矢のように飛び出した氷柱は勢いよく盗賊のひとり、その腹部に突き刺さる。彼の体が骨の砕ける音と同時にくの字にひん曲がった時、氷に施された術式が作動。彼を中心に温度が消失し、まっしろな氷像の完成だ。これこそ現代美術、浅草に有るあの金色の物体と同じくらいイカしてるよね。

「お、ちゃんと起動した。よしよし、つとっ。」

仲間の一人がちょうどお亡くなりになったわけだが、盗賊たちは気にもしない。まあお前らなんて基本金になるから集まってるだけで、仲間意識なんてないだろうからねえ。そんなわけで先頭にいた盗賊が一人、私のすぐそばまで剣を片手に切り掛かってきたのだが……。その脳天に、小さな黒い鉄球がめり込む。アルの支援射撃だ。

(わ、いたそ。というか殺意高いなあ……。)

前にも言ったが、アルの強みは『眼』。単純な視力のみならず、動体視力や空間把握能力など、眼に関連する能力が極端に高い。遠距離戦は勿論、近距離でも活用できる強力な授かりものだ。しかも自身の『素質』を理解してからは、最初に会った時よりも格段に能力の向上が見られる。いつしか私の全速力も目で追えるようになるかもね……。ま、単に目がいいだけならこんな綺麗なヘッドショットは決められないものだが、ラクラクからここまで道中。機会があれば積極的にパチンコを弾いていた彼女だ、距離がそこまでないこともあり、これぐらいいけないってコトだろう。

アルの射線に入らぬように、軽く上空へと跳び上がってみれば。その瞬間後方からまた鉄球が飛来し、哀れな死体がまた一つ出来上がる。正直、これを喜んでいいのかはわからないが、そういった倫理系のお話は後回し。

さてさて、あんまりぼーっとしているとアルに全部持っていかれそうだし、前座はもう十分だ。観客たちの熱気を上げていこう。

「？(ハガラズ)、？(ベルカナ)」

天災のルーンで雷球を生成し、そこに魔力を注ぎ込むことで剣の形へと成形する。そこに成長のルーンを付け足すことで、形を固定。正確には電力の減衰を防止するため、大きくなり続ける要素を組み込む。……うん、安定した。即興魔法剣ってやつだね！ ちよつとパ

チツとするが、柄の部分の出力を抑えれば十分に握れる。

最初は？（カノ）、火のルーンを使おうと思っただが流石に村を焼かれた人たちの目の前で火を使うのは憚られる。『村に火をつけたお前らに火をつけてやるよ！』ってしたかったのだが、村人たちの心を守る方が重要だ。ということでも天罰、天災の連想から雷。んで私の扱いやすい剣ってわけ。神の雷みたいな青色じゃなくて黄色だけど、迫力百点見栄え千点だ。

ということ。

「ちっちゃい子もいるからね、退屈する前に終わらせましょう！」

〈加速〉二倍速

解りやすいように速度を落とし、さらに剣が残す光のラインが解りやすいように大きく振りながら一番近くにいた盗賊の頭にそのまま魔法剣を叩き込む。私自身の練度が低いせいで『雷で焼き切り、真つ二つにする』ということはできないが、威力は十分な致死量。剣が通った場所だけ真っ黒になった盗賊の完成。うーん、いいストライプ。しかも成長のルーンを使ったおかげで魔法剣自体の威力も落ちてない、いいね！

「ほい、盗賊のビリビリ焼きお待ち！」

その死体の腹部を思いっきり蹴っ飛ばし、後方にいた盗賊二人の体にぶち当てる。爆発四散したり、腹部だけ蹴り抜かないように注意したが、籠めた力は十分だったよう盗賊三人が空中に浮く。そこに魔法剣を投げ込めばあら不思議。死体と手に持った金属の武器を通じ

て電気が流れ、魔法剣に残っていた魔力が雷に変化し爆発。真っ黒こげの、『盗賊のビリビリ焼きく季節のテリーヌを添えてく』の完成だ。テリーヌがないって？ そりゃ申し訳ない。あとで焼却処分するか許してちよ。……ん？ 後ろから殺気。

「死ねええ!!!」

「あら品がない。」

背後から飛び掛かってきた盗賊くんの攻撃を軽く避ける。刀身が変にヌメっているのを見るに、毒付きだろうか。うくん、この子奇襲ってどうやってしたらいいのか解ってないかんじ？ 奇襲つてのは気配も殺意も消して、最後まで音を出さずに攻撃すれば成功するんだよ？ 確かに声を出した方が振りは速くなるし、相手をびっくりさせる効果もあるから一概に悪いとは言えないんだけどさ。そのレベルの剣術で私の前に立つの恥ずかしくないの？

「そんな悪い子にはマナーの授業だ、教育ツ！」

回避しながら、膝を彼の腹部へ。そのまま叩き込んで、内臓のみを破裂させる。瞬間彼の口から吐き出される大量の血。あら汚い。口から吐くのは辞世の匂ぐらいにしておきなさいな。……あ、ヤベ。子供もいるから血を出させる攻撃はやめとこうと思ったのにやっちゃった。

「……まあいいか。じゃあ次はちよつとコメディ寄りに見ましよう。？ (ライド)」

死にかけの盗賊を地面に叩きつけて死体にしながら、導きのルーンを刻む。その中に含まれる風の意味を強く引き出し、世界へと反映させるのだ。ちよつと体内にある魔力を多めに使わせて……。風の始まりは地面、残りの盗賊たち10名ほどの足元から強風を吹かせ、

空へ。地面という踏ん張りが利かなくなった哀れな実験台たちを空中で一つに纏める。

「じゃあ纏まっているうちに、？（アンスズ）！ ……あ、失敗した。なら普通に？（ウルズ）。」

力のルーンを刻み、空中に浮かんでいた盗賊たちを”一つ”に纏める。そう。一点に向かって私の魔力が続く限り、もしくは魔力を流すのを止めない限り進んでいく術式だ。やっぱゴミは一つに纏めておいたほうが掃除楽だしねえ。あ、血が出ちやうし何か膜でも作って隠しとくか。？（ソウエイル）、太陽のルーンから光という一部分だけを引き出し塊を覆う様に光らせて置く。 ……ん？ これもしかして深夜アニメによくある謎の白い光か？ なるほど、アレはこういう風で作ってたんですねえ。

「あとは…、ん？」

残りの数を確認しようとして、周囲を確認してみれば、アルが私を狙ってパチンコの弦を引いている。 ……ああ、なるほど。そういうことね。やってみよう。

彼女に合図を送る様に、軽くウインクをする。その瞬間彼女の手が弦から離れ、私に向かって鉄球が射出される。さすがにアルほど目がいいわけではないが…、普通に加速を使わずとも目で追える速度だ。明らかに前世の人間のスペックではないが、まあ異世界だしということで。

そんな飛んでくる鉄球に合わせるように、レイピアではなく長剣を抜き、その鉄球を切る。叩き割るのではなく、軌道を変えぬように切断。

「ガッ」「グッ」

振り抜いた瞬間、背後から苦悶の聲が上がる。……うん、成功したけどちよつとずれたな。アルは脳天を狙ったのだろうけど私がミスったせいでちよつと顔の真ん中、鼻の位置に弾がぶつかった。私もまだまだだなあ、精進しないと。

え？ 何したかつて？ アレよアレ。銃弾真つ二つにして、その半分になった弾で背後にいる敵を殺す奴。銃弾一つで敵が二人も倒せるお得戦法。私もそれをしようとしたんだけど……、ちよつとまだ技量不足みたい。とりあえずまだ死んでないし、？（ラグズ）。水球を二つ生成して、彼らの顔に貼り付けておく。これで時間が経てば死ぬはずだ。

「……ちよつと魔力使い過ぎちやつたかも。残りは……、普通にやるか。」

さっきの風のルーンの件で、体内の魔力をつぎ込み過ぎたみたい。限界はあるけど使えば使うほど増えるらしいし、回復も休息とご飯で出来るけど使い過ぎるとめっちゃ疲れる、つてのは覚えておかないといけないね。魔力はスタミナと一緒に！ そんなことを考えながら、ふらついているところを隙とみて切り掛かってきた盗賊をレイピアで刺し殺す。

もうそんなに数はいないし、ちよつどいい感じに例のハゲが生き残ってる。それ以外は全部もう処理しちゃおうか。あ、そうだ。ハゲに情報吐かせるのなら切った腕のとこ焼いておかないと出血多量で死んじゃうじゃん。

「？（カノ）」

「ギヤアアアアアア！」

あ、焼き過ぎた。まあいつか死んでないし。というわけで余りは蹂躪しまーす！

「劇の終幕は静かに、綺麗に終わらせるといたしましょう。」

〈加速〉七倍速

解除。

全てを刺し殺し、加速を解いた瞬間にあのハゲ以外の盗賊に等しく死が訪れる。

最後に、一礼。

「お目汚し、失礼いたしました。」



私が一礼した瞬間に、子供たちからの歓声上がり、少し遅れて大人たちの声も聞こえてくる。劇ならこのまま幕が下りてくるのを待つだけだが、こんな野外にそんなものが下りてくるわけがない。パツと頭を上げて、そのまま村の方に向かってゆっくりと歩く。っと、興奮した子供たちがこっちの方に走ってきちゃったな。

「？（ラグズ）。」

返り血は受けていないが、何かしら汚れているだろうと思い、私がちよほど収まるぐらいの水球を目の前に生成し、内部で水流を引き起こす。この中を通り抜けることで簡単な洗浄をするってことだね。おかげさまでちよつと魔力がギリギリ、徹夜した時みたいな疲労が体を包み込んでしまったが……、魔力がなくても戦う方法は十二分にある。別にこれぐらいいいだろう。ちよつと休んでご飯でも食べたら十分回復するだろうし。

「騎士さま！ すごい！ すごかった！」

「ピカツてなって、ドカンってなって！ すごかった！」

「あはー、楽しんでもらったのなら良かったよ。」

アルより小さい子たちの視界に背後に転がる骸たちが入らぬように立ち回りながら、子供たちと一緒に村の中へと入っていく。アルが従者としての軽い礼をするのに会釈で返ししながら、大人たちの表情を窺う。……あく、明らかに恐怖が見えるね。まあそりやそうか。剣闘士のころは観客たちに”剣闘士”っていう絶対的な安全が保障されてたけど、今は違う。騎士だと勘違いされてる上に、圧倒的な力を見せつけちゃったから怖がられちゃうのも致し方ないね。

ちよいとばかし悲しいところもあるが、まだ仕事は残っている。やることをやらないと。

「さて、とりあえず襲撃は撃退したわけどあいづらがなんで戻ってきたのとか、残りの盗賊がどこにいるかとか解らないことが多い。リーダーみたいな奴を生かしてるから尋問して吐かせたいんだけど……、どっかの空き家貸してくんない？」

「かしこまりました。気絶しているようですし……、私めが縛って運んでおきますじゃ。騎士様はそれまでお休みください。」

私の問いに、さっきのお爺ちゃんが答えてくれる。生き残った人たちの代表で、従軍経験があるせいか反応が早い。と言っても気絶させたとはいえ、あのハゲがいつ起きるかは誰も解らない。逃げられるのも困るし、私も傍にいた方が良いだろう。

「そう？ でも危ないから一応ついてくよ。あ、あと。悪いんだけどあそこに転がっている奴らの処理任せてもいいかな？ ハゲ以外、息の根は止めてるからこっちは危なくないよ。」

「かしこまりました。では皆！ 先ほどまでの作業を止めて盗賊たちの処理を行ってくれ！ 使えそうな武器や防具は資材置き場に集めておくのじゃ！ それとレイン、子供たちの面倒を中で見てもらえるか？」

「……あ。わ、解りました。」

ずっとアルの方を見つめて、何かに思い悩んでいる様な顔をしていた彼女にお爺ちゃんがそう問いかける。少し反応が遅れた彼女だったが、子供達でもできる作業を進めておくといい、私の周りではしやぎまわっていた子たちを連れて村の中央へと入っていった。それを眺めていると、アルがこちらに近づいて来る。

「お疲れさまでした、ビクトリア様。」

「うん、ありがとう。アルも頑張ったね。」

「ありがとうございます。……それで、お願い事があるのですが。」

他の人間の目があるせいか、”従者”としての振る舞いを崩さないアル。そんな彼女が先ほど投げ渡した魔道具をこちらに手渡ししながら、そう問いかけてくる。その振舞いに少し、いやかなり寂しさを感じるが仕方ない。あ、でも最初に。悪いけど尋問には参加させないよ？ 口を割らすために普段はしないようなこともすると思うから。

「解ってます……。ただ、姉たちのことを……。聞き出してもらえま

せんか？」

彼女の姉と妹、この二人は死体が残っていないなかったということから連れ去られたのではないかと考えられている。この二人以外にも何人かが消息不明らしいし、まだ生きていて売られる前なら早めに助け出した方がいい。前世の世界じゃどうだったかは覚えてないが、この世界ではそれが盗品だろうが何だろうが、誰かに販売された時点でその所有権は買った人間に移る。貴族などが関わればまた話は別だが、この国の法や機関はそこまで民に優しくはない。

ま、背後関係を追うのに限界があるってのもあるだろうけど。まあとにかく人間だろうが、何だろうが売られた瞬間におしまいつてわけだ。奴隷商にでも売られる前に早く救出したい気持ちは解る。

「聞くつもりだったけど……、私たちが助けに行くかは話が別だよ。明らかに盗賊が手に入れることができないモノや、この村を襲った時の人数を考えるに何か”後ろ”がいる。ただの盗賊だけならいいんだけど、ね？」

もしその後ろが貴族で、そいつらが証拠隠滅のために私たちに襲い掛かって来た場合、非常に対応に困る。例の『異形』レベルの貴族が相手なら確実にアルを守れるとは言い切れないし、中途半端な力を持っていた場合無傷での無力化ってのが難しくなってくる。私一人なら全てひき殺して高飛び、ってのもできるんだがアルがいる時点でそんなのは無理。

ヘンリエツタ様という強大な後ろ盾があるとはいえ、彼女でも庇い切れない場合や、政治的判断で切り捨てられる可能性も考えると逃げるのが一番だ。今生き残っている村人たちを引き連れて撤退、帝都辺りで適当な大きな土地を借りてそこに住んでもらうってのが一番簡単な解決策だ。アルの姉妹や捕まった人たちを見捨てて、というかなり胸糞悪い終わり方になってしまうが。

「それでも、お願いします。」

「……りょーかい。」

そう言いながら、捕虜を縛る為の縄を持ってきたお爺ちゃんの方に
向けて歩き始める。

別に、今まで積み上げてきたものを全て投げ打つぐらいなんとも
なる。今まで積み上げてきた、ってことは全部壊されてももう一度積
み上げることができる、ってことだからだ。どんなことをするとして
も、後味が悪くならないように。いつも通り楽しく行きましょう。

ま、こんな悪いことを画策しちゃったイケナイ子には……、地獄を
見てもらうことになるだろうけど♡

38：引きちぎっちゃった

気絶しているところを縛られた盗賊、それを引きずりながら運んでいくお爺ちゃんと師匠を見送る。

私が深く、従者としての礼をすればビクトリア様は軽く微笑みながら手を振ってくれる。どんどんと離れていく背中、でも私にとってその大きさは変わらない。その大きさをずっと頼りにさせてもらっているけど、時たま自身の小ささを強く実感してしまう時もある。

「……。」

私ができる事なんて知れている。正直さっきの戦闘なんて私の射撃なんかいらなかったし、そもそも帝都での生活すらそうだ。私ができる手伝いなんか誰でもできる。師匠が堅苦しい態度が苦手、つてだけで私も馴れ馴れしく会話をさせてもらっているが、本当は村のみんなに見せているように従者として、いや奴隷として振舞わないといけないぐらいの関係。……まあ師匠にそんなこと言ったら泣かれるだろうから言わないし、やらないけど。

今自分が持っているもの、着ているもの。それにこの命だって師匠が買ったものだ。それなのに私は自由にさせてもらっている、だからこそ私はすべてをかけてこの恩を返さないといけないし、これ以上望むなんておこがましいにもほどがあつた。だけど……。

私は、頼んでしまった。

あの人は私にああ言ったが、多分何をしてでも聞きだしてくれらさう。ビクトリア様、いや”ジナ”という人はそういう方だ。とんでもなく強くて、とんでもなくお人好し。少しおかしいところもあるが、私を知る限りあんな人はそうそういないと思う。師匠は自分の事をよく『人殺しの人でなし』というが、本当にそうであればそんなことは言わない。現実というものを理解しながら、自身が殺した人のことをずっと背負い続ける人。

普通は、忘れる。忘れていくものだと言った。剣闘士だった頃、師匠が何かとよく狙われていたことからよく一緒にいたが、常に一緒だったわけではない。同じオーナーに買われた剣闘士の人たちに話を聞く機会は、何回かあった。剣闘士だって人間で、人を殺せばそれなりに精神が参ってしまう。それを毎日重ねれば心は病んでいき、最終的に壊れてしまう。だからこそ戦う人たちはそのダメージを最低限にするために、忘れていく。

何かしらの区切りをつけ、忘れる。最初からなかったことにする、礼を尽くすことで自身を納得させる。師匠の中で聖人扱いされているタクパルさんも、その一人だった。区切りを付けず、ずっと背に背負い続けているのは師匠だけ。このあたりの、私が知る価値観とは違う考え方を持つ人。

ゆっくりと、自分の手を見つめる。何も無い、普通の手。瞬きしても、そこには何も無い。

確かに、精神的な疲れはある。こんないつもは考えないようなことを考えているのがその理由だ。だけど、最初から”敵”だと、アレは私の父を、故郷の人々を殺した張本人だと。そう、理解していたからか。心は比較的落ち着いている。燃えた私たちの家を見た時に溢れ出しそうになっていたあの黒い感情は、未だ燻っているが、おとなしくなってしまうている。

何回か、師匠が零した言葉。『背に骸が積み上がっていく感覚』、『瞬きすれば血塗られた手が見える』。普段の師の口からは発しないようなその言葉、弱々しい声は鮮明に憶えている。アレが師匠の抱えるもので、私にはどうしようもできないもの。師匠は私が同じ状態になることを危惧し、知らなくてもいい”殺し”を経験させぬようにしてくれた。

(でも……。)

私はその思いを怒りと憎しみに駆られ踏みにじってしまったし、遠距離からとは言えその命を奪つても骸が重なることも、手が血塗られることもなかった。確かに直接その命を奪つたわけではない、この手で命を奪う感覚を感じたわけではない。

師匠の隣で、ずっとあの試合を見ていた。当時の私は、いずれ自身もあの場所に立たなければいけないと考えていた。だからこそ、最初は死の恐怖に耐え切れず戻してしまうこともあったが、ずっと見ていた。師がどうやって敵を殺すのか、人はどうやれば死ぬのか、そして人の命がどれだけ軽いのか。

師匠みたいにならずと肌で感じていたわけではない、けれど私も。少しは、理解してしまっていたようだ。

「私は……。」

何もない、何もないはずがない手を。弦を引き絞り、放つたはずの手を開いたり閉じたりしながら、自身の考えを纏めていく。

まだ、私の心の奥底には黒い感情が蠢いている。父が何故殺されなければならなかったのか、何故姉や妹が連れ去られなければならなかったのか、何故私の故郷は焼かれなければいけなかったのか。どうしようもない、行き場を失った感情は真っ黒に染まり、怒りや恨みに変っていく。

きつと、目の前に奴らがいれば。師匠がいなければ何も考えずに捌け口にしたと思う。私が勝てるか、負けるか、そんなこと御構い無しに剣を抜いてしまっていた。師匠に完封されてしまったせいだろうか。魔力がどれほどかは解らないが、多分囲まれればおしまいだろう。魔力の練り方も解らない私にお似合いの結末が待っているはずだ。

……姉と妹。ルモ姉さんは私より大きくて、もうそろそろお相手を見つけていてもおかしくない年だった。妹も、ヘスも私が売られた時ぐらいの大きさになっているだろう。さすがに妹は大丈夫だと思いたい……、姉さんは……。

「考えたくもない。」

盗賊に捕まった、連れ去られた女の行く末なんか私でもわかる。魔物の孕み袋にされるのと同じくらい酷い。売られるなんてまだいい方で、散々遊ばれた後に邪魔になったから殺される。最悪だけど、ありふれた話でもある。だからこそ力がないなりに私たち、村人たちは防壁を作ったり、貴族の庇護を受ける。

けれど、今は違う。襲撃からすでに5日ほど経っていて、襲われた後に生き残った人が領主に助けを求めに行ったらしいけど、まだその人は帰ってきていない。つまりもうこの世にはいないか、領主様の方でも何か起きているということになる。師匠に連れていかれたあの盗賊の話が正しければ、頼みの綱であった領主様すらもうこの世にはいない。

「私たち……。いや、この村の人たちが生き残る方法は二つ、逃げるか、懇願するか。」

ラクラに戻る私たちに付いて行き、受け入れてくれるかどうかすら解らないあの町で生きていく。もしくは師匠に懇願して、全ての元凶を取り除いてもらうか。逃げる方は別にどこでもいいのもっと選択肢は増えるだろうが、大きく分ければこの二つだ。

おそらく、いや確実にだろうけど。村の人たちは後者を望んでいる。

そして、私もその一人ではある。

師匠と共に戦えば、師匠が望んでいなかったとしても私に順番が回ってくるかもしれない。自身の手で、父を殺した盗賊に罰を与えられるかもしれない。師匠に止められても、あの盗賊たちが全て師に片付けられるところを傍で見れば、この心に巣食う感情も消えてくれるかもしれない。

けれどこれは、師匠が望んでいないことだつて理解している。師匠は私に人殺しなんかさせたくなかつたし、危険がある場所にも連れて行きたくない。師匠の傍が一番安全だから連れて行つてもらつていいだけで、それは師の本意ではない。

「……何か、手伝えること。」

思考を纏めるはずだつたのに、どんどん考えが深くなつていつてしまふ。ずっとこの場所に突つ立っているわけにはいかないし、何か手を動かして気を紛らわせることにしよう。そう考えながらあたりを見渡し、死体の処理をしていた人たちの方を見るともう大方の仕事は終わつているようだつた。なら、母の方に行こう。何か話せば、少しは気分が良くなるかもしれないし。



「ママ。」

「……アル、お仕事の方は大丈夫なの？」

「うん。」

まだ幼い子供たちの面倒を見ながら遺品の整理をしていた母に声をかける。焼けてしまった家の跡地でもまだ使えそうなものが残っていることもある。それを子供たちを探してもらいながら、使えそうなものはまとめておく、そんな作業を彼女はしていた。

母の手伝いをしようとするが、手で止められる。

「アル、貴方が村を出た後のこと。教えてくれる？」

「……うん。」

少し迷った結果、全部本当のことを話すことにした。師匠みたいに即興で話を作るほど私に学はない、それにいずれバレる事だろうし師匠も種明かしをできるだけ早くやりたいような雰囲気を出していた。それに、私が経験したことをそのまま母に話したかった。小さな出来事を省きながら、母に一つ一つ話していく。

村を出た後はラクララに行ったこと。

その後帝都まで運ばれて、そこで師匠と出会ったこと。

はじめて会った時は私も騎士様なのかと思ってたけど、剣闘士だったこと。

そこから剣闘士で、多くのファンを抱えるビクトリア様の従者として振舞うようになったこと。

師匠に剣を教えてもらいながら、演技の指導も受けたこと。

師匠の仕事からいろんな貴族様と会うことになったこと。

その中のひとりであるヘンリエッタ様のこと。

そして、剣神祭のことと、そこから市民になったこと。

色々大変だったけど、どれも大切な思い出。ママやお爺ちゃん、その他の人たちが騎士様って勘違いしちゃって、それを否定しても自分を隠してるって思われてるからそのまま放置してしまっていること、騙すような形になってしまったことを謝罪して、話を締めくくる。

「そう、だったのね。」

「騙すみたいになっちゃってごめん。」

「ううん、いいの。あの方が私たちを守ってくれたのは事実だし、アルの話の聞いている限り多分騎士様よりも……、すごい方よね？」

「うん、ほんとに。」

師匠は爵位、騎士爵などは持っていないただの市民ではあるが、同時にヘンリエッタ様の食客に近い立場である。正直ただの騎士様よ

りもヤバい存在だ。単純な戦闘能力、魔法無しの近接戦で頂点に立つた人だし、最近何故か適性がないと言われていた魔術も使い始めている。あの人の強さがどれほどのものなのかはわからないが、絶対上から数えた方が早い。

「……良い方に、お世話になってるのね。」

「ちよつと変なところもあるけどね。」

さつきよりもずっと気分が楽になっていることを自覚しながら、話を続ける。私でも知っている様な常識を知らなかったりするし、急に私を抱えて空の旅とか始めちゃうし、未だにあの膨れ上がったお腹が一瞬にしてスラつとする理由は理解できないし。でも私の知らないこととか、生き抜く方法とかはちゃんと教えてくれるし、何より私のことを考えてくれている。

剣闘士から市民になって、剣闘士の時の師匠は何か無理をしていたんだなつてことをようやく理解した。市民になってからはずっと笑顔の回数が増えたとし、ずっと何かを楽しんでいるように見える。それを見て、私も楽しい気分になってしまいうほどに。

「私も、お父さんも、ずっと心配していたの。……後悔も、たくさん。せめて、せめていい人を買われてくれればと祈ることしかできなかった。」

「気にしなくていいよ。……私は、帰ってこれたし。」

「……そうね。」

私が奴隷にならなければこの家は終わっていた、売られる前に父からも母からも、姉妹たちからも言葉を貰った。だから、その選択に恨みなんかはない。……だけど、あれが今生の別れになるなんて受け入れられるはずがない。奴隷のまま一生を終えるって思ってた、だからあれが最後だと思ってた。でも、私より先に父が死ぬなんて、会えると思ってたのに。声が聞こえると思ってたのに。

「アル、お願いだから……、ッ。」

母が何かを私に言おうとしたとき、全身にとてつもなく重い物が押し掛かるような感覚に陥る。これは……、殺気。師匠の、ガチの奴だ。この場所からかなり離れているはずなのに、ここまで届いている。

生物が生きること諦める圧力、私はまだ闘技場や解放後に何度か軽いものを受けているおかげで耐性があつたが、母はそうではない。全身から力が抜け、倒れそうになってしまう。

「ママー……」

何とか支えることはできたが、母の目は明らかに恐慌状態に陥っていて、口からは声にならない悲鳴のようなものが漏れ出ている。師匠、何があつたのかは知らないですけどちよつとガチで怒り過ぎです。比較的慣れている私でも正直足が震えている、師匠の殺気のせいで全滅という笑えない状況を回避するために文句を言いに行こうと思つたが、師匠も自身がしたことによつやく気が付いてくれたのか、ふつと殺気が消えてなくなる。さつきまでと同じ、何もなかつたように。

「大丈夫、大丈夫。さつきのは師匠で、敵じゃありませんから。」

解放された安心からか、膝を地面におろしながら何とか息を整える母。何とか落ち着かせようと背をさするけど、ちよつと時間が掛かりそう。

「な、何。今は……。」

「多分ですけど、師匠の殺気というか、プレッシャーみたいなものだと思います。」

「……本当にあの方は人間？」

「……………どうなんだろう？」

正直、そのところはよくわかりませんがこの世にはもつとヤバい人間がいることも知っているので多分人間です。師匠に頭部どころか首の根っこまで全部吹き飛ばされたはずなのに、普通にヘンリエツタ様のところでお抱え兵士してる人もいるので……。世界は広いなあ、と。いやまあ確かにママのいう通り、あの人の隣が世界一安全ですよ、うん。強くなるために色々教えてくれますし、最高の師匠です。……まあおかしなところも多いですけど、師匠の名誉のために口を噤みます。

「……………アル。」

「はい。」

ようやく落ち着いた母が、さっきまで紡ごうとしていた言葉をもう一度私に伝えようとする。

「貴方のことを、売ってしまった私に親として振舞える資格なんかない。でも私は、貴方の無事を、ずっと祈ってる。私たちのことを覚えているのも、忘れて自分の人生を生きるのも、全部自由よ。だけど、もし貴方が許してくれるのなら。」

「何があったとしても。無事なあなたの顔をもう一度見せに来て、アル。」

「……………うん、ママ。」



「ふいふ、終わり終わりこの地は尾張。つと、付き合わせて悪いねお爺さん。」

「オワリ?...いえいえ、構いませんとも。ただ先ほどの殺気のような行為はやめて頂けるとありがたいです。」

「それはマジでゴメン。」

血で汚れちゃった手を水で洗いながら、付き合ってくれたお爺ちやんと話す。正直汚いので石鹸とか使いたいが、コピアの背に乗ったままだし色々苦勞している村人たちの目の前で贅沢品を使うのは気が引ける。水洗いと布で拭く程度で我慢しておこう。

いや、にしても初めての尋問。まあ聞きたいことは聞けたし案外うまく行つたんじゃない? しかも教材が『どうせ殺すからどれだけ壊してもいい』というのもあつてとつても良かった。見た目とかはグロかったけど、今更そういうのでワーキヤーするような人間でもないしねえ。

「あ、お爺さん。火種いる?」

そう言いながら火のルーンを刻み、指先に小さな炎を生成する。死体の処理とかに必要なだからね、わざわざ火を起こすのも重労働でしょ?

「ありがとうございますですじゃ。」

彼に“盗賊だったもの”の処理を任せ、一人村の中を歩く。昼も十分に過ぎたところで、そろそろ夕方に成りかけているところ。村自体が綺麗に残っていれば、この風景も楽しめたんだろうけど.....

さて、尋問の詳細だが最初はちよつと難航した。水で叩き起こしたまでは良かったんだけど、私もお爺ちゃんも尋問なんかしたことがない。とりあえず痛めつけて、その苦痛から解放されるために情報を吐く、つていうプロセスは知ってたからとりあえず色々やってみただけどね？ まあ何も吐かない。

『どうせ殺されるんなら話すわけないだろうが。』

つて感じでねえ。普通の盗賊、正確に言えば盗賊に身を落とすような人間がそんな思考になるとは思えなかったんだけど、目の前にいた奴はそうだった。彼らの頭がよっぽどカリスマに溢れてたか、人質とかそういうのがあるのかと思つたけど、どうやら違うらしい。私としては彼らを操る裏の存在を聞きたかつたんだけど、まあ押しても引いても何も出てこない。

埒が明かないつてことで、話題を変えたのは良かったんだけど……。聞いた内容が悪かつた。

アルから頼まれていたこともあつたし、連れ去られた女性たちはどこにやつたのかつていうのを聞いたの。

……まあ聞かない方が良かったよね、ほんと。まあ簡単に言うて慰みものにされて、ある程度使つたら奴隷として売るつて感じだった。いや、彼が本当に楽しそうに詳細を語ってくれるもんだからさ。ついブチギレちゃつたよ、彼は人を怒らせる才能があつたわけだ。まあこつちはTS勢だし、前世の経験というか出回つてる特殊性癖のおかげで？ まあ耐性はあつたが知人の姉妹がその目にあつているとなると話は変わってくる。

ついついガチの殺気を解放しちゃつて、奴の腕を引きちぎつちやつた。てへぺろ☆

いや、すごくグロテスクだったよね。握つてたところ完全につぶれ

てたし、人間って千切れるときあんな音なるんだあ、って思っちゃった。血とか悲鳴とかすごかったもん。

ま、結果的に今焼かれている子は完全にそれでビビっちゃって、聞いてないことも全部吐いてくれた。もう早く楽に殺してくれ、って懇願しながら。私もキレてはいたけど、まだ冷静な部分もあつたおかげか、話の軌道修正をしながらなんとか聞きたいことを聞き終えることができた。ちよつと色々失敗したことはあつたが……、結果は出たので最終的に大成功、ってことで。

「敵の戦力と、本拠地にしてる洞窟。あとかなり金払いがいいバックに、そのバックから派遣されてきたお頭、ね。」

この村を襲ってきたのと同じ程度の奴が後300程度、それよりちよつと強いのが10弱。ここから森を抜けて一日ぐらいの場所に魔物が使っていた洞窟があつて、そこを再利用している。……まあ数は多いがこれぐらいなら普通に処理可能なレベルだ。さすがに4桁はためらつただらうけどね。

んで、あの盗賊も詳細は知らなかったけど、こいつらにいるバック。武器や防具の支援に、食料の支援や捕まえた人間の販売までやってくれる後ろ盾。支援した分だけの見返りはちゃんともらつてるみたいで、お頭を通じて攻める場所やタイミング、伝令の潰し方などとまあ色々手を加えていらつしやるようだ。

「……攻めるとすればこちらの存在に気が付かれる前に。多分だけどそのお頭つてのを捕まえて吐かせれば全貌が見えるはず。」

手の上で魔道具、周囲の人間が持つ魔力を乱すことで魔法の使用を不可能にする魔道具を転がしながら、そんなことを考える。正直300の数を養えている時点で、バックの階級が貴族かかなりの大商人であることが見えてきた。魔道具はまだ、国の監視下でない工房で作ることは可能だし、闘技場に裏があつたように仕入れにも裏が存在する

ことは理解している。だからやろうと思えばある程度力のある商人でもできるのだが……。

「身分としては盗賊だろうけど、傭兵300を雇って何かしようとしていることには変わりがない。それができる経済力があるってことは、ね？」

ちよつとややこしいことにはなりそうだ。ヘンリエツタ様にまた頼み込むことになりそう。……ま、それでも無理だった時はその時に。

「よしッ！ いっちょやっ तरीますか！」

幸いと言っていいのかわからないが、まだこの村から連れていかれた人間は売られていないらしい。一度市場に流れてしまえば追えるものも追えなくなる。どっちにしろ、やるならば早い方がいい。後は……。

「あ、師匠！」

彼女を、どうするかってこと。……たぶん、連れていくことになってしまっただろうけどね。

アルの声を、ちゃんと聞いてからにしないと。

39…よーい！

「お母さん手伝ってたの？」

「あ、いえ。ちよつと話を聞いてもらってました。」

そう言いながら小さく手招きする彼女に耳を近づけると、『騎士の誤解についても説明しておきました』と彼女から教えられる。視線を軽くずらすと、アルの母が深く礼をしている。アルが内緒話のように話してる、ってことはお母さんにしか言っていないんだろうけど……、なんかまだ勘違いされてない？ ん、どしたのアル、ヘンリエツタ様？ ……ああ、そういうこと。

私個人には権力とかないんで、普通にしていただけとありがたいです。ヘンリエツタ様も悪い人じゃないですし、よっぽどな理由がなければあの人が力を使うことはありませんし、もし何か被害を受けてしまいそうなときは私が守りますから。

つと、そういういえばちゃんと自己紹介してませんでしたね。

「レインさん、でよかったですか？」

「はい。……アルのこと、本当にありがとうございます。ジナさんのおかげで娘はちゃんと生きていて、もう一度会わせて頂いた。この恩は絶対に忘れません。」

そう言いながら、もう一度深く礼をしてくれる彼女。あ、自分がいつも礼をしたりへこへこする立場なせいかな、誰かにしてもらうのは無茶苦茶気が引ける。まあまあお母さんそんな頭下げないで、私も勘違いだったとは言え身分偽ってましたし、そもアルなら私がいなくても生き残っていたと思いますよ。私だって何度も助けられていますし。

そう言いながら頭を上げるようにお願いする、お母さんからすればアルが私のことを助けている、っていうのがあまりピンと来ていないみたいだが本当だからね？ 恥ずかしくて言えないけど、私が心を壊

さずここにいるのは彼女のおかげだし、アルと出会わなければどっかで死んでただろうしねえ。

「それで師匠……。」

「ああ、うん。尋問ね、終わったよ。」

お母さんもいるし、この村で過ごしていたころのアルの様子でも聞こうかと思っただけど変に話を長引かせる様な形になってしまふ、か。二人が知りたいのはアルの姉妹が今どうなっているか、ということ。拷問の詳細や、裏に何かいることは伏せて情報の開示を行う。「まだ二人は”無事”ではあること」、「奴らの根城が比較的近くにあること」、「もし助けに行くのなら早い方が良いということ」この三点だ。

「しっ……。」

何か私に言おうとしたアルを手で押しとどめ、彼女の母の方へと姿勢を正す。アルが言いたい事、私に伝えたいことは解っている。だからこそ、母親に話を聞かないといけない。

一度アルを売ったとはいえ、やむを得ない理由だったしアルはそのことを恨んでいない。それにまだ少ししか話せていないが、彼女からはアルへの家族の愛が感じられる。決して、親の権利を手放したくて手放した人ではない。

彼女はそうは思っていないかもしれない。でも、私からすれば。アルの保護者は、この人だ。

「レインさん。貴方の考えを、お聞かせ願えますか？」

「……。」

少しだけ目を瞑り考え込んだ彼女は、しっかりとした意思を瞳に宿し、口を開く。

「……アルを奴隷として売ってしまった私が言えることではありません。ですが、私はアルに危険へ飛び込んでほしいとは思っていません。ずっと安全な場所で、健やかに育ってほしいと願っています。……そして、それ以上にあの子たち。アルの姉や妹も、同じように過ごしてほしいと願っています。」

親としての感情は、どちらにも比べることはできない。そんなことが伝わってくる。だけど、現実を見てしまえば、答えは変わってしまう。今この村には何も残っていない、まともな食べ物に成りそうなものはないし、身を守る為の武器や防壁もない。その上生きる意味であった麦畑もすべて燃やされている。素人目に見ても、この人たちがどれだけの時間生き残れるか解らない。今はまだ近くにある森の恵みで生き残れるかもしれないが、その先は真つ暗。

そんなところに、さらに人を増やす。しかも心に大きなダメージを負っていて、介護を必要とする人たちを連れて来てしまうのは、確実な負担だ。彼女の頭の中には、いろんな考えが浮かんでいるのだろう。だけど、最後に彼女が選んだのは、母としての声だった。

「ジナさん、私の娘たちを、助けては頂けませんか？ 先ほど助けていただいたのにさらに望むなど、どれだけ高望みなのかは理解していません。このまま、次に進むべきであることも。諦めないといけないってことは、理解しています。……ですが、私は母親です。そこに可能性があるのなら……、どうか！ どうか！」

もう一度、深く頭を下げる彼女。答えはもう、最初から決まっている。

彼女の肩を掴みながら頭を上げさせ、軽く微笑む。

「引き受けましょう。」

そして、彼女の視線から外れ、アルの方へと向いてもらう。彼女が

付いて行きたいと思っっていることは最初からわかっている。お母さんも、それが解っているのだろう。

「……アル、私が貴方に何か指図する資格はありません。だから、貴方がやりたいことを、したいことをジナさんに言っつて、自分で説得しなさい。……私はここで、貴方がもう一度会いに来てくれることを、待ってます。」

「はい。」

彼女が母に、力強い返事を返す。

私は私の価値観を変えるつもりはない、それが自身を証明する要素の一つだから。でも、自身の価値観を誰かに押し付けるのは間違っている。アルはまだ幼いけど、物事の判別はできる子だ。なら自分で考えて、結論を出したのであればその背中を押してやろう。何か失敗したら、全力でフォローしてやろう。それが、大人ってものだ。

「師匠。」

彼女の前まで移動し、膝を曲げてアルの視線まで腰を下ろす。見下ろすのではなく、対等に。師と弟子という関係性だが、戦いにおいては賭け金は二人とも同じ。人の命に貴賤はなく、その価値に違いはない。幼子を戦いの場に出してしまう私の、精いっぱい抵抗みたいなもの。

目線を、合わせなきや。

「私も、連れて行ってください。……父の仇を討ちたい気持ちも、この村を焼いた奴らに復讐したい気持ちもあります。でも、それ以上に姉さんや妹を助きたい、です。」

「……いい答え。あなたが持つその黒い感情は、確かに力をくれる。でもそれに振り回され、破滅した人を私はたくさん見てきた。常に冷静に、自身の芯を意識し続けなさい。守る為の剣、明日を掴む為の剣

は……、案外強いよ？」

先達から後に続く者へ。アルの頭をいつもより強く撫で、勢いよく立ち上がる。

湿っぽい空気はみんな苦手だろうしね、マルつと切り替えていきましようか。

「さっ！ やるごと決めたのならさっさと準備！ 早ければ早い方がいいからね、ほら駆け足！」

「はいっ！」



岩肌をくりぬいて作ったのか、それとも元々存在していたのかはわからないが裂け目のように生じた洞窟の付近に数多くのテントが建てられている。また一部は簡易ではあるが木造の建築物も存在していることから見て、ここが本拠地で間違いないだろう。

まあそもそも三桁の人間を洞窟内に放り込めば絶対どつかで暴動が起きる。狭いしジメジメしてるし暗いからね。それを防ぐために洞窟の前を切り開いて基地化した訳だ。結構な大所帯なこともあり、遠くから見ても結構な物資が集まっている。

「待たせたなッ！」

「……マジで何してるんですか師匠。」

こちらジナーク、敵基地の付近まで来た。だが遮蔽物が少なく潜入が難しい、至急段ボールを……、え？ 何？ 今へびさんごっこで忙

しいんだけど。……え、何。飛ばし過ぎ？ 何がどうなってるか解らない？ ああ確かに。んじやま最初から行きましようか。

アルの意思を確認した後、準備をするために私たちは荷物。ルペスとコピアがいる場所まで移動した。今回突撃する予定の洞窟は森を抜けた先にあるらしく、馬で行くと逆に遠回りになってしまうような場所らしい。お馬さんは森の中走れないからね、迂回するしかないよ。

となると移動方法は徒歩で、時間がもつたないからアルを担いで走ることしようと思っただけ、……さすがに私も疲れてる。早く蹂躪しに行きたいのは山々だけど、元々旅の途中で疲労は溜まってるし、さつきの戦闘でカロリーも魔力も消費しちゃってる。いくら雑魚とは言えさすがに300相手するときに疲労困憊で……、ってなるちよつと怪しいところがあるからね。『戦いは数だよ兄貴！』はあながち間違つてないんです。

というわけで持つてきた食料とか、お土産とか全部開放して村のみんなとお食事会つてのをしました。そろそろ日が沈みそうだったからねえ。生き残った人たちが集めてきた森の恵みと、私が持ち込んだ保存食とか。襲撃からみんな無事に生き残ったし、ちよつとした戦勝記念の宴つて感じだった。

ま、さすがにそれだけだとみんなお腹いっぱいにならないので、ちよつと森に入って獲物を探したんだけど……。

「……運良すぎない、私？」

頭の高さが私よりも大きい鹿、その群れを発見できた。いやまあ私が見つけた時と、相手がこちらを捕捉したのは同時で、最初の踏み込みは鹿ちゃんの方が早かったんだけど……。私に速度で勝てるわけないよね、つてことで。

一番大きい鹿の頭を切り落とした後、軽く血抜きして持ち帰っちゃ

いました。いや、喜ばれたよね。すごく。この鹿ちゃんも魔物の移動の影響を受けたのか、ちよつとあばらが見えるぐらい痩せてたけどサイズがサイズ。みんなお腹いっぱいになれるサイズでした。すっかりと焼いて、持ち込んでた岩塩で味付けした鹿肉は大変美味でした。うまうま。

……まあ普段通りに食べたならその量にビビられて無茶苦茶引かれただけだね。いやまあ確かに私の体より大きい鹿の大半を腹の中に収めるのを見れば引くのは解るけど、もうちよつと手心というか……。

しかもアルがふざけて子供たちに『悪いことしたらビクトリア様にペろりと食べられちゃいますよ！』って言い始めたし。普通ならわーきやー言いながら喜ぶんだろうけど、私の食べる量を真近で見たいか何人か顔真っ青になってたでしょうが！ ジナちゃん人食いの趣味はありません！ というかアルもアルで年にしたらかなり食べてて、お母さんに『ええ……』って顔されてたの私知ってるからね！

そんな感じでカロリーを補給した後は、武器防具の手入れをした後に就寝。日の出の少し前に起きて、アルちゃんを抱えて全力ダツシュして敵基地までたどり着いた、って感じです。

「さてアルちゃん、現在敵の本拠地の近くまで来ているわけですが……。作戦は覚えてる？」

「はい、叩き込みました。」

敵アジトには防壁らしい防壁がない、つまり物資や奴らの家やらすべてが？き出して感じだ。これはまあ結構な森の中だから敵が攻め込んでくる想定をしなくていいのと、魔物避けの香が焚かれていることからそっちの心配が必要ないってのもあると思う。ついでに言うとうすぐ森の中に逃げ込むことができるって利点もある。

攻め込む側、特に私みたいな全滅させたい人間からすれば、防壁が

ないのはありがたいけど逃げられる可能性があるってところがちよつと嫌なところ。盗賊っているだけで治安悪化させるからね、一人二人程度ならまだしも十数人も逃がしちゃうとそれだけで徒党を組んでどこかを襲いに行ってしまう。

「それを防ぐために私が樹上から観測と、射撃ですね。」

「そゆこと。」

流石に私が加速しても300すべてを把握し続けるのは不可能、そのため逃げそうになった奴のところにアルがパチンコを打ち込み、私はその音を頼りに急行して殲滅つてのをしようとしている。アルの実力的に一对一ならまだしも、囲まれたらヤバいからね。遠距離からの射撃者兼観測者をお願いするわけです。

「んでまあそんな感じでお外に出てる人を全部オタツシヤデー、したら次は洞窟の内部。」

軽く見た感じ、相手さんの重要そうなものは大体洞窟の中にありそうだ。ほんとは騒ぎを聞きつけた敵が情報を隠すために書類とかを処分する可能性も考えて、先に洞窟内部を攻略したかったんだけど……。あいにく私は狭いところや暗いところでの戦闘経験が極端に不足している。力押しで出来ないこともないんだろうけど、安全を考えると後回しにした方がいい。

まあそんな感じで表を片付けた後は、洞窟の中で防御を固めたであろう奴らの処理をする。んであとは、捕まってる人を助けて、残ってる証拠品を回収して、基地に集積されてる食料や使えそうなものを全部まとめて回収して村に帰るって寸法。

「一応再確認したけど……、大丈夫そう？」

「はー。」

ならよし。んじゃ最後に装備の点検をしまして……。

意識を、切り替える。

普段使いのロングソードを抜き、もう片方の手で予備として持つてきていたもう一本の剣を引き抜く。今回は数が多いし、観客もいない。効率と手数を重視してやっていくとしよう。……日も十分昇っているし、視界は良好で明度も問題なし。休んでいる盗賊もいるだろうが、敵が来たのを察知すればすぐに動き出してくれるだろう。

纏まってくれた方が、殺しやすいからね。

「アル。」

「いつでも。」

上から彼女の声、木の上に登った彼女が答えてくれる。

よし、じゃあ待たせちやうのも悪いし……。

「始めようか。」

40：蹂躪！

〈加速〉七倍速

時間は、短ければ短い方がいい。

敵基地の形状は、大きな洞窟が存在する岩肌から半円状に広がっている。洞窟がある北方向が全て岩肌で覆われていて、残りの方面が切り開かれている形。四方面の内どれか一つを海や山などで固めることで、警戒する面を潰す、よくある手口だ。

アルが陣取っている場所は、南側の大きな木の上。私が突入する場所も、そこからになる。

まずは、見張りを、消す。

森の中、暗闇の中から飛び出し、最初の1人目の首を刎ねる。力を籠める、骨ごと断ち切る振り方ではなく、撫でるように切り落とす感覚で。続けて2人目、3人目。乱戦時、特に1人对複数人の場合相手の反撃に対応するため振り落としは基本使えない。外せば大きな隙だし、殺せたとしても振り下ろした瞬間は隙だらけだ。それに削られるスタミナの量はかなり大きい。

4, 5, 6と数を重ねながら、回り踊る様に首を飛ばしていく。情報通り、雑魚しかいない。こちらを認識する暇もなく、ただ首を飛ばしていく骸たち。17を数え終わった後、より内部へと侵入していく。敵基地のテント街、って感じのところかな？

(こう、歯ごたえがないと無双ゲーしてるみたいだね。)

そんな変なことを考えながら、剣を振るう。いやアレはアレで面白いんだけどね、現実でやると色々勝手が違うだけで。

やっぱり雑魚たちはちゃんとした教育を受けた兵士ではなく、寄せ集めのチンピラみたいなものらしい。流石にこつちのことを認識する奴が増えてきたが、立ち上がることもできずに血をまき散らし、武

器を握ることすらできずに死んでいく。これで43だが、まともな反撃どころかちやんと武器を握った奴すらいない。

(ん? ……ああ、そっちなね。)

七倍速の世界の中で、聞きなれない異音が耳を震わす。何かと思つて振り返ってみれば、アルが西側に向かつてパチンコを撃ち出していた。そういえば生き残った村の人たちが、残った破材で音のなりやすい弾つてのを作つて彼女に持たせてくれたんだっけ。あの鹿の角と骨で作つた奴。

ま、つまりあっち側でもう逃げようとしている盗賊くんがいる、つてコトでしょう。んもう、せつかちさんなんだから。

〈加速〉十倍速

一時的に倍率を上げ、ようやく武器を持ち始めて反撃しようとした盗賊たちの首を、6つほど頂戴する。その中で装備の質的に、少しいのを着ている奴もいたが、同じように首が飛んでいき、他と同じように死ぬ。多分アルの村を攻めてきたアイツと同じ小隊長ポジの奴なのだろう。可哀そうに、見せ場なく死んじやつたねえ。

そんな可哀そうな死体たちには目もくれず、首が地面に落ちるよりも先に通つた道を引き返していく。倍率は七に戻すが、それでも奴らの視界に入るほど私は遅くない。敵基地外周を走りながら4人ほど処理し、アルが教えてくれた西方面へと到着する。

(これで53。んで私が来るまでにアルが処理したのが2、55。)

おそらく何かあったときに被害を分散させるために逃走する準備があつたのだろう、もしくは単に恐怖を感じたから逃げ出したのか。くるくると回転しながらフライング生首を量産し、そんなことを考える。あ、でも見てよこの首。ちようどお空に浮いてるけど、何かから

逃げるような顔してない？ 防壁のない基地だし、魔物とかが攻めてきた時はとにかく逃げるようにしてたのかもね。あと悲鳴が聞こえたら逃げるとか。

(まあ私には解らないんですケド。)

正直さ、七倍速の世界に入っていると音とか聞き取りにくくなるんだよねえ。無茶苦茶音が低くなるし、アルがさつき投射した音の出る奴……、長いから鹿玉で。あれの音もかなりギリギリ聞こえた感じだし。誰かが悲鳴とか怒号とか上げても、正直ワカンナイ。

「なのでみんな殺しますねえ？」

たぶんこっちの声も早すぎて聞き取れてないんだろなあ、と思いつながら生首を増やしていく。いややっぱりさ、人つて首落としたら死ぬじゃない？ 最近例外を知ってしまったけど、まあこんなところにその例外はいないだろうし、防具も首を守ってくれるのは結構少ない。というか防具を着けていたとしても、私の剣を止められるような鉄の防具なんてかなりの厚さが必要。調べたことないけど5cmくらいなら倍率かけずに切断できるし。

(首にそんなの巻き付けてるのいないしね。つまりみんな、すばばばくんですよ。)

単純作業になってきたせいか、集中力が途切れて思考が変になってきた。けどまあちゃんと仕事はしてるんでね、許して下さいな。いつの間にか飛ばした首は100を超え、121。西側へと逃げていく盗賊を見て、西なら逃げられると勘違いした盗賊が多かったのか、思ったより数が稼げた。誰かが逃げ出したら自分も同じ方向に逃げ出す、一瞬お前らダチヨウかと思ったけど、盗賊とダチヨウを比べたらダチヨウに失礼だわ。

まあアイツもバチクソ頭悪いんだけど……。

(この世界じゃ見たことないけど、探したらいるのかねえ？ あ、この世界獣人いるし、ダチヨウの獣人？ 鳥人がいるかも。)

今の私ならダチヨウよりも速いだろうなあ、と思いながらも一度敵基地外縁部へと足を運ぶ。

等速時間でたぶんまだ3分も経ってないぐらい、でも盗賊たちが自身の置かれている状況を把握するには十分な時間だ。つまり戦うのか、逃げ出すのかの選択。そして騒ぎを聞きつけた洞窟内部にいた奴が出てくるのか、防備を固めるのか。さ、こっからが大変だぞ。頑張りませんと！

さつきと同じように外周に沿いながら逃げ出した盗賊を狩り、南方面へと移動するが29程度しか狩れなかった。距離が近くなったことでようやく視認できたアルが、東方面へと攻撃を仕掛けているところを見るに、敵は大体そつちに流れているのだろう。まあ私が最初に南を潰して次に西を潰したから、そりやそうかって感じなんだけど。

(森に入られると追えないし……、急がなきゃ。)

〈加速〉十倍速

まだ体が慣れていない速度だが、自分が取り逃したせいでアルの村がまた襲われる、となってしまうばどれだけ後悔しても足りないだろう。ちよつと体が軋むが、全力で地面を蹴って移動する。

(……あれ？ 思ったより逃げてないな。)

残りの1000人くらいが恐慌状態に陥って雪崩のように逃げ惑っているのかと思いきや、実際いたのはその1/4くらい。何か異常でもあるのかと思いついて確認してみるが、アルが殺したのであろう死体が3つ

存在するだけ。想像より少なくてびっくりしちゃったけど……、まあ殺すには変わりない。一番森の近くにいた盗賊目掛けてレイピアを投擲し、それ以外の盗賊は他と同じようにあの世にしまっちゃおうお姉さん。これで合計167つてところかな？

「アルが他にやった奴もあるだろうから170くらい？ いつの間にか半分通りこしちゃったね。」

周囲に敵がないことを確認した後、加速しながら自身の体を確認する。被弾無し、返り血はちよつと多め、疲労はあるけどまだ余裕はある、魔力は使用してないのでフル。レイピアは投げちゃったので使用不可、しかも普段使いしてる方。旅の途中で魔物とかを切っていた方の剣の切れ味が落ちてきている。両刃なんだけど、両方ともまずい感じだ。予備の方はまだまだいけそうなんだけど……。

（血とか脂の汚れもちよつとなあ……。まあいいか、切れなくなっても最悪殴ればいいし。）

にしても、逃げてるのが少ないってのはどういうことなんかね？どっかに集まって防御陣形組んでるとか？ 300つて話だったし、残り100以上は絶対にいるはずなんだけど……。

そんなことを考えながら、敵基地中央部へと移動する。アルが飛ばす鉄球の方角が北方面に向かい始めたが故の移動だ。

（外から見た感じだと、洞窟の前が広場みたいな感じになってたんだけど……。お？）

「あら〜！ か〜、わいつ〜！」

視界が空けた後に見えるのは、盗賊たちが集まって防御を固めている姿。木の板やら箱やらを並べて簡単な防壁にし、弓や槍で防御を固

める姿。大体……、70人くらい？ 思ったより少ないけどまあそんなものなのでしょう。残りは洞窟内部にいて、外に出てる奴は中にいる奴らを守る為に無意味な作業を頑張ってる。矮小な存在が意味のないことを頑張る姿って可愛いよねえ、消し飛ばしてあげたくなる。

まあ多分だが、伝令や警戒を叫ぶ奴を全部私が切り落としちゃったせいで、彼らは正確な情報を持っていないのだろう。なんか敵が来てるみたいで、味方が無茶苦茶早いスピードで死んでる。考えてるのは、『どの方向に逃げてても味方の死体が転がってるし……、もしかして囲まれてる？ ヤバイやん、守り固めなきや。』ってところかな。

「じゃあその頑張って作った砂のお城、壊してあげるね？」

こちらを視認したらしい敵弓兵が矢を射かけてくるが、私より遅い直線しか進まない矢ごときに当たるわけがない。軽くひよいっと跳び上がり、防壁の内部へと侵入する。今の私は七倍速だ、正直盗賊如きが目で追える速度ではない。しかも、防壁を張った時点で彼らの意識は外に向いている。

彼らからすれば、目の前にいたはずの私の影が急に消えて、気が付けば首を取られているって感じだろう。ま、わけないよね。

「+73して、計243！ あとは、洞窟……。？（ライド）。」

導きのルーンを起動し、巻き起こした風を洞窟の中へと送り込む。倍速を掛けている私からすればかなり遅いが……、まあその間に洞窟から飛び出して来た盗賊くんでも狩って暇つぶしにしましょう。え？ なんて風起こしたかった？ 内部の大まかな構造を調べたのよ、さすがに完璧にわかるわけじゃないんだけどね。ここ以外の抜け道はあるのか、とか。空気口はこれくらいある、とかくらいならなんとなくわかる。

「……ん？ かなり大きい部屋があるな。でも空気口以外は抜け穴なし。じゃあとりあえず塞ぎましようかねえ、？（カノ）、？（アルジズ）」

軽く把握できたので、次の行程。火のルーンに、友のルーンから防壁のイメージを切り取ったものを組み合わせることで火の壁を作成する。後はこれを洞窟の入口に設置すれば……、ほら完成。中にいる奴らを出さないための防壁のできあがりだ。

「5分くらいは持つし……、この間に掃討しちゃいましょう。」



「た、たしゆけ」

「やだ♡」

うん、これで最後かな。

洞窟の中に入った後で、背後から襲われちゃたまらない。後逃げられるのもね？ というわけで呼吸音とか気配とかを探しながら基地内部を探し回った結果、8人の方を発見し、永遠のお別れをすることができました！ いや、良かったですねえ。

「つと、さすがにあれだけの数殺したせいで血がヤバいな……。」

ほら見て、足の裏真っ赤。いつもは避ける返り血も今日は急いでたから受けちゃってるし……、帝都に帰ったら清掃&フルメンテだねえ。でもまあこれだけ血まみれ、つてことは敵を一杯殺せたってこと。多分逃がしちやっしたのは一桁だろうし、それぐらいなら魔物に喰

われて終わりでしょう。それに、濃厚な死の香りが漂ってたら魔物も動物も近づかないだろうし、今基地内に残ってた奴は全部やったし、後ろを気にする必要はなくなったわけだ。

終わったことを伝えるために軽く手を振ると、南の方からアルが走ってくる。最初は血を踏まないように走って来ていたが、一度誤って踏んでからはもう躊躇せず走ってきた彼女。帝都、いやラクラで新しい靴買おうね……。

「お疲れ様です師匠、……色々やばいですね。」

「まあ数が数だからねえ。」

肉体的な疲労はそこまでないだろう、だが彼女の顔からは疲れというか強いストレスを受けた様子が窺える。まあこんな最悪な殺人現場なんか見るのは初めてだろうし、仕方ない。下に降りて普通に歩いているだけで彼女の覚悟の強さと、精神の強さが窺える。普通なら吐いてもおかしくないからね？

こつちきたばつかりの私ならどうなってただろうなあ、と考えながら足を進める。

「こつからは洞窟の中での戦闘だけ……、アルは来るかい？」

「指示に従います。」

「うん、偉いね。」

そう答えながら、盗賊たちが立て掛けていた剣の一つ。一番質のまともそうなショートソードを手取る。軽く振ってみるが……、ああこりや無理だ。脆すぎて『加速』に耐え切れない。親指と人差し指で強く刀身を押してみれば、ピシツという音と共に罅が入る。これだから安物は……。

「師匠？」

「室内戦闘もそうだけど、洞窟の中って狭いでしょ？ だから武器を

「変えようかと思っただけけど……、これじゃ無理だね。」
「あの、じゃあ私のは……。」

そう言いながら自身の腰に巻いている剣を差し出そうとしてくるが、受け取らずそのまま持たしておく。確かに彼女が持つそれはアルが十分に振れるようなサイズだし、私が求めている長さにもあっている。けどどちよつと柄のところが短いんだよね。あとそれを受け取ってしまうとアルから近接戦闘能力を奪っちゃうことになるから嫌。

「ま、最悪拳でやるし大丈夫大丈夫。」

因みにこれはかなり後の話で、アルとふざけて『これよく初心者がやる、買ったばかりの綺麗な長剣をご機嫌に振り回して洞窟の壁に突き刺す奴〜!』とか言いながらやっちゃったんだけど、普通に私の力と加速の倍率が高すぎて洞窟の壁を丸ごと切断。それが原因で倒壊が始まり、お邪魔してた洞窟が丸ごと埋めちゃったことがありました。が、またそれは別のお話。……え? 無事帰れたのかって? そりやもちろん二人とも五体満足で帰りましたとも。

「さて、アルも来たことだし……。? (アルジズ)、? (ゲーボ)。」

友のルーンから保護、そして防御の意味を強く引き出し、それを愛のルーンでよりアルへと手渡す。彼女の手に移った黄緑の光は一瞬だけ桃色の光を放った後、ゆつくりとその全身を包み込んでいく。愛のルーンには誰かに手渡す、っていう意味合いがあるからね。防御魔法の付与って感じで使った。

「狩れた数が少ないし、もしかしたら外に出てるのかもしれない。そこにアル一人を残すのはさすがに危ない。だから後ろからついて来なさい。背後の警戒、頼んだよ。」

「ッ、わかりました！」

彼女の利き手を鞘に収まる剣の柄に当て、そう頼む。置いていかれると思っていたのか、気合を入れ直すような声を上げる彼女に深く頷き、宙に火のルーンを複数描く。この文字を持つ松明という意味を強く引き出すことで、洞窟内での光源として使用するつもりだ。

「さて、今から火の壁で閉じた洞窟の入口を開けるわけだけど……、絶対敵はそこに潜んでこつちを攻撃しようとしてくる。だから最初は私の後ろに、ね。中に入ったら後ろを。」

「解りましたー！」

「いいお返事。じゃ、やるよ。」

私の背に身を隠したアルを確認した後、スナツプを合図に刻んだルーンを解放する。開かれた扉の先には、案の定敵がこちらを待ち構えていた、しかも、外にいた盗賊よりも装備の質が上。細かいところは違うが、ある程度統一されてるし兵士みたい。火の壁が消えた瞬間に、洞窟内部から石や矢が飛んでくる。

〈加速〉七倍速

切れ味の悪くなった方、普段使いしていた方の長剣でそれを切り払っていく。どうやら力が強い奴がいるみたいで、かなり大きめの石も飛んでくるが別に何ともない。背後にいるアルに当たらぬよう注意を払いながら、次の手を考える。

(このまま遠距離攻撃をし続けられて時間稼ぎされるのもアレか……、消そう。)

一瞬アルの方へ向き、彼女を抱えてさつき洞窟前で陣取っていた盗賊、彼らが作った防壁へと避難させ、アルに軽くウインクした後突

貫する。入口部分とはいえ、洞窟内部に入るわけだ。ロングソードは取り回しが難しいし、もたもたしてたら内部にいる奴らが証拠とかを燃やしちゃうかもしれない。

そう考えながら、拳を強く握る。そう、殴殺ですね。

倍率そのままに、飛んでくる石や矢を弾きながら進み、洞窟の内部へ。一番近い敵へと拳を振りかかった時

(ツ、魔力！)

足元で、青い魔法陣が起動される。

倍率を限界まで上げ、効果範囲内から移動しようとするが気が付いた時にはもう遅かった。

視界が全て、切り替わる。

「……転移かよ。」

この広さに、岩肌。感覚的にさつき導きのルーンで発見した大部屋だと理解する。

「へえ、お姉さん。冷静なんだね。」

そしてそこには、一人の青年が。

背後に無数の魔物を従えた男が、私を待ち構えていた。

41：終幕

「え……………」

師匠の体が、掻き消えてしまう。

”今”の自身であれば転移の魔法陣によってどこかに飛ばされたこと、刻まれた呪文や発光具合から迷宮で生じたトラップの再利用であること、そしてその性質上長距離の転移が不可能であるということから、師匠はすぐに帰ってくるのが推察できる。しかしながら、あの時の自身では全くそんなことは解らず、ただ恐怖に怯えるしかできなかった。

いなくなってからその大きさが理解できるとはよく言ったもので、当時の自身の心に現れたとてつもない恐怖は言葉にすることが難しい。自分を奴隷から救い出してくれて、生きる術の大半を叩き込んでくれた精神的な支え。そしてどうしようもなく大きな、自身の身の安全を保障してくれる人がいきなり目の前から消えたのだ。ある程度覚悟していた剣神祭の時と比べ、こちらは一瞬にして最初から誰もいなかったように消えてしまった。

自分の目がおかしくなったと信じてしまいたい状況だった。

だが、私がどんな気持ちであろうと、現実には襲い掛かってくる。

盗賊、いや兵士たちからすれば師匠が罠にかかるのは確定事項だったのだろう。あのタイプのトラップはその規模が小さくなる代わりに、露見する可能性を極端に下げた種類だ。どれだけ強く大きな存在である師であっても、それまで存在すら知らなかった罠に対処するのは難しい。いやまあ普段のあの人であれば当時でも何とかしそうなものだが、当時の彼女は達成する目標を多く定めすぎて、焦ってしまっていた。

『すべての盗賊の殲滅』、『攫われた者たちの確保』、『背後を洗うための

情報の入手』、そして『私を五体満足で連れて帰る』の4点だ。何年か後に酒の席で師から聞いたが、「少し欲張り過ぎちゃったから反省」、とのことらしい。と言っても結果をみれば全て達成しているので、この人の力量の大きさには驚かされるばかりだ。

さて、話を戻そう。

彼らの思惑通り、転移の罫によって師をどこかへと飛ばした彼らはゆつくりと洞窟の中から出てくる。

運の悪いことに、当時の私は防壁から顔を出してしまっていた。師が敵を攻撃するために私を下げ、敵に向かっていったことは幼かった自身でも理解できていた。だからこそ自身もその補助のために防壁から身を乗り出し、一瞬たりとも隙を見逃さぬとパチンコの弦を引いていた。戦場の熱気にやられたのか、復讐という黒い感情にそのかさされたのかは覚えていないが、とにかく私は自身の身を相手から視認しやすい位置に置いた。

「ッー」

目が、合つてしまう。

急いで盗賊たちが作った防壁。木の板などを重ねたものに身を隠そうとするが、明らかに遅かった。私の脳天に、矢が突き刺さりんとする。

「ひッー」

だが、そうはならなかった。黄緑色の光が自身を守り、その矢の進む方向を逸らせる。脳天に突き刺さるはずだったソレは、私の頭の上を越えて盗賊たちの家の一つに突き刺さった。

死の恐怖から慌てて防壁に身を隠すが、それと同時に複数の矢が射出される。自身を守る頼りない木の防壁に矢が何本も突き刺さり、同

時に私の逃げ道を塞ぐように防壁から少しずれた位置にも殺意が突き刺さる。

確実に自身を殺そうとする意志。盗賊などが持つ野蛮で鈍なものではなく、訓練され兵士として雇用された者が持つ鋭く研磨された殺意。師匠と比べればアリと太陽みたいな差だが、それが明らかに自身に向けられているのは、本気で私を殺そうとしている存在と出会うのは、初めてだった。

私の胸中を占めていたのは復讐の感情ではなく、単純な恐怖。すべての生命が持つ命への執着と、死という永遠への恐怖。生き残りたい、死にたくないという思いはあるのに、死への恐怖が大きすぎて何もできない。動くことすらできない。

そんな私を助けてくれたのは、やはり師匠だった。

私を包んでいた二つの魔法、その一つである愛のルーンが起動する。

桃色の光が私を包み込み、体の内側から暖かいものが溢れてくる。

当時の師のルーンはかなり杜撰で、刻んだ文字に複数の意味を込めてしまっていた。故に出力の低下が起こり、込められた魔力と比べると格段に低い効果を及ぼしていたのだが、あの時はそれが幸いした。 ”譲渡” の意味だけを込めたそのルーンは、原初の意味である ”愛” の効能を多分に含んでいた。

親愛、家族愛というべきもの。それが私から恐怖を取り除き、脳を思考に回す余力を与えた。

(まずいまずいまずいまずい！)

私を包み込んでくれた桃色の光のおかげで、師匠のおかげで何とか意識を立て直すことができたけど、それでも現実は変わらない。脳内で悲鳴を上げちゃうぐらい状況は悪い。しかも私は恐怖に吞まれて大事な初動を失った。

(な、なんとかしないと！　まずは現状把握！)

師の教えを胸に、自身の装備や残弾数を確認しながら思考を回す。さきほど一瞬奴らの姿を目に収めたが、明らかに30近くいて、武装も整っている。絶え間なく矢が打ち込まれているし、その威力が徐々に上がっている。つまり距離が近づいているということ。

いくら師匠に剣の扱い方を叩き込まれているといっても、自身の背丈はまだ子供。この国の頂点に限りなく近い師に戦い方を教わっていても、実戦の経験は少なく、そのすべてが遠距離でのもの。その上もし自身が発揮できる力のすべてを出し切ったとしても、勝てるビジョンが全く浮かばない。基本的なスペック差に、絶対的な数の差。何をしても、殺される。

師がどうなってしまったかの不安が、自身の死という恐怖によって増幅され、頭がおかしくなりそうになる。

だが、あの人が簡単に死ぬはずがない。すぐに戻って来てくれるはずだと信じ、生き残ることだけに思考をシフトした。

その方法しか、自身が恐怖に負け死を受け入れてしまう未来を回避する方法が思いつかなかったからだ。師匠の魔法のおかげで立て直

すことができたとしても、私を蝕む死の恐怖は依然として存在している。だから考えて、道を見つけるしかない。

(矢で移動を封じて、近接戦闘に持ち込み数で潰そうとしてる。どうすれば……。)

じりじりと迫る死の足音に怯えながらも、活路を探すために全力で頭を回す。私は、師に生きる剣を教えてもらって、その理由も作ってもらった。何も返せていないまま、死んでいくなんて虫が良すぎる。死ぬるわけがない。それに、ママにもう一度顔を見せに行くって約束したんだ。

奴らに私は父を奪われた、姉や妹は連れていかれてしまい、外の基地にいないってことは洞窟の中で囚われてしまっているということに他ならない。絶対に、取り返す、これ以上奪わせない。だから、生き残らないと。

(何か、何か方法は……！)

より強く突き刺さる矢の音を背に感じながら、より思考を加速していく。私が不利になっている理由の最たるものは、圧倒的な数の差。一対一ならまだ隙を突いて勝てるかもしれないが、囲まれた瞬間に抜け出す術を持たない私は終わる。数を、数を減らさない。でも、どうやって……。

何かのヒントを得るために、自身の持つ記憶のすべてを遡っていく。走馬灯のように流れたそれは、ほんの数日前の情景を浮かべせる。師と初めてした野宿で、彼女が指の先に灯した明るい光。小さな、火。

(……魔法。)

火だ、火を使えば。魔法によって奴らの数を減らすことができ

ば、ずっと私の勝率は上げれる。それにより大きな、派手なものを発
生させることができれば、身を隠す時間を作りだすこともできる。も
う一度身を隠し、奴らの隙を突いて背後から攻撃を仕掛けられる。仕
切り直せる。

（炎のルーン、？（カノ）。今の状況に一番合っていて、私の適性でも
ある火の魔法。）

この世に魔法を発現させるために、体内の魔力を回す。もう、足音
が聞こえる位置まで近づかれています。時間はない、これまで成功した
ことはないけれど、これ以外私が生き残る術はない。

宙にルーンを刻む。

失敗。

足音が大きくなる。

もう一度、ルーンを刻む。

失敗。

矢が防壁を貫き、ちょうど自身の頭のすぐ横に矢じりが出現する。

ルーンを、刻む。

失敗。

頼みの綱であった防壁が、割れる。

刻む。

作動しない。

奴らの、影が、視界を覆う。

ルーンを、ルーンを！



「あは……………、最悪。」

人間、怒りでどうにかなってしまいそうなき。いや正確に言うとな怒りが一線を越えた時、怖いくらいに冷静になるときがあるらしい。まあ今の私がソレだ。罨に嵌めた奴らへの怒り？ まあそれもないわけではないけど、一番は自分への怒りだよね。あの子の母親に身の安全を任されたのに、私はアルの身を危険にさらしてしまった。自身の傍から彼女を遠ざけてしまった。

本当に、腸が煮えくり返る。だが精神は驚くほどに冷えている。

「あゝ、本当に。気分が悪い。」

怒りのせいで少しスキルというか、脳がどうにかなっていたみたいで。『加速』がブレーカーを落としたみたいにかチンと切れてしまっていたようだ。

スキルを切ったつもりはなかったが、目の前にいた男や魔物たちが

次々と倒れていくことから、ようやくソレに気が付く。ついでに裏の時代に身に着け、表に出てから更に強化されてしまった殺気を全て解放していたことも。何体か意識を保っている魔物もいるが、明らかに怯えている。まあ強めの魔物の気配はないし、そんなものなのだろう。

加速、十倍速を掛け直しながら同時に導きのルーンを宙に描く。一度確認したとは言え、アレは他に入口がないかの簡単な確認だった。今回行うのは出口までの最短ルートの調査。宙に描いたルーンを中心に風が巻き起こり、出口に向かって走り抜けていく。大体、等速時間で5秒もあればはつきりするだろう。あまりにも長すぎる時間だが、迷ってしまう可能性を考えれば許容するしかない。

「その間に、消し飛ばす。」

軽く踏み込み、転移させられた地点から男までの距離を0にする。おそらくはまあショック死しているだろうが、簡単に死なすほど私は優しくはない。顔に近づいた羽虫を払う様に剣を振り、その肉体だったものを全て血の霧に変える。

貴重な情報源だったかもしれないが、そんなものは関係ない。

私がこの戦い、いや掃除に関して掲げた目標は四つ。人質の解放と、情報の取得、盗賊の処理、そしてアルを五体満足で母親の下に戻す、だ。私は、アルの願いもありこの四つを全て一時的に同価値とした。正確に言うるとアルの命を最優先としていたが、他の目的の優先度も高めてしまった。

それが、間違いだったのだろう。その結果がコレだ。

はつきりとはわからないがおそらく転移の罠に引っかかり、アルをあの場に残してしまった。状況的に彼女の身は危険にさらされているだろう。本当ならばこのゴミどもなど放置してアルの下へ駆け付けたい、彼女に危害を加えようとする奴を殺しつくしたい。だが、状況がそれを許さない。

加速した世界において私が導き出した最速は、ルーン魔術によって

最短ルートを発見した後その道でアルの場所に急行するというもの。さつきも言ったが、迷ってしまった場合のロスを考えるとそれが最速だ。すぐに駆けだしたいが、頭がそれを否定する。ああ、本当にどうにかかってしまいたいそうさ。

「死ぬ。」

体中に駆け巡る感情を殺気として開放する。同時に回りながら空へと飛びあがり、洞窟の天井へと足を付ける。

そもそも、表に出てから封印していたはずの殺気も。尋問で使ったのが切っ掛けか、完全に漏れてしまっている。裏じゃ観客を殺気でシヨック死させても、観客の自己責任だったからよかつただけで、表はそうじゃなかったからねえ。頑張って抑えてただけで全部漏れちゃったや。あはー。

私が背負っている骸たちの殺気、私を含めて今を生きる者への嫉妬。数え切れない骸たちの声が私の殺気となって魔物たちの命を刈り取っていった。まあほんとに雑魚にしか効かないし、私も完全に制御できるわけではないからねえ。方向性を集めて、一点にぶつければ不可能。私個人のみのもならまだ何とかなるんだけど、背負ってる子たちはそうでもないからね。

「まあ、手間が減ったと思えばいいか。」

天井が崩れるほどに踏み込み、弾丸となって地面へと降りる。目標は、まだ生きている魔物数体。

サイズと骨格的にただの冒険者では荷が重く、上位のランクの者や軍で対処しなければならぬような熊の魔物。明らかに5mを超え、背丈に驚くべきか、それを複数体収めてもまだ余裕のある洞窟の大部屋に驚くべきかはわからないが、とにかく殺すべき対象には変わらない。

軽く腕を振るい、死体を量産する。熊以外の魔物もいるにはいる

が、特段目に付くような奴はいない。全てに等しく死をもたらす。おそらく最初に殺した男がテイミングなりなんなりしていたのだろうが、最初にそれを殺してしまった。指揮系統を失った魔物たちが好き勝手に暴れ始めることもあるだろうが……、もう関係がない。その全てが、死んだのだから。

「5秒経過。ルート選定完了。……無事でいてよ、アル。」



奴らの、影が、視界を覆う。

防壁はすでに割れ、自身に向かって矢が射出されているのが視認できる。さらに私の数歩先には何人もの兵士がいて、全員が武器を手に持ち私を殺そうとしている。

ここでルーンが完成しなければ、私は確実に死ぬ。

その恐怖が、私を一つ上の段階へと上げてくれる。

「カノッ！」

叫びながらがむしやりに刻んだそれが、光を帯びながら形を成す。私の体内に存在していた魔力が、恐怖を糧に体中の経路を無茶苦茶にしながら駆け巡る。宿る魔力の大きさ故か、体を守る為に経路を塞

いでいた弁を全て突き破り、自身の指先からすべての魔力がルーンに注がれる。

魔力を糧に、ルーンを符号とし、世界に一つの現象を生じさせる。神によって人に与えられた力であり、全ての人間が根源的な恐怖を感じるもの。

”火”、だ。

「焼き尽くせえ！」

絶叫と共に、奴らを殺すために放つ炎。たった一文字のルーンから視界いっぱい生成された火球は、全てを無に帰すために放たれたが、

「え」

だれも、死んでない。

炎は、確かに奴らを包み込んだ。私に飛来した矢が全て燃え尽きてしまっていることからそれもそれは事実。だが、誰一人数が減っていない、誰も倒せていない。状況は、全く変わっていない。何も、何も。

「魔法！ 全員前へ！」

兵の一人から、声上がる。そしてその腰に。いやすべての兵士の腰に、赤い光が輝いている。魔法を無力化する、魔道具。当時の自身には全く理解できていなかったが、師匠が盗賊から押収したものは違う品。盗賊が持っていたものは広域に効果を及ぼすもので、彼らが持つのは個人に強い耐魔法の守りを与える品。

兵士たちが、距離を詰めてくる。魔法使いを相手にする場合、その鉄則は困んで叩くこと。訓練を受けた彼らは、すぐにそれを選択し、行動を起こした。私にとって、詰みの状況を。

……もう、道はない。

魔力を注ぎ過ぎたのか、それとも恐怖が強くなり過ぎたのか。全身から力が抜けてしまい、その場に座り込んでしまう。このまま、私は死ぬ。

だが、そうはならなかった。

私を囲もうとした兵士たちが、一瞬にして血の霧へと化す。

「アルっ！ 大丈夫!？」

普段の師匠とは思えないほどに血に汚れていて、纏う雰囲気は氷のように冷たい。まるで、すでに死んでいるように。それが、私の名を言うことで少しずつ消えていき、普段の師匠へと近くなっていく。だが、彼女が抱える骸たちの目はこちらに向いている。師を同じ場所へと連れて行こうと、私も同じ場所へ連れて行こうとしている。

あんなにも冷たく、生者のとは思えない目。隙あらば連れて行こうとする師匠が殺した者たちの骸。

あの時の師の顔を、あの時の師匠が纏っていたモノを。私は一生忘れることはできないだろう。

42：あとしまつ

さて、あの後の話をしよう。まあちよつとした後始末って奴だからね。あんまりおもしろいものではないし、ぱぱつと終わらせるに限る。

あの戦闘の直後はまず、震えてまともに喋ることもできなくなってしまうたアルを宥めるところから始まった。アルを襲おうとしていた奴らを視界に収めてしまったせいで、本気でキレてしまった私は彼女の目の前でも自身が纏う空気を変えることができなかつた。いや変えること自体は出来ただけ、それをするのに時間を掛けてしまった。

その結果、私の本気の殺気を彼女に当ててしまった。いくら彼女に向けていなかったものとは言え、その衝撃は大きなものに成ってしまったのだらう。普段は『加速』中に全てを終わらせ、周りが気が付く前に終わらせることで迷惑を掛けないようにしてたんだけど、あの時はアルの安否確認のために急ぎ過ぎていた。幸い彼女に傷一つなかつただけ、私が纏っていた殺気をアルに感じさせてしまった。

「ああ……あ……。」

「大丈夫。大丈夫だから、私はここにいるから。もう誰も貴方のことを襲わないから、大丈夫。」

抱きしめ、その背を優しく撫でながら震える彼女を落ち着かせる。……本当に、私は。

強い自己嫌悪に陥りながらも、彼女の背を撫でる。アルを危険にさらしてしまった上に、自身の殺気で強いショックを与えてしまうなんて愚の骨頂だ。本当に今日の私は悪いところしかない。剣闘士を辞めて実戦を離れていたせいとか、どこか気が緩んでしまっていたのかもしれない。今回はアルも私も私もケガすらしていないが、次回もうまく行くかどうかかわからない。本当に、気を付けないといけない。

その後、何とか落ち着いてくれた彼女と二人で、洞窟の中を調べた。結果から言うと、捕まっていた人達は助け出すことができたし、背後にいる存在に繋がる証拠らしきものも手に入れることができた。

息を整え、ようやく普段通り振舞えるようになったアルと二人で最初に探したのは彼女の姉と妹。洞窟の外にそれらしき建築物を発見できなかった以上洞窟の中に捕らえられていると考え、導きのルーンで調べながら内部を探索した結果。洞窟の構造を利用した牢屋らしきものを発見した。

「……あ、ルモ姉さん！　へス！」

「アル？」

「アル姉えー！」

そこに捕らえられていたのは、アルの出身の村である村人たちの一部とすでに破壊された村々の住人の一部だった。それも多くが女性と子供。盗賊たちからすれば抵抗の可能性が少ない、扱いやすい者たちばかりだった。

アルの姉妹との再会に水を差すのは悪かったが、彼女たち以外にも人はいる。軽く50人弱いる者たちを宥めながら、簡単な事情の説明を行った。事実を疑う者や、ヒステリックになってしまう者もいたが、その者たちには気をぶつけることで黙らせた。殺意は含まない気だが、それでも一般人からすれば首根っこを掴まれるよりも大きな衝撃になる。彼女たちには悪いがそうさせてもらった。

「……うん、静かになったね。この後私は西に森を抜けた村まで移動する。悪いけどこっちにも全員の面倒を見る余裕はなくてね。ついて来たい者は付いてきてもいいけど、嫌な者の面倒は見切れない。好きにするといい。この時点について来たくない者は？」

誰も手を上げない。

「OK、なら全員でいこう。道中の魔物の処理はやってあげる。でも私も全部が全部助けてあげるほど優しくない。ついて来たい者は少し働いてもらうよ。」

そう言いながら、簡単な指示を飛ばす。動けない者や、盗賊たちが持つ物資を村に持ち帰るために、荷台とかに乗せて運べるように積み込みのお願いだ。まあお願いというか、この人たちからすれば命令に近いのだろう。私が光源の確保のために魔法を使用していることは彼女たちに見られている。私が騎士か貴族と勘違いしているせいか、怖いぐらいに聞き分けが良かった。

あ、あと普通に血まみれで武器持つてる奴が怖かった、つてのもあると思う。

「アル。私はまだこの中を調べるけど、どうする？ 結構派手にやってるし、積もる話もあるなら外で待っててもいいよ。」

「……ありがとうございます。」

「何かあったら呼ぶように。」

新たに光源をいくつか生み出し、捕まっていた人たちに追従するよう設定してから探索を進める。心の内側にまだ大分ムカムカとした感情が残っているが、それを横に置いて情報を整理する余裕ぐらいはできた。気持ちの整理を続けながらも、少し歩いた先に奴らの使っていた倉庫を発見した。

最初は焼却処分でもされて、裏の手がかりの入手は絶望的かと思っていたのだが……。どうやら奴らの指揮官とやらは絶大な自信家であつたようだ、運が良いことに全てがそのまま残っていた。まあ単純に処分が間に合わなかっただけかもしれないけど。

対魔法、正確に言えば対貴族用の装備も大量にある倉庫。そのほかのかなり質のいい装備などを集められていたここには大きな机も

存在しており、様々な資料も置かれていた。ペンや明かりもあるし、ここでデスクワークもしていたのだろう。

「盗賊に貸し出せるぐらいの対魔法装備が充実していて、数は盗賊たちで賄える。ちよつとキレすぎて普通に殺しちゃったけど、あの正規兵みたいな奴らの質も悪くはなかった。その上指揮官らしい存在は魔物のテイミングが可能。……まあ油断も仕方ないのかな？」

はつきりとは覚えていないが、あの熊の魔物も軍が出ないと難しい奴だったはずだ。それを複数体、しかも同時にタイムしてもまだ余裕があるというのだから、その油断も仕方のないモノなのだろう。さらに実際に男爵家を複数潰した事実も、油断に繋がったのかもしれない。

魔法を封じられても戦える奴はいるだろうが、それでも貴族にとって魔法は主力。それを補うはずの騎士たちを他の魔物や盗賊で抑えれば十分に対処可能だろう。それこそ、ララクラ子爵家も。

「ちゃんと組織化された軍隊みたいだし、読みやすい書類が多くて助かるね。……こっちは魔物の管理についてか。」

手に取ったソレには魔物の名称と、番号が記されたもの。そしてその育成や維持に使う“エサ”についても書かれていた。

「……ああ、そうか。」

わざわざ盗賊を外に置いていたのも、洞窟内で魔物を管理するため。女子供を攫っていたのも、盗賊たちへの一種の褒美の側面もあったようだが、どちらかというところ魔物の餌というのが正しいのだろう。人数の管理がされた書類を発見してしまい、その数の減少の推移を見て思わず戻しそうになってしまう。

抵抗される可能性が低く、されたとしても被害が少ない。……肉

も、柔らかい方が好みとかそういう理由だろう。さらに女であれば数を増やすための母体としても使用できる。効率以外のすべてを考えなければ、確かに有用な方法だろう。

「クソが。」

思わず破り捨てそうになったが、これでも大事な証拠だ。人を人と思わない所業。本当に気分が害される。アルを連れてこなくて本当に良かった。こういう世界の黒い部分は、一生見なくてもいいものだ。

これ以上見る必要はないと断じ、手に取っていた書類を裏返しながら机の上に乗せる。交配についての資料も見受けられたが、もう読む気にすらならない。……あの捕虜たちがいた部屋と、母体になってしまった人たちが収容されている部屋は違う場所にあるようだ。資料を確保し終わったら、そつちを見に行こう。

（死を望むのなら死を、生きることが望むのなら、大都市の教会に連れていくしかない、か。）

頭の重い問題を後回しにして、他の資料を読み進める。一番欲しいのは敵のトップとここの指揮官が直接やりとりしている書類だが……。あった。

「……………やっぱり、厄介事だな。」



「それで、私のところに来たってわけね。」

「……ごめんねヘンリ。いつも頼る様な事になってしまった。」

「ほほほ、そんなの気にしなくていいわ。あなたと私の仲でしよう?」

あれから数日後、明らかに自身一人では抱えきれない内容であったため、かなりの強行軍となってしまったが帝都まで帰ってきた。盗賊の基地は力技で洞窟を倒壊させて基地に火を放っておいた。けど急いでいたせいで何か燃え残っているかもしれない。それにアルの故郷には母体となってしまう者を含めて、捕虜の全員を置いたままだ。彼らには申し訳ないが、政治が関わる問題であったため許してもらいたい。

「まあそれはそうんだけど……、なんで風呂の中なの?」

「あら? お風呂は嫌いだった?」

うん、いやまあ急いでたのは確かだ。帝都に付いたらそのままお屋敷に向かっちゃった私が悪いところもあるんだけどさ、なんで風呂に入ってるんですかね。私たち。一緒に入る必要性ありますか? しかもヘンリエツタ様のお屋敷のお風呂なわけだから、無駄なくらい豪華な大浴場。ローマ風の変な柱とか彫刻とか大量にあるし……。

ほらアルが設備のヤバさに圧倒されてすみっこぐらしになってる。ウチにある簡易のお風呂でも贅沢すぎるって騒いでたから仕方ないよね。私も正直ビビってるし、まさにお貴族様のテルマエって感じ。でもまあ今の状況をまるつきり楽しむのは難しいよね、大変な状況に置かれてる人たちを放置しちゃってるわけだし。私がこんないい目にあっているのか、と。

「いやまあお風呂は好きですけどね？」

「ならいいじゃない。お客様が血みどろで旅の疲れもすごい溜まっている。さらにあくんな顔してたんですもの。そのまま客間に通してしまえば家の者に私の品位が疑われるし、外の者からすれば『我が家は客人をもてなすことすらできない』にしか見えなくてよ？ 役得と思つてリフレッシュしましょ。」

「……ごめん、ありがとう。」

「どういたしました♡ それに、ビクトリア様の裸体が見れるとかものすごく、すごいじゃない？ ……わ、なにこれ。張り付いてくる。」

楽しそうに笑いながらそういう彼女。最後のソレ、私の太腿とか触りながらじゃなかつたらすごく決まってたよ、うん。いやまあ肌質の維持とか無茶苦茶手間と労力とお金掛けてるから評価してもらえないのはありがたいんだけど、もうちょっと元老院議員夫人の仮面を続けてもろて。

「……後で化粧水とか何使ってるのか教えてくださる？」

「もちろん。」

「感謝するわ、ビクトリア様♡ ……さて、本題に入りましょうか。」

彼女の纏う雰囲気気が気のいい友人の一人から、政治家のものへと変わる。彼女に合わせ私も気持ちを切り替えながら、ことの顛末を最初から紡いでいく。その話を聞くごとに彼女の顔色が変化していき、ある程度話し終えるころには大きなため息をついていた。

「つまり、ララクラ子爵領とその傘下を丸ごと取り込もうとするお家騒動に巻き込まれて、それを全部潰してしまった、というわけね。いやほんとウチの貴族は何やっているんだか……。」

簡単に言うと、領土拡張戦争。ララクラ子爵家を筆頭とした地域の隣には、大体二倍くらいの大きさを持つ子爵家が存在している。この

子爵家がラクラ家を取り込むために起こした襲撃を、私が途中で止めてしまったという形だ。同じ国に所属している貴族のやらかしの頭を抱えながらも、ヘンリエッタ様は私に物事を教えるような口調で状況を整理していく。

「ラクラ家を取り込めば、領土的に伯爵家に格上げされてもおかしくない面積になる。それにラクラは建国から皇室を支える名家。取り込んで兼任すればそれだけで格が上がるし、やらかした子爵家は最近議員の家とかに色々すり寄ってみたいだから、うまく行けば元老院入りも夢じゃないってところかしら……。」

子爵では格が落ちすぎるが、伯爵であれば公爵家や元老院の家の継承権のない子供を婿や嫁にもらってもおかしくはない。そこから関係性を構築し、ゆくゆくは国の中枢へ。彼の代では無理かもしれないが、長期的に考えれば可能性は十分にある。

「私たちの価値観にね、『魔物や盗賊に負ける貴族など、貴族ではない』みたいな考え方があってね？ まあそういう風に処理できれば単純に『貴族として求められる力量を備えていなかった』という形で収まるのよ。そこに兵を派遣して、自身が指揮を執ったりしていれば『隣の子爵家の危機を救いました！』という着地点になる。その功績でラクラ家領土を任されてもおかしくない。というか、民の混乱を抑えるためにもそうする。」

私も詳細を知らなければその決定に賛成しただろうし……、と彼女は付け加える。纏めると大規模なマッチポンプ、貴族を滅ぼせる魔物を従えた盗賊集団を生み出し、隣の領を襲わせる。統治者が全滅したところで証拠もろとも全部消し飛ばせばうまく行く、という寸法だ。

「帝国も一枚岩ではないし、その上海を越えた先に属州も保有している。しかも最近では小康状態とはいえドワーフとの戦争も続いているか

ら、足元に目を向ける余裕はない。あくく、嫌になるわね、これ。」
「そんなにかい？」

「そうよ！ しかもこの子爵家。よりにもよって急進派の派閥ですもの……。もしこのまま事が起きていけば孫の世代には面倒なことになっていたかも。」

先ほども言ったが、ラクラ子爵家は子爵家ではあるがかなりの名家であり、一応保守派に属する家である。それがまるつきり急進派に代わるわけだから、この世界の政治に疎い私でも面倒なことになりそうなのは理解できる。どこまで行っても議会形式で行われる政治は数の勝負、票の勝負で決まる。未来の確実な一票に、名家ボーナスに釣られて持つていかれる数票を考えると頭が痛いだろう。

「しかもラクラ家、継承者が娘しかいないから……。最悪でもその子を捕らえて自身の長男にでも嫁がせれば確実にラクラ家が手に入る。聞いた話だと、多分物資の補給とかも直接届けるんじゃないかと盗賊に盗ませるっていう段階を踏んで行っていたようだし……。貴方が潰した基地だけど、変に馬車とか多くなかった？」

言われてみれば確かにその通りだ、馬車や荷台のおかげで物資や捕虜たちを連れ出すことができたので何とも言えないが、確かにそれだけの量を保有しているのは違和感が残る。表向きはただの商会の荷物輸送だけど、本当は盗賊に奪われる前提の物資の補給ってわけだ。

たぶん私が知らない部分でもそう言った小細工が仕掛けられていて、最終的に全部処分できるようになっていたのだろう。

「やつぱりねえ……。多分だけど耐魔の魔道具を大量に持ってたつてことはあの家とあの家も関与してらるだろうし……。」

私の知らない貴族の名前を羅列しながら、深い思考に入る彼女。まあ纏めると、実行犯の子爵家も将来的に元老院議員になれて幸せ、

急進派の貴族たちも名家の一つが同じ派閥になって幸せ、ということなのだろう。私が思っていた以上に面倒な話で、すぐにこの件を彼女の下に持ってきて正解だったと強く思う。

「……うん、でもビクトリア様が止めてくれたおかげで阻止できたし、その上あっちの切り崩しもできる。証拠となる書類は持って帰って来てくれたのよね?」

「もちろん、それだけでは弱いかかって思っただけで耐魔法用の装備も全部持ち帰ってきたよ。」

「助かるわ!」

そう言いながら飛び上がって抱き着いてくる彼女。はいはい、嬉しいのは解ったから……、つてどさくさに紛れて胸触ろうとしない! というかさつきから色々ボディタッチ多いよヘンリ! あなた孫もいる結構いい歳でしょうが! 『恋に年齢なんか関係ないわ?』? いやいい言葉だとは思うけど、さすがに許容限界超えていますから!

「え〜! これから面倒なお仕事が待ってるから元気づけてもらおうと思っただけでなく、すごく大変そうで疲れちゃいそうなんだけだな〜?」

「ん〜ん〜ツ、ああもう! お好きにどうぞ!」

「やった! あ〜、この肌の吸い付き。30歳ぐらい若返りそう……。」

「はいはい。」

あー、もう私。何してるんでしょね。しかもこの人動作や声色は完全にふざけてるんだけど、眼の色が仕事モードから一回も変わってないし、ずっと考えてくれてるのよね……。いや私が原因ではないんだけど、私が持ち込んでしまった案件だし、罪悪感というかなんというか……。うん、もうジナちゃんしくらない。私は私で、もっかいアルの故郷に行ったときに何持っていくか考えることにしよ。

難しい政治のことは、全部ヘンリエッタ様お任せ！

「あ、そうだビクトリア様。この機会に、私のものにならない？ ほら肌を見せあった仲でしよう？」

「はいはい、考えが纏まったのね。のぼせる前に上がりましょうか。ほらアルく、でるよ。」

43：トマト

「はあく。やっぱ家に帰ってくると、どつと疲れがでてくるよねえ。」

そう言いながら担いでいた荷物を全て降ろす、やっぱり我が家の安心感でそれまでの緊張がほぐれて溜まってたものが全部出ちやうのかなあ、などと考えながら。一応ヘンリエッタ様のお屋敷でお風呂借りたり、早めの晩御飯とか頂いてリラックスする時間はあったんだけど、やっぱり相手は大貴族。いくら親しい相手でも緊張とかはしちやうよねえ。

「アルもお疲れ様ー、色々あつて疲れたでしょ。ちよつと早いけどもう寝るかい?」

ヘンリエッタ様からは『今日遅いし、泊まっちゃう? 泊まっちゃうわよね!』と聞かれたが丁重にお断りさせて頂いた。流石に頼り過ぎだし、帝都には自宅がある。家が他の都市とかにあればお言葉に甘えてたかもだけど、あんまり長居するのめね。アルにも強行軍させちゃったし、休ませないと思ひ、帰ってきたのだが……。

「アル?」

「……………」

私の、少し後ろにいる彼女に声を掛ける。玄関口のすぐそばで、立ち止まってしまった彼女に。

…………この子は、聡い子だ。

同じくらいの年齢の子たちと比べれば、物事の考え方や道理という

ものを驚くほどに理解している。人が何をやりたいのか、何をして欲しいのかが理解できて、その中で自分ができることとできないことをすぐに判別出来てしまう子。すごく、大人に近い子供。そうしなければいけないと思わせてしまったのか、それとも元々そうだったのか。……前者だろうね。

ゆつくりと彼女の傍まで近づき、目線が合う様にしやがみ込む。そして、いろんなことを考えてしまったのであろう彼女の顔を覗き込んだ。

「どうしたの?」

「……師匠。」

声を震わせながら彼女が言葉を紡ぐ、心の内に溜め込んでいたものが、決壊しそうな、そんな顔をしている。

今回の旅は、本当にいろんなことがあった。

最初は単なる彼女の帰郷のための旅だった。最初は想定以上の魔物に襲われたり、冒険者組合で子爵令嬢に絡まれたりと色々あったがまだ平和だった。だけど、彼女の村についてからずっと何かが続けた。そこにあつたはずの彼女の故郷は燃やされていて、すでに父は他界していた。その上すぐに盗賊たちの襲撃があり、そこから敵基地への襲撃。

彼女は、より人の死を感じてしまった。父という肉親の死、盗賊という敵の死、そして自分で人を殺すという感覚。

姉妹たちを救い出した後、休む暇もなく帝都に帰って来てしまった。……家に帰って来て、安心した瞬間に。それまで蓋をされていた感情たちが全て溢れ出てしまっても、おかしくはない。

彼女がいくら聴くても、私からすれば守るべき子供の一人。そして私を支え、超えてくれる人。

だから、今ぐらいいは親みたいなこと、させてね?

「よーこよーおー」

「え、わっ！」

加速を掛けながら彼女の靴を放り投げ、お姫様抱っこでくるくると回転しながら寝室まで移動する。あ、回転してる時は加速してないからね？ 殺人プロレスになっちゃやし、危ないからやんない。

「どーん！」

明るいテンションで靴を脱ぎ捨てた後、ベットへとダイブする。私の奇行に驚いているアルだが、私がおかしなことをしているのは日常茶飯事のように。普段の『こいつ何やってんの？』っていう冷たいお目はどこ行ったのかな？

何が起きているのかは理解している、だけど何故私がこんなことをしているのか解らない。そんな彼女をさらに困惑させるように、寝台の上でぎゅゅと抱きしめてやる。んふふ、かわいいなあ、アルは。うちの子にしちやいたいぐらいかわいい、というかもう実質うちの子か？

「どーせ、また変に考えこんじゃってるんでしょ、アル。」

「え……。」

さっき挙げたこと、それ以外にも思いつくものを全て口にしていく。別に当たっていなくてもいい、この子の心に、何かしらの引っ掛かりになれば、私の話を心に届かせるきっかけになれば。それでいい。

「どう？ 当たってる？ まあ違うのもあるだろうけど。」

「……はい。」

「私は、ずっと傍にいるよ。アルが大きくなるまで。」

すでに色々なものを失ってしまった彼女に、私があげられるものな

んでほとんど残っていない。できるのは、彼女に降りかかる火の粉を払ってあげるくらい。それができるのなら自身のすべてを投げよう。

「アルは今生きてるでしょ？ 終わったことを振り返るのは大事だけど、明日のことを考える方がもっと大事。じゃないとどんどんしんどくなっちゃうよ？ ほらアル、貴方が明日したいことは？」

「……ご飯、食べに行きたいです。」
「お、いいねえ！」

ちよつと考え込んで彼女が出した答え、彼女は迷惑を掛けないように言葉を選んでしまっている。

「そういうえばこの前行ったチーズとお肉が美味しいとこ、また行くっか。メニューまだ全部制覇してないしねえ……。あ、そうだ。こつちにピザってあったっけ？」

「……ピザ、ですか？」

「そうそう、チーズにトマト。後はバジルとかオリーブオイルとかかなあ。そういう食材が平べったいパン生地の上に乗ってる料理。こつちじや見たことないし、最悪ピザ窯から作る感じかも。今度庭にでも一緒に作ろっか！」

まあ今までトマト見たことないし、地球での原産地がアンデスだからトマト系は望み薄だけどね！ ばいばい、カプレーゼ……。モツアレラチーズは作れるのにい！ 和食は完全に無理だから諦めがつくんだけど、その上私からイタリアンまで取るのか！ 神サマのイジワル！

「アルにも何か、やりたい事、したい事。色々あるでしょう？ 一つ一つ上げて、その実現に必要な物をちよつとずつ解決していく。……。私にも、教えてくれる？」

彼女の体温を全身で感じながら、そう問いかける。私からこの子の顔は見えない。でも、何かを伝えようとしてくれてることは解る。

「強く、なりたいです。」

「わたし、今回何も、何もできなくて。ずっと師匠に守ってもらって。」

「……あの時、もつと何か、できたはずなんです。」

あの時、アルは魔法の発動に成功していたのだろう。直接見たわけではないが、彼女の体に触れた時。それまで全く動きを見せていなかった魔力たちが、全身にゆっくりとだが回っているのが感じられた。もつと自身が強ければ、もつとうまく魔法を使えていれば、戦場の空気を肌で感じ、必要な行動をとれていれば。

……アルは、私に迷惑をかけてしまうのが嫌なのだろう。私自身は何の負担も感じていないけど、彼女は私に受けた恩を少しでも返そうとしている。今以上に迷惑をかけ、恩を重ねてしまうことを私に悪いと思っている。とても、優しく真面目な子。こっちとしてはもつと迷惑かけてくれてもいいんだけどね。

「だから、だから……。」

「アル。……すぐには強く、なれないよ。」

ここは私からすれば異世界だけど、ゲームの様な世界ではない。ちよつとずつ積み上げていって、それが形になるまで待たなければいけない。もちろん、その積み上げる量を多くすることはできる、誰よりも長い時間鍛錬に費やすとか、ずっと自身を死地において経験を積み上げるとか。でもそのすべてが続ければ続けるほど破滅に繋がる諸刃の剣。

「でも、貴方の気持ちは理解した。」

「強くなりたい、私に迷惑かけたくない、全部ひとりでこなせるようになりたい、つてのもね？ だけどたった一人で強くなれないし、早く強くなろうとするなら私とかに頼らないといけない。でもそれはさらに迷惑かけることになるし……、でしょ？ だったらもう割り切っちゃいなさいな。」

むしろ骨までしゃぶって死ぬまで利用してやる！ つてぐらいやらないと。私だつてそうだよ？ 身の回りのもの全部利用して、上まで駆け上がる。罪悪感とか、迷惑かけるって思っちゃうなら昇り切った時に返してあげりやいいんだよ。そもそも私、アルに迷惑かけてもらうの大好きだし。だからつて、そうじゃなきゃずっと傍にいて欲しいとか言わないでしょう？

「いいんですか。」

「もちろん。逆にもつとワガママしてもらわないと退屈なぐらい。」

貴方は嫌がるかもしれないけど、まだ子供。子供は子供らしく自由に過ごして、大人に好きだけ迷惑かけてくれればいい。アルのことだ、こうでも言わないと委縮してどんどん小さくなつちゃうんだもの。

「さ、ここ数日色々大変だったし。もう寝ちやいませよ。……おやすみ、アル。」

「……はい、おやすみなさい。」

その後、彼女の小さな寝息を確かめた後、自身もゆつくりと目を閉じる。

いい夢を、私のかわいい愛弟子。



「よおーす、いーちゃん！ 元気してた？」

「……………いーちゃん？」

風呂場での報告から十数日後、何度かヘンリエッタ様から直接進展の方は聞いていたがある程度の目途が立ったということを聞いて安心していたところに、急な呼び出しを喰らった私は彼女の屋敷を訪れていた。まあ呼び出し自体は急だったけど、今日何があつて何が起きるのかは前々から聞いていた。ちよつとしたお芝居の依頼だ。

「えつと……、いーちゃんというのは、私ですか？」

「そうだよ？ ほら異形つて感じの図体してるでしょ？ だからいーちゃん。」

何故そんな呼び方をされたのか本気で解らないという顔をする彼、剣神祭で殺し合いをした仲である彼にそう説明する。亡国の王子だった彼は首を吹き飛ばされても復活するという「再生」というスキルを持ち、普通の人間とは思えない屈強な体を保有している。剣闘士だった頃は脳の機能の大半を奴隷契約によって制限されていたらし

く、自身が”異形”と呼ばれていたこともあまり覚えていないようだ。

いやほんとに、筋肉ムキムキマッチョマンの変態というか、筋肉のバケモノみたいな姿かたちなのになんでこんな若々しい声してるんでしょうね。声だけ聴いたら10代のボーイって勘違いしちゃいそう。……いや実年齢多分それくらいなのはヘンリエッタ様経由で知ってるんだけどさ。しかも彼女に雇われてから食事環境とかが良くなつたせいで、初めて会った時よりも体の厚みがパワーアップしていると云いますか……。

私と言えた義理じゃないけど、お前どこまで行くつもりなん？

「お互い大変だよねえ、急に呼び出し喰らつてろくな台本なしでのお芝居なんて。まあいーちゃんは立つてるだけでいいらしいけど、やっぱり式典とか会見とか肩が凝って仕方ないよね。」

「あはは、確かに緊張しますよね。……でも、ヘンリエッタ様にはお世話になってますし、自分でできる事なら何でも。」

うーん、眩しい！ なんとというかマジでピュアじゃんか！ 路地裏でぼったり会った時や、ヘンリエッタ様のとこでお世話になり始めた時にちよつと顔出したところと比べて格段にキレイ。浄化されたというより、衣食住に困らなくなったおかげで心に余裕が出来てきた感じ？ いーちゃん本来の性格が戻ってきたってことかな。

「にしてもその鎧、作ってもらったの？」

「はい、ヘンリエッタ様のご厚意で……。」

そう言いながら現在彼が着ている黒い鎧を指さす。私の武装も整えてくれている鍛冶師、”ドロ”のマークが入った箱に包まれていたらしい真つ黒な全身鎧。この国で一般的な形状のものではなく、彼の故郷の意匠が取り込まれた鎧。彼の体に合わせて作ったせいかその大きさは『これ本当に人間が着るんですか？』と聞きたくなりそうな

もの。

亡国の王子という面倒な肩書を隠すために、頑丈に作られおそらく認識阻害のエンチャントが掛かった兜を手渡してやる。同じ人間のはずなのにわざわざ両手で抱えてやらないと渡せないってのは、なんかもう色々すごいよね。

「儀礼用で作って頂いたはずなのですが、鎧も実戦想定の作りですし、この大剣も刃が入っているんですが……いいんでしょうか？」

「いいんじゃない？ 私は客人で臨時雇いみたいなもんだけど、いちちゃんは正規雇用で今後も護衛とかするんでしょう？ それを考えて作ってくれたんじゃないかな。」

前後を確かめながらゆつくりと兜を被る彼を横目に、彼の鎧の仕様書らしきものに目を通す。最初はドロからの恨み節。注文が急に入って他の業務を中止しなければならなかったことや、納期が短すぎて五徹しなければならなかったこと、また必要な素材が足りなくてわざわざ現地調達しに行ったことなどについての文句が書かれている。

その後は彼の鎧の説明がつつらと、自身にはあまり関係がないので軽く読み飛ばしてしまっただが、自身の鎧と同じようにミスリルを主な素材とし、彼の膂力から重さの制限があまりないことからとにかく重くてとにかく頑丈な鎧にしたことが述べられていた。

「まあ、面倒事頼まれてるよ……。こんどのメンテナンスの時、なんか差し入れもつていかなくちや。あ、いちちゃんも来る？」

「礼を言いに行かなければならないのは理解しているのですが、先日採寸のためにお邪魔した時色々ご迷惑をおかけしまして……。よろしければ私が礼を言っていたことを伝えていてもよろしいでしょうか？」

「あ、いちちゃん体デカいもんね。りよ、言っておくよ。」

自身の体を見ながら申し訳なさそうにする彼に苦笑しながら、了承

の意を伝える。ドロの店は一般の人間からすれば少し小さいけれど店舗として十分なスペースがある。だけど彼の様な化け物からすれば狭すぎて窮屈以外の何物でもないだろう。天井とかしゃがまないと貫いちゃいそうだし。というか彼の落ち込み様からしてもう貫いちゃったのかな？

「師匠、そろそろ準備お願いしますって文官の方が……、ひッ！」

そんな感じで彼と談笑していると、アルが私たちを呼びにやって来てくれた。が、私の隣にいる化け物みたいな黒騎士いーちゃんに驚き、軽い悲鳴を上げてしまう。いやまあ色と図体も相まって怖い感じに仕上がっちゃってるよねえ。

「す、すまない！ あ、あの、えっと！」

「あ、あわわわわわ！ だ、大丈夫です！ 大丈夫ですから！」

悲鳴を上げたアルにすぐさま謝罪を返す異形だったが、自身の声が思ったより大きく彼女をより怖がらせてしまったのではないだろうかと思ひ至り、次何を言えばよいのか解らなくなってしまう彼。その様子を見てしまい、悲鳴を上げてしまった申し訳なさと、完全にうろたえてしまった彼をどうやったら落ち着かせることができるのかと混乱するアル。

あはー！ 仲良しだねえ。

強く柏手を打ち彼らの意識をこちらに向かせる。二人とも落ち着いた？ うん、なら良し。アルも呼びに来てくれたし、待たせるのもアレだからさっさと行きましようか。

「悪い子ちゃんへの圧迫面接と、ララクラ子爵との”おはなし”。セリフがあるのこの中じゃ私だけだけど、二人とも雰囲気づくりちゃんとお願いな？」

「はいっ！」

「了解した。」

うむ、いいお返事。

(にしても、仕方ないとは言えガッツリ政治に関わってるなあ。)

二人を引き連れ、目的地まで歩き始める。二人と軽い雑談をする
が、頭の中はこれから起こることについてばいだ。

元々、厄介事の塊である政治に関わるようなつもりなどなかった。
生き残るために必要なのであれば首を突っ込んでいたかもしれない
が、市民という自由な身分になってからはそんな必要などなかった。
関わってしまったような機会は何度かあったが、“ビクトリア”という
キャラクターとしてのロールプレイも相まって何とか避けることが
出来ていた。

けれど、今回は違う。

殲滅した人物は私ではなく、ラクラ子爵が指揮したヘンリエッタ
様子飼いの私兵軍団ということになっていく。だが一つの政争を潰
し、首謀者のあぶり出しにまで関わってしまった。アルの家族が被害
にあっているという仕方ない理由は有れど、やってしまったことは確
かだ。今回の後始末に参加する必要があるのもそのせいであり、相手
側を完全に折るために必要なことらしい。

……まあここにヘンリエッタ様からの気づきがあることは十二
分に理解している。今後貴族になるかもしれない未来への布石、つて
ところだろう。現時点では伏せておくが、時期が来れば今回の功績や
剣神祭での戦績を挙げることで私を貴族へとする準備。

彼女にも色々な思惑があるのだろうが、私にとってもかなり大きな
メリットが生まれることになる。それは失ってもいい市民として扱
われるのではなく、替えの利かない貴族として扱われるということ。
今回の件で、市民の立場がどれだけ弱いのかを見てしまった。アルの
村で起きたことや、あの盗賊の根城で手に入れた資料から理解してし

まった滅ぼされた村々のこと。

(貴族であろうと死ぬときは死ぬ。だけど市民と貴族の間は、どうしようもない身分差が存在している。)

村人たちから貴族と勘違いされた時に感じた感覚、一種の資源のよ
うに扱われ、必要がなければ切り捨てられる村人たち。この世界、い
や私が元居た地球でも存在していた身分差という社会の闇。

(今はまだ私に力があるから何とかなるかもしれない、だけど今後は
……。)

私と、アル。絶対に守らないといけないラインを、手を広げる範囲
を変えるつもりはない。だがいずれ私の手の届く距離はどんどんと
小さくなり、私は彼女を守ることができなくなる。

アルが大きくなるにつれて強くなつたとしても、それが今の私を超
えられるような。彼女の身を十全に守れるようになるのかはわから
ない。一人の師としては私の背なんか簡単に飛び越えてくれるとい
う期待はあるけれど、どこかで冷静になつて現実を見なければならな
い。私が衰えたが故に、目を離してしまつたが故に、アルが傷ついて
しまうなど許容できるはずがない。

(貴族となることで立場を安定させ、より安全な状態を目指す。……
切り捨てていい可能性じゃない。)

今はヘンリエツタ様に守って貰えているが、それがいつまで続くの
かは誰も解らない。今回の政争の件も、もしかしたら守つてもらえな
い可能性だつてあつた。多くの恩がある相手だからこそ、いつまでも
頼ってられないという気持ちもある。これまでは感情論に近いも
ので避けてしまつていたが、本気でちゃんと考える必要があるだろ
う。

(ま、そこら辺はおいおい、か。今抱えてるものが全てうまく行った後に考えよう。)

幸い、今の私は仕事に恵まれてるし、支えてくれる人もいる。それに大きな仕事、ヘンリエッタ様後援で私の劇もやらなくちゃいけない。それが終わればしつかりとした時間が取れる。その時にちゃんと考えて、答えを出すことにしよう。

(さ、そうと決まれば今日のお仕事、頑張りますか！)

44：ドツキリは好き？

皆様、ご機嫌如何でしょうか。ララクラ子爵家が嫡女、マリーナと申します。覚えていらつしやらない方向けに説明すると、ビクトリア様が我が家が治めている都市、ララクラの冒険者ギルドにいらつしやつた際、剣を教えていただいた者になります。風魔法を使っていた少女、と言えば思い出される方もいらつしやるのではないのでしょうか。

そんな私が今何をしているのかというと……。

「…………ちかれたあ。」

「クソ親父それ気持ち悪いですわ……、死ぬほど気持ち解りますけど…………。」

唯一の肉親である父と一緒に死んでおります。いえ、正確に言うとして生きてはいるのですが、死んだ方がマシというか。口から魂の様なものが抜け出して真っ白になっているというか。ヘンリエツタ様のお屋敷の使用人の方がお部屋にいらつしやるので、普段ならどれだけ緊張していても貴族らしい振る舞いに努めるのですが……。

もう貴族の矜持とかそういう物が全身から抜けて、壁を背に床に座り込んでしまっています。

まあ、それも致し方ないのです。何せこんなことがあったのですから。



事の始まりは一週間前のこと。冒険者組合で出会った青髪の女性の行方を探しつつ、がむしやらに剣を振るいながら修正してくださいっ

た点を体に覚えさせていたところ、何人かの役人と共にわが父であるラクラ子爵に文が届きました。

使者の整い過ぎた格好と、父との間で行われた格式ばったやり取り。その身分は伏せておられました。どう考えても皇帝陛下直屬の方々に、その文の装丁から予測できるのは、陛下からのお手紙。

陛下から直接お手紙というだけでもう大騒ぎしてしまいそうな案件なのですが、使者の方々が纏う雰囲気というか、こちらのことを愚かなものを見るような目で眺めるその様子に何か悪い知らせであることが感じられます。父の一人娘で、次期子爵としてその場に居合わせていた私は『再婚せず血を残そうとしないことについての怒りか』と呑気に考えていたのですが、内容はもつと悪いモノでした。

そこに書かれていたのは、思わず目を疑いたくなる内容。
ラクラ子爵に臣従していた男爵たち5名の内3名が死亡、彼らの支配領域であった村々の消滅、これを行ったのが隣に領土を構える急進派の子爵であること、そして何よりこの一連の出来事が”すでに解決してしまっている”こと。

父の体から、一瞬にして生気が消えていきます。その時の私の顔も、見れたものではなかったでしょう。

ソレはいわば、貴族としての死亡宣告以外の何物でもありませんでした。

私たち帝国貴族は力の証明によってその地位を陛下に認めて頂いています。私たちが持つ”力”、それを使うことで陛下から譲り受けた土地を守護し、その土地を育む民を守護し、自領や自国に迫りくる敵を排除し続けなければいけません。

これがまだ他家、財力や生産力などの単純な武力以外によって爵位を任じられた家であればまだ取り返すことができました。しかしながら我が家が持つのは単純な”力”のみ。帝国建国時から陛下の盾となり、剣となることでその信を得てきた家です。帝都で何か政争が起これば真っ先に駆け付け、この命尽きる瞬間まで陛下を守り続け

る。外部からの侵略を受けたその時はこの魔力尽きるまで敵を殺し続ける。そんな家が我々でした。

事実。我が家はこれまで定められた役目に則り、この体に宿る風をもって陛下を、皇室をお守りし続けてきました。その歴史こそが私たちの誇りであり、今後も続けていかなければならない定め。

それ、なのに……。

蓋を開けてみれば陛下の剣や盾となるはずの私たちは錆び付いており、愚かにも他国どころか自国の同胞に裏切られ共に帝国を守ると誓った同胞たちを失った。その上自身の尻拭いすらできず、同胞たちが無念にもその骸をさらしていたころ、私たちは自領でぬくぬくと過ごしていた。してしまった。

おわりだ。私たちは気が付かなかったとはいえ、与えられた領土を荒らしてしまい、その力の証明すらできなかった。これまで陛下から頂いていた信頼に背き、先祖たちの誇りを穢した。

「このアセルジ子爵の乱はプーリア公爵……、ヘンリエツタ様の私兵が対処なされました。一週間後に行われる御前会議では、ララクラ子爵殿が公爵閣下の私兵軍団と子爵殿騎士団の混合軍を指揮し、乱を収めたという体で進行します。この件については一部の者しか伝えられていないため、露見せぬようにと。」

「か、かしこまりました。……あ、あの。陛下はなん、と。」

「何も。では、しっかりとお伝えいたしましたので。詳細はこちらに記していますので当日までにしっかりと読み込んでおいてください。」

震えながらそう問う父に、使者の方は冷たくそう言った。陛下から何もない、ということ、もう私たちに価値はないと見限られたからに他ならない。毎年というわけではないが、私たちはその与えられた役割のこともあり、何度かその御尊顔を拝見したことがあり、お声掛

けを頂いたこともある。決して強い交友があつたわけではないが、気さくな性格でいらつしやる陛下は私たちに何度も温かいお言葉を掛けてくれた。

父がその場に座り込み、私も全身から力が抜けてしまう。

それからのことはよく覚えていない。

貴族としての力を証明できなかったということは、最低でも爵位の没収。最悪は命で償うという結果になるだろう。……せめて最後まで貴族として、統治者として恥じないようにと思つた父は人が変わったように仕事に打ち込んだ。次のこの地を任せられる者に迷惑を掛けぬように引継ぎの準備を行い、せめてもの償いとして私財を全て投げ打ち守れなかつた村々の復興に使つた。

私も、一族の者として恥じぬように父の手の届かぬところを手伝い、できる限りのことをした。

そして、御前会議当日。

これまでであれば爵位を持たぬ小娘など、陛下や元老院の方々も出席する御前会議に参加できるはずもないが、今回は乱を収めた一人として出席を認められた。そこで初めて見たものは、この国が抱える問題。陛下の下で長期的な繁栄を続けようとする保守派と、各貴族の力をさらに高め皇帝ではなく貴族が政を司ろうとする急進派の二つ。そしてどちらにも属さない傍観者たち。

話には聞いていたが、自身の様な経験の薄い小娘でも対立が見えてしまうほどとは思っていなかった。そして我が家はその政争の真つただ中にいるということも。

父は、与えられた役目を全うした。

爵位の低さという問題と、これまで中央の政治に関わらずただ皇室

の守護者たらんとしてきた私たちも、分類するならば保守派。保守派の人間として急進派が引き起こした乱を収め、彼らが企んでいた行いを暴き、その首謀者と関わった貴族たちを晒し上げた。私たちが一週間前に受け取った台本の通りに。

最後までラクラク家の者として。その想いを胸に演じ続けた父は無事最後までやり切った。すべてが終わった後に彼の身を包み込んだのは何も知らぬ傍観者たちの賞賛の声と、素知らぬ顔で功績を称える急進派の者たち。そして暖かな言葉を投げかけながら全く笑っていない保守派の方々。

皆が優秀な臣下であった男爵たちの死を悼み、父が行ったことになっていく功績を称えた。父はその言葉に応え、実働部隊の一人として活躍したことになる私も拙いながらに言葉を紡ぎ、返した。

最後まで陛下が冷たい目で私たちを眺めていらつしやることに、恐怖しながら。

全てが終わった後、せめて陛下に謝罪したいという私たちの声は遮られ、そのままプーリア公爵家、ヘンリエッタ様の屋敷まで連れてこられた。これすなわち陛下が私たちの様な役立たずの顔など見たくないという意思表示であり、先代の皇帝陛下から信頼厚いヘンリエッタ様に裁定を任せられたということに他ならない。

陛下に謝罪すらできなかつたこと、私たちが役目を果たせなかつたことが原因と言えども、その事実は私たちの心に無視できないダメージを与えた。自身が全く何の関与もしていない功績を称えられ、同じく陛下を守る貴族の方々から虫を見るような目で称えられるという地獄を過ごした私たちにとってその衝撃はとんでもなく大きすぎて、完全に精神が破壊されてしまつてもおかしくはない。

……まあここでようやく冒頭に帰ってくるわけです、はい。

本来であればヘンリエッタ様のお屋敷にお呼ばれされるなど、私の

様な田舎貴族の娘からすればまさに天にも昇る様な心持ちになる出来事だ。それぐらい彼女のネームバリューは大きい。

先代陛下の幼馴染として子供時代を過ごし、本来は国母になられるはずが先帝が違う方に恋をなされたことから潔く身を引いた方。先帝がご結婚なされてから家の繋がりを重視し同じ保守派の公爵家と結婚し、子宝に恵まれる。さらに先帝にお子が生まれた際、今の陛下が生まれた際は陛下の教育役として民を導く教えを説くなど、その一連の物語は吟遊詩人がどの酒場でも歌う鉄板だ。

そしてその身に宿る魔力も強力で、アプーリア家が代々修めている大規模殲滅魔法の威力は正に魔法を学ぶものにとつての憧れであり、力の象徴だった。その上魔法だけではなく身体強化を扱った近接戦闘もできると聞く。まさに貴族令嬢の憧れと言つてもいい存在だった。

普段の自身ならば舞い上がって喜んだのだろうか……、今回は件が件である。喜ぼうにも感情が沸いてこない。

人目を気にせず、最後まで貴族として振舞うために少しでも気力を回復させようとしていた時……

「リンベッタ・ベントウス・ララクラ様、マリーナ・ベントウス・ララクラ様。主人が謁見の間にてお待ちです。」

私たちの名前が、呼ばれた。



「……マリーナ。」

「解っています！ ……ラクラクラ家の娘として、最後まで。」

自身も疲れを隠せていないのに、父は私に何か声を掛けようとした。だがそれを遮り自身の覚悟を口にする。普段は色々と気に入らない父ではあるが、有事の際に頼りになる人間であること、家族を思う心はしっかりと持っているということを私は知っている。精神的な疲労と緊張に押しつぶされそうになりながらも、まだこの肉体は動く。

気を引き締めた私の顔を見て、父も覚悟を決めたようだ。先ほどの御前会議で見せたラクラクラ家の人間として相応しい覇気を纏い始める。

「すでに主人がお待ちです。」

「……案内、感謝する。」

両開きの大きなドアの前まで先導された私たち。その装飾や両側に使用人の方が立っているあたり、いかにもという感じがする。父とお互いに最低限度の身だしなみを確認した後、ドアの傍に立っていたメイドの方に父が目線を送る。

「リンベッタ・ベントウス・ラクラ様、マリーナ・ベントウス・ラクラ様。入室なされます。」

ゆつくりと、ドアが開けられる。

ほんの少し、そう。指すら入らないほどの隙間が開いた瞬間、私は後悔した。

何でもっと、強い覚悟をしなかったのか。

全身が火に包まれたのかと錯覚するほどの魔力、そして生きること
を諦めてしまうほど高密度な闘気、その二つが私たち二人を襲った。
その場で座り込んでしまわなかったこと、声を上げなかったことは奇
跡と言ってもいいだろう。

何秒、経つてしまったのだろうか。永遠かと思える時間の中でいち
早く動き出したのは私の前に立つ父だった。何度か戦場に出ていた
こと、そしてこの部屋にいた方々が殺意を含まぬ気を及ばせていたの
が理由なのだろうか。当時の自身には理解が及ばなかったが、動き出
した父のおかげで意識が現実へと戻つて来、弾かれたように動き出し
たことは覚えている。

全身を震わせながら足を前に進ませ、父が跪いた少し後ろで私も同
じようにする。地面への接点が増えたおかげか、ようやく部屋の様子
を確認できるようになった私は、顔を伏せながらも部屋の全体を見渡
した。

私たちの正面にいるのは、公爵家の人間にしては質素で、でも全く
品位を落とさないドレスを身に纏っているヘンリエツタ様。私から
見て彼女の左側にいるのが、人間とは思えないほどの巨体で真っ黒な
鎧に身を包んだ騎士。そして右側にいるのが、この息をするだけで倒
れそうになってしまう重圧の中で何もなければのように佇む従者を従
えた、白騎士。

……あの時、私に剣を教えてくれた人だ。

「ほ、ほんじ」

「前置きはいいわ、時間がもったいないもの。久しいわねリンベツ
タ。」

「はッー！」

何かを話そうとした父を遮り、ヘンリエツタ様が父へと声を掛け
る。自身のすべてを理解されている様な通った声。一瞬にしてペー
スを握り、父を支配下に置くような声。私たちの様な田舎貴族では持

ちえない、生まれながらにして人を”使う”者が持つ覇気。

「その子が貴方の娘ね、顔を上げなさい。」

ゆつくりと、顔を上げる。決して顔が恐怖に染まらぬよう、集中しながら。私の方を見て少し微笑まれるヘンリエッタ様の目は全く笑っておらず、氷のような瞳でこちらを見透かしてくる。黒騎士の方は兜でその顔が見えないがその向きから明らかにこちらを向いている。そしてあの青髪の彼女は、冒険者組合で私に見せた顔とは比べ物にならない顔。全くこちらに興味がないような、そんな冷たい瞳を向けていた。

「名前は？」

「マ、マリーナ・ベントウス・ララクラと申しますッ！」

「そう……、いい名ね。」

両親から頂いた名を褒めてくださったが、その瞳が持つ冷たさは一切変わらない。私のことに興味が無くなったのか、ヘンリエッタ様が父の方へと視線をずらし、纏う雰囲気により一層重いものへと変化する。

「さて、改めまして名乗りぐらいはしてあげましょうか。ヘンリエッタ・マニスカラ・クストス・アプーリア、よ。気軽にヘンリとでも呼べばいいわ。それでリンベッタ、何故私が貴方を呼びつけたのかは理解してるかしら？」

「ま、まことに申し訳あり」

ごん

父が謝罪を述べようとした瞬間、白騎士の彼女が前に掲げていた剣で床を叩きつける。その瞬間父に降り注ぐのは、地面にめり込んでし

まっっていると錯覚するほどの鬨気。父に向けられたはずなのに、私すら気絶してしまいそうなほどの熱量が私たちを襲う。

「閣下の間に答えよ、子爵殿。」

「も、申し訳ありません。……理解して、おります。」

「あら、ならいいわ。わざわざ説明せずに済むもの。」

ころころと無駄が減ったことを喜びながら、彼女は笑う。

「ああ、そうだ。言い忘れてたわね。隣にいる白い子、この子があの痴れ者の企みを止めてくれたのよ？ たまたま休暇の旅行中に盗賊たちの基地を見つけて、一人で全部潰しちゃったんですって。すごいわよねえ。ほらリンベッタ、お礼ぐらい言えば？」

「こ、この度は我が臣下たちの仇を討ってください、ありがとうございます。最大限の、感謝を。」

「……その礼を受け取ろう、子爵殿。」

まったく興味がなさそうに、事務的にそう答える彼女。ヘンリエツタ様はその様子を見ながら何が面白いのか全く理解できないが、楽しそうに笑っていらっしやる。まるで本来見れないはずのものを見て、それを楽しんでいるかのように。

「いいわねえ。ちゃんとお礼を言える子は嫌いじゃないわ、ねえビクトリア？」

「その通りかと。」

「ふふ……。さ、あまり時間はないのだし早速本題に入りましょうか。」

ほんの少しだけ魔力を弱めた彼女は、そう続ける。

「陛下は強く失望なされているわ、長年皇室の剣となり盾となってきた

たラクラが自領を脅かす魔の手を払うどころか、気づけなかったことに。貴方がぬくぬくお家で過ごしていた間、何人の部下が死んだのかしら?」

「……我が友であった3名の男爵と、その家族。彼らを主として慕っていた騎士たちが皆、凶刃に倒れました。」

「よねえ? 確かに貴方は個人としてはちよつと強いのかもしいないけれど……、その力を活かさなければ貴族ではない。冒険者でもあなたと同じくらいできる人はいるもの。貴族の力は、肝心な時に振るえるから貴族。私の解釈は間違っているかしら?」

「いえ、間違っておりません。」

父と、ヘンリエッタ様の問答が続く。子爵である父と、公爵であるヘンリエッタ様の会話に自身が入り込むことはできない。私に許されていることは、ただ裁きを待つことであり、せめて貴族としての誇りを示し続けることだけ。

「今回の件、急進派の者たち。特に陛下の力を落とそうとしていた者たちが暗躍していたから私がテコ入れをしたけど……。本来ならそのまま取り潰しになるような事件よ? それが御前会議では愚かな企みを阻止した英雄サマだもの、全く面白いわよね。……リンベツタ、貴方は事の重大さ、名家の一つとして数えられる貴方の家が自身の代で潰れそうになっていたこと、本当に理解しているの?」

「はい、強く理解しております。……同時に、悔やんでも悔やみきれぬほどに、後悔しております。」

「……ならいいわ！ おしまい！」

その瞬間、私たちを包んでいたすべてが嘘のように掻き消える。ヘンリエッタ様が纏っていた魔力も、二人の騎士が放っていた闘気も、全て最初から何もなかったように。そして先ほどまでの雰囲気は嘘だったかのように朗らかな笑みを浮かべ、優しそうな眼をしているヘンリエッタ様がそれを助長する。

「ごめんなさいねえ？ 特にマリーナちゃん、怖かったでしょう？」

特にこの黒い子、体も大きいし怖いでしょう？ でも中身はとっても優しい好青年だから我慢してあげてよね。それにビクトリアも。」

「ビクトリアちゃんだよ〜！ 元気〜？」

「ほら、こんな愉快な人なのよ！ ……それ今度私の部屋でやってくださる？」

あまりもの落差で脳が完全にバグる、父も父でマジで何が起きてるのか理解しきれていない。というか黒騎士様は闘気を抑えて姿勢を崩しただけだけど、ビクトリアと呼ばれた白騎士の彼女の方はマジで人が変わったかのように思えてしまう。さっきの厳格で人に全く興味がないかのような人間はどこに消えてしまったのか、人懐っこい笑顔を浮かべてきやぴきやぴしていらっしやる。……あ、やばい。心臓が！ 高低差で！ 高低差で死ぬ！ なにあれ、ナニアレ！

「いや〜ごめんなさいね？ 反省してるかしてないのか解らないからドッキリしかけちゃった。でもよかったわ〜、ほんとに反省してなかったらお掃除の手間が増えちゃうもの。血の汚れは落ちにくいか

らねえ。」

その言葉を聞いた瞬間、混乱していた精神が一瞬にして叩き直される。この方は、私たちは何もできなかった事実を悔やみ、反省することが出来ていなければこの場で処理なされるつもりだった。そう口にしたからだ。今見せている人のよさそうな顔、そして先ほど見せた冷たい氷の様な顔。どちらも、ヘンリエッタ様を構成する部分の一つ。

それを理解させられた私たちは、崩れてしまった姿勢を正す。

「今回の件、陛下も私も重く受け止めていることは確かよ。ララクラが自領の出来事を完全に把握できてなかったことと、その臣下が命を散らしてしまったこと、そして急進派が貴方たちなら崩せると判断し、襲ったこともね？　今回はビクトリアがたまたま潰してくれたから主導権をこちらが握ることができたけど……、このままだとまた繰り返してしまう。」

「陛下が求めていらっしやるのは、ララクラの早急な立て直しと、強化。そして伯爵位への陞爵よ。」

「……伯爵位、ですか。」

ヘンリエッタ様の言葉に、父が疑問を返す。父の声もさつきまでの必死な声と比べると少し落ち着きを取り戻してきている。

「そ、まあ簡単に言うとは急進派がやろうとしたことをこっちがそのままやり返してやる、ってこと。ララクラを伯爵位にして、元老院議員まで押し上げる。そうすることで急進派の力を削ぎながら、保守派。この場合は皇帝派かしら？　そのパワーアップってところね。」

「し、しかしもし今回の件。発表した内容通り進めたとしても元老院

どころか伯爵位すらも……。」

「ええ、その通り。貴方が侵攻を許してしまっている以上その汚点は雪げない、相手の計画を阻止した功績を拡大解釈してトントンってところね。だから……。」

「マリーナちゃん、貴方の出番よ？」

「わ、私。でしょうか？」

「そ！ 強くなってバンバン功績稼いで、ララクラ家を自他ともに認める真の名家にしちやいませよ！」

45：少しずつ積み上げて

「マリーナちゃん、貴方の出番よ？」

「わ、私。でしょうか？」

「そ！ 強くなつてバンバン功績稼いで、ラクラク家を自他ともに認める真の名家にしちやいませよ！」

ヘンリエッタ様が、私と同じくらいの年齢の子にそう言う。彼女に詳しい師匠であれば『あれ絶対なんか企んでる顔だよ……。』と言うであらう怪しい顔で、彼女は自身の計画を淡々と話していく。あ、どうも。バリバリ従者モードのアルです。

「対外的な貴方のお父上の評価だけど、未然に反乱を防ぐことができず、多くの配下を失つてしまった。そして娘がその失敗を誰も認めない成果を上げることでは精算する。お話としては完璧だし、やらかしたリンベッタじゃないおかげでとやかく言われる筋合いはない。うんうん、我ながら完璧ね！ しかも貴方の性格なら孫の補佐とかも任せられそうだし元老院入りも私の方で推せる……。いいんじゃない？」

「お、お待ちくださいませ！」

楽しそうに話すヘンリエッタ様に、マリーナと名乗る彼女が声を上げる。その顔には明らかに焦りがあり、言いたいことがあるのだから。

「わ、私は魔術も剣も未熟で！ そんな私が伯爵位など……。」

「あら、それは今の話でしょうか？ 私は未来の話をしてるのよ。ビクトリアから聞いたけど……。強くなりたいんでしょう？」

親戚の子、それこそ孫に対して物事を教えるように言葉を紡ぐヘン

リエツタ様。今更だがようやく私の中で理解が追いついた、このマリーナっていう貴族様この前師匠が言ってた風魔法を使うご令嬢だ。なるほど、道理で師匠の騎士の演技見た時ヤバイ顔してたんだ。ふふん！ウチの師匠はすごいんですよ！強さとか性格とか謎に引っ込むお腹とか。謎は多いですけど、こと演技に関してはマジで別人と思えるほどすごいです。

一応コツとか教えてもらってるんですけど……、今の私じゃ1つの役をやり切るので精一杯。さっきからずっとやってるお澄まし従者の役だけです。

「確かに1人で強くなるのは難しいわ、でも貴方の目の前にはちやうどいい支援者がいる。あなた一人ぐらい余裕で育てられるお金に、育ててもおかしくない権力の持ち主。その上その支援者は、とてもいい先生を抱えている。というわけでビクトリア？この子お願い♡」
「……えッ！私ですか！」

あ、師匠の素だ。めずらし。

「そうそう！ほらちやうど今アルちゃんの面倒みてるでしょ？たまにでいいからこの子に剣や実戦を教えてあげてくれない？ハーバル……、ああ黒騎士ちゃんね？この子、手加減とか本当に無理な子だし……。そうなると人に教えられて、めちやくちや強いのもってビクトリアちゃんぐらいじゃない？」

「ええ……。」

「申し訳ないビクトリア殿……。実は以前警備兵の方々と模擬戦をしたことがあるのだが、どれだけ手加減しても教会送りにしてしま……。」

脳内に浮かぶのはペコペコと頭を下げて謝罪する異形さんに、担架で運ばれていく護衛兵の皆さん。まあ『頭蓋骨？握りつぶせるよ』って公言してる師匠と打ち合いして勝てる力量の持ち主と戦った

らそうなりますよね……。いや護衛兵の皆さんが弱いわけではないんですよ？ 確実に私が戦ったあの兵士たちよりは強いはずですし。二人が規格外過ぎるだけで……。

「ああ、うん。まあお前体デカいしね。」

「本当に申し訳ない。」

本当に申し訳なきさそうにする黒騎士こと異形さんにそう答える師匠。というか異形さんってハーバルって名前だったんですね。師匠は頑なに名前で呼ばないし、私も異形さんで覚えちゃってたのでなんかすごく新鮮です。今度からお話するときはお名前で呼ばなきや。

「マリーナちゃんって使う魔術、詠唱魔法よね？」

「あ、はい。そうです！」

「ならビクトリアに剣を教えてもらって、魔法の方は私が今度魔法学園から呼ぼうと思ってた講師の方がいるからその方に教わるといいわ。ああ、でも元々そこにいるアルちゃんのための先生だったから、一緒に受けてもらうことになるけど……。二人とも大丈夫かしら？」

「大丈夫です。」

従者の姿勢を維持しながら、あまり堅苦しくならないように返答する。私に遅れて令嬢の方も、了承の旨を返答した。ふふふ、私の方がすまーと、に返答できた！ 私の勝ち！ 師匠の話によるとあの時点では魔法の熟練度において私が負けていたみたいだけど……。例の事件のおかげで魔法が使えるようになって以降無茶苦茶練習したおかげで火のルーン以外にも使えるようになってる！

つまり師匠の弟子である私の勝利！ 勝った！

「……ヘンリエッタ様さあ、まだ私了承してないんだけど？ それにマリーナちゃんでもよかったっけ？ 彼女の返答も聞いてないし。」

「いかアルも一人増えるけどいいの?」

「あら。そう言えばそうだったわね。でも……。」

「よ、よろしくお願いしましゅ!」

「私は大丈夫ですよ、師匠。」

師匠の言葉に不思議そうな顔をしながら私たちに話を振るヘンリ様。それに顔を真っ赤にしてそう答えるマリーナ嬢と、淡々と何もないうように答える私。流石に毎日ずっと家にいられるとなると私も渋ったかもしれないが、たまにという話だから大丈夫だろう。そもそも私よりも弱い人が強くなろうと頑張ろうとしているのだ。”姉弟子”、としては大きな心で受け止めてあげるのが道理。そう、”姉弟子”として!

「ええ……、反対してるの私だけ?　なんかワルモノみたいじゃん。」

「あ!　じゃあビクトリア?　ちよつと耳かして?」

ちよいちよいと手招きして師匠を自身の近くまで呼ぶ彼女。今更だともうテンションがいつものヘンリエッタ様、師匠と楽しく遊んでいらしている時の雰囲気になっている。一応まだラクラク子爵様とかその娘のマリーナ様とかいるんだけど、色々大丈夫なのかなあ?　と思ってしまうが大丈夫そうだ。

マリーナ様は顔と耳を真っ赤にしながら違う世界に飛び立ってるし、お父さんがそれを見てガチで困惑。一応謁見の最中ということでは何とか娘さんを現実に戻そうとしているが、何をやっても想像の世界から帰って来ない。あ、鼻血出てる。マリーナ様も”そっち側”だったんですね……。

「というか想像だけでなんかヤバイ感じになってるのに剣とか合わせ始めたらもつとヤバイことになるんじゃない?　ほんとに修行でききる?」

「(今回の件、対外的には私の私兵と子爵の騎士団の混成軍ってことに

なってるから、一部の人にしか貴女のことバレてないし……。その対処したってことでなんとかならない？」

「（一部の人がってそれ絶対ヘンリ様レベルで身分高い人でしょうが！私はあるまりそっち側に行きたくないんだって！）」

「（え〜？ あなたなら思想的にも大丈夫だし、どうせ領地経営とかもちゃんとできたりするんでしょう？ ビクトリア様だし。）」

「（んなわけないでしょうが！ 私にできるのは切った張っただけ！そりやアイデアぐらいは出せるけど実務は無理なんだってば！）」

……いやアイデア出せるだけヤバくないですか師匠？ 小声ということもあり何とか子爵様たちには聞こえてないだろうが、私や異形さんにはちやっかりと聞こえている。師匠とヘンリエツタ様の会話や、オーナーとの会話を横について何度も聞いているからわかるけど、師匠の出したアイデアを実用化した場合何かしら成功しているところが多い。

いや成功した分それ以上の失敗とかあるんだろうけど、とにかく師匠が領地運営や商業への知識を持っていることは確か。ヘンリ様の思想的に、そのアイデアの出し方とかそういうのもマリーナ様に教えて欲しいってところなんだろう。……今更だけど師匠のその知識とかどこで手に入れて来てるんですかね？

「（だから！ 政治には！ あんまり関わりたくないの！ 位高い人に認知されるだけで小市民にはキツイの！）」

「（……あ、ごめん。そう言えばあの子、陛下にも成り行きで言っちゃったわ。てへぺろ！）」

「（ちよ、おま！ 何やってんの！）」

わあ、カオスなことになってるう。

あ、ちなみにもう色々收拾がつかなくなってきたのでこの謁見はお開きになりました。淡い緑色のドレスを鼻血で真っ赤に濡らしなが

ら出血多量で気絶したマリーナ様と、無茶苦茶ほくほくしたお顔のヘンリエツタ様。そして肩で息をしながら天を仰いでいた師匠が印象的でしたね。



「はあく、始まる前からしんどい……。」「

庭の地面にある小石を砕きながらそんな愚痴を口にする。普段はアルが傍にいるときにネガティブ100%の発言をすることはできないだけ控えているのだが、正直気が重いのは確かだ。

「確か今日いらっしやるんですよね、マリーナ様は？」

「そうだけど……。なんかアル滅茶苦茶ウキウキしてない？ 普段ならお貴族様相手だしすごく緊張してそんなものだけだ。」

「確かに緊張はしてますが……。それよりも妹弟子ができるのが嬉しいんです！」

鼻歌を歌いながら庭の掃除をする彼女、今日はここで軽く素振りとかしてもらった後にアルと打ち合ってもらおうかと考えていた。年齢の割には剣が使えると言ってもアルには遠く及ばない、現実を見ながら超えるべき目の前の壁をいち早く理解してもらおうとそういうメニューにしている。

「上手く行くといいけどね。」

あの後、ラクラ子爵の謁見を済ませた後。もう一度用意された場ですべてのことが決まった。ヘンリエッタ様によるラクラ領への内政指導や、経済支援。そして現ラクラ子爵への教育と再婚相手の決定。本来なら内政干渉になるためできないようなことも、ヘンリ様の権力パワーとラクラ子爵のやらかしが原因ですべて通り、全てが順調に進んでいるらしい。

アルの故郷も例外ではなく、少しずつではあるが復興が進んでいてラクラ子爵の騎士団が定期的に見回りをしてくれているから安心して暮らせているみたい。先日少しだけ二人で顔を出しに行ったのだが、他の地域から新たに入植した人も増え無事に村として機能するような物事が進みだしていることも確認できた。

魔物の忌み袋、盗賊たちの被害にあつてしまった女性たちだがその後ラクラにある教会でお世話になっていているらしい、社会生活に復帰するまでは時間が掛かるそうだが、教会の人間がつきつきりでケアをしているみたいだし私にできることは残っていないかった。助けるのが遅くなった詫びも込めて少し多めに寄進しておいたし、後は彼女たちがもう一度立ち上がるのを祈るばかりだ。

んで、話を戻して私個人の話。ヘンリエッタ様がやらかして上に私のことが伝わってしまったようだが、まあそれは忘れることにする。今の自身にできることは何もないし、ヘンリ様の性格的に私が本気で嫌がることはしないだろう。必要があれば貴族になることも考えるとは言ったが、それは騎士爵だったり男爵といった低い位のこと。魑魅魍魎の厄介な中央政治に関わる気は全くないのだ。

「……でもまあ断れなかったんですけどね？」

結局言いくるめられてしまい、私は風魔法を操る彼女。ラクラ子爵の一人娘であるマリーナを弟子とすることになった。ヘンリエッタ様が『元老院にぶち込むわよ〜！』と張り切っているという事は、いずれ彼女は予定通りの道をたどるのだろう。つまり未来の伯爵サ

マで、元老院議員サマだ。いくら現在の彼女が爵位を持っておらず、厳密にいうと”貴族”ではないといっても胃が痛いには変わりない。

『アル、姉弟子様と同じように扱ってくださいまし！』って言われても、ねえ？」

一応親御さんである子爵様からも許可は頂いているが、大事な一人娘らしく『お手柔らかに』指導することが求められた。ヘンリエツタ様に睨まれてすぐに言い直していたが、まあ本心はケガ一つしてほしくないのだろう。まだ彼女も体が出来上がっていないし、剣闘士のようにボコボコにしなから体で覚えさせるって方法を取るつもりはないのだが……、まあ気を遣う。

「一応ヘンリ様から正式なお仕事としてお金貰ってるし、アルの魔法の先生の授業料全部あつちで持つてもらおうことになったから頑張らなきゃいけないのは確かなんですけど。」

愚痴を吐きながら地面に落ちていた小石を踏みつぶし、砂にする。

でもまあ、思いつきり政治案件を潰しちゃった代償としては安い方か。それが良いことであれ悪いことであれ普通貴族同士の戦争に口出して止めてしまえば要らぬ注目を浴びてしまう。それを彼女が全部止めてくれたから今も私は一市民として生活できているわけだ。それを考えれば一人の貴族子女をまともに戦えるぐらい鍛えるってのは安い注文だよね。

両頬を軽く叩き、気合を入れ直す。

「ま、頑張りましたよ！ ということではアル？ マリーナちゃんも模擬戦してもらおうと思うからもう準備しときな。」

幕間

46：怒った？

あ、どうも。アルです。

私たちがララクラ子爵様の謁見に参加してから十数日後、ようやくいつも通りの日々が戻って来ました。今日も今日とてお家のお手伝いと、師匠にしごかれる毎日です。確かにしんどいですが、強くなりたいと望んだのは紛れもない自身。その上三日後には初めての妹弟子がやってくるので、振るう剣にもより力が入ります。……まあ今剣握ってないんですけど。

「ふう、もう暑くなってきたし夏かあ。」

現在は筋力を上げるための鍛錬代わりに、水汲みを行っています。師匠が魔法で生み出した水を庭の離れにある厩舎まで運ぶお仕事です。ルペスとコピア、師匠のお馬さんの飲み水用ですね！二人のお世話は結構重労働で、私だけではとても出来ないので普段は帝都にある大きな厩舎にお世話をお願いしています。ですが移動の用があったり、荷運びの手伝いをしてもらうときは家の厩舎に来てもらっています。今日もそんなかんじですね！

「ルペスさん、コピアさん。お水持ってきましたよ。」

『おお、待ってました。』

『ちよ、コピア！　せめて注いでもらってから飲みなさいな！』

私が運んでいた桶に思いっきり顔を突っ込むコピアさん、そのせいで水しぶきが自身の服にかかってしまう。その様子を見て、コピアさんに怒りながら申し訳なさそうに謝ってくれるルペスさん。大丈夫

ですよ、ちょうど日差しが強くて暑かったので涼めましたから。あ、そうだ。せっかく来てもらってんですしブラッシングとかした方がいいですか？

『ぜひお願いするわ、と言いたるところだけど……。確かビクトリアが“オーナー”という者のところに行くのでしょうか？ 時間的に難しそうだし、次の機会に。』

『ですです。』

「あ、そう言えばそうでしたね。」

「しよゆこと。」

お馬さん二人と話していると、背後から師匠の声が聞こえてくる。さつきまで庭先で紙を広げながらうんうん唸っていた師匠がそこにいた。たしか劇用の台本、その原案を書いてるって言ってましたけど完成したんですか？

「ううん、まだ全然。でもそろそろ約束の時間だし切り上げて出発しようかなって。コピア、行けるかい？」

『はいはい。』

パカパカと散歩に行くようなノリで歩く彼女の背に、師匠が飛び乗る。髪を後ろで纏め前へと流し、チュニツクとズボン。その上からトガを羽織った普段着の彼女だが、そのスタイルのせいかわそれだけで絵になっっている。一緒に生活する中で耐性の付いている私なら『なんで勢いも付けずにジャンプして馬に飛び乗れるんですか？』という疑問を浮かべるだろうが、一般人なら単に見惚れてしまうだろう。

「あ、そうだアル。これお願い。」

「？」

馬上から投げ渡されるのは、かなりの重さを持つ小さな袋と一枚の

紙。袋の中身を見てみれば銀色の塊がたくさん並んでいて、紙には食
材などの必要な物が書かれている。まあ誰がどう考えても『おつか
い』だろう。相変わらず桁がおかしいが。

「ルペスとそこに書いてあるの買って来てくれる？ 売ってなかった
らそのままでもいいから。あと買いに行くのはいつもの商店街ね？
治安いいところ。」

「りよ、了解です。ガンバリマス」

「……もしかしてまだ慣れないの？」

そう言いながら呆れる師匠だが、多分これはどうやっても慣れない
と思います、はい。だって私の手の平の中には銀貨が20枚以上入っ
た袋が一つ、明らかに2000ツケロを超えている。そして忘れもし
ない自身が売られた時の値段が2000ツケロ。つまり自身の手の
平の中にはあの時の私以上の金額があるということに他ならない。
そりや震えますし慣れませんよ！ というかお使い表見る限り明ら
かに貰い過ぎです！ 子供に渡す金額じゃないです！

「そう？ なんか欲しいものあったときに買えなきや悲しいかな、つ
て。ほら宝石とか？」

「私そんな強欲じゃないですっ！ というか要りませんよそんなの！
なんで買うんですか！」

「そっか。まあいいや、別にそれ返さなくていいし、好きに使ってね
え。」

「ちよー！」

そう言いながら優雅に出発する師匠、返そうとしたがあの人々の性格
的に絶対に受け取らないだろう。というか師匠私にほんこんんな
大金渡してほんとに大丈夫なのだろうか？ 村に住んでた頃の私た
ちが冬を越せるぐらいの金額だよ？ 帝都で一食食べて5ツケロと
かそんなんですよ？ そりや剣闘士のころから滅茶苦茶稼いでる師

匠からすれば端金なのかもしれないですけど……。

『まあまあ、本人が使っていていって言うてるんだし、自由にすればいいんじゃないの？ 何か買うでもいいし、貯めるでもよし。』

「そういうものなんですかね……？」

『あと貴方なら変な使い方はしないだろうっていう信頼もあるのかもよ。アルだけに。』

ルペスさんがそんな言葉を投げかけてくれる。最後のアルだけについての意味が解らなかったけど。なんか“ドヤヤ”って顔してるから何かしらのギャグなんだろうけど、何も掛かってないような気がする。なんだろう、お馬さんの中で流行ってる激ヤバギャグだったりするのだろうか。とりあえず愛想笑いだけはしておこう。

「あはは……、あ！ そうだ！」

思いがけない大金と、高価な物という切っ掛けが私の記憶を呼び覚ました。思いついたらすぐ行動、ルペスさんに謝ってからダツシユで家の中へと戻る。目的地は師匠の書齋で、本棚の一角。

「レシピレシピ……、これだ！」

教会が発行している菓子本、その最新版を手に取り該当のページを探し当てる。

「これ！ プリン！」

『なにコレ、ぷりん……、っていうの?』
「はい!」

教会のレシピ本、そこに書かれているレシピとイラストを二人で見ながら必要な物を書きだしていく。

教会は神様へのお祈りとか感謝とかを毎日している組織で、私たちにそのやり方を教えてくれる組織でもある。でももう一つの側面もあって、菓子や料理の探究者という顔も持っている。まああの人たちは毎日神様にお供え物としてお菓子を納めているみたいだし、そういうのも研究しているのだろう。世界中の教会からお菓子をお供えしているわけだから、より自身のいる場所に目を向けてもらえるようにその地独自のお菓子だったり、新しい品を頑張って作り続けている。

そんな教会の人たちは、神様に褒めて貰ったお菓子や料理のレシピを定期的に私たち市民に販売してくれているのだ。ウチにも季節ごとにレシピ本が教会から送られてきている。なんでも師匠が定期的に寄進しているそうで、この本もレトウス司教から送られてきたものだ。ちなみにこのプリンの隣には師匠が発案したプリンアラモードっていうお菓子が載ってまして……。

『カスタードプディングにカラメル、そこに生クリームや果物。しかも牛の乳を冷やして固めたアイスまで乗せるとは……、見た目もさることながら一皿で楽しみ抜くことができる良きアイデアですな。このプリン・ア・ラ・モードという名も意味は解りませぬが良き響きです、さすがビクトリア殿。』

『いや、それほどでも……。 (まあ日本生まれの洋菓子ですし喜んでもらったのは何よりなんだけど、なんで古代に近い時代でプリンとか生クリームとかアイスとかが普通に存在してるの……? 菓子技術発展しすぎじゃない?)』

という経緯で開発されて、神様にもご好評いただき、レシピ本にも掲載されてるみたいです。なんで剣闘士だった師匠からそんな案が出てくるのかマジで意味わかりませんし、教会に行くたびに菓子職人の方（聖職者）からお話を聞かれて普通に受け答えしている時点であの人がほんとに何者なのか訳が分からなくなってきました。まあ多分”師匠”っていう枠組みで考えた方がいいんでしょうけど。

「つと、それは置いておいて！ この前師匠からこのプリンを大きくしたもの。『バケツプリン』っていうのを教えてもらったんです！ ばけつ？ が何なのかはわからないんですけど、金属製の大きな桶を型にして作るそうで……。」

『へえ、このイラストを見る限り普通は手のひらサイズ。それをあの木の桶ぐらいのサイズで作るのでしょうか？ それは豪勢ね。彼女へのプレゼントにするの？』
「それも考えたんですが……。」

師匠は剣闘士を辞めた後も、毎日トレーニングしてるし食事にはかなり気を使っている。私には理解できなかつたけど、肉とか魚とか卵に含まれる栄養つてのが体を作る素になるみたいで、それをたくさん食べないといけないらしい。かといってお腹がいっぱいになるまでお肉ばかり食べるのも駄目みたいで、野菜とかのバランスも重要みたいだ。

確かに師匠は大喰らいで、この『バケツプリン』つてのも軽く食べられるだろうが、逆にそれが迷惑になってしまうかもしれない。師匠もお菓子は好きみたいだけど、食べるにしても私と同じくらいかちよつと多いぐらいだし……。」

「なのでお供え用としてこの『バケツプリン』を作って、その材料の余りで普通のプリンを何個か作ろうと思います！」

『なるほど、それはいいアイデアね！ 早速買い物に行きましょうか』

！』

「はい！」

村を出てからは剣闘士として奴隷生活、師匠のおかげで市民になった後も何かと忙しくて神様へのちゃんとしたお供え物は出来ていない。聖職者の方はかなり短い間隔でお供えしないと天使様からお叱りを受けるみたいだけど、私たちみたいな一般の信者はそこまで求められていない。お祭りとか、余裕があるときにお供え出来たら嬉しいね！ って感じだ。

師匠に会わせてくれたこととか、天国にいるパパのこととか、生き残ることができた家族のこととか、神様にはいろんなことを感謝したいといけない。この使い方なら師匠も納得してくれるだろうし、師匠のお金を使って材料を買っているわけだから師匠の分のお供え物としても扱ってくださるはずだ。

「よし！ じゃあまず卵から買いに行きますよ！ ルペスさん！」

『了解！』



□少女買物中&料理中□

「勢いで買っちゃったけど卵の数やば、これ一個で何日生活できるんだろ。まだ値段下がってないし……。」

「あ、殻が！ 殻が入った！ ぐににに！ 取れない！」

「ぜらちん？ ってなんだろ。とりあえず教会の直営店で買ったけど……、コレを入れるの？」

「これを器に入れて冷やす……、冷やす？　冰箱スペースあったかな？」



「ふいふ、疲れた。待たせてごめんねコピア。」

『いゝえ。いい干し草出してもらったし、寝て待ってたから全然。』

「あら、そう？　じゃあ帰りましようか。」

軽く彼女の首元を撫でた後、その腰へと飛び乗る。あまり負担にならないように乗っているが、彼女自身かなり丈夫ということもあり、全く体がブレることはない。ルペスとコピアは同じ種類の馬だけれど、ルペスは速度を出しやすい体で気配りのできる性格。コピアはルペスより遅いけどかなり丈夫でおっとりした子。違いがあって面白いよね。

オーナーとの定期会談が終わった後、商会の厩舎に預けていたコピアを迎えに来た。この子何かと待ち時間とかをうまく使いこなせる子みたいで、こういう時の移動手段としていつもお世話になっている。

え？　定期会談何してたかだつて？　そりやいつも通りの奴だよ。グッズの売れ行きの確認とか、どれを止めてどれを続けるとか。新規商品の開発とか案出しもしてるし、次のイベントをどこで開催するか、内容は何をするのかとか色々。ヘンリエッタ様関係で何か事件が起きたり、大事になったりして忘れがちになっちゃうけど、こういう細かいのも色々やってるんですよ？

「飽きられないように、手を変え品を変えやってきませんかね。」
『?』

現代ならTVとかネットとか使って色々宣伝できただろうけど、この世界じゃそんな便利な物はない。その上同じような活動しているのが私だけっていうこともあつて誰かとコラボする、何かと絡ませて注目を浴びるとかがかなり難しい。ある意味市場の独占をしているわけだが、これは“飽き”が来たら終わる独占。

「感覚的なものだけど、剣神祭の勝利ボーナスが切れて来てる感じがするんだよね……。」

私のファン層には『剣闘士としてのビクトリア』が好きな人と、『ビクトリア』が好きな人がいる。私が演じる役が好きな人は多分どこまで行っても付いてきてくれるんだろうけど、剣闘士の方は人が離れてきている。まあ模擬戦みたいなことを闘技場ですることもあるが、現役時代のようにガチの殺し合いはもうするつもりはない。試合独特のピリピリした感じが好きな人からすれば退屈以外の何物でもないだろう。

「となるとその人たちを引き留めて、『ビクトリア』を好きになって貰える施策。さらに新規の人を呼び込める施策が必要になって来る。そこでおススメする商品が私主演で頑張る演劇、って話だったんだけど……。」

未だに台本に苦戦中ってね？ 劇場はヘンリエッタ様が押さええちやつたから大丈夫なんだけど、肝心の演目がまだ完成していかない。パトロンのヘンリ様からは私の半生を扱う演劇が見たいとのこと、かなり脚色しながらと言いますか、空白の時代を無理やり創作しながら作つてると言いますか。私の記憶がある程度成長した体での転生スタートなので講演できないというか……。

まあそんな感じで悪戦苦闘中なのだ。しかも台本ができないと演出とかも考えられないといった感じですべての作業を私の方で止めてしまっている。もう少しでできそうな感じはするんだけど、ね？

『まあまあ、そんなに悩まずに。ゆっく〜りしてたら何かいい考えが思いつきますよ〜。』

「コピア……。そうだね。」

確かに、彼女の言う通りだ。ずっと同じことを考えても出ないときは出ない。

『どうです〜？ 今からお外で日向ぼっこというのは、町のお外でござらんしましょうよ〜。』

「あはは！ 確かにそれはいい！ ……でも、二人で行ったらアルやルペスに拗ねられちゃうかもしれないし、今度みんなで行こうか。」
『いいですね〜、約束〜！』

そんなことを彼女と話しながら歩いているとようやく家が見えてきた、まだ日は高いけどそろそろ晩御飯の準備をしないと間に合わなさそうだ。アルとルペスでおつかいしてきてくれたはずだし、それを使ってパパッと作ってしましましょうか。

「ただいま〜！ 帰ったよアル〜……。ん？」

コピアから降り、家の中に入ろうとすると何やらキッチンの方からおいしそうな匂いがしてくる。

「アル？」

「あ、師匠！ おかえりなさいー！」

何か作っているのだろうかと思いついて覗いてみれば、私のエプロ

ンを身に着けて彼女が料理をしているではないか！ しかも台に乗せられてる材料的に今日作ろうと思ってた奴……！

「え！ つくってくれたの！ わ、どうしょ。うれし。」

「はい！ 実は師匠からもらったお金でプリン作ったんですけど、どうせなら晩御飯もやっちゃえってことで！」

『アルちゃん頑張ってたわよ。』

彼女がそういうと、窓から顔を出したルペスが支援砲撃を飛ばしてくる。普段は換気用にちよつとしか開けてないけど、全開にした窓から頭を出している彼女、多分アルのことを手伝ってくれていたのだろう。

「師匠！ 今日私が最後まで作りますんで！ リビングでくつろいでください！ あ、あと氷室にプリンが置いてあるのでどうぞ！」

「え、いいの？」

「はい！ 私は味見でもう頂いたので！」

そういうと張り切って料理に戻っていく彼女、刃物とか火とか危なくない？ と気にはなるがルペスも見てくれてるし大丈夫なだろう。それに彼女がこんなにも張り切っているのに、水を差してしまうのは忍びない。おとなしくリビングで寛がせていただくとしよう。

腕まくりしながら頑張る彼女を視界の端に収めながら、氷室へと移動する。

元々この家にそんな部屋はなかったのだが、私がルーン魔法を使えるようになったこともあり食品庫の一部を改造して冷蔵庫的な部屋を作ったのだ。現代の家電みたいに電気で動いてくれるわけではないが、魔法で氷を切らさないようにしておけば長期保存もできる優れモノ。そんな氷室に入ってみれば……。

「おお、コレ。バケツプリンじゃんか。へえくく、いやどうしょ。すご

「嬉しんだけど。」

鉄製の大きな桶の中にみつしりと納まる黄色いプルプル。お菓子のロマンとも呼べるバケツプリンがそこにいた。そう言えば昔アルに『バケツプリン食べたい〜！』みたいなこと言った覚えがあるし、覚えててくれたんだね……。

かなりのサイズだし、作るのも大変だったのだろう。ありがたう。ただくことにしよう。

氷のルーンを宙に描き、氷室の氷量を増やした後。バケツ片手にリビングへと移動する。ちよつと奮発して買ったふかふかのソファに腰を下ろし、膝に収まる様にバケツプリンを設置する。匙ですこし表面を叩いてみれば、プルプルと揺れる表面。ちゃんと固まっているし、この綺麗な色からして確実においしいだろう。

「じゃ、さっそく。いただきまーす！」

「師匠〜。野菜のスープなんですけど、どれくらい食べ……。あッ！ダメっ！」

アルが止めてくれたのにも関わらず、すでに一口分掬われたプリン。は私の口の中に。

瞬間、世界から熱が消え、これまで感じたことのない怒気がぶつけられる。

【それッ！ わたしのッ
!!!!!!!】

一度死んだときに出会った神の、ガチの怒りの声が私の脳を揺らしたのだった。

47：怒ってないよ！

【それッ！ わたしのッ
!!!!!!!】

脳に叩きつけられるのは純粹な怒気、まさに冷蔵庫のプリンを取られた時の幼子の癩癩。

この声がアルのものであればプリプリと怒る彼女を『かわいいねえ』と思いつつかりと謝り、新しいのを作つてあげれば収まりそうなものだが、相手は神だ。しかもこの世界の唯一神にして絶対神。甘いものが好きで信者たちに大量のお菓子を捧げさせている（強制ではない）ヤバい奴。

【おしおきー！】

一瞬にして天気が悪化し、窓に強烈な雨が叩きつけられる。外から零れていた優しい光が真っ黒に染まり、雷鳴と共にすべてが光に包まれる。

私の家に、いや私の脳天に。青白い特大の雷が突き刺さった。



「アバーッッッッッ
!?!?!?!」
「師匠ーッ！」

何処からともなく圧倒的な声が聞こえたと思えば、一瞬にして外の空気が悪化。耳が弾けそうになるくらいのも音と共に神の雷が師匠へと突き刺さる。普通の雷とは違う、青白い雷。神の怒りは確実に家を粉碎し、爆破。師匠が一瞬真っ白になった瞬間爆発と共に煙が生じ、何も見えない。だが頭に降りかかる雨粒を考えるに、屋根が全部吹き飛んだことは解る。

(やばい、どうしよう！)

頭の中が困惑と恐怖で埋め尽くされ、自身の語彙では表現できない感情が湧き上がってくる。私が神様へのお供え物用に作ったプリンを、師匠が間違って食べちゃった。たぶんそれを見ていた神様がブチギレて神罰を落とした。何が起きたのかは理解できるけど、それを整理できるのかは話が別。だって私の信仰してる神様が、自分の大事な師匠に罰を与えちゃったのだ。自分があらかじめ言っておけば避けられたのに！

頭がどうにかなってしまいたいそうになりながらも、師匠の無事を確認するために立ち込める煙を何とか払う。

雨の影響もあり、想像よりも早く開けた視界のその先には……。

「それ！ 神様のプリン！ とっちゃだめでしょ！」

「……………ケほ。」

「生きてるウウウ!?!?!?」

明らかに教会に飾られている女神像と瓜二つな女性が、全身煤まみれで頭だけアフロになった師匠を叱っている光景だった。女性の内包する雰囲気というか、この身に叩き込まれた本能があつた存在が私たちが信仰する女神であることを伝え、そして自身の目は確実に神罰を喰らったはずなのになんか口から煙を吐く程度で済んでいる師匠の姿が映っていた。

「なんで!? え!? なんで!?!」

「あ、アル。無事だった？」

「え？ いや無事ですけれど!? この方!?!」

「神だぞー!」

「ひゃあああああああああ
!!!」

悲鳴を上げながら本能で跪く。やっぱ神様だア! というか師匠何してるんですか! ヤバい、ヤバいですよ! 色々まずいです! 神様ですよ! ほら師匠! こっち! こっちで一緒に跪きましよう! 今ならまだ間に合うかもしれません!

「いや私無神論者ではないけど、無宗教者だし……。どっちかと言うと分類『日本人』、的な? 神の存在は理解してるけど、信仰はしていない的な? というか日本文化っていう色んな宗教イベントをかき集めた謎地域の出身なので信仰とかよく解らないみたいな?」

「あく。あそこすごいよね。仏教に神道にキリスト教のイベントもやってるんですよ? お盆、正月、クリスマス。アレよく怒られないよね。一緒にイベントを楽しんでくれてるわけだから喜ぶ神もいるだろうけど、『ウチの宗教に専念して!』っていう束縛系神様はキレてそう。」

「確かに〜。」

いや師匠! なんで神様と普通に雑談してるんですか!? というか無神論者って何ですか!? 目の前にいるじゃないですか! 雷で頭おかしくなったんですか!? 不敬とかもうなんか色々やばいですよそれ! というか無宗教者って!? 神様それでいいの!?!?

「うにゅ? 別にいいぞー! そこらへん個人の自由だし。まあ確かにこの世界みんな私の信者だけ……、別にマイノリティの存在を許さぬ! ってスタンスじゃないしな! というわけで今を楽しめ人類! ほらジナ、うえ〜い!」

「うえ〜い! バイブス上げてこ〜ッ!」

し、師匠と神様がなんかハイタッチしてる！ 何故!? 意味不明！
誰か説明して！

「それに、『信仰されてないと力が出ない』とかじゃないからな。全知全能は伊達じゃないのだ！ まあ普段は力、セーブしてるけどね。ほらあるでしょ？ あのブロック積んで色々建築したり採掘したりするゲーム。あれ最初からクリエティブでやるとどこかで必ず飽きる的な感じ。実績も解放されないしな！」

「あく、なんかわかるかも。チート使い過ぎたら製作者が見せたかったゲーム体験ができない的な？」

「そうそうそんな感じ。……というかお前！ 神様のプリン食べちゃったでしょ！ そういうのダメ！」

さつきまでの穏やかな雰囲気が一瞬にして変わり、いきなり怒り出す神様。師匠が神様と普通に雑談し始めた時からもう脳が処理するのを拒否し始めている。なんかもう全部どうでもよくなつてき……、いやいやいや！ ダメ！ 駄目だよアル！ どうかして神様のお怒りを収めて、許してもらわなくちゃ！ 最悪聖書に書かれてたみたいに大陸が丸ごと沈んじゃうツ！

「ごめんちゃい♡ 新しく倍の量作ってプレゼントするからゆるちて？」

「ほわツ!？」

何それ!? なんで神経を逆なでするような謝り方!?

「謝れてえらい♡ ゆるす!!!」

「許されたツ！ なんで!？」

確実にふぎけた謝り方でしたよね！ それでなんで許されてんの！ このお方過去にキレて大陸一つ分沈めちゃったって書かれてる

お方ですよ！ 基本優しい方ですけどちゃんと神様なんですよ！
天罰とか天災とかしてくる方ですよ！ もうちよつとなんか、しつか
りとした謝り方とかあるでしょう師匠！ というか神様それでいい
んですか!?

「いいぞ？ 別にジナちゃん信者じゃないし。プリンくれるなら
……、許せるッ！」

「やったー！ ……というか神サマ、大陸沈めちやったの？」

「うん。信者がなんか狂って、私の【検閲済】な【検閲済】の本作って
販売しようとしたから怒った。……あ、ちゃんと大陸もその上にい
た人も全部元に戻したよ？ 肝心の奴は消滅したけど。」

「Oh、そりや業が深いしスケールもでかい。」

え、今なんか規制音というかなんというか、ピーツ、って音が神様
のお声に掛かる形で聞こえてきたんですけど……、ナニコレ？ つい
に私の脳が情報の取得を拒否し始めた？ 目の前で起きることが
信じられないもの過ぎて？ ……わかる！ さすが私の脳みそ。
ちゃんと仕事出来てエライね？ そんなお仕事できるならこの状況
を理解するために死に物狂いでもっと働け。オラア！ 仕事しろゴ
ラア！

「いや別にR18なことするのはいいんだけどさ。個人で楽しむん
じゃなくてそれでお金稼ぎしようとしてたから……、やむなく？ 一
応再発防止のために聖書に書いとけ！ って命じたのはいいけど
……」

「さすがに信者が神サマの薄い本作って怒られて、大陸消し飛びまし
たとは書けないわけか。」

「そうそう、そんな感じ。……じゃあ謝ってもらったしお家直すね
〜。」

神がそう言いながら指を鳴らすと、世界が書き換えられていく。

神様が神罰によって吹き飛ばされ、ただの瓦礫となっていたお家が一瞬にして元通りに。何が起きたのか全く理解できなかったが、師匠は呑気に『わあ、時戻し。』とつぶやいている。というかアフロだった師匠の頭も元通りに戻ってるし……。いや神様だからそれくらい出来て当然なんだろうけど目の前で奇跡起こされているのを見るとなんか正気度がががが。

「というか神サマ？」

「なんだねジナ君！」

「この前なんか地上に降臨したら色々面倒なことになるって言うってたけど……、大丈夫なん？」

「あ。」



「た、大変です聖女さま！」

「どうしたのですか、アワテテ枢機卿。滅多に慌てない貴殿がそのように取り乱すなど……。」

「神が！ 神が降臨なされました！」

「……………マ？」

現在教会では、いえ正確に言えば全世界の神を信仰している者たち。聖職者たちが絶叫していた。何せ普段天界で捧げられたおやつをウマウマと言いながら食し、仕事は全部部下の天使たちに丸投げしてるあの女神さまが。かなりフットワーク軽いので呼んだら普通に

来てくれるけど周囲への被害が大きくなりすぎて最悪大陸が沈むの
で有名なあの女神さまが。善と悪の両方を司っているせいで知能あ
る魔物からも信仰されている女神さまが。

なんか知らんうちに降臨しちやってるのである。

「そ、それは真ですか！」

「は、はい！ 天使様が非常に慌てた様子で我々に使いを……。」

帝国における最大の宗教都市、聖都アヴィオンでは上を下への大騒
ぎ。何せ人間よりも遥かに力のある天使様がわざわざ人間に話をし
に来ているのだ、確実に我らが神が地上へ降りて来てくださってい
る。これは実に300年ぶりの祭事であり国を挙げてどころか、この
世に生きるすべての生命体で盛大に祝わなければならないレベルで
ある。

呼んだら来てくれる神ではあるが、神を呼びつける事なんか恐れ多
くて出来ない上、永遠の時を生きる彼女からすれば300年など数秒
の瞬きに他ならない。だからとても珍しく、滅茶苦茶めでたいことな
のではあるが、それと同時にこの星の生命体にとっての『終末』の笛
の音でもある。

「とりあえず早急に手を打たなければいけないことは把握しました。
すぐさま帝国全土の教会に早馬を飛ばしてください。信仰心に溢れ
ある意味狂っている者たちや、一部の愚か者を絶対に動かさないよう
に厳命してください。私はすぐさま天界に向かい詳細を確認してき
ます。」

矢継ぎ早に指示を飛ばすのは天界でジナと面識を持った今代の聖
女、老骨に鞭を打ちおばあちゃん頑張ります。

何せ神は気まぐれ。確かに我らが信仰するに相応しい神として振
舞うことが多い彼女ではあるが、決して司る属性は善だけではない。
狂気や混沌と言った悪に分類される属性も持つ彼女は、たまにはっ

ちやけてやらかす。もうこれでもかというほどにやらかす。聖書とは神の教えを伝える尊き本ではあるが、神様のやらかしが記されている事件簿としての側面もある。

軽く聖書を読みこめばわかるが、お供えされた菓子が美味しすぎて製作者の寿命関係なしに天界へと召し上げようとしたら間違つて星に住む全員を召し上げちゃったり(ちゃんと戻した)、本来神にささげるはずだった菓子を間違えて食べてしまった者をその者が住む国ごと爆発させたり(ほんとにただの勘違いだったので全部元通りにしてください)、と色々だ。

ちゃんと元に戻してくださいだったから今があるのだが、次も元に戻してくださいるかは全くの不明。

我らとは何もかもが違う圧倒的な上位存在の考え方や価値観は、我々がどう足掻こうとも理解できるはずがないのだ。……まあ多分、やんちゃでわがままで好き放題するけどちゃんと筋は通す楽しいこと大好きな少女、であっているとは思うのだが。

(教会の建前上、神聖さを損なわないために色々隠してる部分も多々あるのですが、何かのきっかけで知った者たちが皆、さらに信仰の念を厚くするこの世界の人間おかしいですよね……。いやまあ私も聖女になるまでそうだったから何とも言えないのですが。)

「とにかく我らが神よ、どうかおとなしくしててください……!」



そんな感じで全国各地の聖職者が悲鳴を上げながら走り回ってい

るころ。

肝心の唯一神とやらはウチの食卓で普通にメシを食っていた。……なんで？ いやプリン作るのに時間かかるし、待ち時間潰すのは解るんだけどなんでアルが作ったご飯をYOUが食べてるの？
ねえ？ それ私のでしょ！ ジナちゃんのでしょ！ いくら神サマとはいえ超えてはならないラインじゃないんですかそれは？

「え〜！ いいじゃん。たまにはお菓子じゃなくてちゃんとしたのも食べたくなるでしょ？ それにこの素朴な感じ。神様嫌いじゃないわッ！」

「だって、アル。」

「こ、光荣でしゅッ！」

可哀そうに。自分が作った物を自身が信仰する神様に食べられるとか緊張感がヤバいだろう。しかも目の前だし。なんだ？ 私に解りやすいように表現するとすれば、『自分だけだし適当でいいや〜』って晩飯作ってた時に世界中の国家首脳が急に部屋に上がって来て自分の晩飯つつきながら味の感想述べてる感じ？ ……想像したら色々絵柄がヤバいな。ウチの食卓国連になつたってかア？

「どうかほんとに帰らなくていいの？ 聞いた感じ世界中で色々問題というか、お偉いさんたちが走り回ってそうだけど。」

「ん〜？ まあ別にいいんじゃないの？ 適当に『キレイな石ころ見つけたから拾いに行つてた！』って言えば丸く収まるだろうし。」

「……なんでそれで収まるの？」

その言い訳の理由って完全に幼児の発想な上、それで納得する聖職者の皆さんって色々大丈夫なんか？ と思いつながらドーナツ状の金属容器にプリン液を流し込んでいく。人が作っているところが面白いとおっしゃるもんですからわざわざ食卓のテーブルでやってるんですよ。あ、ちなみに焼きプリンの方ね？ アルが作ってた方はゼラ

チンで固めるタイプだったんだけど、この神しやまが『感想欄で焼きの方が美味しいって聞いた！ ならそっち！』とのことで現在制作中ってわけだ。……感想欄ってなに？

「あとは空気抜いて、かまどで30分ぐらい焼いた後、氷室で冷やす感じなんだけど……。サイズがサイズだし冷却に結構な時間かかるよ？」

「？ そうなの？」

「そうなの。一応伝統的なドーナツリング二つと、バケツ一つ。あと小さい容器一ダースほど用意したけど、バケツは一日ぐらいかかるんじゃないかなあ？」

私の言葉に明らかにショックを受ける神サマ。多分知ろうと思えば知れるのだろうが、意図的に情報をカットしているのだろう。思ったより時間が掛かるため驚いているようだ。私もそんなに菓子作り詳しくないけど、レシピを見る限りこれぐらいかかるのが普通なのだろう。軽口を叩きながらではあるが、細心の注意を払いながら頑張っているので待ち時間があるのは許していただきたい。

「う〜！ 待つの嫌！ プリンだけ加速させるからどれだけ時間かかるか教えてー！」

「焼きの行程は大体150℃で30分……。はちよつと長いかな？ 25分で様子見ましよう。」

私がそう言った瞬間、何か時計の針が進んでいくような音が聞こえ、世界に奇跡が反映される。私が容器に注いだだけの液体だったソレはいつの間にか湯気がたっており、確実に加熱が終了していることを主張していた。

「できた！ 次！」

「あ、じゃあいい感じの食べごろ温度まで下げて固まれば美味しく頂

けるかと。確か冷蔵庫の適正温度が5℃以下とか聞いたことあるし、それぐらいの温度が適正なんじゃない？」
「なるほどく、んじゃ冷却！」

彼女がさつきまでアルの野菜スープを飲んでいた匙をプリンへと向けると、さつきまで湯気を上げていたプリンたちが一瞬で冷却される。まるで設定温度の記入欄に目標の温度を叩き込んだかのように。いわゆる現実の書き換え、って奴だろう。

「完成？ 完成だよね！」

「はいはい。んじゃデザートは食後にいただきますか？ それとも？」

「もちろん今！ 出来立てが正義！」

とのことなので、バケツプリンの入る容器に蓋をするように大皿を乗せる。後は彼女がさつきまで食べていた料理たちを一旦よけ、ひっくり返した大皿を置いて差し上げれば完成だ。

「ぷっちんではないけど、こういう開ける作業って一番やりたいでしょ？ では、お召し上がりくださいな。」

「うむ！ いっただつきまーす!!!」

出してあげた匙を手渡してやると、幼子のようにウキウキと容器を上へと持ち上げプリンの全身を空気へと晒す。黄色く特徴的なフォルムに、頂点から下へと流れ落ちる茶色のカラメル。空気抜きとかも神がやったせいか気泡が一つも見当たらない完璧な手作りプリンがそこにあった。人間の可動域を超えるレベルで口を開き、おいしそうに食べているあたり成功なのだろう。

「じゃあ私たちも晩御飯にしましょうか、アル。」

「ふえ！ い、今ですか？」

「うん。だって冷めるでしょ？ いいよね神サマ？」

「ふふー」

「とまあそんなことがあつて。」

「改めてですが……。私たちの師匠、色々ヤバすぎませんか!？」

”学園”の宿舎、その貴族寮の一室で妹弟子であり、同時に学友でもあるマリーナに過去の経験を話す。師匠というか、教会の方々から『あんまり口外しないようにしていただけると助かります……。』と言われたが、彼女なら別に話しても大丈夫だろう。同じ師を持つ友だし、コイツもコイツでバレたらまずいものを複数抱えている。一蓮托生って奴だ。

「いくらビクトリア様の下で経験を積んでいたとしても貴族に対して全然物怖じしないのは可笑しいと思つていましたが……。いやそんな経験が有るなら納得です。そりゃあ貴族どころか皇帝陛下すらかないませんわ。というかそんなフランクなお方だったんですね、我らが神は。」

「ね〜。」

ちよつとしたことで、いやまあ正確に言うとはンリエツタ様案件で学園都市で学びを深めることになった私たち。同門ということ同じ部屋にしていたとき、後は寝るだけとなったのだがマリーナから疑問を投げかけられた。『いくら何でも貴族に耐性あり過ぎませんか？』と。そこで今の話をした訳。自分たちが信仰する神に自分の作った晩御飯を食べてもらうって経験を話したのだ。まあこんなことがあったわけですから……、なんかもう色々吹っ切れました。貴族だって人間です。コワクナイ！

「しかもそれ。私が初めてビクトリア様の指導を受けたあの日の直前なんでしょう？」

「そうなのよ。もうちよつと早く来ていれば道連れにできたんだけどね。」

「……一瞬お会いしたいと思いましたが恐れ多すぎて無理ですわね。正気を保つ自信がありませんわ。」

「わかる。実際あの時私正気じゃなかったし。」

あの食事の後、我らが神は師匠に持たされたお土産のプリン片手にニコニコで帰って行ったんだけど、その次の朝に真っ青になった聖女様がお忍びでやって来てプリンの容器を返してください。口止め料というか迷惑料として大量の金貨片手に『ウチの馬鹿が大変申し訳ありません！』と言いなながら。……この人自身の信仰対象バカって言った？

いつの間に知り合ったのか全然解らないんだけど、昔ながらの知り合いみたいな感じで家の中に招き入れた師匠は、プリンの材料費だけ受け取ってお茶をした後。聖女様にもプリンを持たせて帰ってもらっていた。お帰りの際の聖女様の顔色が戻っていたあたり問題は解決したんだろうけど……。マジでウチの師匠って何者なんだろう。

ぜんぜんわからん！

「そう言えば最初の手合わせ、懐かしいですわね。」

「あくあれね。私に惨敗したやつw」

「むう！ 結果は別にいいのです！ 今この瞬間勝てばよいのですから！」

「と言いながらずと負け越してるけどオ？ よわよわマリナーちゃん♡」

ムキーツ！ と怒りながら投げつけてくる枕を受け止め投げ返す。あはは。たゝのし！ つと、ふざけてたら普通に負けるし。気を付けないと。例えば枕投げでも姉弟子として負けるわけにはいかないからね！ 教員寮とは距離があるけど、騒ぎを聞きつけて師匠が飛んできたとしてもおかしくない。速攻で勝負をつける！

……にしても、懐かしいなあ。まだ数年しか経ってないけど、その数年が濃厚過ぎたせいかな全然最近のこととは思えない。

「そこッ！ 隙あり！ 喰らえ枕スクリューシユートオ!!!」

「はぶッ！」

日常編

48：決闘開始の宣言をしろ！

さて、区切りもいよいよ改めて自己紹介からいこうか。

私の名前はジナ。特に苗字は持たないただの一般市民。帝国の首都である帝都にて家を構え、弟子のアルと一緒に楽しい異世界生活を送っている。

元々は男で現代の日本に住んでいたんだけど、気が付いたら今の女の体を手に入れ異世界に。まあそこだけならよくある”異世界転生”で終わったんだけどね？ 運の悪いことに奴隷スタートつて奴だった。朝起きたらいいお天気だけど両手両足が鎖に繋がれてる奴隷、最高にロックでしょ？ まさにクソ喰らえ。

んであれよあれよと新しいご主人様が決まったと思えば、なんとそいつは私の様な弱いレディが惨たらしく殺されるのを見て楽しむタイプ。この世界の一般的な趣味嗜好ではあるが、こっちからすればたまったもんじゃない。こちとら殺し合いどころか喧嘩すらまともにしたことなかったんだぜ？ それが剣一本握らされて明らかに狂った殺人者とご対面。私のご主人様は闘技場の観客席で高みの見物だ。

普通ならばそこで私の物語はオワオワリ。セーブシステムなんか搭載してないので、他のクソゲー宜しく即売り払われてワゴン行き、もとい死体の山のとっぺんに乗せられて腐肉と化すところだったんだけど……。まあ運が良かった。

私の体に宿っていたのは、スキル『加速』。自身の速度を上げること、人の何倍も速く動ける優れモノだ。こいつのおかげで死地を脱した私はその後も何とか生き残り続けて……。今に至る。

ビクトリアとして剣闘士の仮面を被り、前世見た宝塚の様な振る舞いをする事で自身をアイドルとして売り出す。次の私を作るためにオーナーの意向で弟子を取る、この国の権力者であり特権階級の貴族様たちと繋がりを得る。剣神祭に出場し奴隷身分から抜けだす。まあいろんなことがあった。一回死んだけど……、今ではいい思い出、ではないな。もう二度としたくないや。

まあそんな感じ？ 剣闘士時代に手に入れた力と技術を使って今も何とか生きている一般市民ってワケ。

「ほらアル、ピース！」

「び、ピース？」

え？ お前の様な一般市民がいるかって？ 軽く300程度無傷で切り殺した奴が一般市民とかどんな修羅の国か？ ……いやまあごもつとも。上から数えた方が早いレベルで強い市民って言い直すよ。

今の目標は、自身をよりアイドル。民の娯楽としてもつと都合のいい偶像になる為の準備。今応援してくれてる人への感謝とか、後援者への恩返しとか色んな理由はあるけど、根本はやっぱりお金稼ぎ。おまえらまだ金持ってんだろ！ ジャンプしろジャンプ！

因みに私主役で劇をするんだけど、その題材は私の存在しない半生を扱ったもの。まあ皆さんご存じだろうけど、こちとら転生組、しかも赤ちゃんスタートじゃなくてある程度育った後の体にぶち込まれたわけだから、半生どころか剣闘士としての記憶。そして前世の男としての記憶しか持ってない。

こんなのお芝居にできないでしょ？ だから今半生をでつちあげて台本を作ってるの。

というわけで今の目標はこの劇を完成させて、私のファンもとい金蔓からもつとお金を落としてもらうこと！ 大前提として弟子のアルを立派に育てるとか色々あるけど、直近の目標はそんな感じだ。

「あ、そうそう。ちょうど今日からもう一つ追加される。」

実は私、もう一人弟子を取ることになりました！ マリーナちゃんっていう子爵令嬢で、風魔法の使い手。

ヘンリエッタ様っていうこの国のお貴族様でかなり偉い人に私は、先日のやらかしというか不可抗力のせいで被った被害を全部引き受けてもらった。まあそれまでも色々恩はあったが、それにかなり大きいものが上乘せされたわけ。彼女のオーダー通りに、私はマリーナちゃんを強くしないといけない。

「ま、そんな感じかな。かなり端折っちゃったから、解らないところとかあつたら読み返してくれると助かるよ。」

纏めるとすれば今の目標は、

- ① 『自身の半生を扱う劇の公開に向けて準備』
- ② 『アルとマリーナを育て上げる』

この二つだね！

と、いうことで。

今後とも、応援よろしく。



「うう、緊張するなあ。」

「……何言ってるんですか師匠。もつとヤバいこと一杯あったでしよ。」

「いやまあそうなんですけどね?」

アルに突っ込まれ、そう返す私。今日は私たちの家にお客様がやってくる、まあお客様というよりは新しい弟子なんだけど。彼女自身は爵位を持つておらず、身分としてはただの子爵令嬢。それにビクトリアとして対応してきた貴族向けのお遊びの指導ではなく、ガチの指導を求めてやってくる子だ。

確かにアルの言う通りもつとヤバいこと。ヘンリエツタ様を初めとした殿上人、貴族の中でも格段にえらい人たち相手にビクトリアとして接したり、一步間違えればアルともども市中引き回しの後礫獄門になるような場面は色々体験してきた。けど今回はちよつと方向性が違うのだ。

剣闘士として自身の命を賭け金にする感覚が深く根強いいる私は、自分の命を差し出すような状況であってもそこまで負担にはならない。だがそこにアルの命や、他の命。誰かの人生が関わると極端に弱くなってしまう。ビクトリアの仮面で隠すことはできるが、内心ではもうガクブルだ。

(誰かの人生を任されるのは、ね。)

今の私は、アルが大きくなるまでに何一つ不自由しないように手を尽くしている状態だが、そこにもう一人加わるわけだ。依頼として頼まれたからじゃない、自身が関わるのならば、それが彼女の人生に関わるのならば全力でやらないと申し訳が立たない。だけど、私にアルを見ながらマリーナも見ることができのだろうか。二人の面倒を見た時どちらかが中途半端になったりしないだろうか。

この緊張は、そういつた心配から来ているのだろうか。

ま、なるようにしかならない。もう避けられない以上やることやるしかないのだ。

「あ、アレですかね？」

「よしっ！ 切り替え完了！」

アルの指さす方を見てみれば、明らかにヘンリエッタ様の家の馬車がちちらに向かっている。新しい弟子のマリーナは確か帝都に在る間はそっちでお世話になると言っていたし、あの中に彼女がいるのだろう。ちよつとだけ『加速』を使い顔を叩くことで意識を立て直し、彼女たちを導く師としての意識を強く持つ。

「じゃあアル、お出迎えしましょうか。彼女もそう望んでいるみたいだし、普段通りでいいよ。」

「わかりました！」

いつもよりテンション高めですう答えるアルの頭を軽く撫でてやる。まあ元々妹や弟のいる環境で育った彼女だし、同年代とはいえ妹が増えるのが嬉しいのだろう。ま、受け入れる側がフルオープンな感じだし、マリーナちゃん本人も”貴族たれ”という意識が少し先行しすぎている気もするがその根っこは善良でいい人間だ。そこまで心配しなくていいかな？

そうこうしている間に、ヘンリ様のところの馬車が私たちの目の前に止まる。ラクラクで見た彼女の執事らしき老年の男性が扉を開け、内部から新しい弟子がゆつくりと降りてくる。顔や動作、微笑みを浮かべ貴族らしくあろうとしているが若干の震えが見える。キミも緊張してるのか！。

「いらっしや〜。」

「き、今日からお世話になります！ マリーナです！」

貴族としての名ではなく、彼女自身だけを表す名を名乗る彼女。あの圧迫面接みたいな謁見の後、何度か顔を合わせた時に私が市民であることは話している。ヘンリエッタ様にお世話にはなっているけど、そこにあるのは日雇いの契約ばかりで、主従契約などは結んでいないってこと。本人はかなり驚いていたが、別にそれが理由で態度を変えられることはなかった。

まあ市民にとって貴族ってのは変に威圧されちゃうのが常だ。ウチは色々あり過ぎてマヒしてるけど、私たちが気を遣い過ぎないようにそういう名乗りをしてくれたのだろう。もしくは、貴族としてではなくただの”マリーナ”として自身を見て欲しいとの表れか。……どっちかというと後者かな。

「アル、マリーナを庭に案内してあげて。」

「解りました、こっちです！」

「あー！」

うきうきでマリーナの手を引いていくアル。引かれた本人は少し驚いていたが、大丈夫だろう。さて、私は私で大人の話をしなないと。庭へと向かった二人を見送りながら、マリーナちゃんを連れてきた執事。彼に声を掛ける。

「ハイ、この前ぶり？」

「はい、先日の冒険者組合ではありがとうございました。……お嬢様を、よろしく願います。」

「もちろん。んで？ 子爵様やヘンリ様から何か伝言とかもらってる感じ？ 初日だから現状把握と軽いトレーニング程度で止めるつもりだけ。」

「いえ、御二方からは特に。先日の決定通り、と。」

「了解、んじゃ日が暮れるころには切り上げるからお迎えをお願いしますね。」

「かしこまりました。」

そういうと深い礼を返した後、馬車へと戻っていく執事さん。最初は泊まり込みのブートキャンプを視野に入れていたが、ウチにはもう一人住めそうなスペースがない。いや物置とか整理すれば作れはするんだけど、その整理にどれだけ時間かかるか解らないからさ。ヘンリエッタ様のところでお世話になるみたい。

まああの人、『ちようどいいし、男爵領の代官のお仕事回して英才教育するわ〜!』って言ってたし、そういう教育のこともあるのだろう。大体朝ごはんの後ぐらいにウチに来て、日が沈むまで徹底的に扱いた後は帰ってもらう。毎日ではないけどまあそんな感じだ。

「さて、時間も惜しいしさつさとやりましょうか。」

「というわけで今からお二人には殺し合いをしてもらいます。」

私の発言に、『ああまた師匠おかしなこと言ってる』という顔をするアルに。いきなりのこと過ぎて明らかに困惑しているマリーナちゃん。どう？ 声色とか雰囲気とかめっちゃ重めにしてやってみただけど良い感じ？ デスゲームの司会役のオフアー来るかなあ。ジナちゃんだったらプレイヤーたちが反乱しても返り討ちにして『あらら、みんな死んでしまいました。これがほんとのデスゲーム、なので

すかね?』みたいな狂人プレイできるんだけど。

どうです、デスゲーム運営さん。今ならお安くしときますぜ? まあ貰うのはお前たちの命なんだけど。

「師匠、普通にお願ひしまーす。」

「あら、だめ? なら仕方ない。」

小道具として用意していた白い仮面に、真っ黒なマントをそこら辺へと投げ捨て、私服の姿で再登場。

「でも戦闘をしてもらおう、ってのは本当なんだけどね。アル、マリナー。」

そう言いながら木の剣を二人に投げ渡す。子供でも扱える刃渡りのショートソード、太めの木の芯を削りだした結構お高くて頑丈な木剣だ。アルが普段使っている鍛錬用の剣は、刃を潰した金属製。奴隷時代は木剣だったけど最近そっちにグレードアップした。つまりこの選択はマリナーちゃんに合わせている、ってこと。

この世界において実際のパワーが目に見える筋肉体積量と比例しないのは、一般的な鍛えられた女性の腕に見えるけど人間の頭蓋骨ぐらい握りつぶせる私を見れば明らかなんだけど。マリナーちゃんはどこからどう見ても、どう考えても必要な筋肉量に達していない。今は筋力を積み上げるよりも技の基礎を固める時期だし、振りやすい木剣の方がいい。

「あんまり話したことないし、お互いどんな人間かよくわからないでしょう? 剣を交えるだけで全部解るわけではないけど、その切っ掛けにはなる。……マリナー?」

「あ、はいっ!」

「君の隣にいるアルという子、貴方の姉弟子に当たる子ね? 私はあの時冒険者組合で会ったあなたしか知らないけど……、アルの方が格

段に強い。ハンデはいるかい？」

あの時点では剣においてはアルが優勢、魔法においてはマリーナが優勢という形だった。それは現時点でも変わらない、マリーナが持つ能力は足運びや体幹、その身に纏う雰囲気から確かに成長している。だがアルも同じように成長していて、その伸び率はアルの方が高い。魔法においては未だマリーナの方が一日之長があるようだが、あの時と違いアルも魔法を習得している。拮抗はするかもしれないが、最終的に近接の勝負となりアルの勝ちで収まるだろう。

「……いりません。」

「いいね。決して勝ちを諦めず、必ず学びを得るために全神経を集中させなさいな。ある程度実力が近い方が学びやすいところもあるのよ？ んでアル。」

「はい、師匠。」

「姉弟子を名乗りたいのなら、恥じない行動をなさい。」

深く、頷く彼女。アルとマリーナを比べた場合確かにアルの方が強いが、決してマリーナに勝ち筋がないわけではない。アルもアルで学んできた剣は十全ではない。受け流しの精度は甘いし、体格的にはマリーナの方が有利だ。隙を見せれば刈り取られてもおかしくないだろう。ま、いい感じに切磋琢磨しなさいな。

”戦いなさい”、ではなく”行動しなさい”。相手を倒すことに注力するのではなく、自身の思い描く型を再現しながら、相手にそれを見せつける。打ち込んでくる相手の位置、勢い、戦術。それを一つ一つ見極め、観察しながら自身の動きも見直していく。

マリーナちゃんにはまだ早いだろうけど、今のアルには十分可能だ。この子の目の良さと、理解力の高さ。期待してるよ。

「頭、胴体、腕、足。致命傷か戦闘不能に陥る部位に当てることで勝敗を決める。寸止めはしなくていい、私が割り込むからね？ 最初は剣

だけで、次は魔法も使った総力戦でいこう。さ、『3分間待つてやる。』から柔軟なり素振りなりして準備しなく。」

二人に時間を与えた私は優雅にリロードタイム……、ではなく。私も自身のロングソードを手に取り地面に突き刺す。といつてもいつもの長剣ではなく、訓練用の木剣。芯に金属の棒が入っている奴だ。ケガになりそうな攻撃を打ち込みそうになっちゃった時に、これで割り込むってワケ。試合開始と同時に『加速』し、二人の全身を眺めながら改善点を纏める。それが私のお仕事だ。……つと、メモ帳忘れるところだった。どこに置いたかなつと。

庭の机に置いてある劇の資料や台本の草案をかき分けながら、まっさらな紙束を探し始める。そんなことをしながら、横目で二人の様子を確認してみると……。あら、マリーナちゃん全然慌ててないね。意外。

（急に”戦わなければ生き残れない”……つてほどではないけど、突き放したのは確か。それでもちゃんと自分で考えて動けるのは、イイね。）

アルが何食わぬ顔で少し離れ、軽く柔軟をし始めるのは解る。常日頃から無理難題や、理解不能なことを私が投げかけているせいか、彼女の状況把握能力や、精神を正常に持ち直す能力は高い。彼女の故郷から帰ってきた後はさらにそれが磨き上げられたと言えよう。……まあ神ちゃまの来訪とかあればどんな出来事にも耐性が出来そうなものだけだ。

対してマリーナは最初少し戸惑いを見せたが、アルが少し離れたのを見て自身も同じようにスペースを確保し柔軟や剣の握りなどを確認している。その一つ一つの動きが帝国の剣士がするもので、彼女の根本に何があるのかを察することが出来る。

（前よりちよつと洗練されてるし……、ヘンリ様のお屋敷にいる護衛

兵たち。彼らに少し教わったのかな？)

軽い素振りを見る限り、以前私が指摘した点を改善し、その少し先に歩を進めている彼女を見ながらそんなことを考える。あのお屋敷の兵士たちは私や異形に比べると塵芥(言い過ぎ)だが、決して弱いわけではない。それこそ高望みしなければ闘技場で生き残れるくらい。彼ら彼女からすれば、一生懸命に頑張る彼女はかわいい存在だろうし、少しぐらい指導してもおかしくはない。

(彼女が持つ型は、私やアルのような我流ではなく帝国の剣士が皆修めている流派。名前しらんけど闘技場でもよく見たよね。……私にこの流派の指導は無理だし、型はあっちの護衛兵に任せて、こっちは実戦メインでの指導つてもありかも。)

「さて、そろそろ3分たったかな。二人とも、準備はもういいかな？
……大丈夫そうだね。じゃ、二人とも位置について。」

「始め。」

49：開始イ!!!

皆様ご機嫌麗しゅう、ラクラク子爵家が娘。マリーナ・ベン……。いえ、ただのマリーナです。

貴族としての最低限の役目すら果たせなかった人間にその名を名乗る資格などございませぬ。今はただ、名にふさわしい存在になるため努力するのみ。他の貴族の方々へ挨拶する際は『例の件』を考えると流石に名乗らなければなりません。普段はただのマリーナとして過ごすことにしております。……まだ少し、慣れないんですけどね。

その後、父と共にヘンリエッタ様への謁見を終わらせた後。一度ラクラクへと帰った私はもう一度帝都へと戻ってきました。そう、ヘンリエッタ様のお屋敷です。本来ならどこかで宿をとるか、新しく子爵家の人間として恥じない屋敷を借りるなど、厄介な手続きをせねばならなかったのですが、あの方のご厚意でこのお屋敷に住まわせていただくことになりました。

「……やはり、大きいですね。」

「我が家の何倍の広さか……。全く見当もつきませぬ。先日荷物の受け渡しの時このメイド長にお聞きしたのですが、抱えている使用人は100を超えているとのこと。本当に規模が違いますな。」

「帝都の豪邸はそれそのものが一つの街になっている、と聞いたことがあります。本当だったんですね……。」

前回は不安や疲労などのせいでした。しっかりと確認できなかつたのですが、ある程度落ち着いた今ならようやく理解できます。その大きさに圧倒されながら、付いてきてくれた爺やとそんなことを話していました。本来は身一つで来るつもりだったのですが、過保護な父や爺や。それとヘンリエッタ様のご厚意により彼が付いて来た形になります。

そんな私たちは政治・経済・文化の中心地である帝都で優雅なバカ

ンス……、ではなく毎日勉強尽くめの日々を送っております。

折角帝都に来ているのだから少しぐらい街を観て回りたい、という気持ちがないわけではありませんが、学ぶ時間があるというのは貴族の特権であり責務でもあります。どれだけしんどくても甘えるわけにはいきません。

「それに、ヘンリエッタ様にこれだけお世話になっているのですから……。少しでも早く結果を出さねば。」

あの謁見の時、私は貴族として恥じない力を得るために、ビクトリア様こと、ジナ様に師事することになりました。しかしながらただ力を持つ者が貴族というわけではありません。領地の運営や、配下たちの掌握、外交のやり方や貴族としての教養、そのすべてが求められます。確かに力のみを追い続けても貴族にはなれません。もちろん、ヘンリエッタ様に課された伯爵という目標も。しかしながら単に力だけでは元老院へと足を踏み入れることは許されません。

力は大前提、ララクラが引き起こしてしまつた事件をどこにいたとしても事前に排除し外部に漏らさぬ能力。つまり自身が領地にいたとしても完全に管理できる能力、もしくはそれができる人材を抱え込む必要があります。そのほかにも敵派閥に付け込まれないような立ち回りや、田舎貴族では必要とされない教養など、学ぶことはたくさん存在しているのです。

「ですが……、さすがに多すぎませんか？」

「そう〜？ これでも加減してるのよ。ま、大変だろうけど頑張りなさいな。気張れ、若人！ って奴ね！」

山のような教材に埋もれる私に、様子を見に来てくださったヘンリエッタ様がそう応援してくださる。『孫が一人増えたようなものよ』と快く私を居候させてくださり、教育まで施してくださる。それが彼女の利益につながると言えども、本来何も知らずララクラという地で

過ごすはずだった私に、高度な教育を施そうとしてくださるこの恩はどうしようもなく大きい。だが田舎貴族が急に都会の貴族の常識を叩き込まれるのは少し、キツイと言いますか……。

い、いえ！ この体に流れるのは名誉あるララクラの血！ 風の魔法によって皇室を守り続けた先祖たちの子です！ これぐらいなんてことはありません！ 見ていてくださいまし！ こんなものすぐに頭に叩き込んで血肉にしてみせますわ！

「あ、それと。明日ビクトリア様の授業だから、頑張つてね？」

「ほんとですか!？」

「ほんとほんと、ヘンリちゃん嘘つかない。でも羨ましいわ、いつもなら全部投げ捨ててでも『私もご教授いただきたいわ!』って突撃するのにあの子ったら急に呼びつけるんですもの。もう海に沈めちゃうおうかしら。」

「……あの、ヘンリエッタ様？ もしかなくてもあの子って?」

「陛下よ?」

「考え直してください!？」

まあたまにこんな冗談を仰る方なので、勉強がしんどくても辛くはない。……冗談ですよね？ 陛下を沈めたりしませんよね!？」

このお方はかなり楽しい方で、こういうった冗談をよく仰っている。ただ今日の冗談みたいに反応しにくいのもあり笑っているのかどうかかわからなくなってしまうこともあるが……。

(遠い、なあ。)

近くでこの方を見て、気が付くことがある。明らかにレベルが違うということに。ただの田舎娘が何を言っているのかと言われてしまいう。器の大きさに、能力。魔法の個人練習の際に少しだけ見せていたのだが、練られた魔力の質が言い表せないほど高かった。幼少期ひ

そかに目標としていた風の魔法が、幼子が棒を振っている様子に書き換えられてしまうほどに。

この方と、同じ存在になる必要がないことは理解している。だがこの方が用意した道を走る者として、この方の描いた画を完成させる者として。

(頑張らないと。)

明日は、自身が初めて『この人の下で学びたい』と感じた、ビクトリア様の下へ行く。帝都に来てヘンリエッタ様に布教されてようやく気が付いた彼女の正体、あの時魅せられた剣に、帝都での活躍。憧憬の念がさらに強くなり、日付が変わるのが待ち遠しい。ヘンリエッタ様が私に課す課題の多さから、彼女の指導も決して楽なものではないだろう。

だけど、やはり楽しみだ。

一瞬にして自身の常識やそれまで積み上げてきたものを破壊し、一つの到達点を見せてくださった彼女。そして伝聞ではあるが、彼女がビクトリアとして残した様々な功績。本来であれば自身の姉弟子である彼女しか得られなかった指導を、自身も受けることが出来るという奇跡。興奮しない方がおかしいと言える。

(よしっ！)

だが、いくら役立たずと言えども貴族としての身分は変わらない。緩みそうな口を必死に抑え、せめて少しでも多くの学びを得ようとジナ様の家にお邪魔したのですが……。

「というわけで今からお二人には殺し合いをしてもらいます。」

姉弟子と殺し合いをすることになりました。

なんで???



「始め！」

いやまあ冗談だったので、それは良かったのですが……。

(雰囲気、まるつきり違う。)

目の前に立つ、姉弟子が纏う雰囲気の変化に気圧される。

先ほどまでの彼女、にこにこ笑いながら私の手を引き庭まで連れて来てくれた彼女。ジナ様の冗談に突っ込む彼女、さっきまでの彼女とは全く違う雰囲気。戦う者が纏う空気が目の前にあった。体格は明らかに私の方が上なのに、何故か気圧されてしまう。

構えは、私の知る帝国のものではない。過去に一度見たジナ様のものに似ている。その構えを使う者に一方的にやられた経験のせいか、それとも彼女が纏う雰囲気がそうさせるのかはわからないが、どこから打ち込んだとしても負けてしまう感覚に陥ってしまう。

両者向き合いながら、出方を窺う。けれどジナ様がアルさんにかけていた先ほどの言葉を考えるに、私が放棄しない限り初手は譲ってくださるのだろう。こちらが動きを見せぬ限りは、動きそうにない。かといってこちらから勝負を仕掛けようにも勝利への道が見えない。

がむしやらに剣を振るっても、それは自身の糧にはなりにくいことを考えれば、策を見出してから進むしかない。

(考えろ……。)

正面をじつと見つめながら脳裏で思い出すのは、帝都に来てからの記憶。ジナ様に教わる前にせめて基礎だけでも固めたい、もう一度確かめたいと庭先で剣を振るっていた時の記憶。こちらのことに興味を持つてくださったヘンリエツタ様のお屋敷を守る護衛兵の皆さまたちの教え。剣を見てもらう弾みでジナ様について尋ねた時の記憶。

『あく、あの人なあ。何度か手合わせしてもらったけど完全に遊ばれてたよな。』

『うんうん。まああの速度で意味不明なパワーしてるんだもの、仕方ないわよね。普通スピードタイプってパワー控えめなはずなのになんであんなに強いのかしら。素手で剣握りしめて破壊するとかこの化け物よ……。』

『ま、軍属の上の方だったならそれぐらいの力持つてる奴はいるんだけどな？ あの人のは強みは速度に力、それに技も全部押さえてるところだ。そんな人に師事できるとかお嬢ちゃんすごい幸福だぜ？』

彼、彼女らの話を纏めるとジナ様の強みはその圧倒的な速度だけでなく、それ以外も高水準で纏まっていること。技術だけでも下手な貴族の私兵程度であれば軽くひねってしまうであろう護衛兵の方々よりも上。唯一勝てそうなのが謁見の場にもいた黒騎士殿ぐらいである。帝都に来るまで知らなかったが、さすが剣神祭で優勝した実力者！ ビクトリア様ってすごい！

(……いや、今必要な情報はそれじゃない。)

自身が師事することになった憧れの人への想いが爆発しそうに

なったが、急いでそれを修正する。必要なのはあの人の技術の部分。速度はどうしてもそのものが持つ素養や、スキルなどが関わってくる。そうになると目の前の姉弟子が一番影響を受けているのは技術面、ジナ様と同じ構えをしていることから間違いではないでしょう。

『あの人の剣か？ どっちかというところを受け』メインの剣だな。確かに速度と力を活かした剣を使ってるせいで勘違いしそうなもんだが、多分嬢ちゃんが教わるのもそっちだと思っただろうぜ？』

速度を活かし力でねじ伏せるだけで片付いてしまうため勘違いしそうなものだが、その根幹にあるのは後の先を制すもの。非力なものが自身よりも強い存在に打ち勝つための方法。私が修めている帝国の剣がバランス型と呼べるならば、この方々が扱う型はカウンター。

(そうになると、姉弟子に向かって強く打ち込み過ぎるのは悪手以外の何物でもない。一瞬で勝負が決まってしまう可能性がある。)

「ならッ！」

大きく踏み込み、上段からの振り下ろしを選択する。剣の表面で流され、反撃されることは想定内。だからこそ！

両足を軽く地面につけたまま、いつでも体勢を変えられる状態で振り落とす。威力は乗っていないが、それでいい。目の前の姉弟子は想定通り私の剣を刃で受け止め、その勢いごと地面へと流される。触れあっていた剣が離れた瞬間、それまで抑えられていた力が解き放たれ、そのまま横薙ぎへと移動させるアルさん。

(想定、内！)

姿勢移動をしながら、地面へと流されそうになっていた剣を体の左側まで移動させ、その横薙ぎを受け止める。軽い。

こちらの振り落とした剣の重みから、私がカウンターを警戒していることは相手にも伝わっているということ。ここから先は、至近距離での剣戟。私はカウンターを警戒するが故にアルさんよりも優れている体格を活かすことはできない。つまりここからは単純な技量勝負。

(ツ！… なんてそこから流されるの！)

目の前で相對し、改めて理解できる。目の前の彼女の技術は、明らかに私を凌駕している。確かに私の方が力が強い、だがその力は技術を打ち破れるほど大きくない。ちやうど彼女に利用されて、そのまま終わるような力。自身は彼女のように受け流すことはできず、無理矢理体力を消費して剣の腹で受け止めることしかできない。やはり、見える未来は敗北のみ。

ジナ様が試合前におっしゃったように、彼女が持つ受け流しの技術。そこから攻撃に転ずる流れ、受け止められた後の体重移動による衝撃の緩和。実際に視、両手で握る剣で受け止めることでそれを理解させられる。

(私は、負ける。でも！)

せめて、せめて少しでも長く食らいつく。目の前の彼女が見せてくれる技術を、少しでも長く見る。もう一度胸を張って自身の名を叫ぶために、あの人の下で学ぶにふさわしい人間だと認められるために。

「はああああああ!!!」



「ほい、そこまで。」

加速を切り、彼女たちにそう告げる。二人の剣戟の間に挟まり、防御が遅れ直撃を喰らいそうになったマリーナちゃんを助けた形になる。にしてもアル？ もうちよつと力入れないとダメでしょ？ 私指一本で抑えられちゃったんですけど。

「はあ、はあ。……それは師匠がおかしいだけです。」

「あ、そう？ ならいいんだけど。とりあえず二人ともお疲れサマンサ、息整えながらでいいからこつちおいで？ 冷たい水用意するか。」

そう言いながら水のルーンと氷のルーンを宙へと描き、冷たい氷水を用意してやる。ほんとだったらスポドリとか飲ませてあげたいんだけどね？ あいにくそんなものはないのよ。……あ、砕いた岩塩お皿に出しとくからちよつと嘗めておきなさいね？ 熱中症で倒れられたら大変だし。にしても思ったより長く打ち合ってたねえ。」

「ジナちゃん想定外、マリーナちゃん頑張ってるじゃんか。……あ、息整えるの優先していいからね？」

息も絶え絶えで、何か話そうにも口が回らない彼女にそう言いながら、水の入ったグラスを渡してやる。いや正直打ち合い数二桁行く前に終わるかなあ？ って思ってたけど全然そんなことなかった。途中で数えるの面倒になるくらい打ち合ってたもん。そのおかげでアルも結構スタミナ消費しちやっってるし、マリーナちゃんは見ての通りだ。

「じゃ、さっそく講評をする前に……。二人の感想について聞こうか

な？ アル。」

グラスに入った水を飲み干し、小皿に盛った塩を指の先に付けて舐めていた彼女に話を振る。すこしびっくりしたみたいだったが、ちよつと視線を外して考え込んだ後、自身の思いを伝えてくれる。

「思ったより粘られました。姉弟子として技を魅せろ、ということだったので勝負を決めに行くつもりはなかったのですが、大きすぎる隙があれば即座に終わらせるつもりで臨んだんですけど……。びっくりです。」

「うんうん、マリーナは？」

「はあ……。はあ……。技術の差が、かなり大きかったです。ヘンリエッタ様の護衛兵の方々にジナ様の剣について教えていただいていた故にカウンターが来る前提で動けましたが……。知らなければもっと早く終わっていたかと。」

「うんうん、いいね！」

なるほど、ヘンリ様のお屋敷の護衛兵ってなると……。たまに訓練頼まれて吹き飛ばしてる子たちのことかな？ 確かに加速なしでの打ち合いとかもやってるし、そこから私の根元にある剣がカウンター特化つてのを知ってもおかしくない。アルと私の型は同じだし、そこから連想したのかな？

「じゃ、私からの講評だけど……。」

アルは特に問題なし、ちゃんと相手のことを“観て”いたし、相手に戦術がバレてる中でそれを崩さずに戦い続ける。それを通してやり方を見せるってのは私のオーダー通りだし満点。しいて言うならば最後まで息を切らさないで欲しかったのと、ちよつと攻撃が単調になってたのが気になるかな？ 得意な横薙ぎを使うのはいいんだけど、多用しすぎると防がれる可能性がどんどん増えてくる。全方向か

らまんべんなく攻撃するように。

「解りました。」

「あ、あと。明日からランニング量倍にするね♡」
「うげ。」

次、マリーナちゃん。キミもスタミナ不足、継続戦闘能力の低さが見れるから基礎練はちゃんとするように。後でメニュー組んで紙に書いてあげるから頑張つてね？ こういうのは継続が力だから欠かさずやること。技術面に関してだけど……、まあちよつと手加減したアルにあそこまでやり合えてるのはとってもいい。ちゃんと前教えたことも修正してるようだしね？

「あ、ありがとうございます！」

「だけどもあまだまだ発展途上、”かわいがって”あげるから覚悟しておきなさい。さっきので進む方向性つてのもみえたしね。」

「可愛がる？ ……よろしくお願いいたします！」

よしよし、じゃあもう息も整ったようだし……。魔法戦と行きましようか！

50：そりや焦る

ということで魔法を含めた戦闘、剣あり魔法ありの何でもありな模擬戦を開始しようとしたんだけど……。

「あ、焦ったあ……。」

肉体的疲労よりも精神的疲労、急に生じたピンチを潜り抜けた後に来る安堵感からついため息をついてしまう。この身を挺して全力で割り込んだおかげか、何とかお家へのダメージはゼロ。まあ突風で髪が乱れ服の一部が破損、火炎に煽られたせいで体中が煤けているが肉体へのダメージはない。最悪の事態、『お家バイバイ』は避けられた。

「あ、あはは……。」

「ど、どどどどどうししししし!!! だ、大丈夫ですか!？」

普段使いのロングソードで危機を脱した私の後ろには、気まずそうに私から視線をずらしているアルと、慌てて完全に混乱状態に陥ったマリーナがいた。まあ自分たちのせいで家吹き飛びそうになったらそういう顔しても仕方ないと思うけどさ。マリーナちゃんは私のこと心配してくれてるのに、アルは全然心配してないのはどういうこと？

「いやだって師匠ですし、無傷でしょ？」

「いやまあそうですけど。」

「な、なんで!? さっき完全に暴発していましたわよ!？」

いやなんでって言われても……、鍛えてるから？ ほら筋肉万能説、聞いたことない？ ただ筋肉を肥大させるんじゃないやなくて、増えて

徐々に大きくなる筋繊維を上から筋肉で押さえつけることで肉体美を維持しながら筋力の増強ができるっていう……。結果的に下手な皮鎧よりは固い肉体と、大概のものを握りつぶせるパワーが手に入ってたってわけ。ま、その代償として体重がえぐいことになってるんだけど。

「あ、あの？ アルさん？ これもしかして私がおかしい奴ですか？」

「うにゃ、師匠がおかしい。人間じゃない、おばけ。」

「……聞こえてるからな、君たち？」

思いつきり馬鹿にしているというか、信じられない物を見るような目でこつち見てるけどこの体純粹にこの世界の人間のものだからな？ つまり私に師事して私がこうなった原因であるトレーニングを課される君たちもこうなるんだからな？ いつか私と同じようなことが出来るようになって遠い目するようになるからな？

「まあいい。とりあえず魔法戦は中止、今から剣の訓練始めるから切り替えなさいな。」

さて、かなり話がずれちゃったけど。なんでこうなったのかの説明でもしていきましょうか。



「よしよし、じゃあもう息も整ったようだし……。魔法戦と行きましょうか！ 位置についてく、の前に？」

さて、これから魔法戦なわけだが……。本来ならば非常に気を付けないといけないことがある。模擬戦なのに殺し合いに発展しちゃ

う、つてとこだね。元々魔法ってものはかなり強力な力だ、帝国が建国された時に魔法使いたちは貴族として国に囲われたつてのは有名な話で、強大な力の象徴つてところもある。まあ簡単に言うと、ワンフリーズ唱えるだけで人を軽く殺せてしまう力つてコト。

アルも魔法使いとして覚醒し始めているし、マリーナも初めて会った時から風の魔法使いだ。ヘンリ様が呼んでくれた教師から魔法を学ぶ、つて話だったけど実戦や剣術と合わせた戦闘を教えるのは私の役目。だから何か参考になるかな、つて調べてたんだけど出るわ出るわの模擬戦時の事故。魔法の出力を間違えて相手を殺しちゃった♡
つて記録がどっさり。しかも魔法つて貴族の技だからそこら辺の責任問題がこれでもかと……。

「だからとつても気を付けて欲しいのは確かなんだけど、戦いに集中するあまり加減をミスってしまうのはよくある話。というわけで二人に支給品〜。」

手の平に収まるサイズ、首からかけるタイプの魔道具を二人に投げ渡す。

「アルは見たことあるよね？ 耐魔法の魔道具。使用者に降りかかる魔法を打ち消す道具だね。」

ちよつと鍛冶師のドロに任せて細かいところとか整えてもらったけど、その中身はアルの故郷を襲った盗賊たちが所持していた耐魔法の魔道具。ヘンリエッタ様に証拠品として提出してた奴ね？ 騒動を収めた報酬&マリーナちゃんの面倒を見ることに対しての報酬としていくつか融通してもらった。ちなみに本来なら所有者も魔法が使えなくなる道具なんだけど、ドロちゃんがなんか頑張ってくれたおかげで使えるようになってる。

つまり『私は魔法自由に使えるけど、お前の魔法は効きませ〜ん！』状態になれる魔道具つてわけ。まあ時間制限あるけどね？

「効果は五分程度、その円柱型のカプセルの中に光る赤い眼玉みたいなのあるでしょ？ その光が無くなったら効果は終了。試合開始の合図とともにスイッチを入れて、模擬戦の終わりはその効果が切れるまで。一応こつちでも時間計つとくけど……、OK？」

「了解です。」

「こ、これとても高い……。わ、解りました！」

戦闘モードに入ってるのですぐに受け入れるアルと、やっぱりまだ切り替えに時間が掛かるマリーナで反応が分かれる。ちなみにマリーナのいう通りかなりの高級品だそうだ。まあ高価な理由は魔道具の根幹である魔物素材の希少さ、らしいけどね？

そんなことを考えながら懐から砂時計を取り出し、机に置く。昨日夜なべしてチマチマ砂の量を調節して魔道具の効果時間と合わせたお手製の品だ。効果時間切れた後に魔法の打ち合いしてたら大惨事につながるからね、そこら辺の手間は惜しまないのよ。

というかドロちゃんさ。お前さんマジでなんでも出来るんですな。最初は剣とか鎧だけかと思ってたのに魔道具まで改良できるとか……。

「それに私の我儘もいくつか聞いてもらってるし、ほんと頭が上がりない……。つと、そろそろ準備いいかい？」

私の問いに頷くことで返す二人、マリーナは先ほどと同じ構えを。アルは私の教えたカウンターの型ではなく、剣を片手で持ち自然体のスタイルに。いつでもルーンを刻めるようにしたそれは、剣での守りと攻めを半ば放棄しルーンによる魔法攻撃で攻め立てる攻撃的なスタイル。

アルに教えている戦い方は、今彼女がしている『敵が遠中距離を想定した魔法スタイル』と、さっきの模擬戦で見せた『敵が近距離にいるときの想定したカウンタースタイル』の二つ。後者の方は奴隷の時

から教えているから大丈夫そうだったけど、魔法スタイルは最近練習し始めたばかり。今回の模擬戦でその習熟を見せてもらおうことになる。

対してマリーナの構えは先ほどと同じ。私やアルはルーンを使うため片方の手を空ける必要があるが、彼女は違う。帝国における一般的な魔法の使い方、詠唱魔法を使う彼女にとって片手を空ける必要はない。大きい効果を及ぼそうとすると長つたらしい呪文を唱えないといけないらしいが、それでも両手が空くっていうアドバンテージは非常に大きい。

「いいみたいだね。……じゃ、始め！」

「ウインド風」ツ！」

「？（カノ）ツ！」

私の声と同時に、両者の魔法がほぼ同時に起動する。本来であればワンフリーズの魔術と、ルーンの起動であればどう考えても前者の方が早い。だが、アルはずっと一つのルーン。火のルーンである？（カノ）の練習をずっとしていた。その反復練習が形になったのだろう。バレーボール程の大きさの火球がマリーナに向かって直進し、その火球が突如発生した風によってかき消される。

次の行動が早かったのが、アル。どうしても魔法を世界に反映させるのに時間が掛かってしまう彼女からすれば、このまま遠距離での打ち合いは避けるべき状態。火球の生成が終わった瞬間にはすでに踏み出して、火球の陰に隠れるようにしながら距離を詰める。

（詠唱魔法は『ファイアボール火球』と唱えれば火球が出来るけど、ルーン魔法の？

（カノ）は単に火を生み出すだけ。そこから球体への加工が必要になってしまう。二人の実力じゃまだ大規模、高火力な魔法は使えない。小規模で短詠唱の魔法戦が基本ってわけね。）

そうなるとう長い詠唱の隙を突いて、一文字書くだけのルーンでなんとかするとういう方法は使えない。それを考えればアルの距離を詰めるっていう選択は間違っていない。それに彼女の風魔法の練度的に、発動者に近すぎるとフレンドリーファイアしちゃうっていう欠点もあるしね。

「さて、マリーナはどうするのかな？」

魔法を起動させた直後。即座に動いたアルと比べ、ワンテンポ遅れたマリーナだったがそれでも慌てず次の行動へと移る。先ほどの模擬戦の結果を考えれば、接近戦は彼女の不利。勝ち筋が狙えるのは遠距離での魔法戦のみ、つまり彼女が望むのは距離を作ること。閉じられようとしていた口がもう一度言葉を紡ぎ始める。

『ウインドランス風 槍』 ツー！』

次に彼女が唱えたのは、2節の魔法。通常の槍よりも二回りほど大きな風の魔槍を生成し、アルへと投擲する。込められた魔力量から、常人であれば確実にバラバラにされる威力だろう。その威力を距離を取らせるためだけに使うってことは……、マリーナの魔力量って思ったより大きいのかもね。

「ツ！？（ラグズ）！」

それに対してアルが選択したのは、回避ではなく防御。水のルーンを宙へと刻み、自身の身の周りに水球を生成する。本来その身に突き刺さるはずだった風槍は水球によって受け止められ、無力化される。しかしながら風自体の威力を全て殺すことはできなかったのか、アルを包んだ水球が後方へと転がり、霧散。結果的に距離を取られてしまった。

確かに風系統の魔法だけあって、風槍はかなりの速度が出ていた。距離を取られてしまおうとしても回避を諦めて防御をすることでその身を守るという選択肢は間違いいではない。むしろ通常であれば模範的な回答だろう。

(でも私の弟子だったらそれぐらい避けて欲しい、って思っちゃうのは期待しすぎかな、アル?)

もう少し視野を広く持って、相手の動作をつぶさに確認できていれば『加速』を持たない彼女でも回避することは可能だったと思う。実際等速の私でもあれぐらい欠伸しながら避けられるし。マリーナちゃんの詠唱速度がそこまで早くないからこそ避けられるつてもあるだろうけど……、今後はそういう”選択”について叩き込んであげた方がいいかもね。

「攻撃は最大の防御。何かされる前に、やる。これ基本だからね。」

私がアルの課題をメモしている間も、二人の戦いは続いていく。

どうにかして近づこうとするアルと、風魔法によって距離を維持しようとするマリーナ。依然として距離は最初の二人の位置から変わっていないが、これは決してマリーナの有利を意味するものではない。彼女たちの魔法戦を少し見れば理解できるが、アルの防御として使用している水球。自身の周りを水で満たすという戦法がマリーナにとつてかなり厄介な存在となっている。

水というものは便利なもので、人間は内部で呼吸できないという欠点を除けば、かなりのものを吸収・無効化してくれる。もちろん電気とかは別だけど、マリーナが扱う風は十分含まれている。彼女が扱う風がもつと強力で、より強く大きな風を起こすことが出来れば話は変わっていたのだろうが、そのすべてが吸収されてしまっている。

風の槍は水によって受け止められ、後方へと逸らされてしまう。風の砲弾も同じように受け止められ、背後に流れるのは気持ちの良いそ

よ風のみ。もつと威力があればすべての水を弾き飛ばすことが出来たのだろうか、マリーナの力では未だ不可能のようだ。

(かといってアルもアルで攻め切れていない。)

水球で風をいなすことは出来ているが、その風で水球ごと押し出されていることは確か。息継ぎをしながら火球を放ち、同時に距離を詰めるという器用なことをしているのだが、マリーナちゃんの攻勢が激しくうまく行っていない。やはり純粋な魔法の熟練度に関してはマリーナの方に軍配が上がるみたいで、火球を消しながら距離を取るためにアルを攻撃するっていう彼女の策をまだ破れそうにない。

(火球の数を増やす、とか。火の形を変える、火以外を使うとかの案はあるんだろうけど、考えにアルの熟練度が追いついてないかんじかな?)

そんなこんなで膠着状態が続く中、ふと砂時計を見てみればあと数十秒で砂が切れそうである。そろそろ切り上げた方がよさそうだ。

「二人とも！ そろそろ時間だから悔いがないようにぶっぱなさないな！」

やっぱり最後は大技でフィニッシュでしょ、と安易な考えからそう提案する。二人ともちゃんと私の声を聴きとれたようで、アルは複数のルーンを宙に。マリーナは剣を地面に突き刺し支えとしながら、長めの詠唱を唱え始めた。

「我らが祖、偉大なるベントウスの末裔が告げる！」

「火のルーン、？(カノ)！ 力のルーン、？(ウルズ)！」

「風の激流より疾き烈弾、我が手より放たん！」
「富のルーン、？（フェイヒュー）！」

マリーナの周囲に集まっていた淡い緑色の魔力が少しずつ集積し、彼女の周囲を高速で回転し続ける巨大な風の弾へと変貌する。対してアルの目の前には三つのルーンが刻まれ、その意志によってそのすべてが一点に向かって収束する。三つのルーンが混じり合い一つの点となった瞬間、弾かれたように巨大な火炎の球体が生成される。

両者ともに、一対一の戦闘では隙が大きすぎて使えない魔法。この世界において人間が起こせる奇跡、その一端。

それぞれが出し切れる全力をもって作られた二つの弾丸が、今。

『ハイウインドバズーカ
強風砲撃』』

「焼き尽くせ！ 火炎弾！」

ぶつかり合う。

〈加速〉十倍速

……………うん、ちよつと待ってくれる？

ここ、私の家の、庭だよね？

うん、そうだよね。間違っていないよね？

まだ奴隷解放から一年も経っていない現在、解放されてから買った私

の家。帝都の中でも貴族街に次ぐレベルで治安が良くて、重要機関への交通の便も悪くなくて、下水道もしっかり機能してて、なおかつアルと二人で暮らして結構ゆとりがあるスペースの素晴らしいお家。馬小屋を作ってもまだアルや私が鍛錬できるぐらい広いお庭があるお家。

その分お値段も結構張ってて、土地合わせて8000万ツケロ。内部の家具も合わせたらかなりの貴重品も置いてあるから、実質1億行ってもおかしくないお家。

……そんなお家の庭で？ 2m弱の火球と？ 風球が？ 激突しようとしている？

(ま、ままままだ慌てるような時間じゃアない！)

さっきの火球と、風の激突みたいに打ち消し合ってくれば……！
万が一のために手に持っていた訓練用の剣をしっかりと握りしめながら、様子を窺う。こういうサイズのデカイ魔法となると、さすがに剣で打ち消すのは難しい。いや正確に言うところには出来るが、周りへの被害が大きくなりすぎる。願わくば私が介入しなくてもいい感じに打ち消し合って消滅してくれれば……

だが、私の願いは届かなかった。

おそらく球体と球体の接地面が悪かったのだろう。高速で射出された球体たちはぶつかり合い……、消滅せず、その場で拮抗し始める。本来ならばそのまま少しづつ両者の保有する魔力が消費されて行き、何もなかったかのように消えていくのだろうが、相性が悪かった。いや良すぎたというべきだろう。

大きな風の塊は、周囲に浮かぶ酸素も共に集まっている。そして酸素は、火の燃料。

本来なら小さくなるはずの火球と風球は、混ざり合い、一つの大きな火炎玉に。しかも変に球体同士がずれたせいで、私の方に。私の背

後にあるお家の方に進み始めている。

「ツ！」

更に運が悪いことに、魔法が混じり合ったところでアルとマリナーの二人から球体への命令権が失われる。その結果制御に使用されていた魔力が解き放たれ、先ほどの酸素と同じように燃料になってしまふ。この瞬間目の前に存在している物体は、魔力によって作られた魔法から、単純にクソデカい火球に。外気を吸収して燃料にしながらすべてを燃やし尽くす災厄の完成だ。

つまり。

もう誰も止められないぞ♡

「ぴ、ぴやあああああ
!!!」

吹き飛ぶ！ 全部吹き飛んじやう！ お家が！ お家が！

し、仕方ない！ ここは最強無敵（異形に実質一敗）のビクトリア様が『加速』パウワアと有り余る筋力で吹き飛ばして進ぜよう！

そう考えながら自身の手握られていた模擬戦用の剣でクソでか火球を消し飛ばそうと振りかかるが……。

（あれ、なんか刃を火球に入れた直後からどんどん剣が軽く……!?!）

と、溶けてるう！ 剣が！ 剣が根元から！ 溶けちゃってる！

鉄が溶けた!?! あと私も若干燃えてる！

あわ、あわわわわわ！ 不味い、まずい！ お家が！ お家が無く なっっちゃう！ 家無し！ 野宿！ 困る！ それ以上に家の中の金庫には私やアルが市民であることを保証する書類とかがある！ アレが溶けたら色々終わる！

「ま、まだまだア!!!」

〈加速〉十二倍速

限界を振り絞り、さらに時間を引き延ばす。急いで家の中に飛び込み、取り出したるは鍛冶師のドロが『そーいや魔法も使うんやって？ せやったら今の鋼鉄に芯・ミスリルやと魔法使いにくいやろ。ほら魔法剣とか。せやから全部ミスリルの作つといたで！ ……あ、お代はちやんと頂くけどな。』と言いながら打つてくれた奴！

「？（イサ）！ ？（ハガラズ）！ ？（ライド）！」

対象はミスリルの剣と、眼前の大火球。体内にあるほとんどの魔力を差し出して宙に描くのは氷のルーンと天災のルーン。氷という属性を追加することで、複数の意を持つ天災の要素を確定させ、威力を高める。そこに導きのルーンを追加することで加速した世界に対応できないルーンたちの速度を、少しでも上げる。

宙に描かれたルーンが一点に向かって収束し、二つに割れる。片方が火球に、もう一つは剣に。

ルーンが対象に接触した瞬間、眼前の大火球が一瞬にして凍りつく。が、未だ内部の温度はそのまま。加速した世界だからこそ視認できる火球の外殻だけが凍っている状況。時間が経てばすぐに元に戻ってしまうだろう。

「だからこそー！」

内部に、ミスリルの剣を叩き込む。外殻を突き破り氷の魔力を宿したミスリルが到達、融解点が鉄よりもはるかに高いミスリルだから出来る芸当。そしてその剣を経由して、私の体内と外気に残る魔力を、全て叩き込む。

「凍れえ!!!」

奇跡と奇跡の暴走によって生み出された存在を、さらに大きな奇跡。魔法によって治める。

内部で燃え盛っていた炎たちが氷の魔力によってその勢いを収めていき、燃え盛る火球は徐々に小さくなっていく。そして私が流した魔力、その総エネルギーが燃え盛る火炎の熱量を追い越したのか、炎自体が凍りつき大きな氷球へと変貌する。正直科学とか色々無視した現象が目の前に起きていくけど、魔法だから許してほしい。

とにかく、何とかその芯まで凍らせることが出来たようだ。魔力を消費しすぎたせいかな、全身が耐えがたい脱力感に襲われるけど……、最後の仕事。

「よいしょ、っとー」

目の前の氷玉に剣を叩きつけ、そのすべてを霧散させる。最近ちよつと暑くなってきたからね、ちよつとしたサーブスだ。勝負に白熱しすぎて熱くなっちゃった二人にもちようどいいでしょう。ま、熱中するのは良かったんだけどね？　ちよつとやり過ぎというか。私の指示がダメだったって言うのもあるので強くは言わないが、もうちよつと規模を考えて欲しかった。

ま、何にしても。

「あ、焦ったあ……。」

51：娯楽は大事

家全焼一歩手前イベントから数週間、定期的にウチにやって来てくれるマリーナちゃんを『いいこいいこ』と”かわいが”って上げて、疲労困憊になりながらも歪な笑みを浮かべて帰っていく彼女の将来に若干の不安を覚えるパーフェクト美少女、ジナちゃんです！
……まあ美少女って年齢じゃないんだけどね。やっぱこういうのキツイと思う？ アル？

「あの気色悪い『キャピキャピモード』？ でしたっけ？ あれならまあ見れるものだと思いますけど、普段の師匠を知ってる私からすれば……、正直……。」
「いや冗談で言ったつもりだったんだけど、そうマジで返されると困る。」

まあそんな感じで毎日頑張っております。一応まだ『お姉さん』の年齢だと思っただけど、人によっては『おばさん』カウントされてもおかしくない年だし……。体は十二分に若いんだけど、精神の方がね。前世含めるともう初老の域だから……。まあ前世の年齢カウントしても仕方ないことは理解してるんだけどさ。

「とにかくソレ、私はともかくマリーナの前でしないでくださいね？」
「解ってるって。」

　　というかアルちゃんの的にマリーナちゃんはどんな感じなの？ なんかかんやで一緒に頑張ってるわけだけど仲良くやれてる？ 私もずっと見てるわけではないし、自主練してる時とかどんなこと話してるの？

「まあ色々……。最初はララクラ家の人間として謝罪されましたけ

ど、別に犯行に関わったわけでもないのに、謝罪を受け取って終わりました。まあ思うところがあるのは事実ですが、彼女じゃなくて実際に統治してた父親が問題だったわけですし。特に何かあったわけではないです。それ以外は……、まあ普通に？」

日課の素振りをしながらそう返してくれる彼女。その年齢であれば自分の父を失う切っ掛けとなった統治者、その大本であるラクラ子爵に恨みを抱き、その娘であるマリーナに対して突っ掛かってしまふなんてありそうなものだが……、彼女はそうではないみたい。

二人を教える師としては安心できるんだけど、親代わりとしてはちよつと心配になっちゃう。この子は誰かに迷惑をかける、特に私に厄介事を持ち込んでしまうことを強く嫌がっている。私としてはなんでもウエルカムで、アルもアルで自分ではどうにかならないことはちゃんとやってくれるんだけどね。結構自分一人で何とかなる、って判断したものは抱え込んだじゃうから……。

（塵が積もって耐えられなくなるとか最悪だし、機会見つけて吐き出させないとね……。）

「あ、そう言えば師匠のことで話弾みました。」

「え、そうなの。どんな話？」

「師匠がやらかした話です。ほら宿舎にいたころの話で、食堂壊しちゃったやつ。」

あゝ、あれね？ 何かのお祝い事で私ら剣闘士にも酒が出た日の奴。宗教系のイベントだったということもあってあんまり興味なかったから詳細は覚えてないんだけど、あの日だけは試合もなくてみんなで好き勝手騒いでも許される日だった。酒だけじゃ味気ないと思つて食堂の厨房借りて、ツمامミとか料理とか作って提供したのは覚えてる。

素材はお貴族様から贈られたのとか、祝いの日ということでも食糧庫から放出されたのとか使ったからいい料理が出来ただけど、肝心の

お酒が安酒だったんだよねえ。まあ普段飲めない剣闘士たちにとつちや質よりも量だったし、問題はなかったんだけど滅茶苦茶酔いが回るのが早かった。

私もかなりセーブしてたつもりだったんだけど、周りに乗せられて色々飲み干したら完全に出来上がっちゃって……。当時の記憶飛んじやったからはつきりとは覚えてないんだけど、離れて様子を窺っていたアルを含めた未成年たちの証言によると、全員がベロンベロンになるまで酔った後何故か殴り合いが始まり、最終的に私が全員吹き飛ばして勝利したらしい。

椅子や机といった食堂の備品を全て木っ端微塵にした真つ新たな食堂で、倒れ伏す同僚たちに足を掛けて『やつふうくくッ!!』と叫んでいた私が非常に印象的だったらしい。

「あゝ、思い出したら顔熱くなってきた。はずかしい。」

「一応恥ずかしいって思える心はあったんですね……。あれから一度も失敗してないので別にいいですが、当時の私からすればすごい衝撃だったんですよアレ。」

彼女の言う通り、アレの後からアルとの距離がかなり近くなったのは事実だ。それまでは完璧超人みたいに思われてたみたいなんだけど、『この人でもみっともないレベルで失敗するんだ……。』って理解してからは同じ人間として見られるようになったらしい。いやソレでようやく人間として見られるってどういうこと？ どこからどう見ても人間でしようが！

「私の知る人間は胃の内容物を圧縮したり、意味不明な速度で動いたり、鉄の剣が溶ける火球に飛び込んでほぼ無傷だったりとかしないと思うのですが。」

「それはそう。」

実際自分でも『アレ？ 人間やめてる？』って思うところもあるの

でアルの感覚は間違っていない。でもまあ”異形”こといちちゃんみたいな存在もいるわけだし、ギリギリ人間って枠組みでカウントしていただけとありがたいです。はい。

ま、今のアルの表情。『マリーナにこんなこと話したんですよ。』って顔を見る限り仲良くやれているのだろう、マリーナからのヒアリングがまだのため決め切ることにはできないが、とにかくアルは彼女のことを悪くは思っていないようだ。最初の模擬戦である程度お互いの実力が理解できて、切磋琢磨し合う友人として受け入れることが出来た、ってことだろうか。

「っと、そろそろ時間だね。アル？ 切り上げて支度してきな。」

「あ、はい！」

アルに切り上げるように言いながら、自身も片づけを始める。この前言っていた劇の話だが、ようやく話が動き始めた。転生したせいで空白となっている私の半生をでっちあげた後、今は本職の脚本家に添削を頼んでいる感じ。ようやく手が空いたわけなんだけど、現在は脚本に合わせた演出を考えているところだ。ストーリーは出来たから肉付けをしている感じだね？

ということでアルの自主練を見ながら演出の本や実際の演劇の記録などを読んで勉強してたってワケ。こっちも本職に丸投げしてもいいんだけど、折角だから色々試したいことがあってね？

「そう言えば師匠、今日は師匠も来るんですか？」

「うん、初回だけだけどね？ あっちの先生へのご挨拶と、大まかな方針についてのすり合わせしに行く感じ。」

剣を直し、家の中に着替えに戻っていったアルから庭先で本を片付けていた私に声を掛けられる。

彼女の言う通り、今日はヘンリエッタ様のお屋敷に伺う日、アルとマリーナがちゃんとした指導者の下で魔法を学び始める日だ。アル

もマリーナもほぼ独学。アルは私、マリーナは家の者っていう師がいたみたいだけど両者とも魔法に対して造詣が深いわけではない。理論立ててしっかりと一から学ぶのであれば専門家の手を借りた方がいい。

「にしても学園都市の先生ねえ。」

この世界。いや正確には帝国であるが、よくある異世界モノに恥じず『学園都市』というものが存在しているらしい。帝国や教会、他には商会などがお金を出し合って設立された学園で、様々な学校が集まって一つの都市を確立させている一風変わった街。今日アルたちが教えを乞う先生は、そんな学園都市の中で一番力を持つ学校である『帝国魔法学園』で教師をされていた方だそう。

「帝国がお金を出してて、多くの貴族の子供たちがそこへ学びを深めに行く。貴族以外にも魔法の適性がある者であれば平民でも入学可能、学費免除の制度もあり、ね？」

ま、簡単に言えば“人質”兼“刷り込み”の学園なのだろう。表向きは魔法詠唱者を鍛えることで国力の底上げを図る、でも本当は貴族たちの反乱を防ぐための人質だったり、子供に帝国への忠誠を刷り込ませる場所だったり、優秀な平民をどこかに取られる前に国で青田買いしておく場所ってところか。

「ヘンリ様がわざわざ呼んだってことは『誰かに教える能力』ってのは確かなんだろう。そこは別にいいんだけど……。」

ヘンリエツタ様、彼女のことだからわざと私に聞こえるように零したんだろうけど。あの人はアルもマリーナもそこに入学した方がいいんじゃないか、といったニュアンスのことを言っていた。まあ早い話、私の囲い込みとかそういうのだろう。純粹に私のことや、アルた

ち若人の成長を気にしているが、同時に政治的目標も併せて達成する。面白いことに、この話に乗っても乗らなくても私に不利益はないし、乗った方が利益になる。

「まさにWIN—WINってか？ あゝ怖い怖い。」

悪い人ではないんだけど、根本的なスペックと言いますか、政治家としての能力が高すぎて色々ヤバいんだよねえ。

「でもヘンリエッタ様が何か変なこととしても、師匠が耳元で愛とか囁いたらあの人一瞬で堕ちると思いますよ。もしくは融ける？」

………そっちはそっちでありえそうで怖いよ、うん。



「堕ちる」わね、確実に。むしろその声を聴くために全てを投げ打つ自信があるわ。私。ビクトリア様に『帝国、ちようだい♡』とか耳元で言われちゃったら、あの子（皇帝）叩き落してでも持つてくるわよ…。」

「え!?! え、え!?!」

ほおくらやっぱりマリーナちゃん壊れちゃった。ダメでしょアル、

聞きたかったのは解るけどそんなこと聞いちゃったら。ヘンリエツタ様は悪乗りするし、マリーナちゃんは状況を理解できずに壊れちゃったじゃない。

ウチのお馬さんに乗ってヘンリエツタ様のお家にやって来た私たちは、いつもの応接室に通された。講師の方がもう来ているのかなあ、と思っていたのだが待っていたのはヘンリエツタ様とマリーナだけ。いきなり本題つてのもアレなのでちよつとばかし雑談を楽しんでいたらアルが爆弾を投下しちゃったわけだ。

「どうする?」 一番手っ取り早いのは革命だけど、やろうと思えば今の陛下に嫁いで毒殺かなんかで一時的に帝位を奪う皇后ルートもいけそうよね? あ、あと一番周りの反対が少ない方法としては、教会を巻き込んで真の皇帝はこつちですよ! っつてもあるわね!」

あゝ、確かこの帝国つて王権神授説的なノリの国家だっけ。神からこの地の統治者として認められたが故に皇帝である、つていう。確かにその大本がひっくり返れば全部潰れるわけか。

「んゝ、結構面白そうね。それに確かビクトリア様つて今代の聖女様と繋がりがあるでしょう?」

「……………なんで知ってるのさ。」

「あら? これでも耳はいいのよ? まあ普段なら察知できないのだけど、あの時は大分焦つてたみたいね? 貴方のお家に行く際の転移、魔力の残滓が隠されてなかったもの。」

あゝ、あれね。わかりやすく言っちゃうと幕間の後始末の奴。普段なら聖女パワーで帝都に来たことを隠せたんだろうけど、あの時はことがことだったから非常に焦っていた。そこに莫大な魔力を使用して行かう長距離転移の残滓が残っていれば気づく者は気づく、と。

「ちよつと他にも漏れちゃったからこつちの方で『聖女様も私たちと

同じファンく』みたいな噂流して打ち消しておいたけど……。そうではないんでしょう？ 神は気まぐれでいらつしやるからどうなるかわからないけど……。もし『こちら側に帝権はあり！』とでも宣言したら、楽しいことになりそうね？」

妖艶に微笑む彼女。付き合いの長い私だからこそ、その口元の笑みの種類が”おふぎけ”のものであるため冗談であると理解できるが、あいにく付き合いの短いマリーナちゃんは完全に勘違いしているようだ。まあこの人ふぎけてぼんぼん皇帝の批判してるもんなあ。まあ今の皇帝の幼少期から面倒を見ていたからこそできるお遊びなんだろうけど、全く知らない人が聞けば前々から現体制に不満があると考えてしまってもおかしくない。

なんとか自身の動揺を表に出さないようにしているマリーナちゃんだが、微塵も隠せていない。

たぶんだが今の彼女の頭の中は大変なことになってるのだろう、今の彼女じゃヘンリが冗談を言っているとは考えられない。つまり今雑談のノリで話されているのはガチの反乱のお話。少し考えれば嘘だと思いきりそうなものだが、今の彼女は冷静じゃない。今すぐこの場を離れて帝国の臣としての役目を全うするか、それとも大恩あるヘンリエツタ様に付くか。

どっちみちこの場にマリーナがいる時点でララクラ家の立ち位置は最悪である。今の帝国側に付けば家は残るかもしれないが、元居た派閥を裏切ったものとしての悪名が高まり、その上先日的事件が公になり貴族ではなくなってしまうかもしれない。対してヘンリエツタ様に付けば反乱に失敗した場合はすべてを失ってしまうが、成功すれば確実にララクラは残り続ける。その上今の地位よりも上を目指せるかもしれない。

どちらを選んでも、最悪家が消える。どちらも同じ大きさのリスクを孕むのであれば、選ぶのはより、リターンの大きい道。

「わー！ 私も！ 非才な身ではありますが！」

「まあ冗談なんだけど。」

「……………ふえ？」

おそろくだが、そんなことを考えていたのだろう。覚悟の決まった顔でこちら側に付くことを宣言しようとした彼女だったが、途中でヘンリエッタ様に話を遮られる。さっきまでの妖艶なお顔はどこへ行ったのか、いつもの彼女の顔に戻っている。しかも『この子何言ってるのかしら？』という不思議そうな眼を向けながら。

……………楽しいのは解るけどちよつとやり過ぎじゃないの？ 私が言えた義理じゃないかもしれないけどさ。

「ヘンリ……………急に梯子外したら可哀そうでしょう？」

「……………梯子？」

「今の冗談よ、冗談。ウソ、わかる、マリーナ？」

「う、そ？ ……嘘オ!？」

わ、大きなお声。

「ごめんなさいねマリーナ、ちよつと反応が面白かったのでふざけ過ぎちゃった。てへぺろ♡」

「…………ヘンリ、だから年考えよ？」

「あら？ 恋する乙女はいつでもピチピチよ？ それに私この手のジョーク大好きだから早いとこ慣れちゃってね？ 坊や…………、今の陛下の目の前でもするし。」

「それはそれで面の皮厚すぎない？」

よく皇帝陛下はそれ許してくれるよね…………。え？ あの子幼少期に色々オイタしてそれ全部私が何とかしてあげたから頭上がらない？ ……いっつも思うけどなんで私が貴方に気に入られたのかずつと疑問だわ。うん。

「あらー！ 恋に理由はいらないのよー！」

「はいはい……、んで？ 今日には学園から先生来てるんでしょ？ 色々指導方針とかのすり合わせしておきたいから二人の指導前に話しておきたいんだけど。」

「あ、それなのだけど……。」

彼女の話によると、どうやら昨日到着するはずだった講師の人が遅れているそう。先に連絡だけ届いているため、安否の確認は出来ているのだが、なんでも帝都と学園都市を繋ぐ道の近くに魔物の群れが現れたみたい。その群れが討伐されるまで出発は延期のため、数日遅れるとのこと。

「結構高齢のお爺ちゃんだからね、強行軍で無理やり進むのはキツいんですって。というわけでお休みなのだけ……。」

そう言いながら私を自身の方へ呼び寄せ、耳元で話しかけてくるヘンリ。

「ビクトリア様には悪いのだけど、ちょっとマリーナを連れ出して遊ばせてやってくれないかしら？」

私にそう願う彼女の視線は、先ほど余計なダメージを受けたことをアルに慰められているマリーナへと向けられる。必要あることとはいえ、彼女が今学んでいる内容は同世代が学ぶ内容よりも格段にレベルが高い。今は何とか喰らいついているが、どこかで潰れてしまってもおかしくない状態である。それを見かねて休ませようとしたこともあるのだが、自分の置かれている状況を考えすぎてしまい、休みの日も勉学に費やしてしまうらしい。

「ぎっスキの冗談、冗談を冗談として受け取れなかったのもそうなのだけど。家の存続を第一に考えている彼女が賭けに出ってしまったこと

は、” 正常ではない”。ここに来た頃の彼女であれば私に恩が有ろうとも、帝国に恩が有ろうとも家の存続のために自身の立場を明確にすることはしなかつたはず。」

所謂、風見鶏。より有利な方に付くという選択が今回の正解。つまりこの場では立場を明確にせず、企みに参加するような雰囲気を出しながら明言はしないというのが正解だった。ここに来た頃の彼女であれば選べていたであろう選択を出来ていない。ヘンリエッタへの恩がそれだけ強くなった、という理由もあるのかもしれないが……。

「そういうわけで今日一日連れ出して休ませてあげてくれない？ ろくに帝都の観光も出来ていないみたいだし。任されてくれるかしら？」

「なるほど、ね。任された。」

ジナちゃんそういうお願い大好き。

「よおーし！ そうと決まれば早速出発だ！ 行くよ二人とも！」

「あはは！」

「おわッ！」

二人の首根っこを掴み、そのまま窓から外へ飛び出す。アルはさすがに私の奇行に慣れたみたいですが、マリナはまだそうでもないみたい。多分これから定期的に連れ出すことになりそうだし、早めに慣れてね♡

「よおーし！ じゃあ帝都ツアー行っちゃおうよー！」

52：ツンデレ・デレデレ

「ということでもウチに来るとかやっぱ姉ちゃん頭おかしいやろ。」

「そう？ 私を知る限り最高の鍛冶師だけど。やっぱ一番イイものを見るつてのが観光の醍醐味じゃない？」

「ツツツ！ 嬉しいこと言ってくれるやんか！ ええよ、好きなか
け見ていきい！」

ヘンリエツタ様のお屋敷から飛び出して来て（言葉通り）最初に向かったのは鍛冶師たちが集まる区画、そこに店を構えるドロちゃんのところだ。帝都観光と言えばここ！ ってなわけじゃないんだけど、元々今日彼女のところに顔を出す予定だったし、ちようどいいかなって。実際武具って自分の身を預ける大事な存在なわけだし、小さい時からいいものを見て目を鍛えるつてのは良い経験になるはずだ。

「マリーナは初めてだったよね？ この人は私の鎧とか剣とかを作ってくれてる鍛冶師のドロ。ヘンリエツタ様のお抱えつてわけじゃないんだけど、何かとお世話になってる人。」

「よ、よろしくお願いいたします。」

「おう、よろしくなマリーナちゃん！ 鍛冶やつてるドロつて言うも
んや！ 鍛冶以外にも細工系とか魔道具系、錬金も一応できるけど本
業は鍛冶。剣や鎧の仕事やつたらいつでも持つてきい！ ……あ、お
代はしっかり頂くで？」

そう、ない胸を叩きながら自己紹介する彼女。マリーナからすれば
会ったことのないタイプの人間だろうし、若干気圧されている。この
辺じゃ滅多にみない黒髪つてのもあるだろうしねえ。ま、そんなわけ
でドロちゃん。アルとマリーナに色々見せてあげたいんだけど良い
かな？

「ええで、好きに見い。あ、でも指紋付けたりするんのは堪忍な。手袋貸したるから触るときはそれ使い。」

そう言いながらどこからか二人の手のサイズの合う手袋を取り出し、カウンター越しに投げ渡してくれる。さ、二人とも許可も出たことだしちよつとだけ時間潰してくれる？ 例えば……、あの剣とか並べてるコーナー。二人とも剣使うんだし、見て損はないと思うよ。

「了解です、ほら行こ。マリーナ。」

「あ、はいー！」

うむうむ、仲良きことは美しき哉。

「にしても姉ちゃん弟子増やしたんやなく。やっぱ、出来る剣士さんは引く手あまたなんちゃうの？」

「あく、まあね。」

実際私に弟子入りしたいっていう子は結構いる。剣闘士のころも、今も変わらずね。性別年齢種族問わず、いろんな人が私に剣を教えて欲しいって言いに来るんだけど、みんなお断りだ。正直アルの指導で色々悩みながら試行錯誤してたんだ、これ以上誰かの面倒を見切れる自信がなかったところにマリーナが追加された。そんな私にこれ以上誰かの面倒を見ると？

「なるほどねえ。ま、あの新入りのお嬢ちゃん貴族なんやろ？ これ以上厄介事抱え込みたくないって気持ちもあるわけか。」

「厄介っていうわけじゃないんだけどね、一応大事ではあるかな。……あれ？ 彼女のこと貴族って言ったっけ？」

自分の発言を思い返しながらかうそう問いかけるが、やはり貴族として

紹介していない。もしかしてヘンリエッタ様から聞いたの？

「ちやうちやう、勘とこのお目目や！ 纏う雰囲気に姿勢の良さ、足運びとかもアレ貴族特有の奴やで？ よう知らんけど歩き方とか立ち方とかそういうの叩き込まれるんやろ。詳しくは知らんけど平民であんな綺麗な歩き方する奴そうそうおらへんで？」

「あく、言われてみれば確かに。」

「気づく奴は気づくと思うし、隠すんやったらいい感じに教えてやんなさいな。」

だねー。ヘンリ様のお屋敷にいる時とか、私の家にいる時は自然体で過ごしてもらうのが一番なんだけど、お忍びで町に繰り出す際身分が割れてちやお忍びにはならない。”平民の恰好をしている貴族”として扱われたいのなら話は別だけど、”平民”として街に出た際に、貴族ってことがバレちゃえばお忍びの意味がない。時間を見つけて歩き方とか教えてあげた方がいいね。

「ドロキーン。」

「ん？ なんやおチビ。」

そんな感じで彼女と雑談していると、アルがこちらの方を見ながらドロのことを呼ぶ。マリーナと一緒に商品を見ていたようだが、何か気になることがあったみたいだ。え〜と？ 剣はある程度見終わったから次に装飾品のコーナーを眺めてたのか。

カウンターから出てアルの方に向かうドロの後ろを歩きながら、私も装飾品を眺めてみる。初めて来たときは開店したばかりということもあり何もなかった店内だが、色々と繁盛しているせいか置いてある品々もバリエーションが増えてきている。ほらここの宝石があしらわれたブレスレット、冷気への耐性が手に入る効果が付与されている。身を飾る装飾品じゃなくて、身を守る装飾品だね。

「この腕輪、なんの腕輪ですか？」

「かなり高度な魔法が込められているのは理解できるのですが、何の効果なのか……。」

そう言いながら二人が指さすのは、一つのブレスレット。金属製で青と緑の宝石らしきものが交互に連なっているタイプのものだ。これだけで十分オシャレに使えそうな一品なのだが、それにしても装飾品自体が持つ魔力量が多すぎる様な気がする。

「あ、それね！ いい奴やで〜！ でもちよつと説明がむずいし……、姉ちゃんちよつと使ってみ？ 魔力込めたら使えるはずや。」

断わる理由もないので言われた通りにブレスレットを右手首に着け、魔力を……ッ！ 何!? 滅茶苦茶持ってかれるんですけど！ は？ ちよ、おま！ こういうのは先に言えっての！

大体体感で八割、この前のアルとマリーナの魔法戦の時に使った魔力と同じくらいの力が吸い込まれた後。私の右手に嵌められていた腕輪が発光を始める。あまりの眩しさに目を閉じてしまう私たちだったが……。

「ッ！ お、おつも！ てかこれ！」

「そー！ この前返却された騎乗槍や。そのブレスレットは『呼出』と『送還』の魔法が起動するようになってな？ いつでもどこでも登録しておいた武器を取り出せるって寸法や。まあその対価として滅茶苦茶魔力持ってかれるんやけど……。」

急に手の中に出現する騎乗槍、円錐の突起に滑り止めが施された柄。金属で作られた質量武器だ。急に出てきたせいでびっくりしちゃったよ。すごいもん作ってるねえ、ドロ。そう思い彼女に賞賛の言葉を送ろうとしたが、非常に遠い目をしている彼女。

説明を聞けば確かに、と理解できてしまう。店先に置いてはいる

が、彼女も欠陥品ということは理解しているらしく、『よっぽどな物好きにしか売れへんよなあ』と言いながら私から受け取ったランスを元の場所に戻しに行った。確かにこんな魔法使って武器呼び出すくらいならそのまま魔法で殴った方が早いもんね。

「ま、ネタで作った奴やから別にええんやけどな？　というか姉ちゃん。さっきの槍はどうや？　騎乗戦闘にもってこいの良い槍やで、叩いてヨシ貫いてヨシ。実物にやったことはないけど速度しつかり乗せれば龍のうろこ貫いて心臓まで貫ける良品やでえ？　今なら割引しちゃる、どうや！」

「前にも言ったけど私、槍使わないんだって。」

「そう？　映えると思うんやけどなあ……。ま、いいや。んじや本題に入りますかね。」

そう言いながらカウンターの下から前々からお願いしていた品を出してくれる彼女。

「コレ、前言ってた装飾華美のロングソードな。実際に打ち合う可能性もあるってことやったから材質にミスリル使ったんやけど……。正直言つてクソ面倒やった。量産はできんで、コレ。」

彼女が用意してくれた剣は、私が普段使っているロングソードから実用性を排除し、見た目だけに特化した剣。柄の部分だけでなく刀身の部分まできめ細かな彫刻が為されており、一本一本の線が髪の毛よりも細く感じられる。空白など一つも許さぬというレベルで装飾がされている。この一本で一つの世界が完成されていると言えよう。

彼女は装飾華美と言ったが、きめ細やかに埋め尽くされたソレは見る者すべてを魅了するような仕上がりとなっている。彫られた内容の詳細は理解できないが、羽の生えた様な人間らしきものが複数見えるし、この世界独自の神話が元ネタなのだろうか。

舞台の小道具として依頼したのだけど……。正直予想以上のものを

出されて困惑している。正直この剣は使わずに博物館とかに飾っておいた方が後世のためになると思うんだけど。普通に大英博物館とかに展示されてもおかしくないや。

「帝国の方の彫刻で一般的な神話の一幕をウチなりに落とし込んだ、って感じやな。地元じゃ竜とか花とかそういうのが主流でな？色々初めてやったから面白かったわ。」

「……うん、すごくいい。ありがとう、ドロ。」

「どういたしましたよ。けどな？ わるいんやけど二本目はちよつと遠慮させてくれへん？ ミスリルの硬さにこのレベルのものを彫るのは……、正直割に合わんわ。これ一本仕上げるのに三桁近く廃棄してるからな……、楽しかったのは認めるがもう一度やれって言われたら流石に断るで。だから大事に扱ってな。」

深く頷きながら、剣を彼女に返す。鉄よりも大分硬いミスリルにこのレベルの彫り込み、しかも一つでもミスれば最初からやり直した。溶かして打ち直すことは出来るだろうが、彼女のことだしどの作業も全く手を抜いていないのだろう。傷一つ付けないように扱わないとね。……正直劇なんかに使わずに一生飾っておきたいけど、それじゃあ剣が可哀そうだ。細心の注意を払って使わせてもらおう。

「鍛冶師としては、彫刻する前提で打ってさらにこのレベルの彫刻して耐久度下げた儀礼剣が、実戦にもある程度耐えられるように仕上げられてるっていうヤバさを見てもraitainやけど……。ま、褒められて悪い気はせんな。んじや、大事に箱にしまつとくわ。『保存』の魔化して置いとくからまた取りに来てな？ 今日はおチビどもの引率もあるやろうし。」

「うん、ありがとうドロ。」

「かまへんかまへん、んじやま次いこか。」

サイズの問題で彫刻のスペースの足りない剣でこれだ。彼女には

劇に使用する鎧もお願いしていたんだけど……、どれだけのモノが出来上がっているのか楽しみを超えて逆に恐怖を感じてきた。だって剣よりも倍以上に工夫できるスペースのある鎧だよ？ 正直見るのが怖い。

「ということで次は鎧や、まだ完成はしとらんけどかなりの大作やで。おくい、おチビども！ お前さんらも奥にお入り！ ドロちゃんの本気、お披露目と行きますか！」



「いや、すごかったですね！」

「素晴らしい体験をさせていただきました。公演は是非に！」

いいものが見れたと喜びながら近くの露店で買った果物を口に運ぶ二人。それだけ喜んでもらえたのならドロも喜ぶだろう。実際に感想言った時結構にやけてたし、嬉しかったんだろうね。

本来は未完成品は見せないってポリシーらしいんだけど、懇意にしている依頼主ってことで、特別に見せてもらった舞台用の鎧は色々とすごいものだった。未だ完成していない装飾の部分もあったが、私が着ること、魅せることを十分に理解しどのようになればより引き込まれる存在になれるのかが追及されていた。

ちよっと自身の語彙が足りないせいでうまく説明はできないんだけど、とにかくすごかった、ってことで。うん、アレを見たおかげで

かなりモチベーションが上がってきた。ちよつと追加の注文もしちゃったし、ドロに負けないように私も頑張らないと。

「しかし、やはり帝都は食材が豊富ですね。ラクラクでは生のオレンジなど滅多に市場に出回らぬ貴重品でしたのに、ここでは市民でも十分に手に入る値段で売られている。」

「確か船での大量輸送、でしたっけ師匠？」

「そうだろうね。」

ご存じの通り、帝都はガチガチの港町だ。そもそも帝都の範囲が広すぎるせいで私たちが海を見るには住んでいる地区から馬で移動しなければならぬのだが、一時間弱飛ばせば巨大な港に到着する。毎日色んな物資を帝都に補給してくれる船の積み荷の中にオレンジも含まれているのだろう。人がいるからこそ需要が生まれ、それを解消するために金が動き供給が為されていく。大都市だからこそ大量輸送の必要が生まれ、果物一個に掛かる値段も下がっていく。

「ま、そんなところ。ちなみにウチのオーナー、いや”元”オーナー？彼も海運やってるしなんか欲しいものあったら安めに取り寄せてくれると思うよ。」

「……ありがたいのですがラクラク領は完全な内陸。今欲しいものとしても領地の皆への物資ですの。」

「そっか。」

ここではつきりと自分の欲しいものと言ってくれれば楽なんだけど……、アルもマリーナもそこら辺気にしちゃうタイプだしなあ。ま、よさそうなのが見つかればこっちでプレゼントしてあげる方がいいか。

そんなことを考えながらみんなで通りを歩く。今日も今日とて平和な帝都、大都市の露店が集まる通りということもあり多くの人が歩いているが、多すぎではぐれそうなのではない。ちよつどいい活

気、しんどすぎない人混み、と言ったところだろうか。大きな商店が並ぶ通りではなく、個人の商人が露店を開く。

そのためか露店に並ぶ品々はどれも統一性がない。売りたいものを売り、買いたいものを買う。掘り出し物を見つけないには最適な場所だ。特筆して良い物を見つけたことはないけど、こういうところこそお宝が眠ってそうなものじゃん？ たまくに様子を見に来るのがちよūdいいいのよね。アルもマリーナも色んなものが見れて楽しそうだし、来て正解だった。

(……と、素直に言い切れればよかったんだけど。コレつけられてるな。)

おそろくだが、ドロの鍛冶場を出てからだろう。背後に感じるのは明らかにこちらを見続けている視線、この露店街の中で不自然のないように何度か後ろを確認したが、同じ奴が必ず視界に入る。追跡者だ。

なんでつけられているか、剣闘士時代に人を殺しまくった私からすれば思い当たる節しかない。だがソレが誰なのかは数が多すぎて決め切ることが出来ない。……私にバレてる時点で多分素人だとは思うんだけど、そいつを囮にした玄人の集団って可能性もあるから決め切れない。

一人なら裏道にそれて誘い出し、そこから問い詰めて内容によってはサヨナラ現世をしてもらうってことも出来るんだけど……。

「あ、なんか面白そうなの売ってますよ。」

「……なんでしょう、古本ですかね？ そう言えばこういう露店には食い詰めた魔法使いが魔導書を売りに来るともあるとか。ジナ様？」

「ん〜、いいよ。ちよつと見せてもらおうか。」

今日は二人がいるし、できそうにない。流石にこの前のおつかい、

アルのおつかいの時に遭遇した異形レベルの奴が尾行してきているとは考えにくいけど、万が一がある。

かといってこっちから仕掛けるのもねえ？

露店街ではあるが、通行量も多いため衛兵の警邏の回数もまあ少なくない。こっちから仕掛けた場合、周りに勘違いされて私が無関係な人を襲った、って吹聴される可能性もある。衛兵も衛兵で当たり外れが大きいし、日本の警察みたいに優秀でもない。

(となると受け身が最適なんだけど、それで二人に危害が出ちゃうのはなあ。)

「へえ、これ火の魔法についての本なんですネ。」

「見た感じ内容もしっかりしてますし、偽物でもなさそうです。詠唱の基礎から押さえていますし、貴方にはちょうどいいのでは？」

「おう、師匠！」

「はいよ、これでいいかい？」

懐から財布を取り出し、露店の主へと代金を払う。『欲しいものあったらすぐに言ってるね？ 言ってくれないと店ごと買うから。』って冗談で言っておいてよかった。マリーナはまだ遠慮してるみたいだけど、アルはちゃんと自分の希望を伝えてくれる。

「マリーナは？」

「風についての物がありました、実家にあるものと同じだったの。」

「へー、でもマリーナ。私に言ってるよかったの？ さらに私強くなっちゃうけど。」

露店を離れながらそんな会話をしている、私は背後や彼女たちの周りを警戒しながらだけど、二人は追跡者がいることにまだ気が付いていないようだ。すこし挑戦的な笑みを浮かべながらマリーナへと問いかけるアルの顔を眺めながら、どうすれば追っ手を撒けるのかについて

思考を割いていく。

「ふ、ふん！ 魔法の道はそんなに早く極められるものではありません！ 私は！ 詠唱魔法よりも欠点の多いルーン魔術を扱う貴方に負けたことが気に食わないのです！ さつさと習熟して私に負かされてくださいまし！」

「お、すごい。なんでしたっけ師匠、こういうの？」

「ツンデレかな、すごく典型的だね。」

「……言葉の意味は解りませぬがバカにされていることは解ります。」

……つと。そろそろ露店街を抜けるせいかな、あっちも距離詰めてきたな。

(さあ〜って、どうしようかな。)

53：わたしはできるよ

(さあ〜って、どうしようかな。)

脳内で『加速』のスイッチを入れ、思考速度を上昇させる。

とりあえず、自分の状態を把握し直そう。現在の私の服装は、私服。帝国で一般的な服装だ、ローマみたいな服装って言えば伝わりやすいかな？ つまり防御力は0に等しい。そもそも今日はヘンリー様の家にお邪魔する予定、それもいつもの興行ではなくアルとマリーナの師として伺った形だ。わざわざ物々しい格好でお邪魔するのもマナー的にダメだし、武装も持っていない。

つまり無手ってワケ。

(けど、ま。そっちの方が良かったかもね。)

ルーン魔法を手に入れた私にとって、例えば武器や防具を持っていないくてもそれが戦闘能力の低下につながるわけではない。そもそも素手での殴り合いは得意な方だし、比較的低燃費で魔法剣の生成が出来る以上、むしろ相手の油断を誘えるって意味で何もつけない方がいいかもしれない。まあドロの店で8割近く魔力持って行かれたからカツナンですけどね！

(出力弱めて相手の武器弾いて奪うって方法もあるから大丈夫ではあるんだけど。)

それに、もし今の私が鎧を身に纏っていて、普段のロングソードを握っていれば十中八九相手を殺していただろう。私にとって鎧は仕事着、どれだけ意識しようとも殺意や敵意を向けられた瞬間、剣闘士としての自身が出てきてしまう。手加減することは出来るだろうが、

力加減を間違えて殺してしまう可能性は非常に高い。現役のところと比べると『加速』の性能や体自体のスペックも変わっているし、そこから辺の感覚を間違えて殺すとか超ありそう。

(相手がどんな身分だろうと人を殺してしまえば司法のお世話になっ
てしまう。”ビクトリア”のイメージダウンを避けるのならば殺し
はNG。人の命が軽すぎる世界ではあるけれど、少しでも騒動のタネ
になるのならば避けるのが鉄則だ。)

と、なると。追跡者くんちゃんを殺さないように捕獲するってのが
目標か。追いついたらと今後後ろを付けられる可能性を考えな
いといけなくなるからナシ。同じ理由で逃がすのもダメ、アルやマ
リーナを狙われるつても痛いしね。この場で無力化して、衛兵が飛
んでくる前に情報を吐かせて、後はそのまま司法の手に委ねるのが一
番安全ってところか。

(衛兵はともかく司法の方は言うほど腐敗してないみたいだしね、も
し腐ってたとしてもヘンリ様に”お願い”しておけば問題はないだ
ろう。)

さて、考えも纏まったことだし……。ご対面といたしましょうか。
会話のため、『加速』を解除しながらゆっくりと背後へと向き直る。

「やあ！ さつきからずっと付いて来たみたいだけど……。ファンの
子かな？」

体勢はそのままに、ちょうど後ろにまで接近していた幼子。彼女に
声を掛ける。あ、一番面倒な奴だ。この子が敵じゃなきゃいいんだ
けど。キミカワイイね、何歳？ 明らかに小学生以下だよな？ それ
で私のこと好きなんだ、よっぽどなおませさんか、嘘っぱちかの
どっちかだねえ。……めっちゃキラキラした顔してくれてるから”

おませさん”の方に賭けたいんだけど。

「は、はいい！ さ、さいんくだちやい！」

「あら嘸んじやって、そんなに緊張しなくていいのに。……ああ、それと。ちよつとだけ目を瞑って貰ってもいいかな？ アル、マリーナ。前にいる奴ら、無力化できるならお願いね？ 無理なら時間稼ぎ。」

「了解です！」

「え？」

私とその言葉を発した瞬間、それまでただの通行人として擬態していた奴らが一斉に動き始める。わあ、その道のプロかな？ 初動が早くて無駄がない、ほらさつきまで露店を眺めてたお兄ちゃんを見てよ。もう矢をつがえてるよ。でも私より強そうなやつはいないし、速い奴もいない。ノーモーションで無声での攻撃、明らかに訓練された刺客。となると……、例のラクララ領関連の残党か、復讐のために雇われた奴らか。

先ほどまで通行人として振舞っていた者たちが、一斉に動き始める。その容姿や服装、それぞれが持つ凶器にどれ一つ統一性はないが、私を中心にして囲むように立っている刺客たち、そして目の前にいる囹の幼女のことを考えるに全員が一つの組織またはチームだろう。ただ、今私に武器を向けている、向けようとしている奴らは敵認定してもいいんだろうけど、この目の前にいる幼女をどう判断したらいいのか解らない。

言われた通りちゃんと目を閉じてるしなあ？ 全くの無関係な子が単に囹として利用されたのか、あいつらのグルで襲撃者たちが全員死亡した後「お姉ちゃん助けてくれてありがとう！」って言いながらナイフを突き立てる役かどうかが解らん。一度同じような戦法を喰らいかけたことがあるので二度目はないんだけど、もし前者だった場合後味が悪すぎる。

（とりあえず守れたら守る方針で行くか。最優先はアルとマリーナの

安全で、その次が私。)

〈加速〉十倍速

速度を上げ、私に向けて放たれた暗器。そして背後の二人に向けて放たれたすべてを回収する。十中八九毒付きだろうから刃の部分などを触れないようにし、1/10になった針やナイフ、矢を一まとめに。場所が裏通りとかの人目に付かない場所ならばそのままお返しして毒殺より哀れな爆殺をしていたのだろうが、無関係な人間の目がある場所で殺すメリットはない。この速度での投げ物は色々飛び散っちゃうからねえ、見た目が悪いのよ。

(私の側に12人、アルとマリーナの方に4人。)

そのまま加速の世界に入りながら、ゆつくりと襲撃者たちの前へと移動していく。ここからはいい感じにこの襲撃者たちを無力化していかないといけないんだけど……。今の私は十倍速中、腹パンでもしたら上半身と下半身がお別れしちゃう。かといってデコピンでも色々貫いちゃうだろうし……。

(あゝ〜！ たとえ相手が襲撃犯でも殺しちゃった場合色々めんどくさいんだよなあ！ 法制度調べてた時、最悪一月近く拘留されてた前例あるんだよなあ！ たとえヘンリ様っていう後ろ盾があっても『ビクトリア様なんか捕まったらしいよ?』ってイメージ付くのクソ嫌なんだよなあ!)

正確に言うときアイドルではないんだけど、『ビクトリア』というイメージを売ってご飯を食べている身からすればこういうイメージダウンの出来事はなんと少しでも避けたい。いやそんなこと考えるんだつたらあの時”異形”こといちちゃんの股間殴るな、って言われればそうなんだけども。……あ！ いいこと思いついた！

(軽くシェイクしよ！ ほーらみんな美味しいミルクケーキならぬ、お肉ケーキになるんやで〜。)

襲撃者たちの腰を柔く掴み、上下左右に楽しくシェイクした後地面に放り投げていく。もちろん男女問わずね？ ジェットコースターとかで高速で振り回されたら気分悪いでしょ。それを10倍速でプレゼントしてあげるの。ちよつと最初の方は力加減ミスって指が敵さんの体にめり込んだじゃったけど……、多分死んでないからヨシ！ やっこさんの服の端で手に付いた血を拭き、私の方を襲いに来た襲撃者たちを一つの山にしておく。多分『加速』解いた瞬間にお口からいろんなものが出てくるだろうからあんまり近寄らない方がいいと思うよ。誰でもゲロまみれには成りたくないし。

(と、いうことであっさり私の分が終わったわけだけど……。)

残るはアルとマリーナの方を担当していた襲撃者たち。いつもなら残りも私が処理するんだけど……。

(経験値にしてあげる、つてのもアリか。)

私の『加速』があれば、危ない状況に陥っても介入することが可能だ。私が頑張れば安全が確保できるのであれば、二人の修行。その次の段階に進んでもいいかもしれない。アルとマリーナが今やっている修行としては、自主練と模擬戦が主。私が教えた型とか、流れみたいのを反復したり、私と打ち合いしたり、最初にやった模擬戦みたいなのを繰り返している。

同じ魔法使いだし、同門の相手。お互いに刺激を与えながら自身の欠点を見直していくっていうかなんかいい状態ではあるんだけど……、経験の偏りを感じていた。同じ相手と戦い続けたら変な癖がついちやうって奴ね？

(ほんとはヘンリ様のお屋敷にいる護衛兵たちに手伝ってもらおう予定だったけど……、それじゃ”模擬戦”の域は出ない。ヘンリエツタ様からのオーダーは、『マリーナを伯爵として恥ずかしくない力量まで引き上げる事』。時間の指定はされてないけれど早ければ早い方がいいのは確か。……それを考えると、一番成長できるのは実戦なんだよね。)

正直二人を危険にさらすのはかなり嫌なのだが、依頼を受けている以上オーダーは完遂しなければならぬ。そしてマリーナに課題を課した場合、アルにも同じものを課さなければ不公平感が生まれてしまう。どちらにとつてもいい結果には繋がらないだろう。

いつか私の下を飛び立つ日が来るのだろうか、それは今じゃない。だけど完全に安全を確保できる戦場ってのはそうそうありえない。二人が成長するほどに私の目から離れる機会も増えてくるだろう、実戦は経験しておいた方がいい。体格や毒を使っているという事実から考えてそんなに厄介そうな奴はいないと考えられる。一対一ならまだ……、行けそうかな。

(自分の戦闘よりも気が抜けない、ね。)

襲撃者四人の後ろに立ち、両端の二人を同じようにシエイクして美味しい美味しいお肉セーキに変えてあげる。後はその二人をドナドナしてお仲間のところにボツシユート。最後に残った哀れな経験値二人の背後に立ちながら『加速』を切れば私の行程は終了だ。

その瞬間に彼らの肩を掴み、二人纏めて潰さない程度にギユ、つとしてやる。もちろん両手にはさつき倒して襲撃者から奪った剣を握り、彼らがすでに詰んでいることを教えてあげる。あ、付着してた毒は危ないから倒れてる彼らの服で拭つといたよ？ アルとマリーナの目の前にも同じように処理した剣を一本ずつ地面に刺している。

「や〜！ 小さい子たちをよつてたかつて虐めちやうとか！ 君たちすごい趣味してるねエ！」

日本人もびつくり、と付け足そうかと思つたが我が心の母国じゃ特殊性癖の一つに分類されて薄い本とか探せば大量に出てきそうだ。あ、もちろん二次元の話ね？ 現実でやったらただの犯罪だから普通に捕まって豚箱にぶち込まれてください♡

「ほら見てよ、君たちのお仲間も『気持ち悪い』つて吐いちゃってるよ。きたなくい。」

私の声でようやく仲間たちがどうなったかを理解する彼ら、掴んでいる肩が若干強張る。まあ仲間たちが一瞬にしてお山のように積み重なって、全員が口から内容物をブチまけていたらビビるよね。meもビビる。あ、一応喉詰めないようにうつぶせにしてあるから安心して？ 全員気絶してるけど、死にはしないさ。

「アル、マリーナ！」

「はい！」

「あ、は、はい！」

うんうん、アルはいつものことだから慣れてるよね。マリーナちゃんもちよつと状況把握に時間かかっちゃったか。今日は大丈夫だったけど、いつか驚いている間に自分の命が無くなっていた、なんて状況が来ちやうかもだから耐性つけて、いち早く動けるようにしようね。でもちゃんと返事できたのはえらいぞ！

「ちよつと課外レッスンにしようか。今、絶体絶命のこの襲撃者くんたちの無力化が目標ね。2人で1人ずつ倒しましょう。あ、危なそうなら私が介入するし、頑張つて〜。武器は……、そこにおいてある彼らの使つてもいいし、使わなくてもいい。ま、方法は問わないから

やってみなよ。」

「んで今私に掴まれてる君たちに朗報だ。私はとっても優しくてね？ あの子たちにいい経験を積ませられた、と判断できたら見逃してあげよう。もちろんそこに転がっているお仲間を連れて帰ってもいい。でも、この場から逃げようとしたら全身を振り切り切つて殺してあげる。」

「ぎ、二人ともく。がんばー！」



(うへえ、また無茶ぶりだ。)

そんなことを考えながらも、目の前に突き刺さった剣を引き抜く。普段師匠に使わせてもらっている剣に比べればかなりの鈍で、私の背丈に合っていない少し大きな剣。でも暗殺者が使うような剣のため刃渡り自体はそこまで大きくない。気を付ける必要があるけど、十分使える。

無茶ぶり、と考えてしまったけど師匠が私たちにやらせたい事、経験を積ませたいことは理解している。私と師匠は一緒に暮らしているの、何かと私たちの育成方針について聞かせてもらえることが多い。うんうん頭を悩ませている師匠に水を汲んできて、『何考えてるんですか?』ってな感じで。

そこで聞いたのだが、私たち、特にマリーナに実戦経験が不足していることが問題なんだそうだ。確かに師匠のいう通り、実際の戦いの場の雰囲気はかなり独特だ。一度あの盗賊たちとの戦闘を経験して

いる私でも飲まれそうになる。早ければ早いほど経験しておいた方がいいし、慣れておく方がいい。

(まあ師匠なら私たちに戦場に立ってほしくない、って考えているんでしょうけど。)

さっきまで襲撃者たちの背後にいたと思ったら私たちの背後に、しかもさっきファンとして近づいて来た女の子を抱き上げて私たちのことを応援し始めている師匠。どこから取り出したのか、私とマリナーの名前が書かれた……、うちわだったっけ？ それを軽く振りながら少女と一緒に『こっち向いて！』なんて言っている。

明らかにふざけ始めた師匠ではあるが、さっきからずっと目が笑っていない。女の子を抱き上げる際も確実にボディチェックしていたし、今も私たちを見る目は剣闘士だった時の師と同じものだ。あと襲撃犯たちが隙を見て逃げようとした瞬間背後に回り込むその速度は何なんですか？ ほんとに人間ですか？

(さて、私も目の前のコレをどうにかしないと。)

隣にいるマリナーもようやく覚悟を決めたみたいで、私と同じように剣を構え始める。初動は遅いけど、覚悟を決める時はしっかり決めて、自分の軸をしっかりと持とうとしているのが彼女の強み。その経緯の見せ方というか、自身が背負う責務を全うしようとする姿の見せ方。同門の妹弟子ではあるけど、やっぱり貴族なんだなと考えてしまう。

色々と考えてしまうが、戦いの中で余計なことに思考を割いてしまうのは死につながる。師匠が見ている前でそんなことはできない。利き手で剣を握りながら、もう片方の手でいつでもルーンを描けるようにする。

(警戒すべきは、毒。求められているのは無力化だから殺しちやダメ、

つまり一度も喰らわずに無力化する必要がある。」

つまり殺傷力の高い魔法、火とかは使えない。ならばあんまり慣れてないけど水を主体に組み立てていく必要がある。使うにしても足元を濡らして行動を制限するとか、ぶつけて打撃ダメージにするとか、そういうのだ。どっちみち模擬戦の時のように強い攻撃は使えない。師匠から教わった『敵の頭部を水球で覆って窒息死させる』技を一瞬使おうと思っってしまったが、やめておいた方がいいだろう。

「？（ラグズ）。」

私がルーンを刻んだ瞬間、襲撃者たちが同時に動く。魔法詠唱者と対峙した時は距離を詰める、鉄則だ。同時に私たちに向かって飛んでくるのは数本のナイフと、おそらく本命の針。両方とも透明だが何らかの液体が塗られていることが見える。わかりやすいナイフをブラフとし、本命の針が刺されれば勝ち、ということだろう。

……あ、これマリーナ見えてない奴だ。彼女の視線には自分の頭部と胴体に飛んでくるナイフしか見えておらず、脚部に迫りくる毒針に意識が向いていない。その証拠にさっきまで奴らの背後にいた師匠の姿がブレている。

「マリーナー！」

自身が生み出した水球を目の前に展開し防壁に、それと同時に声を上げながら自身の持っていた剣を彼女の足元へと投げつける。

「え、わっ！」

私の声で踏み出していた足をひっこめた彼女、その足元にはちやうど私の剣が突き刺さっており、同時に甲高い金属音が響く。

「毒針！ 多分まだあるよ！」

「ツ！ んに〜ツツツ！ 感謝を！ 『風防壁』！」

ウインドカーテン

針に気が付けなかった自身への怒りや、私に助けられたことに関する情けなさなどの色んな感情を押し込めるような声を出した後、彼女は感謝の意を述べて風の防壁を構築する。未だ風の制御が上手く行かないのか、その身に纏う服や顔に赤い線が出来てしまいがこれ以上彼女が投擲物に怯える必要はなくなった。

「！ つと！ 剣ぐらい取らせてくれてもいいじゃないですか！」

彼女の様子を見て安心したのも束の間、自身の剣を回収するよりも早く私の相手が切りかかってきた。こっちも同じように剣の刃が湿っている。何かしら塗られているのだろう、喰らっちゃだめで、こっちは無手。わあ、大変。

(無力化、だけど……。)

襲撃者の振るう剣を避けながら、ゆっくりと思考を回す。変に焦つてすぐに崩れてしまう脆い策を立てるより、時間を掛けてゆつくりと策を練る方がいい。だって”視てから”でも避けられるのだから。

自身の才の一つに、『眼力』というものがある。最初は単に目がいいと思っていたのだが、師匠と共に詳細を詰めていくとその良さにも様々な種類があることが解った。単純な視力に、空間把握能力、そのほかにもあまり名前の理解できない色々な種類があるらしいのだが……、その中で一番私が優れているもの。それが『動体視力』だ。

通常の間人であれば把握できない速度で動くものを、把握できる。見ることが出来る。普通の人間ならば、剣を持って腕を振るう相手と相対した際。その腕の向く方向や、体の位置を見てどこから攻撃が来るのかを把握するらしい。だが、私は最初からその全身が見えていたし、振るわれた剣の切っ先も十分に視認可能だった。

(……師匠よりも大分遅い。足元さえ気を付ければ当たらない。)

師匠に剣を教わる前からそうだったのだ、剣闘士の見習いを経て、師匠の弟子として毎日扱われている私からすれば常人が振るう剣など当たるわけがない。こっちは毎日高速移動して残像を残しつつ『影分身の術〜!』って言いながら私に切り掛かってくる人の相手してるんですよ!?! むしろ軽く避けられてないと明日の訓練量ガガガ。

(つと、長引かせてもアレだし早めに終わらせないと。)

剣を見てから回避することは出来るが、師匠のように速度のお化けではない私は回避以外の行動をとることは難しい。となると、目の前にいるコイツを無力化するには魔法のみ。……最悪お腹の中が色々大変なことになってしまいかもしれないが、そこら辺は自業自得ということで納得してもらおう。

「もっかい、?。(ラグズ)。」

利き手の右に水球を生成しながら、そこに回転の力を加える。眼の前の彼は攻撃が当たらないせいか、完全に焦りが出てきている。こっちが何か動きを見せれば、早急に勝負を付けようとするはず、そこに叩き込む。

私の戦い方、魔法の使い方、そのすべてが師匠に教わったものだ。故に、負けるわけにはいかない。

眼前に迫るのは大上段からの一閃、確かに間違いではない。

だが、どうしようもないほどに遅い。

「そっ!。」

振り落とされた刃をはらりとよけ、ぽつかりと空いたその腹に十分に威力の増した水球を叩き込む。

吹き飛ばされ、倒れ伏す敵。

その視線の先に、この結果に満足そうな笑みを浮かべる口と、何か間違ってしまったのだろうかと後悔するような目をした師の姿がそこにあった。……だから心配しすぎなんですよって、師匠。

あの時よりも、だいぶ成長しましたって。

54：移動しますよ

(なるほど、ねえ。)

馬車に揺られながら手元の資料をめくる、そこには先日私たちを襲撃してきた奴らの情報其事細かに記されていた。

アルとマリーナの魔法の先生が到着したという連絡を受けた私たちは、ヘンリエッタ様のご厚意に甘えて彼女の馬車に乗せてもらっている。6人乗りの大きな馬車の中に私と弟子の二人、ヘンリエッタ様って感じた。目的地は帝都の外にある草原で、そこで魔法の勉強をするらしい。どこかの誰かと違って、実際に魔法を使用する場合は開けた場所で練習するんだとき。

因みにヘンリ様だけど、初回ということで昔馴染みの講師の方への挨拶を含めて授業を見学されるらしい。

そのせいでちょっと馬車の外を覗けば結構物々しい護衛さんたちが付いてきているのだが……、一旦それは置いておこう。問題は馬車の中でヘンリ様から渡されたこの資料。わざわざ彼女が手渡してくるあたり結構な厄介事かと覚悟していたが、実際その通りだった。

奴らの目的は私ではなく、マリーナ。ラクラク子爵の娘という立場だった。つまり襲撃者たちは私に親族や親しいものを殺された復讐者ではなく、ラクラク子爵の政敵が雇った暗殺者たちということらしい。まあ暗殺者にしたらレベルの低い依頼料が安い奴らだったみたいだけ。

(道理で歯ごたえがなかったわけだ。)

彼らの主目的はマリーナの誘拐、サブとして私とアルの殺害もしくは無力化だったらしい。依頼者はどうやら先日のラクラク領で起きた騒動に関わっていた者らしく、現在は爵位を奪われ市民となっている

るものらしい。ラクラク領にちよっかいを掛けた子爵を支援して、その巻き添えを喰らった家ね？ 依頼者はマリーナを捕まえることでヘンリ様たちが行った隠蔽工作を破壊し、もう一度例の事件を話題に上げること勢力の巻き返しを狙っていたようだ。

マリーナちゃんに『あれ全部ウソです、ウチは盗賊に負けた貴族の出来損ないです、ぴえん』って言わせて、皇帝に『え、そうなん？ じゃあラクラク家お取り潰しで。あともっかい事件の調査しよ？』って言わせて、依頼者の元貴族が『実はこんな感じだったんですよ、爵位返して♡』ってことをしようとしてたみたいだね。

(まあ最後の爵位を取り戻すってのは無理かもわからんけど、事実が明るみに出ればラクラクがつぶれるのは確か。ついでにヘンリエツタ様が所属する保守派、皇帝派だっけ？ そっちにもダメージが行く。策としては間違いではないね。)

ま、そんなわけで誘拐して口を割らせようとしたみたいだけど……。私の強さを計算していなかったようだ。もしくは過去の情報に踊らされたか。事実過去に油断してというか、なる様になったというべきか、幼女に刺されたことがあるのは確かだし、自分が子供に甘いのには理解している。それに以前五倍速、剣闘士のころの通常速度ではあの数に対応できたかちよつと微妙なところさんだったので、間違いではなかったのだろう。もし襲撃者が大半やられたとしても、アルかマリーナを人質に取ればそこで試合終了だったのは確かだしね。私が未だ成長していることや、魔法を使えるようになったこと。一度も試合に出たことのないアルが結構戦えることや、マリーナもそれに食らいついている、って情報を手でできなかったあっちの負け、つてことだ。

「……ですのやはり『風防壁』^{ウインドカーテン}の精度を上げるのが防御面における自身の課題かと考えています。」

「なるほどねえ……。たしかにお肌が傷物になっちゃうのは見てて楽

しいものではないし、精進あるのみね！　ちなみにだけど、アルちゃんには防衛の時ってどうしてるのかしら？」

「水のルーンを描いて大きな水球を作ったあと、それを壁にしたり中に飛び込んだりする感じです。身を守る手段としてはかなり使いやすくて優秀だって師匠に言ってもらえたんですけど、視界が変にブレたり、中にいる時の呼吸があんまり続かないことが問題でしょうか？」

二人の面倒を見てくれるヘンリ様を横目に思考を進めていく。

この資料にある通り、今回依頼者となった元貴族の確保には成功したらしいが、ラクラク領の一件で処罰された家はまだまだ存在している。しかも相手側の陣営である急進派の奴らが今回の襲撃と同じようにちよっかいを掛けて来てもおかしくはない。私個人が完全に敵対しているわけではないが、頼りにしているヘンリエッタ様の陣営が確実に敵対している上、マリーナはその身分と若さゆえ狙われる立場である。

（こりや貴族になってどうにかなる問題じゃないし、むしろ貴族になるってことは確実にヘンリ様の陣営に入るってことだから、むしろ悪化する可能性も考えられる。）

剣神祭以降私は試合に参加していないため、自身の力量を外部に発信する機会を失っている。つまり何も知らない外部の人間から見れば、私の情報は剣神祭のところで止まっているし、むしろ周囲からは弱体化しているのではと思われてるくらいだ。だって剣闘士からようやく市民になれて、その後ずっとアイドルみたいな活動してるんだよね？　現役時代の様な訓練なんかしないだろうし、強くなるとは思わないじゃない？

まあ実際は強くなっちゃってるし、その噂を利用して『噂を肯定はしないけど否定もしない』スタンスでやっちゃってたから……。正直ヘンリ様ぐらいじゃない？　今の私の実力を完全に理解してるの。

あんまり自身の強さを前面に出した活動をしてしまうと、変なところ。それこそ軍とかから声が掛かって面倒なことになるかなと思っていたのだが、それが逆効果になってしまった感じだろう。かといってもう試合に出る気はないし……。ちよつとなんかいい感じのわかりやすい功績でも立てておいた方がいいんですかね？

(といつても剣神祭レベルの行事ってないぞ？　そもアレに集まっている奴らのレベルが色々おかしかつたし。外に出てからチラツと帝国軍の訓練眺めたことあつたけど『え、よわ。』って感想しか出てこなかったんだけど……。)

「あら？　どうしたのビクトリア様。浮かない顔して……。そんな顔してたら私の物にするわよ？」

「……………何その脅し。」

なんかよくわからんことを言うヘンリ様によつて思考が現実に戻ってくる。

さつきまで見ていた資料の上に彼女の両手が置かれている、少し視線を横にずらしてみれば少し心配そうにこちらを見るマリーナに、『もうちよつと私たちに共有してくれてもいいんじゃないですか？』と目線で訴えるアル。……ありや、そこまで変な顔してた？　ごめんって。

先ほどまで見ていた資料を直しながら、アルの鼻を人差し指でちよつとだけ押す。子供は子供らしくのびのびと前を向いて進めばいいの、汚いのか暗い場所にある厄介事は大人で保護者の私が対処する。こつちの世界じゃどうかしらないけど、そういうのが大人のあべき姿じゃないの？　というわけで明日の私との打ち合いは普段の倍ね♡　泣き叫んでもやめてあげない♡

「なんで!?!」

「私と肩を並べたいのならせめて同じくらい速くなるか、それに対応

できるようにならないと、ね♡」

軽い悲鳴を上げるアル。けどまだ余裕があるみたいで『人間が師匠みたいなおぼけに成れるわけじゃないんですう!』とか言ってる。うん、元気でいいね! そんなに元気なら三倍にしようか! あ、あとマリーナ自分は関係ないみたいな顔で笑ってるけど、キミも同じ量するんだよ? 今ならサービスで口からオーロラ吐くまで地獄のランニング大会もついて来るけど……、やるかい?

「け、結構ですっ!」

「ふへへ、そうはいかないよマリーナア。どうせ私は強制で走らされるんだあ、お前も道連れにしてヤル!」

「は、放しなさいこのアンポンタン! こちとらまだ体出来上がってねえんですわ!! お前みたいに色々戻しながら走るほど女やめてねえ……、ちよ、おま! どこさわってる!?!」

そんなこんなで取っ組み合いが始まる。本気で道連れにしてやろうというよりも、一緒にからかい合って遊んでいるような感じ。うんうん、仲良きことは美しきかな。

「いいわねえ……。あ、そう言えばビクトリア様? 例の女の子だけど、ほんとに無関係だったわよ。『お菓子くれた! あとビクトリア様見失った時、一緒に連れてってくれた!』だそうよ、完全な囷だったみたいね。」

「そっか。……一安心、かな?」

「……にしてもあの女の子、非常に見込みがあるわね。お家はどこだったかしら? 彼女と一緒に”推し事”してみたいのは確かだけど、いったいどんな英才教育を施しているのか親御さんにお話を聞いてみたいわ!」

「いや、やめてあげてね?」

あの後お家まで送り返した時、色々大変だったからね？ 件の幼女ちゃんはずつと楽しそうにしていたんだけど、お母さんがもう可哀そうなレベルだった。気が付いたら幼い娘がいなくなっていたことの不安で1Hit、ちゃんと帰って来たと思えば私の肩に乗って数人の衛兵さんと一緒に帰ってきたものだから娘が無事であったことへの安堵と、いったい何があったの!?! という気持ちで2Hit、私と衛兵から話を聞けば、勝手に鍛冶屋街から出ちゃった上に暗殺者たちに利用されて最悪死ぬところだったで3HitでK.O. だもの。

ころころ表情が変わるお母さんを見てなんかもう色々気の毒だった、二人の弟子を抱える手前気持ちはすごくわかるし……。ただでさえかなりのダメージ受けてるのに、ヘンリエッタ様っていう特大の右ストレートなんか持つて行っちゃったらあのお母さん倒れちゃうよ？ ご自身の身分しつかりと把握してもらて。まあ、幼女ちゃんは『お婆ちゃんのお友達増えた!』って喜びそうだけれども。

「そうよねえ……。やるとしたら完璧に身分を隠さなくっちゃ!」
「いやだからやめようね?」

その目の色から、何の含みもなく確実にふざけていることは理解できるが、多分このまま放っておくと急に予定を変更して彼女の家に行きかねない、今日の彼女なんか無駄にテンション高いし。何か話題を変えないとあの子のお母さんがぶっ倒れてしまう。そう考え新しい話題を探す。

「ヘンリ、話は変わるんだけど今日ってこんなに護衛必要だった？ 最悪私と彼だけで十分だと思っただけ。」

そう言いながら馬車の窓の外に指をさす。全員がガチガチの装備を身に纏い、兵種も騎兵に歩兵に魔法兵、斥候ときて決め手に異形ちゃんというより取り見取りの完璧小隊。たしかにヘンリエッタ様という大貴族の護衛にしちゃ少ない方だけど、30人くらいいるから

結構な規模だ。全員の練度もかなり高いしね。

「そも私やいーちゃんに勝てる奴なんかまずいないし、もし想定外が起きたとしてもいーちゃんが肉壁になって時間を稼いで、私が全員を安全地帯まで運ぶ。まあ確かに護衛は必要だろうけど、思ってたよりも多かつたし全員ガチガチだったからさ。気になっちゃって。」

実際、私と異形の力量は他の面々と比べると頭10個分くらい飛び出ている。私は言わずもがな高速戦闘に、最近覚えた魔法で遠距離攻撃も可能。遊撃としては最大の戦力と言える。対して異形の方だが、彼も彼で異様な進化を遂げてしまっているので滅茶苦茶強い。今本気で私たちがやり合ったら、6対4で私が負けて、勝てたとしても確実にその後まともな生活ができないレベルの後遺症を覚悟しなければならぬくらいクソ強い。

なんか剣神祭のあとヘンリ様に保護されて食生活とか住居とかが改善したせいとか、体が一回り大きくなって、『再生』の速度も意味わからんぐらい速くなっている。以前私が頭部を吹き飛ばした時は再生までかなりの時間を要していたんだけど、最近は30秒もかからずに再生する上に、頭部が破損状態になってもそれまでと同じような理性的な攻撃が出来るようになったらしい。

「腕とか食い千切られても数秒で元通りになるらしい……、ねえ？」
「師匠も師匠ですけど、あの人もあの人で人間なのか解らないですよね……。」

私やアルがそう言っても否定しないあたり、ヘンリ様も同じように思っているのだろう。私が『速度』に関する化け物とすれば、あいつは『死なない』ことに関する化け物だろう。ゲームとかだったら回数制限だったり、明確な弱点とかあるんだけどアイツそんなのないし……。再生の仕組み的に最初は体内にあるエネルギーとか使わらしいけど、足りなくなったら周囲に浮かぶ魔力とか使って再生するらしい。

いいし。もう完全に勝利するにはとんでもない高火力の魔法とかで消し飛ばすしかない。

「まあ実際そうなのだけど……、彼らには間引きと調査をしてもらおうと思っただけ？　ついでに行き帰りの護衛もお願いしようかな、って。」

ラクラの一件で帝都の周辺に魔物が流れている、っていう話をしたのだが、未だその影響が残っている場所があるらしい。本来ならば国から冒険者などに依頼をすることで処理をするらしいが、ある程度情報がなければ正確な依頼を出すことはできない。私や異形並みの魔物がひよっこり現れて、冒険者っていう貴重な魔物退治の専門家たちが消えてしまうのは避けたいってことだ。

彼らの目的はある程度帝都の周りを調査して、可能ならば魔物を殺して間引きをする。大規模な掃討を冒険者組合に任せるための前準備ってことらしい。

「ほんとに国軍がやるはずだったんだけど、ちょっと手が離せないらしくてね？」　貸し一つ”　ってことで我が家がやることになったの。あの子がいればどうにでもなるでしょうしね。」

なるほどねえ。……とところでさ。ヘンリ様のいう”貸し一つ”ってなんか滅茶苦茶怖くない？

55：お授業ですわ

とまあそんなわけで帝都から少し離れたただっ広い草原に足を運んだわけですが……。

「やほー！　ってあなた、また老けたわね。」

「まあ実際かなりの年よりですからな。」

本来は一応護衛として付いてきている私が先に降りなければならぬのだが、真っ先に馬車から飛び出したヘンリエツタ様。彼女が元氣よく話しかけたのはお口に真っ白で長々としたお髭を蓄えたお爺さんだった。というかなんか彼の後ろにどこからどう見ても『ゴレム』みたいな存在が突っ立っているんだけど、アレ魔物じゃないよね？　切り殺さなくて大丈夫な奴だよね？

「みんな〜！　この人よこの人！　ほらウイウイ先輩！　挨拶！」

「ご紹介に預かりました、魔法学園にて”基礎詠唱魔法学”の講師を務めさせていただきます。ウイルウイトス・ソス・テスラと申します。陛下からは男爵の位を頂いておりますが、どうかお氣になさらず。……ああ、こちらのゴレムは私のですので、心配ご無用。」

「それで私の学園時代の先輩！　優秀な人なのよ〜！」

そう言いながら全力でお爺ちゃんのを叩くヘンリ。明らかに人体から出る音ではない激しい音が出ているあたり、二人とも身体強化系の魔法を使っていることが解る。旧友に会えたせいかな無茶苦茶はしゃいでますね、ヘンリ様。いつもとはまた違った感じ、まるで学生時代に戻ったかのようなテンションだ。

「そりゃそうよ！　だって久しぶりの再会が葬式とかこの年じゃよくあるし〜！」

あゝ、うん。なんとも反応しづらい。

正確な数値は解らんけど、確かにこの世界の人間の平均寿命がクソ短いのは理解できる。治癒魔法は体力の回復は出来ても病気の治療が出来るわけではない。治癒魔法が出来る術者の数も限られてるし、医療技術も地球の同時代よりはちよつと進んでる？ 程度だから死ぬときは普通に死ぬ。

子供は病気で死ぬ、大人は病気と戦いで死ぬ、老人は病気と戦いとそれまでの無理がたたって死ぬの段階的負荷増加システムだもんね。だからこそ体力が大事、って話になって来るんだけど関係ないの置いておこう。

ヘンリエッタ様の返答しにくい冗談をスルーしてお爺ちゃんの前に立ち、手を差し出す。

「初めまして、ビクトリアと申します。本日指導をお願いする二人の近接及び実戦の担当をさせていただけます。」

「これはこれは、学園でも貴殿の名は響いておりますぞ。生徒からはウイウイ先生と呼ばれておりましてな、ぜひそのようなにお呼びください。」

軽い挨拶を交えながらしつかりと握手を交わす。にしても、まさに古典的な魔法使い、って風貌だ。年代物だがしつかりと手入れされたローブに大きなトンガリ帽子、長い木の杖を持ちお口に真っ白なお髭を蓄えたお爺ちゃん。正統派ファンタジー映画に出てきそうな人。

話には聞いていたけれど、どこからどう見ても『お爺ちゃんの魔法使い』って感じね。

「あら、そうなのですか？」

「ええ、ええ。男女問わず、いえ特に女性の方に人気のように。あのなんでしたかな？ 小さい人形のような……」

「キーホルダーですか？」

「おお、そうですそうす。持っている生徒を見かけたことがございますぞ。持っている鞆が隠れるほど付けておりました。」

あゝ、デフォルメした私のぬいぐるみキーホルダーね？ 元オーナー現プロデューサーと新規グッズ開発の会議した時に、カッコいい系で攻めるか、かわいい系で新規層狙うかで迷って、『こんなに迷うんだったらもう全部作って売る！ オーナー決めたもん！ もう会議嫌だもん！ おうち帰る！』ってなった奴。にしても鞆を埋め尽くすとかもはやそいつ推し活の才能あるな？

「あ、そうだ。二人の教育方針についてのすり合わせなどを後日行いたいなと考えているのですが……。」

「はいはい、理解しておりますとも。実は現在溜まりに溜まった休暇の消化中でしてな。あと三か月ほど帝都にいるつもりなのですが、基本全て空いております。宿の場所はヘンリ殿にお伝えする予定ですので、いつでもご連絡ください。」

「この人休み取らずに、ずっと教室か自分の研究室にいるもんだから半ば学園から追い出されたのよ。」

そう笑いながらヘンリ様が言う。なんでも学生時代から家にも帰らずずっと学園の職員室に質問しに行くか図書室で自習、卒業後はそのまま学園に就職して教師やりながら自分の研究室に籠りっぱなし。十数年前から後進の育成に力を入れ始めて研究室より教室にいる割合が多くなったらしいけど、それでも休みは全くとらない。

学園は国営の施設で、ちゃんと休暇などを取らねば色々問題になってしまう。なのにこのお爺さんは全く休まないものだから運営側としては目の上のたんこぶ。そこをちょうどいい教師役を探していたヘンリエツタ様が目を付け、学園に恩を売ると同時に、ウイウイ先生の希望である『優秀な後進を送り出す』っていう願いを叶えてあげることにしたそうだ。

……相変わらず有能だよね、私の雇い主サマは。

「さき、立ったままではしんどいですからな。すぐ椅子の用意をいたしましょう。ヘンリエッタ殿？ 護衛の方々の椅子も必要ですか？」

「いえ、この子たちは別件があるからいらないわ。生徒の分と私の分だけでお願い。あ、あと彼女のもね？」

「ほほ。了解了解、では早速。」

彼が何かを唱えながら杖を軽く地面へ叩きつけると、何もなかったはずの地面から土煙と共に何かがせり上がってくる。しかも大量にだ。

「「おお……。」」

土煙が収まると、私たちの視界に入ってくるのは2セットの学習机と椅子、そして彼の背後からせり上がってきた黒板だった。私の背後にも椅子が浮き上がってきているし、ヘンリエッタ様の方も椅子が生成されている。構造としては石柱の座る部分がへこんでいる簡易なものだが、遠くから見ても綺麗に研磨されているものだということが理解できる。

軽く触ってみるが……、わ。すべすべ。土魔法ってこんなのも作れるんすねえ。

「さき、どうぞ座ってください。」

彼の声に従い、目の前の椅子に座る生徒二人。それを確認したウイウイ先生はゴーレムに何かの指示を出し、二人の机の上に何かしらの教材を乗せてくれる。結構な厚みがあるし、アレ一冊で全部収まるタイプの教材かな？ というか魔法の授業って何やるんだろ。私ほぼ独学でルーン覚えたし、気になる〜！



「さて、まずは確認なのですが……。お二人は現在どのような魔法をおつかいですか？　名前順で……。アル殿から。」

「え、あ、はい！」

ヘンリエッタ様の指示で付いてきていた護衛の方々が離れた後、彼女たちの授業はゆっくりと進む。『年が年なので座らせていただきますぞ。』と言いながら自分の席を用意した彼がアルへと話しかけた。

うくん、なんか授業参観してる気分。

「えっと。ルーン魔法を師匠に教えてもらってまして、それを使つてます。後、火と水に適性があるって言われました。」

最初は少し詰まったが、ちゃんと受け答えできたアル。わ、お母さんうれしいわ！

……とまあそんな茶番は置いておいて、私は私で仕事をしておう。今回のご依頼はここにいる全員の護衛だ。ヘンリ様もウイウイ先生とやらも十分戦えるし、アルとマリーナも先日の襲撃の際にその実力を示してくれたが、一番前に出て戦うべきは私だしね。さつきまで付いてきてた護衛の人たちは『ビクトリア殿がいれば大丈夫やろ。』って感じだったし、ちゃんと見張つとかないと。

ま、ラジオ代わりに講義は聞かせてもらうけどね？

「おお、珍しい方式をお使いなのですか。一応私も齧ったことはありますが実際に教えられるのは詠唱のみ、それでもよろしいですか？」

「大丈夫です！」

「うむ、良いお返事。了解しましたぞ。……では次、マリーナ殿もお教

え願えますかな？」

「私は詠唱魔法を、独学にはなりますが家で学んでおりました。属性は風、あとほんの少しですが雷の適性があるとも。」

ほへー、マリーナちゃん雷の適性あったんだ。の割には全然使つてるところ見たことないけど……、今はできないのかなのかね？ まあ風魔法に強いこだわりがありそうだし、『私は風一本でやるぜえ！』つて感じなのかも。

そういえば私の適性つて何なんだろうね？ 一度教会で”才能”を見てもらった時は『魔法？ 諦めろ。才能ないぞ。』だったけど一回死んだときにあの神サマから適性貰ったんだよね。でも特にどの属性が使えないとか、この属性が得意とかなかったし……。もしかして全適性があるとか!? キャー！ チートよチート！ ……厄介なことになりそうだし、”才能”見て貰うの一生やめとこ。

「うむうむ。先にお聞きした内容と間違いないようで。では早速授業を始めていきたいところですが……。まず”魔法”とは何なのか、についてお話させて頂こうかと。」

え、何。むつちや気になる。なんかそういうのこの世界の常識っぽくて聞くに聞けなかったんだよね……。私の持つてるルーンの本にも書いてなかったし。というかアレ半分くらい研究論文みたいな奴だったし。ルーンの使用者が少なすぎて手に入る資料がそれぐらいだつていう悲しい本だったからね……。便利やぞルーン。

「魔法とは、自身の体内に宿る魔力や、空气中に漂う魔力を使用して発生させる”奇跡”です。通常人間では為せないようなことや、少し考えればありえないようなことを実現させる。神の奇跡、その劣化ではありませんが似たようなことが出来るわけですな。魔力を用いて神が治める世界へと伺いを立て、この世に魔法という現象を出現させる。」

杖を操作し、傍に控えていたゴーレムに黒板へと文字を書かせる彼。座りながらどう授業するんだろ、って思ってたけどそうするんだ。というかそのゴーレム便利やね。……私も作れるかな？

「して、その魔法なのですが……。わかりやすく言いますと、『奇跡のお店屋さん』です。」

「……お店屋さん。」

……お店屋さん。

「ええ、お店屋さんです。”魔力”という硬貨を払い、”魔法”という商品を購入する。より効果の強い”魔法”が欲しい場合、それに見合った”魔力”が求められるわけです。」

「先ほどアル殿とマリーナ殿が教えてくださいました属性についてもこちらで説明出来まして、”魔力”という硬貨でも様々な形式があるわけですな。例えば火の魔法を買うとき、まん丸の硬貨であれば三割引き。対して四角の硬貨は扱いにくいから二割増し。人それぞれ得意な属性や苦手な属性があるのは、皆自分の持つ”魔力”という硬貨の形が違うから、というわけです。」

「例えば、私は今動かしているゴーレムのような土魔法を得意としており、あまり大きな魔力を使わず行使できるのですが、逆に氷系の魔法はかなりの魔力を要求されます。理論上『魔力さえあればどの人間もすべての魔法を使える』はずが、実際使えない属性の魔法があるのは求められる硬貨の枚数が自分のお財布、魔力総量よりも大きいのが原因なわけですな。」

へー、そういう感じだったのね。

にしても『魔力さえあればどの人間もすべての魔法が使える』ね。奴隷になったころ裏の世界で魔力タンクにされて干からびちゃった奴隷見たことあるけど、そういうのに使われてたんだなあ。……あ、魔力だけど限界まで使っちゃうと普通に死んじゃうから気を付けて

ね。よくあるRPGみたいに『MPOになれば物理攻撃だ!』は不可能な世界なので。

「ちなみに、先ほどアル殿が使っていたらっしやるといったルーン魔法ですが、こちらは詠唱魔法とかなり違います。アル殿は詠唱魔法への理解を、マリーナ殿は復習代わりにお聞きください。」

あ、それ。私も気になる〜!

「まず、ルーン魔法と詠唱魔法ですがこの両者のどちらかが優れている、劣っているというわけではございません。通る道筋、先ほどのお店屋さんに例えると注文方法が変わるだけで実際に払う魔力、起こすことのできる奇跡に差は全くございません。」

「詠唱魔法ですが、こちらは口で発音することで扱います。一つ一つの単語、フレーズですね? こちらに魔力を込めて奇跡を起こすわけです。対してルーンはルーン文字という詠唱魔法のフレーズに当たるものを宙へと書き、効果を及ぼします。この二つの大きな違いとしては……、『フレーズの持つ意味の大きさ』、というような。」

彼の操るゴーレムが先ほど彼の言った言葉を丁寧に書く。さっきのお店屋さんの話の時もそうだったが、単に板書するだけではなくちよつとしたイラストも黒板に描いている。集中が切れないように、注目し続けられるように色々してるんだなあ、とちよつと感心。やっぱベテランなだけあるんですね。

「そうですね……、例として剣にいたしましょう。ここでは商品である剣を魔法といたします。」

『詠唱魔法』の場合、自身が欲しい剣の特徴。刃渡りや柄の長さなどで商品を入手します。複雑であればそれだけ説明の時間が長くなる、詠唱の時間は長くなりますがフレーズさえ覚えてしまえば何度も

注文できるわけですね。」

「対して『ルーン魔法』ですが、こちらはルーンを描きながら自身のイメージを世界に反映させることで効果を及ぼします。お店屋さんに例えるとそうですね……。店員の方に『剣が欲しい』とだけお伝えし、一緒にどれがいいのかをじっくり考え手に取って見ながら決める、でしようか。」

「イメージを固めるのに慣れる、簡単なイメージだけで形成するなど思考する時間が早い魔法であれば詠唱魔法よりも格段に早く効果を及ぼせますが、大規模な魔法となると詠唱よりも非常に長い時間が掛かるそうです。」

あく、めっちゃわかる。イメージ纏めるのめんどいもん。私は前世の記憶とかでそう言った魔法のイメージとか固めたり、記憶から引き出したりするの早いけど慣れてなきゃすごく遅くなっちゃうと思う。実際複数のルーン使ってより大きな魔法使うときはかなり時間取られるし……。

「結論を申しますと、まあ一長一短ですな。アル殿はぜひ私の授業を通して自身のより扱いやすい魔法を見つけていただきたいと考えております。」

「あ、はい！ わかりました！」

イメージさえ固めればルーンの方が早くて使いやすいくけど、頭の中で固めるのが難しければフレーズ覚えて欲しい結果を及ぼせるようになりなさい、ってことですかね？

「さて、説明としてはこれぐらいでしようかな……。では今後の授業についての軽い説明を。」

「詠唱時に使用するフレーズの意味や効果、そして個人に合ったフレーズなども一緒に学んでいこうかと思っておりますが、同時に自身が使いにくい属性といったところも見ていきましよう。」

「ヘンリエッタ殿にお聞きしておりますが、お二人が求めているのは自身に降りかかる火の粉を払い、その出元を滅する力。普段私は基礎の基礎。詠唱に使用する単語の意味や、それぞれの属性との相性。そしてその効果などを教えております。」

「では早速始めて行きましょう、教科書の2ページを……。」

本格的に始まる魔法の授業、二人とも頑張っ……。あ、魔物ミツケ。
〈加速〉、首はね、処理完了。ただいま。

56：フードファイトは辛いよ

【魔法屋さん】

○アルの場合

おう、いらつしやい。何をご注文で？　おうおう、ファイアボールな。そこに細かい注文を書くシートがあるから”詠唱”をかき込んで…、つておたく”ルーン”使いか！　最近見ねえから注文用紙下げちまったよ。あく、どこにおいたっけな、つと！　お、それぞれ。見つけた。まずこの上の欄に使うルーンを書いてもらって、下の自由スペースに求めているファイアボールの絵を描いてくれ。こつちでそれを実際に魔法作ってる職人に渡して、実際に作って、お前さんに届ける形になる。あ、突拍子もないこととか、意味不明な絵は描かないでくれよ？　注文書はしつかり正確簡潔に、つて奴だ。

んで支払いは…、お。嬢ちゃんの”魔力”硬貨はこんな形か。これだったら火魔法と水魔法の職人が好きな形だな。割引してくれると思うぜ？　代わりに風魔法の職人はその形嫌いだから割増しになると思うわ。そこんとこよろしくな？　あ、あと注文形式で値段は変わらねえから安心して良いぜ。

○マリナーナの場合

おう、風の嬢ちゃんじゃねえか。今日も風魔法かい？　おうおう了解。んじやいつものようにその注文シートに”詠唱”をかき込んでくれ。一応もつかい説明しておくが、例えば「ウィンドボールの形状」の欄に「球状」と「楕円状」と「ランダム」とか色々書いてあるだろ？　欲しいところに○付けて出来たらこつちに渡してくれ。まあマークシートみたいなもんだな。細かい注文があるんだったら呼んでくれ、マークシートじゃなくてコード表用意するからな。

んで支払いだが…、やつぱ嬢ちゃんの”魔力”硬貨は風にぴったりだな。一族代々似たような形だし、普通よりもちよつとだけ割引し

とくぜ？ やっぱお得意様にはサービスしねえとな！

○ジナ（ビクトリア）の場合

いらっしやい、お前さん魔法屋は初めてか？ そうそう、ここで魔法を魔力で買って現実世界で使うんだよ。んじやままず“魔力”硬貨みせてくんねえか？ その形でどの魔法の割引が利くとか見るからよ……って、何だこの形！ こんなクソな硬貨見たことねえぞ！

なんか形が歪だし、若干欠けてるし、罅入っているのもあるし……。悪いがこれじゃどこも取り扱ってくれねえと思うぜ？ お前さん体はしっかりしてんだから魔法はやめてそっちで……。ってちよいまち。お前さん財布の中に入ってるソレ。そう金色の紙。悪いがちよつと見せてくれ……。ってこれは！ 『全品定額クーポン』!? しかも繰り返し使用できるうえに無期限の最強クーポンじゃねえか！ おうおう！ もってけもってけ！ さすがにお代はもらうがどれでも好きなの持って行けってんだ！

「はあ、はあ、はあ……。あ、ありがとうございます、ました……。」

「はい、お疲れさまでーす！」

息を何とか整えながら、せめてもの抵抗として礼の言葉を口にす。皆様ご機嫌よう、最近自身がぼろ雑巾のようになりながら地面を転がるのに何の抵抗も感じなくなってきたマリーナです。

ジナ様のご自宅で基礎トレーニングを行ったり、ヘンリ様のお屋敷や外でウイウイ先生から魔法の授業を受けたり、受けた指導を自分なりに昇華させるためアルと模擬戦を行ったり、ジナ様に遊んでもらったりと自身の力が少しずつ伸びていくことが実感できる日々を過ごしています。その合間に領主としての勉強も叩き込まれているため決して楽なものではございませんが、充実した毎日ではありません。

ラクラを継ぐ者として必須なのは力、他者を寄せ付けぬ圧倒的な力であり、自領の者たちを守り抜く庇護の力。ジナ様はもう色々なにかおかしいというか、人間じゃない気がするというか、もうそういう”存在”として納得した方がいいと考えましたため、師を超えることは不可能そうですが着実に力は上がってきている。これならいずれ、確実に貴族として相応しい力を手に入れられると思っていたのですが……。

やはり、慢心していたのでしょうか。

「いや、頑張りましたね。ほら息整えて、レモンぶち込んだだけの水ですけどどうまいですよ。」

「ど、どうも。」

回らない口を何とか動かしながらそれを受け取り、浴びるように飲む。全く息を乱していない護衛兵の彼女と、私。魔法無しの模擬戦とは言えここまで差があるとは思っていませんでした。

現在私たちは師であるビクトリア様ことジナ様の提案で、ヘンリエッタ様の護衛兵の方々と共に訓練を行っています。ヘンリ様のお屋敷の中にある大きな広場の中で日々鍛錬し続けた武を確かめ合うこの機会、常々『経験不足だから色々経験させてあげたいんだけど……』とこぼされる師にとってはとても良い機会だったのでしよう。

いやまあ私も経験が自身の糧になることは重々理解しているので

すが、先ほど声を掛けてくださった方を含め誰にも勝つどころか一太刀も入れられなかったとなると……、色々思うことがございます。

「気にしちやダメですよマリーナ様、私らコレで食ってるんですし。むしろ子供に負けたら腹切って詫びないといけないくらいですから。」

「そうそう、さすがに腹は切りませんけどもし負けたら普通に職を辞さないといけないレベルですからね。ご安心を、年齢を考えればかなりの上澄みですぜ？俺がお嬢ぐらいの年とか剣の握り方すら知らなかったんですから。まだまだ伸びますって。」

「……だといいいのですが。」

一部の方にそう言われるが、あまり慰めにはならない。確かに自身の一番得意な攻撃手段である魔法を封じた近接武器のみの手合わせであったが、それでも歯が立たなかったのは事実。ジナ様の下で訓練に励むことによって自身が伸びた感覚はあった。だがこんなのじゃまだ足りない。貴族の象徴である魔法は時に意味をなさなくなる、近づかれ過ぎた場合や、相手が魔法への耐性を持っていた場合。

どのような状態でも勝利を収め、力を象徴し続けるのが貴族。ララクラの人間としての務め。もつと前に進み続けなければ。

そう決意を新たにしながら眺めるのは、自身の姉弟子である彼女の試合。最初は単に話すときもそう呼んでいたのだが、いつしか名前呼びに。そして関係性も姉と妹ではなく、追う者と追われる者、ライバルという関係に落ち着いた。

「アルちゃんそー！モノブなんかやつつけちゃえ〜！」

「……あの年で打ち合えてる時点でヤバイよなあ。確実に視えてるし。」

「……。」

魔法単体であればまだ勝利を拾えるが、剣のみ、もしくは総合的な

勝負となった場合勝つことはかなり難しい。師の言葉によると『このまま死に物狂いでスタミナを鍛えて、アルの流しを崩せるぐらい苛烈に攻め立てる攻撃が出来るように成ればようやく五分五分くらい？あ、剣の話ね。』と言われている。基礎トレーニングのランニングでアルに付いて行けず、地面に倒れ伏しながら戻してしまった私がいつ追いつけるのやら……。

（焦るべきではないことは理解している、初めての時のように戻してしまう回数は減り、走れる距離も延びてきた。だけど……。）

悩みを抱えながら、自身の脳はずっと彼女の動きを追い続ける。自身の目標は貴族として恥じない強さを手に入れることに他ならないが、どうせやるのなら身近な競争相手、姉弟子でもある彼女を超えたいと思っている。むしろ直近の目標はソレがメインだ。そのため、彼女が戦う姿を一瞬でも見逃せるわけがない。

（受ける面、角度、反撃に移るタイミング。どれ一つとっても気が抜けない。）

私のように体格が優れているわけでもなく、我らの師のように驚異的な速度と膂力があるわけでもない。だが彼女は確実に攻撃を防ぎながら、その首を刎ね飛ばす機会をうかがっている。何度も対峙して、自分たちの才について話し合つてようやく確信にいたったこと。それは彼女の驚異的な眼の良さ。我らの師の速度を誰よりも長く肌で感じていたからこそその力。

彼女の目の前に立つモノブという男性の剣速は決して遅くない。むしろ速い。今のように離れていれば十分に知覚できるが、眼前に立たれた場合今の自身が反応しきれず勘で動くしかない相手である。むしろヘンリエッタ様が抱えている護衛兵の力がその程度で収まるはずがない。皇室を最前線で守り続ける親衛隊や、国軍の頂点にいる將軍たちに並ぶ力を持つ者ばかり。

だが、”彼女”と比べると、どうしようもないほどに遅い。

(まああの人の速度に勝てる存在は確実に人間ではないのでいいんですけど……、それを途中までとはいえ視認出来ている貴方も十分おかしいんですよ。)

確実に何かのスキルなのだろうが、アレは神からの祝福であり呪いでもある。私のように何も持たぬ者は思考から外して、ただ超える手段を探すのみ。

護衛兵が繰り出した横薙ぎを、まるで最初から来るのが解っていたように薙いで行く彼女。たとえ見えていても彼女は速くは成れない。しっかりと受け止められているところに彼女の努力が感じられる。

「よおーし、時間だ。一旦中止して昼休憩〜！」

確実に受け流しながらカウンターを叩き込むが、そもそもの膂力が足りず確実な一撃となっていない彼女の戦いを観察していると、護衛兵たちの長が声を上げる。空を見上げればもう日がかなり高く上がっている、昼食の時間なのだろう。……あんまり嬉しくない時間だ。

「あ、お疲れ。そっちはどうだった？」

「全然ですわ。」

「私も、はあ。もうちよつとなんかこう、攻撃力が上がる技とか欲しいなあ。」

そう言いながら私の隣に座る彼女、飲みかけではあるが先ほど護衛兵の一人から渡されたレモン水を投げ渡してやるとおいしそうにそれを飲み干す。おそらく午後の訓練には参加できないほどスタミナを消費してしまった私と、まだはつきりとした会話が出来るほどに体力の残っている彼女。こんな所でも、差が見えてしまう。

「たしか、筋肉の付け過ぎは成長を阻害する、でしたか？」

「師匠の謎知識だよね。まあ大体合ってるからそうなんだろうけど、今日みたいに鎧の腹で受けられて『今攻撃しました？』ってされるのは正直かなりへこむ。」

「あゝ。」

単純な攻撃力に繋がる筋力増加の訓練はさせて貰えない代わりに、私たちが課せられているのは継続戦闘能力の向上。早い話がスタミナの向上だ。文字通り吐くまで走らされて、吐いた分以上のものを詰め込まれる。実際それで伸びているので文句は言えないのだが、めちゃくちゃしんどい。

「は〜い、談笑中悪いけどメシの時間だよお二人さん。」

「げ。」

考えていたら来てしまった。急に首根っこを掴まれ宙に浮く私とアル。その腕の持ち主は勿論私たちの師匠であるジナ様だ。普段では高まる感情が脳を全て支配していくのだが、ちよつと今は疲労感とこの後待ち構えているものへの恐怖が大きい。

”ビクトリア”としての正装、真っ白な鎧を身に纏った彼女によって連れていかれた先は、先ほどまで訓練を行っていた広場の端っこ。この時間のためにいくつもの机が広げられた場所だ。その一つに座らされた私たちにもう逃げ場はない。隣にいる彼女の顔を見ればもう完全に諦めている。

「ほいほい、水球出しとくからそれで手洗って。」

師が宙にルーンを描くと、私たちの目の前に小さな水球が現れる。言われた通りにそこで手を洗えば、今度は風のルーンで付着していた水分が吹き飛ばされた。詠唱魔法では再現することが難しい細やか

な魔法、ルーンの強みを前面に出した使い方。魔力の無駄使いともいう。

「じゃ、並べていくから全部食べてね。あ、メニュー違うから違うの食べないように。おかわりもあるからね♡」

「……。」

目の前に並べられたのは文字通り山のように重なる料理たち。一品一品が明らかに自分の頭よりも大きいという理不尽。四人掛けのテーブルが全部埋まるほど並べられてなお、まだ続きがあるという。とんでもない大食漢か、もしくは自身の胃袋の容量を理解できない愚か者か。これを見て喜べるのはそれぐらいだろう。ははは、冗談きついつすよジナ様。

「いい、頂きます。」

「は〜い、全部手作りだから美味しく食べてね♡」

ああ、過去の私よ。手作りだと聞き飛び上がって喜べた私よ、当時の喜びを少しでもいいから分けてくれ。この人マジで全部突っ込んでくるから！ 本気で全部消化させようとしてくるから！ たしゆけて！ にげさせて！ でもにげれるわけないじゃんか！ 物理的にも心情的にも不可能！ 経験上全部胃の中に収められるのは理解してるけどあの自分が人間なのか、それとも食事を無理やり詰め込んだただの袋なのかわからなくなる感覚！ 何度も味わいたとは思わない！ でも普通に美味しいからなんか腹立つ！

（め、目の前に私たちの三倍以上食べている成功例がいる以上間違いない。食べたら食べた分だけ強くなってるのも理解できる。でも！ でも！ なんでフードファイトさせられてるんですか私は!?!）



いや、食べた食べた。

ヘンリ様のお屋敷の厨房借りたけどまあ色々すごいね。抱えてるハラペコさんが多いせいかな設備は広いし人は多いし食材は豊富だし、マジでなんでもあった。せっかくだからってことで護衛兵たちの飯も作ったせいか思ったより疲れたけどおいしそうに食べてもらえると助かるよね。

「二人はある程度消化できるまでゆっくりしときなさいな。」

「ふあ、ふあい……。」

食卓にぶつ倒れている彼女たちをよそに、軽く伸びをしてみる。うんうん、いいお天気ですなあ。

体づくりの方向性や、不足している栄養素は二人とも同じではない。だからちよつと手間だったけど二人の食事はそれぞれ食べたものが違う。ま、二人分のメニューをそのまま大量に作って余りは護衛兵たち上げてるわけだからそんなに面倒ではなかったんだけどね。師匠としてはおかわりはしなかったけどちゃんと食べきってくれて何より。

この世界の人間は確実に私の知るホモサピエンスとは違う種族。そのため食べれば食べた分だけ鍛えたら鍛えた分だけ強くなるようなあの野菜人みたいな特性も持っている。若干無理矢理食べさせているおかげか胃の容量も増えてきたみたいだし、動ける時間も増えてきた、順調だね。師匠うれちい！

あ、ちなみに今日はヘンリエツタ様はご不在。元老院関係で城の方に顔出さないといけないらしくて今日朝お邪魔した時、血涙を流しながら出発していった。なんでも以前私が厨房を借りていたことを耳にしていたらしく、今日この場にいれば私の手料理にありつけると考

えていたのだろう。そんなに食べたかったのなら今度何か作ってあげた方がいいんですかね？

「さて、腹ごなしにちよつと走るのもいいんだけど……。お！ いたいた。」

近くを歩いていたら異形のいーちゃんに声を掛ける。手加減が出来ないという彼の不器用さのせいか、それとも「再生」なしで私を優に超える膂力を持っているせいか、今日の護衛兵たちの訓練に彼は参加していなかった。だが同僚たちが頑張っているのに自分だけ顔を出さないのはダメとか考え、この時間に様子を見に来たのだろう。片手に何かしらの箱を持っているあたり差し入れを持ってきたのだろうか？

「よういーちゃん、それなに？ 差し入れ？」

「あ、ビクトリア殿。そうです、食後に何か甘い物と思ひまして、先ほど買って参りました。」

「マ？ 一個貰っても？」

黒い兜を被ったままの彼と話しながら、差し入れとしてもらった菓子を口の中に頬張る。おう、クリーム系の焼き菓子だね。甘くてしつとりしててうまい。いやほんと私が甘党でよかったよね。この世界あの神サマのおかげで意味不明なほどにそこら辺発展してるし。高いのは高いけど十分市民のお財布で普通にうまい菓子が食えるってのはほんともう、ありがたい。これで甘いのが苦手だったら地獄だもの。

「あ、そうそういーちゃん？ この後暇？」

「この後ですか？ 特に仕事はありませんが……。」

「メシは？」

「頂きました。」

「じゃあさ……。ちよつと腹ごなしに、ちよつと殺し合いしない？」

57 …ええ、こわ……。

「じゃあさ……。ちよつと腹ごなしに、ちよつと殺し合いしない？」

「あ、いつもの模擬戦ですね。了解です。」

「……………なんか、こう。もつといい感じの返しをしてくれてもいいんじゃない？」

かわいいかわいいビクトリア様のお誘いだというのにこの子は……！ まあ別にいいんだけど。ただちよつと同じようなお誘いを過ぎたせいでインパクトが無くなってしまうたのだろう。『磯野く！ 殺し合いしようぜ！』とどこかの仲の良い近所の男児っぽく誘ってみても反応は常識人のものだった。最初の方は結構可愛いらしい反応してくれていたんだけどな……。

実際、私と実力が拮抗していてなおかつ今後も成長していきそうな存在は目の前にいるコイツ、異形しかいない。剣闘士時代同僚だったタクパルは興行から身を引き後進の育成に尽くしている。つまり現状維持はあり得るがこれ以上の成長は見込めないし、本人も自覚していた。かといって私と普通に打ち合えそうな奴を探しても可能性として上がるのは国の中枢にいる者ばかり。気軽に『一緒に訓練しましょ♡』などと言える相手ではない。

となると身近で、私よりも若いのが故に伸びしろが有って、なおかつ成長意欲がある彼しかいないことになる。しかもたぶん何やつても死なない。というかこいつが死ぬところを想像できない。どっかの化け物みたいに細胞がひとかけらでも残っていれば復活してきそうな怖さがある。本人もそれを目指してる的な感じらしい……。

「あはは、もう慣れちゃったので……。ルールは以前と同じような形で大丈夫ですか？」

「大丈夫、魔法ナシでの一本勝負。」

たまにコイツの希望で『本気で殺しに来てほしい』という要望を受けてやることもあるが、今日はギャラリーがたくさんいるのでそれはなし。健全に剣のみでの戦いだ。……スキルの話になるんだけど、私たちの体に宿るこの力は使い続けるほどにその効果を向上させていく。もちろん例外はあるが私の『加速』と異形の『再生』は同じ、速度を上げれば上げるほどに上限が上がっていき、再生すればするほど再生速度やその効果が高まっていく。

私は単に自分の体の限界ギリギリに倍速を掛け続けなければならないのだが、この異形が手っ取り早くスキルを育てるには体を欠損させる必要がある。私と同じようにどこか狂ってしまったこいつは偶に『スキル鍛えるために両腕引きちぎろ』みたいなことをしてしまう。体ぶっ壊れるレベルで倍速掛けている私が言えた義理じゃないが、結構ヤバいのだ。色々。

この前ほんとヤバかったのよ？ ヘンリと仲良く二人でお茶していたら『見てくださいこんな早く再生できるようになりました！これでもっとヘンリエツタ様に恩返しができます！』って笑顔で腕引きちぎりながらやって来たんだよ？ いや確かに文字通りそうだったわけではないけど、そんな感じのことがあったのは事実。しかも彼がスキルを鍛錬していた場所がほんとにヤバかったんだから。

今から血のお風呂入るん？ ってくらい血まみれでべちよべちよ、しかもそこら中に”彼だったモノ”が山になるレベルで散らばっているんですもの。もうなんか色々やばすぎてヘンリ様と一緒に空を見上げちゃいましたよね。血まみれの彼を風呂場に叩き込んで、彼だったモノを庭に放り出して火をつけた後、ヘンリ様と一緒に体育座りしながら火を眺めたあの時間は忘れようにも忘れられないよね……。

(だからこうして自分の鍛錬兼コイツのガス抜きみたいなのをしなきゃいけない、ってわけ。)

拾ってくれたヘンリ様への恩返しに、得体の知れない自分を受け入れてくれた護衛兵の人たちの役に立ちたい、自身が持つ異能で守れるようになりたいと願うのは理解できるし、そのために自分の強みを強化したいのも解る。でもね？　もうちよつと見た目とかそういうのをさ。ね？

そんな十中八九叶ぬ願いを思い描きながら、ゆつくりと歩を進める。彼はあまり動かないが、私は速度を用いた戦い方故結構なスペースを必要とする。そんな私たちの様子を理解したのか、護衛兵の皆が距離を取ってくれた。それでウチのかわいい弟子たちは……、アルはもう慣れたみたいだけど、マリーナの方はまだちよつと困惑気味みたい。まあ急に私が『殺し合い』とか言い出したら普通ビビるか。

「よくし、じゃあ気張るとしましうかねえ。」



「うえつぷ。……あれ、止めなくても大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫、いつもの奴だから。それよりも早く下がらないとミンチになるよ。」

私と同じように口から溢れそうな物たちを何とか押しとどめている姉弟子に手を引かれ、ようやく安全圏までたどり着く。

我々の師が『殺し合い』云々を言い始めることは特段おかしいことではない、むしろ初めての授業で『今から殺し合いをしてもらいます』などと冗談を言う方であるためもう慣れてる。師が本当に「殺意

”を明確にするのは、”敵”の前だけ。先日の襲撃者に襲われた際も彼女は普段のように軽口をたたいていたが、眼は全く笑っていないかった。

今日の師の目は普段の彼女というか、あの黒騎士殿をからかってやろうという眼だった。故に心配ではないのだが……、ミンチになるとは？

「あく、そう言えばあなた師匠のちゃんとした戦闘とか見てなかったっけ？」

そう言われれば、確かに自身は師の”戦闘”というものをしっかりと見たことはない。まあそもそも目で追える速度ではないと言われるればそうなのだが、私たちに剣を教える師の動きは”指導”であり、襲撃者に対しての行動は”蹂躪”だった。”ビクトリア”としての剣舞は戯れで見せてもらったことはあるが、どれも戦闘とは程遠い。

「だったら、ちゃんと見といたほうがいいよ。参考にはならないけど、ああいうのがあることは理解できるから。」

普段の少し生意気な彼女、競い合う相手としての彼女ではなく、姉弟子として私にそう教えてくれるアル。確かに、師の戦い方は正直参考にはならない。師の持つ技術、継続戦闘能力を高める方法、相手の動きを読む方法、カウンターを始めとした剣の技術など、その多くが私たちの血肉と成り得る。だが師が持つ一番大きな力であるその戦い方は私たちにマネできるものではない。

アルから聞いた話ではあるが、師の持つ才の一つに『加速』というスキルがあったそうだ。その効果が如何程なのかは我々には把握できぬものだが、師の速度を重視した戦い方に必須のスキルであることは予測できる。つまりその『加速』を持たぬ我々では到底真似できぬ戦い方なのだろう。故に”参考程度”、それは理解できるのだが……

「そもそも私見えませんんですけど。」

「……………よわよわ？」

「いや見えてる貴方が異常でしょうに。」

我らが師の動きは理解を絶する速度だ、確かにかなり離れてそれを眺めればどこをどう通ったかぐらいは視認できるが、その速度で繰り出される剣の切っ先など視認できるわけがない。聞いたこともない単位だった故それがどれほどのものなのか理解はできなかったが、以前師は『あく、どれぐらいだろう。普通に走って原付以上自動車以下ぐらいだから時速300くらい、そこから10倍ぐらいしたら300だから時速300kmぐらいかね?』ということをおっしゃっていた。

理解は出来ぬが多分滅茶苦茶速いということ表現していたことは理解できる。

「アルは見えているのかもしれませんが私からすれば師が瞬間移動しているようにしか見えませんかからね?」

「だよ、となると何か魔法か装備とかでバフつけたいんだけど……………」

「……………無理ですわよ?」

そもそも魔法によるバフは結構ややこしいのです。確かに私の様な風の魔法使いは速度系統の向上に適性があるのは確かですが、それを私が習熟しているかどうかは話が別。そもそも単純な身体強化、よっぽど魔法に適性がない者でなければ使える魔法ですら私たち習得してないのですよ? なんて私が使えると思ったんですか! 必要なフレーズすら知りませんよ!?

「だよ、……………護衛兵の誰かにお願いしよつか。」

「最初からそうすべきでしょうに。」

その後、護衛兵の方々がちよつとした装備と魔法によるバフを掛けてもらった私たちは共に地面に腰かけながら模擬戦の開始を待っていた。装備の件だが、どうやら過去師にこっぴどくやられた際にかして勝てないかと試行錯誤していた際に手に入れた魔道具らしい。どうやらアルのように”眼”の能力を上げる魔法が組み込まれているようだ。それを私が持ち、アルと私両方に速度上昇系のバフを掛けてもらう。

これで全てが目で追える、理解できるとは思えないがさつきよりは何倍もマシだろう。

『あはは、もう慣れちゃったので……。ルールは以前と同じような形で大丈夫ですか?』

『大丈夫、魔法ナシでの一本勝負。』

「あ、そろそろみたいですね。」

アルの声であらぬ方向へと延びていた思考を叩き直す。視線の先は勿論あの二人。自分たちの成長を促すもの、血肉と成るようなものは手に入らないかもしれないが、それまでの自身が理解できないものがそこにあることを”知る”。この行程は非常に重要なものだ。そう思い意識を集中させようとするが、どうしても周りの大人たちの声は聞こえてくる。

「どうやら賭けをなさっているようですが……。私たちもしますか?」

「賭けにならないでしょうが。両方とも同じ方に賭けるし。」

「ですわね。」

試合が、始まる。

「……剣の先見えますか？」

「……見えませぬね。」

「……なんであの黒騎士は打ち合えているの？」

「……私が知りたい。」

師匠がどういう動きをしているのかは体が見えているので理解は出来る。ただ腕の辺り、剣を振るう腕や剣自体は速すぎて何も解らない。ほぼ一つの音に聞こえる金属同士が打ち合う音と、まるで魔法のようにきらめく火花が二人の間に”勝負”が成立していることを教えてくれる。

手加減した師の速度を何とか目で追えるアルに魔法によるバフを掛けてコレである。多分超人を超えた化け物にしか把握できぬ速度なのだろう。ちなみに後日黒騎士殿本人から聞いたのだが、彼の持つ『再生』は該当部位が破損した場合、体内のエネルギーが十分存在している時に限るが、以前のものよりもほんのちよつとだけ上回る性能で再生されるらしい。

まあつまり『速度に対応できるまで破損した』ということだ。想像して気持ち悪くなって吐いた。

「今回模擬戦ですし、切り飛ばさないっていう話ですから多分師匠お得意のブラフとか速度変化とかは使ってないんでしょうけど……。」

「そもそも付いていける時点であの方も十二分にお化け、ということですね。」

装備とバフのおかげでおそらくアルと同等か、それ以下の動体視力。私の視界にはちょうど師が5つの腕を振ろうとし、そのすべてが火花へと変わる光景が映し出されている。つまりまあ5回以上攻撃したけどそのすべてが防がれた、ってことだ。うくん、速すぎて参考にできない。なにか少しでも自身の血肉にしようと思いを開いていたが、ちよつと無理かも。

師が扱う剣は通常のロングソード、対して黒騎士殿が扱うのはその巨体に見合った特大の大剣。おそらくだがアルと同じくらいの大きさだろうか？ いやもうちよつと大きい？ とにかく太くて長くて黒い……、これ以上続けるのは少し卑猥なのでやめますがとても大きい剣。柱と言った方が正しい武器だ。その分防御できる範囲も大きい。

（合っているかもわからない感覚的なものですが、おそらく黒騎士殿の方が遅い。）

通常なら致命的な傷に繋がる速度差を、剣の相性と技術、それに有り余る膂力で補っている。今回はまだ模擬戦であるが、コレがもし本当の殺し合いであれば……、とんでもないことになっていただろう。いや実際とんでもないことになったのか、ヘンリ様からのお話にはなってしまうが、剣神祭にて敵同士になったお二人がどのような戦いだったのかは聞いている。

……え？　なんで死んだことになっている黒騎士殿の正体を知っているかって？　いやそりゃあもうお屋敷で生活していたら嫌でもわかりますって。ヘンリ様も若干『屋敷の中ならもうあきらめようかしら？　ネズミも悪いのは消していることだし。』って言っています。頭が目の前で転がり落ちて『あ、申し訳ない。』って謝る人ですからねこの黒騎士殿は！　どこのデュラハンですか！

『あはー！ やっぱいい練習になるわ。正直前よりも速度上がってるのが怖くてしかたないけど。』

『ま、まだまだ発展途上です。』

『打撃系の蓄積ダメージも”再生”可能。……わかつてはいたけどコレもつかい試合したら勝てるんかね私。』

「師匠。明らかに剣神祭の時より速度上がってるし、異形さんもまだ”発展途上”？ やっぱ人間じゃない？ どこまで行く気？ お化けの上って……、何??？」
「激しく同意ですわね。」



「うーん！ いい運動になった！」

「あ、あはは……。」

すこしボロボロになっているアルの愛想笑いを聞き流しながら帰り道を歩く、と言つてもあと数分で家に付くのだが。

いやはや、むっちゃいい運動になった！ もう全身がバラバラになるくらい！ 『加速』の使い過ぎだね！ うん！ 異形ちゃんとの戦いはお互いに決定打を打てずに私のスタミナ切れで降参、あつちが譲歩してくれたから結果としては引き分けになるんだけど実質私の負けだね。

そりや確かに模擬戦だから速度の切り替えとかブラフとかは最低限だったし、現在の私が継続して行使できる限界の十倍速を超えることもなかった、もちろん最近手に入れた力である魔法も使っていない

し、剣神祭の時みたいにかくさん武器を持って行ったわけでもない。けれど結果としては全部の攻撃が弾かれた上に、こっちのスタミナ負けでおしまい。『加速』の負荷に体が耐え切れなくなってちよつと泣きそうになりながら『こうさくくん』したわけだ。

……うん、ちよつとというかかなり悔しいね。

こっちが魔法を解禁していれば確実に勝てた。自身の魔力は平均程度だから彼を消し飛ばすほどの魔法は撃てないけど、やりようはある。彼の再生速度のこともあるので確実に勝てるとは言いが、最低限の勝率は確保できる。だが、今回の模擬戦はそういう話ではない。自分の技術と速度が殺し合いの場ではなかったとは言え、防がれた。

(鈍ったかなあ。)

新しい力である魔法や、自身の根幹ともいえる『加速』。この二つの成長にかまけて剣闘士時代の感覚を忘れてしまったのかもしれない。まあ市民になってからは格下の奴らとしか戦っていない。腕とか感覚が鈍ってしまうのも仕方のないことかも、ね。

(んで、雑魚相手に痺がっていた私を、地道に頑張っていた異形が追い抜いたって感じか。)

「? どうかしましたか師匠。」

「ん〜? いや頑張らないとなあ、つて。あと家着いたら即風呂かな、つてのも。」

午前はアルもマリーナも頑張って護衛兵たちの訓練に喰らいついていたが、指導の開始時期がアルと比べ格段に遅いマリーナは午後に入っただけでダウンしてしまった。対してアルは何とか最後まで喰らいつくことが出来たのだが、その分ボロボロになってしまっている。かなりの回数地面を転がされていたし、服もドロドロだ。

ちよつとした擦り傷とかのケガ自体は教会の方から看護係長?

つていう治癒魔法専門のシスターがお屋敷にやって来て治してくれたから大丈夫なのだけど、魔法で精神的な疲労までは取れない。今日は風呂入ってご飯食べてそのまま睡眠かな？

「了解です。あ、そう言えば今日の晩御飯って何ですか？」

「今から買い物に行く気力もないし、夕方だから多分いいの残ってないだろうから……、あり合わせかなあ？ 確か氷室に昨日処理した魚とかあったとおもうからそれ食べる感じかな。」

昨日市場を回っている時になんでも近海にいたでつかい魔物が討伐されたとかで、漁獲量が滅茶苦茶上がっているなんて話を魚屋のおっちゃんから聞いた。んで旬の魚と久しぶりに食べたかつたからイカとタコも買ったんだっけ。おっちゃんの口車に乗せられて大量に買ったもんだからまだ氷室に数が残っていたはず。マリネにでもして食べようかな。

「というわけでとうちやくく、ただいま。」

「おかえりなさいですー。」

「あ、アルー？ 私荷物先に入れとくから郵便受け見といて。」

鎧やら武器やらその他もろもろを家の中に叩き込みながら、留守番していたるルベスとコピアに声を掛けておく。留守番させて悪いねえ、なんかあった？ 配達員がちよつと来ていたぐらい？ ならいいや。飯は……、ああ勝手に倉庫漁って食べたのね。あー、うんいいの。あそこに置いてるの二人用のごはんだけだし。あー、なんか足りなくなっていたら明日の買い出しの時にまた教えてね。

「師匠。」

「ん？ どったの？」

肩の力を抜いて言葉を崩しながらアルの方へと向く、ウチのウマー

ズちゃんたちが『配達員来とつたで。』と教えてくれていたし、荷物を持ってきてくれたのだろう。あ、ちなみにウチの郵便受けは登録者の魔力に反応して開くタイプの奴。

「なんか分厚い封筒来てましたよ？　またファンレター関連ですか？」

「ん〜？　……いや、違うみたいね。」

封筒を開き中身を取り出しながら彼女にそう答える。

その冊子の一番上のページにはこの世界の言葉でデカデカと私の名前が書かれている。ひゃあー、実際直接目にするに滅茶苦茶こっ恥ずかしいねえ！　ぺらぺらとめくって中身を見てみるが、間違いなさそうだ。

「ようやく、って感じかな。」

私の手に届いたのは、前々から言っていた私主演の劇台本。

さ、本腰入れて準備していきませんか！

58：ただいま準備中

「これが台本ですか……。わ、いい紙使ってる。」

台本が届いた次の日、アルを膝に乗せながら一緒に冊子をのぞき込む。アルの頭で隠れて少々見にくいのが、これぐらいなんてことはない。というかアル、あなたたちよつと背が伸びたんじゃない？ うんうんいいこと、今後もちゃんとカルシウム摂りましようね。

本当は台本が届いたその日に全部確認したかったんだけど、そもそも疲れていた上に夕食の用意もしなきゃならなかったので簡単にしか見れていない。なので纏まった時間が取れる今日、一緒に詳細を確認しようってわけだ。

別に信頼していないってわけではないんだけど、色々説明が面倒だったり、どこから漏れるか解らないのでアルには私の前世、地球のことや転生してここにいてることなどは伏せている。話の流れや『どこで知ったんですか？』という疑問を投げかけられることもあるが、その時は『ここから遠い場所、帝国の外にある辺境の村』ってことにして誤魔化してるって感じだ。

(そもこの世界の唯一神にこっち連れてこられたとか明らかに厄ネタだからねえ。)

そも私の神へのスタンスは『存在を認知し神がいることを信じてはいるが、信仰はしていない。』というもので、対してアルはこの世界の生まれとして正しい『神の存在を確信し、信仰もしている。』という人たち。私は前世の日本の感覚のままここにいて、アルはこの世界で一般的な神の信仰者、ってことだ。

神本人が何故か家に襲来したり、聖女が謝りに来たりとアルもアルで何かしら感じているところもあるだろうが、私が宗教関係の話題

を全く話さないこともあってアルからこれらのことについて説明を求められたことはない。まあ自分の信仰する神が目の前にいるっていう異常事態で色々記憶が吹き飛んだのかもしれないけど……、どこにお耳が潜んでるか解らんからね。滅多なことは言えないのよ。

それに今の私の体の出どころが解らない以上、最悪（最高？）神が気まぐれで作った体って可能性も考えなきゃならない。神サマの話し方からして手作りした、って可能性はないだろうが少なくとも一回、剣神祭の時にこの体に神の手が施されている。もしこれが大々的に発表されてしまった場合……、とんでもなく面倒なことになるのは確実だ。

（人前で演じるのってかなり精神にダメージ行くのに、そこからグレードアップして”信仰される”なんて絶対に私のメンタルが死ぬ。）

「師匠？ 読まないんですか？」

「ああ、ごめん。じゃあ早速目を通していこうか。」

手触りのいい紙、神の意向で砂糖の大量生産が可能になったこの世界では製紙技術もかなり発展している。どこか和紙の様な感触を指で感じながら、ページをめくっていく。私の物語の、始まり始まりってね？

物語は、帝国の辺境にある小さな町で始まる。架空の名を与えられたその町に住む一人の少女、それが私だ。

「……あれ？ 師匠って帝国の出身じゃなかったんじゃ？」

「うん、そうだね。」

「……………ここに帝国って書いてますけど。」

「自分のルーツを簡単にさらしちゃうダメでしょう？ それに物語だから面白さを重視しなくちゃならない。本筋は同じだけど大半作り話

だよ？ 三章構成だけど、実際にあったのは二章の後半と三章だけだし。あとは大体”おはなし”。」

師匠の過去を知れると思つてちよつとワクワクしてたんですけど……、と少し落ち込む彼女。いやごめんね？ さすがに前世のことを語るわけにもいかないし、かといつてこの体での記憶は奴隷商人にドナドナされていた時から始まっている。だから作り話にするしかないんだよ。ほら故郷の話聞きたいのなら後で話してあげるし、教えられないこともあるからちよつと変えるだろうけどそれで我慢して、ね？

それに実際にお客を呼び込んで商売として演劇をやるわけだから楽しめるように色々工夫しないとイケない。つまり初めて私のことを知る観客には”ビクトリア”というキャラに共感しやすいように、すでに私のことを知る観客にはそのルーツを知って楽しめるように、最初の章では自身の幼少期から奴隷になるまでをメインに語ろうと思つている、つてわけだ。

「ならいいですけど……、忘れちゃだめですよ？」
「もちろん。じゃあ”おはなし”に戻ろうか。」

辺境の町で過ごす少女、ビクトリアは貴族の教育係の家に生まれた。何の爵位も持たない平民ではあるが、代々積み重ねてきた知と武によって歴代の領主から重宝される家系だった。領主の跡取りたちには貴族としての振る舞いや尊き者として必要な知識や武力を伝え、彼らが成人すれば良き話し相手となる、彼らが子をもうければ次の世代へと託せる様に彼らが子供だった時と同じように教育を施す。それが彼女の家だった。

女として生まれた彼女には家を継ぐ権利はなかったが、教師の家の者として誰かに教えを授けられるレベルになるため、厳しい教育を課される。彼女はそれを苦しみながらもこなし、着実に成長していく。厳しいがその胸に大きな愛を持つ両親に育てられた彼女は、領主の娘

のよき理解者として過ごすようになる。

「ほへー、これ全部嘘なんだ。……そう言えば師匠、この”少女”って誰が演じるんです?」

「コレ? 私でもよかつたんだけど……、ってそんな引くような顔しない。誰かに任せる感じになるだろうね? よかつたらアルやってみる?」

「大勢の人、しかも貴族の方々にも見られるんですよね? もちろんヤです。」

「だよね。じゃあ続き。」

両親にも、友にも恵まれた彼女。永遠にこの幸せな時間が続くと思っていた。このままゆつくりと大人になり、誰かと愛を育み、結婚し、子を産み、家が続けていく。そんな素晴らしい日々が……。

「え、ちよつと待つてください。」

「ん? どしたアル。こつからいいとこなの。」

「いやそれは解るんですけど……、師匠って結婚願望あったんですか?」

「ないよ?」

私の返答と、『この子何言ってるんだろ?』という顔を見て何故か落ち着くアル。まあ確かに私が恋愛して結婚でもしたら貴方との時間減っちゃうもんね。うりうり、可愛い奴め! ……え、違う? 師匠みたいな人でもそういう欲あったのか!? と思つてびっくりして聞いただけ? それはそれでなんか腹立つな。

実際、自分の体が女であることを剣闘士始めたところに”理解した”し、”受け入れている”んだけど、そこから恋愛対象が男性! ってコトには繋がらなかった。男か女かどっちが好きかって言われれば即女つて言うだろうし……。まあ性別”私”って感じかな? とにかくそういう欲は今の私には全くない。前世とこつちで過ごした年

を合わせればかなりいい歳だし、もう子供みたいなのもいるしね。

さて、話を戻そう。

そんな素晴らしい日々が続くと思っていたのだが……、まあ案の定続かない。彼女たちの町の付近で人知れず迷宮が発生、そこで繁殖を続け増えに増えた魔物たちが一斉に都市へと進行。いわゆるスタンピードが起きたわけだ。魔物たちは瞬く間に街を占領し、破壊。貴族の役目として戦った領主や彼女の友人は他界、それに続いた両親も行方知らず。何とか彼女は生き残り、同じように逃げ延びた人たちと共に近くの町を目指して足を進めることになる。

この部分脚本家の人と文でやり取りしながら詰めたんだけど、実際十数年前に同じような事件が北の辺境の方で起きたみたいで、覚えている人は覚えている様な事件らしい。その事件を忘れないためにも、自分たちが同じ目に遭わないように警戒を促すためにもこういうのは定期的に入れるんだって。

んでまあ街を目指すんだけど……、無事たどり着くわけがない。女子供が多かったという理由で盗賊に見つかった私たち。普段ならなんでもなく撃退できる相手なのだが、魔物から逃げるのに体力を使い過ぎたせいかすぐに捕まる。そして高値で売れそうな私はそのまま人狩りへと売られ、そのまま奴隷落ち。帝都へと向かうことになる。

「これにて第一章〈幼少期編〉の終わり、後は奴隷編の第二章に、劍神祭編の第三章って感じかな？」

ここから先はみんなも知っている通り。裏の闘技場に放り込まれて、オーナーが変わって、色々あってアルを弟子にして、劍神祭出てく、って感じ。演劇の中には出せない内容だったり、出しちゃったらへんなどころから目を付けられる内容もあるから適宜改変してるけど、大筋は同じだ。あんまり変え過ぎたら既存のファンに怒られちゃうしね。

「にしても結構なボリュームになってますね、これ何時間ぐらいやるんですか？」

「細かいところは演出家の人とかとも詰めなきやだけど……、想定では1時間×3つて感じかな？ 間にクールタイムとか挟むだろうから全体で4〜5時間ぐらいを想定してる。」

「あく、じゃあ準備とか含めたら丸一日使う感じなんですね。」

「そゆこと。それに一日やってはいオワリ、ってわけでもないしね。」

実はなんだけど、これを公開する劇場。ヘンリ様が出資して現在建築中なのだ。剣神祭の折にあの人『じゃあもう劇場建てちゃうわ〜！』つて言つてたけどマジでやりやがったのである。冗談だと思つたのに、私の劇のためだけに劇場を建てちゃったのだ。一応帝都の大きなスペースを使うつてことで国も色々出しているみたいだが、メインはヘンリエッタ様が出しているとのこと。やっぱ金持ちはスケールが違うよねえ。

つまり劇場の完成と共に私主演の劇が始まるつてこと。オープニングセレモニーつてやつ、さらに建設費の回収もしないといけないから短くても一月ぐらいはやり続けられないといけない。つまりその間はずっと私のスケジュールは埋まるつてわけだ。しかも劇の公開前も大変で、こつから演出の準備とか、小道具大道具の開発とか、私以外の役者の選定アンド練習、追加して音楽はどうするのかなどなど、これから当分フリーな日はなさそうなんだよね〜。

「……つまり訓練はお休み？」

「なわけないでしょう、もう用意してるぞ♡」

甘えたことを言いそうになったアルの目の前に先ほどの台本よりもかなり分厚い冊子を置く。アルとマリーナの二人分にはなるが、彼女たちのトレーニングメニューを思いつく限り書き記し、どの段階に到達すれば次に進めるかなどを事細かに書き記した冊子だ。結構作るの苦労したんだよ、これ？

「ちゃんと傍で見るともりだけど、忙しくなってきたら無理になるかもしれない。というわけで作っちゃった♡ ウィウィ先生のメニューもあるだろうからあっちとよくよく相談しながら頑張っ
てね」



メニューの内容を見て青い顔になっちゃったアルを眺めながらニコニコしていた日より数日後。ウィウィ先生にアルとマリーナを任せた私は一人馬車に揺られていた。窓から外を見れば今日も今日とて活気で溢れている帝都の様子が窺える。一步外に出れば魔物やら盗賊やら面倒なのがいっぱいいるんだけど、この都市はそんな些細なこと全く気にしなくてもいい。

（貴族とさえ関わりがなければ住みやすい街なんだけどね。……まあ昔よりはマシなんだけど。）

剣闘士の人権なんかクソ喰らえな時期と違い、今の私は普通の市民。しかもヘンリエッタ様の後ろ盾があるおかげで滅多なことがない限り”消される”ってことは起きえない。つまりお貴族様のフアンと交流したりする際にそこまで気を遣わなくてもよくなったわけだ。まあ身分の差は依然としてなくなっていないから緊張するし、相手を怒らせたなら最悪その場で犯罪者扱いされる可能性があるから油断できないんだけど。

(さすがにもうよつぽどなことがない限りその場で殺される、ってことはないだろう。もしそうなったとしても逆にやり返してやるし。)

さて、なぜ私が馬車に揺られているのかというと。ヘンリ様が建築中の劇場の方にお呼ばれたのが理由だ。普段ならウチのお馬さん、ルペスカコピアの背に乗せてもらってファンサービスでも振りまきながら向かうんだけど、馬車を用意したって言われるともうお言葉に甘えるしかない。それにたった一人で馬車に揺られるってのも思考の整理とか出来ていいしね。

お呼ばれの理由としては自分がどんな場所で演じるのか見て欲しいってのもあるだろうけど、本題は脚本家と演出家との顔合わせ兼計画の作成ってのが挙げられる。台本、演劇の骨格となる部分は一応完成したのだけれど、人にお出しするためにはここから肉付け、演出を整えていかなければいけない。

そのためには原作者である私がどういう考えを持っているのか、それを骨格としてまとめた脚本家がどのような意図をもって作り上げたのか、肉付けを担当する演出家が何を目指せばいいのか、そして出資者であるヘンリ様がどのような劇を求めているのかなどのすり合わせをしていく、ってわけ。

「っと、そろそろか。」

目的地に着き止まった馬車の手すりに手を伸ばし、ゆっくりとドアを開ける。

「思ってたより大きい、ね。」

目の前にあるのはこの世界ではあまり見ない巨大な建築物、というよりも超巨大な階段というべきだろうか。半円状に建設されている劇場は半円の舞台を囲う様に観客席が作られている。確か1500名程度観劇が可能な劇場にするんだっただけ？　すごい規模だよねえ。

個人的に劇場と言えば屋内にある宝塚みたいなのを思い浮かべちゃうんだけど、この世界での劇場と言えば野外ステージみたいなものらしい。

「あー！ やほー！ ビクトリア様〜！ こつちよ〜！」

はたらく職人さんたちを眺めながら未完成の劇場の中を歩いていると、遠くから声を掛けられる。振り返って見てみれば普段より少し軽装のヘンリエツタ様がこちらに向かって元氣よく手を振っているらしい。う〜ん、お婆ちゃんなのにすごく元氣。というか何その姿勢？ まっすぐすぎて逆に恐怖を覚えるわ。ほんと歳を感じさせない人だなあ……。

「お待ちせしたみたいだね、今日はお招きありがとう。」

「いーえ！ こちらこそ！ それでどう、私”たち”の劇場は！ いい感じになりそうじゃない？」

他の人の目もあるので”ビクトリア”として対応する。最近色々あり過ぎて彼女の前で気を抜くことが多々あったからね、こつちの方をきっかけてファンになってくれたのだからファンサはしつかりしない。

「そうだね。最高の劇場になるんじゃないかな？ 演じる側としてはそれに恥じない働きをしなきゃいけない訳だから緊張しちゃうけどね。」

「あらー！ 貴方でも緊張するのね！」 “ビクトリア”様はそんなものとは無縁だと思ってたわ！ ……さて、脚本と演出の子はまだ来ていないし、付いてきてくださる？」

「喜んで。」

あ〜、からかわれてるよ、まあ確かに”ビクトリア”は緊張なんか

しないように見えるもんね。でもちよつとパーソナルな情報をちよろつと出すのつて……、良くない？ いいでしょ？ ヘンリの顔見たらわかるよ。まあこの人は”ビクトリア”の方も、出てしまった素の”ジナ”の方も。両方楽しんでいらつしやるんでしょうけど。

そんなことを考えながら彼女の手を取り、ともに現場の見学へと赴く。劇場を造る際に色々希望を聞かれ、色々アイデアを出したのだがその多くが叶えられているようだ。流石に現代の照明とかの再現は無理だったみたいだけど。

この劇場の特徴的な点として、三つのことが挙げられる。ま、特徴的って言ってもこの世界での”特徴的”だけどね？

一つ目は舞台の後ろの方に存在する何段にも渡る階段。いわゆる宝塚の大階段つて奴だ。舞台装置の一つだね。舞台全体のスペースを最初から多めに取ることで他を圧迫せずに作られたソレは単体でかなりのプレッシャーを発している。舞台に”高さ”という概念を持ち込んだそれはこの世界では初めての試みだったらしく、ヘンリはかなり感心していた。

「平坦じゃつまらないし、地元じゃアレに登るのが憧れつて人もかなりいたからさ。つい、ね？」

「確かにこういった高低差を用いるのは見たことがないわ。これだけでもかなり注目を集められるんじゃない？」

次は、その大階段の後ろにある大きな壁。サイズの城壁と同じようなものが現在建築中だ。イメージとしては千葉にあるけど東京つて名前の付いてるあの有名な小動物のテーマパークだ。あそこのステージ結構お城を背景にしているでしょ？ 上から紙吹雪散らしたり、幕かけたりと色々できるかな、つてお願いしてみた。あと舞台裏としても使えるかな？ つて思ってる。

「すごくいいんだけど……、これ確実に帝都の城壁と同じだよね？」
「あく、お願いしてる職人たちが城壁の補修をしているところと同じだからかしら？ マジでそのまま作っちゃってるわね。……コレ後でちゃんと申請だしておかないと軍事施設と勘違いされちゃいそう。」

「お願いですから忘れないでくださいね？ほんとに。」

最後に、演奏家の人たちが詰める場所。ほらオペラとかでさ、舞台の一段下がったところにオーケストラの人たちがいてそこで演奏してるでしょ？ あんな感じ。あつたらいいなあ、って思ってお願ひしたんだけど……。うん、残念なことはこの異世界では楽器の発展が全然進んでない。感覚的に古代帝政ローマが？栄してた一桁世紀の最初の方だろうなあ、って考えてたんだけどマジで時代相応なレベル。笛とかラッパとかそういう原始的な物しかねえ！ いや一応パイプオルガンとかは教会で見かけたんだけどさ……。

（弦楽器系がマジでないんだよねえ、たしかアレの成立って中世だったけど……、聖け？）

「ビクトリア様、ここに音楽関係を置きたいって話だったけど……。聖歌隊でも呼ぶの？ 讚美歌でも歌うのかしら。」

「いやかなり違うかな……。まあそこら辺はおいおい、ね？ 観客として待ってくればうれしいかな。」

「そう？ なら楽しみにしておきましょうか。」

実際、音楽というかBGMは結構大切で、これの有無でかなり感じ方が変わる。どんなゲームでもBGMがなかったら味気ないでしょ？ だからもし自分が劇に出るならそこら辺にも力を入れて見てくれる人に楽しんでもらいたいなあ、と思ってたんだけど……。そもそも楽器がないっていうね？

（一応手は打ってるんだけど……、奏者の育成とかも考えたら結構ギリギリだろうなあ。そも初めて見る楽器を演奏しろとか不可能に近いだろうし。最悪ナシ、かな。）

「……ん？ あれは……、あああの子たちね。ビクトリア様？ 二人が到着したみたいだし、行きましようか。」

「了解、ヘンリ。」

ま、そこら辺も含めてプロの脚本と演出さんに相談してみますかね。

59：尊み爆発警報

「というわけで脚本担当のホカーラくんと、演出担当のエンリットちゃんです！　ぱちぱち〜！」

「わ〜、ぱちぱち………。でいいの？」

ヘンリ様に連れられて建設中の劇場の中を少し移動、私の目の前には一組の男女が立っていた。

男性の方は初老に差し掛かろうという感じの男性、身なりはまあキレイな方だけど体格が明らかに細い。貴族 i s パワーなこの世界では大体肩幅とか恰幅がいいのが貴族なので多分平民なのだろう、もしくはそういう体質の貴族。纏う雰囲気と若干面倒そうな表情を見るに無理やり呼び出されたのだろう。

んでもう片方の女性の方は男性に比べれば若め、大体20代前半ぐらい？　短めにまとめたオレンジの髪が特徴的な方だ。ヘンリの年齢詐欺のことも考えると合っているかどうかは解らないがまあとにかく見た目は若め。脚本の方は面倒そうな雰囲気を出していたが、こちらの彼女は顔に笑顔を張り付けたままなんか小刻みに振動している。なんだろう、バイブレーション機能でも付属してるタイプの人間？

まあこの世界の人間、人間じゃないから（異形を思い出しながら）……。

「どうも、何度か文で話しましたが対面では初めて、でしたか？　ホカーラです。こういう脚本の仕事ではどう変更してもらっても構わないというスタンスだったので来るつもりはなかったんですがね……。その貴婦人に無理やり呼び出されました。ま、よろしくお願ひします、と。」

「ああ、なるほど……。こちらこそよろしく。」

先に声を上げてくれた彼の方へと向き、軽く挨拶を交わす。まあ確かに家の中から出たくないタイプの人間が急に呼び出されるのは嫌だよね……。しかもヘンリって完全に逆らったら終わるタイプの人だし。本人は別に『あらそう？ なら次の機会ね〜！』で笑って済ませそうだが彼女の立場がそれを許さない、って奴だ。……。もしかしてお前苦勞人か？

んで、お次は女性の方なだけど……。なんかさつきよりも震えてない？ 体の輪郭がブレてるんだけど？ 色々大丈夫？ 中身バターにならない？

「あ、あの……。だいじよ」

「ほなや！ お、おとおおお推し様が目の前に！ しかも私めに話しかけてくださってる!! おああもう無理！ 爆破ちゆすつ！」

ぱちゅん。

その瞬間、彼女だったモノがはじけ飛ぶ。

すわ新手の暗殺者かと思ひ反射的に『加速』を使用し彼女から距離を取るが、攻撃らしいものは飛んでこない。代わりに私があつた場所にあるのは粘性の高いゲル状の存在。目を疑うというか、脳が理解を拒否し始めるが何とか思考を正常に保ちながら状況を把握しようとする。

目線は自然と彼女の方へ。先ほどまでエンリットと紹介された彼女ががいたはずの場所には何も残っておらず、代わりにその地点から円を描くようにオレンジ色にスライムの様なもの的大量に宙を舞っている。どこからどう見てもこのオレンジ色のゲルが彼女なのだろう。いやもう彼女だったもの、と言った方が正しいのかもしれないが。

十分な距離を取り、自分に危害が及ばないことを理解した私はゆつくりと『加速』解除。その瞬間世界は正常な速度を取り戻し、空中を舞っていたオレンジスライムたちはぺちよぺちよと気味の悪い音を

発しながら地面へと落ちていく。

……………いや、は？ なに？ 新種の魔物？

「あちやく、やっぱり耐えられなかったわね。」

「……………あ、あの？ ヘンリ？」

「あ！ ごめんなさいビクトリア様、言っただけでなかったわね。この子、スキル持ちよ。」

……………内側から爆発四散するのが？

「じゃなくてこのスライムみたいなのが、ほら5・6年前に当主が産しかけたっていう……………、ってビクトリア様知らないわよね。ついついいつものノリで……………。悪いけどちよつとこの子の破片集めながらでいいから聞いてくれるかしら？ ほらホカーラも。」

そう言いながらどこからか箒と塵取りらしきものを取り出して、エンリットの髪色と同じオレンジ色のスライムを集め始める彼女。『だから来たくなかったんだ』みたいなことを言いながら手伝う彼。…………え？ 何？ これ私がおかしいの？ びっくり人間ドツキリ計画とか裏でやってる？ 隠れてたアルとかマリーナが『ドツキリ大成功』とかの看板もって出てくる？ なら早く出て来て!! お師匠様ジェネレーションギャップならぬワールドギャップで色々もうダメそう！

「このこの家ね、結構有名なところなのよ。スキルって子に受け継が

れることはあるんだけどそこまで確率は高くないの、でもこの子の家は何故かみんな同じスキル持ちでね。ほらこんな風にドロドロになる。」

「ミャー」

「喋るし、この状態のときは記憶飛んでるみたいだし面白いわよね。ビクトリア様もする?」

「ア、イエ。ケツコウデス。」

集めるってことは元に戻るといふかコレ人判定でいいのよね!?

人でいいのよね! なんか人体では絶対に表現できない粘性と感触と若干の発光してるけどこれ人間でいいのよね!? なんかよくわからん声出してるけど!? というかなんでヘンリ様は人の体の切れはしをスーパールボールみたいにして遊んでるのさ!? え、この前腕引きちぎって『遊んでもいいですよ』って言ってくれた?

なんかもう色々おかしくないソレ! ボールは友達っていうけど友達の腕をボールって言うのは色々ダメでしょ! むしろボールよりもヘンリの方が怖いよ!

「……………やっぱそうよね。なんかちよつと疲れてるのかも。ほらハール(異形)ちゃんとかほぼ毎日血まみれになってるし…………、やっぱり体を変化させるタイプの子は色々おかしくなっちゃうのかしら……………」

「……………ダイジョブ?」

「大丈夫だといいいけれど。この子もこの子で『一定量さえ残れば大丈夫』ってマインドだから、ね?」

ああ、どうせ治るから別にどれだけケガしても大丈夫だ。みたいなマインド持ちね…………。おーけー把握した。というか”推し”って言うってたけど…………、彼女もそうなの? 家って言うってたから貴族関係の方なんだとは思っただけど。

「あ、そうそう。あなたのファンってことで知り合った子。実家は伯爵家の下の子なんだけど、家が結構な財政難で支援を受けるために商家の方に嫁いだ子なのよ。まあ運が良いのか悪いのかすぐに旦那さん死んじゃって商會を掌握して国に寄金して男爵位貰って今は悠悠々趣味の活動をしてる、って感じね。この前貴方の普段の話をしたら『もう無理イ、尊みツ！』って言いながら爆散してたから覚悟をしたのだけれど……、やっぱり無理だったわね。」

あ。そういう……。

そんな会話をしながらオレンジ色のソレを一か所に集める。すると少しだけその発光が強くなり、徐々に人の体を形成していく。私も大概だけどさ、異形もこの子もこんなことできるのにカテゴリーが”人間”って色々おかしくないですか創造神さんよ。……いやあの神さまだったなら普通に笑いながらやりそうだな。

「そうそう、ビクトリア様？ 貴方が破片を集めるのを手伝ったことを知ったら今度はもつと広範囲に爆発しちゃうだろうから教えないであげてね？ あと過度なファンサも室内以外では禁止。広く飛び散るとかなり面倒だから。」

「あ、はい。」



「な、なんかジャリジャリします……。」

体が元の形に戻るのに5秒とかからなかった彼女と視線を合わせぬように観察する。どうやらゲル状にした体内に色んなものを収納できるらしく、爆発と共に消し飛んだ服は体内の中に入れてあった予備のモノへとかわっている。まあその代わりに地面に散らばっていた砂が体の中に入り込んでしまったようだが……。

「エンリット？ 友人のよしみでお願いした訳だけど……、公私は分けましようね？ ベテランの方をお願いするという手もあったのですから。」

「ひゃ、ひゃい！ 肝に銘じます！」

少しだけ語尾を強めながらヘンリ様がそう伝える。まあ確かに毎秒爆裂されたら仕事が進まないし、そうなるのは仕方がない。ただヘンリがわざわざこの場に呼んだってことは“友人のよしみ”だけが選出理由なのではないのだろう。この人は能力もしっかり見ている。軽く釘をさしておく、つてだけだろう。

「さて、じゃあもう一度紹介しておきましょうか。今回あなたの劇の演出を任せることになったエンリットよ。」

「ご紹介に預かりました、エンリットと申します。陛下からは男爵の位を頂いておりますが……、ぜひ気にせず名前でお呼びください。最高のビクトリア様へのお手伝いを全力でやらせていただきます。」

「うん、よろしく。エンリット。」

普段は握手、気分が乗ったり相手が純粹なファンであればハグぐらいまではするのだがアレを見た以上できそうにない。さっきのは運よく誰にもゲルが掛かるといことはなかったが、多分ハグでもしてしまえばみんな彼女まみれになってしまう。うん、それはちょっと嫌だからね。

「ひゃま！ おおお押し様が私の名前を「エンリット？」あ、はい。ご

めんなさい。」

……うん、これ多分何してもこの子爆発する奴だな。とりあえず素は絶対に見せないようにして、普段のビクトリアより若干そっけなく……。あゝ、いやどうだろ。それでも『だめ、しゅきー！ 爆発するー！』になりそう。なに？ 私一人だけなんか違うゲームやらさされてる？ ああもうなんか面倒になった。ヘンリ様にブレーキ役頼んで、もうお仕事の話しましょ。脚本のホカーラさんもさっさと終わらせたいだろうし。

「では早速始めて行こうか、立ち話もなんだし……。そこの職人の方。あそこの観客席の方使わせてもらっても？ 大丈夫？ ああ、ありがとう。」

近場を通った職人さんに声を掛け、観客席の最前列を使わせてもらう。ちようど舞台が見えるし全体を眺めながらお話が出来そうだ。

「あ、私のスタンスだけどお金だけ出す無口な出資者だから気にしないでね？」

「ありがとう、ヘンリ。ではまず感覚の共有から始めようか。」

っと、その前にホカーラおじさんいい脚本書いてくれてありがとう？ 私の適当な奴からいい台本というかも小説レベルなの書き上げてくれてほんと助かるよ。これを元に組み立てていく感じがいいねエンリット……。爆発しない？ しない。ならよし。じゃあそういう感じで。

ああそうだ、先に聞いておきたかったんだけどホカーラおじさんのに『このシーンはこうしてほしい』とかそういうのあるの？ あつたらそれに合わせる感じがいいかなって考えてただけ。いやほらね？ 一応私の話だけど、漫画とかで言ったらさ、私原作でホカーラがコミカライズ、そして私が主演でコミカライズ化された作品を演劇

にする、って感じだからね今。漫画原作的にはどうかなって。

「特には。一人の作家として執筆中に思い入れのあるキャラなどは出来たし、それぞれの活躍を望んでいるが演出の邪魔になることは望んでいないので。それにその彼女は色々おかしいが腕だけは確かなのでな。以前同じように組んだことがあるのだが、確かに傑作に仕上がっていた。」

「ほ、ホカーラ殿……！」

「ただキャラの兼ね合いなどで勝手に感極まって爆発する悪癖がある。先日脚本として見学に行った際目の前で爆発され残骸を浴びてね……。」

あくうん。箒と塵取り常備しとくよ。とりあえずそのあたりは了解、演者さんとの兼ね合いで脚本の修正とか起きそうだったらまた相談させて貰うよ。とりあえず現状はおじさんの書いてくれたので進めるようにしようか。んじゃエンリットちゃんや。いまからあなたに話しかけるわけだけどちゃんと爆発せずにお話聞けるかな？

「あ、あ、あ、推し様が！　こんなにちか「エンリット？」あう、すすすみましえん。……よし、よし。エンリット私は出来る子。爆発しない、爆発しない。尊みを受けるのではなく受け流す……。」

「大丈夫かい？」

「ははははい！　がんばりましゅビクトリアしやまー！」

「OK、じゃあ詰めていこうか。」

適宜ヘンリエッタ様からのフォロー、後半から若干面倒臭さと怒気が含まれたそれを受けながら彼女との話し合いが続く。

まずは私の立ち位置として、基本演出家の意見に口答えするつもりはなく、一役者として扱ってほしいこと。ただ自分の中でどうしてもここだけは譲れない、ってのがいくつかあるからそこは色々お願いしたい。全体の構成を見て不可能な場合とかは適宜話し合う場を設け

て欲しいって感じね。

あ、ホカーラおじさんには途中で帰ってもらったよ？ 彼あんま関係なかったし、今日の目的ほぼ顔合わせみたいなのもんだったから……。それに彼本業は小説家みたいで、今締め切りに追われてるんだって。大変そ。

「な、なるほど。階段による高低差の演出と、後ろの城壁から縦の演出。あとは音楽をうまく使いたいのでその兼ね合いを……。ですね。了解しました。先ほど出して頂いた案を参考にいくつか考えてきます。」

演出の話が進んでくるとようやく真剣な顔になり、色々と思案をしてくれる彼女。前世の記憶から宝塚とかネズミさんランドとかの演出を实演した時はガチで暴発しそうになっていたが、彼女にとって良い刺激になれば幸いだ。それでどう？ なんとか纏まりそうな感じ？

「そうですね……。高低差の演出は演者さんの登場時とかで遠くからやって来ている要素を出したり、空中に浮かんでる様な描写をロープなしで出来るように成ったりとか……。あともう少しお時間いただければ形にはなると思います。それと城壁の方も頂いた脚本に町が襲われるシーンもありましたのでうまく使えそうです。あ、それと闘技場の壁、としてもいけそうですね。」

おく、確かに。やっぱ本職だからかぼんぼん出ますね。じゃあ私もなんか思いついたり思い出ししたりしたら手紙で送るね、さすがに何回も対面であうのはシンドいだろうし、役者さん集まって実際に練習始めるまではそんな感じで。というわけで住所……。ああうん。爆発しないよね、ほんと。ほらヘンリ様ちよつともう『魔法で首から下水漬けにした方がいいかしら？』みたいな顔してるから。うん。

「りよ、了解です。……あ、そうだ。肝心の演者さんのことなのですが……。」

そう言いながら言葉を紡ぐ彼女。私の演劇、まあ私が主役として自分の役をそのままやらせてもらうことは決まっているのだが、それ以外が全く決まっていない。彼女が言うには私に何かこだわりやこの役はこの人にやってもらいたいなどの要望がなければ人選を引き受けてくれるそうなのだ……。

「ビクトリア様としては戦闘シーンを本当の試合と同じようなスケールで、闘技場より近くでお客様さんたちに見せたいんですね。」

「ああ、そうだね。」

「うわ良い声。……でしたらちよつとビクトリア様に付いて行けるような演者さんはいないと思います。動ける方はいらっしゃるにはいらっしゃるんですけど……。」

劇として魅せる、所謂アクロバットな動きや剣舞をすることが出来る演者さんは多くいるし、ソレで食べる人もいる。けれどもいざ彼らが戦いの本職、剣闘士（元だけど）の私と対峙した場合。絶対に格下、それも全く歯が立たず雑兵のように掃き捨てられるレベルの差が出来てしまう。私に合わせたら本来死闘となったシーンが無双で終わっちゃうし、演者さんに合わせたらチャンバラで終わってしまう。

私のファンたちが私を知った経緯のその多くが剣闘士としての興行を見たことから始まっている。そのため劇も私が主演として出るのならば結構過激な戦闘シーンを望んでいる奴が多いだろう。そもそもこの世界の人間そういうの大好きだし。

「あ、それと音楽の方ですがちよつと私の方の伝手で出来そうな方がいらつしやらなくて……。お力に成れなさそうです。」

「了解、戦闘の方も音楽の方も合わせて古巣にでも相談してみるよ。」
「解りました。じゃあ他の演者さん、戦闘などに関わらないキャラた

ちの方はこちらの方で選ばせていただきます。候補が複数の場合はオーデイションとかをすることもあると思うので、その時はヘンリエッタ様を通じてお呼びいたしますね。」

「ああ、ありがとうございます。」

「ひゃうー！ おおおお推し様に感謝!! ……ももももう無理！ エンリットちゃん頑張った！ 頑張ったけどもう限界！ これ以上の受け流しなんて無理！ 尊い！ 尊すぎ！ もう無理、ほんと無理！ 耐えられな『氷』」

彼女が眩い発光と共に爆発しようとしたその瞬間、ヘンリエッタ様の口がたった一つの単語を紡ぐ。私の耳に届くのは、その単語が持つ意味よりもはるかに冷たい言葉。その瞬間今にも爆発しオレンジ色のゲルをあたりにまき散らそうとした彼女が長方形の氷の中へと押し込まれる。水色の淡い氷は一瞬にして内部をオレンジへと染め上げ、氷の内部で彼女が破裂したことを教えてくれる。

「だめよお、エンリット？ ビクトリア様も、注意してくださいな。」

「あ、はい。キヲツケマス」

さ、さて！ 一応話し合い終わりましたし、お天道様を見ればちやうどいいお時間。ウイウイ先生の魔法授業も終わっただろうしお迎えに行かなくちゃ！ うん！ そうだね！ アルちゃんを待たせたらだめだもんね！ お迎えが来なかったら心配しちゃうもんね！ そうと決まれば今すぐ……。

「あら、ちやうどいいわねビクトリア様？ 私さつきからずっと彼女の御守で疲れちゃったの。覚悟はしてたけど10秒に1回を超えられると流石にもう色々面倒になってしまったわ。この氷3分程度で融けるし、貴方の足で私も送って行ってくださらない？」

「よ、ヨロコソデー！」

60：厄介事は出来る奴に頼むに限る

「そういや顔隠しての移動って久しぶりですね。まあオーナーのところに行くのも久しぶりですけど。」

「あく、そういやアルはあんまこっち連れて来てなかったか。そうなのとやっぱ懐かしい感じかな？」

「……まあ確かに懐かしくはありますけど。」

そこまでのいい思い出ではないですね、という彼女の言葉を聞きながら馬を走らせる。今日はこの前話していた人材の確保、私とやり合える程度の実力がある人と見ず知らずの楽器を練習して仕上げて来てくれる人を探しにオーナーのいる商会を目指している。あ、今は元オーナーだね。一応私の本業のサポートとかグッズ展開の仕事もしてくれてるから正確に言うとならばプロデューサー兼事務所ってところだろうか。

彼のいる商業区画なんだけど、治安はいいけど私に対して恨みを持つ人が多い区画でもある。なにせ剣闘士の興行をしているオーナーたちがわんさかいる地区だ。私に大切な金蔓をお釈迦にされたわけだから無茶嫌われてる。たまにガチで暗殺しかけて来たり往来で喧嘩売ってくるからこうやってフードでお顔隠しながら進まなきゃいけない。

ルペスとコピアには喋らないようにお願いしなきゃだし、地中海のカラツとした気候と言えど暑くなってきたこの夏の時期に上からもう一枚羽織るってのは結構しんどい。もう色々面倒だし、一気に集まって襲い掛かって来てくれないかな……、そしたら一掃できるのに。

「そういう考え方ってマジで師匠ですよね。」

「……何それ？ マジで師匠？」

「強者故の余裕とか慢心とかそういうのです。まあ師匠ならそんなの

あっても普通に圧勝して帰って来そうですね。」

おく、わかっただけじゃん。そうそう、真に強い人はどんな状態でも強い。傲慢であることが求められていて、強者ならではの振舞い方が求められる。アルがどんな道を目指すのかはわからないけど、もし私のようになりたいたいのなら自己の強さを疑わないが故の傲慢をもって、吐いた言葉を全て実現させるぐらいまで強くないとね。

「ま、別に傲慢じゃなくて謙虚に生きるってのも間違いではないんだけど……。」

「あんまり客受けはしない、ですか？」
「そゆこと。」

私の元々の性格や”ビクトリア”としての性格、あとは容姿とかが違えば”傲慢さ”よりも”謙虚さ”の方が受けたかもしれないが、私の場合じゃ絶対に前者だ。そもこの世界の人間の一般的な感覚として強者を貴ぶ風潮がある。強いから憧れる、強いからなりたいたいと思う、強いから守ってもらおうとき頼りになる。そんな感じね？

「ま、単純な”傲慢”だけじゃ人は集まらない。何かしらのアクセント、他要素も必要となってくる。それで私が選んだのが、”ファンとの近さ”ってわけだ。アルも私のようになるのなら貴方だけの一面見つけておかないとね。」

「……考えておきます。」

「まあでも？　こんな風に歩いてたら普段のパフォーマンスもできないし、色々嫌だよねえ。……もういつそのこと商館の位置変えてもらおうかな。ウチの隣とか。」

「本気ですか？　あの人がお隣さんになるの正直嫌なんですけど。」
「だよ、わかる。」

確かに、あの守銭奴で何考えてるかよくわからん奴の私生活とか見

たくもないよねえ。そりや経営者とか商人とか、そういうお金に関することに対しての彼の信頼度は非常に高いけど、その人間性とかは全く気にしてない。ほらあれよ、私生活どうでもいいから『栄養は取ればいい』とか言いながら一日分の食事を全部ミキサーにぶち込んで朝昼晩に分けて飲む奴。仕事は出来るかもしれんけど友達には成りたくないタイプだよ。

ちな普段のパフォーマンスってのは試合に参加しなくなったことで私に会う機会の減ったファンたちへのサービスと、新規層の開拓のために行ってる奴だ。お仕事のために移動してる時とか、買い物の際に声をかけてくれた人に”ビクトリア”としてちよつとだけサービスしてあげる感じ。私を近くで感じられる、ただ眺めるような存在ではなく、隣にもいる存在。

一応偏らないようにはしてるんだけどね。どうしても仕事の契約ってのは大口がメイン、金払いのいい貴族がメインの興行になってしまう。平民のファンとも触れ合えるように握手会とかサイン会とか演舞とか場所借りてやってはいるんだけど、それを短いスパンでやり続けるってのは回数を重ねるごとに人が来なくなって、利益がなくなってしまう。つまり貴族には一対一で長時間お話ししてくれるのに、平民相手じゃサインや握手の一瞬。そうなると自然と平民のファンたちが不公平感を感じちゃうわけだ。

いくらこの世界の人間が貴族と平民みたいな階級の差の元で生まれ育ったといっても、不満を感じてしまうのは間違いない。イメージの商売だから『ビクトリアは守銭奴！』とか『貴族の子飼い！』とか言われちゃうと私にとっては大ダメージなわけだ。その影響を出来るだけ少なくするために外に出る時はもう色々諦めて”私”ではなく”ビクトリア”として振舞ってるわけね。

「ぶるるるるっ」

「っと、悪い悪い。そろそろだね、ありがとうコピー。」

厄介事に繋がらないように、人の言葉ではなく馬のように鼻を鳴ら

すことで目的地の到着を教えてくれる。彼女たちの馬種である”聖馬種”はまあお金持ちの証、高級車みたいなものだ。見る人が見れば毛並みとかでもわかるらしいが、素人からすれば普通の馬との見分け方は喋るか喋らないかだけ。わざわざそっちの方で話しかけてくれたことに感謝しながら、優しく彼女の背を叩く。

「さ、オーナーちゃんにお願いといこうか。」



「構わんぞ。」

「マジ？ 助かる〜！」

「ただ金は払ってもらうが。」

「……割引とかある？ ほら元奴隷キャンペーン！ とか。」

「ない。」

「だよね〜。」

というわけで交渉成立？ つてことで！ 一応許可貰ったし、後はネチネチ耳元で囁いて値段交渉を……。

いやしないよ？ しないってマジで。うんうん、世話になってる元オーナーにそんなわけ……。解った解った謝るから、書類直そうとするのやめよ？ やめないよこの商館全部吹き飛ばすぞ♡ うん、わかったのならよろしい。

「……お前対策の護衛が欲しくなってきたな。」

「私レベルの強さの奴？ 居たとしてもユーの手の届く範囲にいるわ

けないでしように。大体どっかに囲い込まれてるよ普通。現役の時
の私とか、タクちゃんレベルなら探せば出てきそうだけど、そっから
育つかどうかはガチで運だよ?」
「だろうな。」

さて、この私と楽しい会話を繰り広げている元オーナー現プロ
デューサー兼事務所の男と何を話していたかというと、彼の所有物で
ある剣闘士たちの貸し出しについてだ。まあつまり私とある程度戦
える人材を剣闘士から呼んでこよう、って奴だ。役者に私と殺陣出来
るような奴がいないのなら、できる奴がいるところから引き抜いてく
ればいい、ってわけね!

普通ならタクパルとか、彼が教えている生徒とかに直接交渉してス
カウトしたりお願いしたりするのが筋なんだけど……、残念ながら身
分の差つてもものがある。目の前のコイツなら私が駄々をこねれば事
後報告でもOKしてくれそうなものだが、一応筋は通しておかなけれ
ばならない。どこまで行っても剣闘士は奴隷で、奴隷はオーナーの所
有物なのだから。

……ま、私がいたころよりいい暮らしさせてなかったらコイツぶん
殴って全員無理やり解放させちゃうけどね! なはは!

少しだけ不安そうな表情を”作りながら”、彼に話しかける。

「んじやまそういうことで。後でタクちゃんのところにも顔出してでき
そうな奴何人が借りていくよ。あ、あと役者の道で大成しそうなら
こっちで引き抜いちやうけど別にいい? 予定では一月程度だけど、
反響がよかったら今後もやるだろうし。」

「構わん、だがこちらに話を通した上で契約は書面で行う。それとよ
ほど才があるのなら『買戻し』の際にいくらか割引をしよう。条件は
あるがね。」

「はいはい、私と同じように後援にオーナーがいますよ〜って解る様
にあのチューリップのマーク、商会の印つけるんでしょ? わかつて
るって。」

ちやつかりしてるんだから〜！ ……実際、そういった手法はすごく効果的だ。奴隷の解放、買戻しってのは滅多に起きないもの。そりや人件費無視して好きだけ働かせても誰からも怒られないんですもの。そりやみんな使い続けるし、解放なんか割に合わないもの。けれど、わざわざ解放した奴隷が業界で活躍したってなると話は変わってくる。

今後金の卵を生み出すはずの鶏をわざわざ放したってことは、その鶏に頼らずとも十分な利益を出せる力があるってことの証明だし、その商會が人道的な基準で奴隷の買戻し時の値段を決めているってことの証明にもなる。お金を持っている証明と、不義理な契約をしないっていう二重の証明になるわけね。

でもまあそんな利点他の方法でも証明できるわけだし、やってるところは少ないんだけど、ね。オーナーはオーナーで人道的なヘンリ様や、奴隷という体制への忌避感をもつ私との接点を失いたくはないんだろう。とんでもないお金持ちで権力者、そしてほととけば勝手に仕事を取って来て利益を上げてくれる鶏、しかもひよこ付きってなれば配慮する方が得になるって考えてるのだろう。

「あ、それとさ〜。例の件？ どうなってる？ いい人知らない？」
「例の未知の楽器を扱うという話か？ 残念だが私では無理だろう。伝手を辿ったがいい返事は戻ってきていない。」

そも音楽家を一月も拘束するのが難しい、と話す彼。まあ確かにその通りだ。それに演者たちとの合わせも考えるとさらに拘束期間は伸びるだろう。基本彼らはどこでも引つ張りだこだ、宮仕えや教会務めしてる奴らはもとよりフリーの奴らだって私と同じようにお貴族様の要望に応えるために日夜帝都を走り回っているのだろう。

他の貴族に目を付けられたり、一月以上拘束することへの料金などを考えるともうどこかの音楽家グループを買った方が安いかもしれないという話をされる。ただその場合でもこの世界では馴染みのな

い楽器たちを十全に扱えるかはわからないし、その上拒否される可能性もある。笛一本でやって行こうとしてる奴や、太鼓一筋でやって来た人たちに『違うのやって♡』というのはまあ無理だろう。

「ま、だよね。じゃあこつちでなんとか……」

「ビクトリア、お前も薄々理解はしているのだろうか？」

「……何がさ。」

珍しく、オーナーが私の目を見ながら話しかけてくる。

普段の彼であればずっとその目線は机の上、大商人である彼は私と仕事の話をしながら、手元ではずっと違う仕事をしていた。まさに仕事が友達とでも言うような動きをずっとしている。そんな男が、珍しくはつきりと私の顔を見ている。

「お前の言う音楽の問題とやら、一瞬で解決する方法があるということ。お前も解っているはずだ、一般論として気持ち推察することは出来るが、理解は出来ん。なぜ頑なにそれを拒む。」

「……使われる、消費される側の気持ちを理解していながら、いざそこから自分が抜けだしたら消費する側に回る。惨たらしく殺したくなるほど嫌な存在じゃない？」

彼がいう解決策とは、非常に簡単な話だ。奴隷を買い、買った彼らに練習させれば全て解決する、と。……そうだね、それが一番手っ取り早いし確実だ。彼らを奴隷契約によって縛り、達成できれば無償で解放させた後音楽団として雇ってやるという契約。それを結べば彼らは必死になって練習してくれるだろうし、私が求めているクオリティの確保って言う目標は達成しやすくなるだろう。

確かに、私でもソレが一番確実で、手っ取り早いことは理解できる。もし私が剣闘士としての経験を持たなければ、それを選んでいたであろうことも理解できる。だが、一度消費される側。裏の世界だけではなく、闘技場で幾度となく見せられてた人の命を何とも思わないよ

うな人間たちを知ってしまった今。”アレ”と同じ存在になりたいなどと思うわけがない。

「お前が食べている穀物は基本プランテーション、奴隷を労働力として使用する農園によって生産され、帝都の民の食卓を彩る海の魚たちを取る漁船の主な労働力も奴隷だ。お前の故郷は違うのかもしれないが、少なくとも帝国において生活の基盤は奴隷が担っている。」

「理解してるよ。」

「……心情的な問題、とやらか。理解できん。」

ま、そりやそうだろうね。お前さんは人を金で判断できるタイプの人間だ。確かにそれは金稼ぎの力になるだろうし、場合によっては強い力になるだろう。けどお前と私は違う人間だ。育ってきた環境だって違う、本来であればこんな風に喋ることなんてなかったかもしれない訳だからね。考えると頭の痛い話ではあるけど、間接的なのであればまだ我慢できる。でも私が直接かわるとなると話は別だ。……とつても”傲慢”最悪な方の傲慢だね。

「正直な話、別にどうしようとも構わない。だがお前の性格上、気になつてな。……ビクトリア、お前私のところから引き抜いた剣闘士。全員を役者として大成させようと考えているだろう。せつかく命を賭け金にしなくてもいい場所から遠ざけたのだ、新たな場所で生き残れるように、自分の手の届く範囲ぐらいは守らないと。……そんなことを考えていたのだろう？」

「……なんでそこまで分析できるのに、ここで私が嫌がる話するかなア？」

彼の言う通り、実際そのつもりだった。才能が有りそうな子しか引き抜かない、だけど一度私が彼・彼女の手を握ってしまったのなら、せめて独り立ちできるレベルまで引つ張り続けてあげないと、そう思っている。私の後ろで静かに話の行く先を待っているアルも、今頃

ヘンリ様のお屋敷で貴族としての勉強に励んでいるだろうマリナーも、私が手を引いた子たちだ。

最後まで、面倒を見る必要がある。それが私だし、私が目指す”人間”だ。

「そうだな、お前に投資する人間として。いやお前よりも生きた人間として一つ忠告しておこう。『自分の抱えられる以上のことは抱え込むな』、お前の精神・理想とやらは素晴らしいものなのかもしれないが、それでお前が潰れれば意味がない。むしろお前が抱え込んでいた者たちが行き場を失い、より面倒なことに発展するだろう。」

「……………それ、実体験？」

「ふ、若いころに少し、な。」

そう言いながら軽い笑みを浮かべるオーナー。……………なんだろ、もつと顔がよくて普段正義感に溢れているようなオジ様であればもつとこう、ニヒルな感じで絵になったのかもしれないが、コイツがやるとマジで大悪党が悪いこと思いつきました、つて感じの笑みになるからあかんね。やっぱ人間顔なんですかねえ？ ……というかお前と私の年齢そんな変わらんからな？ 前世とこの世界の年齢合わせたらマジでお前と同じくらいやからな？ 偉そうに『若い子に指南しちゃうぞ♡』みたいな雰囲気だしてんじゃねーぞおっさん！

「はいはい、りよーかい。まあ確かにそういうところがあるのは認めるし、ちよーつと抱え込み過ぎカモ、つてのは私も思ってた。潰れる前に色々周りに投げることにするよ。」

「それでいい。こちらとしても有望な稼ぎ手がいなくなるのは困るからな。」

そう言いながら軽く笑い合う私たち。目の前の彼は若干営業スマイルが入っているが、私のことを考えてくれた、思考を割いてくれたのは確かなのだろう。メインが金なのは少し気に入らないが、くれた

忠告は確かに私のためになるものだ。

たぶんこのままオーナーが手を出さなければ、私一人で勝手に動いて抱え込み過ぎてどこかで潰れていただろう。剣闘士の拾い上げた子たちを役者として食べていけるように手を貸し、ファンの人たちへの恩返しのためにクオリティに妥協できない私は心を殺しながら奴隷に手を出していただろう。んで最終的に良心の呵責で死にかけて、どこかのロボット司令官みたいに爆発。この前のエンリットちゃんみたいになるわけだ。

いやほんと。悪いね、”こんなこと”言わせちゃってさ。色々世話になってるっていうのに……。

「んじゃ！ わるいけど役者の選定と、音楽家の確保。お願いね？ 私抱え込んだんじゃうたちだからさあ？ そんなに抱え込んだら壊れちゃうかも！ ちよーど、周りに頼れって言ってくれた人がいるしいく？ おねがい？」

彼の顔が、強張る。

「お前、もしかして最初からそういうつもりで……。」「だーい正解！ んじゃ！ もろもろヨロシクウ！ お代はお給金から天引きしといて！ んじゃアル！ 逃げるよ！」
「了解です。」

オーナーに文句を言われる前に即座にその場から退散する。うへへ！ もちろんその通りだぜ！ 最初からオーナーに面倒な仕事全部押し付ける気だったのさ！ だって私も私で忙しいんだもん！ 自分の修行にアルたちの訓練、普段の営業にヘンリ様の愚痴を聞く仕事。そこに劇も加わるってんだ！ それにお前大口の契約終わらせて当分暇って言ってたよな！ ほら新しいお仕事だよ！ お仕事大

好きだよね？　じゃあ、お願い♡

そも私が目に見えて動揺してる場でアルが何もアクション起こさないとかおかしいんだよなあ！　私たちの絆はそんな薄っぺらいもんじゃないっての！　あはは！　顔作って不安そうな雰囲気出してたら引つかかってやんの！　最初からアルにはどんなことするか共有済みデース！

そんなことを考えながら、彼の事務所の出口まで等速で走る。隣にはアルが付いてきてるし、部屋を荒らしたいわけではない。剣闘士の時から今日までずっとグッズとか私の興行とかで結構ぐちぐち言われたからその返しをちよつとしたかっただけ。さあアル！　今度はタクちゃんのとこにでも顔出そうか！　全部任せるって言ってもほんとに全部投げちゃうってのはダメだからね！　自分の目で見に行こう！　それにオーナーのこの宿舎、奴隷商人との付き合いで定期的に人が入ってるみたいだし？　OB？　OG？　まあどつちでもいいけど先輩として顔出しもしちゃうぞ！

「師匠？」

「ん！　どうしたアルちゃん！」

「ほんとに、大丈夫ですか？」

「……………もっちろん！」

ただちよつと、”大人”にならなきやな、って思っただけ。

61：考えるの大事

「うーん、懐かしい雰囲気。ただいまー！　　って叫びたくなるね。」
「そんなにですか？」

アルと宿舎の中を歩きながらそんなことを話す。
オーナーのところから半ば逃げてきた私たちは、昔住んでいた剣闘士たちの宿舎まで足を延ばしていた。本来こういった宿舎に部外者が入り込むのは色々な問題に繋がっちゃうからダメなんだけど、私はもう顔パス。出入り口を固めてる守衛さんにも『あ、ビクトリア殿。お久しぶりです、何か御用でしたか？』なんて雑談挟みながらすんなり通してもらった。いいねえ、OG待遇ってのは、ラクチン。

「……袖の下渡してたからじゃないですか？」
「まあそれもあるだろうけどね。」

アメリカみたいなチップ社会ってほどではないけれど、門番だったり、警邏の人に色々プレゼントするっていう文化はこっちにもある。来るたび来るたびに結構な額渡してるし、まあそういう好感度が関係してるってのは十分にあると思うよ。でもやっぱり昔ここで暮らしてて、出てからも何度か顔見せに行つて、その期間問題らしい問題を起こしてないっていう信用もあるからだと思うよ。

「そういうものなんですわね。」
「積み重ねの信頼、って奴ね。ところでアル、そういえばここから出てから一度も戻って来てない訳だけど……。実際どう？　懐かしさとかあるかな？」

そう言いながら軽く庭の方へと目を向ける。宿舎の構造的に剣闘

士たちが訓練したりできるように庭というか開けた場所は結構存在している。ちょうど今みたいに軽く視線をずらしてみれば所属している剣闘士たちが剣を打ちあっている姿が見れるくらいには。私の様子を見てアルもそちらの方に視線を動かしながら、言葉を紡ぐ。

「そうですね……、やっぱり懐かしさがあります。ここも何度も歩いた通路ですし、あっちには何回か話した人もいます。ただ見たことの無い顔、新しく入ったであろう人がいるのがちよつと気になる、かもです。仕方ないことだとは思うんですが……。」

「あー、そうだね。」

実際、何度かこつちに顔を出している私でも来るたびにいなくなっている奴と、新しく入っている奴がいる。オーナーの剣闘士に対するスタンスは私のせいで結構変わり消費するのではなく長く使っているものに成ったらしいが、周りが同じように変化した訳ではない。

未だ剣闘士の試合の多くは殺し合い前提だし、観客たちも他のオーナーたちもそれを望んでいる。そっちの方が派手だし、死に物狂いで戦っている様子が見れるから数字が取れるわけだ。オーナーが提唱しているらしい殺しナシの試合にあまり人が流れていないことからそれは明らかなのだろう。若い剣闘士の育成の場や、失いたくない剣闘士同士の調整の場としての”価値”はあるらしいが、あまりうまく行っていないのが現状だそうだ。

それに私は違ったけど、殺し合いの中でこそ生を実感できる奴や、人の命を奪うことに快感を覚える変態さんも存在している。オーナーとしても本人の希望を無視して生産性を下げたり、反抗的になるのは面倒みたいで彼らの意見通りにするみたいだが……。ま、長くは続かないよねえ。

「でもま、”ウチのオーナーの剣闘士”って枠組みだけじゃ結構生産率高まつてるらしいし、それは普通に喜んでよさそうだよね。」

「あ、タクパルさんの。」

「そうそう。っと、いたいた！ おうい！ おっひさー！」

アルとそんな会話をしていると、ちやうど近くを歩いていた男。異形ちゃんよりは小さいけど十分な大男なタクパルを見つける。ちよつと声を掛ければこちらのことに気が付いてくれたようで、笑みを浮かべながら近づいてきてくれる。

「おおー。また来たのかビクトリア。それに今日はアルも一緒か、久しぶりだな。」

「はい、お久しぶりですタクパルさん！」

「また、って何よ。またって。というかタクちゃん元気そうだねー！引退しちゃってどんなへにやへになつてるかと思えばちゃんと鍛えてるみたいだし、感心感心。……けど下半身ちよつと筋肉足りなくない？」

「足りなくないわ。お前の走り込みの量が異常なだけだぞ？」

軽くその腰を叩きながらじゃれつくが、現役の時と変わらない体幹。揺れはするが倒れない、衝撃をしつかり足で受け流してる。うんうん、感覚的な衰えもまだみたいだねえ。私もタクちゃんも当然”現役”張れそうで何より。

「どう、調子は？ 後ろのあの子たち見る限り絶好調って感じに見えるけど。」

「絶好調、とまでは言わんが試行錯誤しながらなんとかやっている。」

そう言いながら彼の後ろ、アルぐらいの子たちやそれよりもうちよつと上の子たちが集まっている場所に目を向ける。ちやうど訓練みたいなのをしていたみたいで、各々が素振りしたり剣を合わせた基礎トレしたりと頑張っている。昔と違うことと言えば……、平均年齢がかなり下がったのと、上の年齢の奴や私が剣闘士してた頃の同僚が子供に剣を教えたりしてるところかな？

「……なんか、昔よりも多いですね。」

「オーナーには積極的にとは言わんが、教育出来る余地のある者を連れてきて欲しいと頼んだ時期があった。それゆえだろうな。」

ウチの元オーナーの父親、つまり私を買ったあいつは奴隷商人と結構深い仲だったらしく、オーナーもそれを継承している。結構大きな相手らしく切るにも切れない縁だから定期的に奴隷を買って色んなところに配置してるらしいんだけど……。アルの言う通り確かに新入りの子供の量が多い。あと顔が良い奴が結構いる。……ちよつと思いついちゃったんだけど。

「宿舎内で行う『剣闘士学校』。ある程度軌道に乗せることが出来た故、正式な生徒として迎え入れたのが彼・彼女らだ。本来はこんな場所にいるべき者たちではないのだろうが……。奴隷となってしまった以上変えられることなどない。故に少しでも生き残れる術を、とな。」

「……そうだったんですね。」

「それに、ウチには蓄積があるしな。」

そう言いながら私の方に視線を向けるタクちゃん。え？ 私？
確かに『学校作るけど、アイデアがすっかり纏まらないから手伝って』って言われてカリキュラムとか結構口出ししたし、最低限の読み書きができるように勉強用のテキストとかの作成にも関わったけど……。蓄積とかなんかあった？

「思い出すと少し笑えるのだが……。アルがここに来る前のこやつ……、くくく。」

「……………あッ！ ちよー！」

「？」

「子供を預かるなど初めてだったらしくてな、右へ左へと大騒ぎだったのだ。やれ何か遊具はいるのか、やれ絵本とか用意した方がいいの

か、やれぬいぐるみとかそういうのもあったほうがいいのかなど、な。
……あの慌てぶりは正直笑えた。」

「わー！ わー！」

そ、そんな忘れかけてたこと言わなくていいじゃんかあ！ だってさ、色々どうしたらいいかわかんなかったんだもん！ こっち見た目女だけど中身男ぞ？ 成人男性ぞ？ 迎えるのが男の子だったらまだ何とかなったかもしれないけど、女の子ぞ！ しかもこっちの常識がガチで通じないこの世界出身の女の子ぞ!? マジでどうしたらいいのか解らんかったのは理解できるでしょうが！

親元から売られてこっち来たわけだから色々心配だろうし、彼女の命だけじゃなく教育もオーナーから任せられたせいで何をどうしたらいいのか解らんかったんだからね！ 殺し合いが本業なせいで絶対放置したら歪んじゃうし！ 情操教育とかどうしようかと迷いに迷って、ぬいぐるみとか絵本とか色々調べたりフアンの人にそれとなく聞きながら調べて用意してで大変だったんだよ！

まあアルが良い子過ぎてあんまり意味なかったんだけどね!!!

「あく、だからあんなにぬいぐるみとか絵本とかあったんですね。てつきりそういうのが趣味なのかなあって思っていました。」

「アルう!？」

「でも最初にもらったあの絵本、あれでちよつと文字覚えまし、絵も綺麗で……、大切な宝物です。」

「アル……。」

もう、この子は……。落として上げるとかそんなテク誰に習った……、私？ 私か。うん、確かにするね。……もしかして私の存在が教育に悪い？ あ、どうしょ。思い当たる節が一つ、二つ、三つ……。うくん、アルのお母様に申し訳が立たない！ 腹切りでもして謝罪しようかな？ いやガチではしないけどさ。

「まあお前のように大量に買い込む、というのは出来なかったがその試行錯誤のおかげで色々とためになっている。」

「……ならいいけどさ。急に変なパスしないでよ。」

「ふ、わざわざ会いに来たということは何かあるのだろうか？ 代金を先にもらっただけだ、許せ。」



「正気か？」

「え、いや。うん。」

代金を前払いさせてくれたタクパルちゃん、彼に頼み事の件を話すと正気かどうか疑われてしまった。どおちて。

頼み事とは、オーナーにも話した『劇に出てもいいよ、っていう剣闘士』のことに關して。私との剣撃というか、剣舞にある程度付いて来れそうな子をスカウトしたいなく、劇に出したいなく、上手く行ったらそのまま役者として大成してほしいなく、って話をしたのだが……、何故私はこんな理解の及ばない者への目を向けられなくちゃいけないんで？

「冷静に考えてみる。まず、そもそもお前と打ち合える相手などそうそういない。劇だったか？ 魅せるために速度は落とすのだろうか、それでも無理だろうよ。お前が現役のころの実力ならまだ私も付き合えたが……、相変わらず訓練は続けているのだろうか？」

「まあ、ねえ？」

「なら悔しいが私でもついていけん。あの速度差はどうあがいても無理だ、それにそもそもここを任されている身、一月以上空けるのは難しい。かといって他の者に任せようにも……。」

「そんなに強い奴は育ってない、か。」

頷きをもって返答する彼、まあ理解してたけどそうそう私レベル、剣神祭レベルの奴は出てこないかあ。うくん、悲しいけど納得と安心の方が強い。あの大会に出てくるレベルの奴らがぼこじやかPOPしてたら、私色々諦めちゃうもん。うんうん、私や異形がおかしいだけ、うん。……それはそれでちよつとやだな。

「なら、さ。私に軽くあしらわれる役にはなっちゃうんだけど、そういうレベルでいい感じの子、いない？ ま、こつちが本命なんだけどさ。」

剣闘士の試合を劇で再現するとき、さすがにずっと接戦を繰り返していたら観客も飽きてしまう。だからこそ『なんか強そうな相手を一瞬で倒しちゃったー！』って演出があると見栄えが良いよね、ってことで脚本にもいくつかそんなシーンが出ている。こつちの方でもリアテイ重視したかったから戦闘のプロともいえる剣闘士の子たちから引き抜こうと思ってたんだけど……。

「それならば、まあ……。何人か紹介は出来そうだな。」

「あ、そう！ ならよかった！」

じゃあさ、じゃあさ。その子たちに話だけでも伝えといてくれる？ 私が君たちに興味示してたよ！ って感じで。うまく行けば私と同じように闘技場のスターに成れるかもだし、いい演技が出来れば剣闘士から役者にジョブチェンジできるかもしれない。オーナーにはもう話通してるし、劇の内容的に顔の良さとか振る舞いの良さより

は”声がよく通るか”が重要視されてくるから、って感じで！

「わかった、わかった。早く抜け出したいと考えている奴を優先に声を掛けて置く、それでいいか？」

「うんうん、お願いタクちゃん！ ……というかタクちゃんはいいの？ 話的に『自分はいいや』って感じだったけど。」

「ああ……。」

ちよつとだけ視線を横に、剣闘士学校の生徒たちへと目を向ける彼。

「……やっぱ誰かを教える方が性にあってる、って奴？ 自分の身分の問題はあるけど、それでも自分のしたいことが出来るからここに残り続ける。剣闘士にモノを教える時、相手も同じ立場でなければ要らぬ思いを抱かせてしまう。だった？」

「……ああ、その通りだ。あの子たちに慕われるのが案外、励みになってるな。」

「お人好しだもんねえ、タクちゃんは。」

この人の持つ才つてのは確実に戦うものに特化している。だからこそこんな大きな体になってるわけだし、ここまで生き残ることが出来たわけだ。でも本当にやりたかったことは違ったんだろう。私という存在が剣闘士を消費し続ける現状に疑問を投げかけ、彼がそれに対する解決策を投げた。オーナーがそれを受け入れてできたのが『剣闘士学校』、剣闘士たちの寿命を少しでも引き延ばすための機関。そして私の様な化け物だったり、スターに成れる様な存在を作れるかもしれない場所。

「じゃ、私はノイズか。」

「そこまで言っていないが？ ま、安心しておけ。今試合に出ている者にも声を掛けておこう。オーナーに話を通してきているのなら

そちらからも話があるだろうしな。」

「悪いね、頼んだ。……じゃ、私からのお願いはおしまい。どうする？ 今日はまだもうフリーだし、ユーの生徒たちに”魅せる”って言うんだったら喜んでさせて貰うけど。」

「ああ、頼む。」

そうこなくっちゃ。

「ふいー、やったやった。」

「お疲れ様です、師匠。」

「うんうん、アルちゃんもお疲れー。……あく、もういい時間だな。外食でいい？」

「あ、じゃあ行きたいところがあるんですけどいいですか？」

宿舎からの帰り道、アルの希望のお店へと足を進めながら何を注文するのかを二人で考える。

いやー、久しぶりに乱取りやったけどやっぱ疲れるね。360度警

戒しなくちやだし、ケガしないように手加減しなくちやならない。アルもアルで小さい子たちや同年代の子たちにちよつと剣を教えてあげてみたいだし、思ったより重労働になっちゃった。でもまあこんな休日もいいよねえ。

……あの子たちにとって、私は希望に成れたんだろうか。

タクパルからの頼みもあり、あの場で私は”成功者”として振舞った。奴隷、しかも剣闘士になってしまったあの子たちは言葉にせずともあの世界がどれだけ酷い物なのかは理解できているだろう。負ければ死ぬし、勝つても手に入るのはほんの少しの銭。オーナーのおかげで色々改善はしているだろうが、あそこ以外の宿舎はひどい物だろう。

そんな最悪の雰囲気に含まれないように、そこから抜け出した者が希望として彼らの前に現れ、自分たちも努力し続ければここから抜け出すことが出来る、元の生活に戻ることが出来る。運が良ければ離れ離れになった家族と再会できるかもしれない。……結局気持ちもものを言うからね、私が彼らの心の補強材になればいいのだけれど。

「そう言えばアルは知ってる？ 最近遠征に出た教会の船が帰って来てなんか新しい食材とか流れ始めたみたいよ？」

「あ、それも聞きました！ 今は滅茶苦茶高いけど、栽培する方法が整えばすぐに手に取れるようになるって！」

「楽しみだよねえ、いったいどこに行つて何を取つて来たやら。」

今日は、色々考えさせられる日だった。

オーナーからは私の価値観と、この世界の価値観。自分が抱えられるものの限界と、誰かに任せる事。

タクパルからは自分のやりたい事と、それを実現させたこと。

そう言えば、私が本当にやりたい事って何なのだろうか。剣闘士のころは世界を色々見てみたい、と思つていたが結局そんな遠出は出来ていない。せいぜいアルの村とか、ララクラとかぐらい。普段の仕事

とか、アルやマリナーナの訓練とかで時間が取られてちやんと考えてなかったけど、あんまり自分のこと考えてなかったかも。

アルとマリナーナのこととは任されたことだし、私も好きでやっている。だから別にいいんだけど……、もし遠くに行くとなれば今の仕事。”ビクトリア”のこととか、今やつてる劇のこととか一時的に誰かに任せることになるんだろうなあ。今準備している劇はもうこれから公開まで一気に走り抜ける必要があるからダメだけど、コレが成功すれば次何するか、って話になって来る。それにもう一度同じ内容を公開してくれー、って声も来るかもしれない。

(劇の準備は始まったばかりだけど、なんか文化祭の準備してるみたいで楽しいのは確か。でもこれをずっとやっていくっていうのは……、違うかもしれないよね。)

ま、それもおいおい考えていくことにしよう。幸い私には考える時間、打ち込むべき仕事もあるのだから。

(そういえば明日は……、ウイウイ先生との授業内容の共有会だっけ。普段のマリーナちゃんのこともしっかり聞いておかないと、劇に集中すると言っても二人の師匠なのは変わらないからね、頑張らなきゃ。)

62：悩んじやつた

「ごめん！ 遅れた！」

「いえいえ、大丈夫ですとも。」

色んな書類を片手にヘンリエツタ様のお屋敷の一室に駆け込む。そこには30分近く待っていてくれたのだろうお爺ちゃん先生ことウイウイ先生がいて、優雅にお紅茶を嗜んでいらつしやつた。わお、優雅な午後のタイムを過ごされていらつしやる。何のお紅茶？ 私はミルクティーが好き、あの甘つたるいのが良いんだよね……。まあもう飲めないんですけど!!!

「ほんつと、すみません！ 必ず埋め合わせはいたしますので……。」
「お気になさらず、お忙しいところに時間を取って頂いているのは私の方です。」

「それでも約束を守れなかったのは私です……。また今度ご飯でも奢らせてください。」

ほほ、では楽しみにさせていただきますか、と仰る先生。いやほんとにごめんなさい。今日午後から『アルとマリーナに色々教えちゃおーズ』こと私とウイウイ先生でちよつとしたすり合わせをする予定だったんだけど、午前にも別の仕事入れちゃつて……。ほら前にも言った『私を叩いてくださいまし！』つて言った貴族令嬢の方覚えてる？

今日はあの人のお家にお邪魔してさ、土下座してお金積まれたから仕方なく言われた通りにペしペししたんだけど……。それが令嬢のお父さんに目撃されちゃつてさ。あはは……。マジで大変だった。いやほんとに。最初は私が手を上げているつて勘違いされてたし、その誤解が溶けた後もその令嬢と一緒にお父様から説教を受けるつていう奇妙な体験をしてきました……。。

(いやマジで大変だった。)

「では帝都にお詳しいビクトリア殿の一押しのお店に早く行けるよう仕事を済ませてしまいませんか。」

「ありがとうございます。」

彼に勧められた対面の席に腰かけ、持ってきていた紙束を机の上に置く。彼女たちを指導している間に気が付いたことや、普段やつてもらっているトレーニング内容をまとめたモノ、後は二人の模擬戦の成績と講評に、私が例の劇以外に何もできなくなる間やつてもらった内容について書かれたものだ。

パソコンどころかワープロもないし、もちろんコピー機もない。全部手書きで私とウィウィ先生の分書き上げたもんだから腱鞘炎になるかと思ったよ……。そう言えばこっちの筆記具って大体羽ペンだけど鉛筆ってもうあるのかな？ なかつたらオーナーにアイデアだけ投げとこつと。

「ではこちらがお二人の講評です、口頭でも説明いたしますが一応書類の方もご用意しておきました。」

「ありがとうございます、じゃあお返しに私の方も。それとご意見いただければと、私が劇の方で二人を見て上げられない時のメニューも持ってきました。よろしければ。」

「了解いたしましたぞ。今日は時間的に難しそうですし、後日郵送で送らせて頂いても？」

軽く頷き了承の意を伝えながら、ウィウィ先生の書いた二人の学習状況に目を通す。何々々々？

○アル

本人の言葉通り火と水の魔法について適性あり。また風属性に対

しての適性が非常に低いと見られる。詠唱魔法の習熟度に関しては、最初はルーン魔法を扱っていたため手間取ったようだが、十分に授業に理解を示し、少しずつ記憶したフレーズの量も増えている。また授業の合間にルーン魔法について講義と実習を簡単に行ったが、非常にイメージの構築が早いように見えた。両方を扱える魔法使いは非常に貴重なため、今後とも両方を伸ばせて行けるように指導する予定。

座学のレベルはすでに学園の初等・基礎レベルを中ごろまで終了しており、そろそろ応用に手が出せるかと言ったところ。実習では魔法の構築や、詠唱速度・精度の向上などを行っているが実戦を想定した場合まだまだといったところ。

○マリーナ

家の特徴と同じように風の魔法に強い適性を持っている、また風と比べるとかなり劣るが次点で雷属性への適性が見られた。本人は風属性への思い入れが強いようだが、二つの属性を持ち入れるように指導を行っている。元々独学で学んでいたせいかわみ込みが早く、すでに理解していたフレーズもあり、アルと比べるとかなり先に進んでいる。だがアルの方も彼女に追いつけるよう、マリーナも彼女に追いつかないように切磋琢磨しているため、この関係が崩れぬように適宜声を掛けていく。

座学のレベルは学園の初等・基礎レベルを習得しており、応用に挑戦中。実習では時間を気にせずゆっくりと魔法を行使すれば比較的大型の魔法も発動できるようだが、いざ実戦となると使用できない魔法が多い。実戦経験不足が多くみられる。

「とまあ、そんな感じですね。ああそれと書き忘れてしまったのですが、たまに私のゴーレムと模擬戦をしていた聞いております。……ああ、ご安心を。訓練に使用しているのは土を素材としたゴーレムなので危険性はないですよ。」

「そうでしたか……。やはりそちらの方は？」

「ええ。アルくんの方が優秀でしたな。」

そっか……。いや二人ともすごく頑張っているみたいだし、ウイ先生の表情もニコニコ顔だからすごく優秀なのだろう。二人の師匠としては純粹にそれが嬉しい。けれど二人とも、特にマリーナちゃんの方で問題が見えてしまっている、っていうわけか。

「実戦経験の少なさ、ですか……。アルは私の元でまあ”色々”していましたのである程度はあると思うのですが……。」

「マリーナくんは身分のこと、お父様のこともありますからなあ。まあそれでも学園に入学したばかりのひよっこ、お二人より何歳も年上の子たちと対面させた場合負けることはないでしょうが……。」

「求められているレベルが違うからなあ」違いますからなあ……。」

ちよつとした愚痴みたいなことを言いながら、二人で笑い合う。声は上げない小さなものだったけど、お互いの認識は同じようだ。ヘンリエッタ様がマリーナに求めているレベルや、おそらくアルが心の中で目標としているレベル。それはとても高い。

ヘンリ様は常識のある方だし、子供がそんな大きな力を持つことに疑問を覚えられる方だ。だが現状それが必要なことは理解しているし、大人になった時力を高められる時間があるかどうかわからない。たいなことを言っていた。私と見えているものが違うのでその詳細を見ることは叶わないが、今のマリーナちゃんのレベルでは足りないこと、そしてより早く強くなって欲しいということが理解できる。

アルはアルで掲げている目標が高い。本人から直接聞いたことはないし、ちよつと恥ずかしいので多分今後聞けないのだが、あの子は私の隣に並べるような強さを求めている。まあ早い話が私やハーバル、異形ちゃんのことね？ この化け物レベルに成ろうとしているのだ。これはマリーナちゃんが課されている目標よりも高く、たどりに着けるか解らないレベル。たまに愚痴を言ったりしているが、絶対に手を抜かないしこっちで休むように制限しなければずっと剣を振るっているのではと思ってしまいうる危うさもある。……彼女の故郷の一件が理由の一つになっているのは確かだろう。

「多分ですがブレーキを掛ける。……あ、進むのを押しとどめて休ませたり、成長を止めたりするとどこかで爆発してしまいそうな気がします。二人とも意欲はありますし、こちらで進む速度を負担にならないレベルのギリギリまで制限するのが良いのかな、と考えていました。」

「そうですね……、私も同じようなことを考えておりましたし、その方針でよいかと。ですが、そのためには次の目標を用意してあげる必要があるかと。足りていない実戦経験を積めるような……。」

ま、早い話『二人に実戦経験付けさせた方がいいんじゃない？』ってコトか。

「……というわけでして、まだ草案段階なのですが、こちらの迷宮都市を利用するのはどうかと考えております。こちら、資料ですじや。」

「どうも。」

え、何々？

帝都から船で移動して一月ぐらいの場所にある属州の一つ、そこにある迷宮都市。複数の迷宮が一か所に集まっており、初心者用の迷宮とも呼べる比較的弱めの魔物が集まるダンジョンもあり。

……へえ、こんなのもあるんだ。でも普通に遠いな、行くのはかなり難しそう。

「初心者用、中級者用、上級者用と三段階の迷宮が存在している珍しい都市でしてな。神が冒険者のために特別に用意したのではないかと教会の者たちの間では言われているそうです。」

「へえ。（多分マジでそうなんだろうな。）」

「こちらに長期間滞在しながら修練を行う、一度行けば帰ってくるまで非常に時間が掛かりますが成果は期待できるかと考えていますな。」

なるほどね。でも多分ウイウイ先生が勧めるってことは効果抜群ってわけなのだろう。この人どこからどう見ても人生経験豊富そうだし、その上学園でずっと教職を取っていたってことはそういう経験値も盛りだくさん。頂いた手書きの資料を見る限り危険性とかも十二分に確認して、大丈夫だと判断したんだらうね。



「どーしよっかなあ?」

ヘンリ様が用意した馬車に揺られながら、一人口を滑らせる。

今日は午前に外回りやってたから鎧を着てただけど、帰りは着替える部屋を貸してもらったので普段着。重い鎧は降ろしてゆっくりしながらの帰宅だ。家に帰った後は荷物を置いて、アルを拾ってウイウイ先生とご飯っていう形になる。終わったらご飯って話冗談なのかと勝手に思ってたんだけど、マジだったみたい。即断即決だね。

(ま、ヘンリ様に見つかったから彼女とマリーナも連れて行くんだけど。)

そのため最初の予定だった平民向けのちよつとお高いお店から、貴族向けのかなりお高いお店にジョブチェンジ。『え! 私に秘密でご飯行くの!? ひどいわビクトリア様! 私も行く!』って言われちゃえば仕方ないよね。でも貴族向けのお店って滅多にいけないし、そもそも平民お断りなところもある。だから結構楽しみなんだよね、それ

にお酒のボトルキープみたいなノリで部屋をキープしているらしく、個室で楽しくお食事なんだと。

「お呼ばれた時の会食みたいに食べる量をセーブしなくていいし、緊張しいのアルも少しは緊張するかもだけど、見知った顔しかないしだいぶマシなはず。」

ついでにこの世界のテーブルマナーの練習にもなるだろうし、お食事とお勉強が一緒に出来て効率がいいね、って話だ。ま、正直そこまでがみがみいうつもりはないけどね？ お高い食事とか、貴族向けの食事とかめつたに食べられるもんじゃないし、料理を楽しむのが大前提だ。……行く前にちゃんと伝えとかないと勘違いしちゃいそうだから忘れないようにしないと。

「……にしても、迷宮かあ。」

先生と色々お話して、すり合わせは十分にできた。それに私が劇の準備や講演で二人のことを見れない時に、指導をお願いするって約束もすることが出来た。むしろ任せてくれって感じて快諾してもらったし、ありがたいよね。

でも、その先の目標がまだ決まっていらない。

劇を頑張る、二人を育てる。両方大事なことだけど、多分専念するには片方しかできない。ちよつとずつ劇の用意が始まって来て、役者の選定とかも手伝ってるんだけど、すごく大変なことが実際やってみて解った。こつからお稽古して、講演してとなるともっと重労働なことが想像できる。多分この生活を続けるのなら二人の面倒は見れない。

「個人としてやり続けたいという気持ちはあるにはあるけど……。」

なーんかね？

これまでずっと私は必要なことが目の前にあつて、それをこなすことでこの世界を生きてきた。この経験は私を成長させてくれたし、おそらく前世の私とは全く違う存在に変えてくれたのだろう。記憶や考え方、根本的なものは同じかもしれないけど、細かな優先順位とかは絶対が変わっている。昔の私なら自分のことや、自分の夢を優先させていたかもしれないけど……。

「面倒を見る、って言った二人のことを放っておくのは絶対に違うよね。……うん、決めた。」

とりあえず、舞台はあの一月の公演。今準備しているのが終わったらいよいよ。確かに一つの物語を作っていく過程は面白いだろうし、お芝居の練習も大変さの中に面白さがあると思う。それこそ文化祭みたいだね？ でもそれを全力でやり切ったら一旦おしまい。アルとマリーナの師匠として戻ることにする。ビクトリアっていう”偶像”は自分お休みだ。

んで帝都を離れて、迷宮都市にでも行こうか。そこで二人を鍛えながら私も成長して、滅茶苦茶強くなって帰って来る。それこそ異形を片手であしらえるくらいに。アルもマリーナも目標としている力を手に入れた後、帝都へ凱旋だ。別に長期間いなくてもいい、夏休み感覚で数か月だけでもいいし、途中で帝都に帰って来てもいい。ゆるふわな強化合宿と行きましよう。

「しッ、ようやく道がちゃんと決まった気がする。このごろちよつとフワフワしてたからね。気を引き締めていこう。」

そうと決まればまずは全力で劇に取り掛かろう。役者の選定に、私と戦えるレベルの役者さんを見つけること。そしてもしヒットした時のために、私の後を任せられる人の決定とかもやってしまおう。迷宮都市に高跳びするわけだしね。

「いつそのこと劇団でも作ってやろうかな？ 異世界宝塚みたいな、面白そうじゃない？」

私の演技とか振る舞いとか、ビクトリアという役の形成にはそこを結構参考にさせて貰ってるしね。この世界に合わせた形になるから多分別物に成っちゃうけど、あれぐらいのレベル目指して頑張ってみましょうか。

「よし、そうと決まれば……、つと。もう着いたのか。ま、とりあえずご飯だね。腹が減っては戦は出来ぬ。アル、ただいまー！」

そう言いながら馬車から飛び出し家の中へと突撃する。

ただいまただいまアル！ 何してた!? 掃除！ 偉いねえ！ 頭などでしちゃう！ あく、もうカワイイ！ 私の子！ 産んでないけどウチの子はかわいいなあ！ 留守番の間何かあった？ 変な人来た？ もしそんな人いたら文字通りみじん切りにしてあげるからねえ！

「ちよー！ 変なところ触らないでください！ というかなんでそんなにテンション高いんですか!? 何もなかったですよ!? 言われた通り課題も訓練も全部終わらせて、後はご飯食べて寝るだけです。」

「マジ!? 偉いね〜!!! それとちよ〜どよかった！ 今からご飯行くからおいでおいで！ 馬車来てるしー！」

「え？ あ、ほんとだ。ってヘンリ様のとこの馬車じゃないですか！ え、大事な奴ですか!? ちよつと着替えてくるので待っててもら……」

「んにゃー！ そのまま行こー！ めんどい！ というわけで突撃！」

普段着からちよつといい服、まあ布変えるだけだけど、着替えに行こうとしたアルを抱えてそのまま馬車の中に放り込む。あとはちよつと騒がしくしたお詫びと口止め料を込めて御者さんに銀貨を

シュート！ 超エキサイティング出発ツ!!!

「だからなんでそんなにテンション高いんですかア！」

あはははは！ 目標が定まった乙女？ は強いのだ！ さ、明日も
がんばろー！

63：みんな最初は引つかかるよね

はい！ みんな大好きビクトリアちゃんですよ！ 今日はずいぶん普通のお洋服。鎧じゃない普段着なんですけど、なんとお仕事の日。私主演の劇をやるってお話してたでしょう？ その役者さんたちや、演出とか小道具とか衣装さんとかの各種スタッフの皆さんとの顔合わせが今日なのよ。内容自体はそんなに面倒なことじゃないんだけど、ちよつと違和感があるのよね。

(鎧の有り無しでスイッチ切り替えてたところもあるしなあ。)

そのため髪も全部降ろしてビクトリアの物になっている。普段は暑かったり面倒だったりするから後ろで縛ってるんだけどね。普段着でビクトリアってすごく新鮮だよ。今後他の役者さんや、スタッフの人たちに”素”を見せることはあるだろうけど、”ビクトリア”と”ジナ”は違う存在だ。ギャップと言ってもやり過ぎれば終わるからね、色々気を付けていこう。

ほら舞台裏のネズミーマウスさんと一緒。着ぐるみ着たらもうそのキャラとしてなり切る感じよ。

(というわけで頑張っていきましょうか、アルもマリーナも今頃頑張ってるだろうしね。)

私が面倒を見れないときは、魔法指導役のウィウィ先生かヘンリ様のお屋敷にいる護衛兵の人たちをお願いすることになっている。アタマ、お仕事の始まるの時間がちよつと遅かったからアルをついでに送って行ったんだけど、迎えてくれた護衛兵長さんのお顔が『ビシバシやりますぞ！ やる気十分！』って感じだった。私のブーツキャンプよりはマシだろうけど大変そうだよな。

「ど、どこか。コピア？」

『はいはい、了解ですー。』

ここまで乗せて来てくれたコピーアの背から降り、屋敷の厩舎まで移動するように頼む。自分で思考し会話できる彼女だからこそ任せても大丈夫なのは非常にありがたい。楽だしね。

さて、到着したのはヘンリ様の持つお屋敷の一つ。正確にはヘンリ様の派閥が所有している貸会場、って物件だが実質ヘンリ様のものなので間違いではない。会議したり、演劇の練習をしたり、防音の魔法とかもかかっているみたいだから音楽の練習もできるそう。今回の劇の実質的な総支配人にあたるエンリット嬢がヘンリ様にお願いで借りたそう。

ちよつと中に入ってみれば綺麗な装飾が為された部屋が迎えてくれる、それに一般のご家庭には存在しない魔力を動力とした照明なども所狭しと並べられており、入口だけでもかなり明るいことが解る。ウチも照明の魔道具とか設置してるんだけど、コレ結構高いのよね。やっぱヘンリ様金持ってるなあ……。

「あ、ビクトリアさんでしょうか！」

「うん？ ……ああ、そうだけれど。キミは？」

入り口付近で雇い主の資金力に思いを馳せていると、少し奥の方にいた女性が私に声を掛けながら近寄って来る。服装からして従者やそれに類するもの、誰かの使用人だろうか？ 私に対して様付けしてくれているけど、その振る舞いが貴族へのモノではなく同じ平民へのものだから私の素性もある程度解っているのだろう。となると……

「エンリット様に仕えております、サイクロメ商会の者です。ま、お嬢様がご実家にいたところからの人間なんですけど。皆さんもうお集まりですよ！ ご案内しますね！」

「ありがとう。……もしかして遅れてしまったかな？」

涼しい顔で彼女にそう問いかけるが、内心冷や汗である。え、時間

通りじゃない？　なのにもうみんな来てるの!?　え、もしかして業界じゃ何分前に到着しとかなきゃ、つてルールとかあつたりするタイプ？　や、やらかしですか？

「いえいえ、大丈夫ですよー！　ただこういった時主役の方が最後に来るっていう文化があるみたいで、それでビクトリアさんだけ少し遅い時間にご到着していただけるようにお伝えしたんだと思います。」

「そうなんだね。」

「変な文化ですよー！　お嬢様にはずつとお仕えしてまあそれなりに劇とかの活動にも参加しましたけど未だにサツパリです。」

そんな話を聞きながら、彼女の後ろを付いて行く。なんでも昔主役を務める役者となれば結構ベテランの方が多かつたみたいで、そういった方に配慮するように後に来てもらったり、若手が変に遠慮しないようにそういう来る順番とかが出来るようになったんだった。……そんなこと言い出したら私役者経験0よ？　いや”偶像”と書いて”アイドル”と読むようなことはしてたけど舞台素人よ？

(まあ私が一番最初に来てたらそれはそれで気を遣われちゃうだろうから理解は出来るんだけど……。)

平民な私だけど、結構立場ややこしいからね……。元剣闘士な奴隷だけど、後ろにヤバいのいるし。

ま、とりあえずそんな時間に呼んでくれたエンリットちゃんへの感謝と、経験0の新人として少しでも良い作品にできるように努力すること、役者として生計を立てている先人たちへの敬意を忘れずに”ビクトリア”として頑張りますよ。

「ど、どこかい？」

「はい。ちよつと待ってくださいね。」

少し歩くと、見たことの無い特徴的な扉の部屋を見つけ。置いてある札的に今日の会場はこのようだ。ちよつと魔力感じるし……、このドアが例の『防音』関係の魔道具なんだろうか。そんなことを考えながら扉を少し開けて顔をつ込んだ使用人の彼女を待つ。

「失礼します。あ、はい。そうです。ご到着されました。もう入ってもらっても？ あ、了解ですー。……さ、ビクトリアさん。どうぞ。」

そう言われて開かれた扉の中へと入っていく、まあここで断る意味もないしね。すると、部屋の中に入った瞬間に内部の音が聞こえ始める。何故か拍手だが。なるほど、部屋の中を『防音』の魔道具で囲ってたわけか。ドアを開けても音は漏れ出ないことから結界の様なモノなのだろう。防音対策しっかりしてるなあ。……といふかなんで拍手されてんの？ そういう文化？ といふかどこまで歩けば……、ああこの他スタッフや役者さん全員に視られる位置ね？ 了解。

「今回の主演を務められます、ビクトリアさんですー。ビクトリアさん、ご挨拶お願いします。」

「今？ ……ああ失礼。ご紹介に預かりましたビクトリアという者です。”役者”の経験は初めてで皆さんにご迷惑をおかけすると思いますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。あ、それと……。仲良くしてね。」



これでいいののか？ 感が半端ない挨拶を終えた後。私を案内してくれた使用人の人を司会に、順に挨拶が始まっていく。いや皆さん拍手してくださったけどアレでよかったの？ こっちの常識なんも解らん！ マジで畑が違う！ え、何!? 剣闘士みたいに自己紹介したら『ヒヤツハー！ 新鮮な女アー！』って襲い掛かってくるようなノリはない感じ？ 『剣を合わせば人が解る、いぎ！』って切り掛かってくる人もいない感じ？ わあ、なんて平和な世界！

とと、ふざけている場合じゃなかった。名前と顔と役職叩き込まんと。

「服飾を担当します。くくです……。」

「小道具などの制作をくく。」

わく！ 多い！ そしてペースが速い！ 覚えられないよ！

そもそも私、人の名前覚えるの苦手だし、覚えても死ぬから覚えないうようにしたし、そのせいでマジで身近な人しか覚えられないようになっちゃった人間だよ！ こんな一斉に来られると無理だつて！

名札！ 名札付けようよ！ 名前間違えて変な雰囲気になったり、名前忘れたままお互い役職だけ覚えてるからなんとかなるけど打ち上げの時になんて呼べばいいか解らなくなる奴になっちゃうよ！
せめて名簿と顔写真ついたしりょうちようだい！

そんな私の心の叫びは聞き入れられず、どんどんと自己紹介は進んでいく。まずいぞ、誰一人入ってこない！ 役職すらわかんないぞ！
こつちに来てもう結構時間たってるけどこんなにカタカナいっぱいだと困るく、まだ森田とか森木とか田森とかの方がいいって！
……いやソレはそれで絶対ごつちやになるな。

(後でエンリットちゃんに『お金出すから名前と役職名書いた名札をみんなに着けるように言つてく』ってお願いしようかな……。)

「はい、一応これでスタッフの方は全員ですね。あ、あとそこに置いて

ある定期的に奇声を上げる箱ですが、”総支配人”兼”演出”のエンリットさんが入ってます。爆発して飛び散ると色々面倒なので入ってもらってます。」

『よ、よろしくお願いいたします〜。』

たぶん魔物素材なんだろうな〜という材質の箱からエンリットちゃんのお声が聞こえてくる。あ、やっぱその箱エンリットちゃんが入ってたのね。この世界独特の奇妙なインテリアじゃなくてよかったですよ。

「あ、御存じない方もいらっしやいましたよね。ウチの主人ですが、感極まつたりすると体が耐え切れなくなって爆発するスライム人間なのでこのような形で失礼しています。大体オレンジ色のゲルは主人ですので、討伐したりしないようお願いします。あ、あと地面に落ちたら拾って届けてくださるとありがたいです。」

さっき私のことを連れて来てくれた使用人の人がそう補足する。どうやらスタッフの皆さんにはすでに通知されていたようで『いつもの〜』って感じだけど、役者の一部の方には『何言ってるんだコイツ』という顔をしている奴もいる。まあマジでそうなんだけどね。

使用人の人が疑問を解消するように箱の扉を開けると、案の定オレンジ色の粘体が箱の中で破裂した情景が飛び出てくる。内側にべっちより付着してて、下にどんどん垂れて来てる。多分私の子供時代やそのあたりを担当してくれる子役の子たちが悲鳴を上げてるし、私も顔をしかめたくなるような光景だ。

「あ、キモイですよ。すみません。あ、でも内側から外見れるようになってますし、音も聞こえるのであんまり言わないであげて下さい。……さらに爆発するので。ということウチの主人の紹介は以上です。次は役者さんたちの自己紹介の方お願いいたします。」

キモイって言われてさらに爆発する？ エンリットちゃん、キミもそっち側だったか……。つと、さすがに共演者の人の名前は覚えないとまずい。

右から左に流れているような気もするが、せめて顔と役ぐらいは一致させようと叩き込んでいく。私の架空の幼少期を描く第一章に出てくれる私の両親役の人に、子供時代の私役の子、あと領主の役の人とか他エキストラの方々。次に第二章で私が剣闘士になった経緯を書くところで、私の同僚だったり、私に殺される役だったり、あとは先代のクソオーナーの役をやる人だったり。まあそんな感じ？

第三章は剣神祭を扱うんだけど、そっちの方は役者として食べてる人じゃなくて現役剣闘士から何人か来ている。オーナーとタクパルを通じてこっちに来てくれた人だね。昔少しだけ相手をしてあげた子一人と、全く知らない子二人が来ている。後ろの方は新人さんかな？

(というか首元の奴隷紋がみんな無いな、隠してるのか解放済みなのか。……前者かな、私が気にしすぎないようにオーナーが何かしてるんだろう。そも”アレ”なかったら逃げ出してもおかしくない……。わけではないか。あそこ剣闘士にしては環境良すぎるし。)

つと、そんなことを考えていたらいつの間にか自己紹介の時間が終わってしまった。……まずいな、顔と役職は何とか把握できたけど名前が無理だぞ？ 困る。

「つと、皆さん自己紹介おわりましたね。じゃあちよつと休憩挟んだ後に役者の皆様は台本読み、スタッフは別会場用意してますのでそっちに移動して準備していきますー！」

わーい、台本読みだー！ つてまだこっち名前覚えきれてないんだけど！ なのになんか役者の方々こっち来たんだけど！ え、何！ 何て対応したらいいの！ うくん、もうなる様になれ！

え、何？ 闘技場時代試合見てくれたの？ それでファンになつてオーデイション受けてくれた？ わく、それはありがとう。一緒に頑張ろうね、うんうん。あ、そのキミは……、え!? 裏の時から見たの？ ちよ、ちよいちよい。それは黒歴史というかあんま口に出しちゃダメな世界だからね？ というか明らかに真つ当そうな君がなんでみてるのさ！ え、親の仕事の関係？ あ、うん……。

あ、私の親友役の。第二章で死ぬ女の子の役のね。はいはい、あく、うん。実話だよ、それ。仲良かったんだけどね、うん。あ、いいよそんなに気にしなくて、自分が思う彼女の形を形成してくれればいいから。多分それで喜んでくれると思うよ。……で、そっちの彼と、貴方が私の両親役やってくれるの!? わー！ 私の両親よりも優しそうですねー！ って感じ。うんうん、よろしくお願いいたしますねー。

ふんふん、あ、へー！ そうなんだ、いやまあそうだよね対象が生きている間にその人の人生劇にするの珍しいよね。しかも主演が本人っていう。いや、さ。オフレコなんだけどね？ ほらヘンリエツタ様いるでしょ？ うん。あのお方が色々後援してくださったから……。あ、やっぱ役者さんの業界でも噂になってたんだね。そうそう、マジなんですよ。いやー、お互い大変ですよねー。

とまあこんな風に一斉に集まって挨拶してくださいました役者さんたちを捌いていく、誰一人名前を覚えられなかったので配役の方で呼ばせてもらったが……、今後のビクトリア先生の頑張りに期待してください。な、なんとかして覚えるから……。というか色々濃い人ばっかだな。

(とりあえず大体の人と挨拶できたと思うんだけど……、まだ見てるな。)

人の波を何とか捌きながらも、ずっと視線を感じていた。まあずつ

と戦いの場に身を置いてた人間だからね、実戦から離れても視線ぐら
いすぐ察知できるよ。……特にあつちから話しかける気はないみた
いだし、放っておいても良かったんだけど、彼女の”役”的にね？
声ぐらいいは掛けておこう。よっと。

〈加速〉五倍速

脳の中のスイッチを切り替え、私だけの世界に入門する。もしかし
たら、と思っていたけれどこの感じだと誰も付いて来れていないよう
だ。まあ戦いに身を置いていなければそんなもんか。誰にもぶつか
らないように細心の注意を払いながら”彼女”の背後へ。『加速』を
切り、私が消えたことに驚いている彼女の肩を軽く叩いてやる。

「やあ、”私”。」

幼少期の私を演じる彼女の肩に手を乗せ、人差し指を突き出した状
態でそう問いかける。

「え、ぶおー！」

や、引っかかった。

64：わたしとワタシ

「やあ、”私”。」

幼少期の私を演じる彼女の肩に手を乗せ、人差し指を突き出した状態でそう問いかける。

「え、ぷおー！」

や、引つかかった。

いや、古典的なネタだけどこっちじゃまだ流行してないのかな？
それともこの子が知らなかっただけか。驚くぐらい綺麗に決まっちゃった。爪とかちやんと切ってるし痛くはなかったと思うけど大丈夫かい？ かなり勢い良かったからさ。……、うんうん、赤くなってるないね。大丈夫そう。にしても確かあなたエンリットちゃんがやったオーデイションの時金髪だったんでしょ？ わざわざ私の髪色に染めちやつてまあ。

「え、ちょ！… なんで！」

「あれ？ ”私”なのに私の代名詞知らない？ ……ふふ、ごめんね。」

ちょっとだけ彼女を責めるような言い方をして、からかう。ま、五倍速でも目で追える人は一握りだし、役者として生きてきたこの子が把握できるわけないもんね。アルだつてたまに見失う、つて言つてたんだから。まあそれはアルがすごいだけなのかもしれないけど。

いや、ごめんね？ 君みたいになちっちやい子見るとついからかっちゃやう病気なのよ、私。反応が愛らしいのよねえ。いい反応視るだけで生きてることを実感できる。……まあそれは言い過ぎだけどさ。

こういった反応が大好きなのは事実で、ちよつとだけイタズラしちゃうのはもう癖というか。あ、でも誤解しないでね？ アルが一番だし、一番被害受けてるのもアルだから。彼女が一番なのは変わりないけども。ほらよそのお家のワンちゃんもかわいがるけど、一番はうちの子みたいなの。

え？ 犬扱いは失礼？ 確かに、後で謝つとく。

「熱心に見てたから、ついね？ 私はビクトリア。キミは？」

「み、み、ミリアムと申します！ ふ、不快に感じられていたのなら……。」

「ああいや、気にしないで。ただ気になっただけ。」

名前を言われて漸く彼女のことについて思い出した。役職と名前が繋がる感じ。

エンリットちゃんが開いたオーディションに参加した子役のなかで一番実力がある子がこの子だったらしい。なんでも幼いながらにして役への理解の深さや演技への情熱がすごいんだって。私はエンリットちゃんが付けた講評でしか彼女のことを知らないけれど、もらった紙の端にオレンジ色のシミ。彼女の体液というか体の一部が付着していたことから、“尊み”を感じるくらいすごかったことが理解できた。

ほら箱の中からとんでもない爆発音が聞こえてくるでしょう？ 多分こつちのこと捕捉して吹き飛んでる。

「あ、あの。实在の方を演技させて貰うのは初めてで……、とっても不安で。間違っちゃだめってママや所長さんにも言われて、それで……。」

「おっと、変なプレッシャーをかけてしまったかな？」

「い、いえ！ 全然！ 大丈夫です！ ……で、でも。お聞きした時のイメージとか、台本だけじゃなんかビクトリアさんとちよつと違う気がして、これでいいのかなつと……。」

あらく、ミリアムちゃんも大変なのね。マネージャーさんとお芝居の先生みたいなことしてもらってるママにお言葉を貰って、そんな役者を斡旋する事務所の所長さんからもプレッシャーを受けちゃってるのかー。あ、まあ主催ヘンリ様だし仕方ないけどアルよりもちっちゃい子にそんな重荷担わせるのはダメでしょうに。

……というか、この子。人から聞いたイメージがズレていることはまああることだから理解できる。けど台本を見た後に、私を見て、『ちよつと違う』？ あらあら、目ざとい人にはバレると思っていたけどこんな小さな子に疑問を持たれちゃうとか。私も焼きが回っちゃいましたかね？ それかこの子が単純に観察眼に優れているだけか。

「別に怒っていないし、貴方に不満があるわけでもない。むしろキミみたいにかわいい子が私のことを演じてくれることがすごくうれしい。こんなかわいい子じゃなかったしね、私は。けどちよつと聞かせて欲しいんだけど……、『ちよつと違う』というのはどんなところ？」「あ、あの。えっと、もらった台本のビクトリア様は、ずっと芯があつて曲がつてないというか、ずつと前を向いてる様な人でした。それですごく真面目で、なんかすごく堅そうなイメージがあつたんです。でも、今日初めてお会いしたんですけど、もうちよつとこう、柔らかいというか。堅いように見せてるけど実は柔らかいというか、楽しいことだいすきというか、そんな感じがして……。」

緊張のせいか、手をわちやわちやさせながら頑張つて自分の思いを言語化しようとするミリアム。

今日の私は完全に”ビクトリア”として来ていたし、さっきの他役者さんたちにもまれてる時も脳内はアレだったが外面はずつとそのままだった。彼女の言う様にお堅いビクトリア様、って感じ。私の”ビクトリア”のキャラ設定としてはそんなお堅い彼女だけど、実はノリが良かったりみたいなのがギャップで落とすっていうものにしていく。つまり定期的に被ってる仮面を少しずつ、って形だ。

(いや、すぐく見てるねえ。最近の子つてみんなこんな感じなの?)

「ずらす、と言ってもほんの少しだけ。『あ、それが素なのね。』というよりも『そんな一面もあるんだあ。』と思わせる程度の出し方に努めてただけど……、まさかバレちゃうとは。この場にいる人たちは色々守秘義務とかの契約を結んでいるらしいから別にバレても良かったんだけど……、うくん。私も私でちゃんと演技の練習した方がいいかも。」

「よく、見ているね。」

彼女の目線に合わせるようにしやがみ、軽く微笑みながら頭を撫でてやる。後援者がこの国で上から数えた方が早い超級の権力者で、そのもとの総支配人を務める彼女も色々アレだが能力は確か。私を扱う故にその注目度とか期待度とかは結構高くて、私が年齢的に演じるこののできない子供時代の配役つてのはすごく難しく、厄介だと言った。

そんなポジションに収まった子だ、単なるコネとかの世界ではないと思つてたけど、……すごいね。」

彼女の腰に手を回し、負担にならないように持ち上げてやる。同じ髪色のせいかわらば見れば親子のようになりてしまふかもしれないが、ちよつとだけ秘密で話したいことがあつてね。耳元で彼女に話しかける。なんか変な振動を始めたエンリット箱をこの子の視界から隠すように。」

「キミの考えの通り、私は仮面を被っている。ずっと演技してること。でも被り続けるのは難しいし、私も素で接したいときもある。キミが感じた違和感はそれだろう。……子供のころの私を演じるならば、キミの感じた通りにやればいい。」

作ってもらった脚本、アレはアレで完成しているが、それは読み物としての場合。実際に演じる場合はそこに役者の解釈や、役者自体の能力も加味される。脚本に引きずられて十分な演技ができないのならば、自分なりの解釈で新しくした方がいいだろう。それにそっちの方が面白そうだし、この子も楽しめそうだ。

それに、この子が私の”素”を意識した演技をするってことは、剣闘士になる過程で私が”ビクトリア”みたいな性格になった変移つてのも見せることが出来る。ちよつと、私側の演技に負担が増えそうだけどそっちの方が物語として面白そうだ。こういうのって『面白いこと』が正義だからね、その大前提を崩さずに邁進していきましような！

「わ、わかりました！ がんばり、ます。」

「ああ、楽しんでいこう。」

「……その、嫌じゃなかったらなんですけど。」

少し不安そうな顔をしながら、彼女は私の方を向く。

「さつきみために、ビクトリアさんのこと見てもいいですか？

絶対、頑張つてうまくやって見せるので！」

「もちろん。好きなだけご覧。」



「あ、ビクトリアさん。演奏家の方々が……。」

「うん？ ああ、ありがとう。すぐに移動するよ。」

他の役者さんたちとの台本読みを終えた後、スタッフの方が声を掛けてくださったのでこちらに移動する。もちろん背後からはとつとことミリアムちゃんが付いてきている。さつきみたいに抱き上げて上げようと思ったが、自分で歩けるからいいとのこと。

にしてもまあさつきまで台本読みしてたんだけど、すごかったねえ。さつすが本職って感じだった。

私も私で負けてないというか、ずっと”ビクトリア”演じてたからある程度は食らいつけるだろうと思ってたけどいやま、全然。声の出し方や、抑揚をつけての感情の表現の仕方。ぜんぶ違った。私も自分のセリフはちゃんと合わせてたんだけど、全員の迫力がすごくて消えちやいそうならいだったんだもの。

まあそれも納得な話で、そもこの国の主な劇場は屋外での公演がメインで、しかも拡声器みたいなものは一切ない。しかも客席から結構離れているものだから演技を通じて観客にキャラクターを見せるのはマジで至難の業だ。声もハリが有ってよく通るモノじゃないといけないし、動きもできるだけ大きくして、誰にでも見えるようにしないといけない。

(私がこれまでしていた演技ってのは『屋内』で『マイクあり』の世界を参考にしていた。そもその前提が違うけど……、マジで参考になる。)

この世界の前提に則って演じないといけない訳だけど、それで私の強み、これまでの積み重ねを壊すのは避けたい。いや、こりや思ってたよりもやりがいがありそうだねえ。読み合わせしながらちよつと本職の方々にアドバイスを頂いたし、次回までには直しておかなくちゃ。

ん？ ミリアムちゃんの方？ いやすごかったよ。とりあえず現時点での”私”への解釈を形にしてくれてたんだけど、もうお化けみたいなものだった。”ビクトリア”よりは少し明るいというか、はっちゃけてるんだけど芯はブレてない。子供というものの強みを十全

に活かしていて、私と地続きでもおかしくないな、と思わされた。普段のちよつとおどおどしている彼女とはマジで別人だったよ。事実エンリット箱から聞こえる爆発音が彼女のパートで一番多かつたしね……。

「あ、あの。ビクトリアさん……?」

「何だい。」

「あ、あの。総支配人さんっていつもあんな感じなんですか……?」

うん、多分。というかミリアムちゃんは初めて……、ああなるほど。現場で会うのは今日が初めてだったのね。オーデイションの時に無茶苦茶爆発してたから覚悟して今日来たけど、想像以上に爆発四散してたし、箱詰めされていた。拳句の果てに私が立ち、立って共演者の人と合わせながら実際に演技している最中に、箱を貫いて内部のオレンジスライムが部屋中に飛び散るなんてハプニングもあつたからねえ。

「私も長くはないけれど、『彼女』は『彼女』として納得して、理解は諦めた方がいいと思うよ?」

「……もしかして貴族さまってみなさんそんな感じなんですか?」

「……………みんなではないね。うん。」

ただ色々と濃い人がいるのは確か。最近はおとなしいけど妖怪『私のモノにならないか?』とか、私と一緒に父様からガチ説教喰らった妖怪『叩いてくださいまし!』とか、途中から髪の毛とか爪とかが入ってたせいで怖くなりオーナーにお願いして事務所からNG出してもらってる妖怪『クソ重ラブレター』とか、事務所の小さい倉庫埋めるくらいに私の石造彫って送ってくる妖怪『だからもう送って来ないで! 重さも想いも重いって!』とか。あく、そう言えば封筒に剃刀仕込んでる古典的なのもあつたなあ。ほら開けたら飛び出てくる奴。

「ひいっ！」

「ミリアムも売れたら同じことが起きるかもしれない、覚悟はしておいた方がいいかもしれないね」

ま、私は殺しもやってたから、というのもあるだろうけど。人目を集めるお仕事はね、いつの時代もそういうところありますから。そんなちよつと業界の闇というか、綺麗なことだけじゃない内容についてお話していると、教えてもらった部屋が見えてきた。ちようど中に大荷物を抱えながら入っていく知人の後ろ姿も見えたし、ここだろう。

「つと、ここだね。失礼します。」

「し、しつれいします。」

30人くらいの人たちと、明らかに睡眠不足で機嫌悪いです、って感じのドロ。そして彼女が運ぶたくさんの黒い箱があった。この部屋も入った瞬間に音が聞こえ始めたから防音付きなのだろう。というかオーナーよくこんな集めたなく、いや確かにエサとなるようなことはいくつか伝えたけど、これほどとは。この前会った時あんなにワーキヤー言ってたのに！ 今度お礼にパイでも作って投げつけに行つてあげようかな？

「やあ、ドロ。元気……。」

「なわけないだろうがクライアント様よオ！ あく、こちとら8時間睡眠必須なのに期限ギリギリの仕事押し付けやがって……。しかもプラスで残業だア？」

あ、これガチでキレてる奴だ。普段の関西弁のお姉ちゃんキャラが吹き飛んで、極道さんとかヤクザさんみたいな性格になっちゃってる……。目の隈的に多分徹夜させちゃったんだよね……。あく、顔が怖い。うん。後日菓子折りもって土下座しに行こ……。

「そ、それで注文の品は？」

「はア？ 全部完璧に仕上げて来てるに決まってるんだろうが！ 姉ちゃんこそちゃんと耳揃えて払ってくれるんだらうなア？」

「うんうん、払う。払うからね？ とりあえずお疲れみたいだしほらそこ座って、お目目かくして。飴ちゃんでもなめて……。」

もうどこの借金取りだよお……、『あ、ウチな？ 寝不足だったたり、徹夜明けになると滅茶苦茶性格悪くなるねん。ストレスで色々おかしくなるーって奴。あの状態になったら家族も近寄らんから色々注意してな。多分コレの納品ときそうなりそうやから』って言ってたけどレベルが！ レベルがおかしいよ！ ほら周り見て！ 演奏家の人たち『あ、そつちの人だ……。』って顔してるし、ミリアムちゃん涙目だからね!!!

と、とりあえずこの終わった空気をなんとかしないと……。

「スウゥ。はい、今回はお集まりいただきありがとうございます。皆さん把握していらっしやるとは思いますが、本日はこの場で”新作”の方を見て頂いて、その後仕事の方を受けていただけかかの判断をするとのことで大丈夫ですか？ 大丈夫そうですね。ではちよつと製作者の方の機嫌が悪いみたいです……。さっそくやっていきましようか。」

65：その後教会に緊急搬送されました

「え、じゃあ一つずつ説明していきます。数はありますし、後で触って頂く時間も取りますのでお静かに。」

ちよつとビクトリアのキャラから外れるけど、ドロちゃんがあんな感じなので……、真面目さんで行きますね？

ドロが持ってきてくれた大量の黒い箱の中から、『バイオリン』と書かれたものを手に取り、軽く触ってみる。……うん、量産するから質が落ちるって言うってたけど、むしろ試作品の時よりもよくできてるかもしれない。木材を加工して作られている、っていう点は前世と同じだけど、そもそも私職人じゃないからどんな木がいいとか、どうやって加工するとかは全く知らなかった。いや種類とか木材の乾燥が必要ってのは知ってるけどね？ どの期間やるのとかその判別方法とか全然わかんないのよねえ。

でもま、この世界は前世には無かった技術や素材が存在している。魔化や魔物素材だね。それで無理やり形と音を整えたソレは、ちよつと昔嗜んだ程度の私じゃ違和感のないレベルにまで仕上がっている。左手で軽く持ちながら、顎と肩で固定する。そう言えばこの顎当ても開発が19世紀ぐらいだったけ？ 多分1000年以上ブレイクスルーしちゃったかも、と思ったがそもそも存在してない楽器だった。歴史の果てに到達した完成品を持ち込んだ形、これこそ転生者、って感じだよねえ。

そんなことを考えながら。コレに興味津々な演奏家の方々の視線を受け、軽く弾いてみる。

(あ、やば。10年近く弾いてなかったせいかな運指が……。)

経験者、もしくは前世教わっていた先生に聞かれば『もしかして

体調悪い？ 帰るか？』と言われそうな出来だったが、とりあえず記憶のままに弾いてみる。ま、まあ？ この世界じゃまだ存在しない曲ですし？ 私が間違えてもそれを指摘できる人は誰もいませんから？ だ、大丈夫デースー！ 多分！ いやまあ生み出した前世の先人の皆様には申し訳が立たんのですが。

1分もない程度だが、軽く弾き終わった後に、礼をする。この世界、特にこの国じゃ聞いたことの無いタイプの音だし、結構インパクトあつたんじゃない？ みんなの顔見るとわかるよ。

「……………おお。」

「っと、はい。お耳汚し失礼しました。こんな風にこちらの方では目新しいものを色々持ち込んでいまして、今から一つずつ目の前で演奏させて頂こうかと。それで気になった物を皆さんにも触って頂いて、という形になります。ま、まあ実はバイオリン。コレ以外はマジで触ったことが有る程度なのでよりひどくなるのですが…………。」

実際、そうなのだ。昔取った杵柄というか、バイオリンとピアノ程度ならまだ何とかなるんだけどそれ以外の木管とか金管系はマジでなあ…………。音出すぐらいならまだ出来るとは思うんだけどねえ。ドロと試作品作ってる時に記憶を頼りに色々やってみただけど、あんま形にはならなかったし…………。あ、でも打楽器は出来るよ。叩くだけだし！ まあこんなこと言ったら絶対本職から怒られるけどな！

っと、そろそろ色々説明した方がいいよね。この楽器たちのこと。

私の目標、今回の劇を完璧に成功させるための一要素として、音楽があつた。演者たちの動きや感情を音で補助し、世界に声以外の新しい色を加える。劇伴っていうのかな？ それをしつかりやりたかつたのよ。この世界じゃ劇と言ったら野外ステージ、みたいな感覚だったみたいで音が広がるせいかそういうのあんまりなかったみたいなのよねえ。どっちかというと役者の声量で押し切ったり、魔法で

ちよつとした爆発音とか出したり、そんな感じ。

それで、やるならばやっぱ思いつく限りのことをやってやろうという考えから、音楽も頑張ってみよう！ という話になったのだ。

けど、やろうとする前に躓いてしまう。そもそも楽器がなかったんですよね。ま、一応簡単な奴はあるんですよ。打楽器系とか、簡単なラッパみたいなの。後はパイプオルガンの初期型みたいな奴？ 水圧式だっけ？ まあクソデカイし教会ぐらいしか持ってないような奴しかなかったのよ。これで私が求めてるBGMとか、SEみたいなのを作れるかというところ……。まあできなくはないけど音が単調になっちゃいます。

だつたらもう1から作ればいいじゃない！

ということでもドロと一緒に色々してたんだよねえ。金積んで、覚えている限りの情報紙に書いて、土下座して。まあ大変だった。依頼自体は『別に金払ってくれるんやったら受けるけど……。ウチ鍛冶師やで？』と言われたが受けてくれた。が、問題は制作だった。いくら過去に触った経験があるとは言え、それを詳細に覚えているわけではない。流石にメインでやっていたバイオリンぐらいなら構造とかも覚えていたので比較的早くできたのだが、管楽器が地獄だった。

空気の振動と、管体の穴をふさぐことで音を変えろという簡単な構造は解る。だがソレを実際に形にしてみると言われてもまあ無理だ。リコーダーレベルならまだ何とか、いや比較的簡単に辿り着けたかもしれないがトランペットとかホルンとか不可能だろ。というかクラリネットとかのあの配管何？

仕事がない日はほぼドロのところに通いつめ、会うたびに顔色が悪くなつていく彼女。私が『なんか、なんかちやうんすよ……。音がちやうんす。』とか言い過ぎた結果ブチギレたドロが若干発狂しながら剣とか槍振り回して暴れまわっちゃったり、比較的早く完成したティンパニに頭から突っ込んでぶち壊しちゃったり、なんか魔物素材と魔化が上手く嵌ったのか管楽器の中で一番早くできたホルンに私が悪戦苦闘したりと色々ございました。

『……………どう？ いけてる？』

『……………うん、昔聞いた音と同じ。音階もちゃんと分かれてる、おかしくなってると思う。』

『じゃ、じゃあ！ おしまい？ おしまいか!?!』

『うん、お疲れさまでした。』

かなりの長期間、具体的には劇を始めると決まった時から今日からほんの数週間前まで。ずっと同じことをし続けた私たちの間には謎の絆が出来上がっていて、若干涙ぐみながらお互いに抱きあつて完成を祝ったものだ。だけど……………。

『あ、ちなみに数週間後に顔合わせがあるみたいだからその日まで量産お願いね？』

『……………ハ？』

いや、あの時のガチで『何言ってるんだコイツ』という顔は忘れられませんねえ。……………、いやほんとにごめんなさい。

『ウチもな、職人やねん。期日内に自分が出来る最高の作品を届けるのがプライドやんよ。けどなあ？ 明らかにコレおかしいよなあ！ オーケストラ言うんか!?! その全員分の楽器を一月もせずになれやと?! ふざけてんのかこの【自主規制】!!!』

『え、できないの？ ドロが?..』

『……………やっつてやるわこんちくしょうツ！ ウチにできないことなんかねえわ!..』

とまあ最初は断られそうになったのだが、『え、無理なん？ ドロが? あのドロが?』みたいな目で訴えたら受け入れてくださって……………。最終的に色々無理とか徹夜とかさせてしまったらしく、今のようにならざるを殺してきそうなヤバい目で見つめられている現状に至る。あ、あの。絶対埋め合わせはするんで……………。ほ、ほら！ ドロが

好きなブドウの氷菓子たくさん用意するから！ ファンの人の領地で採りたいブドウがね、あるのよ。それで魔力の続く限りアイス作るからさ……。

（とまあそんなわけで、ドロに強行軍してもらって数をそろえたわけだけど……。やっぱ職人気質なのかどれも試作品の時と比べると質が向上してる。ヤバいなあ。）

とまあそんなことを考えているうちに、全ての楽器の演奏会が終わる。まああんまり前世でも触ってない様な楽器は簡単にしか紹介していないけど、演奏家の人たちの興味は十二分に引けたようだ。

「では、興味を持っていただけたようですので、少し契約の話を。」

オーナーからお手紙で経緯の方は聞いていたのだが、ここにいる演奏家の方々は劇の練習期間&公開期間含めて比較的スケジュールが空いている人で、オーナーの伝手やヘンリエツタ様のお声で何とかそのスケジュールを真っ白に出来るであろう人たち。まあ彼らのクライアント様に何らかの伝手がある人たちを呼んだわけだね。

んで、契約としては『ほら、新しい楽器あるやろ？ これプレゼントして練習期間もあげるから一端の演奏家になって劇の音楽担当してくれへん？ ああ、もちろん心配しなくてええで。なんせ見たこともない楽器やからな、弾けなくて当然やから。無理そうなら無理っていつてなく。』と少し彼ら彼女らのプライドを刺激するように。

勿論お金は出すよ？ 途中で抜ける場合はさすがに楽器の方は返してもらおうけど従事してくれた日数分のお給金はちゃんと出す。それに最後までやり抜いてくれたお礼としてサービスもしちゃうし、報酬も最後までやってくれたお礼としてサービスもしちゃう。彼らのプライドを刺激する以外はちゃんとした契約だ。

「……………とりあえずは皆さん、お受けいただけるということでよさ

そうですね。では早速、練習会と参りましょうか。」



「ふう、とりあえず上手く行ってよかったよ。」

「次い。」

「お納めしますだ……。ミリアムちゃん悪いね、色々付き合わせちゃって。あ、そのブドウ取ってくれる。」

「はい。……あ、あの？ お二人はどういうご関係で？」

「クライアントと「次い。」あ、はい今すぐー！」

はい、とりあえず簡単な説明と各楽器の簡単な演奏方法ガイドの配布とか演奏とかを終わらせて解散した後。ドロちゃん、いやドロ様に現在ご奉仕中でございます。うん、マジで機嫌最悪だったのでこうするしかねえのです。今後も色々無茶なことお願いするだろうし……。お手製ブドウアイスでご機嫌直してくれるのなら全力でやりますぜ。ぐへへ。

あ、一応関係性は私がクライアントで、ドロが受注側だけこの現状見たら確かに傅く側と傅かれる側だね。もちろんドロの方が上。だって今片手でドロのために団扇で風起こしながら、もう片方の手でルーン刻んで疑似ブドウアイスとかシャーベット量産してるんだもの。それでドロ様が『次い。』って言った瞬間に『加速』で器に新しいものを追加してる。

「いや、色々無理してもらってるからさ。これぐらいしないと申し訳ないから。」

「ほんまやで。おチビは大きくなったらこんな大人にならんようにな。」

「あ、元戻った。」

「というかミリアムちゃんこんなことに付き合わせてごめんね？」

ビクトリアのキャラ崩れてるし、あんまり参考にならなかったでしょう？ ま、演奏してる”ビクトリア”は本邦初公開だから見てて物珍しきはあつたかもしれないけど。

役作りにはあんまり繋がらなさそうだし、今もぶどう運びみたいな雑用やらせちゃってるし。私に出来る事とかあつたら何でも言ってるね？ 国家転覆以外なら……、と言いつうになつたけどヘンリ様が暴走する可能性もあるから言わないでおこう。あの人ならマジでやりかねない。

「あ、いえ。大丈夫です。ママのお迎えまで時間ありますし、何もしてないと色々悪いので……。」

「はあく、ええ子やなあおチビ。横の大人に爪の垢を煎じて飲ませたいわ。」

「いや私も色々手伝つたでしょう。魔物素材とか取ってきたの誰よ？ 丸一日走りまくって取りに行つたんだけど？」

「じゃあこっちの気が狂いそうになるまでリメイク出したのは誰やア？」

ぐぬ。それを言われると困る。というかドロもドロで『中途半端なもんは絶対作らんからな！』って言うし、私が妥協しようとしたらキレて『こんなものゴミやア！』とか言いながらクソデカハンマーでぶん殴つて破壊してたじゃんか。多分どつちも悪いよ、コレは。いや確かに鍛冶師に楽器作ってもらうことの異常さは理解してますけどね？ 分野外のことやってもらつたわけですし。

「まあええ。長期のお休み頂かんといけんぐらいには体、酷使しても

うたけどな？ あの人の顔。未知の世界に飛び出そうとしてる演奏家さんたちの顔見てたらやり切った甲斐あつたと思うわ。……でもなビクトリア、アレ形になるんか？」

「……どうだろうねえ？」

そこところは、やってみないと解らないのだ。一応楽譜とか、その読み方とか現代のモノにはなってしまうんだけど、今日来てくれた人たちには配布している。今回の劇で扱う曲の楽譜とかもね？ でも私は作曲家ではないし、音楽に触れていたのも学生時代の話だ。そうそう完璧なものが出来るわけではない。なのである程度の形を作って、その後の応用は彼らプロに任せる。という方式を取らざるを得ない。

つまり公開まで音楽が完成するか未知数であり、最悪ナシの方がいい、ということになる可能性も存在している。一応役者としての練習の時間以外はこっちの方に出来るだけ時間を割くつもりではあるが……、かなり不安。初めての楽器を練習しながら作曲、まあ曲の肉付け作業みたいなことをやっていく必要があるわけだ。かなり厳しいスケジュールになるだろう。

「やるだけやってみて、無理そうならその時考えるよ。」

「そーかい。ま、ウチは誰かさんのおかげで当分フリーやからな、話位なら聞いてやるで。」

「ありがとう。」

ま、無理は無理でもいいのだ。別に私の劇の公開に間に合わなくてもいい。現在ヘンリ様がお金を出して建設中の劇場だが、アレ結構魔法的な機構が組み込まれてまして。演奏家の方々が詰める演奏席の音楽が会場のどこからでも聞こえるように、客席の一部がスピーカーみたいなになってるのだ。なんか軍事用魔道具をいい感じに転用した結果マイクとスピーカーみたいなのがこの世界でも出来るみたい。

なので私の劇に間に合わなくても、今後あの劇場に演奏家の人たち

が必要になるのは確定している。”次”に繋がられる、ってことだ。
ちなみにマイクとスピーカーだけど、大きさに両方とも設置型じゃないとダメみたいなので現代の首元にマイク付けてく、とかはできないうまいだ。残念。

「ふい、これ以上食べたなら夕飯入らんやろうし。こちそうさん。手間かけたな。」

「先に迷惑かけたのはこっちだからね。帳消しにしてくればそれで。」

「なら、それで。……ああ、それとさつきからずっと気になってたんやけど、あのドアの奥。廊下で蠢いてるオレンジ色のなんや？ 魔物か？」

そう言われてミリアムちゃんと一緒に部屋の外を見ると、明らかにオレンジ色のスライム。ゲル状のものが爆裂したような跡が残っている。まだ屋内であるためマシだが、ここから見える範囲すべての壁にオレンジ色のシミが出来上がっている。

「……え、いつから？」

「お前さんがばいおりん？ やっけ？ それを演奏し始めた時にガラツと開いて、そしたら急になんかあなつとつた。ここ外の音聞こえなかったし、ウチもイライラしとつたから無視したけど……、もしかしてヤバい奴か？ 他の演奏家の奴らも視界に入れた後存在しないものとして扱つとつたし。」

「それ多分理解できなくて把握するのをあきらめた奴じゃない？ ……つて！」

それ爆裂から結構時間たつてる奴じゃないですかヤダー！ え、それからずっとそのまま!? え、ずっとあの状態であなつてたの！ というか驚いてる場合じゃねえ！ 塵取りと箒！ ミリアムちゃんすぐさま回収して元に戻すよ！

「はい！」

二人で目を見交わし、すぐに行動開始。10m近く飛び散っていたし、なんか乾燥してたから集めた物体にルーンで生成した水をぶっかけながらの再生作業。イマイチ要領を得ないドロにも手伝ってもらって何とか破片を全て回収する。その瞬間あの時と同じように光を発しながら人の形を取り戻していき、ゆつくりとその場に横たわったエンリットちゃんが作られていく。

「……………あ、れ。」

「大丈夫かい？ エンリット。」

「大丈夫ですか総支配人さま？」

先ほどまで気絶し破片状態だった彼女。その彼女が目覚めた瞬間、眼に入ってくるのは自分の最推しと、その子役として徐々に”ビクトリア”に近づいている子。つまり大きいビクトリアと小さいビクトリアが視界いっぱい広がっている状態。

「ぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱんぱん。」

「ぱんぱん。」

「ぐん褒美でしゅつつつつつつつつ」

!!!!!!!!!!!!!!

まあ爆散するよね、うん。

66：お真面目に

「へえ、この子がですか。」

「は、はじめまして！・み、ミリアムといいます。」

移動中の馬車の中、初めて私の弟子と、私を演じる彼女が顔を合わせる。ミリアムちゃんは緊張してるっぽいけど、アルは興味津々って感じ。まあ確かに自分の師匠の子供時代を演じる人、ってなると気になるよねえ。それにアルよりもいくつか下の子だし。

今日はエンリットちゃん、あの爆発する演出家さんね？ あの子の商会に行つて、色々情報共有をするのよ。役者さんたちの顔合わせから数週間たって、そこからほぼ毎日練習してるから、その共有ね？ エンリットちゃんも演出として役者だけじゃなく小道具だったり劇場の方を回つて色々確認しないといけない、だからずっと私たちに掛かりつきりってわけにはいかないのよ。そのため定期的に会って共有しとかないと、ってわけね？

それに私も役者以外にも音楽の方もやってるわけだからさ。そっちの方も色々話合わせておかないと、って感じ。

(そんな感じで彼女に会いに行くわけだけど……、ちようどアルの方もお休みだったからね。)

私のプライベートの時間じゃなくて、彼女のスケジュールが空いてるとき以外は基本ミリアムちゃんは私の後ろについてくるようになった。彼女も彼女でプライベートがあるし、練習する時間もあるみたいなんだけど、基本私が役者として動いてる時はずっと付いてきてくれてるんだよね、この子。ほんとはただ見てるだけでもいいはずなんだけど、本人の性格のせいかなにかと手伝ってくれてるし……。

(だから結構)飯とか一緒に行くんだよね、私のおごりでお礼。って形で。)

アルはアルで私並みに強くなる目標の元、ウイウイ先生のところで頑張っているみたい。毎晩今日は何したのかとか教えてくれるし、ウイウイ先生が彼女に持たせてくれた講評から彼女の訓練の様子がちよつとずつ見えてくる。マリーナちゃんの講評も貰ってはいるんだけど、彼女も彼女でヘンリ様に領主の勉強を叩き込まれてるらしくて忙しそうだったからねえ。今日はアルだけ、つてことで。

「にしてもわざわざ髪染めるってすごいですよね。確かに魔道具で簡単に出来るとはいえ……。」

「あ、あの。遠いところからお話を見る人もいるので……。それで顔とかが見えなくて誰が喋ってるのか解らないこととか結構あるみたいなんです。それでわかりやすいように皆さん染めてます……。わ、私の場合はちよつと、役作りのために……。」

「へー、そんな感じなんですねえ。」

そんな感じに感心するアル。ちなみにそれ、師匠も知りませんでした。二人の会話を微笑ましく見ている裏でひそかに私も感心。いや勉強になりました。台本のキャラ設定見た時に結構髪色とか服装とか派手なの多いなあと思ってたけどそう言う理由だったのね。確かに遠くから見ると何やってるか解らんとか結構ありそう。たぶん現代でもそういうの色々気にしてたんだろうなあ。観客として見た時は全然気が付かなかつたや。

「じゃ、師匠と同じですね。」

「だねー。ま、私は大分戻してないからこの色が地毛みたいな感覚になってるんだけど。」

「え……？　び、ビクトリアさんも染めてるんですか？」

うんうん、そうだよ。裏の闘技場にいたころは薄汚い金髪だったんだけど、表に出るようになってからは今の濃い青にしたのよね。あんま自分の髪色好きじゃなかったし、ボロボロだったからねえ。目立つた方が人気出るかなあ、と思って目に付いたこの色にしたのよ。……つと、この子相手にあんまりそういう話しちゃダメか。色々ぼかして染めたことだけ教えとこう。知らなくていい世界に首を突っ込む必要はないからねえ。

「そういえば言っただけじゃなかったっけ？ 私も実は染めてるのよ。だからミアムちゃんと同じってワケ。一回戻そうかなあ、って思ったこともあったんだけどこの色がもう自分の色になっちゃってね。多分ずっとこのままじゃないかな？」

「へー。」

実際こっちの染色って魔物素材のせいかなマジで色落ちないんだよね。感覚で言うとゲームのキラクリみたいな感じで、一回髪色変えれば落とさない限りはずっと同じ色。色々染めまくっても髪とか頭皮へのダメージが少ないみたいだし、結構お着替え感覚で染められるからそういうの好きな人からすれば天国なんじゃないかな？ ま、地毛で結構派手な人もたくさんいるんだけど。

「そーいやアルも昔染めるか染めないかうんうん唸ってたよね。」

「あ、ありましたねえ。師匠と同じ色がいいのか、それとも他の色がいいのか。結局必要が無くなったのでなあなあになりましたけど……、ちよつと違う自分とかも興味ありますし、やってみようかな？」

「いいんじゃない？ マリーナも誘って色々。案外お気に入りの方が見つかるかもだし。」

あ、マジでやるんだったら呼んでね？ 仕事休むから(迫真) 休むなって？ いやそんなイベント見逃せるわけないでしょうが。こつちカメラないから、そういうの全然保存できないんだよ！ 全部手書

きの絵しかないんだよ！ だったらもうこの目に焼き付けるしかないじゃないか！ ……え、だったらやらない？ そんなにやあ。

「(ミリアムちゃん、ウチの師匠迷惑かけてない？ あの人懐に入れた人に無茶苦茶甘くなるけど、たまにその人に対してかまってちゃんになることがあるから……。変なことに巻き込まれてない?)」

「(え、そうなんですか？ 特にそういうのはなかったですが……。でも確かに最初あったころに比べると雰囲気は柔らかくなった気はしてました。あとすみません。その“かまってちゃん”なところ教えただけです(？)」

「ん？ どしたの二人とも。」

「な、なんでもないです！」

? ならいいんだけど。



「ぬ、ぬゆわああああああああ!!!」

「……なんかあの箱から絶叫と爆発音が聞こえてくるんですけど大丈夫なんですか？ とうかナニアレ。」

「演出家の人。」

「ああ、この前言ってた……。」

馬車の中での何でもない時間の後、エンリットちゃんがやってる商會に到着した私たちは応接室のようなところに通された。うちのオーナーが持つてる奴と同じくらいの規模感で、調度品も似たような感じ。違うところと言えば用途不明の頑丈な鉄の箱が設置されているぐらい。というかこれただの鉄じゃないな。魔化されてるし、通常の奴よりも硬い奴。

私とミリアムちゃんは薄々というか、ああ、あれね？ という感じだった。アルは彼女に会ったことはない。そもそも今日だつてアルがお休みだったから気分転換にでもこつちについてくる？ っで感じだったし。接点ないのよね。『これなんですか？』 っで聞かれたけど多分見ないと理解というか納得できないだろうし、ちよつと待つてもらった結果がこれだ。

部屋に彼女がやって来たかと思うと、すぐにエンリットちゃんの体が発光と共に膨らみ始めるが、後ろについてきていた使用人さん。この前私の案内してくれた人ね？ その人が素早く箱の中にボツシュート。内部で盛大な爆散が行われているってわけだ。素早く箱の扉を開け、エンリットちゃんのお腰を片手で抱えながら、踏み込み、その勢いでシュート。そしてエンリットの背が箱の壁にぶち当たる前に扉を叩き閉める。

扉が閉まったことで鉄同士がぶつかる鈍い音と、エンリットちゃんの人体が内側から破裂する音がほぼ同時。いや、中では何が起きてるんでしょうねえ？ 多分自分の家でもある商會に私とミリアムちゃんがいることに耐えられなかった、という理由は解るけど中で何が起きてるかはさっぱりだ(すつとぼけ)。……そういえばアルも彼女の”尊み”に分類されるのかな？

時間にして十数秒、初めて会った時に比べると大分再生時間が早くなった彼女が箱の中から申し訳なさそうな顔と共に出てくる。

「お、お待たせいたしました。」

「大丈夫だよ、エンリット。理解してるとも。」

「ひニユツ！ ツ！ ツ！ ……た、多分今後もまた箱に入ることと

かあると思いますんで、ご容赦のほどを。」

おっと、それもダメか。軽く微笑みながら頷きを返す。いや、でも耐えられるようになってきたね。ちよつとは慣れた？ 最初のころの打ち合わせとか箱の中からずつと出られなかつたし。それに比べるところとちやんと対面でお話できるようになってきている。成長してるねえ。

「あ、ありがたき幸せえええ！ ……でも役者の皆様の前じややつぱり体を維持するのが難しくて、いつつご迷惑かけてます。ほんと申し訳ないい……。」

「そうかい？ 結構好評だよ。ねえミリアム？」

「あ、はい。解りやすく、とてもいいです！」

あ、また爆発しそうになって使用人ちゃんに叩き込まれた。ナイス、使用人ちゃん。というか君結構速いね？ もしかして『加速』持ち？ 等速でギリギリ目で追えるぐらいの早業で自分の主人叩き込んでたけど……。あ、スキルも魔法も無理なの。いや逆にすごいな。

エンリットちゃんの弱点というか、習性として自分が”尊い”と思うものを摂取しすぎると爆散するというものがある。彼女の守備範囲はかなり広く、今回出演する役者さんすべてが”そう”らしい。性別も年齢層も結構離れてるのにすごいねえ。オタクの鑑かも。まあそのため彼女が演出家として役者たちの練習を見に来たとしてもその時間内に彼女からの言葉を貰うのはほぼ不可能なわけだ。毎秒はじけ飛んでるからね。

でも、すつごくわかりやすい指標になるんだよね。

邪魔にならないように今日みたいに鉄の箱、ロッカーみたいなところに入っつとこつちの事を見てくれてるんだけど、良い演技になるほど爆発音が大きく、悪いほど無音になる。ちよつとうるさいのを無視すればリアルタイムで感想を届けてくれるわけだから色々やりやすいのだ。

他の役者さんにも聞いたけど、『前の現場みたいになっちゃうと言語化せずに雰囲気伝えてくる演出よりもずっと解り易くていい』とか、『無言で何も言わずつと変な顔してる支配人さんよりはやりやすくていいつす』みたいな声を頂いている。だからみんな誰が一番うるさい音を練習場に響き渡らせることが出来るかずっと競争してる感じなんだよね。

「それに、例のバイオリンの時。あの時もわざわざ講評を届けに来てくれたから、あぁなつてしまったんでしょう？ アレもアレで解り易いし、改善点が見えてくるからやりがいにもなる。そこに不安はないよ。」

「あ、あ、あ、ありがたき幸せ！」

エンリットちゃん自体筆が早いところがあって、練習終わりには必ず彼女からの講評を書面で頂ける。人によっては結構な厚みの物を。私も初回は分厚いの頂いたんだけど、内容がしっかりしてるし納得できるものばかり。それに改善案もいくつか出してきてくれるから色々繋げやすいんだよねえ。

「確かに君の声を練習中に聞けないのは残念だけど、みんなすごく助かっている。改めて、ありがとうエンリット。」

「ひょッー！」

はい、また箱の中で爆発音。あゝ、アル。解ってるから言わなくていいよ、そんな目を向けるのもやめて、うん。ちよつと彼女の反応が面白くて遊んじやつてるのは認めるから、うん。ごめんって！ だから机の下で足踏むのはやめい！

「と、とお。ちよつと反応が面白くてからかい過ぎてしまったね、ごめん。じゃあ復帰次第お仕事の話と行こうか。……ああ、アルもミリアムちゃんも暇だろうから自由にしていいよ。ほら私のお茶菓子も

食べていいから。」

そう二人に言った後、エンリットちゃんとお仕事の話の話を詰めていく。流石にこういったお話になると爆発する回数はぐっと減る。まあたまに私の顔を直視しすぎて使用人さんに箱へと超エキサイティング☆されることもあるが、まあたまにだ。進行に影響はない。むしろ結構喋りっぱなしだからいい休憩の時間になる。

……ねえ使用人さんや、エンリットちゃん爆裂しまくってるけど彼女休憩とかいらんの？ え、”尊み”で無限に動き続ける化け物だから心配はいらない？ むしろ永遠に尊みを形にしようとして動き続けるから無理やり休ませようとする使用人たちと毎晩戦争になってる？

ああ、うん。大変だね。なんか手伝えることあったら言つてよね。絵本もって寝る前の読み聞かせしに行くとかぐらいならやるからお、出てきた。

「し、失礼いたしました。……では劇場のセットの方はこのように進めさせていただけます。ちよつと予算超えですけど、ヘンリエツタ様がお出ししてくださることなので、最高を目指すように指示しておきますね。それで、最後に音楽の方ですが……、進捗はどうでしょう？」

「想定以上に順調、だけどスケジュール的に厳しいのは変わらない、つてところかな。」

なんかね？ 『見ず知らずの楽器と言えど、本職じゃない奴が自分より上手いのは気に入らない』とかで私が煽りに煽ったこともあり爆速で演奏方法やらなんやらを覚えちゃった人がいました。その人に周りも触発されて想定以上に全員の習熟度は上がってるんだけど……、まだお金取れるレベルじゃないのよね。

これまでは個人や、同じ楽器を扱う人たちの間で切磋琢磨しながら習熟してただけど、みんなのレベルが上がったことでようやく全体での合わせが出来るようになった。この世界には無かった、私の持ち

込んだ現代の楽譜の読み方とかも皆覚えてくれたし、あとは課題曲に合わせて練習く、って感じなんだけど……。肝心の曲がね？

（転生してからかなり時間経っているこの身でバイオリン弾けた、っただけで奇跡に近いのに、曲なんか詳細に覚えてるわけないじゃん。）

前にも言ったが、私が持ち込んだ劇中で使う曲はかなり歯抜けの状態だ。前世で音楽を本業でしていたわけでもないため、覚えているのはほんの一部分だけのものばかり、なのでその穴をみんな埋めながら新しいのを作曲する必要があるんだけど……。楽器自体が生まれたてホヤホヤなこともあり、演奏家の人たちの知識もまだ途上。かなり難航しているのよね。

「本職なだけあってセンスのある人ばかり、新しく曲を作って持ってきてくれる人もいるし、私の頼りない記憶から作品としての形を取り戻してくれた人もいる。……でもまだ研磨する必要があるものばかりだし、そもそも曲が公演時間の三時間に足りるかどうか、そしてそれまでに習熟できるかどうか、ってところが未知数だね。」

「なるほど……。では初期の想定通り”ナシ”の可能性も考えて準備を詰めていきます。」

「お願い。」

間に合わせるつもりではあるけど、無理な場合も考えておかないといけない。作り手としては最上を求めたいけど、全体を取り仕切る支配人としてはそういうのも考えないといけないのは大変そうだね。でも、そこら辺の兼ね合いが出来るからヘンリ様が彼女を押し込んだろうし。……ま、私はやることを全力でやるだけだね。

「了解しました……。はい。とりあえず今のところ共有すべき点はこれで全部ですね。来週には衣装合わせもしていきますし……。全体を見れば想像以上に順調です。完成が見えてきましたし、このまま頑

張っていきましょー！
「だね。」

67：それでは、始まります。

息を吸って、軽く吐く。この仕事というか、こつちに來てから人に見られる前提のお仕事ばつかしてきてるから慣れてるはずなんだけど、やっぱり緊張はしてしまう。昔みたいに失敗したら相手に殺されるっていう環境でもないし、無礼働いたら打ち首っていう環境でもない。それを考えれば緊張なんかしないはずだし、しかも今は私だけじゃなくチームでのお仕事。

たとえば自分がミスろうとも他の誰かがカバーしてくれるだろうし、こつちも誰かがミスればそれをカバーする。アルとかマリーナとか、そんな親しい人たちと比べると確かに一緒に過ごした時間は短いけど、彼女たちとはまた違ったタイプの信頼がある。けどやっぱり緊張するんだよねえ……。心臓バクバクですよ。

「ある意味、初めてだったのかも。こんな大人数のチームで何かやるってのは。」

学生の時みたいに自分たちが楽しければそれでよかった文化祭のノリとは違い、お金をもらって全員が仕事として熱量を持ったまま前に進む。今日までやってきたのはそういうものだ。そもそも初めてが一杯で色々大変だったけど……。その分楽しかった。アレだね、掛けた苦勞の分本番が緊張する状態。それが今の私だ。

「ヤバいぐらいに緊張してますよ、師匠。心配になるくらい。」

「ええ、観客としてお呼ばれましたのにこつちまで心臓の動悸が。」

「……それ緊張じゃなくて興奮の方じゃない？ お前師匠のファンだ

し。」

「あはー、二人はいつも通りだね。……あとそんなにヤバイ顔してた、私？」

「(コクコク)」

劇の開演前にわざわざ控室の方に来てくれたアルとマリーナ。アルは毎日顔を合わせてたけど、マリーナの方はちよつと久しぶりだ、一段と大きくなったような気がする。体の大きさがなくなって存在の大きさね？ 二人の距離も前よりもずつと近いように感じられる。軽口を言い合える二人の仲を眺めていると、少し緊張も薄れてきた。

(ほんと、来てくれてありがたいよね。)

ああ、ごめんね。そういや説明してなかった。なんと今日は私の劇の公開初日。新しくできた劇場、正式名称『帝国マニスカラ大劇場』のオープン記念公演って奴だ。前は「トルマリンスプラッシュ！」ことエンリットちゃん爆発する話をしてたと思うんだけど結構飛んだでしょ？ まあ練習風景とか同じことずつと繰り返してるだけだし、面白くないもんね。練習の様子見るなら本編の方見てよ！ ってことだ。

ちなみに劇場の名前、ヘンリエッタ様が最後まで『やだー！ ビクトリアにするのぉ！』してくれなきゃ謁見の間でみつともなく泣き叫ぶウ！』って言いながら抵抗して、ほんとに実行したらしいんだけど……。結局彼女の家名から名前が取られてこの名前になったらしい。ヘンリエッタ様が大半のお金を出してるけど、残りの建設費や土地代とかは帝国が出してる。流石に一市民、それも奴隷上りの名を付けられるほどではなかったようだ。

(ま、ただでは転ばなかったらしいけど。)

詳しくは聞いていないというか色々怖くて聞けなかったんだけど、

ヘンリ様側が譲歩した、って形に落ち着いたらしくて譲ってあげた代わりはその分国からいろんなものをぶんどつたらしい。いやその時の笑みを浮かべた顔とかさ……、うん。めっちゃ怖かった。

それにちよつとその話が出るまでね？ 私バイオリン演奏をヘンリ様よりも早く見てしまった上にソレで爆散して迷惑をかけた件でエンリットちゃんが物理的にスプラッシュ、それを横目で見ながら私が、エンリットに『アレだったら寝る前の読み聞かせしようか？』と言ったことがどこから漏れたせいで彼女からお説教というか、同じことしろつていう強要というか。

うん、色々ありました。

「つと、色々脱線してたら緊張も解れてきた。二人とも。もうそろそろ開演だろうし、席の方に戻っちゃいな。ヘンリ様のボックス席の方にお邪魔するんでしょう？ あそこ一番いいとこだから楽しめると思うよ。」

「あ、了解です。楽しんできますね！ あ、あと師匠。頑張ってくださいー！」

「このマリーナ、全力で応援させていただきますッ！ ヘンリ様からこの”さいりうむ”なるものの扱い方も教わってきましたので！」
「うんうん、ありがとね。あとその棒はNGね？ 座つてお行儀よくお願い。」

「まったく何教えてるんだあのお婆様は。というかなんでちよつと前までは存在しなかったはずのソレがあるんですか？ アレか？ 役者の次は歌って踊れて戦えて虐殺もできる帝国のアイドルをやれつてコト？ 勘弁してくださいな……。そもアイドル張れる様な年じゃないつて。そういうのはアルとかマリーナにパスパス。」

「ま、気を取り直していきましょう。昔と比べたら観客もだいぶ少ないんだしね。闘技場、コロッセオの方は剣神祭の時に5万人近く来てたつて言うけど、今日は2万人弱だ。満席ギリギリらしいけど、それだけ集まってもらつてもまだあの時よりはマシ。そう考えれば大

分気も落ち着く……、いやそれにしても多いな。通常席でも結構な値段するぞ？

「さ、楽しもうか。」

自分が一番楽しむからこそ、お客さんにも楽しんでもらえる。高い金払ってもらってるからね？ お値段以上をお見せしますとも。



「うわ人多、どんだけいるのこれ。」

「さらに多いだけじゃないみたい。ほらあそこ、ヤバいお偉方がいる。」

「うわさすがお貴族様、服装からして色々格が違う。しかも絶対あそこクソ高い席なんだろうなあ、うらやましく！」

女性二人が、そんな話をしながら開演前の劇場を歩く。かなり大きく作られたここでは自分たちの予約した席まで移動するのに結構な時間を要する。しかも新しい劇場が出来て、しかもそれが一世を風靡した”ビクトリア”のものとなれば観客はもう大変。そのせいかほんの少し移動するだけでも大苦勞、かなりの渋滞が起きている。

「にしてもほんとに正規の値段で手に入ってよかったよねえ。」

「マジで転売屋許さんわ、そもそもの値段ですら厳しいってのに。」

そんな愚痴を吐きながら列の進行を待つ二人の職業は、冒険者。男女二人ずつの同じチームに所属していて、ともにビクトリアのサイン会や握手会と一緒に参加するぐらい仲が良い。今回の公演の話聞いたその日からずっと色々切り詰め、ようやくチケットを手に入れることが出来たのだ。そんな苦勞して手に入れたチケットを買い占めてさらにそれで儲けようとするなんて……、一部の貴族様方に発見されて文字通り駆逐されたいらしいが、それでも怒りは収まらない。

「ま、嫌なことは忘れて楽しみましょうよ。……と、この列だね。」

「一番安い席しか取れなかったけど……、全然見えない訳じゃなくてほんとよかった。」

夢のある冒険者と言えども、一般的な力量しか持たない彼女たちにとってには薄給で夢のないお仕事。命と金の釣り合いを取りながらの仕事となるため、どこかの『ここら辺の魔物そこまで強くないしそもそも遅い。生活するぐらいなら普通に稼げるなあ。』と言っていた加速ウーマンみたいなことは出来るわけがない。

何日もかけて準備して、時には情報のためにお金を使い、やっとの思いで実行に移してようやく金銭が入ってくる。失敗すれば一銭も入ってこないし、ケガをすればその分治療費が掛かるしもつと運が悪ければ死ぬ。さらに武器や防具の整備や更新も考えれば、こんな仕事やめて新しい職を探した方が絶対にいい。まあ他の職が見つからない上に、ある程度食べてけるからやめられないんだけどさ……。一山当てれば一生遊んで暮らせるっていう夢も確率は低いけどちやんと転がってるし。

そんな中で今日のために無理やりお金を貯めて、お貴族様も来る上にそもそも推しの前でヘタな格好はできないと色々奮発した彼女たち。文字通りすつからかんになってしまったが、何とか最低限のドレスマナー程度は整えることが出来た。お貴族様たちに比べると可愛いものだが場違いな装いではない。

こういった場は初めてだったため、ようやく一息つけるとたどり着

いた席に腰かける。野外ステージと言えど国や貴族が金を掛けて、しかも出来立てということもあり綺麗で石製の椅子だ。流石に敷き物の持参がベストであるが、所々破損している闘技場の椅子に比べれば何倍もいい。固いけど背もたれもあるから工夫すればくつろげそうだ。

「そういうええさ、あそこが一番ランクの高いボックス席。いくらくらいだっけ？ 見るからにお貴族な格好した人しかいないし、絶対ヤバそう。」

「確か入口でもらったパンフに書いてなかった？」

席を予約する際にどのあたりが見やすそうかななどを話し合った彼女だったが、いい席程ランクが高く値段も跳ね上がる。そのため薄給な自分達で何とかとれる一番下の席ならどこがいいかを話し合っていたため正確な値段は覚えていなかった。片方の指摘を受け、懐にしまった席の所有権を示すチケットと受付でもらった会場と演目のパンフレットをのぞき込む。

「えっと、私たちの席が500ツケ口で。一番高いので……、200万!？」

「ぼったくりでしょコレ!」

「まあお貴族様だしねえ。絞れるところから絞るんじゃない？ ほら逆に高くないと品位が低いとか。」

彼女たちの知らぬところだが、ジナによると大体1ツケ口1100円ほど。それを考えると一番安い普通席で5万、一番良いボックス席で2億である。そもそもボックス席は複数人で利用するものだし、値段相応に椅子の材質や一般席にはない他の観客の視線を遮る壁。そして空調関係の魔道具や内部の音を外に漏らさない防音系の魔道具も完備されている。

パンフによると公演後の演者による挨拶や、ドリンク・軽食など貴族向けのサービスなども整っているようだが、それでも額が額であ

る。付加価値って言っても限度があるでしょうに……。

「でもその一番いい席が全部埋まってるんだよねえ。見えるところ全部埋まってるじゃん。」

「……貴族ってほんとに”貴族”なんだろうなあ。」

まあ少し目を逸らしてみれば舞台の正面に当たる席にちらほらと市民たちに交じって観劇しようとする貴族もいるし、お高いボックス席もパンフをより細かく覗いてみればサービスの差や部屋の大きさも下げたもつと安価なプランや、個人で楽しむ貴族用のプランなども用意されている。一番上の例のプランを一月全て抑える、ビクトリアの劇を毎日見に来ようとしている人などそれこそあの御婦人ぐらい……。まあ小市民の彼女たちには関係のない話ではあるが。

【開演、5分前となりました。お急ぎのお客様は、焦らずゆつくりとご予約のお席まで。席でお待ちのお客様は、幕開けまでもうしばらくお待ちください。】

「え、なにこれ！」

「あ、見てよ椅子の下！ 魔道具になってる！」

アナウンスの声に驚く二人、教えてくれた彼女のいう通り下をのぞき込んでみれば確かに魔道具らしきものが稼働している。それにちよつと周りを見渡してみれば自分たちの席の合間合間に塔の様なモノがたっており、そこから音が出ている。彼女たちに魔力を判別する力はなかったが、それが魔道具であること。そしてかなりの高級品であることは理解できた。

「か、金かかってるう。え、そもそも席間違つてないよね!？」

「大丈夫なはず……。うん。多分これ全部の席についてる奴だわ。マ

ジでやばい。」

音を広範囲に伝える魔道具の存在はこの世界で結構有名である、戦場での情報伝達や比較的簡単に討伐できる魔物の素材が使われていることから存在自体は皆知っている。だが実物を見たことのある人間は大分少ない。そもそも高価であることや、魔道具の小型化・軽量化が現在不可能なため一度設置すると簡単に移動させることが出来ない。

そのため城の一部施設や、帝国が管理する広場、もしくは教会であつたりと一部の場所。それも人目に付かないような場所に置かれているため一生を実物を見たことがないまま終わるといふ人間も多いのだが……、それが頭おかしいのかと言えるレベルで乱立している。先ほど貴族御用達の席の値段に驚いていた彼女たちだったが、このレベルの施設を建てようと思えばそりやそれぐらい回収せねば成り立たないと納得する。逆に自分たち小市民が500ツケロで観劇できるのでおかしレベルだ。

「……と、とりあえず金の事気にしたら楽しめなさそうだし、気にしないでおこ？」

「賛成。」

考えていたことを全て放棄し、これから始まる演目へと意識を移す。現代のようにSNSの様な情報伝達ツールも存在しないため、内容を知らずには噂話などを元にしなければならぬ。そのため自分たちの持つ伝手を使って色々調べて見たのだが……、その結果は散々だった。とりあえずあのビクトリア様の半生が描かれることは確かなようだが。

【開演時間となりました。皆さま、お静かにお待ちくださいませ。】

「(あ、始まる!)」

「(やっぱドキドキしてきた!)」

開演を始めるベルの様なモノが鳴り響き、それと同時に騒がしかった声が一斉に消えていく。彼女たちはこれが初めての観劇であったが、それでもあのベルの音が開始を伝える音であったことを理解できた。

音の消えた世界で、劇場の右端からコツコツと足音が響いてくる。敢えて響かせているような、そんな感じ。そして私たちの目の前に現れるのは、彼女たちが待ち望んだ人。その人生の中で一度も見たことの無い服に身を包んだあの人だった。

トガ、古代ローマで一般的だった白いローブのような服が一般的なのこの世界の者たち。そんな彼らが見たことの無い黒い服装。すらつと伸びた足をより細く、長く魅せるような黒く細いズボンに足首の肌を見せるような底の薄い黒の靴。上半身は白いシャツで首元にはフリルの様な装飾であるジャボが付いており、そこから黒い上着を羽織っている。現代であれば探せば見つかりそうな恰好であったが、この世界においては彼女が最初。そんなビクトリアは、観客たちの大半が理解のできない木製の箱の様なモノを片手に壇上へと現れた。

『……………』

いつの間にか舞台の中央に置かれていた棒状の機器と、その後ろに存在する箱の様な機器。見る人が見れば劇場の至る所に設置されている音響魔道具に類するものだという事は理解できるだろうが、学のない彼女たちには理解できない。理解できるのはただ視線の先にいる推しが、よくわからない木の箱を構え、自分たちの前に立ったことだけ。

『さあ、始めようか。』

彼女がそう言った瞬間、世界が変わる。

舞台の後ろにある城壁から一斉に光が灯り、同時に音という暴力が彼女たちを包み込む。あの舞台上にいるビクトリアだけの音ではない、その舞台の下にあるくぼみ、そこに詰めている演奏家たちが一斉に演奏を始めた。

聞いたことのない音色が、何重にも重なりながら体を突き抜けていく。この世界の誰もが経験のしたことのない音楽が始まった。

『(掴みは上々、だね。)’』

ステージを一人で独占する彼女が成功を確信し深く頷いた瞬間、音楽のテンポが高まっていく。それに合わせ自身も演奏しながら舞い踊る彼女、ステージを全て使いながら適宜その身に宿る加速の力を用いていく。それに合わせ背後の城壁からは光や魔法を用いた演出で人々の目を奪い、一部の者は自分がどんな顔をしてどんなに前のめりになっているのか気づかぬまま食い入るように演目を眺めていた。

『みんな、今日は来てくれてありがとう。これからご覧いただくのは私の半生、ビクトリアという名で生まれ落ちたこの私が、如何にして皆の前に立つことになったのか。少しだけ、時間を貰うよ。’』



(よし！・よし！・よおーし！・いけてる！)

一瞬照明の消えたステージの上で、急いで移動しながら観客たちに見えない位置で軽くガッツポーズを決める。まだ演奏家の人たちが

続けてるし、スタッフの人たち。黒子さんたちが急いで舞台装置やらさつきまで中心においてたスピーカーの撤去など走り回っている。私の出番もまだまだあるわけだけだし気を抜くには早すぎるけど一番不安だった”掴み”が確実に決まったことでテンションがヤバい。

「(ビクトリアさん!)」

「(OK、解ってる。……そつちもよろしくね!)」

ステージの端、ギリギリ観客に見える位置に移動すると舞台端からミリアムちゃんが小声で話しかけてくれる。何かとかなりの時間ずつと一緒にいた子だ。顔が平静を偽ろうと普段通りの微笑みを維持してるけど、内心すごいことになっているのを見抜いてくれたのだろう。注意を受け取り、精神を落ち着かせながら次のメインを張ってくれる彼女へと激励を飛ばす。

呼吸を大きくではなく、観客から見えぬように長く薄く整えながら指示を待ち、スタッフの人からゴーサインを受けたのちに声を張りながら言葉を紡ぐ。こっから本格的に始めていくよ!

『私は帝国の北、なんでもない街に生まれた。貴族の教育係の一族で……。』

物語の基本設定とか、説明とかは私が全部担当する。私が語って、過去の回想みたいな感じで適宜幼い私、ミリアムちゃんにバトンタッチする形式だ。ちなみに私が話している間にまだ舞台上の道具小道具の移動は続いてるのでずっと私にスポットライト当たりっぱなし。せつかくミスなしで綺麗にバイオリン弾けて一息つこうと思つたのに全然無理そうだ。ああそうそう、この演奏も”両親に教えてもらった”ことになってんの。

『……親にも恵まれ、周りにも恵まれ。本当に楽しい毎日を過ごして

いた。そう、この時は、まだ。』

声量をそのままに抑揚やイントネーションの違いだけで感情を表し、ついでに不穏さも出しておく。んでここからはミリアムちゃんのターンだ。スポットライトが私から舞台中央に移動していた彼女へと移り、その間に私は舞台端に移動する。これでようやく一息つけるよ。

『おじさんこんにちはー！ 今日衛兵さん？』

『おお、元気だねえ。そうさ、毎日ここを守ってる。守衛、つてやつね？ それでビクちゃんはまだお外かい？ あんまり離れすぎずに、気をつけるんだよ？』

『わかってるうー！』

普段の少しおどおどしているというか、緊張をそのまま表に出している彼女とはちがいが、今の私を通じて彼女なりに理解した”ビクトリア”がそこにいる。いや、マジで私の素だな。こわあ。確かに何度か素に近いの出しちゃった気はするけどそれでもあそこまで『あ、私だ。』ってところまで似せられるんだねえ。

『ごめん、台本確認させて。後お水。』

『了解、どぞ。こっから覗いてましたけどかなりいい感じでしたよー！』
『本当？ なら最高にうれしいね。』

スタッフさんに頂いた水で最低限の水分補給をしながら台本を確認。それをしながら横目でミリアムちゃんたちの演技を眺める。劇は三部構成で彼女の出演は一部の前半と中盤、その間に何度か私がナレーターとして入らないといけない。そのタイミングとかを確認しているってわけ。

『よおし、きょうもやるぞおー！』

視線の先にいる彼女、私を演じるミリアムが行動を始める。序盤の意図としては幼少期の私の性格と、その生活。あとは世界観の共有が目的。一般的な町で生まれ育ったことと、小さいころから私は速かったこと。それを無邪気さを演じる彼女が見せていく。

大道具や城壁でのライトアップなどで演出し、音楽のテンポを急にあげることで幼き私が子供の身ではありえないほどの速度を出していることを表す。ステージ上の彼女が踊る様に走り回りながら、大人でも捕獲困難である兎を次々と捕まえていく。流星に本物は用意できなから剥製なんだけどね？

『うー、さぎー！　さん、ちよお！』

(私見たことないんだけど、兎の魔物の剥製で大の大人の数倍速いって有名なんだって。それを軽々と捕まえてる演出ってことだ。っと、次の場面に入るね。)

晩御飯というかオヤツとして大量の兎を捕まえた幼女の私、首ねっこを掴んできゅっとした後は懐のナイフでさっと血抜き。多分馬車の中で本当の私が歌ってた鼻歌を再現しながら意気揚々と町へ帰っていく。今日の戦果を門番さんや他の住民たちにプレゼントしながらお家へと直行、ってわけだ。

『ただいまー！　ママ見てー！』

『あらおかえりなさい、早かったの……、ってまたあなた勝手に狩りしてきたの!?!』

『うん!!!』

『うん！　じゃないわよ、危ないでしょうが!』

そして普通に怒られるチビ私。まあ聞いた話によると歯がえらい鋭いらしくて、武装した大人でも首を狩られちゃうこともあるんだって。そりゃ怒られる。けれど私は『だってお腹空いてるんだもん』と

言いながら獲物を母にプレゼント、ため息をつきながらそれを捌いたお母さんにご飯を出してもらおう。滅茶苦茶食べる描写をここで入れる感じだね。

っと、もう少し後で私のナレーションか。ぱっと立ち上がり全身をチエック、ついでにスタツフさんにも衣装や髪の流れを見てもらい準備完了。ステージの方ではパパさん役の人も出て来て、家族団欒の様子が描かれ始めている。んでここで時間停止。あ、フリね？　そういう演出。彼らを照らしていたライトが一斉に消え、舞台端の私に集まる。

『父は代々続けてきたこの町を治める貴族の教育係、彼の持つ知識量の多さから領主の相談役もやっていて……。』

ゆっくりとステージを歩きながら、懐かしむように言葉を述べていく。父の仕事と、自分たちが仕える貴族の話。そして母の話と両親に対する自身の想い。そういうのを淡々と、ざっと話し終わった後は裏方のマイクの前でスタンバイしている人たちと動きを合わせ指を鳴らす。それと同時にそれまで止まっていたミリアムちゃんたちや、演奏家の人たちが奏でていた音が戻ってくる。

(私にも、この体にも。あつたんだろうね。)

そんなことを考えながら、少しだけ名残惜しそうな表情を表しながら舞台から去る。台本通りで演出の指示通りだけど……、やーっぱ自分の話だから感情移入しちゃうよね。私というか前世にそういうことがあったのは確かなんだけど、この体にもそんな時間があったのかも確か。確証は得られていないんだけど、私が目覚めた状況や剣神祭の後の神の反応を見るにこの体には元々持ち主がいたのだろう。”彼女”にも、あんな時間があったはずだ。

(あの神サマが『その体私がわざわざ作ったんだよ。』みたいなことを

言わなかったあたりこの世界の人間の体である可能性は高い。そつちだったら色々悩まなくてよかったんだけど……、世知辛いねえ。)

元の持ち主に思うことがないと言えど？になる、だがかなり長い間この体で過ごしても元の持ち主は一向に出てこないし、私の精神もこの体が自身の物であるという風に認識してしまっている。最初のころはそもそもそんなことを考える暇すらなかったし、ただ生き残ることに必死だった。そのせいでそういう意識になってるのかもしれないけど……、今更どうにかなる話ではない。

それに、目覚めた時の状況や奴隷たちの待遇を考えると……、元の持ち主はもう召されているのかも、なんて私にとって都合のいいことを考えたり。

(つと、今考える事じゃないね。集中集中！)

先ほどと同じように、何度か情報の整理のためだったり、キャラクターが口になると不自然になってしまうような感情描写などを私がナレーターとして入ることで補足していく。両親とのふれあいや、仕える町の領主たちとの交流。私の体に宿る速さの力についての描写などをゆつくりと。幼少期の私が、領主の息子と絆を育む様子を描いていく。

『ママ、これなんていうの？』

『バイオリン、っていう楽器よ。獣人さんたちが住む北西の草原、そのずつと奥から伝わってきた楽器らしいわ。……弾いてみる？』

『……うんー！』

私が持ち込んでしまったが故に急遽追加された部分を聞きながら、私は私で準備中。直前までナレーションしてたけど、このシーンの途中で私が成長して年月が経つ描写がある。ミリアムちゃんから私に替わって、同時にバイオリンの腕も向上してるって描写。そのために

さつきまで着ていたスーツを脱いで帝国で一般的な服、トガに着替えなくちやならない。

というわけで現在裏でスタッフさんに手伝ってもらいながらお着替え中。さつきのスーツ結構お気に入りなんだけどねえ、わざわざ作ってもらった特注品だし、何より昔の感覚に近いからちよつと安心する。……公演終わったらもらおうかな？

「確認入ります……、大丈夫です！」

「ありがとう、じゃ。行ってくる。」

チエツクを受けた後、舞台端から演奏家の人たちに合わせながらゆつくりと舞台中央に向かって歩いていく。トガだと色々引掛かりやすいし、私が普段着てる奴よりも裾が長いから踏んで転ばないように注意しながら、ミリアムちゃんが演じている幼い私に並んで出来るだけ動きを合わせながら曲の終わりまで続ける。

(ミリアムちゃんのは『消音』の魔化が施されてるから音は出ない、だから私の動きをトレースするだけ。)

『……うん、昔に比べれば。だいぶうまくなつた。』

”ビクトリア”としてそう呟きながら演奏を終える。小道具の台の上にバイオリンを置き、ミリアムちゃんは大道具の陰に隠れながら舞台端に撤退。バトンタッチでこつから私がメインで進めていくことになる。あく、第一章のクライマックス、泣きのシーンあるけどどうまくいけるかなあ。エンリットちゃんからはゴーサインもらったけど、すごく不安。

(とにかくやるしかないよね、もうみつともないほどに泣き喚いてやーろおつと。)

68：収束する事実

何でもない、いつも通りの日々。
そんなときほど、全てが崩れ去ってしまう。

あの日は本当に何も無い日だった。いつも通り朝起きて、昇り始めた太陽を背に浴びながらただ剣を振るう。型を体に合わせるように、父親が実戦の中で積み上げてきたものを型として昇華させたもの、私が受け取ったものをただ振るう。あまりにも私が一人で狩りに行ってしまうものだから少しでも力になる様にと教え始めてくれたコレはすでに私の血肉となっている。

(もつと勉強した方がよかったのかも、だけどね。)

ただ机に向かうよりは体を動かしている方が好きだった私は、本当に必要最低限しか教わらなかった。父はまだ若く現役で、母は私を産んだ後一向に子供を授かる様子はない。生まれ落ちたこの家に課せられた使命は領主を支え次の主に教えを説くこと。父が現役で、母がこれ以上子供を産むのは年齢的に今後より難しくなる。父が他の女性を愛さない以上、私がやるべきことは血を繋ぐこと。まあ早い話が繋ぎだ。

そのせいか両親から家のことについて特に言われることも、教えを説く者としてより多くの教えを叩き込まれるようなこともなかった。両親二人とも優しい人間だったこともあり、私は自由にのびのびと過ごすことが出来た。自分の興味のあることだけ学び深め、おそらく両親が領主に決められた相手と子供を残すのを待っただけ。本当は父のようにより多くの知識を貯め込み、それを私が次代に繋げるべきだったのだろうか……。当時の私はそこまで頭が回らなかった。

何となく数年後には相手がいて、子供を産んでいるのだろうか考

えていた。その子の教育のために自身も学びを深めないといけないことは理解していたけど。自由に過ごさしてもらった弊害か、それが自分のことだとはあまり理解できていなかった。毎日同じように鍛錬し、家への負担を減らすために平原や森へ出て狩りをし、たまに本を読んだりバイオリンを弾いたりする。それがずっと続くと思つた。

「ビクトリア。」

「お、父さん。どうしたの？」

「ママが朝ごはんだから呼んできなさい、と。……もうパパとは呼んでくれないのだな。」

あはー！ 私も結構いい歳だよ？ さすがに恥ずかしいって！

と笑いながらそう答える。いつだったかはしっかりと覚えていないが、町の友人たちが両親の呼び方を変えるころ。私もそれに合わせて呼び方を変えていた。最初は何か違和感があったが、ある程度体が出来上がったこの年齢になるころにはすでに馴染んでしまっていた。母はすぐに受け入れてくれたのだが、父は今でもこのように残念そうな顔をする。もう慣れてよく。

「あ、そうだ。ちょうど体も温まって来た頃だからさ？ 一戦、お願いできる？」

「……もうだいぶ前に追い抜かれてるのに、まだするのか？」

「そりやするでしょ。いつまでも高い壁でいてよ、”パパ”？」

そう言いながら父に向かって持ってきていた予備の木剣を投げる。ため息をつきながらそれを受け取った彼はゆっくりと息を吐きながら構えてくれる。確か10になる前くらい、スキルを使用した状態ではあるが父に完封した。そして12になるころにはスキルを使わずとも勝てるようになってしまった。魔物の影響を受けやすい辺境の都市ゆえにこの町にいる戦力は高く纏まっており、それを指揮する領

主の教育役である父もその例外ではない。

流石に帝都にいる軍や親衛隊と比べると落ちるだろうが、その実力は確かだった。そんなこの町で、私が13になるころには誰も勝てないレベルまで伸し上がってしまった。そのせいで最近ずっと暇なんだよね。父さんやそのほかも頑張ってはいてくれるんだけど、私の成長する速度の方が格段に速かった。ずっと差は広がる一方。

今日も数合打ち合った後に、私が父の剣を吹き飛ばして試合終了。嬉しいけれど、それよりも悲しさの方が勝る。”繋ぎ”としての自分にはこんな力はいらない、いらぬが手に入れてしまった。そしてそれを高めるのがひどく性に合っている。

「……私の勝ち、だね。」

「だな。さ、ママが待っている。朝食といこう。」
「そう、だね。」

私の剣を受けたせいで震える手を隠しながら、肩を陽気に叩いてくれる父と共に家の中へと入る。ずっと高い壁だと思っていた人を、私はすぐに追い抜いてしまった。それが少し、いやかなり悲しい。……もう気にしないと決めただっけ、うん忘れよ。

「今日は何が出るか聞いた？」

「いいや、だが美味しいのは確かだ。いい匂いがするだろう？」
「確かに。」

ウチの人間は全員が健啖家だ、とくに私がひどいんだけどね？ そのせいで朝からお祭りでもやるのかというぐらいに食事が並べられる。そんなことを考えながら親子二人で家の中に入っていく。

そういえば領主の息子さんに『お前ら三人ともそれだけ食ってんのになんでみんな細いの？ 普通、もっとこう横幅とか大きくなるらない？』とか聞かれたっけ。家族口をそろえて『動いてるから？』って首傾げながら答えたら、理不尽だッ！ とか叫びながら言われたっけ。

あ、ちなみに母さんも結構戦えます。

「あら、パパ。その感じまた負けたのね？ 娘に負けるなんてどんな気持ち？ ねえどんな気持ち？」

「ママ……、ビクトリアが真似するからそういうのやめようって言ったじゃないか。」

「もう手遅れだよ父さん。ざん、ざあこ♡」

思わず天を見上げる父さんを無視し、母の手伝いをする。食器を用意したり、料理をよそったりそういうのだ。全部終わった後は私が先に席について、母さんが父さんを若干引きずって椅子に座らせる。最後に母さんが席に着けば準備完了。

「では、食前の祈りを。」

ようやく復活した父にならない、神への祈りをささげる。今日を迎えられたことへの感謝と、食事をとれることへの感謝。それ以外にも色々お祈りをした後、全員で食事をとる。量が量だからみんな食べるのに集中してて口数は少ないけど、それでもこれが私にとっての食卓。なんだか、自然と笑みが浮かんでできてしまう。

「あ、そうそう。今日はママもお屋敷の方に行くから、お留守番お願いね？」

「え、そうなの？」

「なんでもちよつと魔物の動きが活発化してるみたいでね？ 私もパパと一緒に呼ばれ。」

ほぼ毎日狩りに出て獣や魔物を倒していた当時の私は、このことを知らなかった。確かに少し獲物の量が多い気はしていたが本当にそれだけ。だから両親が呼び出されるのはすごく不思議だった。そして私が呼ばれないことも。

「私は？」

「あなたはまだ子供でしょう？　いくら強くたって子供は子供。ややこしいことは大人に全部任せておきなさいな。それに、パパと約束してた勉強。あんまり進んでないんでしょう？」

「うぐつ。」

そう言われてしまえばもう何も言えない。娘に簡単に追い抜かされてしまった親の気持ちも何となく理解していたし、そんなこと関係なく両親が私のことを守ろうとしてくれていたのも理解できていた。ただちよつとだけ、もしこの時両親に無理やりついていけば何か変わったのだろうかと考えてしまう。今の私に比べれば格段に弱い、けれど。もしやり直せるなら。

（私は、二人についていく道を選んだだろう。）

その結果私があそこで死んだとしても、構わない。

気合を入れるためか、それとも何かが始まろうとしていたのか。当時の私には理解できなかったけど、かつちりと武装した二人を見送った後私は一人部屋で本を眺めていた。苦手だけどやると約束したのは自分、だから椅子に座って本を開くところまでできた。けれどそれより先がダメだった、かなり嫌々始めたせいかページをめくるスピードは亀より遅かったし、頭もずっと違うことを考えていた。

（ママの防具、久しぶりにしっかりと見たなあ。）

そんなことを考えながらページをめくる。母も結構戦えるとはいえ、本業は主婦。私が勝手に脱走してた昔は槍を片手に探しに来てくれているけど、最近は全く見ていない。けどちゃんと装備して、槍を握った姿はすごく様になっていた。多分私の知らないところで色々鍛錬とかしていたのだろう。

「あゝ、集中できない。……一曲だけ弾こうかな。」

そう言いながら部屋の奥に立て掛けてあったバイオリンを手に取りろうとしたとき、鐘が複数回立て続けて鳴る。

「これは……、ツ！」

村の中央から響く鐘の音、何か起きた時にその内容を市民に伝えるためのモノ。……そしてこの回数が一番最悪な状況表していた。意味することは、『今すぐこの場から逃げろ』だ。

その音を聞いた瞬間、弾かれたように動き出す。自分の部屋から飛び出し、向かうのは共用の武器庫。身を守らないといけない、それ以上みんなを助けられないといけない。自分が生まれ育った小さな町、知り合いばかりで誰も死んでほしくない。両親だって、傷一つ付いてほしくない。私が一番強いんだ、だから自分が守らないと。

母親のお下がりの皮鎧を身に着け、父から譲り受けた剣を腰に差す。そして自分以外の人も武器を必要としているかと思ひ、家に置いてあったすべてを背負い外に出る。

「ツ！」

目の前にあったのは、人の雪崩だった。

普通警鐘は段階的に鳴るものだ、敵が接近しているのなら注意や逃げる用意を促す鐘になる。そもそもそんな危険事態に陥る前に領主から市民に向けての注意喚起が先にある。『最近魔物の動きがおかし

いから注意して』とか『敵が攻めてくるから逃げる準備をして』とか。戦えないものに向けての説明があった。

けどあの日はそんなものなかった、気が付いたら敵が。魔物がすぐ近くまでやって来ていて、今すぐ逃げないと囲まれて逃げ場が無くなってしまうような状況だった。よく外に出る私が状況の変化に気が付かないうちから準備を初め、対策を立てようとしていた領主様たち。彼らが愚かだったわけでも、怠けていたわけでもない。ただ、敵が異常だった。

当時の私は何が起きているのかを理解できず、逃げ惑う人の中から友人の顔を見つけ、ついそいつの名を呼びながら手を引っ張ってしまった。

「何が起きてるッ！」

「城壁が！ 城壁が破られて魔物たちが入って来てる！ すぐに逃げなッぶ」

目の前で、その友人の顔が弾け飛ぶ。何故か無意識のうちに『加速』を使用してしまい、ゆっくりと壊れゆく彼の頭部を見てしまう。私だけの世界に入った時にはもう遅くて、上空から投げられた石がすでに頭の半分以上を貫いていた。もう、どうあがいても助からない。私が彼の手を引いたせいで、死んだ。

「ッ！」

体が、動く。

友を殺された怒りか、それとも自分が殺してしまったという贖罪か。上空から岩を投げつけた悪魔の様な魔物を視界に入れた瞬間。体が自然と動いていた。地面を蹴りつけ、そのまま家の壁に。壁を蹴り抜く勢いで踏みつけそのまま空へ。未だこちらのことを認識していない魔物のさらに上。そこから剣を叩きつける。

その肉体を崩壊させながら切り抜いた瞬間、世界が元の速度を取り

戻していく。瞬間的に感情だけで当時の自分が出せる限界を超えてしまった。世界が戻る瞬間に体に叩きつけられるのは無視できないフィードバック、速度に体の強度が耐えられなかったのだ。

「ぐうウー！　いか、なくちゃ！」

痛みを耐えながらも、人々の動きとは逆方向へと足を向かわせる。進めば進むほどに魔物の数と、人だったモノが増えていく。明らかに手傷を負った敵もいるためこの先でまだ戦っている者はいる。けれど増える。普段草原や森にいるような奴よりももっと強い魔物たち、背負っていた武器を投げつけ敵を壁に叩きつけながらただがむしやらに前に進む。私にが一番強いんだ、だからみんなを、守らないと。

（スタンピードか魔物の組織的な侵攻、後者ならまだ指揮官を潰せばなんとかなるけど前者ならもつとヤバい、殺し切るまで止まらない戦いになってしまう。）

私にとって、狩りは身近にあるものだったけど、戦闘は。戦場は初めてだった。私が殺すことには変わりない、けれど少し遅れるだけで人が死ぬ。私のせいで友が、友人が、数えられないほど死んでしまう。目の前で死んだ、間に合わなくて死んだ。物言わぬ骸となった姿を見てしまった。すべてが、初めてだった。

限界を超えた加速による身体的なダメージも大きかったが、それよりも精神への負荷が大きかった。同時に不安もより大きくなっていく、両親は大丈夫なのか。私たちが守るべき領主様やその一族の方々は大丈夫なのか。死と、強い不安、その両方が私の心を蝕んでいく。

そして、不安は現実となる。

人だったモノに武装したものの割合が増え、無傷の魔物が増えてくる。そしてどこからか引火したのか視界の半分が火で埋まって来ていた。煙で視界がはつきりとしなが、音は聞こえる。風は感じられる、敵が来る方向もだんだんと研ぎ澄まされていく感覚で把握できた。

そして、誰かの声を耳が捉える。

女性の声、何かを指示する声だ。そして複数人が戦う音、ママだ。重い足を無理やり動かし、前へと進む。両親の無事を知ることが出来れば、この胸に巣食う不安は払拭される。思うように動かない体も動くようになる。そして私が付けば、全部ひっくり返せる。煙の中を走り、その中に隠れていたすべてを消し飛ばしていく。母のよく通る声がより大きくなり、父の声も聞こえてくる。ああ、二人とも生きてる。

漸く視界が晴れ、二人を視界に入れた時。

私は。

「ママー！」

叫んでしまった。

「ツ！ ビクトリアツ！ 来ちゃだ」

母の目の前には、領主さまが愛用していた大剣を振り回す牛鬼がいて。そいつの周りには、私たちが仕えていた領主様やその一族。そして彼らを守るはずの人間たち、私と遊んでくれた冒険者や、衛兵さんたち。昨日まで、生きていたはずの人が。転がっていた。

い顔をしてより遠くへ逃げようとする住民たち。

全身傷だらけで、四肢の内左手しか動かない。どうやら勝つことはできたみたいだが、それ相応の代償を払わなければならなかったようだ。……けど、もうどうでもいい。私のせいで二人が、パパとママが死んだ。それにもっと多くの人が死んだ。私をもっと強ければあの人たちは死ななかつた。後悔が生まれて、直ぐに消えていく。もう全て終わってしまったことだ、何も。何も残っていない。

最初は、死んでしまおうかと思った。けれど、そう思った瞬間にはすべてが霧散していた。死ぬ気力すらも、わいてこなかつた。ただ何もせず、馬車に揺られる。運よく逃げ延びた交友のあったものに声を掛けられたが、聞こえていてもそれが脳に言葉として伝わることはなかつた。次第に私に声を掛ける者は減り、いなくなる。

水も、食べ物を食べる気にならず。動く気にもならない。

そうして、時間が過ぎていくうちに。

私たち避難民の集団は、人狩りに襲われた。

力を持つ者は全てあの町で死に、唯一生き残った私はすべてを諦めていた。

まともな抵抗もできずに捕らえられた私たちは奴隷となり、新しい人生を歩むことになる。

これが、私が帝都に運ばれる一月前の話だ。



(……しい！ 第一章おわりい！)

それまでつけられていたライトや音楽が一斉に止まり、物語の中断を表すために舞台端から幕を持ったスタッフさんたちが一斉に走り出す。なんか滑車が外れたとかのアクシデントがあったみたいで、あの結構重い幕を複数人で引っ張っている。観客から見えないようにうまく隠れながらだから大変だよな。

その様子を無気力でもう何もやりたくないです、の顔を維持しながら見届け、観客の視線が全て遮られた瞬間にようやく全身の力を抜きその場に静かに寝転ぶ。あゝ、思ったより疲れた。感情移入しすぎて、あのシーングアチ泣きしながら叫んじやったし。コレをあと一月連続でやるの？ うわ大変だ。一応休養日間に挟んでもらってるけど最後ぶっ倒れそう。

「皆さんお疲れ様です、10分後に第二章行きますので準備お願いしますー！」

「了解ですー！」

「あいよー！」

軽く手をあげることです承の意を伝える、もうちよつとだけ寝かせくだち。え、だめ？ そんにやあ。

たぶん総支配人のエンリットちゃんは爆発して使い物にならないということ、彼女の付き人である使用人ちゃんが指示だしをしてくれているのだろう。大道具さんとかが走り回ってるし、ここで私が寝転んでいるとガチで邪魔だ。なごり惜しいけどさっさと起きて衣装替えに行きますかね、衣装さんたちにも迷惑かけられんし。

パパ役さんや、ママ役さんに挨拶や私の演技に対する評価を軽くいただきながら小走りで衣装さんたちの方へと走る。そこで待っていたミリアムちゃんが差し出してくれた水で喉を湿らせながら着せ替え人形。ついでに台本のチェックも並行してやっていく。10分つて思ったよりも短いからね、さっさと並列して進めていかないと間に合わなくなっちゃう。

「すぐくよかったですよ、ビクトリアさん。」

「そう？　ありがとミリアムちゃん。でもま、これから二時間分全力でやらなきゃだから気は抜けないけどね。」

そんなことを考えながら衣装さんに体を預ける。

にしてもまあ……、なんかすごい感じに仕上がったよね。第一章。最初はもうちよつと控えめというか、もう少し優しい感じだったんだけど練習を進めていくうちにこれじゃ最初の山場少くない？　つて話になって来て急遽ホカーラさん。脚本家さんね？　彼を招集して役者含めて会議開始。そしたらこんなお涙頂戴のお話が出来上がるんだもの。お前ら曇らせ厨か？

（まあ私も加担してるから人のこと言えないんだけど。）

そして出来上がったのが無意識傲慢な私と、ありきたりな悲劇。よくある悲劇だからこそ状況の理解が観客に促しやすく、感情移入もしてもらいやすい。ま、いい感じに仕上がったんじゃない？　こつから私がどうなって、今の私にどうつながるのか。結構気になる感じになつていと思う。でもまあ、私がこの場に平民としていることが最終的にハッピーエンドへとつながることを示すつていう保険だとしても、徹底的に落とし過ぎじゃない？　とは思うけど。

（あ、そういえばアルには『これ第一章は全部作り物だから心配しないでいいよ』つて言ってるけどマリーナちゃんにはちゃんと聞いたわけ……。あとでちよつとだけ面倒なことになりそう。フォローはちゃんとしないと。）

因みに役者やスタッフの皆さんにもコレが架空の話であることは伝えている、一部事実が含まれているけど、大体がお話だということをおね？　まるつきり同じなのは三章くらい。色々省いたりお話としての整合性を保つために色々したら二章も結構ごちゃごちゃになっ

ちやっただよね。

その話をしたときは役者のみんなが明らかに安堵した顔をしてただけど、気が付いちやっただ一人が『え、ということは残りは全部事実ってコト?』って零しちやっただ瞬間にそれまでの空気が崩壊したのは覚えてる。私が優しい笑みをずつと壊してなかったから余計怖かったでしょう。『ご想像にお任せするよ。ま、今じゃ全部笑って流せる話だから気にしなくていいよ』とは言ったけど、ねえ? 私が逆の立場だったら何したらいいか解んないや。

ま、転生してます。とか言えるわけないもんね。完全に架空なのは第一章の”一部”だけ、そしてそれ以降は多少の脚色は有れど事実で構成されている。笑って誤魔化すしかないんだよ。自然と『あ、これあんま触れない方がいい奴だ。全部架空のお話として扱った方が良さそう……。』と周りが勘違いしてくれたし、それに便乗するしかなかったと言える。

……そういえばヘンリ様にも言っただけ? まああの人のことだし、色々現実と整合性とれないからお話として理解してくれるかな? ダメだったらどうしょ。……うん、未来の自分に丸投げだ。

(さて、本筋からずれちゃったし。次に向けて切り替えていきましようか。)

第二章は私がどうやって立ち直ったのか、”ビクトリア”という剣闘士になるに至ったかが描かれる。最初はよわよわだった私を『両親を失ったショックとその時のケガで弱体化した』と解釈し、出来るだけ私を通った道をそのまま表している。あ、ちなみにアル関連の話は全部カットしてます。彼女がどんな道を選ぶかまだ分からんし、勝手に劇に出しちゃってその道を狭めてしまうのは絶対NO。それに尺の関係上アルとの交友を描いちゃうと剣神祭まで行けないというか……。

「にしても、懐かしいな。」

「? どうかしましたか、ビクトリアさん。」

「……いいや、なんでもない。それよりもミリアムちゃん、キミもファン役で二章出るんでしょ? それ”私”の服だけど大丈夫?」

「……………あ! き、着替えてきます!」

正直、そんなに思い出したい事ではない。

まだろくに『加速』も使えなかったし、剣の握り方すら知らなかった時期だ。そしてこつちの世界に来たばかりの私が、この世界について少しずつ理解を深めていった時期でもある。色々な間違いをし、勘違いもしていた。闇に葬っていいのなら、そうしたい日々。現代と同じように過ごせば簡単に裏切られ、信じられる人間だと思った人は最初から私を殺すつもりだった。

(アレが真意だったかどうかは解らないけど、『仲良くし』といたほうが対峙した時、剣が鈍るから』だった。名前も声も忘れたけど。あの時の顔と”言葉”はずっと私の背に乗ったままだ。)

私に怒りを覚えさせることで後腐れなくさせようとしてくれたのか、そもそも最初から言葉通りで。言葉にすることで私の動揺を誘ったのか。未だにその真意は掴めていない。骸が私に語り掛けてくるのは、恨み言と生者への妬みのみ。未だにコレが私の幻覚なのか、それとも魔法的な何かなのかは理解が及んでいない。アンデッドとかいるから余計に解らんのよね。

この世界における初めての友人の顔を思い浮かべながら、劇の内容を辿っていく。私は最初裏の闘技場に放り込まれたが、この劇でそれを出すわけにはいかない。作中では表の闘技場に入れられることになっており、そのせいで裏では横行していた『同じオーナーを持つ奴隷同士の興行』というのも表現できなくなった。

表じゃ『八百長を誘発させてしまう』って理由で禁止されてるけど、裏じゃ『仲良くなっている奴隷同士を殺し合わせることで楽しむ』っ

て感じで許可どころか推奨されていた。今はどうなのか解らないけど、クソツタレなのは確かだ。耳に入れたくないレベルなんだけど、聞いた話じゃまだまだ健在らしい。

(あんな世界、さっさと滅びればいいのに。)

そのため劇ではあの時の私たちみたいに殺し合うのではなく、ちゃんとした試合であの子は死に。私はその仇を討つ様な道筋になっている。この劇の通りならば殺されるべき仇は私なんだけど……、人生どうなるか、わからないよねえ。

(人様にお出しできるようなものじゃないし。仕方ないね。)

ま、というわけで第二章の大まかな道筋としては
奴隷になって帝都に連れてこられてくる

最初の試合に放り込まれて死を望むが、死への恐怖と両親の言葉を
思い出して無理やり生き残る

ちよつとずつ剣闘士に慣れて来て、友人が出来る

その友人から死んだ人の分まで生きるといふ考えを聞かされる

友人が試合ですぐ死ぬ

自分の生きる意味を考え始め、剣闘士から抜け出す方法を探し始める

真つ当に自分を買戻すしかないと悟り、自身の人気が出てきたこと
ともあり外への露出を増やす

最初は金目的だったけど、人との触れ合いに楽しさや生きがいを感じるようになる

ある程度資金が貯まり、剣神祭への出場を考え始める
って感じた。

どう、面白そうでしょう？

あの子が死ぬのと、剣神祭に出る以外何もあつてないけどお話し

てはまあ纏まっているはずだ。私はその筋書きに沿って演じるだけ。どこから漏れたのかあの子を殺したのが私だということがバレて、あの子の家族や妹に殺されかけたり、それを返り討ちにして自分が生きるためにとどめを刺したって話もみんな入ってない。とつてもクリーンだ。

(……自分で言ってるってなんだけど気分悪くなってきたな。やめやめ、集中しよ。)

ま、そんなわけで第二章については軽く触れてスキップさせてもらうよ。内容が知りたかったら実際にココに見に来てもらうか、私の覚悟が終わるまで待ってもらおうか。……とにかく、時間を貰うね。大丈夫、いつかちゃんと話すから、さ。

69：踊りましようぜ？

『ダメだ、ずっとこんなところにいちゃ……。』

『金が、金が要る。私を買い戻すことが出来る資金が。……でも、勝てば勝つほどに私の値段は上がり続ける。どれだけ稼ごうとも間に合わない。いずれどこかで私も死ぬ。だったら……。』

『剣神祭。』

さつきまでの自分の演技を思い起こしながら舞台裏で突っ立つて人知りませんか？ まあ私なんですけど。

ちようどさつき第二章が終わりまして、現在衣装と化粧を衣装係さんたちに直してもらってる最中。鎧の着脱とかは自分でも出来るんだけど、そうするとどうしても実用性重視になり粗が見えてしまう。今から着るのは完全に『魅せる』用の鎧だ。落としたりして破損させちゃったら色々終わるし、専門の方がいるなら全部任せた方がいい。となると今私ができることと言えただ突っ立つて着せ替え人形になるのみ。それに化粧とかよくわからんしね。

第二章はそのまま剣闘士の話をウニヤウニヤとやっていた。私の実体験を元に結構な年月を1時間弱に収めた感じ、そのせいで色々端折ったり私にとって大きな存在であるアルがいなくなったりと、実際の時間を過ごした本人からすれば色々違和感がある形に収まっている。劇で出せない話題とか省いてお話として面白くするためには仕方なかったんだけど……。何だろうねえ？

(ま、今考える事ではないか。)

さつきまでの殺陣はずっと役者さん相手にやっていた。作中時間としてまだ私が剣闘士を初めて間もなかったという設定と、アクシヨンの目玉を第三章に集めるといふ都合上この章は演技やストーリー

に重きを置かれたためだ。なので戦闘能力よりも、役者としての経験豊富な方に相手お願いしてお芝居重視のアクションしてただけ……。マジで疲れた。

戦闘と、私の演技。ここに問題はない。戦闘はいくら役者としてある程度鍛えて殺陣の経験があったとしても、私と並んだ瞬間に差が見えてしまう。かなり失礼な言い方になっちゃうけど、例えるとすれば少年野球下位打順バッターとメジャーリーガー三冠王ぐらいの差？ 言い過ぎかもしれんけどそれぐらい差がある。それに”私”自身の演技。ビクトリアの演技だけどちよつと『若さ』とか『無気力』とかが追加されているとは言え自分自身だ。普段よりも声を張らないといけないとはいえ、それぐらいなんとでもなる。

だが、それ以外全部きつかった。うん。

まず相対してる役者さんなんだけど、その筋じやかなり有名な方だったみたいでマジで演技の深みがすごい。空気の掴み方だったり、観客の反応を見て適宜細かなところを修正していくスタンス、さらに私やその人に殺される友人役の演者さんのフオーローも入れてくるという完璧さ。『あ、これオチオチしてると食われるわ』というレベルだった。ほらさつきまで『殺人楽しー！』って顔を舞台上でしてたのに、裏に来てみれば人の良い笑みを浮かべながらこつちに手を振ってるあの人ね？ この人に全部持つて行かれないようにするのがめちゃ大変だった。

「お疲れ様、次も頑張つてね？」

「あ、はーい！ ありがとうございます！」

次に、アクションシーン。この人鍛えてて、ちゃんと殺陣の技術も持つてるすごいおじさんなんだけど……、アレね？ 基本的な膂力が違い過ぎたと言いますか。練習時に一回軽く打ち合つて見たんだけど文字通り吹き飛ばしちゃつて……。剣と剣が打ち合つた瞬間両方の得物がぶつ壊れておじさんが吹き飛ばされるといふ事件があったんだよね。

そのせいで演技中は絶対に剣を合わせてはいけないという縛りが発生。そしてそもそもその実力差のためある程度互角に戦っている演技が必要になっちゃって……、すごく気を遣いました。はい。剣を合わせられない以上本来生まれるはずのない剣と剣の間をエフェクトで誤魔化す必要があつて、それを私がルーンで色々して火花とか飛び散ったように見せるということもしてたからさあ。

(いくら『加速』で思考時間とか色々弄れるって言っても限度があるしさあ。)

『加速』は私の体だけでなく、思考にもバフを掛けてくれる。そのため手順を確認したり、合間合間に合わせることで自体は可能なんだけどあんまり早く動き過ぎると観客が目で追えなくなっちゃうし、私の声も『加速』が乗っちゃうから会話シーン入る直前は必ず切らないといけない。どっかでやらかしそうだからずっと練習させて貰ってたんだけど、やっぱ本番も怖い。

(でも、次からはその心配もしなくていい。)

「衣装とメイク、できました！ 最高オに仕上がってますよ！」
「ありがとう。……もう少し時間あるよね。」

衣装さんたちに礼を言いながらゆつくりと舞台へ向かう。時間の確認をしたがまだ余裕はある、ちよつとばかり堪能しながら行つても十分間に合う。

全身が映る姿見を通して自分の姿を見る、ライトに負けぬように明るく整えられているが過度なものに成らぬように調整されたメイク。自分の顔だが、別人のように思ってしまうソレ。本当の剣神祭の時はこんなに整えていなかったが、今は劇だしここからずっとクライマックスだ。メイクさんたちが気合を入れてくれた分。私もそれに応えよう。

「鎧も、すごいことになっちゃってるよね。」

今私が身に着けているのはドロが仕立ててくれたもの。だいぶ前にお願ひしたもので、一度納品してもらってから何度も手直ししてもらった作品だ。鎧だが防具としての役割は果たしておらず、一撃でも食らえば崩れるようなレベルまできめ細やかな彫りが為されている。魔化でガチガチに固くしているらしいが元々が脆いので耐久性はあまり期待しないで欲しいと言われている。

未だに帝国の意匠はあまり理解できてないので正確には解らないが、蝶と花がメインになっている。その彫った部分に金が流し込まれているおかげで全身金ぴかだ。腰に巻いてたパレオみたいなのも白い生地が残ってないんじゃないかってぐらい金糸の刺繍がされている。

(普段の私の鎧を元にしてるから基本の色は白で、その上から金で埋めている。成金っぽくなる組み合わせかと思ってたけど全然そう見えなのはあの子の腕のおかげかな?)

「っと、そろそろか。」

そうこうしている間にもうそろそろ舞台に向かっていなければならない時間。気合を入れ直し、衣装に負けないようにいかないかね。

(軽く、おさらいしておこうか。)

第三章は、剣神祭の話だ。多くの人の目に触れた祭だったし、まだあの時の光景は薄れてはいない。私も、観客もそれは同じだ。つまり私の半生をそのまま劇にするって都合上内容も結果も対戦相手も同じになってしまう。つまり早い話こっちもかなり淡々と行かせてもらおうと思ってる。おんなじこと繰り返しやるのも駄目だしね？

それで肝心の対戦相手なんだけど、あの祭に参加した剣闘士は私以外死んだことになっている。例外はいるけどまあアレはほんとにどうしようもないから数には入れない。ま、死んでるから『ちよつと参加してくれない?』みたいなことが出来ない訳だ。

しかもクライマックスつてことで、派手なアクションを目玉に。そうなると相手をしてくれる子もそれ相応の力量が必要になって来る、ということ満を持して現役ちゃんたちの登場つてワケ。オーナーに色々根回しして、タクパルちゃん経由でここに来た彼女。実際のレベルはタクパルちゃんよりも何段か下レベルなんだけど……、役者さんたちと比べると何倍も強いし覚悟も決まってる。

死という絶対的な恐怖が存在しないこの場においてあの子たちは与えられたロールを自由に演じてくれるだろう。『胸を借りるつもりでおいで?』と言っているし、全力で殺しに来てくれるはずだ。かなり超特急にはなったが、エンリットちゃんや他の役者さんたちのおかげで演技の方も見えるレベルには仕上がってる。

後はやるだけ、だね。

それにちよつとしたサプライスも待ってるし……、楽しみ。正直なんであの人がゴースインが出たのかちよつと解らないけど、本人も了承してくれたことだし。楽しんでいくとしましょうか。

……あ、スプラッタはしないからね? ほんとに。

『ここで勝てば、全部。全部終わる。ようやく、私は振り出しに戻れる。』

闘技場の控室に横されたセットの中で、一人言葉を紡いでいく。終幕まで残り少し、後は最後のひとりを倒すところまで行けばそれで舞台はおしまいだ。少し気が抜けてしまいそうではあるけれど、引き締めていかないと。

ここまでの舞台だけど、剣闘士の子たちはちゃんと役を全うしてくれた。流石に”あの化け物たち”の戦い方をトレースするまでは出来なかったけど、その雰囲気や性格。”役”としての完成度は高かった。ま、みんな私を稽古つけてもらおうと向かってきてたのはちよつと笑いそうになったけどね？ 役は役としてやりながら、実際の戦闘は私相手に自分自身のスタイルがどこまで通用するかを見に来てる。

(ま、強さで生き死にが決まる世界だし。それぐらいガツガツしてた方がいいよね。)

私と彼らの差は、”ビクトリア”として対応しながらどう受ければより観客に魅せることが出来るか、なんて考えながら動いてもまだ余裕がある程度に大きい。故にそれぐらいどんとこい、だ。むしろあの化け物たちを無理やりトレースしてリアリティが下がるくらいだったら今回のように殺しに来てくれた方がいい。一応使ってる剣全部刃ついてないから安全だしね。

軽くしか見れてないけど、観客たちの反応も結構いい感じだった。闘技場は建物の構造上結構離れた位置から見下ろすのが基本なんだけど、この劇場は席によっては同じ目線でかなり近い距離からそれを見る事が出来る。普段は見れない大迫力の戦闘、しかもBGMやそのほかの演出もこれでもかとぶち込まれた超大作だ。

(ここまで上手く行けたんだし、最後まで決めなくちゃね。)

『……行こう。』

役と、自分自身の心をリンクさせて吐き出すように言葉にする。同時に暗転し、大道具さんたちがステージを違う場所へと変えていく。私はただ、その場で待つだけ。

そして、音楽が切り替わりライトが照らされる。

舞台は闘技場へと移り替わり、時間は剣神祭の決勝戦。舞台裏からは雰囲気を作るためにスタッフや役者さんたちが歓声を上げている。耳を塞いで観客席の方を見なければもうあの時の光景と一緒に。そして、ゆっくりとこちらに向かって歩いている相手も、同じ。

『はは。……ヤバいな。』

意味は違うけれど、”ビクトリア”と”私”のセリフが重なる。

前者は『あのレベルの大男で、再生なんかという厄介なスキル持ちをどう相手すれば』と。後者は『なんで死んだことになってるお前がこんな衆人環境に顔出ししてるんだよ、というかなんで許可出た？ 言ってみた私も私だけどさあ！』である。

そう、私が”異形”と呼ぶ。その人が

あの時と同じ格好で、そこにいた。



（『え、彼を外に出してもいいのかって？ 能力だけ使わなければ大丈夫よ。流石に全身穴だらけになってもすぐに復活してきたら過去の

彼と、今の彼が繋がっちゃうけどそういうの無しでやれば十二分に誤魔化せるわ。最悪バレても私が裏にいることを理解したらよっぽどの馬鹿じゃないと手を出さないもの。おほほ！』

いやまあそんなんですけどさあ！ もうちよつとなんかありますでしょうよ！ いや確かに彼を演じられる人間とかいないので相談しましたとも！ 彼の演者さんの最低条件として私より背が高く体が分厚い上に、ある程度戦えるってことを挙げてただけ全然当てはまる役者さんがいないからエンリットちゃんと一緒にご相談しましたとも！

そんな時に私がぼろつと、『まあ本人が出られたらいいんだけどねえ。』みたいなこと零しちやつたらヘンリ様『あら！ いいアイデアね！ ハーバル、ちよつと出てきなさいな。』とご指示がでてそのまま決まるとか予想出来るわけじゃないですか！ というか色々ダメでしょ！ 死んでるはずの人間だよ彼！ え？ 最新鋭の特殊メイクで似せてますって言い張るの!?! 限度があるよお！

(やるからには全力でするけどさあ。……こんな場で相対するとは思ってもなかったよ。)

『なにか、言いたいことはある?』

『……………』

『沈黙は肯定ね。……さ、楽しもうか。』

それは異形ちゃんもだろうけど、なんて思いながら剣を構える。それと同時に彼も構え、戦闘開始の合図である音楽の開始を待つ。アクションシーンが演者たち、私たちに任せられている都合上BGMやそのほかの演出が合わせることは難しい。故に開始と終了の合図は舞台裏から。演出は私たち演者に掛かるものではなくその周囲に掛かるように行われるはずだ。

そして、それでも足りない部分は私がルーンとかで追加するって手

はずで、さつきまでもそうしてたんだけど……。

(ツ！)

音楽の開始と同時に踏み込む彼、ワンテンポ遅れて私が『加速』の世界に入るとそこにはちょうど私の前であの大剣を振り落とそうとする彼がいた。うくん、コイツも本気で私を殺しに来てるじゃんか！
というかそれをこの剣で受けたら根元から折れちゃうじゃんかア！
加減せえ、加減を！

(加速解放直後に起動するように、剣に補強のルーンを多重で張って強度増強。あとはセリフで誤魔化す！ お願いだから模擬戦じゃなくて舞台ってコト忘れんなよ！)

『ツ！ ……単純な踏み込みだけでその速度。はやい、ね！』

『……………』

『まただんまり、かッ！』

そう言いながらさらにルーンを刻む、私だけではなく彼の武器にも。その効果は発光、さっきの速度でコイツが打ち合う気ならこつちもこつちで速度を上げていかないと舞台上で大げが。最悪死ぬ。一応何かあったとき用に教会から人を呼んでいるらしいが、正直どこまでアテに出来るのか。

こつちも速度を上げてしまうと観客たちからすれば例の龍ボールアニメの一般人みたいな状態になってしまう。せめて何やってるか解るように発光させとくってわけだ。というか誰だコイツに全力でやれって言った奴！ 確かにクライマックスに相応しいけど限度つてもんがあるぞつてあぶなあ！

彼の放つ横薙ぎを空へと飛ぶことで回避し、そのまま一回転して彼の剣の上に乗る。

『そんなに速く動いて息切れしない？ もうちよつとゆっくりして私に殺されてもバチは当たらないんじゃないかな？』

（お願いだからもうちよつと”魅せる”ために速度落としてえ!!!）

『……………』

それを理解してくれたのか、私の乗った剣を大きく振るいながら後方へと飛び去る彼。そうそう、仕切り直し大事よ？ 横に階段もあるのだから高さも使っていこ？ え、私たちの身体能力ならこれ使わずとも空中戦出来るだろつて？ ……数秒だけならね。

もう一度ゆっくりと構え直しながら、剣を握る指の形と踵鳴らしで演奏に指示を送る。戦闘時のBGMの速度を上げて、演出として世界の速度が上がったことを示唆する。それで私たちの戦闘スピードが下がったことを正当化。

（お願いだからもうちよつとペース落としてよ……、来たッ！）

私の想いが伝わったのか、先ほどよりも速度を落として向かってきてくれる彼。だけどまだちよつと早いかなあ？ まあしゃあない。このまま行こう。今日はまだ初日だし、明日から少しずつ修正していかない。

でもまあこの速度でも私たちに取っちゃ”遅い”んだけどね。

一度目の彼が踏み込んできた時はさすがに十倍速、今の私が長時間使用可能な速度に入っただけれど今の彼の速度はせいぜい三倍速程度。多分初回の踏み込みも五倍速程度なんだろう。”今の私たちからすればとんでもなく遅い”速度だ。

剣神祭以降、私は平民となり、異形はヘンリ様の私兵になった。環境が変わったことで心境も変わり、成長速度も変わった。普通ならばより安定した生活になったことで成長ではなく退化。もしくは成長速度の鈍化が起きるのだろうが、私たちは逆に加速している。つまりあの剣神祭はすでに過去のことであり、二人とも当時の相手であれば瞬殺とは言わないものの確実に勝利をもぎ取れるレベルまで仕上

がっているのだ。

(当時に比べても遅いけど……、コレみんな見えてる?)

異形の振り回す大木のような剣を受け流しながら観客席の方に視線を向けるが、目を奪われている表情しか見えない。それが速度に圧倒されているのか、ちゃんと見えていてアクションの苛烈さに驚いているのかは不明。

両者ともに速度を落としながらも確実に殺す気でやつてるから見えていたらすごいんだろうけど……、まあいい。とりあえず目の前のコイツだけ見ることにしよう。ペースは落としたとしても力量的には両者同じレベル。気は抜けない。

『シッー!』

相手の大剣を受けとめ、押し飛ばすことで攻守を切り替える。単純な剣の勝負だけでは面白みも動きも少なくなる。少しアクロバティックに行こう。自身の剣にもう一度ルーンによる保護を重ね、完了と同時に角度に気を付けながら彼に向かって投げつける。案の定弾かれたそれは空中へ。

無手となつてしまい絶対絶命のピンチかと思いきや、別にそうでもない。足裏に発光のルーン、鎧全体に保護のルーンを刻みそのまま空へ。距離も高さも速度も足りないが、その顔面に向かって疑似ライダーキック。

『ハアアアああああ!!』

『ツぐうー!』

直撃、というか敢えて受けてくれた感じかなこれは。あまり強く踏まないようにしながら彼を踏み台とし、もう一度空へ。地面に突き刺さりそうになっていた剣を拾い、着地。そのまま踏み込み首筋へ。

(ま、BGMの方もまだ中盤。そりや止められるよね。)

『思いつきり蹴っちゃったけどお顔は大丈夫？ ま、おしゃべりは嫌いみたいけど……。もう少し踊ろうか。』

会話のために切っていた『加速』を再度三倍速で入れ直し、もう一度剣舞を始める。

結末は同じだ、お互い色々セーブしないと……。全力で走り抜きましょうか！

70：カーテンコール

(ぬうわあん！ もん戦闘シーン長すぎイ！ この尺決めたの誰！ 私だよッ!!!)

脳内で叫びながら異形の振り落としを剣の腹で受け、地面へと受け流す。舞台に剣を突き刺すわけにはいかないので、その角度にも気を付けないといけない。あまりにも急、それこそ普段私がやるような相手の力をそのまま地面へと叩きつけるように方向転換させる技術は使えない。そんなのしたら明日から公演できなくなっちゃうからね……。

いや、あのさ。言い訳させて貰いたいんだけどね？ まず私って今加速してるわけよ、三倍速。つまり人よりも三倍長い時間を体感しているわけよ、目の前に異形がいてある程度制限しているとはいえ確実に私を殺しに来てる異形が。三倍長く私の前にいるのよ。それだけで滅茶苦茶ストレスなのに、観客から見えなくなるっていう懸念のせいでこれ以上倍率を上げることが出来ない。

(そりや私だって『加速』しかない訳じゃないけどさ……。)

最近は一〇倍速、ちよつと無理して一二倍速でやり合ってる相手だよコイツ。無理がありますって……。

バク転しながら蹴り技入れてみたり、あえて得物から手を放して殴ってみたり。手を変え品を変え色々やってますけどどうあがいても攻撃力が足りないのよ……。そりや最終目標がこの子を殺すとか

倒すじゃなくて、『いい感じに劇の演目として倒す』だから攻撃力いらないけどさあ。あからさまに急に弱って意味不明な倒れ方とかしちや興ざめじゃん？ あと単純に、演技の中でも技術の差で負けるのがちよつと嫌。

(まあこいつも同じようなこと考えてそうだけど。)

あの日、剣神祭の日からかなりの回数剣を合わせているせいか、あの程度コイツの手癖や思考パターンってのは理解している。相手も同じようにこつちのこと把握してるだろうけどね？ 舞台に立ってやっている手前ここで流血沙汰を起こすのは絶対に避けられない、故に彼の最大の強みである『再生』を前提とした戦い方は不可。私が剣舞に取り込んでる蹴りなどはそのまま受けても勝手に『再生』してくれるから放置でよいが、斬撃は必ず剣で防がないといけない。刃が付いていない剣とはいえ私の膂力と三倍速が乗れば肉に深めの傷をつけることは可能。故に確実にそれは防御せねばならない。そしてそれを遠ざけるためには積極的に攻撃して相手の手数を減らす……。

(ん？ これって？)

ほぼ、同時に手を止める。いやもちろん鏢迫り合いしながらなので全然違和感はないはずだ。

うん、これさ……。お互いが色々やり過ぎちやってる感じ？ あ、だよ。目線で解るわ。あっちもちょうど今冷静になって気が付いたのか、『ごめんちゃい』って視線が送られてくるし、多分私もそんな目してる。流石に表情は変えてないけどお互いの纏う雰囲気殺気から一段階下がった。そして大匙1の謝意が追加された感じ。うん、気合入れ過ぎたね。

私は『ビクトリアとして勝ちまで進めないといけないし、苦戦しても負けるなんて絶対許されない。』あと単純に制限下の勝負に負けた

くないから本気でやっていた。そして異形もおそらく『仕事として舞台上に立っている以上オーダーは完遂してそれ以上をするべき、いつもの『再生』は絶対使えない。そして手を抜くのは観客にもビクトリアにも失礼。負けるにしてもいい負け方を。』と思った結果本気でやっていた。

……うん！ 二人ともやり過ぎ！

しかも異形ちゃんは私と違い人前にでた経験とかほとんどない、あったとしても数十人。しかも関係性もお客じゃなくて同僚とか仕事仲間とかそういうのばかりだろう。こいつ剣神祭までの剣闘士時代思考とか結構制限されてたし……。そりゃ初めてがこんなクソデカイ舞台でクライマックスのシーン任されるとか緊張するよね。緊張のあまり最初からフルスロットルしちゃうのも解るよ。

(ねえ異形っち、うんうん。ごめんね？ 二人ともやり過ぎちったね、うん。んでそろそろ時間的にいい感じだから、メの準備はいるから。合わせられる？ あ、いけそう。よかつた〜！)

両者鏢迫り合いの状態から思いっきり弾いて、剣舞を再開する。技の構成は体を大きく使う大技多めで、さらに演奏チームへと指示出しをすることでクライマックスへの準備に移行させる。音楽が変わることで私からは指示を出せない演出たちにも意図が伝わり、ライトや魔法で場が整えられていく。

よしよし、じゃあ場も整ったことですし。後は演者がバシツと決めちやいましょう！

両者ある程度離れた位置から剣舞は再開される。先ほど二人とも後方へと距離をとったが、彼の方が飛距離が短い。出来るだけ舞台の中央で見せられるように私が距離を詰める。直線移動だけに加速を使用し、一気に異形の前へ。それを迎撃しようと彼の攻撃が飛んでくるが、それはこちらでも把握している。

体を大きく見せながら、観客が全身を見ることが出来るように大き

な動きでそれを回避しながら、合間合間にこちらからも攻撃を入れていく。しかし体に当てることはしない、寸止めか腹を当てる程度。そして徐々に戦況がこちらに向いているように動きを変化させていく。

(BGMも終わりまで残り10秒！)

目線で彼に詫びを入れ、少しだけ強く打ち込むことで体勢を崩してもらおう。普段ならこの程度で崩れるほど軟な鍛え方はしていない男だが、彼にも終了までの時間は伝えている、音楽もなにか聞いてもらって覚えているはずだし、私が決めるに行くことを理解してくれたのだろう。

異形ちゃんがよろけた隙に、後ろに下がり強く踏み込みながらも一度彼に向かって走り出す。

剣を回転させながら空へと放り投げ、その間に異形へと突貫する。姿勢を崩していた彼はすでに体勢を直しかけていたが私の飛び蹴りを確実に受け止められるほど戻せてはいない。剣の腹で蹴りを受け、私はそれを踏み台へと変える。目指すは放り投げた剣へ。

空中で回転するソレを掴み、同時にルーンを宙に刻む。空中で私を支える足場と、剣への発光の魔法。透明な足場に足裏を合わせ、地面へと向かうために蹴りつける。手には強く光り輝く剣を持ち、それを異形の横。ちやうど観客から剣が見えるように、叩き落とす。

ま、これでおしまいってわけだ。

「ふいふ、なんかなくなったあ……。いやマジでゴメンねーちゃん。」
「いや、こちらもし訳ない。緊張しすぎて色々加減を間違ってしまった。」

「お互いにね。」

何とか最後まで演じ切り、舞台裏で軽く言葉を交わす。お互い慣れない環境・状態でやり合ったからもうヘトヘトだ。肉体的にはまだ余裕があるけど、精神的にかなり削られている感じ。いや最後の締め、演目としての締めにミリアムちゃんも出来るように練習してもらってよかったよ……。ちよつと呼吸整えられるくらいの時間貰わないときついっす。

『こうして、私は剣神祭を勝利した。ま、色々と言れなかった部分はあ
るけれど……。私の半生を伝えることはできたんじゃないかな?』

呼吸を整えながら舞台の中央で”ビクトリア”として言葉を紡ぐ彼女を見る。当初の予定では私が最初の語り、そして最後の語りをしながらめてそこでカーテンコールだったんだけどそうなる私との負担が結構大きくなるってことで複数の代案が用意されていた。総支配人のエンリットと色々話した結果、私が大丈夫なときはそのまま。無理そうな時は逆に過去の私が”私”として締めをするっていう代案が用意されることに。

最後まで私が演じ切るルート、ミリアムちゃんが大人の”ビクトリア”として最後を締めるルート、そして今日使われる大人の”私”と、子供の”私”の両方で締めるルート。その時の状況に応じて選択していく、って感じだね。つと、そろそろ私も行かないと。あ、異形ちゃんもカーテンコール出てもらうからね?

お客さんの反応視る限り十分成功してるだろうし、エンリットちゃんが箱から出て何とかこれ以上爆発しないようにしてるから絶対やるはず。大丈夫大丈夫、バレないって。というかバレてもヘンリ様の保護下にいる貴方だったら大丈夫でしょうに。あ、スタッフさんそろ

そろ？　だよね？　じゃ、いつてきまーす！

『それからのことは……、つと。』私の方がよく知ってるって。』
『だね。』

子供の時の”ビクトリア”ではなく、今の”ビクトリア”をトレースしているミリアムちゃんの声に合わせるように私も舞台に上がる。さつと距離を詰めて、彼女を抱きかかえ観客席へと顔を向ける。うん、改めてみるとすごい人だ。とりあえずハプニングらしい事件は起きず、全力で演じることはできたけど……。楽しんでもらえたかな？　ま、ここからよく見えるヘンリ様の席を見る限り出資者様的には大満足だったようだけど。

『それからのことは、まあ簡単だ。剣神祭を勝利した功績によって私は市民になった、その後は今みたいに何かを演じてるってわけだ。』
『あんまり喋り過ぎるとね、今の雇い主に怒られちゃうからさ。ごめんね？』

私のセリフに、アドリブでミリアムちゃんが”ビクトリア”の言いそうなことを付け足す。というかソレ私が言おうとしたセリフなんだけど。……もう君が明日から全部する？　戦闘描写は難しそうだけどそれ以外ならもう出来るんじゃない？　え、さすがに無理？　そっか、残念。

抱き上げていた彼女を下に降ろし、二人で姿勢を正す。

『では、今日はこれでおしまい。』

『またどこかで会えた時は……、よろしくね？』



「……………やばかった。」

「なにアレ…………、いやほんとに何？　すごお…………。」

観客席の一角、一般席で先ほどまでの劇を見ていた冒険者の二人は半ば放心しながら周りに合わせるように手を叩いていた。正直開いた口が塞がらず、色々と他人にお見せできないようなお顔になっているが…………。まあ周りも大体そんな感じなのでそこまで気にしなくても大丈夫だろう。それに彼女たちは自分の顔の状態をどうにかするよりも、この胸の中で暴れまわる感情を何とか形にしようと藻掻くことに注力していた。

「まずさ。」

「うん。」

「音ヤバくない？　アレが”音楽”ってやつなんだろうね。」

今回劇で使用された楽器や音源、そもそも中世に入ろうかといふところの時代であるこの世界において複雑な金管楽器などの楽器類は存在どころかその原型になったものさえ存在が怪しいところ。そんなところにいるいきなり”彼女”が千年単位でのブレイクスルーを果たしてしまったため、聞いている側からすればたまったもんじゃない。

一瞬にしてその音の圧力に押しつぶされ、脳が新たな世界に対応するため活性化し、ようやく音を拾うことが出来る。それまで祭りや吟遊詩人、教会などの人の声や簡単な楽器などでしか知らなかった音が一気に押し寄せてくる。正直音楽だけでも金を払っても良かったの

ではないかと思ってしまうレベル。

「あと演出、って言うのかな。ライトとかさ、魔法とかさ。……どれだけの魔法使いが裏にいるんだろ。」

「すっごい目を奪われた。でも冷静に思い出してみると色々やばい。」

劇の最中、ライトや煙幕などの小道具。そして魔法による光源の追加や効果音の追加が多々行われていた。これまで劇中における魔法の描写は小道具や大道具による誤魔化しが一般的であったのだが、そんなもの知るかというレベルで魔法使いが動員され何かのCG映画でも見ているのかと思えるほどに使用されている。

魔法使いは基本貴族か、その血を引くものであり、その有用性から貴族家や軍に囲いこまれているのが常である。そのため劇なんかの娯楽に使用するなど不可能のだが……、今回は違う。後援者が彼女である以上その心配は一切なく、さらに主演もルーンという詠唱いらずの魔法使い。彼女たちがこれまで脳内で想像していた物語や戯劇、それを軽々と超えるものが眼前に広がっていたのだ。

「ほかにも色々、演技とかさ。ストーリーとかさ。私たちの推しの人生とかさ、言うべきことはあるんだろうけど……。やっぱり最後。最後ヤバかった。……マジでナニアレ。」

「わからん。ただヤバいことだけ解る。」

剣神祭の時、席をとることが出来なかったため立ち見ではあったが彼女たちもあの試合を見ていた。あの死闘とも呼べる戦い、アレと同じことが目の前で繰り広げられていた。それに、二人とも冒険者として戦いに身を置いている身だ。あの壇上で戦っていた二人がどれだけ規格外なのか、そしてアレがまだ全力ではないこと、観客に魅せるために成立させた剣舞だということを理解していた。

だが、単なる剣舞ははずなのにあの圧力。二人が互いに相手を倒すためだけに発した圧力はここまで届き、ただその光景を目に焼き付

ける以外の行動をとれなくさせた。強さへの抗いきれない憧れか、それとも生命の危機を感じたが故の動物的な本能か。それを理解することはできなかつたが、とにかくあの二人がヤベエことだけは理解できた。

戦いにおいて何も知らぬ幼子などであればただ目の前に広がる神話の様な戦いに目を奪われるだけでよかったのだろう、だが”見える様に調整されている”ことを理解してしまった今。自分たちの推しのすごさを再確認してしまう。

「とうにかさ、最後の戦闘の時の魔法の演出さ。できるもんなの、アレ。」

「いや無理でしょ。支援魔法って対象を見定めて、その上色々リンクさせなきゃできないのに……。」

「となると……、アレ全部ビクトリア様が自分でやってる？」
「だと思う。」

こそこそと二人で顔を合わせながら会話を続ける二人、すでに舞台ではカーテンコールが始まり劇の総支配人で演出もしていたらしいエンリットという女の人が何かを話している。何故かここから見ても小刻みに震えている様な気がするが、緊張でもしているのだろうか。

「そういえばだけど、ちょうど今ビクトリア様に抱きかかえて貰ってるあの子役の子。あの子も演技すごかったよね。」

「確かに。ビクトリア様はホントに”ビクトリア様”って感じだったけど、最後のあの子もほんとに推しがそのまま小さくなったみたいなの……。」

作中の彼女が、過去から引っ張ってきた当時のビクトリア様だと言われても信じてしまうような演技。確かに顔の造形でそれはないとはい切れるが、その身に纏う雰囲気完全に自分たちの推しだった。

すこしパンフレットを覗いてみれば今回の公演以外にもいくつか出演の経験があるみたいだし、多分イケイケの子役なのだろうと納得する二人。

でも最後の締め、あそこの”ビクトリア”二人が対面するシーン。身長差はあるけれど確実に彼女が二人いた。正直アレを見ただけでも満足というか、一瞬見ただけでお腹いっぱいになるようなシーンがあり過ぎてもう溺れているというか。ほんとすごかった。

そんな話をしているうちに、カーテンコールも終わり一斉に拍手が始まる。二人も顔を合わせて会話していたがちゃんと内容は聞いていた、一旦感想会を中断し自分たちもそれに加わる。

「いや、マジでもつかい見たい。」

「わかる。……でもお金がねえ。この後のグッズ販売とかを考えると絶対ムリ。」

「だね。色々落ち着いたらどっかのダンジョンでも潜って金稼がないと。」

そう言いながら帰宅の準備を進める二人、三時間近く座り続けたせいか体がしびれている。何とかそれを動かしながら立ち上がろうとしたとき、ちょうど視界の端で出口に向かって疾走していく集団が見えた。

「ん？ なんだろアレ。グッズの取り合いとか？」

「グッズ？ でもアレなんか山のように搬入してなかった？ 来るときちよつと見たじゃん。ほら転売と爆買い対策で売れ残り覚悟の大量仕入れ！ って書いてたし。」

そう言われ思い出すのが劇場の外に作られた会場、ここに来るまで屋台とか色々出ていたがそれ以上に目を引いたのが港の集積場かと勘違いしそうなほどに積み上げられたビクトリア様関連グッズの山。これまで販売されていたもののみならず、今回の劇に合わせて作られ

た新規の品が所狭しと並べられた特大スペース。

お貴族様たちが文字通りの箱買い、複数の商品が梱包されている箱ごと買っていくことが何度かあったためそれ対策にこれでもかと並べてあったあそこのことを考えるに品切れはありそうにない。

「あの〜。」

「え?。」

ゆつくりと歩く人の波に乗り、会場の出口に向かって歩きながら話しているその後ろから男性の声。結構若めの青髪の男が話しかけてくる。荒っぽい冒険者を仕事としている手前そういうナンパとかの対処は慣れたものであるが、声の覇気のなさからそういうのではないと判断できる。振り返ってよくよく見てみれば服装からおそらく貴族かそれに準じる様な人間のようなだ。

「舞台終わった後に主演の方が見送りをしに来るらしいですよ、それじゃないですかね。」

「え、マジ?。」

彼女たちがそういった瞬間、その話を聞いていたのか周囲の数名が全速力で出入り口に向かって走り始める。その勢いというか、覇気というか、必死さのレベルに若干引いてしまう三人。おそらくその数名がなければここにいた彼女たち二人も全速力で走るに違いなかっただろうが、その光景を見て冷静になってしまった。

「あゝ、それでかあ。」

「ミスったね。」

「お二人はよろしいので?。」

そう彼に聞かれ、顔を見合わせる二人。先にかなりの集団が突入していつてしまったし、おそらく今頃人が集まり過ぎて団子状態になっ

ているだろう。ビクトリア様のスタンス的に時間ギリギリまでより多くの人と交流しようとしてくださる方だから……。かなりの待ち時間になりそうだが、今から走って人に塗れ最悪溺れるぐらいなら待った方が良さそうだ。

「うん、時間なら有り余ってるし。」

「グッズの販売店とか巡って時間潰しながら隙を見る感じにするよ。

……あ！ 教えてくれてありがとね！」

「いえいえ。」

そう言いながらゆっくりと歩き始める三人。会場に収まっていた人数のせいか列の進みはかなり遅い、まあ彼女たちのようによく”イベント”に気が付き全力で走っている人間も後ろからだともよく見えるし、それも理由なのだろう。

「そういえばお兄さん、気合入ってるよねその髪。わざわざ染めたの？」

「(え、ちよ！ この人多分貴族様だよ！ あんまり気安く喋んなって！)」

「ああ、いえ。お気になさらず。貴族家に生まれた身ではありませんが、継承権はありませんので。どうぞ気にせず。ああ後、コレは地毛です。」

「へえー、でもいいなあ！ 私も染めてみようかと思ったけどアレ庶民にはちよつと高いんだよねえ。」

「そうそう、それに一時期青髪ばっかになってヤバかったもんね。」

そう言いながら過去を思い出す二人、一斉に髪染めの魔道具が売れたと思えばその数週間後に色落としての魔道具が売れたあの時期。運良く？ 運悪く品薄で買えなかった二人ではあるが、青色が大量発生したことで一斉にブームが鎮火。色を落とすための魔道具が飛ぶように売れ、時期を逃して髪染め仕入れ過ぎた魔道具店の親父がガチ泣

きしていたことを思い出した。

「それでき、お兄さんはどうだった？　せつかくだしちよつと感想聞きたいのよ。」

「教養持つてるお貴族様に話聞けることなんてめつたにないしさー！」

「あく、そうですね。すぐくよかったと思いますよ。ちよつと昔を思い出してしまいましたし……」



「ビクトリア様アー！」

「ごつちむいてえ！　握手してくださいまし！」

はいはい、ビクトリア様ですよ。いや、お礼と言いますか普段こういうので顔出すのに『疲れてるから』とかの理由で顔出さないのはダメだからね。劇の終わりに玄関口まで出て帰る皆さんにご挨拶ですよ。最初はサプライズ、って予定だったのだけどどつかから漏れたみたいでお貴族様のお嬢様方が大量にやって来ちゃった。ヘンリ様あたりが零しちやったかね？　それが一気に広まってこうなつたとか。

「見に来てくれてありがとう、楽しんでくれた？」

「もちろんですよ！」

「それは良かった。今後とも、よろしく。」

人の量が量が、お貴族様たちが猛ダッシュしたのにつられたのか、それとも独自の情報網があつたのか、市民階級の人も我先にとすつごい勢いで飛んでくる。なんだろ、オイルショックの時のトイレットペーパーの気分。ほらほら、私は一人しかいないから取り合わないの。一般人が三桁程度体重掛けて来てもブレないぐらいの体幹は鍛えてるけど限度があるよー！ そんなんじゃサイン書いてあげないぞ♡

……自分で言つてアレだけどやばいな。なんかもう人間やめてる。今更かもしれないけどさ？

「はい、サインかけたよ。大事にしてね？」

さて、まだ今日が初日だけどこの反響を見るに劇は大成功と言つてもいいだろう。自分でも上手くできた感触があるし、エンリットちゃんがかーテンコールでのあいさつが終わった後舞台裏で大爆発したことからそつちでも保証されてる。

ここから一月近く公演し続けないといけけない訳だけど……、まずは目先の成功をお祝いしようか！

幕間

71：そうだ、海にいこう。

少し耳を傾ければ、波のせせらぎが聞こえてくる。青い海に、青い空。境界線が消えてしまいそうな一面の青、足元の砂浜は真っ白でより海の青を強くしている。少し空を見上げればほんの少しだけ空に浮かぶ雲。青と白だけの静かな世界がここにあった。

「いいねえ、夏。」

時期は“ビクトリア”の初回公演が行われてから半月ほど後、会場の定期点検や大道具小道具類の補修。衣装の洗濯や修繕などのために興行を一時中断したところのこと。元々一週間ほどの休みを全体で取る予定だったこともあり、現在は楽しい楽しい休暇中だ。ほんとはどこか場所を借りて演技の練習をする、ってことも考えたけど思ってたより疲労がたまってたんだよね。

大勢の目に晒されながらの演技を半月間毎日ずっと続ける、その上手伝つてくれてる現役剣闘士ちゃんたちの相手や、異形ちゃんの相手もしないといけない訳だから当初の想定以上に疲れちゃった。剣闘士ちゃんたちはまだ“こちら側”すら認識できない様なレベルだし、子供が少しずつ積み木を重ねるのを見る気持ちで相手出来る。けど異形は別、別物というかマジ”異形”。

戦闘の描写にリアリティを出すために毎回違う殺陣をしているというか、制限下における全力の模擬戦を超えた実戦なんだけど、あいつ日に日に強くなっているというか成長してて……。観客に魅せるために二人とも速度を落としているのをいいことに、技術面の向上をやりやがった。この前なんか何か一つこっちがミスれば負けそうになるレベルで追い込まれたしさ……。うん、休ませろ。

ま、早い話。リフレッシュのためアルとマリーナを連れて海水浴に
来ました♡ ってことで。



ことの始まりは休暇一日目の朝、ちよつとした用で帝都の教会の方
まで行ったその帰りだった。

「いやゝ、朝起きた時はマジで死ぬかと思っただけど何とか収まってよ
かったね、ほんと。」

「ですね……。」

この日は朝起きた瞬間から色々おかしくて、様子を探るために外に
出た瞬間『あつつつつつつ!!』と叫んでしまうぐらいには暑かつ
た。打ち水したら一瞬で蒸発して、真っ黒な鉄の上で卵割ったら目玉
焼きになるくらい暑さ。元々の気候が日本みたいに湿度の多い土
地ではないこともあってギリギリ耐えられるレベルではあつただけ
に、厳しいことには変わりない。

「にしてもなんかこう、”神様”って感じな理由でしたね。」

「あく、ねゝ。一回ウチに来てるし、なんかもう性格ある程度解つ
ちやつたでしょ。」

「はい。正直あの一件以降自分の信仰がちよつとブレたといえます
か、盲目的に信じる感じではなくなつたと言いますか……。」

今日の猛暑は単純な異常気象ってわけではない。クソ暑かつたのは
朝の数時間だけだったし、昨日は普通の夏の日。今の気温もまあ暑
いが一般的な温度だ。地中海の気持ちよくて過ごしやすい夏、って感

じ？ んでなんでこんなにクソ暑くなっていたかというところ……、この真つ青なお空の上にはいらっしやる神様のせいなのよ。いや正確な原因は人類のせいやけど。

現代の菓子レシピの横流しや、先日の『プリンで神降臨事件』などもあり、聖職者どころか信者ですらない私はなにかと教会勢力との接点が多い。今回の事件の解決のために呼び出され、ちよつとお手伝いしたお礼に原因を教えてくださいただが……、なんでも帝国から遠く離れた場所にある教会で『冷やし中華の上にサクランボを乗せるか乗せないか』について長期間議論した聖職者たちがいたそう。それもかなり位が高い奴ら。こつちでいう枢機卿とかその辺のレベルらしい。

話を教えてくれたレトウス司教によると、

『私は詳しく知らないのですが、なんでも東の方の国では小麦の麵の上に様々な具材を乗せ、冷たいスープをかけることで涼をとるとのこと。その上になんでも赤くて甘い果実。おそらくサクランボを乗せるそうなのですが……。それを乗せて神に献上するか、省いて献上するかケンカになってしまったようです。』

何でも神としては『捧げものはなんでもウエルカム、季節が感じられるものはさらにプリーズ！』という性格らしく、毎年捧げられる”冷やし中華”が結構楽しみだったようで、しかも甘いもの好きな彼女からすれば彩り的にも最後のデザート的にもさくらんぼを乗せるのがマストだったそう。

しかし信者たちが真剣に話し合っているのを見て、『これどつちかに加担したらもう片方完全に消えるな、乗せるの嫌な奴の気持ちも解らんでもないし……。黙っておこ！』とお思いになりお待ちになることにしたそう。あつてもなくても愛する神の僕の捧げ物、笑顔で受け取ろうと。最悪別の地域で捧げられたサクランボをこつちで乗せて楽しもうと思っていたそう。

『しかしながら議論が活発化しすぎ、続くこと約三日。寝る間も惜しみ最終的に殴り合いのケンカになり、最後に残ったものは”乗せない派”の人間。そして何を思ったのか、それとも三日間寝ずに議論した上殴り合ったせいで頭が働かなかったのか。三日間放置された”ヒヤシチューカ”なるものを捧げてしまったようで……』

汁はすでに乾き切り、キュウリや卵などの具材はカピカピ。麺はもう食べられるものではないし、乗せて欲しかったさくらんぼも乗っていない。現地の教会勢力の全力を挙げて作成されただけにその冷やし中華のクオリティは神ですら唸らせ楽しみにするほどのものだったそうだが……、三日間夏場に放置すればもう食べられるものではない。

三日間ずっと待っていた上に、いつ捧げてくれるのかとワクワクしながらその議論の様子を眺め、最終的に食べ物が無駄にしてその無駄にしてしまったゴミを送り付けられた神は……、まあブチギレたそう
で。

『その教会があつた付近が一瞬にして焼野原になり、神のお怒りで全世界も異常気象に包まれてしまいました。『仕事増やさないでえ』と泣きながら全世界を飛び回る天使様のおかげで我らもその状況を知ることになり、各国の料理人や菓子職人を総動員して神様の機嫌を取ることになりました……。』

ま、そんなわけで私もお呼び出しを受けたというわけだ。あつちからすれば私は『なんか定期的にヤバいレシピ（現代知識）送って来るスゲー奴』であり、『おそらく他国の料理や菓子について造詣が深い人物』である。帝都の教会に伝わっているのかはわからないが、教会勢力のトップである聖女からは『プリンの件はマジでウチの神がすみません』と思われているだろう私、まあ呼び出されてもおかしくはない。

そんなわけで朝起きて『何今日クソ暑いな』って愚痴ってたら急に

教会からお呼び出しを受けて、『なんかいいお菓子のアイデアない?』『もしかしたら冷やし中華作れない?』と言われて料理してきたわけですよ。アルは水の魔法を、私は氷と水の魔法を使えることもあり、教会に集まってきた避難民の人たちに涼をとらせながら料理してたって感じ。

その後は何とか神の機嫌が直り、異常気象も終了。礼といくつかの謝礼を受け取って現在帰路に就いているって感じた。あ、ちなみに問題のさくらんぼ論争をしていた聖職者たちは機嫌が直った後に、甚く反省してたそうだから元通りにされたそうです。もうケンカしちやだめだよ?」

(まあ三日間おあずけ喰らってキレるのは”まだ”解るけど、最終的にシュークリーム捧げたら機嫌治るとかなあ……。子供っぽいとは思ってたけど、なんかねえ。とにかくキレるのはいいけど、こっちに被害がないようにしてもらいたいよ。)

「そういえば師匠、その”ヒヤシチューカ”でしたっけ? 美味しいんですかね?」

「冷やし中華ね、さくらんぼが今手に入るかはわからないけど……。ウチでも作れるよ、昼にでも食べる?」

「あ、はい! 食べたいです!」

んじや、帰りに色々買って帰ろうか。麺はパスタ用の生麺を店で買うことにして、上の具材は適当に。あとはマヨとかで味を調べればいけそうかな? 出汁とかそういうのこっちじゃ無理だし、なんか別物の創作料理になりそうな気もしないけど……。まあ多分美味いだろうし何とかなるでしょ! ……え? マヨはどうするのかって? そりや手作りだけ。転生者の必須スキルでしょアレ?

「にしても冷やし中華か。……もう夏も真っ盛り、だなあ。」

ちよつと空を見上げれば夏の高い空がよく見える。劇の仕事とか

で色々忙しくて忘れてたけど、気持ちいいぐらいに夏真っ盛りだ。日本みたいに湿気がほとんどない分過ごしやすいし、いいよねえ。……あ、そういえば夏らしいこと全然してないな。

子供にとつてこの季節は本当に夢の様な時間だ、夏休みってこともあり遊び放題。社会人もまあ人によるだろうけど長期休暇があったりなかったり。何かしら夏つてのは特別な感じがする。この世界じゃ文化も何もかも違うから誰も共感してくれないだろうけど……、それが私の行動を縛る理由にはならない。自身にとつて前世過ぎた夏の記憶はキラキラしたものばかりだったし、できれば隣にいる彼女にもそんな記憶を経験してほしい。

「ん〜、夏っぽいこと言えば……。」

「師匠？　どうかしました？」

「……そうだ。アル、海行かない？」



と、いうわけで。

「海だあ—————!!!」

そう叫びながら走っていく彼女を眺める。

いや〜、言ってみるもんですね？　ヘンリエッタ様をお願いしてみ

たその翌日。ちょうど今使っていないビーチがあるということや
やって来たのはプライベートビーチ。ヘンリ様の家の方で管理して
いる砂浜みたいで、好きに使ってくれていいらしい。いや、やっぱ
超級のお金持ちはレベルが違いますな！ 明らかにこの砂浜プライ
ベートで持つてちゃいけないレベルの奴ですよ！ 前世だったら旅
行客で海が人で埋め尽くされそうな好立地&広範囲！

こんなもん一人で楽しんじゃだめだろ、ってことでアルちゃんとマ
リーナを連れてやって来ちゃいました！ いやはや、海水浴とか何
年ぶりだろ。

ちなみに二人以外にも何人か誘ったんだけど『皇帝陛下とのお茶会
があるから無理そう、さすがに三連続でバツクレてるからそろそろ行
かなきゃ。』って言われて残念そうに断られたり、『あわわわわ、推し
に誘われた！ この人生に一片の悔いなし！』って爆散されたり、
『仕事があるから無理、というか仕事増やした顔でよく誘えるね。
まあ嬉しいけどさ。』って普通に断られたり、『すみません、ちよつと
家族とお休みを頂こうと思っていたので……』と申し訳なさそうに断
られた。ちな、ヘンリ様・エンリットちゃん・ドロ・ミリアムちゃん
ね？

ま、みんなそれぞれの過ごし方があるからね！ 私たちは私たちで
夏を満喫しちゃいませよ！

「あ、あの。じ、ジナ様？」

「ん？ どした？」

「そそそ、その水着！ とっても、とってもです！」

ん、ああこれね。

青と白のストライプのビキニ、その上から真っ白なパレオ、あのひ
らひらした丈の長い奴ね？ アレが付いている水着。胸元の部分は
単に布で繋がっているんじゃないやなくて金のリングになっているタイプ。
お任せしちゃったから下の方の角度がちよつとすごいことになって

るけど……、まあパレオで隠れるからいつか。この世界じゃ水着らしい水着はあんまないって話だったけど、相変わらずすごいもん仕上げてくれるよね、ドロは。

(まあ代金すごい額になっちゃったけど……、二人のも作ってくれたし安い買い物だよ。)

アルの水着はスポーティなタイプ、体のラインがけっこう出る奴だけど肌面積は私よりも大分多い。まあ彼女の場合はあるところが全く出てないから……、ああうん。大丈夫大丈夫。未来があるから、心配しないで？ 上下白ですこしフリルが付いていて結構可愛いよ。うんうん、お母ちゃんそんな可愛い水着が似合うレディに育ってくれて嬉しい……。え？ ママじゃない？ それはそう。

そしてマリーナの方の水着は、貴族って伝えていたこともあって優美な感じになっている。カラーは黄緑色でワンピースタイプっていうのかな？ 首元の肌が出ている以外は肩から太腿あたりまで布で覆われている。お上品なお嬢様だねえ……。まあ私の水着を見たせいで鼻血がヤバいことになってるし、いつか布せんぶが真っ赤に染まるかもしれないけど。

因みに全員に専用の剣帯が付いてちゃんと剣を下げているせいかソシヤゲでよくある水着イベントのスチル感が否めないのは秘密、かなり魔物を間引いてはいるみたいだけどやっぱり海に危険はつきものだからさ……。

とうかマリーナさつきあげたタオルもう真っ赤に染まってるじゃん。大丈夫？ あ、幕間だからギャグ補正で何とかかなる？ それも良かった。明らかにリットル単位で鼻血出てるもんねソレ。

「あー、もう。せつかくの水着汚しちやダメでしょう？ ほら新しいのあげるからソレ渡して。」

「しゅ、しゅみましえん……。」

「師匠ー！ 海すごいで……、ってマリーナ何してんの。」

「じ、ジナ様がすごすぎて。」

「ああ、うん。いつものですね。」

うくん、やっぱ知らないうちに二人の距離がなんか近くなっててエモいなあ！ アオハルしてるう！ 私も！ 私も混ぜて！

「いや師匠そんな年じゃないでしょうに。」

「うくん、愛弟子が辛辣！ でも嫌いじゃないわ！」

さ、ふぎけるのも大概にして設営していきましようか。

プライベートビーチということもあり、この場には私たち三人しかない。そしてここにあるのは一面の海と、一面の砂浜のみ。パラソルとかベンチとか全部自分たちで用意しないとイケないのよね、あとBBQとかもやる予定だから荷物は多め。二人には好きに遊んで欲しいから私一人で全部準備しなきゃね。

「さ、お二人さん。私が設営しちゃうから好きに遊んでおいで。あ、あと別にどこ行ってもいいけど危ないことはしないのと、30分ぐらいたったら戻ってくること。OK？」

「了解です！」

「わかりましたわ。」

「あく、海ってこんな感じなんだあ。」

そんなことを言いながら浮き輪の上で波に揺られる。私もマリナーも別に泳げない訳ではない、けど師匠がわざわざ浮き輪を用意してくれたわけだし使った方がいいかなあ、って思っ二人とも海の上でプカプカ中だ。うい、やっぱ海の中って涼しいし、波の震動がかなり心地いい。私たち以外誰もいないし、なんか言葉にできない良さがあるなあ。

「そうなのですか？ てつきり何度か入ったことがあるかと。」

「帝都住みだけどね、私たちが見る海って基本港だからさ。入ったら怒られるんだって。それに元々内地生まれだし。」
「なるほど。」

二人とも現在は帝都住みであるが、両者ともに海は初めて。私は故郷で少し川で遊んだくらい、帝都に来てからはまあ剣闘士の身分で海水浴とか行けるわけがないし、解放された後でも何かと忙しくてそんな暇なかった。あと単純に海のイメージが港と直結してたから『海水浴しよ』って気にならなかつたのもあると思う。

マリナーの場合はラクラクで一応貴族の子として泳ぎ方だけは做ったみたいだけど、本当にそれだけだったみたい。近くに流れる川で父親や騎士団たちに見守られながらちよつとだけ泳いで、後は涼んで終わりってのが普通の夏だったようだ。まあこいつお嬢様だしなあ……、そのせいでたつた三人で海に来れたことが嬉しいらしい。ま、確かに大勢に視られながら泳ぐってのは気分良さそうじゃないしね。

「海といえればかなり危険な場所と聞いていましたが……、平和ですね。」

「わかる。」

私たちの海へのイメージは、総じて『ヤバイ』だ。まあそれもそのはずで、海は私たちに恵みを与えてくれる存在ではあるが、同時に死の危険が常に付きまとう危険な場所だ。海には海の魔物がいて、陸上に住む人間からすればどうあがいても太刀打ちできないような存在が多くいる。聞いた話によると人が縦に30人くらい並んでもまだ足りないような長さの化け物がうじゃうじゃいるらしい。

そのため比較的安全な浜でもまともな感性を持つている人は近づかないし、海で働く人たちは基本腕自慢が多い。これは船乗りさんたちのジョークらしいのだが、『一番危険な仕事？ そりゃあ俺らだよ。だって0か100だもん。死ぬときはみんな死ぬから。』というのがあるらしい。船が破損したり、放り出されでもすればもうその場で終わり。

故に師匠がウキウキなのに反して、二人とも結構な恐怖を胸にここまで来たのだが……。

「マジ平和。」

「魚すらいませんよねえ。」

二人でプカプカ浮いて遊んでいても何も来ない、すごく平和だ。最初は結構恐る恐る浮き輪片手に海に出たのだが、ちよつと潜つても魚一ついない綺麗な澄んだ海。これなら安全だろうと二人で楽しく海水浴、つてワケ。

あ、後。マリリーナがヘンリ様に聞いた話によると『ああ、あそこ？ 定期的にウチの子たちで駆除してるのよ。エサになる魚すらよつて来ないように全部ね？ だから安全よ。ま、たまに迷い込んでくることがあるけどビクトリア様がいたら大丈夫じゃない？ 楽しんできなさいな。』とのことだそう。

目が完全に『私』も、行、き、た、い、!!!』だったそうだが、そう優しく言いながら送り出してくれたんだって。

『浮力』、でしたっけ。わざわざ海用の魔化を施してもらった武器用

意しましたけどこれなら必要なさそうですね。」

「そう？　これ結構面白いよ？　ほら浮き輪代わりに。」

そう言いながらちよつと剣で遊ぶ。普通は沈むはずだが、最初に一定の魔力を注ぐことで長期間水に浮くという魔化が施されている。剣に掴まって海に浮かぶとか言うありえない状況が結構面白い。というかコレ剣の上に乗ったら波の上走れるんじゃないやね？

「危ないからやめなさいな。」

「へいへーい。」

「それにしても、ジナ様の水着。……ヤバくない？」

あー、という適当な返事をしながら剣を帯に戻す。まぐた鼻血出してるよコイツ。気持ちは解らんでもないけど。

今日の師匠が着ている水着は、青と白の横縞模様の上に青い帯と白のより大分透明度が高いパレオに、目を隠す大きなサングラス。胸元のリングの先から見える地肌がもうすごくアレだし、私たちの水着とは違って横に止めるだけのタイプだから肌面積がすごい。しかも下の方の角度は色々ケンカ売ってるのかと思うくらいやばい。いくらパレオで隠れてると言っても透けるんすよ……。語彙力バイバイ……。

（同性の私らでも息を呑むレベルだしなあ。）

私はまだ慣れてるといふか、同じ家に住んでいるのでお風呂とか一緒に入るのでまだ耐性がある。けどマリナーはそうではない、意識を切り替えて”まとも”にするのはできるようだがちよつと気を抜いただけでこれだ。綺麗な青い海を赤に染めないでよ……。ま、正直全裸の時よりもえつちななのは解ります、はい。

(ほんと、私たちだけでよかった。)

ヘンリ様はガチで発狂するだろうし、エンリットという人は多分えぐいレベルで爆散してしまうだろう。他に海水浴に来ていた人がいれば見とれて波に吞まれるとかあるかもしれないし、情欲に負けた人が手を出そうとして処されるとかもあったかもしれない。マジでプライベートでよかった……。なんでしょ、師匠の良さは体にあると思いますか。顔もすごいんだけど、師匠よりも顔がいい人は見たことあるし一番じゃない。だけど肉体美ってなると師匠よりもヤバい人を私は見たことがない。

「ほんと、すごいよねえ。」

「ですねえ。」

「師匠のお腹。」

「ジナ様の首元。」

「……………」

「……………」

「はあ!? お前いつも胸とか尻とか言ってるくせに首元お!? やるなら統一しろやお前!」

「ああん!? アレの良さがわからん奴が片腹痛いですわ!」

「引き締まりうっすらと出た筋肉の線! 無駄の一切がない真っ白なキャンパスの上にあるおへそ!」

72：うらばなし

「それで？ どうだった初めての海は。」

「よかったです！」

「砂の感覚がかなり面白かったですね。」

そっか、そっか！ 二人が楽しそうな顔してくれてお母ちゃん嬉しいよ！ まあママじゃないんですけどね！ ってことで設営終わったわけけど……、何する？ 一緒に海で遊んでもいいし、パラソルもビーチベッドもちゃんと人数分用意したからのんびりするのもヨシ。ちよつと早いけどもうご飯の用意始めちゃってもいい。ま、ご飯の場合は用意できるまで二人でちよつと遊んでてもらおうことになるけどね？

ここにくる計画を練ってた時は『泳ぎの訓練』とかちよつと考えたけど、今日はお休みデー。そういう面倒くさいの、ややこしいのは全部忘れて好き勝手に遊んでいい日。ちやくんと遊び道具も持ってきてるよお？ 砂遊び用のバケツとかスコップでしょ？ 大きめの軽いボールでしょ？ 後浮き輪に、角を丸めた大きめの木の板。浮力すごい奴。

「色々ありますね。……というか荷物の割には少なくないですか？

あそこに滅茶苦茶デカイ箱ありますけど。」

「ああ、来た時にジナ様が運んでいらつしやったアレですか。」

うん？ ああ、アレね。あの箱はクーラーボックスだよ。氷敷き詰めて魔物素材で冷気が外に出ないようにした箱。中には今日のお昼に食べる食材とかが入ってるの、こっちで調理するのも手間だし家で先に切ったり下処理した後は焼くだけのとか完成品とかを入れていく。……あ、はちみつレモン水作って来たから飲む？ というか飲む

どけ、熱中症対策。

「あ、はい。いただきます……。」

「(アル、あれツツコミ待ちですか？ 箱のサイズが棺桶より二回りぐらい大きいのは。)」

「(いや、多分師匠アレ普通に食べきる気だと思う……。)」

「(……今日昼だけですわよね？ ここで食べるの。)」

ふんふくん♪ いや、ちよつと持つて来過ぎたかな？ 奮発して肉だけじゃなくて海鮮系も買いこんじやったし、生で食べたらおいしそうってことで夏野菜系も持つてきちゃった。BBQ用のものもあるし、楽しみ。あ、あとガールズ小声で話しても聞こえてるからな？ 箱のサイズが大きくなってるのは単純に冷やすための水のせいでだから。人を蟒蛇を見るような目で見ないの。

「はーい！ ごめんなさーい！」

「許します。つというわけでこれね？ お腹冷やさないように気を付けて飲みな。」

そう言いながら中身の見える透明なガラス瓶を投げ渡す。それ魔物素材とかの混ぜ物してないタダのガラスの瓶だから割らないようにね？ 破片危ないから。もし割っちゃったら触らずに放置して私呼んでね？ まとめて持つて帰るからさ。

渡したその瓶の中には、黄色い液体が収まっている。はちみつと水と氷が入った瓶にレモンのスライスを入れたお手軽瓶だ。スポドリとか用意しなかったんだけどさすがにこの世界じゃ手に入らないからね、適当に良さそうなもの見繕って感覚で配分を決めた飲み物だ。ま、ただの水よりはいいでしょ。あ、マリーナ先にちよつと飲んでみてくれない？ 苦手だったら普通の氷水用意するから。

「はい……。あ、おいしいですね。これ。」

「そう？ よかった。アルには家で味見してもらってたんだけだね。お貴族様の舌に合うのかはわからなかったからよかったよ。」
「お貴族様って……、田舎貴族ですよ私は。それに正直言いますけどジナ様、下手な貴族より大分いい食生活してますからね？ 実家に居たころの私が『もしかして今日何かの記念日ですか？』って思うレベルのバンバン出してますからね？」
「あ、やっぱそうなんだ。」

そう言いながら『なんかたまに食事が豪勢すぎて今日死ぬんか？って思うときあるもん。あと量が量だし。』と続けるアル。んな死刑囚の最後の晚餐じゃないんだから。ちゃんと”食べられる分”しか作ってないよ私は！ え、量の方はもうおかしいの確定してる？
質の話？

確かに……、食事には結構お金使ってるからね。体を作るわけだから質にも気を遣っている。そういえば食材とか買うときに使ってる市場の人たちによくおまけしてもらってるけど、そういう面もあるのかな？ 大量に買うからおまけしてもらってるのかと思ってたけど、大量に高い品ばかり買っていくから上客として扱われてるとか？

「だと思えますよ、私が一人で行ってもかなりおまけしてもらえますし。」

そっか……。というかマリーナさ、話の流れで気になったんだけど、実際貴族の食事ってどんななの？

「そうですね。我が子爵家がそこまで裕福でなく、なおかつ尚武気質なため豪華なものや手の込んだものはあまり好みません。そのため一般的な貴族の料理とは違うと思うのですが……。肉系とパンをメインで多く食べたまに収穫された野菜という感じでしたね。」
「へえ。」

まあ確かにララクラ付近そんなに発展した産業なさそうだったし、そういう感じになるんだねえ。基本的にこの世界の人って大体パンとかの穀物を多めに食べて腹を満たす人が多い。でも地域によって違いはあって、帝都だったら港から魚を、ララクラさんちだったらその尚武の気質から狩りで肉をつて感じてパンの量を減らしてそつちを食べることが多いみたい。

この前マリーナちゃんのパパであるララクラ子爵と話す機会があったんだけど、確かにあの人『兵と同じ釜の飯を食う』って感じの価値観を持っていたっぽいから普段の食生活もそんな感じだったんだらうねえ。

「調理方法もそこまで凝ったものではなく単に火を通したものが多かったです。ですのでヘンリ様のお屋敷に厄介になり始めたころは料理の洗練具合に驚かされましたね。『毎日会食レベル、というか食べたことの無い物ばかり……！ テーブルマナーこれであつてますか!?!』という感じでしたし。」

「まあヘンリ様のお屋敷の料理って多分最高ランクとかそういうのだらうしねえ。それはしゃーない。」

「……ジナ様も人のこと言えませんか？ ご自宅で頂いた際にお屋敷と遜色ないレベルの料理が、頭おかしい量で出てきた時の気持ち考えてくださいよ。『なんでこの人市民やってるんだ?』って今でも思いますもの。」

「あ、あはは……。」
「量とか品目とかヤバイですもんねえ。私が師匠の弟子になった時からそんな感じでしたし、もう慣れちゃいましたけどよくよく考えれば色々おかしいんですからね師匠。剣闘士やめてから更に磨きがかかってますし。」

えー、そお？ まあ料理とか半ば趣味になって来てるから作り過ぎたり品目多くし過ぎたかなあ？ って思うけどそこまでじゃないでしょ。流石に本職には負けるって。趣味的な面もあるから色々試し

たり、それこそヘンリ様のお屋敷で働いてる人に色々聞き込んで実践とかしてるけどまだまだですよ、私は。

あとたくさん同じものを食べ続けたら飽きるし、栄養が偏るでしょ。ヨソはヨソ、ウチはウチ。だからアルは『私なんて故郷にいた時おかゆ一杯とかザラでしたからねー!』って変な自慢しないの! 親御さんのところに家畜をつがいですべて豊かにしちゃうぞ! (帰った後、本当に送った。)

「つと、ご飯の話になっちゃったしもう食べよつか。ほーい、ガールズは遊んでこーい。」

「はーい!」

投げ渡した遊具を受け取った彼女たちの背中を眺めながら、食事の準備を始める。危ないことをしてないかあっちの様子を眺めながらだけど……、まテキパキ進めていこうか。

普段料理する際は時短というか、お腹空かせたアルを待たせるのが可哀そうなので適度に『加速』しながらやることが多いのだが、今日は二人の思い出作りのために来ているようなもの。あんまり早く用意しすぎて二人の邪魔をするのは避けたい。海で泳ごうとした瞬間に『ごはんよー!』で中断させちゃうのは忍びないからね。

(適度にゆっくり、進めていきますか。)



ところ変わって、帝都。その中央部に位置する巨大な城に視点を移

す。

「久しぶり、かな？　よく来たね先生。」

「お招きありがとう、陛下。今日じゃなければこれほど嬉しいことはなかったと思うわ。」

陛下、と呼ぶ彼に対して自然体のまま返す彼女。城の中に作られた庭園に招かれたヘンリエッタは、この国の頂点にして自身が仕える主である皇帝の対面に座る。公爵家の人間であろうと帝と臣下という身分の差はひどく大きい、普通ならばその場で切り捨てられてもおかしくない所業である。しかしながら彼女はそれを許されている。

すでに天に召された先帝の元許嫁であり、その盟友。また彼女の目の前にいる皇帝の教育係を務め親代わりに近いことをしていた彼女。帝国の全てにおいて優先される皇帝の命に反することが出来る数少ない存在、それがヘンリエッタ・マニスカラ・クストス・アプーリア。ヘンリ様と”彼女”に慕われている人間だった。

「ああ、彼女かい？　すごい入れ込みようだね。ちようど海にでも出かけているんだったか。」

「ええ、そうよ。なんで貴方が把握しているのかは不思議だけど。」

「優秀な人材は早急に囲い込む、鉄則だろう？　あなたが教えてくれたことだ。」

二人が話題に上げる彼女。”ビクトリア”という名で活動している女性。

元剣闘士で、奴隷。人狩りに遭いこの町へと連れてこられたせいか出身地は不明、人間の限界を軽く超えた速度で行動できる『スキル』を保有している可能性があり、剣神祭に出場し優勝するという実力も持っている。奴隷解放後もその力を高め続け確認が取れていない部分も多々存在するが確実に現役時よりもその力量は向上しており、解放後にルーン魔法を使い始めた。

商業・文化にも造詣が深く、自身をイメージ化し大々的に売り出すことで巨額の富と新たな経済効果を起こした。またこの国のものではない深い教養を持つていることも推察される。つい先月から自身の半生を物語とし、劇場で公開されているがおそらくその大半が”ブラフ”。剣闘士の生活期間や、自身の名を売り出した時期を考えると『他国の密偵』などの線は確実に消えるが、何か隠していることは確定している。

「……そうね、”人”の重要性。そして”駒”の扱い方、教えたのは私。けれど人のものを盗ってはいけない、とも教えたはずだけど。」
「確かにそうだ。しかし先生？ 彼女はまだ”誰のものでもない”の
では？」

そして、彼女が持つ特異な関係性を挙げる時、教会勢力とのものが
挙がる。

そも。帝国と教会の関係性は、過去の地球世界と同じようになり
入り組んでいる。まず、帝国の建国。皇帝の立場を確実とするために
”神の認可”が用いられている。皇帝は神に宣誓することによって
この地、帝国を治めることを認められ、その神への宣誓には教会勢力
の助力は不可欠。そのため表向きには帝国と教会の関係性は非常に
安定していると言えよう。

しかしながら、この教会勢力は帝国だけに収まらない。神が実在
し、現世にかなりの頻度で手出しをしている関係上この世界における
宗教は一つしかない。その善性を信仰する人類、その悪性を信仰する
魔物などと違いはあるが神は一柱であり、宗教も一つである。故に国
が違えど信じる神は同じであり、国境を越えて教会勢力は協力関係に
ある。

「この場合、問題となるのは……。」
「貴方のお父様と同じように、他国との戦争時に『教会からの援助を受
け取れないこと』、でしゅうっ。」

その国が民に悪政を敷いている、魔物などに乗っ取られているなどの例外を除き、教会勢力は戦争に参与することはない。彼らのスタンスは『神の教えを広め、人に安寧を齎し、その数を増やす』ことであり、人間同士の殺し合いなどには手を貸さない。それは多くのフリー治癒魔法詠者も同じであり、『聖職者であることを辞め国家に忠誠を誓った者』という例外以外戦場に詠唱者を連れていくことは難しい。

「ま、それがこの世界のルールだ。だが、ルールには抜け穴が存在している。全能である神も、そのお力を制限なさっている。例外ではない。」

「……。」

全ての施政者が考えること、『いかにして教会勢力をこちらだけに味方させるか』。これまでの皇帝たちが必ず一度思案し、放棄してきた考え。

その長年考えられていた机上の空論に、一石が投げられる。

”ビクトリア”の存在だ。

教会勢力、単なる司祭や司教だけではなく、そのトップである聖女と交友関係がある。それは複数回の文通を確認していること、転移で聖女殿が帝都に訪れた時に彼女の家に直行していることから明らかだ。さらに先日起きた異常気象発生時、即座に教会から招集されたことを見るに確実に教会勢力と深い関係性が見られる。

そしてこれほどまでに教会と強い関係を持ちながらも、世にも珍しい”無宗教者”。

この世界に生まれ落ちた瞬間から切っても切り離せないはずの宗教に興味を持たず、神への信仰がほとんどないことがその言動から見受けられる。『皆が同じ宗教を信じている』という絶対的な前提があるため違和感を抱いても”勘違い”で済んでしまうソレ。非常に、面白い。

「教会勢力とは”友人”の関係しか持たない彼女。彼女を勧誘しても、信者ですらない者をこちらで抱え込んでも、何の問題もない。そして彼女がこちらにいるということは、あちらに対してより強力なカードと成り得る。」

そして、彼女が”切り札”ではなくただの”ババ”だったとしても問題は無い。その身に宿る力量は帝国最優と名高い我が親衛隊の面々に匹敵、もしくは凌駕しているものであり、同時に4属性以上の適性を持つ魔法詠唱者だ。ルーンというマイナーな方法を使用しているが、その適性の多さはそれだけで評価に値する。

上から数えた方が格段に早い実力と、自身を売り出し富を得たという実績、そして帝国のものではないとはいえ確固とした教養。すぐにも爵位を与えて抱え込んでしまいたい人材と言える。

「いい考えだと思わないかい、先生？」

「そうね、”皇帝”としては正しいのかもしれないわ。……ただ、”生徒”として、あの子に頼まれた”息子”としては0点ね。どこで教育を間違えたのかしら。彼女は、”私のモノよ？」」

二人の視線が、交差する。

「十二分に理解しているとは思うけど……、私は勝てる勝負しかないわよ？」

この私にカードを引かせるつもり？ と問いかける彼女。確かに目の前にいる”息子”は、自身が愛情をもって接してきた友の忘れ形見ではある。先帝の子で、先帝が選んだ人の子供、教師役を任された日から第二の母として振舞いながら接してきた。だが、自身がいるこの世界は必要があれば肉親すら踏み台にしてしまう世界。

私はその”必要”を無くして選択しなくてもいい場を作るタイプ
なんだけど……。その時になって、カードを切ることを躊躇うほど私
は優しくくない。

「神は『人を導き補佐する者』として聖職者たちには厳しく当たる、し
かしながら今を生きる者たちに対しては基本何の強制もしない。故
にもし貴方の企みが成功したとしても、神が動くことはまあないで
しょう。」

しかしながら、それは絶対ではない。

これは年寄りの感覚になってしまっただけど……。おそらく確実に
神は動く。

神が動けば即座に帝国そのものが潰されてしまう。神の意に反し
たことをしたという事実は、周辺諸国にこの国を潰しても良いという
大義名分を与えることに他ならない。全方面で戦闘になってしまっ
ても戦えるぐらいの体力は存在しているが、神に見放された皇帝に人
が付いてくるわけがない。多くの兵や将が離れ、最終的に全て崩壊し
て終わるだろう。

故に、外から潰される前に内部で手を打ち、周りに動かれる前に全
て終わらせる必要がある。勘違いならそれでいい、だが少しでもその
可能性があるのならば用意するしかない。今はもう停戦済みだが、ビ
クトリア様が剣闘士だった頃に行われていたドワーフ国家との戦争
を止められないと理解した時から、私はその準備をしていた。

「面倒だからもう面と向かって言ってしまうけれど……。いつでも
ひっくり返せるのよ?」

「……ああ、理解している。最初は自分の目を疑ったけどね。」
「でしようね。」

そう言いながら軽く空を見上げる彼、若いころの先帝を思い出させ
るような動き。

あえて”人の耳”がある場所でビクトリア様やマリナーナに対して例の話題を振ったのだ。私の言葉は”彼の耳”を通して伝わり、直ぐに事実確認をしたであろう。あの時にはもう用意が整っていて、彼に警告の意味を含めてその多くを曝け出した。

(懐かしいわね。)

やろうと思えば、今この場で始めることが出来る。彼女には冗談として言っただけ……。すべてが終わる前に、最低限の犠牲で国を立て直す。けれどそれを選ぶということは目の前の彼を殺すまで止まらないということ。選ばなくていいのならそれに越したことはないけれど、それがこの国にとって、帝国にとって必要ならば。私はためらわず拳を振り下ろそう。

「……わかった、潔く手を引くよ先生。もう彼女には手を出さない、それに先生が考えていた作戦のことも”私は聞かなかつた”ことにする。急進派の者たちを御しきれなかったのも私の責任だからね。自分から断頭台上がるような趣味はないさ。」

「賢明、ね。」

ええ、それでいいの。貴方が、先帝と同じように拡大をもって進もうとするならば全力で止めていた。私たちは恨みを買って過ぎている。上が貴方の父から、貴方に代わったことでなんとか相手側に怒りを収めて貰っている様な形だ。最初はあちらから攻めようとしているところに防衛戦争としてこちらが仕掛けた形だけど、やり過ぎてしまったのは事実。

今は国内に残る膿を吐き出す時間なのだから、目先の欲に負けて外征など選んではダメ。

「肝に銘じるよ。と言いたるところだけど彼らが私の言うことを聞いてくれるかは……。話が別だけどね。私自身まだ若いわけだし、実績

も何もない。彼は彼らの意志で動くだろうし、その結果がこの前の侵略戦争だ。」

「まったく、子供もいるのですから自分の支持基盤ぐらいしっかり固めなさいな。こっちで処理するのも面倒なのですよ?」

「違うない。」

そう言つて軽く微笑む彼。能力がないわけではないが、何かと人材に恵まれないわよねこの子。すぐに投了したくなるほど悪いカードではないんだけど、いいカードほど手から零れ落ちていく感じ。ま、一番いいのは私が持っているんですけどね!

「はあ……、ハーバルだったか? 彼女と剣神祭で戦った相手。それも持つて行かれる上に、ビクトリアも駄目か。まあ彼女の気質的に先生の方が上手く扱えるとは思うが……。惜しいな。」

「あら! 私が使うんじゃないくて、彼女が私を”使う”のよ?」

そうそう、そこを間違っちゃダメよボク君。彼女は私のものだけに、私も彼女の物なの。純愛つてヤツね〜! 正直ウチの旦那とかに對して愛はあつたし、子供たちも等しく愛してた。孫なんか可愛くてどうにかなつちやいそう。でもね? 恋つてしたことなかつたのよ。初めてあの人を見た時……! ああ、思い出すだけでどうにかなつちやいそうだわ! エンリットちゃんのこと怒れなくなつちやうわね!

「……………」

「何、その『久しぶりに実家に帰ったら母親が自分よりも若い役者のガチ恋勢になつててちよつと引いた』時みたいな顔は。」

「え、あく。うん、いいと思うよ、うん。」

まったくこの子は……。

「あ、そういえばなんだが彼女が行った海の話なんだが。なんでも巨大ザメを最近見かけるようになったらしい。たしか……、メガロドンだったか？」

「え？」

……え、ちよつと待つて？

メガロドンってあれよね？ 体長50m級の化け物ザメで見るとの全て噛み殺していく海の悪魔……。

高速で思考を巡らせる、最悪の状況と、彼女たちが持つスペック、そして状況を設定し重ねていく。海中での戦闘、まともな装備はおそらく持つて行っていない。呼吸の限界に、水の抵抗。そして、”彼女”の性格的にあの二人に危機が迫った場合。間違いなく庇う。あり得る、ありえてしまう。

「だがまあ討伐隊が出たそうだし、発見海域も先生のビーチから離れて……。」

「帰ります、ハーバルツ！」

”何かあったとき”のために連れて来ていた自身が持つ最高の盾の名を呼ぶ。

ビクトリア様がいて最悪の状況に陥るとは考えづらい、だが考えれば考えるほど不安に陥ってしまう。海は恵みを生み出す母でもあるが、全てを飲み込んでしまう魔物でもある。

「お呼びでしょうか。」

「すぐにビクトリア様と合流します、兵を招集し対サメ用の装備を集めなさい！」

73：愛の力

というわけで師匠に『遊んでおいで』と言われたので走ってきたのだが……。

「なんかコレジャナイ感がすごい。」

とりあえず用意してもらった用具で少し遊んでみたのだが、熱中するほど楽しい！ とまではならなかった。砂遊びはちよつと対象年齢があつてない感じがするし、私もマリーナもそこまで凝り性というわけではない。バケツに砂を詰めてひっくり返してこの後どうしよう顔を合わせるしかないという悲しい状況になってしまった。

ボール遊びも人数のせいかキャッチボールみたいなことしかできず、途中から本気で投げ合つてどつちが先にボールを弾くかという遊びじゃなくて鍛錬に近いものに成ってしまったためこちらも中断。遠くから見ている師匠がジェスチャーで何かの動き、頭の上で手のひらを空に向けたり、手を組んで腕の腹をこちらに見せるような動きをしていたが理解できなかった。

「ごはん終わったたら教えてもらお。」

「ですわね。」

そして最後に浮き輪と、多分掴まって泳ぐ用の木の板だと思ふのだが、正直二人とも海への恐怖をそこまで払拭できていない。まだ浜辺に近いこのあたりであれば生き物の姿が見えず、海面から地面が見えるので安心して泳げるのだけど、より遠くに行ってみよう、という気にはなれない。ここは無事でも、もう少し外洋に出てしまえば何が出るか解らないからだ。どんなものが来ても跳ね返してくれそうな師匠から離れるのもちよつと、いやかなり怖い。

となるとやはり最初に海に飛び込んだ時と同じように、浜辺の近くで泳ぐか浮き輪に乗って波に揺られるぐらいのことしか残っていない。目印を決めて泳ぎの競争とか色々やったけど、延々と泳ぎ続けるほど私たちに体力はない。結果的に浮き輪に乗って波に揺られるぐらいいしかなることが無くなってしまった。

まあ私はこれで十分楽しいし、たまに吹く風とか空を眺めてるだけでちよつとだけ幸せな気分になって来るのだが……。マリナーはどうやら違うようで。

「えひー！」

(どこから出てるのよその声。)

よくわからない声を上げながらずっと師匠の方を眺めている。普段よく見る貴族としての責任を背負っている彼女の顔や、ライバルとして剣を合わせている時の真剣な表情、たまに家に来て鍛錬の合間とかに師匠のことを視てる時の顔。そのどれも違う完全にとろけているというか、女としてちよつと終わっている顔をしている。滅茶苦茶鼻血出てるし……。

いやまあ確かにここには私たち以外の人間はいない。普段のコイツは今後自分の家の子爵から伯爵に上げるために必要なもの、それまで全く持っていないかった知識をどうにかして得ようとしている。その上実家のラクラ家のことや、ヘンリエッタ様のお屋敷で居候しているっていう状況。貴族としての責任などに雁字搦め。

もうちよつと気を抜いた方がいいのではないか。無理やり引張って遊びに行くっていう口実で休ませないと倒れるんじゃないかって思うぐらいこいつは自分を追い込んでいる。

(そう考えればこれぐらい気が抜けてるのを見ても、放って置いてあげた方がいいんだろうけど……。領民が見たら泣くよ、その顔。)

お顔は真っ赤で目はちよつとイってるし、口はゆるゆる。鼻からは

赤いものが流れ出てるし、たまに震えてる。熱中症かも思ってた師匠からもらった氷の入った瓶を額に当てさせているが、息の荒さはずつと変わらない。いや気持ち解らない訳ではないのよ？ 何も着ていない時の師匠と、今の水着師匠。比べてどっちがヤバいか、って言えば後者だし。

筋肉が付き過ぎないように筋肉を筋肉で抑える（本人談）という意味不明な方法で、女性的な丸みを持った理想的なプロポーションを維持。肌はどこ見ても透き通るような白、だけど決して病弱そうな白ではなく、太陽の様な生命の鼓動が感じられる白。そこに師匠の髪色に合わせた水着、見たことの無い様なえっちな奴だよ？ 肌面積ケンカ売ってる様な奴だよ？

師匠の地元じゃお腹出すのが普通かもしれないけど、帝国じゃそんな人全然いないですからね！ 私もマリーナもお腹隠してるんですよ！ なのにそのお腹を見せつけるような上下分かれた水着！ 自重してください死人が出ます！

（あの格好で帝都歩いたらほんと大変なことになりそ。）

まあそんなわけなので隣で壊れてるマリーナに特にいうことはない。自分のライバルが壊れてるのを見るのは少々心に來るものがあるが、いつも頑張っているのだし今日ぐらいは別にいいだろうということ。私は私でゆっくりと海と夏を堪能させてもくらおっと。

そんなことを考えながら足で浮き輪を少し動かす、ちよつと大きめのサイズで用意してもらったこれは単に腕で抱えて浮力を得るだけじゃなく椅子のように座って浮かぶこともできる。マリーナの方、浜辺の方を見ても師匠とマリーナの血でちよつとだけ赤くなつた海しかない。せつかく海に來ているのだし、青い海と空を眺めながらゆっくりしようと思つた私は浜辺を背に外洋の方を眺める。

「あ〜！ いい風！ たまにはこんな日も………………。何、あれ。」



「つと、こんなもんかな？」

持ってきた机の上にぎつと食材を乗せ、眺めてみる。とりあえずBQ用のコンロとか鉄板とか炭とかは全部用意してるし、火もつけた。家で作っておいした料理も別の机の方において、取り皿の方も準備完了。肉とか海鮮系が焼ける間に摘まめるように持ってきてきて正解だったね。あ、あとこの前の冷麺の時に色々試行錯誤してできた重曹を入れて作った疑似中華麺。あれで焼きそばとかもできるからその準備もしとこうか。

ソースは前世で食べた様なものができなかったから塩焼きそばになるけど、これでも十二分にうまいはず。さ、飯の用意もできたことだし二人のこと呼びに行きますか。

「みんな、ご飯できたからおい」

「師匠ッ！」

のほほんとしながら気が抜けたような声で皆を呼ぼうとすると、アルの切羽詰まった声が鼓膜を揺らす。即座に自身の脳を切り替え、私だけの『加速』の世界。十倍速へと入り込み状況の把握に努める。

アルがこちらに向かって叫びながら、隣でまだ要領を得ていないマリーナを引っ張ってこちらに逃げようとしている。その視線の奥、彼女たちが逃げようとしている存在。

(……………はは、マジかよ。)

どう考えても、ここから数キロ以上の距離が離れている。しかしながら、デカイ。デカすぎる。これだけ距離が離れているというのに、ここから見えるあの真っ黒な背ビレはどうしようもなく巨大で、その生物がなんであるか、どれほどのサイズなのかを私に教えてくれる。そう、海の絶対的な王者にして人類の天敵。サメの上位互換である、メガロドン。こつちでの呼び方は解らないが、明らかにそれ相応の存在。

正確なサイズは解らない。だがとてつもなく巨大で、まるで映画に出てくるようなレベルのものがこちらに向かってきているということとは理解できた。

(ツ！)

思考を回しながら、そのまま地面を蹴る。『加速』した世界の中にいるせいで相手の正確な速度つてのが把握しにくい、現状私の方が速い。

地面を蹴り、海面を蹴ることで海上を走りアルとマリーナの場所まで移動する。どう考えても海にいるのは危ないし、もし戦闘になった場合この子たちは付いて来れないだろう。できるだけ衝撃が行かないように注意しながら二人を抱え、もう一度海面を蹴り即座に陸へと避難する。

足を地面にめり込ませながら私の方で衝撃を緩和、加速を切りながら二人を地面へと降ろす。

「二人とも、じっとしててね？」

笑みを浮かべながら二人にそう投げかける。少し視線をずらせば先ほどよりも大分大きくなった背ビレ、まだ数秒も経ってないというのにここまで近づかれてしまった。まあそれはいいのだが背ビレだけで数mはありそうな感じだ。全体になると、どれ程のサイズになる

のか……。

正直ワクワク感と恐怖が入り混じるような感覚。普通のサメなら捌いてオヤツに、と軽く言えるんだけどサイズがサイズだからなあ……。いやマジで異世界なんでもアリだな。こういうサメ映画はね？ 実際に会うよりも画面越しで見るから楽しめるのよ。私一人だったら単なるアトラクション的なノリで遊べただけど、こっちは若い子二人もいるんだぞ？ 加減しろバカ！

「……とりあえず、割るか。」

ちよつと後ろにいる二人の顔を見たが、明らかに恐慌状態一歩手前つてところだ。アルはまだマシだけど、マリーナの方がちよつとまずい。自分が血を海に垂れ流していたことに気が付いてしまったようで、このまま放っておくとトラウマなどの悪い方向に転がりそう。それ以上のヤバい経験か、『あ、何ともなかったですね。』という形に納めなければ彼女の心に傷を残してしまうだろう。

ま、化け物退治はいつも異形でやっている。メガロドンちゃんが単に凶体だけがデカイ木偶の坊か、ドラゴンとかの魔物みたいに魔法を使ってくる厄介タイプかは解らないけど……。生き物なら殺せる。殺せるのなら勝てる。勝てるのなら圧勝できる。となれば考えるのは後のこと、あれだけ大きいのなら腹いっぱいにかきヒレが食べられそう。前世じゃ食べたことなかったし、楽しみ〜！

(というわけでその体、見せてもらいましょうか。)

もう一度十倍速の世界に入り、腰に下げている愛剣を抜く。狙うは眼の前の海。背ビレしか出さない恥ずかしがり屋さんとはとつとそその面見せなさいな。6割程度の力を籠め、振り抜く。

「……………え？」

背後から聞こえるのは愛弟子たちの何が起きたのか理解できない様な声。あ、そつか。できるって言うてなかったね。

剣から放たれた衝撃波は飛ぶ斬撃となり、海を割る。気分はさながら十戒のモーゼ、全てを切り開く空気の斬撃は海を大きく切り分け、海底である砂浜を太陽の光に晒していく。こちらに向かつて直進し続けるメガロドンと、海を切り裂きながら進む私の斬撃。その距離は加速度的に縮まって行く。そして、

海の帝王が、太陽の元に躍り出る。

(……………やっぱでかくなあい?)

海を切り裂いていったことで弱まっていた斬撃はその表皮に吸収されるが、確実にその体を外気に晒させる。私の視界に収まるのは、横幅。正面から見た顔の大きさだけでも十数mほどありそうな巨大なサメ。前世で遭ってしまえばその場で死を覚悟してしまいそうなサイズ。もうサメというよりも、怪獣と言った方がいいレベルかもしれない。

そしてその巨体は、留まることを知らず速度を落とさずこちらに進み続けている。元々こちらを捕食するために速度を上げて進んでいたのだろう、元々全力でもなかったし、数百mも切り進めばその威力は格段に落ちる。こちらの攻撃を喰らってもその速度は収まらず、距離が少しずつ縮まって行く。

(海割も持って数秒、海中は相手のテリトリーだし……。近づくか。)

加速した世界で思考し、判断した私は割れた海の中を全力で走る。流石の私でも海上はまだしも、海中でこれに勝てるとは思わない。水の中じゃさつきみたいなのな衝撃波を斬撃として飛ばすみたいなのもできないし、そもそも剣撃の威力がかなり吸収されてしまう。それに
大前提として呼吸が持たない。

私が加速している間、酸素の使用量も加速度的に増加する。『加速』は速く動けるように成るだけで、その間に発生する体へのダメージなどは自己負担。当然酸素の使用量も増えるし、高速移動中は普段の活動時よりも多くの酸素を必要とする。明らかに海中戦には向いていない。となるとこつちに有利なフィールドにしないかね？

(おかわりですよっ！)

距離を詰めながら、先ほどと同じように斬撃を飛ばす。今度は一度だけじゃなく、数回。メガロドンちゃんの周囲に存在する海水をできるだけ多く切り裂き、消し飛ばしていく。追加で何発か衝撃波をその巨体に当ててみるが、想像以上に表皮が固い。鮫肌で大根おろしができると前世で聞いたこともあるし、確実に刃を当てるか工夫をしない限りダメージを与えるのは難しいかもしれない。

といっても、多分これ体長50mぐらいあるから……、私の剣でちゃんとしたダメージを与えられるかってなると少し不安だ。多分一太刀じゃ無理だね。回数重ねる奴。というかさ？ ちよつと考えないようにしてただけ……、デカすぎじゃね？ 何おまえ。ほんとにメガロドン？ もう一個メガついてて、メガメガロドンとかじゃない？

(でも、衝撃波だけでも結構な手ごたえはある。そこまで強くないのかもしれんね。)

それに、一時的にとはいえ相手にとって不利なフィールドである海上に頭部が出ているのにも関わらず、魔法などの遠距離攻撃や仕切り直すために後方へ移るなどの行動の兆しが全く見えない。こちらが速過ぎて見失っているのか、それとも油断しているのか。

(ん?)

そんなことを考えていると、ようやく相手側に動き。十倍速の世界にいるせいか非常にスローではあるが、メガロドンがその大きな口をゆっくりと開けようとしている。……あく、なるほど。エサがこっちに来てるからそのままお腹の中に入れちゃおうって魂胆か。まあお前のサイズからすれば人間なんてただのオヤツだろうし、警戒するのもあほらしいって感じか。巨大生物が故の傲慢ってところだね。

でもま、その傲慢つてのは『全ての状況を』最悪』の場合として定義しても確実に”勝利”できる』っていう確信がなきや成り立たない。たかが野生生物如きの経験に基づいた予想など片腹痛いわ。

よし、その腐った性根。ジナちゃんが叩き潰しちゃうぞ？

全力で地面を蹴り、海上から海中へと戻りかけていたステージから空へと移る。目標は徐々に口を大きくしていくメガロドン、その遙か上空。

「淑女たるもの食事の際は口を大きく開き過ぎず上品に頂くべきですわよ？」

空中で軌道を変え、そのまま自身の踵をその鼻っぱしらに叩き込む。巨体故に重量もそれなりだが、鍛え抜いたこの体と『加速』をもつてすればこれぐらい如何にでもなる。頭部を地面にたたきつけられたことで、その巨体が艇子の原理によって跳ね上がり、その体に纏っていた海水を勢いよく撒き散らす。これまで海中に隠れていたその巨体の大半が、大気に晒された。

「おかわり、だッ！」

その隙を逃さず。素早く地面に足を着け、先ほど海底に叩きつけたその顔に向かって全力でアッパーをぶちかます。下半身が全部海上に出てるんだ。頭だけ隠しちや可哀そうだろう？ さすがにちよっ

と許容限界ギリギリなのか、腕から変な音がするが気にせず振り抜く。巨大怪獣がなんぼのもんじやい！ サメ！ パンチ！ センター！

「はああアアアアア!!! ツ！」

表皮を割り、半ばその肉体に拳を潜り込ませながらもその巨体を空中へと打ち上げる。幸いこいつはノーマルタイプ、前世見たあのクソなのかそれとも迷作なのかよくわからないサメ映画どもみたいに頭がたくさんあったり、タコだったり、竜巻だったりの特殊能力はない様子。つまり空中とは奴にとっての墓場！

「単純に切るだけじゃ面白くないツ！」

このまままな板に乗ったサメを切ることも可能だが、それじゃあただのサメ退治だ。サメとの勝負つてのはもつと刺激的で、イかれて、ハッピーじゃないといけない。あとこの後サメを捌くときに結構な労力割きそうだし、表皮の硬さや肉厚であることを考えると剣を使わず倒した方が良さそうつてのものもある。研ぎ石とか持つてないからさ……。

ま、とにかくフィナーレだ。

「さあ、ルーンを刻もう。」

「愛のルーン、？（ゲーボ）。力のルーン、？（ウルズ）。富のルーン、？（フェイヒュー）。」

愛の力を富のルーンで増幅させ、両手に光り輝く光輪を出現させる。そう、愛とは最強の力。アルを、マリーナを想う心が力を確固としたものにし、別世界において娘を守るために奮闘した父の力が、こ

ここに再現される。

原理？ 理屈？ んなもん知らん！ サメはサメだ！

ということだ……エ！

オカルト殺法を喰らえエ！ 即席！

「ミステイック・シールド！」

74：サメ、ウマイ

いやっほオーツ！ 最高だぜえ！

ジナちゃんの”スコア”に巨大水棲怪獣メガロドンが追加されちゃまったなあ！ オイ！ しかも魔物？ 化け物？ 怪獣だから背中の骸に加算される気配もない！ まあそもそもアレは人間だけが積み上がっていくみたいなんだけどねえ！ あはー！ 害獣処理できた上にデメリットもないし、討伐報酬としてこんな大量なサメ肉とフカヒレが食べられるなんて天国かア！

(……っと、テンション上がり過ぎだな。自制ッ！)

ミステイツク・シールドによって死亡したメガロドンを引きずりながらアルたちの待つ浜へ向かって歩き出す。アルもマリーナも信じられない物を見るような目でお口ぽかんのまま静止してしまっているが、サメ映画なんてこんなもんよ。特に低予算な奴はね？ ストーリーとかがクソでも、まだ魔法っていうアメコミ映画のCGより魅力的なものを使ってるわけだし、拍手喝采してあげるべき。そうすべき。

「ではちよつと失礼して……、うん。死んでるね、さっさと処理しちゃいませよ。」

メガロドンに触って確認してみるが、全く反応がない。鼓動も感じられないし確実に死んでいると言えるだろう。まあ別に死んでいようが、ただの気絶だろうがこれから私のすることは変わらない。せつかく目の前に未知の異世界食材があるのだ、よく食に拘り過ぎて魂を売ったと言われている元日本人として吟味せねばならないだろう。

にしてもさっつき撃ったミステイツク・シールドってどんな仕組みな

んかね……？ 自分で発動しておいてなんだけど、アレの原理が全く解らん。愛のルーンと力のルーンで魔法の根幹と方向性を指定、その後富のルーンでその威力の向上を図ったのは理解できるんだけど明らかにそれ以外の要素があった。攻撃にしか使っていないけど、多分アレ防御。”シールド”としての能力もあつただろうし。

（しかも八つ裂き光輪みたいに回転する”線”での攻撃じゃなくて、シールドの”面”でぶつかって行ったしなあ。）

まあそりやそれなりの魔力込めてるし、生成した魔法の質っていうかな？ それも決して悪い物ではなかった。かといって巨大怪獣を一撃で仕留めてしまう某光の巨人の光線技みたいな威力が込められてたかという……、かなり疑問が残る。

そんな威力でメガロドンが死ぬあたり、サメに対しての特攻とかが入ってそう。もう少し検証すれば詳細が分かってくるんだろうけど、もう一回使える気もしないし……、アレか？ よくある番外編にだけ登場する素敵必殺技とかと同じノリか？ サメ映画を元ネタにしてるから特攻付けちゃった的なノリ。あく、考えてたらそんな気がしてきた。というわけでみんなもサメ映画を見よう！

「……あはッ、誰に言ってるだろうね。」

そんなことを考えながら、腰に下げていた剣を抜く。

魚の基本的な捌き方、三枚おろしとかそういうのはまだわかるんだけど怪獣サイズを捌けって言われてもどうしたらいいのか解らない。頭から尻尾の先まで50mくらいあるからなあ。今は砂浜に何とか上げてはいるんだけど、サイズの半分以上海に浸かってるし。とりあえず内臓全部抜いて海水にでも晒しておこうか。あんまり放置しても腐るだろうし。

「かなり苦労しただけと早速やっていこうか。……あ、ガールズ」

！ ちよつと時間かかると思うから先にご飯食べといていいからねー！」

あんまり凝っていないものだがいくつか料理を持ってきている、さつきまで昼食の準備をしていたわけだから説明しなくても見ればわかるだろう。BBQの方の食材はまだ火を通していないけど、炭は入れているから後は火をつけるだけ。アルが魔法でつければ一瞬だし、放っておいてもお腹ペコちゃんになることはないだろう。あ、でも食べ過ぎるのはナシね？ メガロドンのお味見タイムが残ってるし。

〈加速〉十倍速

速度を上げ、同時に地面を蹴る。腹を割くにはまず高さが必要だ。全長50mというだけあって、砂浜に寝かせた後も軽く家レベルの高さがある、地面に足を着けたまま捌くのはちよつと難しい。そのため空中での作業が出来るようにルーンで足場を生成しながらミスリルの剣をメガロドンに突き刺し、作業を進めていく。サイズ比のせいでマグロをおまごこと用の包丁で切っているかのような感覚だが、できないことはない。

「御開帳〜。……うん、もうこれは洞窟だな。」

首元から肛門のあたりまで無理やり切り裂いて中を覗いてみるが、まるで洞窟をのぞき込んでいるような気分。昔児童向けの学習漫画で人間の体の中にミクロ化して入ってみる、みたいな内容があったけどそんな感じだ。あと異臭というか、魚臭さがヤバい。鼻呼吸はしたくなくなるレベルだね。うん。鼻栓欲しい。

そのまま内部へと侵入し、普通の魚との差異を探していく。とりあえず変なものはないさそうだったが、一つ一つの臓器のサイズも大きく、おそらく心臓に当たるだろう部位は私と同じくらい、いやそれよりも大きなものに成っている。ちよつとまだ心配していたのだが、少

し触ってみてもこの心臓が動き出すような様子は見えない。これでもようやく確実に死んでいるという確証を手に入れられたわけだ。

「とりあえず他もまあ問題なし、変な病気とかを持っているって感じでもなさそうではよかった。……これを除いてだけだ。」

そしてそんな臓器たちの中で一際異彩を放っている、いや異臭も放っている存在と言えばメガロドンの胃だ。怪獣レベルの体を維持するためか中身もパンパンに詰まっている。あとあんまり考えたくないのだが、胃の出っ張り具合から人の全身の輪郭というか、見たくないものが見えてしまっている。これ中割いたら出てきちやう奴だ。

「……さすがに死んでる、よな？ 正直何出てくるか解らんから触りたくないんだけど……。」

そんなことを言いながら内臓の除去を始める。やらなきや食べられないからね？ やるしかないのだ。

今回内臓の方はぜんぶ焼却処分の予定だ。さつき殺したばかりなので鮮度は十分なんだけど、食べる気に成れないってのが理由だね。普通の魚でもそうなんだけど、寄生虫とか毒とかの問題がある。どっかの内臓開いて異世界アニサキス(クソデカ)とか出てきたら一生もののトラウマになりそうだしさ、こういうのは焼却処分するのに限るって感じ。

剣と魔法で無理やり内臓を剥がしたり分割したりしながら腹の中の洗浄を進めていく、サイズがサイズだし作業的に返り血を気にしているといつまでたっても終わりそうにない。そのためメガロドンの返り血で全身ドロドロになりながら作業中だ。外に出した部品はメガロドンから離れた場所に魔法で穴をあけているので、その中に放り込んでいく形。

作業自体は難しくないし、単純作業なので何の苦もないのだが、あまりにも返り血を気にせず作業しまくっているので傍から見たら私

が死にかけてるように見えるほど血まみれになってしまった。だつてこいつの心臓割いて持って行かないと運びにくいんだもの……。

「ヘンリ様とかに視られたらどんな反応するんだろ、つと。……覚悟して胃を開けるか。」

全ての内臓を外へ運びきつた後、無傷のまま外へと持ち出した胃袋に相對する。ちよつとグロテスク、溶けた人間とか入ってる気がするのでアルとマリーナからコレが見えない場所での作業だね。ぶよぶよした白い膜に真つ赤になつてしまつた剣を開き、割いてみる。瞬間出てくるのはひどい異臭、仕方ないとはいえかなりヤバいなコレ。

「うわ、上半身しかない。あゝ、これ触りたくないな。生存者ちゃんゝ、いるゝ?」

中から出てくるのは程よく噛み砕かれた船の残骸らしき木片や、すでに息絶えた人の死体。あとは見たことの無い深海系の魚に、サメの頭部っぽいものが見える。それ以外にもちよつと融けた人間サイズの魚だったり、私たちがよく食べる小魚が大量にあつたりという感じ。どれも消化途中だつたようでいい感じ? に溶けだしている。一応一通り中を見たが生存者はいないようだ。

まあ生きていたとしてもここに回復魔法の使い手はいないし、胃の中にいる時間が長ければ長いほどドロドロに溶けていく環境のようだ。正直助かる可能性は少ないだろう、といつても確認せずに火を付けたら中から『まだ生きてたのにー!』とか聞こえてきたらトラウマものだからね。確認するのはしやーない。

「とりあえず人の原型残つてる奴は隔離しておくか。流石に一緒に燃やすのは忍びない。」

というわけでなんか指が溶けちゃつてる腕とか、頭部骨だけになつ

てる上半身とか、そこら辺のグロテスクなものを取り分けていく。私はまあ慣れてるけどコレはさすがに未成年に見せられないわ。溶けてるし、なんかねちよねちよしている上に若干霊体系のアンデットになりかけてる奴もいる。はいはい、後でちゃんと吊って上げますからね。ビーチの端っころへんに山にしておいとくけど後で聖職者呼んでくるからね、待つてな。

にしても結構な人数いるなあ、もう全部溶けちゃった人もいるだろうけど船の残骸とかを見る感じどっかに航海中だった船団が襲われた感じかな？ 船の竜骨の残骸らしきものが複数見えるし。もしかしたら胃の中探したらお宝とか出て来たりするのかな？ ……ま、いや。とりあえず人っぽいの全部隔離できたし。燃やしちやおう。

火のルーンを宙に刻み、サメの内臓たちに着火する。とりあえず爆発とかしないように全部に穴開けてガス抜きとかしておいたから後は放置しておいても大丈夫だろう。端っここに置いておいた死体たちは砂掛けてアルたちには見えないようにしてるし……、火の番でもしてもらおっかな？ 延焼してサメちゃんが先に焼けちゃうと困るし。

「アルにマリーナ、今大丈夫……」

そんなことを考え彼女たちの前に移動し、声を掛けようとしたのだが……。

「(ぽけ〜)。」

「(ぽか〜)。」

ありやりや、未だ二人とも宇宙ネコの様な顔をしたまま静止中だ。さつきと同じ場所で突っ立っているようだし、目の前で手を軽く振っても何も反応がない。目の前で起きたことに対して脳の処理が追いついていない感じなのだろうか？

まあ巨大怪獣メガロドンが出て来てそれを私が一瞬で倒しちゃったわけだから、気持ちちは解らないでもない。私も前世だったらそう

なってそんな気がするし。けどなく、私の弟子なんだしこれぐらい『あく、よくある〜!』とか、『次私がやっていいですか?』みたいな感じで対応してくれて欲しかったんだけどなあ? 高望みしすぎ? だったらごめんね♡

「あ、そうだ。いいこと思いついちやった!」

思いついたら即行動、ってことですぐにメガロドンの元まで移動。もう一度切り開いたサメの体内に入ってみる。サイズがサイズだから結構見るのが難しいんだけど……、あったあった。ここならすぐに食べられそう。腹の骨に当たる部分を素手で折り、刃が通るスペースを確保する。その後は剣で対象部分を切り抜いてブロックサメ肉の完成って感じかな?

「サイズはちょうど両手で抱えられるぐらい。5キぐらいなんだけど……、これでも全体のほんの一部なんだよなあ。」

これ全部食べきるにはどれぐらい人数がいるんですかね? 数百トンあってもおかしくないだろうし……。もうこのまま帝都に帰って帰って炊き出しとかした方がいいかもしれない。持って帰る方法がないし、帝都まで鮮度が持つか解らないけど。っと、それを決める前にまず味の確認しとかなきゃね。

空に水のリーンをさつと書き、二つの水球を生成する。大きい方が私の体を清める分で、もう一つの小さい方が切り身を洗う分だ。料理の前は手を洗わなくちゃね? パツと切り身を投げ込み、私は私で血を落とす。確かクーラーボックスの中に小さめの包丁とまな板を持ってきていたはずだ、とりあえずまだ殺したてはやはやなわけだし毒見も兼ねて生でいっちゃおうか。

「というわけでお料理しちやいませよー。」

サメ肉を水にくぐらせている間に私も体に付着していた血を洗いきった、アルたちを復活させるためにパパつとやっちゃいましょう。この後、焼の行程もするだろうということ。BBQコンロに火を入れながらブロック肉をちようどいい感じの切り身してみる。そこから更に一口サイズの刺身に切り分けていって……、つと。こんなもんか。

魚の身自体の色は白で、ちよつと赤い線が入っている感じ。まあ色合いだけで言ったら鯛とかが近いかな？ 質感は結構肉厚で、変なぬめりとかも特にならない。生で食べるには結構顎の力が要りそうだけどもズクはなさそうだね。あ、あと一番危惧してたアンモニア臭も特にならない感じ。新鮮なおかげかな？

「では、頂きまーすー！」

何もつけずに口の中で転がしてみる。

あゝ、うん。はいはい、そんな感じね……。うん、美味しんじゃない？

「白身っぽい味なんだけど、かなり濃厚でコクがある感じ。あと脂も結構あるから……。そのままは苦手な人がいるかも。多分焼いたりフライにするのが一番おいしい気がするな。」

普通に美味しいというか、滅多に食べない久しぶりの刺身つてことで結構バクバク食べちゃうけどそのままじゃ素材の味を完全に引き出せない感じだね。……。あ、そうだ。しゃぶしゃぶとかいいんじゃない？ 焼きは時間かかるし、フライをしようにも脂がない。けどしゃぶしゃぶは魔法だけで何とかなつちゃうもんにー。

さつと宙に火と水のルーンを描き、空に浮かぶ熱湯の水球を生成する。その中にさつき切ったサメ刺身の残りをちよつと入れまして……。パクリ。

「あ〜！ これだ！ うんうん、いいね！ うまい！」

さっぱりしてかなり味がよくなった。おいちい。あ〜！ こうなっていると出汁とか取りたくなってきたなあ！ 昆布ない？ 昆布！ お出汁でしゃぶしゃぶとかさ、後は醤油とかでさっぱり頂きたい！ あ、あと大根おろしとかも欲しい！ 大葉と、おろしを合わせて、そこにお醤油！ ここにさめしゃぶを乗せたら……、くうう！ 熱爛が欲しくなりますな！

あ〜ッ！ 日本に帰りたい！ なんでこの世界お醤油ないの!? 味噌もなんでないの!? 豆あるし自分で作れって？ んなもんできれば苦労しないわボケえ！

「つとと、また思考が変な方に。……うん、塩でも十二分にうまいね。」

お肉用にとってきたお塩だけど、これでもかなりうまい。さてさて、食べた感じ毒がありそうにも思えなかったし、美味しい調理法も大体見えてきた。さっさとアルとマリーナの口にコレ放り込んで覚醒させますか！

案の定というか、やはり彼女たちにとってメガロドンの肉は舌に合うものだったらしく、口に放り込んだ瞬間数秒フリーズした瞬間に、『うんまあッい！』とか言いながらようやくやく復帰してくれた。アルもマリーナも若いということがあるのか、私がちよつと脂っぽいと思っ

た刺身もかなりバクバクと食べてくれている。

(料理人冥利に尽きるよねえ。)

メガロドンの塩焼きも出したのだが、そっちもかなり好評だった。いい感じに脂が焼けて非常にいい香り、白身魚って焼き過ぎると結構ぱさぱさしちゃうんだけどそういうのも一切なし、前世じゃ『サメはマグロよりもうまい』みたいな話聞いたことあったけど、あながち間違いないかもしれない。しかも普通の部位でこれだ、普段はお行儀とかを気にしてるマリーナが齧り付いてぐらい美味しい。これがカマとかの旨味が溜まってそうな部分になると……。

「楽しみだね。そうと決まれば解体作業進めていこうか！」

「ふあいふあつてふあふあさいー！」

「ふあふあいたちふあんふあつてへふあいます！」

「食べきってから話しなく。」

いっつもいいもの食べさせているとは思っただけだねえ？ あんなにがつついているのを見るとちよつとなんかやきもきしちゃうかも、なんて。まあ私は私で前世の記憶を保有している、つまり1000年以上後の食にまみれた世界で飲み食いしてたわけだ。前々から食べるのは好きだったし、結構金も掛けていたから旨いものを食べていた自覚はある。このメガロドンも……。

”本職”が調理すればもつと旨い調理法があるのだろう、けれど私にはそれがない。ポテンシャルは高いが、磨く術がないってわけだ。多分元の世界の食材よりもうまいんだろうけど……、上限じゃない。それを彼女たちに食べさせてあげられないのはちよつと嫌かも。だから多分純粋に楽しめてないんだろうなー、って感じ。

「だけど。」

たぶん、今から取り掛かる部位によってそれは変わる。というか変えて欲しいと願っている。あまりの美味さにもう全部どうにかなるレベル、ポテンシャルだけで踏みつぶしていく素材の味。マグロの大口よりもカマの方が上手いという話がある様に、このメガロドンにもそんな部位があるはずだ。徹底的に解体して……、最高の部位を見つけてやる！

思考を加速させながらサメを解体していく。量もサイズも巨大だが、物言わぬ骸はただ料理されるだけ。ルーン魔法によって生み出された水球や氷の板に次々の乗せられていくメガロドンのお肉たち。作業が進むごとに返り血を浴び続けるジナ。切り取り、取り出し、小分けして、味見、その繰り返し。

そして、彼女の全身が真っ赤に染まった時。

「んぐ。……これだッ！ これ！ これ！ やっぱここだア！」

ハイになりながら、お目当ての部位を見つけ雄たけびをあげる彼女。

そして、運の悪いことに。

ちょうど彼女が肉塊片手にサメの体外に出た時。

ヘンリエッタ様率いる救援部隊が到着していて。

先頭を走っていた帝国のNo. 2は、

全身サメの血で真っ赤になっている彼女の姿を見ることになる。

「……………あ。」

ビクトリア様大好きクラブ会長の彼女が、泡吹いてぶっ倒れたのは
語らずとも理解していただけるだろう。

75：どんな味？

「加減してよバカアアアああああ!!!」
「ぐ、ごめんで。」

「……あら、これ美味しいわね。……わアアアああああ!!!」

ああもう急に落ち着いてまた急に錯乱し始めないでよ……。はいはいおかわりね？ 追加で焼き始めるから許してつかあさいな。

私がちょうどいい具合の素材を発見したころ、何故か完全武装で200人くらい連れてやってきたヘンリエッタ様が現着しておられた。全員がガチガチの装備で、後ろに続く大型の武装を見るに海中用の装備や魔化で海上を走れる様な装備だったのだろう。

これは後で聞いた話なのだが、なんでもヘンリ様が皇帝陛下とお茶会してる時に私がバカンスに出発した話が出たみたいで、ちょうどその海域にメガロドン出現。付近を航海中だった船団が食い荒らされた、という情報を教えてもらったそう。話を聞いたヘンリ様は非常に強い不安を覚え、すぐさま私の元に向かうことを決定。すぐに動かせる精鋭200名（異形ちゃん含む）とたまたま「皇帝陛下が買い占めていた」対メガロドン用の装備を貸してもらってこの場に来てくたさったらしい。

まあそしたら浜辺に打ち上げられた巨大なサメに、その腹の中から出てきた血まみれの私。……泡吹いて倒れちゃうのもまあ解らないでもない。

「心配だったのよ私！ ここに来るまで、ほんと、ほんとにどうしようかとー！」

「あ、うん。最悪なお迎えしちやっでごめんね？」

「ほんとよッ！」

そしてようやく復活したヘンリ様に全身をくまなく確認された後、無事な私を見た後感情が爆発して号泣。サメの切り身をやけ食いしながら泣くというかなり器用なことをなさっているというわけだ。あとヘンリ様？ それ私が食べようとしてた奴なんですけど取らないでくださる？ ビクトリア様のものは私のモノ？ あ、うん。そう……。

「ほんとに、ほんとにもうあんな心配させるようなことはやめて！ 剣神祭の時だつて……！」

「……ごめんね。ちよつとはしやぎ過ぎちゃった。」

あの時のことを出されると痛い、実際一度死んでしまったワケだし、神が私のことを「まだ遊べるオモチャ」として認識していなければ多分ここにはいなかっただろう。一応あつちの不手際ってことで色々特典付きで帰してもらったわけではあるけどパワーバランスを考えればあつちの方が格段に上、もみ消すことだってできたわけだ。

先ほどまで私のことで泣き喚いてくださっていた彼女にそう言われてしまうと、こつちとしてはもう何も言い返せない。おとなしく謝つて、今後気を付ける事しかできない。でもそれだけじゃ口頭の守るかどうかも判らない約束になっちゃうし……、今できるのはご機嫌取りのためにさつき回収してきた一番いいサメ肉を焼いて献上するくらいだね。

「あやまる、謝るけどさ……。」

「スウツツツ（ビクトリア様のお腹に顔突っ込んで思いつきり吸い込んでる人）」

「もう大分落ち着いてるでしょ。」

「あら、バレちゃった？」

そう言いながら私のお腹から顔を上げ、いつもの顔を見せてくれる

彼女。少しは持ち直してくれたみたいだけど、ちよつとまだ目の周りが赤い。さつきまで泣いていたわけだから仕方ないけど……、この人その要素も使って私に絡んでくるからな。いつもだつたら拒否してることとかもそんな顔されたら断るに断れんし。

渋々いろんなところをぺたぺた触り始めたり、水着のデザインを確かめ始めたヘンリ様を少し放置しながら周囲に視線を向ける。……え？ ああこの水着？ ドロに作ってもらった奴。かなり頑丈だしちよつと魔化も施してくれてるからかなりいい品だよ、さつきまで血まみれだつたのに全くしみてないしね。

ヘンリ様に連れられてここにやってきた兵士の皆さんは200名弱、この全員がヘンリ様の子飼いの兵たちらしい。中にはお屋敷で見たことある人間も何人かいるし、全員が手練れなのだろう。ま、そんな彼らも私が一人で倒しちゃったせいで無駄足だ。一応私を助けに来てくれたわけだし、メガロドンの肉を自由に食べて貰っている。

量が量だから好きだけ食べて、お持ち帰りも自由な砂浜パーティーって感じ？ 結構な人数の魔法詠唱者がいるおかげでこつちが水とか火の用意をしなくてもいい上に、アルやマリーナの知り合いもいるからそつちに面倒を見てもらうこともできる。私は私でこのお方のご機嫌取りに全力を注げるわけだからありがたい話よ。

「ところでヘンリ。そろそろ触るのやめてくれる？ もう満足したでしょ。」

「あら、まだ物足りないのだけど……。ちなみにビクトリア様？ 水着の中に手をつ突つ込むのは……」

「さすがにキレるぞ♡」

「あら、ごめんあそばせ♡」

まったくこのお婆様は……。鼻血垂らしながら言っても迫力ないよ？ ほんこれで拭きな。

「ごめんなさいね、あまりにも魅力的というか扇情的というかエッチ

「とうか……。多分さっきの衝撃がなかったら襲ってたわ。」

「……へ、ヘンリさん？」

「おほほ、冗談よ。……それでビクトリア様？　せつかくだから聞きたいのだけれど……、あのメガロドン。どうやって倒したのかしら？

外傷が全くないし、見える傷は腹の一本。後学までに教えてくれな
いかしら。」

「あゝ、うん。なんて言うんだろ、魔法？」

「魔法……、それは儀式的な？　アルちゃんマリーナちゃんも一緒にやるタイプの。」

「いや、私オンリー。」

お目目を大きく開けながら驚きを表す彼女、まあ私と付き合いの長い彼女だ。私が嘘をついていない時の雰囲気は理解しているだろう。故に私の言葉が本当で、あの巨大怪獣を仕留められるような魔法を持っているということになる。しかも外傷がほとんど残っていないことからほんの数回。最悪魔法一発で仕留めたことになってしまう。

いや間違っていない、間違っていないんだけど説明が難しい……！　サメ映画をどうやって異世界人に説明すればいいんだッ！　謎アイテム！　予算の都合！　尺の関係！　謎ストーリー！　クソッ！　言語化できねえ！

「あゝ、えゝ。……本当？　いや本当なのよね。うん……。」

「いや、なんかごめんね？」

「い、いえ。別にいいのよ、うん。大丈夫なんだけど……。」

この時、ヘンリエッタの脳は高速で回転していた。メガロドン、それすなわち海の王者であり通常どれだけの”化け物”を用意したとしても討伐が難しい存在である。それこそ魔法史に残るような存在であれば話は別だが、魔法を扱わない近接攻撃主体の人間からすれば悪魔に他ならない。海中での勝負などもってのほかだ。

討伐したとしても、浜辺や海岸沿いなどの人類にとって有利な

フィールドでのみ勝利することが出来る。そんな存在を魔法一発で殺す？　ヘンリエッタ自身も卓越した魔法詠唱者ではあるが、それが可能かと言われれば『十全な準備を踏めば可能ではあるが、装備が整っている状態のことであり、水着というか下着一枚で勝負とか無理。死ぬ。』である。

それを、目の前の彼女が行ってしまった。普段のヘンリエッタであれば『ビクトリア様すごい！　国あげるわ！　抱いて！』で終わるのだがつい先ほどまで皇帝と談笑し、彼がビクトリアに対して興味を持っていいことを確信したばかり。一度諦めたと言っても、そこに新たな要素。帝国有数の魔法詠唱者というものが付け足された場合、あの人は確実に彼女を手に入れようとするだろう。それは彼女自身にとっても、ビクトリアにとっても良い結果に繋がりそうにない。

「あ、あの。ビクトリア様？」

「うん、どしたのそんな顔して。」

「あのメガロドンの討伐。私たちとの合同討伐って形で処理していいかしら……、その。ここにいるのは全員私の配下だから、隠せると思いうし……。」

「あゝ、うん。何となく解った、いいよ。任せちゃう、それに多分もつかいやれって言われても無理だろうしね。」

おそらく政治がらみだろうなあ、と思いつながら彼女はそう答える。ヘンリエッタの性格から考えて、誰かの手柄を奪うような行為は避けるべきこと。けどそれをしないと私に何か不利益が出るのだろう。もしくは彼女が考えている計画にズレが生じるか。普段であればいつもの雑談のように話を振れたのかもしれないが、ここまで必死に向かい、そして彼女の姿を見た際のショックや何もなかったことへの安堵。その蓄積のせいで少し疲労がたまっていたのだろう、その姿は普段の堂々とした彼女よりも、少し弱々しかった。

ゆえに。

「ほいっと。」

「んぐっ！」

焼き上がったばかりのサメの切り身を、口に突っ込まれる。

「これじゃ足りないだろうけど、お礼ね？　そくんなふにやつとした顔してないでさ、楽しもうよ。」

そう言いながら彼女が指さす方を見ると、いつの間にか自分の配下の子たちが色々と騒ぎ始めている。討伐する存在がすでに討たれていて、残っていたのは大量のおいしそうなサメの切り身。持ち主が好きにしていると解放したことにより急遽始まったお祭りの様なもの。皆、楽しそうな顔をしている。

「いつも頑張ってくれてるし、今日ぐらいは羽目を外していいんじゃない？　さ。」

そう言って、手を差し伸べる彼女。

私は自然と、その手を握っていた。



「……と、言う訳でそんな形ね。」例の件の処理はちやんとできたし、メガロドンの方も無事解決したわ。思ったより時間が掛かつ

ちやつて申し訳ないわ。」

「いいよ、それぐらい。わざわざありがとうね、ヘンリ。」

あれから一月近く後、無事劇の公演も終わりそのお祝いとしてヘンリ様のお屋敷に招かれた私とアル。ヘンリ様だけでなくマリーナもこの場にいる。ま、お祝いって名目で呼ばれたけど実際はあの時のサメ関連のお話だったんだけどね？ あとちよつとしたパーティィ。

私が討伐したメガロドンはあの場での決定通り私とヘンリエツタ様が率いた私兵たちで処理されたことになった。サイズがサイズだったし、国や他貴族の船も結構やられていたらしくちよつとした報奨金が出て私の方は終わり。後はヘンリ様に色々任せることになった。なんでもメガロドンの骨や皮は結構いい素材らしくそれを王家に献上という形で売り飛ばしたり色々していたらしい。

ただちよつと皇帝と揉めたというか、『そもそも、なんでもつと早く教えなかったのこのバカ生徒！』とか言いながら殴り合いのケンカをしたらしく、それが原因で全部丸く収まるまで時間が掛かってしまったようだ。……いや何してんのアンタ！

「それと頭部の剥製も完成したのよ、ちよつと大きすぎてお屋敷に飾れないから……、新しく土地を買って記念館を作ることにしたわ。」
「スケール……。」

というわけであのサメの頭は記念館行き。メガロドン以外にも帝國近辺の海洋生物の剥製とかも色々飾って博物館みたいにする予定だそう。そもそもメガロドン自体海の魔物でかなり強力、倒そうにも場所が悪すぎて討伐隊をいくつも壊滅させられるのを考えたら放置しておく方がまだ得、という生物らしく討伐数もかなり少ないらしい。

「優秀な魔法使いをそろえてもこちらが発見する前に船ごと食べられる、というのはよくある話なのよ。数をそろえて雷系の魔法を当て続

けることさえできれば倒せない敵ではないんだけどね？ その前提を整えるのが海上では不可能に近いのよ。」

ま、とにかくそんなわけで討伐数も少なく、その肉体を回収するの
も海だから難しい。回収できたとしても魔法で焼かれてボロボロだ
から私のように綺麗に倒したのは珍しいことみたいだ。なのでせつ
かくだから剥製にしちゃいませよ！ ってノリみたいね。そう言う
本人は私の手柄にできなかつたことがかなり不満みたいけど……、
まあそれは我慢してもらおうしかない。

「さ、つまらない話はこのぐらいにしておいて……。用意できたそう
よ？」

「お！ 待つてました〜！」

ヘンリ様がそう口にする、お屋敷の使用人さんたちが料理を運ん
できてくれる。そ、アレだよアレ。

「実はフカヒレ初めてだったんだよね〜。」

そう、フカヒレである。メガロドンから取れた食材は肉だけじゃな
い。というかサメと言えばコレというべき食材だろう。あの時は加
工の手間から後回しにしちゃったけど……、いや〜！ 楽しみ！ フ
カヒレの姿煮と、そのスープ。わざわざ製法とかレシピとかお屋敷の
料理長に横流ししたかいがあったよ！ それに量だけは有り余って
たから失敗してもやり直せし、乾燥は魔法で短縮可能！

私も製法とかを全部知っているわけではないので、断片的なものを
お屋敷の料理長にプレゼントし、後はプロにお任せ。ようやく彼を筆
頭にした料理チームから完成した報告を受けたのでみんなと一緒に
試食会ってワケだ。というか今日の会はそれがメインなんだけどね
？ サメの後始末の話とか全部おまけ。

「私たちはあまりというか、食べずに捨てる部位だと思っていたのだけれど……。ビクトリア様のところでは食べていたのよね？」

「そうそう、と言ってもかなりの高級食品だったけどね。だから私も初めてなの。ま、料理長と試作してる時に味見は少ししたけどね？

味を楽しむよりも、食感を楽しむ料理。このあたりにはない珍しい感触だから面白いよ。そして、なにより……」

「なにより……？」

「お肌にいい。」

その瞬間、ヘンリ様の目が変わる。

そ、フカヒレにはコラーゲンとか色々入ってて美肌効果がすごいのは有名な話。それに滋養強壮や骨の強化、あと腰痛やリウマチの緩和などにも効果があるって言われてるそう。ヘンリ様はお肌ピチピチの若作りお婆ちゃんではあるが、それはかなりの積み重ねと努力によって成り立っているもの。美味しい上に美容にもつながるってなれば……。好きでしょ？

「……サメ狩りつくそうかしら？」

「やめてね？ さ、アルもマリーナも一緒に食べよう。」

その後、みんなで一緒にフカヒレを食べました！ おしまい！

迷宮編

76：おひさ！

やほー！ みんな元気にしてた？ ちょっとバタバタしててね、遅くなって申し訳ない。

現状報告の前に……、改めて自己紹介から行こうか。

私の名前はジナ。特に苗字は持たないただの一般市民。帝国の首都である帝都にて家を構え、弟子のアルと一緒に楽しい異世界生活を送っている。一応こつちが戸籍上の本名なんだけど、実はこれが適当に付けた名前だね。なんか頭に浮かんだ単語をそのまま名前にした感じの奴。だから親からもらった名前ってのは解らないのよ。

これがなんでかって言うとう。実は元々は男で、現代の日本に住んでいたんだけど、気が付いたら今の女の体を手に入れ異世界に。まあそこだけならよくある”異世界転生”く、だったんだろうけど運の悪いことに奴隷スタートって奴だった。朝起きたらいいお天気だけど両手両足が鎖に繋がれてる奴隷、最高にロックでしょ？ まさにクソ喰らえ。

んであれよあれよとドナドナされて連れてこられたのがこの帝都。私を二束三文で買ったオーナーは運が悪いことに、か弱いレディが惨たらしく殺されるのを見て楽しむタイプ。さらにもっと運が悪いのは、それが一般的な趣味嗜好であるってこと。こつちからすればたまったもんじやないでしょ？ それで気が付けば裏のなんでもありな闘技場に放り込まれ殺しを楽しむ狂人とご対面く。

剣どころかまともな戦った経験すらなかった私は『うくん、クソ！』っていう辞世の句でも詠んで死ぬのか？ と思っていたけどそうにはならなかった。流石に神サマも修正パッチ入れてくれてたんだろうね。私の体に宿っていたスキルってもので何とか切り抜けることが出来た。『加速』ってスキル、よくゲームとかで戦闘スピードn倍

とかあるでしょう？ ああいうの。

ま、その後はみんなも知ってる通り。

スキルによって生きながらえた私は剣闘士として生きるようになり、その後自身の付加価値を高めるために”ビクトリア”と名付けられた仮面を被った私はアイドルまがいのことを始めるようになる。流石に歌って踊る、つてのはしなかったけどこの世界じゃさういった娯楽はまだ発展してなかったみたいでね？ かなり上手く行った。

後はまあ色々あって。弟子が出来たり、死にかけたり、奴隷身分から解放されたり、貴族の暗躍に巻き込まれたり、もう一人弟子が出来たり、自分の半生を作って劇にして演じたり……。まあ色々あったんですよ。ちよつと説明すると長くなるから、忘れちゃった人は遡ってみてくれると助かる助かる。

とりあえず纏めてみるとそんな感じ？ 剣闘士時代に手に入れた力と技術を使って今も何とか生きている一般市民ってワケ。

「ほらアル、ピース！ マリーナも！」

「ぴーすっ！」

「な、なんですかこれ!？」

こんな化け物みたいな一般市民なんかいるか！ というツツコミには頷くしかないけどね？ 色々と自分でもヤバいなって思うことやらかしまくってますから。それに自分を高める、って行為が剣闘士時代が長かったせいからルーティン化してますし、多分今後も増えていくと思う。ま、温かく見守ってくればありがたいよね。

さて、今の目標なんだけどちよつとアルとマリーナの育成に力を入れようかな、って感じ。この前までの目標だった自分をよりアイドルみたいな存在に、みんなの娯楽として確立した存在にしたいって目標は公演した劇のおかげである程度達成できたと思う。劇自体大盛況で終わったし、グッズとかの売り上げもオーナー兼プロデューサーの話聞く限りウハウハラらしい。

というわけで自分の目標がある程度達成できたわけだから、今度は

弟子たちの手助けをしないと、つてワケ。アルが掲げる『私の隣に立てるぐらい強くなる』つて目標と、マリーナの『伯爵に任じられるのにふさわしい実力を』という目標。師匠として二人のことを育成するのなら彼女たちの目標、叶えてあげなくちゃダメでしょう？

そんなわけで前々から計画していた『ドキドキ★ダンジョン攻略』作戦を実行に移しちやおー！

ヘンリ様が手配してくれた魔法の先生の指導、そして私が教えらるる剣の技術と実戦的な戦い方。まだまだ至らないところはあるけど、二人ともちゃんとしてきてくれている。でもこのまま同じ指導をしていても成長率は同じ、もしくは下がっちゃうかもしれない。ここでもより大きくなるためにはより本格的な実戦を経験しよう！ とう感じた。

でもまあ無策でダンジョンアタックするほど私は無謀じゃないし、彼女たちにそれを勧めるほど放任主義でもない。まだまだやるべき用意が残ってるわけなので、それをパパッと解決したのちにダンジョンに向かうとしますかね？

と、いうことで。

今後とも、応援よろしく。



「と、いうわけで！ 貴方たちには今から殺し合いを……。」

「ししよー、それ前にもやりましたー。」

「あ、そう？…じゃあナシで。」

鍛冶師のドロに作ってもらった現代風スーツと伊達メガネを装着し、女教師ビクトリアちゃんに。教棒片手に黒板の前に立つてお決まりの言葉を言おうとしたが……、アルに遮られてしまう。まあ確かに前もやったけど天井って必要じゃない？ 美味しいし。まあこの世界お米ないから作れないんだけどね。てんぷらは出来るんだけど。……え、それ違う天井？

「とういかジナ様、その後ろにある緑色の板は？ とういかなんで私たち座らされてるんですの？」

「いや雰囲気大事かな、って。これまで私の劇関連でちゃんと指導してあげられなかったでしょう？ それを取り返すためにもまず形から入ろうと思ひまして。」

そんな風に疑問を問いかける彼女たちが座るのは木製の学習机、そして私の後ろにあるのは皆さんおなじみの黒板だ。ちゃーんと教壇とかも用意してるし気分は正に小学校の先生って感じ。アルやマリーナの年齢的に……、高学年担当かな？ いいでしょこれ、ドロに頼んだら一日で仕上げてくれたのよ。技術系で困ったことあれば彼女に投げとけば安心ですな。流石帝都のジヨバンニ。

まあ私と違って完全な現地人であるアルとマリーナにこれから1000年以上後に興るかもしれない東の島国の初等教育の話をしても伝わるはずがない。私の奇行にも慣れてきたアルは『また師匠変なことやってるよ』、って顔してるしマリーナも最初よりは慣れてきたのか慌てはすれど隣のアルを見てすぐに姿勢を正している。……ちよつと反応が薄いのは寂しいね。

「じゃ、さっそくですけど本題に移って行こうか。前々から言っていたことだけど、二人にはダンジョン攻略に挑んでもらいます。」

黒板の下にあるチョークケースから白のチョークを取り出し、黒板の中央に『ダンジョン攻略』と書き込む。もう慣れ親しんだこの世界の文字だが、ちよつと汚い。まあ立って壁に文字を書くなんて久しぶりだから許してよ、読めなくはないだろうし。もうちよつと練習すればまともになるだろうから。

「といつても無策で突っ込ませるほど鬼畜ではないよ？ 今回の目的は”二人に実戦経験を積んでもらう”という一点のみ。ちよつとサブで軽い社会勉強ってのもあるけどコレさえ達成してくれば何も言うことはない感じだね。」

昔に比べると二人とも大分腕を上げてきているが、若干戦い方の幅が固まっている様な気がする。実はさつき軽く私と打ち合いしてもらったんだけど、ちよつと応用が利いていないというか。同じ相手と戦い続けている様な癖が見て取れた。二人ともヘンリ様のとこで色々やってもらってたんだらうけど、相手側にも時間の都合があるからどうしたって心ゆくまでの訓練は難しい。対して、弟子同士なら時間の制限がなくて尚且つ実力が拮抗しているし、同門の仲だから模擬戦を頼みやすいってのがあるのだろう。

ま、早い話アルは対マリーナ特化型。マリーナは対アル特化型になりつつあるって感じ。まあそれでも実力は伸びはするんだらうけど……、ね？

「アルがどんな道を進むのかはわからないけど、マリーナの場合伯爵さまへのルートが確定している。そうなると詳しいことは知らないけど結構魔物の討伐とかやらないといけないんじゃない？」
「あ、はい。ジナ様の言う通り自身が先陣を切る必要があると思います。」

そうだよね。ま、この世界の貴族ってのはそれ相応の力を求められ

てるわけだし、それはしかたない。彼女の領土が今後どうなるかは知らないけど、実家であるララクラ子爵家はなくもない土地だ。貴族としての力を示すには手っ取り早く「パワー」を示すのが一番。ま、その時のために魔物討伐の練習をダンジョンでしてしまおうってワケ。

アルにとつちやそう言った追加のメリットがあんまりないわけだけど……、大丈夫だよな？

「もちろんですよ！ 置いていくとか言われたらキレますもんね！ ……それに、コイツに置いていかれるのはイヤですから！」

そう？ なら良かった。んじゃ話を戻していこう。

「御両人の許可も取れたところで早速ダンジョンアタックの準備を進めていきたいわけですが……、ここで問題です。現在お二人にはダンジョンを攻略するにあたって決定的に足りないものが存在します。挙げようと思ったら色々あるんだけど、今回答えて欲しい回答は一つ！ ヒントはこの場にいる全員にないもの！ んじゃあ……、アルちゃん！」

「え、足りないもの……。あ、迷宮の知識とかですか？」

ん〜！ それはそう！ でもちよつと答えて欲しいのとは違う奴！ いや確かに知識ゼロよ私たち！ 実はアルたちが迷宮攻略に挑む前に一人で突入して危険度の調査しようと思ってるんだけどさ、初見の楽しみを残しておきたいから調べてないのよ！ そりや一般的なダンジョンアタックの際の注意点とかは調べてるけど、今回挑む予定のダンジョンがどんな感じなのかは全く調べてない。

というわけで次！ マリーナ行ってみよう！

「そちらではないとなると……、スカウト。斥候の方でしょうか？ ダンジョンには様々なトラップがあると聞きます。それに宝箱も、そ

ういった特別な技能も持つ方がいらつしやらない。とかでしようか？」

ん〜！ それもそう！ でもアルと一緒に！ 正解だけど答えて欲しいのとは違う奴！ う〜ん、これ私の設問が悪かった奴だね！ いや二人とも真剣に考えてくれたのにマジでゴメンね？ その二つについては一応対策と言うか、解決の目途が付いてるのよ。私が答えて欲しかったのは色々な事情でちよつと手が付けられなかったヤツ。

「ま、これ以上長引かせるのも悪いから言っちゃうけど……。正解は回復役、ヒーラーの不足だよ。」

「ああ。」

うん、納得してもらったようで何より！ これまでケガとかした際はヘンリ様子飼いの術者の方や、教会から来てくれた人をお願いしてたわけだけど、今回目指すダンジョンがある場所は結構な遠方に当たる。ヘンリ様の支援を受けようにもちよつち時間が掛かるだろうし、教会に頼もうにも現地に伝手はないからね。

「というわけでちよつとスカウトしに行こうかな〜と。」

「スカウトですか？ 短期間と言えどあまり聖職者の方を縛るのは……。」

「だよね、詳しくは知らないけどかなり難しかった気がする。」

二人の言う通り、聖職者。まあ教会の人間を教会から離すってのは結構難しい。あの人たちが教会内で力を高めたり階位を上げようとするにはその実力も大事だけど、教会でどれだけ奉仕活動に参加したかってのが重要になって来る。それにアルやマリーナみたいな一般信者に比べ聖職者の教義ってのはガチガチに固められている。人類を導く模範と成れるように、ってことだけど聞いているこつちがちよつと引くぐらい厳しい。

まあ抜け穴というか、緩和してもらおう方法はあるみたいだけど……。

「そ。だから帝都の教会から『ちよつと悪いけどついてきてくれない？』ってのは出来ないわけ。ヘンリ様のところで借りるのも大事な回復役を削ってもらわなければならないから避けるべきだ。となると残された方法は……、ただ一つ！」

「聖都にいつて聖女様に直接お願いしてみよう！」

私が拍手をしながらそう言った瞬間、アルは過去の一件を思い出し顔を強張らせ、マリーナは『何言ってるんだコイツ』という顔を向けて来てくれる。うんうん、その反応助かる助かる。後アルはさっさとそれを克服しちゃってくださいな、多分私目を付けられてるし、今後も何かと関わるかもしれないから慣れた方が楽だぞ。

「聖職者が外部に出るのが難しいというなら、許可されてる方法を狙えばヨシ！　というわけで今から聖都に出発です！」

因みに許可されてる方法ってのは『聖職者の武者修行』って奴だ。教会内である一定以上の功績を遺したあと、司教レベルの方に許可を出してもらえば外部に修行しに行くことが出来るらしい。まあこの”功績”と”許可”の基準が結構曖昧みたいで、教区によっては『好きにしているいよ！　世界見て大きくなつて帰って来てね！』と言うところや、『ダメ！　世俗に吞まれる！　とってもエッチ！　死刑！』という地域もあるらしい。

「え、えつとジナ様？　何故聖都なのでしょうか……、何となくやろうとしていることは理解できるのですが、別に帝都でもよろしいのでは？」

うんうん、その通り。帝都の教区はちよつと厳しめだけど別に許可してない訳じゃないからね。よさげな人見つけてスカウトして、そのまま大教会にいる大司教だっけ？ レトウス司教の伝手で会ったことあるけどあの堅物の塊みたいな人。あの人に文字通り殴り込みに行っても良かったんだけど……。ちよつとお誘いを受けましてね。

「実は聖女様、あのお婆ちゃんね？ あの人に『回復役探してるんだけど良い人いない？』って聞いたらさ、『活きの良いの揃ってるから一回おいで〜』って返って来たのよ。二人とも聖都行ったことないでしょ？ 観光にもなりそうだからいつかな、って。」

「え、ちよ！ ちよつと待ってください!! 今、なんと!!」

「？ 聖女？」

「そ、そうです！ え、聖女様と交流があるのですか!!」

「そだよー、文通相手。」

そうそう、帝国というか教会勢力における頂点とも呼べるお方。面白くて人生経験の豊富さからか話してみるとめっちゃ面白いお婆ちゃん、結構私と似て弾ける時は弾ける人だから話も合うのよね。前々から『聖都おいで〜』って言われてたからね。ちようどいい機会だし。私がそう話していくうちに開いた口が塞がらないという感じのマリーナ、そんな彼女の肩に優しくアルの手が乗せられる。なんかもう色々達観した様な顔からは、『諦めて受け入れたら楽になるよ』という言葉が見て取れた。とても、優しい顔だ。

「ま、そう言うワケでいざ鎌倉。ならぬいざ聖都。腕のいいヒーラーを探しにしゅっぱーつッ！」

77：おやつとお洋服

「さて、準備進めませんかねえ。」

高齢の女性がよつこらせ、と声を上げながら椅子から立ち上がる。ここは聖都、アヴィオン。すべての聖職者が憧れる神の都だ。

「ま、そんないいところではないんですがねえ。ほほほ。」

彼女のいう通り、周辺国のすべての民が憧れる町であり、一度は行ってみたいと思えるような外見はしている。そして総本山として恥じないだけの設備に人員、歴史とそれを継承する者たちがいる。『例え帝都が崩壊しようともこの町だけは永遠に続くだろう』という謳い文句は決して間違いではない。

ただ、それゆえと言うべきか。聖職者が暮らす街として不要なもの、不必要なものをどんどん排除していった結果。何の面白みもない町になってしまったのだ。確かに神聖な場所ではある。整えられた場所故に初めて来たものは目を奪われるであろう。だが、それだけである。神の我儘によって別世界にも出向させられた経験のある聖女からすれば、何もない退屈な場所にしか思えなかった。

「かといってすべてを変えるわけにはいきませんしねえ。」

この世界を管理する神はたった一人。故に善も悪も、聖も邪も。すべて神が管理している。途中で自分で管理するのが面倒になったため天使や悪魔などの下僕を生み出し委託してはいるが、依然頂点はたった一人である。そして同時にこの世界を生み出したのも、その神自身。管理が面倒になったのと同じように、この世界に興味を失えば全てなかつたことになる薄氷の上にある存在。それがこの世界だ。

故に先人たちは神を楽しませるために世界を整え続けた。私たち

の様な比較的神と近しい姿を持つ生物を”人類”と称し、善のグループに。その人類たちが恐怖を覚えるような存在や世界に流れ続けている魔力によつて猛威をふるう生物を”魔物”と称し、悪のグループに。この両者を戦わせることで余興とした。

「そして、私たち教会の役目。それは”人類”を善として存続させること。」

神にも受け入れられたソレは、人よりも大きな力を持つ天使や悪魔のみで制御しきることはできなかつた。そもそも世界の運営を任されている彼らである。無数にいる我らの手綱を持つのはひどく難しい。故に我らがいる。さながら羊たちの動きをコントロールする牧羊犬だろうか。私たちを管理する職員が天使たちで、牧場自体のオーナーが神。そんな関係性と言えるだろう。

「故に我らは清廉潔白でなければならぬ。……ま、理解は出来るんですけどねえ。」

羊の誘導をしない、仕事をしない犬は処分される。勝手に羊を逃がしたり、食べちゃったりする犬も同様だ。そこに不満はない。だがこの仕組みが長年続いてしまったが故に犬たちが社会を構築してしまい、永遠に仕事をし続けるというルールを自分に課してしまった。別に禁止されていないのに精神を乱すからという理由で酒を禁止し、解策があるというのに肺を痛めるという理由で煙草も禁止。そんな風にどんどん禁止してしまい、出来上がったのがガチガチに固められた聖職者たち。

「私からすればストレスで嫌になりそうなのに、みんなよくやりますよねえ。アワテテ枢機卿とかほんとに堅物ですし。」

流石に酒浸りで本来の業務に支障をきたしていれば神の怒りが飛

んでくるが、日々のストレス改善やお遊び程度で怒られることはない。実際に神と出会い、話をし、面白い駒だと認識された結果振り回されている私。自身は神との交流によって”サボり方”を覚えてしまっている。そんな自身からすればこんなつまらない教会など叩き壊しても良いのではないか、と思ってしまうのだが……。

「私もそろそろ三桁だし、やる気があっても時間が足りませんよ。それに、積み上げてきた歴史を壊してしまうのもなんだか気が引けますしねえ。」

ホントに壊してしまえば神からはひっくり返って笑いながらグツジョブ、と言つて頂けるだろうが他の天使からは何されるかわかつたもんじやない。部分的に変えようとしても自分では時間が足りないだろう。

聖女として得られる神の加護や、魔力の特殊な循環による”状態の保持”によつて自身の体の老化は格段に抑え込まれている。そろそろ三桁が見えるというのに体はまだ60に行かないレベルのもの。このままいけば普通に150とか行けるだろうし、過去の聖女の何人かがそれぐらいまで生きていた。

なのでほんとにやろうと思えばできるだろうが、そこまでして生にしがみ付きたいわけでもない。年老いてしまったからこそこれまで続いて来た物事の重みや、重要さを理解したこともある。改革するのであれば自身は後押しするだけで、先頭に立つのは若者の仕事だろう。それに、自分たちの上司である天使様方から『早くこつち来てあの暴走神の手綱握つてえ!』と泣きつかれてますしねえ。

「ほんととは体のいい神の生贄が欲しいだけでしょ。……あ、そう。死んで私も天使に成ったらローストチキンにしちやいませう。」

そんなことを考えていた時、私の友人の一人から手紙が届いた。そ

う、彼女。ビクトリアという名前で活動している元剣闘士の娘だ。会ったのは彼女の二度目の死の時と、神がプリンと言う菓子でやらかされた時。たった二回ではあるが何かと話が合う気のいい友人である。同じ存在に迷惑を掛けられているし、私も役目関係なく愚痴を吐くことが出来るからとても助かっている。

彼女から来た手紙の中に、一つ気になる文があった。『弟子たちの育成のためダンジョン攻略に挑むのだが、ちょうどいい回復役を探している』というもの。最初は少し冗談として『お婆ちゃん一緒に行こうよ』なんて書かれていたが、本題は良さそうな人材を紹介してほしいというもの。

手紙の中にも書かれていたが、彼女はアルとマリーナと言う才能ある子供の人生を任されている。その指導の中で自分にばかりものを教わるのは思考が偏ってしまうのではないかということを危惧していた。故に伝手のある公爵から学園の教師を派遣してもらったり、その公爵自身から教えを得られるようにしていたのだろう。

「剣闘士の視点と、別世界の視点。貴族の視点と、教職の視点。そして次に教会の視点、というわけね。」

彼女が求めているのは弟子たちに良い影響を与えてくれる人材。弟子たちの選択肢をより増やしてあげられるような人間を欲している。そして可能であれば一緒に過ごしていて楽しめるような人間、かしらね？

「となると堅物は駄目ね。……あら、どうしましょ。大半消えたわ。」

脳内にあるリストを開き、最低限の自衛ができる人材と教育者としての適性がある人材を並べる。そこからまず第一前提として、彼女の性格と致命的に合わないお堅い人間を排除しようと思ったのだが……、リストのうち9割が弾け飛んだ。うち堅物多すぎない？

いや”教会の総本山”としてはいいんだけど……。まあいい。な

い物ねだりはするつもりがないし、最悪自分が勝手に付いていけば丸く収まる。聖都は確実に大混乱に陥るが面白そうだし別にいいだろう。滅多に慌てないアワテテ枢機卿がブレイクダンス並みに狼狽する姿が目には浮かぶ。

「……あ、そう言えばあの子。ちようどいいんじゃない？」

聖都にいる聖職者が慌てふためき、その様子を天におわす神が腹を抱えて笑う姿を幻視した時。その中で普段通りの生活を送るであろう人物を思い出した。ああ、そうそう。この子、実力も実績もあるのだけれど癖が強すぎて次期聖女候補から外されちゃった可哀そうな子。いいわねえ……。

「女の子だし、成人もしてる。相性も良さそうねえ。」

頭の中でビクトリアちゃんを浮かべ、その横に彼女を置いてみる。……あら、いいわね。上手く行ったらいい感じのバディになっちゃうかも。ちよつと不安定なところもあるけれど、ビクトリアちゃん何かと面倒見いいし。任せちゃいませうかね？ とつても活きがいいピチピチのレディ、彼女も気に入ってくれるでしょう。

「さくって、そうと決まればお迎えの準備しなくちゃ。あの子には面白そうだから黙っておくとして、ビクトリアちゃんとそのお弟子ちゃんも来るのでしょうか？ 遊べるもの用意しとかなきゃ。」

明るいい声でそう言った後。天界への転移のため脳に刻まれた呪文を紡ぎ始める。神の私室に行けば多分面白そうなのが置いてあるだろう、この世界の存在が送ったものはもとより、他世界の神から送られたオモチャもあったはずだ。最近『動画配信サービス』、さぶずく？ だったか？ それにハマったせいかな下界を眺めながらずっとテレビに張り付いている。

元々色々許可を貰っている身であるし、勝手に私物化しても怒られないだろう。どうせ私が死んだら返却されるわけですし。

「なくに、もらっていきましようかねえ？ アルちゃんもマリナーちゃんもまだ子供みたいだし、ビクトリアちゃんは現代っ子。やはり最新のものがいいのかしら……。人数いるしそこら辺も考えないとねえ。あ、おやつも用意しとかなきゃ。」

「よんだ？」

「よんでねえーぞクソ神、というか”おやつ”で反応すんな。」

「違ったか、残念。……。あ、そうだ。今日のおやつイチゴのミルフィーユにして？」

「今秋ですよこっち……。はあ、今日の当番に伝えときますので早く念話切ってくださいな。時間外労働ですよ、こちとら。」

「はいはいー。あ、私の部屋にあるのなんでも持って行っていいからね？ んじゃ切る。」

「ああ、やつぱ見てたんですね。ありがとうございます、好きに使いますね。」



そうだ聖都、いこう。

とまあ前世でよく見たキャッチフレーズを脳内で転がしながら馬車へと乗り込む。あの広告すごいよね、基本どこの地名入れても成立するし、ふと思いついてきていただいても十二分に楽しめますよ？ 一つことがすぐく伝わってくる。あとリズム感がいいので頭に残

りやすい。まあ私の主観だからどういう意図で作られたのかはわからないけどさ。……一回ぐらい京都行つとけばよかったかも。

そんなことを考えながら馬車の窓から外を眺めていると、自身に視線が集まっていることに気が付く。アルとマリーナだ。

「どうしたの、二人とも？」

アルは普段の余所行きの格好と言うか、私が貴族の家へ仕事に行く際ついてくる時に着る従者服を着ている。剣闘士のころと比べて布の質とか格段に上がってるんだけど、どこかに行くときは基本この格好を崩そうとしない。もうちよつとおしやれしてもいいのにねえ？ わざわざソレを選んでくれてる理由は解るから何も言わないけどさ。

対してマリーナはかなりガチガチに固めてきている。所謂お貴族様の格好だ。子爵令嬢として相応な過度になり過ぎない装飾が施された絹の服装だね。私が文化浸食してるせいでたまに忘れるけど、この世界はまだ古代ローマの時代で、帝国は帝政ローマに非常に似通っている。女性用のチュニックとトガに身を包んだ彼女はさながら一枚の絵画つてところだね。

「……ジナ様、その恰好で大丈夫なのですか？ 聖女様ですよ？」

「え？ どっかおかしい？」

そう私に問いかけてくるマリーナ。服装や髪型は普段の彼女の倍以上に整っているのだが、顔にはちよつと疲労の色が見える。まあ急に私が『教会勢力の最高権力者に会いに行くよー！』って言っちゃつたもんだから仕方ないのかもだけど。結構馬車での移動に時間かかるし寝ときなさいね？ メイクとか髪型とか崩れてもあつちで直す時間はあるだろうし。

「あ、はい。ありがとうございます。……じゃなくて！ 全然正装

「じゃないけど大丈夫なんですかって話です！」
「…………え、もしかしてスーツ駄目だった？」

さつきまで着ていたのは女教師用のスーツ、ブラウスの上に上着を羽織って下はスカート。けど流石にちよつとそれじゃ動きにくいかな、と思ひまして私も着替えてきたんですよ。チャーンとベストも着てますよ？ 黒のスーツに黒のタイ、中に仕立ててもらったばかりの真っ白なシャツと灰色のベスト。下はスーツと同じ色でパンツスタイル。ちゃんと靴も黒のポンプスだし…………、決まってるじゃない？

髪もちゃんとセットして、ビクトリアスタイルでもなく、普段の適当に後ろで纏めた形でもない。前髪弄って後ろで髪縛るリボンもちゃんとした奴にしてるし、メイクもナチュラルだけどころかちゃんとしてる。市民身分だからそんなに過度なものではないけど、締めるところはちゃんと締める約1000年後のフォーマルスタイルだけ…………。ダメだった？

「駄目…………、いや駄目ですよ！ 聖女様ですよ相手！ 色々まずいですって！ というかなんでアルは止めなかったんですか！」

「……………言つて止まる人だと思ひます？」

「そうでした、ね!!!」

あはは！ 最先端過ぎたか！ ま、そうぶんすかしないで、ね？

私の性質はどこまで行つても道化師、誰かの娯楽になるのが本質みたいなものだからさ。変にトガとチュニツクみたいな正装とか当たり前前の恰好してる方がよくないのよ。それに聖女様、あの人私が前世を過ごしてた世界に結構出張で行つてるって手紙に書いてあったから普通に受け止められる気がするけどなあ？

…………ん？ ああなんかあの神サマの我儘で色々お使い任されるんだって。私がいたあの世界でティンパニ大量に発注したり、柏餅に占領された世界から柏餅輸入したり、おとぎ話の様な世界からお菓子家の制作者を誘致したり色々しているらしい。この前神サマの代理

で出雲行かされた際は文字通り死ぬかと思った、って書いてあったし聖女って大変なんだねえ。

(死んだとき断つといてほんとによかった……。)

あ、後。話を戻すけどスーツを着ている理由他にもちゃんとするのよ。

いや、ね？ この前と言うかちよつと前まで私主演の劇をやったでしよう？ それでスーツ着てご挨拶とかやってたもんだからさ……。色々流行っちゃいまして。オーナーがドロの監修の元、量産体制を整えちゃったんですよ。けどかなり未来を見据えた投資だったみたいで、このままだと赤字みたいなんですよね？ 劇関連でも色々世話になりましたし、ブームの火付け役なわけですからちよつとぐらいお手伝いしませんと、ってわけです。

……あとぶつちやけると前世思い出すし、普段のトガとかと比べるとめつちや動きやすくて楽。ドロがちよつとふざけて改造したおかげで私の倍速戦闘に耐えられるくらいの強度してるし。すつごくお勧めだよ？

「そう言えばアルとマリナーの分は作ってもらってないね。今度仕立ててもらおう？」

「それは是非！」

「マリナー……。」

はいはい、マリナーのは勿論アルちゃんのも作ろうね？ うんうん、安心してよ。ちゃーんとおそろいのデザインにもらうからさ。……あ、でもドロに頼んで大丈夫かな。この前『お前、あたしが鍛冶屋ってこと忘れてないか？』ってガチギレされながら言われたんだった。服飾関係のお仕事持ってたらボコボコにされちゃうかも。いやドロちゃんクソセンスいいからつい頼んじゃうのよ……。文字通りほぼなんでもできるし。

ほ、ほら！ あれよアレ！ ダンジョンアタックする前に装備整えるからさ！ そんな時にまた鍛冶仕事お願いするし！ それに新メニューを無事見つけることが出来たらさ！ その人の装備とかもあるだろうからさ！ 機嫌直してよ！ うん！

「そう言えば師匠、聖都ってどんなところなんでしょうね？」

架空のドロに対して謎の慰撫を行っていると、アルが質問を投げつけてくれる。マリーナの方を見ると『私とおそろい』という事実が付いたのか自身の世界にトリップし始めている。鼻に突っ込まれているチリ紙を見るに、アルが先んじて鼻血対策をしてくれたのだろう。大事なおべべ汚しちやだめだからね、ナイスアル！ っと、質問に返さないと。

「だねー。帝都よりは小さい町らしいけど、教会のためだけに作られた町らしいから色々すごいらしいよ？」

聖都、アヴィオンだっけ？ 教会勢力の町と言うよりも、教会の間しかない町。前世の日本でいうお伊勢さんみたいな立ち位置みたいで、一生のうちに一度はお参りしておいた方がいい感じの町らしい。帝国を含めたこの周辺国すべての教会勢力の総本山、ってところなのかな？

「参拝？ 礼拝？ まあそんな感じの人がたくさん来るんだって。建物とかも最初から全部計画した通りに作られたものばかりで、町の中をゆつくりと歩いても楽しいって聞いたよ。」

「へえ〜。」

帝都も帝都で整ってはいるが、一部がちよっとスラム化したり裏社会の人間で溢れたりとちよっとヤバい地区が存在している。中央に行くほど整っているが、外に行くほど荒れている感じ。人口増加と共

に拡大している町、って感じかな？ その分活気がすごいんだけどね。」

対して聖都ってのは住むことが出来るのが聖職者だけらしく、全ての建物が一つの計画の元で建てられた物らしい。そのため街並みがすごく綺麗で、さらに外壁や壁の意匠も指定されて統一感がすごいんだと。教会独特の紋様に、白に統一された街並みはまるで別世界ってのが謳い文句なんだって。まあどこ行っても真っ白な建物しかないから夏場は反射でクソしんどいらしいが……、もう秋ごろだし大丈夫だろう。

「逆に言うとそのくらいしか娯楽がない。ってコトらしいけど。」

聖職者の町、ってことはその町の施設で働く人間も基本聖職者かその家族だ。帝都で一般的な娯楽関係は大体存在していないみたい。まあこの世界の教会の戒律ヤバいらしいからね……。ただの信者はほとんど何も無い様なモノだけど、聖職者は導く立場ってことでもうギチギチ。色々抵触する可能性があるってことで自主的にやめて行ったら何も残らなかつたらしい。

一応観光客向けに聖職者じゃない方が運営しているお店もあるにはあるらしいけど、それも小規模。あつてもお食事処とか酒場とかぐらいで、賭博とか色事とかそれこそ私みたいな剣闘士系の奴は全部存在しないんだって。まあアルはまだ子供だし、私も酒は嗜む程度。後半に挙げた存在しない施設は別にいらなからどうでもいいんだけどね？ お堅い雰囲気であることは確かだ。

「……今回はスカウト、っていうことですけどあんまり住んで楽しんでそうな町ではなさそうですね。ちよつと息が詰まりそう。」

「だね。ま、こういうのは旅行とかでちよつと味見するのが一番いいのよ。」

さ、聖都までまだまだかかりそうですし。馬車に揺られながらゆつ

くりするとしますかね。

78：世界観ブレイカー

というわけでようやく聖都に到着したわけですが……。いや、正直
嘗めてたわ。聖都。

「おお……。」

「わあ……。」

これまで基本帝都の建造物とかしか見てこなかったわけでき。あんまりビツクリはしなかったわけよ。確かに『うわ現代じゃもう残ってない様な建造物いっぱいある……！』って昔は驚いたものだけど、『これぞ異世界！』って感じの驚き方はしなかったのよね。まだ常識的な、というか理解可能な範囲内という感じだった。

まだこの世界古代帝政ローマの時代だし、正確な年数は前世の世界と暦が違うので何とも言えないが大体4世紀ぐらいの文化レベル。確かに魔物素材や魔法による部分的な発展や、神のせいでも加速しまくっている菓子・料理系の技術ツリーは現代人もびっくりと言うレベルではあるんだけど、建造物はそこまでじゃなかった。

(けどここは……、ほんとに異世界だな。)

タイルで完全に舗装された固い道路に、見渡す限り真っ白な建物たち。そして何よりもこの町の中央に見える純白の逆さピラミッド。階層ごとに植物による彩りが為されていて、内部が庭園化しているのか滝のように水が吐き出されている箇所がいくつも見える。しかもそのピラミッドの最上階から何かしらの青い線が町を覆うように伸びていて、まるで電気が流れているかのように水色の光が絶えず流れている。

いや、ほんとに今異世界を実感してる。聖都、神の都と呼ばれるだけあるな……。この世界マジであの神しかないみたいだし、話を聞

いている感じ全人類どころか全生命体が信者なのだろう。そんな信仰を集める集団が本気出して町を作れば……、こうなるってわけか。すっごいや。

「娯楽がないって言ってたけど……。」

「これ見ただけで十分ですね、これは。」

「帝都の城やヘンリ様のお屋敷見た時も驚きましたけど、聖都はまた一味……。」

違うよねえ。

馬車から降ろされた場所はあの中央にある逆ピラミッドへと続く大通りなんだけど、確かに聞いていた通り娯楽というかそもそも店がない。多分だけとおそらく全てただの住居。普通の町ならこんな交通の便がいい通りなんて大きめの商會が独占しているようなもんだけど、見渡す限りすべての建物が統一されてるし、サイズも高さも一定だ。町全部が一つの美術品とかそういうノリの都市だこれ……。

「来てくれ、って言われてた時間まで結構あるし……。ちよつと観光していこうか。あれだけおつきな目印があるし、迷うこともないでしょう。」

「ですね！」

「あ、でしたら行ってみたいところがあるのですが……！」

そう言いながら懐からメモを取り出すマリーナ、結構色々書き込んでいるし事前に調べていたのだろう。前世みたいな写真一杯の旅行雑誌とかこの世界にないし、適当に歩くだけでも楽しいかなあと思つてNO調査でここまで来ちゃった私だけど、マリーナは違うみたいねえ。えらいえらい。え、なに？ すっごく綺麗な女神像が祭られるお堂があるの？ あとなんかよくわからん塔がある場所がある？

「と言っても正確な場所は解らないのですが……。」

「大丈夫大丈夫、私たちだけだったらあてもなく彷徨うだけだったろうし、目的決めてくれて助かるよ。ね、アル？」

「ですね、それに現地の方に聞けばある程度の場所は解るでしょうし……。あ、ちようどあそこにいますよ！　ちよつと聞きに行きましよう！」

メモを持っていたマリーナの手を取り、それを強く引きながら一緒に聞きに行こうとするアル。あゝ、仲良しでいいですなあ。最初はちよつとぎこちない感じだったのに、今ではあんなにいい顔するようになった。やっぱ一緒に修行する環境が良かったんかな？　ああ、劇の準備のせいでその過程をあんまり見れてないのが悔やまれる……！

(これからは見逃さないようにしないと。)

そんなことを考えながら彼女たちが道を聞きに行つたここの住民らしき人の方に目を向ける、帝国でも見たシスター服の上から何か羽織っており、その身に着けている装飾品からまあまあ高めの階位の聖職者であることがわかる。というかあんまり疑問に思わなかつたけど、この世界の聖職者の服かなり進んでるよね。

みんなそれが普通みたいだからあんまり気になつてないみたいだけど、普通の人時代相応のローマスタイルなのに対して聖職者は中世以降のスタイルをしていることが多い。まあどう考えてもあの神サマのせいだろうが、もうちよつと時代感とか整えた方がいいんじゃないの？　ドラマとかだったら『時代考証の息してる？　リストラされた？』とかで話題になる奴だぞこれ。

……まあ異世界なわけだしあんまり深く考えるのはよくないか、そんな風に考えながら私もその人に向かって足を進めようとする聖職者である彼女の手に明らかに酒瓶のようなものが握られているが見える。……ん？　つてアレ帝都でも有数の蒸留酒メーカーの50年ものじゃねえか！　あれだけで家買える奴だぞつて、それを呷つ

たアアア!? ストレートでえ!? 何かで割るのが基本の奴を!? 喉死ぬぞおい!!!

「え、ちよー! おまー! って酒臭っ!」

「うー、ヒック。観光客さんですかあ? いいですねえ? あ、ママさんもどうも。」

「……師匠(ジナ様)」

明らかに救難信号を送って来る二人、なんで朝っぱらから酒飲んで聖職者いるんですか! 道理で一定以上近づいた瞬間に二人の速度が落ちるわけだよ! めっちゃくちや酒の匂いしてるよこの人! たぶん昨日から飲んでる! というかその酒明らかに呷っちゃダメな奴だろ! 香り楽しめよ! 喉に流し込むなあ!?

「おおー、解る人ですかあ? ままさんも好き者ですねえ、どうです? のみますう?」

「け、結構です。」

「ざんねーん。じゃあ私がいまいますねえ? んっ、んっ!」

私が断った瞬間速攻で自分の口にそれを流し込む彼女、お貴族様ですら滅多に呑めないソレをまるで単なる水のように喉へと流し込んでいく彼女。も、もったいな……。いやそこら辺の楽しみ方は個人の自由だけど、もうちよつとなんかこう。あるでしょうに。あ、あとアルたちは私の後ろに下がりがりなさいね? 聖職者とはいえこの人完全に酔っててなにするか解らんから。

「それでえ? 何か聞きたいんじゃないですかあ? あ、ごめんなさい。煙いいです? ひっく、魔道具でそっちに行かないようにするのてえ?」

「あ、はい。」

そう言うのと懐から管の様なモノを取り出し、腰に巻かれていた球体の物体。おそらく魔道具へ管を差し込む。その瞬間組み込まれた魔法が起動し、多分風の結界のようなものが生成された。それを確認した直後、慣れた手つきで煙、煙草を吸い始める彼女。あ、これ水の音するし、シーシヤって奴か……。え、お前ほんとに聖職者？

「聖職者ですよお？ 一応聖女見習いなので”司教相当位”な感じですよ、まあまあ偉いんですよ？ お金も貰えるほうなので昨日溜め込んだの全部使ってコレ買っちゃいましたあ。うひいくつ！」
「(レトウス司教と一緒に……) あ、そうなんですね。こ、ここに行きたいんですけど解りますか？」

帝都で何かとお世話になっている司教様と、この色々終わってるっぽい聖職者の方が一緒に階級というか、そもそも聖女見習いってあの神あってその信仰者ありって感じだなあ、みたいなことを考えながら元々の質問を投げる。風の結界は有れどもその全身から漂う酒とタバコの匂いはひどいものだし……。後ろにいる二人のことを考えるとあんまりここに長居したくはない。

「おお〜！ ここのいいところですよお？ お堂は結界と神聖魔法で毎日清めてていい感じですよ、塔はなんでそこにあるか誰も解りませんが、なんか触ると光るので楽しい……ッ?!?!」

自分の住む町のことのおかげか、それとも聖職者としてそれらの場所に誇りがあったのかはわからないが、楽しそうに話し始める彼女。気分の上昇と共に口が回る速度も上がるが、それがダメだったようだ。急に顔全体が真っ白になり、目を白黒させながら口を押さえ始める。あ、ダメな奴だ。背で隠していたアルとマリーナを抱え『加速』を起動。彼女から距離を取り、着地と共に二人の目を手で隠す。

「っ！ おおろろ【以下自主規制】」

ああ、レインボー……。

「ちよッ!!! テクラ様! 何やってんですか!？」

「ああああああ!!! 掃除するの私たちなんですよお!」

「なんでこう、酒はいるとポンコツ化するかなあ!!!」

彼女が道端に胃袋に入っていたものを盛大にぶちまけた直後、近くの通りからやってきた他のシスターの方々が声を上げながら走り寄って来る。ちようと複数いるし……、お任せして良い感じ? とうかいよいよね?

「もちろんですとも! ウチの者がマジすみません!」

「観光客の方ですよね? マジでヤバいのコイツだけなんで! 他キレイなんで!」

「た、楽しんでくださいってテクラ様だけ飲んでるんですか!？」

「うう……、有り金ぜんぶう。」

「ぜ、全部つてもしかしてこれまで頂いて来たお給金全部……?」

「……………うん。」

……確か聖職者の人って結構高給取りだったよね。清貧を重んじてるからもらった瞬間にその大半を教会の運営のために寄付するっていうよくわからん生態してるとは聞くけど……。それをしてない場合かなりの額に……。

「ちよ、おまー! アレなんかあったときのために貯めて置かって言ってた奴じゃないですか! 家どころか一生遊んで暮らせるような額になってましたよね! テクラ様寄付全然しないし!」

「だって私のお金だもん、寄付する方がおかしいもん、狂ってるもん……！ お仕事ちゃんとしてるからもらっても別にいいんだもん……！」

「まあそりやそうですけど、それ全部一夜で使うとか頭おかしいんじゃないですかあんだ！　というかコレ滅茶苦茶高い奴！　ずりい！　私にも一口欲しかった！　ってかなんでこんなアホなことしてるんですか!!!」

「だって、だってえ……！　聖女様によびだされちゃったああああああ!!!　絶対破門されるんだア！　酒もヤニもやめられないから追いつてくれるんだア！　無職になっちゃうんだああ!!!」

「自業自得じゃねえですか！　ほ、ほらもしそうでも私ら一緒に謝ってあげるから！　まだ続けられるように嘆願してあげるから？　泣き止みましよう？　ね？　ね？　明らかに聖女候補の方が晒している醜態じゃないですからね？　ね？」

「どんな資料調べてもお酒もたばこも禁止されてないのにい!!!　みんなみんな私のこと白い目で見て！　早くやめろとかいうんだあ！　私なんか聖女見習いに相応しいどころか聖職者の汚点とか言うんだあ！　聖女様は『そんな貴方が好きよ、いいじゃないお酒。』とか言ってくれてたけど見限られちゃったんだア!!!　うわあああああん！　もうヤケ酒するう!!!」

「あ、おバカ！　やめっ！」

「んっ！　んっ！　んっ……、　ツツツ!!!　おげ【以下自主規制】」

「「あああああ!!!」」

「なんか、こう。聖職者の方々のイメージが崩れる気がします。」

「マリーナ、多分アレ特殊な奴です。例外です。……まあ飲めるよう

になってもお酒は程々のほうが良さそうっていう教訓にはなりましたね……。」

「だねえ……。 (私も二人からこんな白い眼向けられるのキツいし、程々にしなきゃ。)」



まあ色々あった後。町の中央にある例の逆ピラミッドへと私たちは足を運んでいた。いやはや、近づけば近づくほどに壯観だね、ここ。ここ以外の建物の高さが均一になっているからかもしれないけど、より大きさが強調されている感じがする。それに、これどうやってバランス保ってるんだろうね。重さを支えているのはピラミッドの頂点である一点のみ。それ以外の支えが何もないのに、建築物として成立しているソレ。

「帝都で調べたのですが、この『ナアタ大神殿』は帝国建国以前からずっと存在しているそうです。」

「へえ。」

敷地内に足を踏み入れた瞬間、神聖魔法による結界のせいかな全身が何か光の様なモノに包まれている感覚がやって来る。やっぱり神の都ってだけあってそこら辺の神聖さとか色々やばいんだろうなあ、と考えるながらマリーナの説明をアルと一緒に受けていく。

マリーナもアルと同じこの世界の現地民で、あの神の信者。結構信心深い方だったみたいで色々調べてた知識を披露してくれる。一生に一度は来たい場所、ってことみたいだし気合入れて調べてたのかな？

アルも昔は彼女と同じくらい、もしくはもうちょっと控えめだけどもちやんとした信者ではあったんだけど、”例の事件”以降ちよつと信仰の形が変わったことが見て取れる。まあ自分の信奉してる神がプリン取られて激怒して殴り込みに来てたらまあ……、ね？ 仕方ないのかもしれない。

「上に行けば行くほどその神秘性が深まっていくらしく、大司教様や枢機卿様でも入れないような場所もあるんですって。つまり聖女様だけしか入れないとつてもすごい場所……。一度見てみたいものですよね。」

「ん、多分頼めば見せてくれると思うよ。」

「……何回も聞いてますけど聖女様とどんな関係なんですかジナ様。」

「どんなって……、気軽に愚痴を吐き合える仲？ あとこの前聞いたけどその入れない区画、たまに神が遊びに来て寝転がったり地上に仕事しに来てる天使たちが休憩できるような仮眠室になってたりするみたいだから入ろうと思ったら入れる……。ってことはあんまり伝えない方がいいか。神が”ああ”だから一部の天使が過労死しかけててむっちゃげっそりしてるって話するのも酷だろうし。」

「なんだろうねえ、まあ奇妙な縁であることは確かかな、つと。そろそろ時間だし案内してもらおうか。」

ちよつと周りを見渡し、目が合った聖職者の方に声を掛けてみる。どうやらあのヤケ酒してたテクラって奴が例外だったようで、こっちの優しそうなつるつるのおじさんは普通の聖職者だ。着てるものが結構豪華だし、やっぱ大神殿に勤めるとなると階位も高くなるんですかね？

「ご婦人、どうかなされましたかな？」

「ちよつとお呼ばれされてまして、ユアおばさんからこれを渡すよう

にっつて言われてるんです。」

「聖女様が？ 拝見させていただきます。」

聖女様、まあ二人の時はユアさんとか、ユアおばさんとかって言うてるんだけど。あの人からもらった招待状を彼へと手渡す、最初はちよつとびつくりしていたおじさんだったが、ちゃんと伝わっていたようですぐに破顔した後、招待状を返してくれる。

「これはこれは、伺っております。ビクトリア殿、アル殿、マリーナ殿ですね。ご案内させていただきます。」

「どーも。じゃあ行くよ二人とも。」

「はいー！」

「……ユアって聖女様のお名前ですよ。大丈夫なんですか？」

大丈夫だつて。というかあの人の前で”聖女様”とか言ったら『役職名で呼ぶなんて！ お名前で呼んでくださいまし！ 銃殺刑にしますわよ！』とかふざけて返してくれると思うよ。あの面白い人だし。……あ、銃殺刑がそもそも解らんか。ごめん、忘れて。

「ははは、そうですマリーナ殿。その地位から我々も委縮してしまうのですが、とても気さくな方です。お若いころは賭け事にのめり込んでしまい全財産を摩ってしまわれたと言いますしねえ。」

「ああ、聞いた聞いた。確か神サマも一緒に賭けてたんでしょ？ 二人とも手堅く行ったのに大穴のお馬さんが勝ったせいで二人とも頭抱えて……。あ、ごめん。これオフレコだった。忘れて？」

聖職者のおじさんとマリーナからヤバい目で見られる私。いやごめんつて、これオフレコでつて話なの忘れててさ。いやマジで聖女様から聞いた話だから。というか神本人に聞けばわかる話だから……。ほ、ほらアルも解るでしょ？ あの神サマそういうことやらかしちゃうつて……。あ、こつちに話振らないでつて顔。やつぱ不敬？ まあ

そりやそうか。ごめん。わくすれて？

「ま、まあとにかく向かきましょう。一般公開されている1階から5階は泡の魔道具による昇降で移動しますが、聖女様のいらっしやる階層は転移の魔道具による移動になります。ついてきてください。」

ちよつとだけ態度が固くなっちゃったおじさんに連れられて、奥まで移動する。どうやら転移の魔道具、と言っていたが私の目に入るのは明らかにエレベーター、あの豪華なホテルとかでよくある綺麗な奴。というかボタンの配置とか階層の表示方法とかまんまじゃん。いや確かに魔力感じるから魔道具なんだろうけど……。

「ではこちらに乗り込んでいただき、招待状を中の機器にかざして頂ければ魔道具が動き始めますので。私は聖女様のいらっしやる階層へ入る権限がございませんので、ここまでとなります。」

「案内、ありがとうございますね？」

「いえいえ、では失礼いたします。」

エレベーターもどきに乗り込みながら、彼を見送る。ちよつと私のせいで気まずい空気になっちゃったので、速攻でエレベーターのパネルらしきものに招待状をかざすと、魔道具が動き始め目の前の扉が閉まる。

「……師匠？」

「あゝ、ごめん。やらかした。」

「じ、ジナ様？ さっきのは……。」

あゝうん、まあ神を信仰している身からすればちよつとヤバイ発言だったよね。とりあえず私の信仰というか、宗教関連の話はあとで纏めてするとして、さっきの聖女様と神サマの話だけど、ほんとに聖女様から聞いた話だから。これから会うわけだし、雑談のノリで聞いて

みれば話してくれると思うよ？

『わ、解りました。』と返してくれたマリーナに笑みを返すと、チン！という音と共にエレベーターもどきが止まる。扉が自動で開き始めたところを見るに到着したみたいだけど、マジでこれエレベーターだな。大丈夫？ オーバーテクノロジーじゃない？ 今更か？

「えっと、確かこの階の一番奥の部屋で待ってるってことだから……。」

何の素材で出来ているのか全く解らない白い廊下を二人を連れて歩いていく。聖女レベルじゃないと入れない、って聞いていたけど本当に人の気配が全くないね。だけどそれに不気味さは覚えず、逆に安心感を覚える感じ。この神殿に入ってからずっと感じる聖なる力、”聖域” ってやつのパワーなんですかねえ？

「つと、ここだね。」

そんなことを考えているといつの間にか目的地まで到着していた、一応自身の身だしなみを確認した後に、アルとマリーナの姿も確認する。アルはアルで何度か顔を合わせたことがあるせいか自然体だが、ちよつとマリーナの方は緊張が勝っている感じ。まるで昔ヘンリ様の前に跪いていた時のようだ。

ほらほらスマイル、スマイル！ 緊張するのは解るけど程々にね？ さ、準備も整ったし、ノックしてもしもくし？

「あ、はい！ 空いてるわよ！ ちよつと今手が離せないから勝手に入って！」

そう言われたので、ちよつと疑問に思いながら手を掛ける。色々多忙と聞いていたので、仕事でもしているのかと思いつくりと扉を開けると……。

「はあああああああ?!?! 絶対それ当たってないだろ！ 判定！ 当たり判定しつかりしろや！」
「にやははははは!!! 当たり判定じゃなくてプレイヤースキルだし!? よわよわ〜！」
「ああん!? 環境キャラばつか使ってるクソ神に言われたくねえ!!!」
「はっはーん！ なら勝って見ろしー！ ゲームは勝敗が全てでしよー！」

彼女の眼の前には明らかに時代錯誤な巨大薄型テレビ、映し出されているのは『GAME SET』という文字。そして地面に手に持っていたコントローラーを叩きつけ天井から声が聞こえてくるあの神さまに向かって思いっきり罵倒を放つ聖女さま。ヘンリ様よりも高齡に見えるそのお体からは聞こえるはずの無い様なシャウトが、私たちの脳を揺らす。

……………あゝ、うん。とりあえず一言。

……………ここ異世界だよ？ 時代も古代ローマ。もうちよつとなんかこうあるでしょう？

79：先に言っておく

「にしてもビシつと決めてるわねえ。やっぱりジナちゃんスタイル良いから、バエるわ！ バエル、バエル！ アグニカ！ SNSとかに上げたらすごいことなるんじゃない？ あ、そうだ！ 写真撮りましょ！ 写真！」

「あ、あの？ ユアさん？」

懐から取り出したスマホを使い、カメラモードにして撮影を始めようとす彼女。私が行動するよりも早く動いた聖女様はその年齢では考えられないレベルの力で私の肩を抱き寄せ、一緒に写真を撮ろうとしてくる。まあそれぐらいならこっちもプロなんで顔整えて画角調整してもらって最上を叩きだしますけど……。と言うか力強すぎませんか？ 一般人だったら運が悪くて骨が砕けるレベルで引つ張つたよねユア？ 私だから無傷だけど、長男だったら耐えられなかった……！

「はい、チーズ！」

「チエツキー！ ……ってそうじゃない!!」

シャッターが切られ、カメラ越しに切り抜かれた今の光景が画面に映しだされたのを確認した後、声をあげる。テレビも！ ゲームも！ スマホも！ 世界観色々ぶっ壊し過ぎ！ これまで続いていたのが全部無に帰すでしょうが！ ……！ 異世界！ 大体4世紀！

「いやそんなの言い出したら、ねえ？」

「そうそう、ちょうど目の前に介入しまくってる奴がいるし。」

「思いつきり影響及ぼしてるジナちゃんに比べれば隠れてこそこそしてるだけ私たちがの方がマシよお。」

「ねー！」

こ、こいつら……！ さつきまで罵詈雑言浴びせ合ってたのにすぐさま意気投合しやがって……！ あ、そうだ。ちよūdいから聞きたかつたんだけど、私の”ソレ”。セーフなの？ 神罰とかのそつちからの介入がなかったし、この前『好きにしている』って言ってたから色々ブレイクスルー起こしまくってるけど大丈夫？

「大丈夫大丈夫、それぐらいなんくるないさ。」

「それ意味違いますよ、我が神。」

「え、そうなん？ まあいいや。元々こつちはそれ目当てなもんだし。これまで通り好き勝手にしてもらっても大丈夫だよ。というか今の時点で後世の評価ヤバいことになって架空の人物説出てるけど……、面白いからそれでヨシッ！」

あ、うん。了解。じゃあ気にしないようにするわ、あんたがここにいる？ 声を響かせてる？ ことも。そこに転がってるコントローラーとかも一応置いとく。ま、私は環境適応力が高いので！ そうでなきや剣闘士で生き残れてないもんね〜！ ……あ、そうだユアさんや。さつきの写真どつかに投稿するつもりなら一応事務所通してね？ 応対してくれるか知らんけど。

「あら！ 芸能人みたいね！ サインもらつちやおうかしら！」

「実際芸能人みたいなもんですから、サインならいくらでも。」

気分を切り替え、簡単な軽口を交わしていく。私とユアさんは性格というか、性質が似ているせい何かかを打てばすぐに返してくれる珍しい人だ。こつちの事情も知っている上に、明らかにリングゴ産のスマホを扱っていることから現代社会にも理解がある人でもある。こつちのネタをほぼ100で返してくれるから話してて楽しいんだよねえ。

「あ、そうだ。お弟子ちゃんたちにまだご挨拶、してなかったわね。改めて……、あらら。」

そう言う彼女に釣られて後ろの方を見ると……、ありや。

『あ、そうそうこんな人たちだったな。私が信仰する神とその信仰集団のトップは。』という感じの顔をしながら非常に遠い目をしているアルと、明らかに白目をむきながら口から泡を吐いているマリーナ。ああ、耐えられなかったか……。ごめんね、この世界の唯一神ちよつと頭がアレなんよ。信仰する神が環境キャラで相手を蹂躪していく様子なんて見たく無かったよね……。え、違う？

「あら大変。回復しなきや。それえ〜。」

若干ふざけながら聖女様が手を前に突き出すと、そこから流れ出すのは暖かな緑の風。前も見たことがあるが、確か死亡以外の状態異常を解除し体力を満タンにする回復魔法だ。アルたちを優しく包み込んだそれは二人の気力も回復させてくれたのか、みるみる顔色がよくなっていく。え？ 私？ 加速してマリーナのお口拭いてあげてた。

「あふえッ！ ……ああ、はい。すいやせん師匠。やつぱ慣れませんわ。」

「しゃーないしゃーない、切り替えて……？ まあ気にせず行こう。あとお口がわるわるになつて来てますわよ？」

「あら、失礼いたしましたわお師匠様！」

よしよし、過去に同じ経験があつたアルは復帰が早いね。冗談も挟めるあたり慣れてきたというか、だいぶ”こちら側”に染まって来たな。いいことなのかどうかは解らんけど。対してマリーナは初めてなわけだし……。もうちよつと時間かかる？

「……あ、あれ？　ここは……。」

「マリーナ？　大丈夫？」

「あ、はい……。えっと、さっきまで何をしていたんですっけ？」

聖女様のお部屋にちょうど到着した感じだよ、ほらこのお婆ちゃんが聖女様。

……こりやアレだな。ショックがあまりにも大きすぎたせいで記憶があやふやになっちゃってる奴だな。まあ確かにマリーナは信心深い方だったみたいだし、ここに来るまで色々気合を入れていたのも確か。それでいざ会ってみたら地面にコントローラー叩きつけて神に罵声を浴びせているアグレッシブなお婆ちゃんが出てきたわけだ。そして明らかに神と呼べるような存在の声も響いていて、自身のしもべである聖女とマウント取り合ってるわけだから……。可哀そうに……。ちよつと男子ー！　マリーナちゃん困ってるでしょー！

「(ご、ごめんなさい。ちよつと熱くなり過ぎましたね。今度はもつと丁寧な言葉で罵声を浴びせます。あとここは女性しかいませんわ。)」
「(……もしかしてマリーナちゃんの精神を考えると黙っておいた方がいい感じ？　んじや今から個別に声届くようにするわ。)」

「(すみませんね、御兩人)マリーナ、改めてだけどこの人が聖女様。私の友達の、ユアお婆さんね？」

「どうも、ユアちゃんです。マリーナちゃん、仲良くしてね。」

「あ、は、はい！　よろしくお願いいたします!!!」

うんうん、ちゃんとあいさつ出来て偉いね！　この方堅苦しいの大っ嫌いなタイプだから基本ため口で大丈夫だよ。流石に他の人がいる所じやマズいけど、ここは基本聖女様しか来ないみたいだしね。何しても何言っても大丈夫大丈夫。ほらユアお婆さんニコニコ笑いながら両親指を立ててるでしょ？　腕を交互に振りながらダンスもしてる。

「そうそう、私固いの嫌〜い！ みんな聖女だからって畏まって息詰まっちゃう。もつとこう、足開いてコンビニの駐車場でヤニ吸うくらの感覚でいいのに。」

「と、言うワケだから気楽にね？」

「わ、解りました……？」

まくだちよつと緊張が残ってるけどここに来る直前よりは大分マシになったかな？ よつし、じゃあ本題を話す前に……、色々聞きたいことがあるんだけどいい？ いいよね？

「ユアさんや、さつきも言ったけどそこに転がってるコントローラーとかさ。テレビとかさ、今持つてる小顔ローラーとか明らかに時代不相応なのほんとに大丈夫なの？ 私はともかくアルとマリナーもいるんだけど。」

「大丈夫よ〜！ ……あ、ごめん。悪いんだけど口外しないように誓約書書いてもらえない？」

「駄目なら出すなし。」

そう言いながら軽く彼女の頭を叩く、まあ見せてるってことは大丈夫なんだろう。どうせ外で言っても信じてもらえないか、神による奇跡か聖女様のスーパーパーパワーで何とか丸く収まるってコトだろう。もしくは天界にある秘密道具とか、そういうの。というか神サマさ、聖女様が持ってたスマホとかこのテレビとか色々どこで買ってきたの？ 絶対アンタの仕業だろうし。

「これ？ ジナちゃんが昔住んでた世界の製品だね。たまにお願いしてユアとかにお使いしてもらうの。テレビとかは私の分で、小顔ローラーはユアちゃんの。結構多めに渡してるからみんな好きなもの買ってきてるんだ〜。」

へー、ちなみにそれって私ももらえたり……。は、さすがに無理な

わけですか。聖都、しかもこの神殿内ならまだしも外に持ち出しちゃうのはちよつとまずいのね。りよーかい。私が色々試行錯誤して色んなムーブメントを起こすのはいいけど、傍観者側が必要以上に介入するのは趣味ではない訳だね。じゃ、今日一時の特別な時間として前世を楽しむとしましょうか。……とと、ここに来た理由を忘れないうちに。

「そうだユアち、お呼ばれしてもらった理由。例のスカウトのことだけど……、どんな感じ?」

「ああ、それね! ジナちゃんも堅苦しいの嫌いでしょ? それで結構ゆる〜い感じの子をリストアップして、一番いい子を今日ここに呼んでるのよ! といつても時間までちよつとあるから……。」

話の途中で、先ほど床にたたきつけていたコントローラーを拾う彼女。

「ちよつと一戦、してみない?」



「ね、ねえマリーナ。あれってなんかそういう魔道具だったりは……」「なワケないでしょうね。神器とかそういう類のものでしょうか。だって……」

「中で小さい人が動いてる………ツ!」

まあもちろんそんなわけがないのだが。彼女たちからすればそう

見えてしまっても仕方がない話。確かに色々デフォルメされたキャラだったり、アニメ調のキャラが出てきているので人間ではないことは彼女たちにもわかる。だがなんか無茶苦茶動いてるし、なんか喋ってるし、よくわからんビームとか撃ってるし……。

元々この世界は人以外にも数多くの種族が存在する世界だ。地球人からすれば意味不明な生命体でも、こちらの民からすれば『あ、魔物』とか、『あ、違う種族の方』で何となく納得しちゃう人ばかり。彼女たちは『なんか薄い板の中で生活するすげえ人たちなんだろう』と初めてテレビをみた人の様な勘違いをかましていた。いやまあその通りなんですけど。

そして、

【やーい！ 復帰狩りい〜！】

「あぁツツツ!!! おま、ふざけんなよオイ!!!」

再度床にコントローラーを叩きつけて破壊する聖女様。壁にはデカデカと『GAMESET』の文字。彼女たちには理解できない文字ではあるが、画面に映し出されるエフェクトや聖女様の反応から彼女が負けたのであろうことは理解できた。

「あ、アレかな。闘技場みたいな感じで何か賭けてるのかな？」

「試合？ でいいのでしょうか？ その後で勝者に対し拍手を行ってしますし、そういうった”ゲーム”的なものなのでしょうね。」

因みに彼女のいうゲームはピコピコの方のゲームではなく、試合とかそつちの方の意味合いである。なお、神の声だが現在耐性が非常に低いマリーナだけが聞こえない設定になっており、アルは普通に神が聖女を煽りまくっている声が聞こえている。いくら耐えれるとはいえずぐに梯子を外されてしまった自身の境遇に少しの諦めと、おそらくマリーナだけ聞こえていないことにちよつとだけ羨ましさを感じながら試合は次へと移っていく。

「ジナちゃん！ 仇討ちして頂戴！ これ新しいコントローラーよ!!!」

「わ、わーい。がんばるぞー。」

「ふふふ、仕事サボって適当に捕まえた悪魔と3000時間プレイし続けた私に勝てるかな……!」

「いや仕事しろよ。可哀そうでしょその人。」

【聞こえないーい！ それに実質私の子みたいなものだし、親子の交流だから別にいいでしょ！ ところで……、ウンチーコングって知ってる?】

「(あ、コイツ煽る気だ。)」

まあそんな風に、煽りゴリラを操る神と『一応剣士みたいなもんだし、髪色と性別おんなじだからあの子で』と剣の王女を選びちゃっかり十倍速を使用して逆に煽り返してやろうとする二人の戦いが始まるなか、ようやく怒りを鎮めた聖女が二人へと近づいていく。

「ごめんなさいね、二人とも。ちよつと今ややこしい奴を相手してるから。それが終わったら好きにやっていいわよ。」

「あ、はい。どうもです。」

「……ああ！ そう言えば私のこと役職と名前ぐらいしか知らないわよね。おやつも用意してるし、お茶でもしながら話しましょう。」

そういいながら端に避けてあった机と椅子を運び出し、弟子の二人を座らせた後は奥にあった冷蔵庫から色々取り出してくる彼女。もう世界観とかこの空間では全て破壊されるらしく、普通にコンビニスイーツとか明らかに日本語で書かれたパッケージの商品が出てきているが気にしないでいただきたい。聖都、聖都から出たらちゃんと元に戻るから……!」

「これシュークリームでしょ、エクレアでしょ、アップルパイでしょ

……。特にこのアップルパイ奴の冷蔵庫から強奪して持ってきた奴だから美味いわよ、有名店の朝早くから並ばないとダメな奴。あ、後その白い紙の中に入ってるのがミルクね。お茶は私の淹れた奴がまだ残ってるから好きに呑んで。」

【あッ！ ないと思ったら!!! ユア〜〜! (#^ω^)】

【隙ありイ!!!】

【あツツ〜〜!!!】

「ふふふ、これで1ストック削ったわね。ナイスアシスト、私。」

画面の方に目を向けてみれば、女神の気が他の者に移った瞬間を狙いスマツシユを決められたようで、神の操るキャラクターが画面外へと弾き飛ばされていた。盤外戦術だが相手は神、そもそのスペック差を埋めるためには致し方ない反則行為というもの……! (聖女談) そんなことを話しながら二人と自身の皿にアップルパイを乗せていく彼女。

「え、これ……。ほんとに食べて大丈夫なんですか？」

「もちろんよアルちゃん。だって私よ?」

神に一番振り回されている人間ではあるが、その分こっちだって神を振り回してやると豪語する彼女。実際今日のように女神のおやつを勝手に持って来たりしてささやかな反抗を常々行っているようだ。彼女の口調からは他にも色々しているようだったが、多分聞かない方が精神的に良さそうな気がする。そう判断したアルはとりあえず話題を変えることにした。

「そ、そういえば師匠からお馬さんのレースで大敗したってお聞きしたんですけど……。」

「えっ! アル!」

「あら! 懐かしいわねえ。」

「えッ!」

なんでその話題振っちゃうの！ とアルの方を見るマリーナであつたが、振られた本人が懐かしそうにいうものだからすごい勢いで彼女の方を向いてしまうマリーナ。これまでのやり取りから冗談などを非常に好む性格であることは十二分に理解できていたが、その顔はマジで過去を懐かしむ様な顔であつた。

「あの時ね、東の方にある島国にお邪魔してたんだけど、たまたま馬のレースをやっている近くに来てたのよ。神が『せっかくだし見に行こく。』ってお誘いになられたからね、まだピチピチでただ盲目的に従っていた私は何の疑問もなく付いて行つたの。こっちにも馬のレースはあるでしょう？ 神事でもあるから、ただ眺めるだけかと思つただけど……。」

「けど？」

「バチバチに賭け始めてね……。新聞、ああレースでの賭けの情報が載っている紙に色々書き込みながらガチで予想し始めたのよ。それで驚いてたら『ユアはどの子がいいと思う？』って。」

楽しそうに話を続ける聖女、その後自分の分の新聞も買わされて、しかも神の権能で今日すべてのレースに出場する馬の過去の映像を脳に叩き込まれて、第一レースから最終まで全部に賭けて一番所持金が多くなつた方の勝利と言うルール。最初は何が何だかわからなかつたが、時間が進むごとに熱狂し、馬券が舞い、絶叫が飛び交う。

「あつちとは時間の流れが違うからだいぶ前になつちやうけど……。懐かしいわねえ。ほんと。まあそんな感じで、ようやく最終レース。その日の大一番になつたわけよ。そのころにはもう色々打ち解けててね？ お互い罵声を浴びせ合いながら最高に楽しんでたわ。所持金は底をつきかけてたけど。」

「え、ええ……。」

「ちよ、ちよつと待ってください!? か、神に向かって罵声って！」

「あ、全然大丈夫よ。じやなきや私もう死んでるわ。むしろ愛のある罵声はもつと聞かせてくれ、つて感じらしいし。……Mなのかしら？」

【ちがうもん!!!】

「ひゃっはツーツ!!! がら空きだぜえ!」

【にやアアアああああ!!!】

「おお、追い込んでるわねえ。」

画面の中で行われている接戦をよそに、彼女は話を進める。最後のワケだし、当時テンションも最高潮であった彼女たちは残る有り金すべてを使い賭けに挑んだ。神はその年のダービーを勝利し乗りに乗っていた2番人気の馬に、そして聖女は去年の有馬を勝利していた1番人気の馬に。

「そしたら面白いことに6番人気の子が勝っちゃって……、すっからかん! 最初は本当に頭を抱えてどうしよう、つてなっただけど神も同じ顔しててねえ? 顔を合わせて大笑い。ほんと、楽しかったわ。」

【あ、ダメ! 駄目! 落ちる!】

【死ねエエエええええええ!!!】

【ぎやああああアアアア
!!!!!!!】

「あら、あっちも終わったみたいね。ジナちゃん、貴方もおやつ食べる〜?」

「あ、頂きまーす！」

80：言い方が悪い！

「あ、あれ。例の酒浸りじゃない？」

「すぐく内臓に負荷がかかる、て言ってもやめない子？」

「そうそう、煙草もしちやつて……。」

「え、肺とか大丈夫なのかしら……。」

自身の同僚とも呼べる人たちの声が、聞こえてしまう。非常に、居心地が悪い。彼女たちの声を振り切るように、足早に彼女たちから離れていく。私に対する心配の声が、批判の音が酷く耳に残る。わざわざそんな陰口みたいな会話をするのならば面と向かって言えばいいじゃないか、酒とタバコに溺れた聖女見習い、教会の面汚し、って。私は、テクラ。聖都にて神に仕える身だ。

最初は、単なる口減らしだった。貧しい村に生まれた私は、何の才能も持たない人間だった。三女として生まれた私には何の価値もなく、ただの穀潰しでしかなかった、まだ女としての使い道は残っていたが、育つまでにかかる費用を用意できるほど裕福でもなかった。

せめてもの情けだったのだろう、人買いに売られず教会へと身柄を預けられた私は、神の家で過ごすようになった。

そこからは、世界が変わった。

ただの穀潰しの村娘では得ることのできなかつた知識、見ることできなかつたであろう神の奇跡。そして教会で過ごす者たちからの暖かな感情。家にいた時のようにただの邪魔者扱いされることはなかった、必要とはされていなかつたけれど、ここにいていいと許してもらえるような気がしていた。

(私が最初に手に入れた、安心できる場所。故に、失うのが怖かつた。)

それを理解したのが、私が末っ子ではなくなつた時。私と同じよう

に外から子供がやってきた時のことだった。当時の私よりも幼い、小さな子供。皆の視線が私から彼女へ移り、私は“お姉ちゃん”になつてしまった。与えられる側から、与える側へと。それが、酷く怖かつた。

今なら理解できるが、当時は出来なかつた。自分から関心が薄れていく世界が、新しい子へと移っていく世界が、まるで自分の居場所が徐々になくなっていくような感覚に襲われた。一度得たものを失いたくない。私の頭の中はそれで一杯だった。

だから、学んだ。

教会の者として、何が求められているのかは理解していた。神に奉仕する者として、人々に教えを授け導く者として、相応しい人間になることを求められていた。自分の居場所を失わないために必死だった私は、死に物狂いで向かつて行つた。寝る間を惜しんで奉仕活動に励み、皆が休む時間ですら机に向かつた。そんなことしなくても居場所はなくならなかつたのに、狂つたように、進んでしまった。

進めば進むほどに、みんなが褒めてくれた。称えてくれた。神の僕として相応しい行いであると、人の指標と成り得る人間だと。私の身を削る努力を、みんなが称えてしまった。褒めてしまった。何も考えずに……、いや、褒めるしかなかつたのかもしれない。とにかく、私は狂つたように進み続けてしまった。

(そうして、気が付けばここにいた。)

ちようど、時期も悪かつたのだろう。今代の聖女様は御高齢であり、次代の聖女を見つけるための動きが教会内で活発化していた。優秀な者や、勤勉な者、聖女に相応しいであろう人間が全てこの聖都に集められることになる。私も、その中の一人だった。

本来ならば、喜ぶべきことである。

ただの何でもない一教会のシスターから、“聖女見習い”と成れば

階級的には一気に跳ね上がる。なんでもないシスターが、司教扱い。もし見習いの競争から落ちてしまっても、司祭レベルは普通に狙える。そしてよりもっと上手く行けば、聖女。教会の頂点へと上り詰めることが出来るわけだ。とんでもない、栄転だった。

みんな、みんな私のことを笑って送り出してくれた。”頑張り”つて言ってくれた。でも……

私からすれば、一番欲しかった居場所から、追い出された。そうとしか思えなかった。

ここに来てからの数年は、本当に記憶がない。ただ無気力に生活していた。候補として必要最低限のことをして、上から指示されたことをして、ただ日々を生きていく。あのままだったら私は、そのまま候補から外されて、どこかの教会で燃え尽きた灰のような生活をしていただろう。だけど、そうはならなかった。

とある大きな町へと仕事に行つた帰り、どうしてか近くにある店の中の騒ぎがひどく気になってしまった。聖女の候補となればお付きのシスターもそろそろついてくる、そんな彼女たちが止める手を跳ね除け、何故か私はその騒ぎの場所に向かつていた。私にとって、ただ居場所を守るだけに利用していた神の、お声が聞こえた気がして。

騒ぎが起きていた場所、なんでもない町の居酒屋の一つ。その中に入ろうと扉を開けた瞬間、私は大きな音に驚いてしまった。

酒に酔った人々が、みな好き勝手に話し、なんの脈絡もない会話を続けている。普通、聖女候補なんで物々しい人間がドアの前に立てば、皆騒ぎを止めるだろうに、彼らはあるうことか私の手を引いていた。酔った勢いで私に酒を無理矢理飲ませ、両手を取り勝手に踊り始める始末。

お付きのシスターたちが無理矢理止めようとしたが、彼女たちも私と同じ目に遭っていた。酔っぱらいの中に冒険者でも混ざっていたのだろう、鍛えているとはいえ教会の中から出ないシスターが本職に勝てるわけがなかった。

最初は、喉を焼かれた。まずかった。なんでこんなもの飲んでみんな笑っているのかと思った。

けれど、時間が経つごとに、とても、とても楽しくなっていって。

私は初めて、神の声を聴いた。

【お酒美味いよね、わかる。もつと弾けよーぜ！】

単なる酔いの中で聞いた幻聴だったのかもしれない、しかしながら自分の中に湧き出す温かい魔力。全身に駆け巡る神の御力、酔いという高揚状態が自身の階位を一つ上げ、より高き場所におわす神へと近づく感覚。

あの時、私は信仰を得たのだ。

それから、私は時間があれば酒場に向かうようになった。お付きのシスターや、私たち候補の教育役。多くの者に止められたが、関係なかった。そもそも教義に飲酒の禁止は書かれておらず、ただ自主的に皆避けているだけに過ぎない。それに、こんなに酒を呷っている私と、ただ聖務に没頭し続ける他の候補。神から授かった魔法の数は私の方が圧倒的に多かった。

(なのに、私は認められなかった。)

候補として外されることはなかったが、聖女見習いの中での序列はいつも一番下。素行不良という理由だけでいつもドベだった。理解はできたが、どの候補よりも自身の方が上位であるという思いは変えられない。そして周りの自身を蔑むような眼、批判するような眼に耐えられなかった。お酒と言う逃げ道を手に入れた私だったが、未だ自身の居場所を見つけられていなかった。少なくとも、ただの慣習に従う者たちのところにはない。

そんなストレスに耐えかねた私は、煙草に手を出すようになる。神

から授かる魔法、神聖魔法も基本は詠唱。故にその根本である肺にダメージを与える煙草は避けるべきだったが、別の町の居酒屋で見た美味そうに煙を吸う者たち、そしてストレスの緩和が見込めると聞いた時。自然と手は伸びていた。

本当に、美味かった。酒と合わせると一生ものだった。あの時間は何事にも代えがたい。

（まあ、そんな煙草ももちろん慣習によって禁止されてたんですけどね？）

自分も煙草によるデメリットは知っていたが故に、奉仕活動の比率を上げ、神聖魔法の解釈の変更にまで手を伸ばし、無理矢理肺の状態を元に戻す回復魔法。所謂“部位欠損すら治癒する魔法”まで手に入れるに至ったのだが……。まあ私への目線はひどくなるばかりだった。

部位欠損を治癒できる聖職者の数は本当に限られている、それができるということはこれまでの努力を神に認められたということ。そのまま大司教への道が開いてもおかしくなかった。ほんの少しだけ、新しい場所を自分で作れるのだと浮かれていた自分を叩き潰したくなってしまう。日に日に酒とタバコの量は増えていき、突き刺さる目線の数は増えていく。

治癒魔法によって全て“なかったことにできる”のが余計に拍車をかけた。

酒瓶が重なり、私の手に煙の臭いが染みつき始めたころ、私の元に残っていた人は誰もいなかった。元々、聖女見習いにはお付きのシスターと言うものがたくさんいる。けれど、気が付けば私の元から離れていた。代わりに入って来たのは私と同じように“問題児”とされていたシスターばかり。これはこれで面白く、楽しい時間を過ごしたが……。どこまで行っても傷の営め合い。私が真に暖まれる場所、居場所は見つからなかった。

そうして、もう自分がどれだけの酒瓶を重ね、煙を吸い続けたのか

解らなくなった時。

聖女様に、呼び出された。

(どうして。)

あの方だけは、私のことを認めてくれていた。そう信じていたのに。次の聖女候補としてお会いした時に、耳元でこっそりと打ち明けてくださった言葉、『私も結構いける口なのよ、今度一緒に飲みましようね?』、あの言葉に私は救われていた。ずっと厳しい視線を受け続けるこの聖都で、唯一認めてくださる方だと思っていた。

けれど。

私にこの通達を渡して来た枢機卿の顔、私以外の候補たちの顔、噂好きの聖職者たち。そのすべてが、同じ顔をしていた。

……失おうとして、ようやく気が付くのかも知れない。私が追い求めていたものはどこにも存在しない幻想で、すでに居場所は手に入っていたのではないかと。この身を焼かれるような視線に耐え続けるこの場所が私の居場所で、一生ここで過ごすべきだったんじゃないかと。また故郷の村の、あの寒い家のような場所に放り出されるのなら、そっちの方が良かったのではないかと。

(……もうすぐ、時間だ。)

荒れる息を何とか整えながら、普段は立ち入ることすら許されない階層のボタンを押す。瞬時に転移の魔道具が起動し私の考えが纏まらぬうちに、目的の場所へとついていた。

(これまで候補として置いていただいたことへの礼、教会で育てていただいたことへの礼、あとは傷を嘗め合ったあの子たちがまだここに居れるように嘆願する。)

身だしなみを整えながら、すべきことを脳内に挙げていく。

直前までヤケ酒をしていたため、シスターのあの子たちに風呂に叩き込まれてしまったが、そのおかげでアルコールの匂いも煙の臭いも全て落ちてしている。全身に魔力を回し、煙によって浸食された肺の汚染も全て取り除いている。教会の頂点、あの方にお会いする準備は整っている……、はずだ。

「この部屋、ですね……。」

あの方の元へと行く緊張か、それとも全て失うことへの恐怖か、震える手を何とか抑えながら扉をノックする。

「あ、テクラちゃんね。開いてるわ、どうぞ。」

普段通りの、ラフな時の楽し気な聖女様の声。それがひどく、恐ろしい。

ほんの少しだけ、勇気を頂けるように神へと祈った後。扉を開けると……。



「あ、酒カスさん。」

「……アル？ マリーナ？」

なんか短時間で色々あり過ぎたせいでうちの子がお口ワルワルに

なってる……！ どうしましよ聖女様！ うちの子が不良になっちゃいました！ あわわわわ……、つて茶番は置いておいて、ほんとに聖都に着いた時にあった酔っぱらいの”聖女見習い”さんじゃないか……。ええ、もしかしてユアさんさ、この人が例の人なの？

「あ、貴女方は……。」

「ジナちゃん正解。さ、テクラちゃん？ こっちの空いてる席にお座り。」

眼の前で何が起きているのか未だ把握しきれていない酒カスことテクラさんにそう指示し、無理矢理自身の横に座らせる聖女。まあ驚くのも仕方ないよね、ついさつき迷惑を掛けた相手が聖女様のお部屋にいて、お茶しているんですもの。しかも聖女様の部屋もよく見たら粉碎されたコントローラーや、なぞの大画面テレビ、あとは美容系の雑誌とか小物……。いや現代日本の品多いなオイ。

「と、言うわけでこちらが私おススメの”テクラちゃん”！ 神聖魔法の練度もかなり高いし、部位欠損も回復可能！ それに近接戦闘能力も十分ある方だからお買い得な子よ！ 今ならジナちゃんが次の聖女になるだけでタダ！」

「「え!」」

「前にも言ったけど嫌だって……、私に”アレ”の相手を四六時中するのは無理。」

急にぶっちゃけた話をし始めるユア聖女様。一回死んで神の元に行ったときにも言われたが、”神と会話した”という実績と”神の力によって復活した”という実績を解除している私は、十二分に聖女になる資格があるらしい。でもまあそうなった瞬間目の前にいるユアさんと同じように、あの神の邪知暴虐な振る舞いに付き合い続けなといけなくなる。

ユアさんからすれば、自身が死んで天使となった後も地上世界で仲

のいい私が聖女をしていればとても安心。あとさつきみたいに神に
対して思いつき罵倒を吐けるところとかを評価してもらっている
のだろうか……。申し訳ないがいつも断わってる。

まあアレだ、大貴族のヘンリエッタ様が『私のモノにならない?』と
言ってくるのなら、聖女様は『次の聖女にならない?』と誘ってくる、
と言うわけだ。……。なんか私お婆ちゃんたちにずっと言い寄られて
ない?

「だよね〜! 知ってた! じゃあ次の聖女はテクラちゃんね! 決
定!」

「え? え? え!?!」

あらあら、可哀想にテクラちゃん……。聖女様に遊ばれてますわ!
まあ気持ちは解らんでもないけど。

「ちよ! ちよつと待っててくださいジナ様!」

「どしたマリーナ。」

「せ、せ、聖女様って! え!?! ど、どういうことですか! というか
なんでさらつと断つちやうんですか!?! とつても名誉あることでは
よ!?!」

「え〜!」

だって嫌なんだもん〜! それに聖女に成っちゃったら、もう二人
の師匠じゃいられないよ? それはイヤでしょう? というかアル
はあんまり突っ掛かって来ないね。この話もうしてたっけ?

「いえ、してもらってないですが……。例の件(プリンと神事件)とか、
師匠の性格とかある程度理解してますから。」

「あら。嬉しいこと言っちゃって。」

「んん〜〜〜ッ! そうですネッ!!! とつても不敬で怖いですけど
! 私もジナ様にずっと教えていただけの今の方がいいです!」

あら〜！ マリーナもありがと。二人ともぎゅ〜ってしちゃう。……あら破裂音。胸に二人の顔を押し付けたせいでマリーナの鼻の血管が切れちゃったのかな？ 胸元が急速に熱くなってきた。ほらティッシュあげるから血を止めましょうね？ アルの方は……、ギリギリ耐えてる。えらいね！ あ、お腹だったらヤバかった。……もっかいやろうか？ 次はお腹で。

「うんうん、あつちは上手く？ 収まったわね！ じゃあ次はこつちね！ テクラちゃんく、貴方が次の私よく。」

「え、え、は、破門……ではなく？」

「破門？ 何それ。あとその漢字はとても危険だから今後使わないように……、って言っても解らないか。とりあえずお仕事没収とかじゃないわよ？」

「せ、聖女、と言うのは……。」

私がマリーナの鼻血の処理をしながら、もう片方の手で抵抗するアルのお顔を自分のお腹に沈めようとしている横で、そっちでも色々お話が行われているようだ。ほらアルも、頼ずりしたいんでしょ？ この前寝言で言ってたよ？ 『え、ちよ！ マジですか師匠！ ってこんなところでカミングアウトしないでくださいよ!!!』 うくん、それはそう。ごめん！

「私も結構年でしょう？ いつお迎えが来るのかは……、解ってるしまだ時間があることは確かなんだけど、後進の育成とかは早めにしておきたいの。それで候補の中からいい子を探したら……、貴女しかなかった感じね！」

「ちよ、ちよと待っててください！ わ、私なんかよりも……！」

「それは素行だけでしょう？ 酒とタバコって別に禁止されてないのに自主規制しちやっってる奴。あれぐらい誤差よ、誤差。一番大事なのは心ね〜！」

ユアから聞いた話なのだが、まあ聖女と言うのは大変なお仕事らしい。それと、これまで抱いていた信仰がゴリゴリと削られていって全部なくなってしまうようなお仕事であるとも。つまりただ単に教会での活動を熱心に行い神へ信仰を捧げているものほど、泡を吹いて倒れてしまうのだという。まあ環境キャラ使って煽って来るメスガキだからね……。

故に色々経験を積んだものや、私のような真っ向から反抗できる者が選ばれるらしいんだけど、現在ちようどいい人間が彼女を除いて全くないらしい。みくんなお堅い聖職者でもう困っちゃう、とのことだ。

「確かに不安定なところはあるみたいだけど……。逆に言えば、あなたは何か確固としたものを手に入れられれば確実に化ける。だから貴女を選んでのんよ?」

「そう、なの、ですか……。」

「それで、ここからが本題。どうやってその”確固”なものを手に入れるかって言う……。」

「テクラちゃん、聖都から出ていきなさい!」